
大切な人達

曹叡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切な人達

【Nコード】

N38160

【作者名】

曹叡

【あらすじ】

妹と2人つきりで暮らしてる金髪高校生の青山貴志、これは彼ら兄妹と周りの大切な人達が織り成す平凡(?)なお話です。

第一話（前書き）

はじめまして、初めての小説で駄文ですがよろしかったら見てやってください。

第一話

とある日の昼休み、髪を金色に染めた平凡(?)な高校2年生である俺、青山貴志() あおやまたかし() は恋人である前田理子() まえだりこ() から校庭の隅っこに呼ばれシヨッキングな事を言われてしまう

『 青ちゃん、私ね・・・実は6組の工藤恭介() くだつきようすけ() 君と付き合う事になったの、だから青ちゃんとはもう付き合えない・・・これからは友達として仲良くしようね。』

いきなり彼女は何を言ってるんだろう？ どうやら俺は彼女にフラれたみたいだ、当然納得できなかった俺は理子に激しく詰め寄る

『 なんだよそれ！！ いきなりワケ分かんねーし！？ なあ理子、そいつと一体何があったんだよ！！』

俺の問答に理子は俯いて

『 恭介、私の事が誰よりも好きなんだって・・・凄く真剣に・・・それに・・・初めても優しくしてくれたし・・・。』

あんまりな理子の言葉に呆れ果ててしまいもう何も言う気がしなくなった、要するに俺は恋人を寝取られたんだな、打ちひしがれた俺はその場を離れようとする理子は一言

『 青ちゃん、これからは・・・いい友達になろうね、このまま青ちゃんと完全に別れるのは嫌だから。』

と馬鹿にしているとしか思えないセリフをはいてきた、ぶん殴ってやりたい衝動を必死に抑え何も言わずに俺はこの場を去った。

つき合ってた恋人を他人に寝取られるという惨めな負け組気分に浸りながら家に帰ると妹の里奈（りな）が俺の現状も知らずに明るい声で迎えてきた

『 お兄ちゃんおかえりなさい、今日も寒いねー、お風呂沸いてるから先に入ってきなよ、あんまし寒いから今日の晩ご飯は水炊きにしちゃったからね 』

妹の元気な声を聞くと何だか泣いてしまいそうになる、こう言っちゃなんだが妹の里奈は少し過剰に俺を慕ってる、所謂ブラコンってやつだ、実は俺と里奈は2人暮らしなのだ、父親は2年前に事故でこの世を去り母親はというと事もあろうに他に男を作り俺と里奈を捨てて駆け落ちしたのだ、その時に置き手紙をウチに残していたのだがそこには短い文章で

（ 貴志、里奈、こんなお母さんを許して下さい、どこに行ってもお母さんは2人の幸せを願ってます。 ）

と書かれていた、何なんだこの女は！！ 母親失格どころか人間失格だろ、母親がウチを出たばかりの里奈は寂しそうな表情でしきりに俺にこう言っていた

『 ねーお兄ちゃん、ママはいつ帰ってくるのかな？ お兄ちゃんや里奈がおりこうさんにしてたらママ、帰ってくるかな？ 』

まだ当時6才の里奈に教えるには残酷な事実だった、8才の俺も全て知ってたワケじゃなかったけど母親がもう帰ってこないというの

は何となく理解できた。

だが俺達兄妹の悲劇はこれだけじゃ終わらなかった、母親に裏切られた父親が殺すほどではないけれど俺と里奈に家庭内暴力を振るうようになったのだ・・・。

第一話（後書き）

完結まで頑張ります。

第二話（前書き）

第二話です。

第二話

父親の暴力は俺や里奈の何気ない行動に難癖をつけては殴ったりする単純なものだがしたたかな父親は表向きは妻に裏切られた悲劇の夫を巧妙に演じてたので俺達への虐待が表沙汰になる事はなかった。

俺に出来る事はといえば里奈を守る事だった、何かと里奈を庇う俺に父親は

『 だけ貴志！！ 代わりにお前が殴られたいか！？ 』

声を荒げて俺に迫る、結局俺は殴られるのだがそんな俺は逆に里奈に庇われる始末だ、兄として恥ずかしい

『 パパー！ もうやめてっ！！ これ以上お兄ちゃんを殴らないでーっ！！ 』

泣き叫ぶ里奈を見たらさすがに父親も暴力行為を止める、騒ぎが大きくなってもし近所の誰かに嗅ぎつけられたら自身の行為が明るみになるからだろう。

こんなろくでもない父親だった俺が高校に入学して間もなく交通事故であっけなく死んだ。

その後、俺と里奈は父方の祖父母に引き取られる事になりその祖母が住む地に引っ越したのだが祖父母は自分達の息子（つまり俺達の父親）が孫の俺達を虐待して詫びようがない、生活費の心配はいらないからこれからはこの家で兄妹2人で仲良く暮らした

さいと言いい残し何処かに去ってしまった。

そんな訳で里奈と2人で暮らす事になったのだがその事が決まると里奈は

『これからはお兄ちゃんと2人でいられるんだねっ！ 里奈、お兄ちゃんの為に美味しいご飯いっぱい作るから、ずっとずーっと作っちゃうからね 』

とまあこんな事を眩しい笑顔で言ってくれるのだからどうにも恥づかしい、そしてこの言葉の通りに里奈は毎日の食事だけではなく過剰なまでに俺の世話をしてくれた、当時中学2年生の里奈は遊びたい盛りだろうに学校が終われば真っ先にウチに帰り食事や風呂の用意をしてくれる、一度里奈にウチの事ばかりでなく自分の好きな事もしたらどうだと言った事があるが

『 ありがとお兄ちゃん、でも里奈が今一番したい事はこれなの、お兄ちゃんの役に立てれるのが里奈の一番の幸せなんだから、だからお兄ちゃんは何も心配しなくていいんだよ。 』

と一蹴されてしまった、まあ里奈もその内彼氏なり作って自分だけの時間というのを作るだろう、俺はそう自分で納得してそれ以上何も言わなかった。

そして少々思う所があって髪を金色に染めた時も里奈は驚きこそしたがすぐに

『 わあ、何か見違えたよー、でもお兄ちゃんに変わりはないもんね。 』

いつも通りの接し方になった、そうして約2年間、大きなトラブルもなく俺も理子という彼女が出来て楽しい日々を送ってたのだが・・。

風呂から上がり水炊きのあるテーブルに座る、食欲を駆り立てる香りも今の俺には何も感じない、あまりにも惨い理子の仕打ち、工藤も腹立たしいがそれより理子の俺に対して悪いとも思っていない態度にはらわたが煮えくりかえる、そんな不機嫌そうな俺を見て里奈は

『 どうしたのお兄ちゃん？ 何か嫌な事があったの？ よかったら話してほしいな・・。 』

と恐る恐る聞いてくる、里奈にいらぬ心配をかけさせたくない、俺はなるべく普通に里奈に話す

『 そうか？ 別に何にもないぞ、それより早いトコ食べようぜ、ホント今日みたいな寒い日には暖かい鍋物がピッタリだな。 』

そして箸を持ち鍋から具を取ろうとする、その時に俺の携帯にメールが届いた、理子の携帯からだった、今更何かと思い受信メールを開くとそこには

『 何だこれは・・。 』

写真も添えられておりその写真には理子と工藤がベッドの上で裸で抱き合っていた、メール本文も 《 青ちゃん、私も今、恭介と楽しんでます？ 明日学校で詳しく話してあげるね 》 俺の神経を逆なでして面白がってると思えないような内容だった、もは

や理子とは一生口も聞くまいと心に決めこのまま携帯を閉じようとしたらいつの間にか俺の後ろにいた里奈が俺の携帯を取り上げた

『 何すんだよ里奈、俺の携帯に何する気だ！？ 』

俺の問いには応えず里奈は黙って女子中学生らしい手付きでメールを作成してる、程なく里奈は携帯を俺に返しそのまま俺の手をギュッと握ってきた、そして

『 お兄ちゃん・・・こんな奴の事なんかもう忘れちゃいなよ・・・お兄ちゃんならきつと他にいい人が見つかるよ、もし見つからなくても里奈はこんな奴や里奈達を捨てたあの女と違って絶対にお兄ちゃんから離れない、絶対にこの手を離さないよ、だから・・・元気だして・・・お願い。 』

そう言った里奈は涙を流してた、そんな里奈を見た俺は何とも救われた気分になった、そうだ、俺にはこんなにも想ってくれる妹がいる、こんな女にフラれたからってそれがどうしたというのか、こんな事で前に進めないなんて俺らしくない、俺も里奈を抱きしめ

『 ありがとな里奈、俺は大丈夫だから、だから里奈ももう泣くなよ、可愛い顔が台無しだぞ。 』

『 お兄ちゃん・・・うんっ！ それじゃ早く食べよ食べよ、せっかくのお鍋が冷めちゃうよ。 』

それから里奈と学校とか友達とかの話をして兄妹水入らず、楽しい夕食の時間を過ごせた、そしてそんな里奈のお陰で鬱な気分もほとんど無くなってた、ちなみに寝る前に里奈が理子に送ったメールを見てみたら 《 うるさいゴミクズ、二度と俺にその汚い顔を見

せるな、言つとくけどお前みたいなカスにもう何の感情もないから、
そんじゃサヨナラ、永遠に。》とまあ凄い文章だ・・・里奈は嫌
いな人間には容赦ないからな、だけど本当に理子などもうどうでも
いい、明日からの新しい学校生活を以前よりも楽しいものにしよう
と思いつつ俺は波乱の1日を終えたのだ・・・。

第二話（後書き）

見てくださってありがとうございます。

第三話（前書き）

第三話です。

第三話

理子からフラれ俺の男としてのプライドをズタズタにしたメールを受けた翌日、俺は気分も新たに学校に行く、家を出る時に里奈が

『お兄ちゃん、見て見て、いい天気だね、きっと今日はいいことがあるよっ！今日の夜ごはんはお兄ちゃんの好物のオムライスだから早く帰ってきてね。』

と励ましてくれたのが嬉しかった。

よし、そうだな、いつまでもあんな事を気にしてたら前には進めない、昨日よりも今日、今日よりも明日だ、里奈の純真無垢な励ましを背に俺は学校に向かう。

学校に向けて歩いてると後ろから穏やかな女性の声が聞こえた。

『あつ、青山くん。』

『ん、ああ、おはよう、高野さん。』

俺を呼んだのはクラスメイトの高野奈津美さん、腰くらいまである黒髪ロングヘアーで足もスラッと長くスタイル抜群の学校のアイドル的存在だ。

理子の親友である高野さんは俺の見た目に臆する事なく友達付き合いをしてくれる心優しい美少女だ、育ちからなのか言葉使いもどこぞのお嬢さまっぽくとても丁寧で正直俺なんかと友達付き合いしてるのが信じられないくらいだ

『 あら、珍しいですわ、今日は理子さんとご一緒ではありませんの。』

耳が痛いな・・・だけど俺と理子が別れたのを知らないのかな？
思案中に二度と聞きたくない女の声が聞こえてきた

『 あつ、奈津美に青ちゃんだ、おはよー。』

昨日から元カノになった前田理子と俺から理子を寝取った男、工藤恭介が仲良そうに肩を並べて現れた、その様子を見た高野さんは

『 理子さん・・・あなた、青山くんと一緒にではございませんの？
それにその人は・・・。』

驚いた表情で理子に事情を聞こうとする、聞かれた理子はあっさりと話す

『 ああ、知らなかったんだね、私、恭介と付き合う事になったの、だから青ちゃんとの恋人関係はオシマイって訳、だけどこれからは友人として仲良くするんだよね青ちゃん』

高野さんはイマイチ状況がつかめてないみたいらしく呆けている、そんな時、理子の隣の工藤がム力つく笑顔で俺に話しかけてきた

『 やあ青山君、昨日のメールは見てくれたかい、あの後理子も激しかったなあ・・・夜中の3時まで寝ずのやりまくりでまだ眠たいんだよ、ククク・・・。』

卑しい笑いと共に昨日のメールの話をする、バカかコイツは、理子

とやりたきや好きなだけすればいいだろ、もう俺には何の関係もない話だからな、相手にせず立ち去ろうとした俺に今度は理子が話しかけてくる

『 そうですね青ちゃん、昨日のアレね・・・恭介のイタズラだったの、私に黙って青ちゃんにあんなメール送って・・・でも返信のメールしたの誰なの？ 青ちゃんじゃないよね。』

理子が送ったんじゃないのか、けどもうちでもいい、こんな奴らに関わり合いたくないからな、理子も無視してると

『 青ちゃんは人にゴミクズなんて言う人間じゃない！ 私だってそれくらい分かるんだから！ 』

今更何を言ってるんだかこの女・・・あんまりしつこいので仕方なしに

『 誰でもいいだろ・・・俺はもうお前と金輪際関わりたくないだけだ・・・せいぜい俺の関係ない所で幸せになってくれよ。』

どうでもよさ１００％で言い放つ、一秒でも早くこの場から離れたかったのだ

『 青ちゃん・・・そんな言い方って・・・。』

理子が言い終える前に高野さんが俺の手を引き強引に歩き出す、普段ではありえない高野さんらしからぬ行動に理子は慌てて

『 ちよつと奈津美！ どこ行くのよ！ まだ話は終わって・・・。』

『

呼び止めようとするも高野さんは完全無視、工藤は何もせずニヤニヤしてこの状況を眺めてるだけだ、歩きながら高野さんは俺に

『 青山くん、だいたいの話は分かりましたわ・・・もうあんな人の事は忘れて下さい！ 私もあんな人とはもう親友でも何でもありません！ 青山くんを傷つけ、面白がって・・・絶対に許しませんわ！！ 』

慰めの言葉をかけてくれる、理子とは縁を切ろうというのに俺とは変わらず友達付き合いをしてくれるのか？ いい人だな高野さんって・・・理子の声を一切無視する高野さんに手を引かれ俺は彼女と共に学校に向かうのだった。

第三話（後書き）

次話は学校生活です。

第四話（前書き）

第四話です

第四話

恋人だった理子を寝取られその理子と寝取った工藤からいいようにバカにされる俺を高野さんは強引にその場から連れ出した、学校に着くと高野さんは

『 青山くん、女の人皆あんなだとは思わないでくださいまし、きつと貴方には前田さんなんかより百倍素敵な恋人が出来ますわ・・・近い将来・・・。』

そう言ってくれると素直に嬉しいな、俺も女性が皆理子みたいな奴だとは思ってない、俺を気遣うこの高野さんや里奈みたいな素敵な女性だっているのだ、近い将来っていうのはよく分からないが・・・。

そして俺と高野さんは俺たちのクラス、二年四組に入った、教室にはもう半数以上の人がいてその中には俺がとうみょうこの東明高校に転入して以来、一番の親友となった友成ともなりしんじ真司もいた

『 おはよう、トモ。』

『 おはようございます、友成くん。』

俺たちを見た友成も挨拶をしてきた、ちなみに俺は友成の事はトモと呼び友成は俺の事をアオと呼んでいる

『 おはよ、アオ、高野さん、なんだよ、2人だけなんか？ 理子ちゃんはどうしたんだ？』

『 トモ・・・その事で話があるんだけどな。 』

都合良く理子はまだ教室には来てない、理子は俺達とクラスメイトだが工藤は他のクラスだ、二人で仲むつまじく登校してるんだろ。

俺は友成に全てを話した、高野さんも友成も表情にやるせない怒りと悲しさをにじませながら話を聞いている、2人とも自分の事じゃないのに・・・恋人には恵まれなかった俺だが友人には恵まれた様だ、話し終わると俺はつとめて明るく

『 まあ女は理子だけじゃないしな、いつかまた出会いもあるだろうし、いつまでもヘコンでてもなんにもならないだろ。 』

『 よく言っただじゃねえかアオ！ だったらアオの新しい門出を祝って俺がアオに美少女達とのカラオケ兼食事をプレゼントしてやるうではないかっ！ ！ 』

『 要するにいずみちゃんや里奈とカラオケに行きたいだけなんだな、お前って奴はホントに・・・いいぞ、行こうぜ、里奈には俺から連絡いれとくから。 』

いずみちゃんや友成の幼なじみ兼彼女だ、ショートカットのボーイツシユな美少女で少し勝ち気そうな印象を受けるけど細かな気配りや周りを元気づける明るさを持ついい娘だ

『 フフツ、私もお供させてもらってもよろしいでしょうか、今日は心行くまで歌いたい気分ですよ。 』

『 もちろん！ よっしゃ、今日は歌い食いのパーティーだああっ！ ！ 』

友成の歓喜の叫びにいつしか俺たち三人は笑いあつてた、しかしどうして高野さんはよく俺や友成と一緒にいたがるのだろうか？ 彼女はこの東明高校のアイドルと呼ばれるほど人気がある、美人でスタイル抜群、運動は得意じゃないが勉強は学年トップ10に入るほどだ、性格も誰にでも優しく穏やかで過去に数人の男子に告白されたらしい、でも高野さんはそのすべてを断つてるようだ、理想が高いのかな、そんな高飛車な娘とは思えないがな。

友成や高野さんとの会話に夢中になってると理子が教室に入ってきた、理子は普通に友成に挨拶するが友成は完璧無視だ、俺も高野さんも同様だ、理子がそんな俺達に何か言おうとしたがその瞬間に朝のチャイムが鳴り響く、そしてすぐに担任教師（38歳独身男性）が入ってきた、もう友成や高野さんにとっても理子は友人ではなくなったのだ、いい気味だと思う反面、少し可哀相かなとも思った、俺も甘いな。

学校が終わりカラオケ屋には俺と友成、里奈や高野さん、いずみちゃん、の5人が集まった、俺は普通に90年代の邦楽、女の子達はやはり流行りの歌、そして友成はアニソンにアイドルソング、更に洋楽や演歌まで歌いこなしていた、つかみどころのない奴だよ全く。

だけどこの時間は本当に楽しかった、皆が笑顔だった、俺も心から笑った、もう理子に裏切られた心の傷も癒えていた、俺には一緒に笑ってくれる仲間がこんなにいるんだから。

第四話（後書き）

次話は里奈と親友の秋野夕奈の話です。

第五話（前書き）

今回は里奈視点です。

第五話

「そうなんだ・・・お兄さんや友達の人達とカラオケ行っただん
・・。」

「そうだよ、夕奈ちゃんも来たらよかったのに、すっごく楽しか
ったんだから、友さんなんてカッコいい洋楽歌ったかと思っただ
りブリのアイドルの歌も歌ったりですよかったよ。」

私は友達の秋野夕奈（あきのゆうな）ちゃんと二人で下校して
た、お兄ちゃんが転入した高校で友さんや奈津美さんと仲良くなっ
たように私も転入した中学で夕奈ちゃんと仲良くなった、物静かで
大人しい子だけど家が近所さんという事もありよく一緒に帰った
りしてる内に親しくなった

「でも私・・・人と話すの苦手だから・・・。」

「大丈夫だよ、みんな優しい人だから夕奈ちゃんもすぐに仲良
なれるよ！ だから今度は夕奈ちゃんも一緒に行こつ、ねっ」

「うん、分かった・・・ありがと里奈・・・。」

ちよつと引つ込み思案な所のある夕奈ちゃんだけど私やお兄ちゃん
とは普通に仲良くできてる、だったら友さんや奈津美さん、いずみ
さんとだって仲良くできるはずなんだから

「お兄ちゃんの友達はみんないい人だから心配なくていいよ、
あのゴミクス女だけは例外だったけどね！！ あんなカスとは別れ
て大正解だよっ！！。」

『 別れてって・・・お兄さん、あの彼女と別れたの・・・どうして・・・。』

あっ！ つい口が滑っちゃった・・・ お兄ちゃんにとっては思い出したくもない出来事なのに

『 あの彼女・・・確か前田さんって・・・里奈が前田さんの事を・・・そんなに言うなんて・・・ねえ里奈・・・お兄さんと前田さんの間に・・・何があつたの・・・教えて・・・。』

うーん、どうしようかなあ、いくら夕奈ちゃんでもお兄ちゃんのプライバシーを勝手に言っちゃうなんて良くないよね、でも夕奈ちゃんがこんなに執着するのは意外だった、そんなにお兄ちゃんが心配なのかな？

『 里奈・・・あんまり言いたくない内容なんだね・・・でも・・・私もお兄さんが心配・・・何でもいいから・・・お兄さんの支えになりたいの・・・。』

夕奈ちゃん・・・口数は少ないけど自分の思っている事は偽らずにはつきりと言う子、私は本気でお兄ちゃんの事を心配してくれる夕奈ちゃんになんだか嬉しくなった、そしてこんな夕奈ちゃんなら一緒にお兄ちゃんを支えてあげれるはず、そう思った私は

『 うん、実は・・・。』

私はあのカス女とお兄ちゃんが別れた事、そしてお兄ちゃんを深く傷つけたあの画像つきメールの事を夕奈ちゃんに話した、無表情で話を聞いている夕奈ちゃん、何を思ってるんだろ・・・

『 大丈夫……。』

私が話し終わると夕奈ちゃんはゆっくりと口を開く

『 お兄さんは強い人……。そんなの里奈だって知ってるはず・
・だから……。大丈夫……。』

夕奈ちゃん……。そうだね、お兄ちゃんはいつまでもこんな事を
引きずる様に人じゃない、だって……

小さい時からずっと里奈を守ってくれた。

どんな時でもずっと里奈の側にいてくれた。

いつだって里奈の事を大切にしてくれたお兄ちゃん

『 どうしたの……。里奈……。さっきからぼーっとして……。』

『 あっ……。ううん、何でもないよ、それより夕奈ちゃん、もう
すぐ卒業、そして高校生だねっ。』

私と夕奈ちゃんはお兄ちゃんがいる東明高校を受験した、担任の先
生が言うには私も夕奈ちゃんも東明高校なら合格間違いないそうだ、
でも夕奈ちゃんだけならもっと上のランクの高校も狙えたそうだけど

『 私は……。里奈と一緒に……。東明高校に行きたいです……。』

『

夕奈ちゃんの決意は固く頑なに東明高校を受験した。

何にしてももうすぐお兄ちゃんと同じ高校生、一年間しか一緒に高校生活はできないけど家ではずっと一緒だもん、それで満足だよ、楽しみだな お兄ちゃんと一緒の登下校、あっ、お兄ちゃんのお弁当も里奈が作ってあげなきゃだね。

第五話（後書き）

見てくれてただ感謝です、次話は夕奈視点でいこうかなと。

第六話（前書き）

今回は夕奈視点です。

第六話

私は今、里奈の家にお邪魔させてもらっている、この家は里奈とお兄さんの2人暮らし、何故そうなのか事情も知っている。

およそ2年前、中学2年生になって1ヶ月ほど経った頃、里奈は転入してきた。

私は自分から他人に話しかけるのが少し苦手だったけど家が歩いて5分の距離にあるご近所同士で明るく人懐っこい性格の里奈とは登下校を一緒にしてる内にいつしか親友になっていた。

里奈はどんな事でも明るく話してくれたし、私の話もいつも聞いてくれた。

そして、初めて里奈の家に遊びに行った時に里奈の兄、貴志さんに会った。

『おかえり里奈、おっ、今日は友達と一緒にか？ いらっしやい。』

私はそこにいた髪の毛を金色に染めた男性を見て明らかに動揺していた

『うん、里奈の友達で秋野夕奈ちゃん、かわいいでしょー、それに家もすごく近所なんだよ。』

私の動揺も気にせずにいきなりそんな紹介されて私の顔が赤く染まっていく

『 ああ、可愛い可愛い、そのポニーテールも良く似合ってるよ、やっぱもう彼氏とか居たりすんの？ 夕奈ちゃんくらい可愛かったらクラスメートとかほっとかないだろう。』

貴志さんが興味深そうにそう言うのと里奈が

『 お兄ちゃん、年頃の女の子にそんな事聞いたりしないの！ それより今日は帰るの早いんだね。』

『 ああ、今日までテスト期間だったからな。』

『 そうなんだ、それでテストはどうだったの？ お兄ちゃんってあんまり勉強得意じゃないもんね。』

『 うーん、まあ赤点がなけりや御の字だろ。』

『 もうっ、そんなんで大丈夫なの、そうだ、夕奈ちゃんに勉強教えてもらったらいいよ、夕奈ちゃんって頭も良いんだよ。』

『 ははっ、高校生の俺が中学生に勉強教えてもらうのかよ、でも間違いなく俺より夕奈ちゃんの方が頭いいだろうな。』

貴志さんは私を見て微笑んでいる、見た目は金髪だけど笑顔は優しいそうだった

『 うふふっ、けどお兄ちゃん運動は凄いいじゃない、学校でも友達さんと1、2を争うくらいなんでしょ、それも立派な事だよ、自信もちなよ、お兄ちゃん。』

『 ありがとな里奈、あっ、今からちよっと出かけるけど何かある

か。』

『 どこ行くの？ 』

『 今日発売の雑誌買いに行くだけだっただけどついでに何か買ってきてやろうか。 』

『 じゃあ明日からのおかず買ってきてもらおうかな、それじゃちよつと待ってて、メモするから。 』

『 おう、夕奈ちゃんも何か欲しいのあるかな？ 』

貴志さんって思ったよりずっといい人みたいだ、里奈との仲も好いし、初対面の私も気遣ってくれている

『 いえ・・・、特にないですから・・・。 』

『 遠慮しなくてもいいよ、例えば今ちよつと食べたい物とかさ、読みたい本とか何でもいいから。 』

貴志さんに言われ私はふと考える、すると里奈がはっと思いついた様に

『 それじゃあね、 堂のチーズケーキにしようよ、夕奈ちゃんも好きなんだよね、 3人で食べよ 』

里奈の言う通り 堂のチーズケーキは確かに私も好きだけど頼んでいいのかなと迷ってたら貴志さんが私に聞いてきた

『 夕奈ちゃんはそれでいいのかな？ よかったらそれを買ってく

るけど。』

私も正直久しぶりに食べたかったし多分私が遠慮しても貴志さんはいいからって引かなさそうだから

『はい・・・じゃあ・・・お願いします・・・。』

『よし、じゃあちよつと待ってて、なるべく早めに帰ってくるからさ。』

里奈からメモを受け取り貴志さんは出かけていった

『いつてらっしゃーい、忘れ物しちゃダメよー。』

それから里奈と雑談したりして待っていると1時間ほどで貴志さんが帰ってきた。

忘れ物も無く貴志さんは買ってきた物を冷蔵庫に入れたりして整理してた

『ねえお兄ちゃん、片付け終わったら里奈達と一緒に遊ぼうよ。』

『おいおい、中学生の女の子が高校生男子と一緒に遊んだりしていいのか？ 俺は構わないけど夕奈ちゃんはいいいのかい？』

『私なら・・・別にいいですよ・・・。』

『ほらっ、夕奈ちゃんもいって言うてるじゃん、いこうよ、お兄ちゃん。』

それから私達は里奈の部屋で3人でトランプしたり、貴志さんが持ってきたTVゲームとか、里奈と貴志さんの小学卒業アルバムを見せてもらったり、夕暮れくらいまで楽しい時間を過ごした。

帰りに貴志さんが家まで送ろうかと言ってくれたのがなんだか嬉しかった。

私は貴志さんとも交流を重ねるにつれ見た目への怯えもなくなりいつしか貴志さんをお兄さんと呼ぶようになった、両親のいない青山兄妹だけど2人で支え合って明るく生きてるのが分かる、親に恵まれなかった里奈だけど素敵な兄には恵まれた、そして今に至る。

私はもうすぐ高校生になる、もちろん里奈と同じくお兄さんのいる東明高校に受験した、教師が言うにはもつとレベルの高い高校に行けるのだがそんなのに興味はない、私は里奈やお兄さんと一緒の高校がいいのだ、両親だって無理やり納得させた、お兄さんと同じ高校生活、たった1年しかないけどそれでも私は・・・、好きな人と同じ学校に行きたかった。

第六話（後書き）

見てくださってありがとうございます、次話は奈津美の話です。

第七話（前書き）

今回は奈津美視点です。

第七話

あんな人、青山君に相応しくございません、あんな人と友人だった自分の人の見る目のなさに呆れかえるばかりです。

何を考えたら青山君にあんな残酷な事が言えるんでしょうか・・・でもこれはチャンスなのかもしれません、私だって実は青山君のことが好きなのです、ですが友人だった前田さんの青山君に対する真剣な想いに聞いて私は身を引きました、当時は前田さんも私の大切な友人でしたから・・・。

しかし前田さんは青山君を最も残酷な形で裏切りました、恋人がいるのに他の異性に心を動かされるといふのはあるかもしれませんが、男性にしる女性にしる、だけど前田さんは酷すぎます、あれでは青山君は・・・でもこれで前田さんに遠慮する必要はなくなりました、あんな人より私の方が青山君に相応しいに決まっていますわ。

何やら学校のアイドルとか言われてる私には多数の男子が言い寄ってきますが私は青山君以外の人と付き合う気は毛頭ございません、あの日から・・・。

高校2年になったばかりのある日曜日、買い物を終えて帰宅する途中、家の近くの道で怪我をしたネコを見つけました。

どうやら自転車にひかれたみたいでした、どうしようかとネコを見てたら後ろから声を掛けられたのです

『あれっ、どうかしたの、高野さん？』

振りかえったみますとそこには買い物袋を持った青山君がいました

『あら、青山君、青山君も買い物でしたの。』

『うん、妹が風邪ひいてね、薬とか果物とか買いに行ってたんだ。』

青山君とはこの当時はまだ交友はございませんでした、でも見た目に反して凄く真面目な方で話し方もとても優しくそうなのです、クラスでも数回話をしましたけれど悪い印象は全くありませんでした。

青山君は妹さんと2人暮らしをしているそうです、彼と友人の友成真司君との会話でそんな話をしてたのを聞いた事があります

『そのネコどうしたの？ 怪我してるよね。』

『ええ、おそらく自転車にはねられたのだと思いますわ、可哀相に……。』

『ヒドいな、はねといてそのまま放置かよ、とにかく手当しなきゃな。』

『そうしたいのは山々なんですが・・・生憎私の家はマンションで動物を部屋まで連れ込むのはダメなんです……。』

『そうなんだ、じゃあ俺のウチに連れてくよ。』

困ってる私を見て青山君は何の迷いもなくそう申し出てくれました、更に

『後は・・・多分飼い主も心配してるだろうからビラでも作ってこの辺りにはつとくか、俺の連絡先を書いときゃ連絡してきてくれるかもしれないしな。』

『本当にいいのですか？ とても助かりますわ。』

『このままにしておけないからね、なあネコ助。』

そう言つてネコを見る青山君の表情はとても暖かそうだと思う見惚れてしまつてました

『でも妹さんが風邪なのですよ？ ご迷惑になるんじゃないでしょうか。』

『まあ大丈夫だよ、里奈もネコ好きだしウチは一軒家だから他には迷惑かからないしね。』

『でもやはり悪いですわ・・・最初に見つけたのは私ですし・・・』

『マンションなら仕方ないよ、いいからここは俺に任しといてよ、必ずこのネコ助は手当てして飼い主に帰してやるから。』

・・・クラスのほとんどの人は青山君の見た目だけであまり話しかけようとは致しません、友成君や前田さんと私くらいです、でも今日、青山君の見返りなんて求めない純粋な優しさに触れ私の心の中

で青山君の存在が大きくなりました

『じゃあ帰るよ、寝込んでる病人をいつまでも1人にしとけないしね、飼い主が見つかったら高野さんにも教えるからさ。』

片手にネコを抱いて帰ろうとする青山君に私はせめて

『あつ、それでしたら青山君、連絡先おしえて下さい、もし大変でしたらいつでもお手伝いしますわ、遠慮なく申して下さいな。』

こうして私達は携帯番号とメールアドレスを交換してそれぞれ帰りました、それから2日後には青山君からネコの飼い主が見つかったとの電話を受けました、そして程なく、青山君は私の中学からの友人、前田理子さんの告白を受けて恋人同士になりました、前田さんは中学からいつも一緒だった大切な友達、それに青山君が幸せならばと思い私も身を引いたのですけど・・・それなのに彼女は自分から告白しておきながら最悪の形で青山君を裏切ったのです。

青山君・・・大丈夫ですわ、貴方には私がいいます、不幸のどん底に落とされた貴方を私が世界一に幸せな男にしてみせます、楽しみにしてて下さいね・・・。

第七話（後書き）

次話から貴志視点に戻ります。

第八話（前書き）

第八話です。

第八話

学校の帰り道、俺の隣に奈津美がいる、ついこの間までは理子だったがもう過去の話だ。でも別に奈津美と付き

合ってる訳じゃない、友成が彼女のいずみちゃんとデートに行ったので一人で帰ろうとした俺に

「青山くん、一緒に帰ろう」

と言ってきたのだ、断る理由もないし、やつ

ぱり一人で帰るのは寂しい。『も

うすぐ三年生だね。』

『ああ。』と平

凡な日常会話を交わしてる。だけどやつぱり奈

津美と2人つきりで帰つてると周りの視線を惜しみなく集めてるな、さすが学年のアイドルといったところか。というか彼女はどうか

思ってたんだろ、理子に裏切られた俺に同情してるのかな、にしても2人つきりで下校するモンだろうか、まさか俺のこと……

「ねえ、青山くん……」

どうしたんだ、ちょ

っと落ち込んでるな。『私

の話、つまんないかな……。』

「いやっ、いやっ、全然そんな事ないよ。」

「だって……、なんか黙りこんでるし、

やつぱり、まだあの事……。』あ

あ、まだ俺が理子の事で悩んでると思ってるのか、違うのに。

「いいや、もう理子の事は

何とも思ってない、高野さんの事を考えてたんだ。』

「私の事？」

「ああ、高野さんや友や里奈のお陰

で俺は立ち直れたんだ、俺一人だったら学校も休んでるよ、高野さ

ん達にはすごい感謝してる、ありがとう。』

『 青山くん 』

えっ、なんで抱きついてくるんだ、やっぱり奈津美は……。

その時、いきなり電話が鳴り、ぱっと奈津美は俺から離れた。
電話は友成からだった、今度の日曜

に遊びに行こうという話で奈津美や里奈も一緒にどうと誘ったのだ。
俺はもちろん承諾したし、奈津美も機嫌よく了承した、里奈は帰ってから話すと言って電話を切った。

『 じゃあね、青山くん、日曜日楽しみだね。 』

奈津美と楽しい帰宅時間を過ごし俺は家に着いた、下を見たらかわいい靴が二つ、夕奈ちゃんもいるな。

『 お兄ちゃんおかえりー。 』

『 ……お帰りなさい……、

お邪魔してます……。 』

帰ってきたら美少女二人のお出迎えってどこのギャルゲだよ、俺って彼女を寝取られた男だぞ。 ちなみにこの二人はこの春から後輩になる、まあ、楽しくなりそうでいいんじゃないかな。

『 あっ、そうだ、里奈

って日曜日ヒマか。 』 『 うん、

今のところ予定ないけど、なあに。 』

『 俺や友やいずみちゃん達と遊びにいかないか、そうだ、夕奈ちゃんもよかつたらどうかな。 』

『 うん、いくいくー、夕奈ちゃんも行こうよ。 』

『 ……いいんですか……、私……、あんまりお話できないし……。 』

『 そんなの誰も気にしないよ、夕奈ちゃん可愛いいし、友もきつと喜ぶよ、なあ、里奈。 』

友成も何度かウチに来る事がある、当然里奈とも顔見知りだ。 『 うん、

友さんはいい人だから、大丈夫だよ。 』

里奈も友成の性格は分かってる、なんか嬉しいな。

『・・・うん・・・、一緒に行く・・・。』

きまった、メンバーは俺と友成、
里奈と夕奈ちゃん、奈津美にいずみちゃんか、楽しくなりそうな面
子だな。

第九話（前書き）

第九話です。

第九話

「お兄ちゃんー、準備できたー。」

玄関から里奈の明るい声がする、今日は日曜日、皆で遊ぶ約束の日、里奈はとつくに準備を終えて玄関で待ってる、なんで男の俺のが外出準備が遅いのかは寝坊したから。

準備を終えて玄関で里奈と合流、家を出たら

「あつ、夕奈ちゃん、おはよー。」

丁度夕奈ちゃんと合流、家の前で

待ってたのかな。

「おはよう、夕

奈ちゃん。」

「おはよう……、お兄さん、里奈……。」

三人で待ち合わせ場所である近隣

で一番大きいショッピングモールの近くの公園へと歩く、その間、

里奈は楽しそうに俺達と会話するし、夕奈ちゃんも笑ってる、そう

こう会話してたら公園に着いた。

公園には奈津美が一

人だった、後は多分家族だろう

「お

はよう、青山くん、里奈さん、あつ、そちらの方は……。」

奈津美は里奈と顔見知り、理子と

共に家に来た事がありその時からの友人関係だ、でも夕奈ちゃんとはこれが初対面。

「あ

あ、この娘は……。」

「……はじめまして……、秋野夕奈です……、里奈

の学校の友人です……。」

「そうですね、はじめまして、私は高野奈津美、青山くんのクラスメートです、よろしくね。」

夕奈ちゃんは微笑んで

「……

はい……、奈津美さん……、よろしく願います……。」

よかった、初対面の二人は仲良くな

れた様だな、しかし友成達はまだかな、そう思った時に携帯の着信が鳴る。友、

どしたんだよ、後三分だぞ、言い出しつpeg遅刻かー。」

「青、スマン、寝坊しちまった、

今いずみと向かってるから、あと十分ほど待ってくれ。」

お前もか……。電話を切

って十二分後に友成といずみちゃんは走りながらやってきた。

「ハアツ、ハアツ、みんなごめんなさい、真兄が大寝坊して、私が起こしに行つてやっと起きたんだからー、ほらっ、真兄、ちゃんと誤んなさい。」

「みんな、本当にゴメン、ジュース奢るから許したもれ。」

友成は深々と頭を下げた、別に十分程度の遅刻などのこの娘達は気にしてない様子だった。

「すいません、ホントに真兄は昔頃から寝坊助なんだから。」

友成といずみちゃんは幼なじみだ、ちなみに彼女が一つ年下、彼女が友成と同じ東明高校を受けると思った時に彼女自身が想いを告げたとか。

「おっ、その娘が里奈ちゃんの友達だな、はじめまして、友成真司です。」

友成ともいずみちゃんとも挨拶した夕奈ちゃん、その笑顔に俺は安心した。その後ショッピングモールでお買い物、里奈に小熊のぬいぐるみをせがまれて買ったり、夕奈ちゃんと奈津美には安物だが髪飾りをプレゼント、友成もいずみちゃんにペアリングが何かせがまれてたな。買い物の後は近くのファミレスで昼ご

飯、友成はカルボナーラと焼き魚定食を頼んでた、その組み合わせは合つのだろうか、しかもぺろっと平らげた、太らない体質なのか。まったりした後、カラオケに行こうよと里奈が言ってきた、女性達は皆賛成、俺も友成も特に反対しなかった。

そうしてカラオケに行く途中、向かいから理子と工藤

が歩いてくる、デートだろうな。
気づき声を掛けてきた。

理子が俺達に

第九話（後書き）

見てくださってありがとうございます、稚拙な文章ですいません。

第十話

「あつ、みんなー、どうしたの、随分と賑やかだね。」

理子は工藤から離れ俺

達に近づいてくる。

いずみちゃんが

「カラオケに行くんですけど。」

「そうなんだー、いーなー、そつ

ちも楽しそうで、ねえ、恭介。」

「そうだな、しかし青山君も行動がはやいな、理子と別れて一週間もしないでもう違う彼女を作るとは……。」

工藤がそう呆れるように言うとき

子が

「いいじゃない、

恭介、そんな事言ったら私の方が青ちゃんと別れる前から恭介と付き合ってたんだから、青ちゃんの事どーこー言えないよ。」

女性たちは軽蔑の目で理子を見て

いた。

全く・・・、そりや確かに俺より工藤の方がイ

ケメンだけど、でもこれで落ち込んでたらまた里奈達を心配させちまう、ここはこの場を離れるに限る、そう考えて歩こうとしたら奈津美が理子と工藤に

「別

にあなた達がこれからどう付き合おうが青山くんや私達には一切関係ありません、あなた達に関わる時間が無駄ですから失礼します。」

奈津美の言葉に理子が

「あーそーですか、私だってあん

た達がどうだろうと知った事じゃないしね、これからは学校でも話しかけてこないでよね、ねー、恭介ー、今日もいっぱい愛し合おうよあ。」

「またか、理子はな

かなか休ませてくれないからなあ。」

そう話す二人を無視して俺達は歩きだした、確かに相手にしてても時間の無駄だな、里奈も

『 あんなのどうでもいいよねー、お兄ちゃん
お兄ちゃんには私たちがいるからあんなのより幸せだもん。』

夕奈ちゃんも俺に

『 ……大丈夫です……、お

兄さんは……、あの人達より……、幸せですよ……。』

おいおい、もうすぐ泣きそうなん
だけどな、いきなり横から肩を抱かれた

『 青、羨ましいじゃねーかー、コノヤロー、俺やいずみも
お前の友達なんだ、一人じゃないんだよ、お前は。』

『 そうですよ、青山さん、さあ、
早くカラオケ行きましょうよー。』

一人じゃない、か……。友達に恵まれたな、俺は

『 よーし、夜まで歌うか、せつかくの休
みにみんな集まったんだしな。』

皆笑顔で会話しながら歩いた、夕奈ちゃんも笑顔だ、本当に青春
ドラマみたいな絵だった。 カラオケでは誰でも知っ

てる歌ばかりを歌った、俺はこういうのに疎いからね、女性達はそ
れぞれの得意な歌を、正直歌ってる歌手は知らない人ばかりだが・
・、でも皆上手かった、しかし、友成……。流行りの歌を歌うの
は分かる、でも何故昭和の仮面ライダー達の歌を熱唱する？ い
ずみちゃん達も微妙な顔で手拍子してるぞ、まあ、何歌うかは自由
だけどな。 最後を女性達の A B 4 8 で締めて、俺達は帰路に

つく、もう空も暗かった、8時過ぎまで歌ってたからな、いずみち
ゃんは当然友成が送っていき、俺は里奈と夕奈ちゃん、奈津美を送
る事に、帰り道、もうすっかり打ち解けた奈津美と夕奈ちゃん

『 そう、夕奈さんも

里奈さんと一緒に東明高校に来るのね。』

『 ……はい……。奈津美先輩……。4月
から……。よろしく願います……。』

二人を家まで送ったら里奈が俺の手を握って

『お兄ちゃん、高校が始まったら

里奈がお兄ちゃんのお昼弁当作ってたげるね　里奈、頑張るから。』

『ああ、里奈の作る料理は美味し

いもんな、毎日楽しみだよ。』

『うん、期待しててね、お兄ちゃん。』

うーん、ブラコンな里奈と素直クールな夕奈ちゃ

ん、この二人が加わる高校生活、どうなることやら。

第十一話（前書き）

第十一話です。

第十一話

『お兄ちゃん、受かったよー、4月から同じ高校だね。』

『合格でした、春か

ら楽しみです。』

里奈と

夕奈ちゃんから嬉しそうなメールが届いた、俺も二人にメールを返す。

『青、誰にメールしてんだ、

あー、愛しのマイシスターか。』

友成が声を掛けてくる、奈津美も

『確か今日だったよね、合格通知が届くの、

あの二人なら間違いなく合格でしょうけど。』

『ああ、二人とも合格だったよ。』

友成と奈津美も喜んでくれた、今

じゃもう当たり前のように俺たち三人はクラスで行動を共にしている。あのカラオケとかで遊んだ日曜以来、理子とは会話もない、

そんなだからクラスでは俺と理子は別れたという噂があがった、何人かは俺に聞きにきたがもう普通に別れたと言うとその話題もあつさり風化した。だが理子は工藤と公然と付き合ってたから、俺

は捨てられたという認識は残ってるみたいだ、クラスメートの半分以上は同情してくれたりとそれで終わればよかったが新たな噂ができた、奈津美との関係だ。学年のアイドルが俺と友成とよく

行動してるから男子連中がこぞって俺たちにどんな関係か聞いてくる、仲のいい友達と教えてもあまり信用してないようだ。当の奈

津美はそんな噂など意に介さない感じで俺たちと遊ぶ、そんな彼女は噂についてこう言った。『関

係ないわよ、だって私はあなた達と一緒にいるのが一番楽しいの、だから青山くんも友成くんも気にしてたらダメだよ。』

奈津美にここまで言われてまだ気にしてたらかっこ悪いな、俺も友成もきっぱり気にしないことにした。

『もうすぐ三年生だね、二人は進学するの。』

『俺は大学は行かないよ、勉強』

も好きじゃないし、早く働いて社会に馴染みたいんだ。』

『まあ、青なら大丈夫だろ、体』

力もガッツもあるし、頑張れよ。』

『そういう友成くんは、進学しないの。』

『親父の会社のが楽しそうだからな、俺も』

大学には行かないよ。』 実は

友成の家は結構な金持ちであり、両親はかなりな放任主義で息子の進路にはノータッチだそうだ。』

そっか、二人とも頑張ってるね、でも卒業してもたまには皆で遊ぼうよ。』

いい娘だよなあ、こんな時間がずうっと続くといいんだが時間は過ぎていくし、いつかはそれぞれの道を行くんだろう、それでいい、そうやって大人になるのだから。

学校も終わり家に帰れば明るい声が聞こえてくる。『おかえりなさい、待ってたんだよ、お兄ちゃん、早く早くっ。』

もう慣れた里奈と夕奈ちゃんの出迎え

『ただいま、里奈、夕奈ちゃん、合格おめでとう、受験お疲れ様。』

『……ありがとうございます……、お兄さん……、4月から……、よろしくお願いします……。』

『うん お兄ちゃん、早くテーブルに来て。』 言われるままにテーブルに

向かうとすき焼きの準備がしてあった。

『私たちの合格祝いだよ、三人で食べようね。』 自分たちで準備しといて祝いとはどう

かと思うがまあいいだろ

『あつ、夕奈ちゃん、家に連絡しといた方がいいんじゃないか。』 ……大丈夫です……。

・、心配してくれて・・・、どうもです・・・。」

ならいいな、ちょっと時間も早かったが三人で鍋をかこんだ。
「ねえ、

お兄ちゃん、春休みに入ったら里奈たち三人で制服の採寸に行きたいなあ。」
「なぜ俺

も一緒だ。」
「いろいろ買い物も

あるし、それに里奈たちの制服姿見たいでしょ。」

自分でいうのね

「・・・私も・・・、三人で行きたいです・・・、お兄さんに・・・、いてほしいです・・・。」

そんなに言われちゃなあ
「い

いよ、じゃあ二人の都合のいい日でいいから、付き合うよ。」

そう言った途端の二人の笑顔が眩

しかった、確かにこの二人の新鮮な制服姿が見たかったりするシスコンな俺がいた。

第十一話（後書き）

展開遅くてすみません。

第十二話（前書き）

新キャラが出ます

第十二話

三学期の終了式も終わって俺たちの二年生生活はまもなく終わる、教室でいつもの二人、友成と奈津美でまったりなトーク中

「ねえ、二人は春休みは何するの。」

「奈津美が屈託のない笑顔

で聞いてくる
「変わる

ないよ、メシ食って風呂入って寝るだけだな。」

「青、お前にはラブシスターがいる

だろう、里奈ちゃんも入学だしいろんな準備があるんじゃないのか、超スコン人3の青山貴志君が手伝ってやらないでどうすんだよ。」

「北？残悔拳。」

友成の頭を左右から親指でグリグリして

やる
「いて、痛いって。」

「この指を抜いたら三秒後にお前は死ぬ、その三秒間で自分の罪深さを思い知れ。」

「それは短いんじゃないかしら・・・」

「。。
奈津美が苦笑してる、指

を抜いたら三秒後に友成が
「俺は

死にたくねえ、死に、たわつ。」

そこまでのらなくてもいいのだが、そんなやりとりをしてたら教室に担任が入ってきた。

HRも終わり下校準備をしてたら教室の窓の近くに友成の幼なじみ兼彼女の矢島いずみちゃんがきた

「あつ、青山さん、真兄いますか。」

「ああ、呼んでくるよ、ちょっと待ってて。」

同じく下校準備をしていた友成に近

づき声を掛ける
「おい、友ー、

お前のお姫さまがわざわざ迎えに来てくださったぞ。」

友成は教室の外にいるいずみちゃんを見たら慌

てて

「マジでここまで来たのか、

ったく、しょうがねえなあ。」

俺と奈津美はすかさず

フッフツ、熱い二人でいいじゃない。」

「そうだな、大事にしないとバチが当たんどぞ、本当にいい娘だしな。」

「分かってるよ、

じゃあな、青、高野さん。」

友成は

顔を赤くして教室を出た、いずみちゃんも教室の外から俺と奈津美に笑顔で頭を軽く下げ、二人は行った

「俺達も帰ろうか。」

「あら、めずらしいね、青山くんから誘うなんて、もちろんいいわよ。」

俺も顔を赤くして教室を出ようとしたら理子とクラスメートの女子数人の会話が耳に入ってきた

「えー、理子って工藤くんちに泊まるのー。」

「うん、恭介の両親が三日後から三泊の旅行に行くんだって、だからその三日間ね。」

「それって、やっぱり夜は……。」

「当たり前じゃない、恭介ったらもうそればかり期待してるんだから。」

相手にせず俺達は教室を出た、靴を履き替えようとしたら声を掛けられる

「青山くん、

あなた、前田さんに裏切られたの？ 六組の工藤恭介に彼女を取られたの。」

そんな事を今

更聞いてきた彼女はクラスメートの四森 彩花（しもり

あやか） セミショートの眼鏡っ娘でしかも推定Fカップの美少女だ

「そんな

のアナタに関係ないでしょう、いちいち聞きに來ないで下さい。」

不機嫌な奈津美をなだめて四森に

言った

『そうだよ、でも

もう完全に終わったんだ、だからあの二人がどうなるかと俺には関係ないよ。』

しかし四森は食い下

がる

『アンタ、悔しくないの、

あんな事まで言われてて何とも思わないのっ。』

『青山くんがいろいろ言ってるでしょ！ 何なのよ貴女は、いい加減にして！ 行こう、青山くん。』

奈津美に強引に引っ張られ慌てて靴を履く、そのまままだ何か言いたそうな四森を無視して学校を出た

『何なのよ、あの人は、青山くん、気にしち

やダメだよ。』

奈津美

はそう言っと

『しないよ、丁

度明日から春休みだし、四森さんもすぐ忘れるよ。』

俺は簡単にそう思ってた、でもそうはいかな

かったのだ。

第十三話（前書き）

第十三話です

第十三話

春休みに入って二日目、今日は里奈と夕奈ちゃんと高校で着る制服の採寸に行く日だ、今日は寝坊しなくてすんだ、まあ、里奈に朝7時過ぎに起こされたただけなんだが。

顔を洗っ

てテーブルに行くといかにもな朝の和食が用意されてた

「夕奈ちゃん、10時ぐらいに家

に来るって。」

「そっか、じゃ

あちよつと余裕あるな。」

そん

な他愛のない会話をしながら里奈と朝食を食べる、食べ終わって食器を流しに持ちに行こうとしたら里奈も食べ終わったようだ

「里奈、食器持って行ってやるから、

ほらっ。」

「ありがとう お兄

ちゃん、じゃお願いね。」

まった

く、ついでに食器持って行ってやるくらいでそんなかわいい顔しないでくれ、そのまま食器を洗おうとしたら

「あつ、いいよ、置いたら里奈が洗うよ。」

「このくらいさせてくれよ、こ

の家は里奈と俺の二人で住んでるんだから、里奈だけに全部させてたら俺はこの家に住む資格ないっつの。」

「そんなこと言わないでよ、お兄ちゃんはこの家にずっと里奈と居ないとダメなんだからー。」

「まあ、もう俺が洗ってるから、心配すんな、俺って他に行く所ないし。」

「うん、

里奈も行く所なんてないからずっと一緒だね。」

早く高校でいい男を見つけてくれ、お前の将来が不安でならない、でも里奈を不幸にする奴は俺が許さん・・、って、おい、やっぱり俺は超シスコン人3なのか、神さま、どうか里奈にいい出会いをお願いします。

そんなこんなで9時50分、家のインターホンが鳴る、夕奈ちゃんが出来たみたいだな

「・・・おはようございます・・・、お兄さん、里奈・・・。

」 相変わらずポニーテール

がかわいいな、彼女なら高校で男子が放つとかないだろう、俺たち兄妹も夕奈ちゃんに挨拶をすましてさっそく出発した。

採寸してくれる洋服屋に向け歩いていたら途中のコンビニの前であの四森彩花と出くわした

「あつ、青山くん。」

声を掛け

られたので俺も軽く返事して通り過ぎようとする

「へえー、今日は違う女の子二人

も連れてんだ、高野さんは知ってるのかなあー。」

何を勘違いしてるんだこの人

は、けど知らない人からしたらそう見えても仕方ないのかな

「そんなじゃないよ、

この二人は妹と妹の友達、君の考えてる関係じゃないから。」

「お兄ちゃん、誰なの、

この人は？」

里奈に聞かれ

四森の説明をする、里奈と夕奈ちゃんも軽く四森に挨拶した、その時俺たちの前のコンビニから若い男が出てきた

「姉さん、誰だい、その人たち、随分と派手な頭だね。」 ちよいとム

ツとくる言い方だがこの金髪を見たらしょうがないな

「蒼太（そうた） もう

いいの、急にトイレに行きたいとか言うから・・・、それじゃ行きましよ。」 姉さん？ 姉弟なの

か、言われてみれば目元とか似てるかな

「お兄ちゃん、早く行こうよ、買い物もあるんだから。」 確かに

そうだ、俺たち三人は歩き出す、しかし四森姉弟も同じ方向を歩く

『 どうしてついてくるのよ、このなんちゃって不良。 』

彩花の言葉に俺よりも里奈と夕奈ちゃんの方が不機嫌な顔をしていた、それでも何も言わないのは大人だ

『 俺たちは制服の採寸だよ、二人の邪魔とかしないから。 』

『 えっ、僕たちもそうですよ、ところであなた達は姉さんとはどんな関係なんですか 』

『 俺は彩花とはクラス 』

メイトと説明した、蒼太もこの春に高校に入学ということで以前に姉の彩花がしてもらった採寸屋に姉と一緒に行ってると話してくれた、かなり礼儀正しい子で最初の生意気そうなイメージがガラリと変わった

『 妹さん達に付いていつてあげてるんですか、青山先輩って優しいじゃないですか 』

『 うん、自慢のお兄ちゃんなんですよー。 』

夕奈ち

やんも頷いてる、里奈と蒼太の言葉に照れ笑いしてたら

『 でもそんな頭してる割に彼女が裏切っても何もできないヘタレ君なんだよねー。 』

彩花の言葉に里奈と夕奈ちゃん

が何か言おうとしたらそれよりも早く蒼太が

『 姉さん！ 言い過ぎだよ、皆が姉さんみたいじゃないんだ。 』

彩

花が半泣きな顔をしてる、何かあったのかな。

第十三話（後書き）

次話は彩花の話です

第十四話（前書き）

彩花の話だけと貴志視点です。

第十四話

どうしたんだ、俺は自分が言われた侮辱よりも今にも泣きそうな彩花の事が気になった

「だって、ううつ、だって、悔しいのよー、あああーん。」
とうとう泣き出して

しまった、周りが注目する前に俺たちはその場を離れ近くの公園に行った
「お兄ちゃん、

どうしようか。」

うーん、このままにして行くのもな、なあ、蒼太、四森さんって何かあったのか。」
言っ

てからしまったと思った、こーゆー事はあんまり聞くべきじゃないと
「ええ、実は姉さんも・・・」

「蒼太！ー余

計な事は言わないで！！」

泣いていた彩花が急にキツと顔をあげて蒼太に詰め寄る

「あの事とあのな
んちゃって不良はまったく関係ないの、私はあんな恋人を取られて何もしないようなヘタレじゃない！！」

里奈が今にも彩花に突っかかって行きそうだったがそれまで黙っていた夕奈ちゃんが口を開く

「・・・四森さんも・・・、恋人を・・・、取られたの・・・。」
彩花が目を大き

く見開く
「なっ、何を言ってる
の、勝手な事言わないで、大体なんであんだ達がまだいるのよ。」

「・・・あんな会話し
てたら・・・、予想できます・・・。」

俺も気になりだした、彩花もそんな事があったのか
「だからどうだったのよ、あんだ

らには関係ないでしょう。」

「・・・お兄さんには・・・、好き勝手言つといて・・・、自分の事は関係ない・・・、都合いいですね・・・。」

「何ですって！」

声を荒げて夕奈ちゃんに近づく彩花を蒼太が制

した
「姉さん、この人の言う通り

じゃないのか、青山先輩の事ばかりで自分の事を言わないのは卑怯だよ、大丈夫、この人達ならあんな事で姉さんを卑下したりしないよ。」

彩花は不安そうな

目で俺や里奈、夕奈ちゃんを見てる、多分俺と似たような事があつたんだろ、だったら、里奈達が卑下したりする訳ない、俺を励ましてくれた里奈達なら、俺は彩花の目を見てゆっくり言つた

「大丈夫だよ、四森さん、ここに居る皆、君にどんな過去があつても馬鹿にしたりなんかしない、俺だつて彼女に裏切られた時、この二人には元気をもらつた、友成やいずみちゃん、高野さん達にもだ、嫌な過去も友達がいれば分かち合える、楽しい事は一緒に喜んでくれる、俺は四森さんや蒼太とも友達になりたい、つらい事も一緒に背負つてやるから、なつ。」

「青山くん・・・。」

それから彩花は話し出した、彩花は二年の始まりに東明高校に転校してきた、その理由は前の高校での友人を怪我させたという、揉み合つて突き飛ばした際に運悪く腕を骨折させてしまった、揉み合った原因がその友人が当時に彩花が付き合つてた彼氏を寝取つたのだった、なんとか示談ですんだそうだが、その彼は彩花をあつさり見捨てて、怪我させた友人とその両親には二度と顔を見せるなと言われたそうだ、それで一年が終わつた春休みに逃げる様に転校して今に至るとの事

「ごめんね、青山くん、私、前田さんに裏切られたあなたが何もしないのが悔しかった、何か私とダブって見えただの。」
「四森先輩、つら

い過去は確かになかなか忘れられないです、でもお兄ちゃんは昨日よりも今日、今日よりも明日だって言っていました、明日にはすごく楽しい事があるかもしれないよ、もしかしたら今日だって、楽しい事はどこにだってあるんですよ、里奈も今日、四森先輩や蒼太くんに出逢えて友達になれて、これからが楽しみです。」

里奈が微笑みながら彩花に話す、夕奈ちゃんや蒼太も笑顔で頷いてる

ありがと、里奈ちゃん、夕奈ちゃん、これからよろしくね、青山くん、いい妹がいてよかったじゃない、三年生になってからは仲良くしようね。」

と友成や高野さんも仲良くしてくれる、楽しい高校生活最期の一年を一緒に飾ろう。」

5人はやつと採寸屋に行った、そこで知ったがやはり蒼太も東明高校に入学するみたいだ

姉さん共々これからよろしくお願いします。」

今時こんな礼儀正しい十五歳がいたのかと思える蒼太、そんな時、試着室のドアが開き里奈と夕奈ちゃんが出てきた

見て見てー、セーラー里奈だよー、似合ってるかな

「……どうですか……、お兄さん……」

「うっ、うん、二人とも似合ってるよ。」

採寸屋でどうとセーラー里奈とか満面の笑みで言う妹の行く末が微妙に心配だが二人ともセーラー服が非常に似合っていた

「どうしたの、お兄ちゃん、妹達のセーラー服に悩殺されたのかなー。」

彩花がおもしろがって聞いてくる

「シャーラップ！」

顔を赤くして言っても説得力ないよな。

採寸屋を出た俺たちは彩花がゲームセンターで遊ぼうと言ったので皆でゲーセ

ンに、UFOキャッチャーで女子三人が欲しい人形を取ったり里奈にせがまれ兄妹でプリクラを撮ったり、何故か夕奈ちゃんにもプリクラをせがまれたりとまあ楽しい時間を過ごした。

『蒼太ー、今度は勝つからなあー。』

じゃあ、失礼します。』

『自分も負けませんよ、青山先輩、』

『今日は本当に楽しかったわ、ありがとつ、また遊ぼうね、みんな』

ゲーセンのレースゲ

ームで蒼太に完敗した俺はリベンジを誓いながら四森姉弟と別れ、今は自分たちの家に帰ってる

『買い物は明日になっちまったな。』

『いいよー、新しい友達もできたし、今日は楽しかったよ、ねっ、夕奈ちゃん。』

『・・・うん・・・、あの人達とは・・・、』

仲良くしたい・・・。』

今日は

いい日になったな、さて、明日は何があるのやら。

第十四話（後書き）

自分で書いててちょっと展開が強引な気がします、小説は難しいです。

第十五話（前書き）

第十五話です。

第十五話

春休みも半ばに差し掛かったある土曜日、俺は奈津美と近くの幼稚園に来ていた、卒園式で最後の記念に園児たちが演じる劇の発表会に出る為だ、何故そうなったかというとな津美から頼まれたからだ、なんでも奈津美のお姉さんがその幼稚園に勤めているが劇に参加してくれる大人がほしいというのである、小さい幼稚園で園児は二十人にも満たず先生も奈津美の姉と園長先生をいれても三人しかいない、子供たちにはいい思い出を作らせてあげたいという奈津美の想いに応える為に手伝う、という訳だが

「なんでお前がここにいるんだ！」

「いいじゃねーか、青、俺って結構子供好きだぞ、一緒に手伝うからさ。」

成夫婦もとい友成といずみちゃんも来ているのだ、前日の友成との電話でつい俺が口を滑らしたのだが

「すいません、青山さん、真兄も行きたいって聞かなくて・・・。」

「いやっ、いずみちゃんが謝る事じゃないよ、まあ、手伝ってくれるのはいいよな、奈津美さん。」

奈津美に聞いてみる、つい最近、彼女の事は名前で呼び始めた、彼女自身がそう呼んでほしいと言ったのだ、断る理由もないから俺は了承したが

「いいわよ、貴志くん、人数は多いほうが楽しくなるし、ありがとうね、真司くん。」

奈津美は俺や友成の事も名前で呼ぶ、これも彼女がそう呼びたいんだそうだと

私は裏方のお手伝いをしますね、皆さん頑張ってください。」

いずみちゃんが健気に言ってくれる、友成には出来過ぎな娘だよ、そうして俺たち4人は準備に入った

「本当に今日は有難うご

ざいます、子供たちの為にわざわざ来てもらって、子供達も喜んでました。』
奈津美の姉の香澄（

かすみ）さんにお礼を言われたが友成は

『頭をあげてください、お姉さん、美人の頼みを聞くのは男たる者の義務ですよ。』

アホの友成がそう言うとな怒オーラのいずみちゃんに耳をつかまれ

へえー、じゃああたしの頼みも当然聞いてくれるのよね、真一兄
『あつ、いやつ、男にも聞ける頼みと聞けない頼みがあつてだな・・・。』

まったく、奈津美だけじゃなく香澄さんにも笑われているぞ、ちなみに香澄さんも奈津美同様の美人、芸能人でいうと香奈に近い。さて、俺たちのやる劇は（新・桃？郎伝説）という桃？郎といつものお供たちに金 郎、浦？太郎が加わって一緒に悪い鬼を退治するお話だそうで、発案した香澄さんが昔やったゲームを元にしたらしい。配役は主人公サイドは当然園児たち、俺と奈津美は桃？郎を拾う祖父母役、友成はラスボスの鬼役、

いずみちゃんもナレーションを頼まれた、そうして園児やその親御さんも来だして劇が始まった、俺と奈津美はメイクやカツラとかで老人になり舞台に出る

『おじいさんや、奈津美は貴志おじいさんと一緒に暮らせて本当に幸せですじゃ
うー

ん、とてもお婆さんの台詞とは思えんな、その後は劇も滞りなく進みいよいよ最後の鬼を倒すシーンとなった

『さあー、桃？郎たちは遂に鬼ヶ島に着きました、どんな怖い鬼がいるの・・・で・・・しょう・・・
いずみちゃんが声

を詰まらせる、舞台に出てきた友成は珍妙なヘルメットをかぶり胸にはマジックペンで7つの傷が書かれていた

『おい、お前、俺の名をいってみろ。』

まさかこの男、わざわざこんな用意してたのか、なんでコイツの家は裕福なんだ、世の中の不条理を感じずにはいられないな、周りを見れば親御さんは呆然としとるぞ、でも子供は微妙に喜んでる風にも見えなくもない

「あー、お面の鬼だー。」

「体に落書きしてるー。」

「お前ら、こ

の胸の傷を見ても誰だか分からねーのか。」

「鬼でしょー。」

「そうか、お前ら、死にてーのか、これはなんだ、うん。」
「オイオイ、水

鉄砲取り出したよ、その水鉄砲を桃？ 郎役の子に撃つたのだが水が出ない
「不発か、

運が良かったな。」

「やつつけるー。」

あつという

間に子供六人ががりにポカポカ叩かれてる友成、コイツ、何しに來たんだろう
「どお

えへぶ。」

桃？ 郎たちに倒され

た友成、しかしまた立ち上がり

お前にはまだ二人の兄がいる事を忘れたのか、お前の地獄が目に見えるわ、はは、はばば、ばわー！」
大

げさなりアクションで吹っ飛ぶ真似事をした友成、こんなのと親友な俺。
いずみちゃんも呆れた感じの声で

「えー、最低最弱な鬼はやつつけました、村に平和が戻ったのですー、これにてお終い、お終いー。」

舞台裏に戻ってきた友成にいずみちゃんが

「真兄、ちよつとお話をし

ましょーか。」

目が笑ってない

いずみちゃん

まあ待てつて、あれが21世紀の新しい鬼なんだよー。」

いずみちゃんの両手で両耳

を引っ張られる友成、そこに子供たちも舞台裏に戻ってきた

「あー、お面の鬼の人

だー。」
「お兄ち

ゃん、お姉ちゃん達、今日はありがとう。」

子供たちが素直にお礼を言ってくる、

そんな子供たちに奈津美は

「みんな、今日は楽しかったかな。」

「うん、楽しかったよー、お面の人が面白かったー。」
子供たち

は嬉しそうな笑顔だった、この笑顔にさせただけでも俺たちが来た
甲斐もあったはずだ。
幼稚園を出る時にも子供たちや香澄
さんはもちろん、園長先生にも感じのいいお礼を受けた。

「貴志くん、今日は本当にありが

と」
友成たちと別れ、奈

津美と二人で歩いてる
「あ

あ、子供たちも楽しそうで良かったよ、まあ、友のお陰かもな。」

「ううん、真司くんもだけど貴

志くんやいずみさんがいて本当によかったよ、やっぱり貴志くんに
相談して正解だったわ。」
「奈

津美さん・・・、ありがとな。」

アブねー、もう少しで奈津美を抱きしめるところだったな、

ちよつと奈津美との事は真剣に考えてみようかな、俺で良ければな。

第十五話（後書き）

アホみたいな話ですいません。

第十六話（前書き）

お気に入り登録してくれた人たち、ありがとうございます。

第十六話

あと3日で俺たちは春休みが終わり三年生になる、里奈たちはその二日後に入学式が待っている。あの幼稚園での一件以来、俺は奈津美の事をかなり意識するようになった。告白も考えたが今の関係が崩れるのが怖いという思いもあり告白できず、今も仲のいい友達といった感じだった。

只今午前11時、外に出ず自分の部屋で雑誌を読んでいたらドアをノックする音、里奈かな

「お兄ちゃん、ちよつといいかな。」

「どうしたんだ。」

「うん、なんだか肩がこつちゃって。」

「。。。」

「そうか、いつも家事をこなしてるからな、炊事、洗濯はほとんど里奈がやってるから俺はせめて掃除、買い物はやっている」

「大丈夫なのか、こつてるならマッサージしてやるよ。」

「うん、お願いね。」

里奈を布団に座らせ俺は里奈の肩を優しく揉んでやる、確かにこつてるな

「どうだ、気持ちいいか、悪いなー、里奈にばかり負担かけちまって。」

「ううん、そんなことないよ、それよりお兄ちゃん、マッサージ上手だね、里奈、気持ちいいよ。」

「そうか、よかつたら他のところもマッサージしようか。」

「いいの、じゃあ甘えちゃおうかな。」

断じてヤマシイ気持ちはない、しかし膝上10センチのミニスカを履いた里奈がうつむせになって

「じゃあー、腰と足もお願ひね。」

「なんですと、」

17歳の少年に15歳の少女の生足をマッサージしろとおっしゃいますか、少しは警戒心を持った方がいいと思うがそれだけ俺を信用してくれてるのか、ならばその信用を裏切る訳にはいかない

「あーん、お兄ちゃんの指って気持ちいいよー、あつ、そこ、もつと揉んでえ、もぉー、クセになっちゃうそうだよ。」

・ワザとか、いや、里奈はそんな娘じゃない、だいたい実の兄妹のマッサージでこんな事を考えてる俺の方がおかしいのだ、ここは無の境地にならねば、なぜなら今、里奈の下半身に目を向けたら下着が見えそうなんだよ

「なあ、里奈、もうそろそろいいんじゃないか、俺も指が疲れてきたし。」

「えー、もうちょつとぉー、あとはフトモモだけでいいからぁ。」

最大の難関を残してくれるな、よし、こんな時は近所で一番ヌードを想像したくないオバハンのヌードを想像しよう、そう考えながら里奈のフトモモを揉むと

「はぁん、あつ、あぁつ、お兄ちゃん、そこだよぉ、もつと里奈を揉んでえ、あぁん、気持ちいい。」

・・・・常にオバハンのヌードを想像してなんとかマッサージを終わらせた、里奈がまたしてほしいと言ってたが何かの冗談だろう、とその時、玄関からインターホンが鳴った、誰が来たのかな、玄関のドアを開けると

「・・・こんにちは・・・、お兄さん・・・。」

夕奈ちゃん、なんだ、大きいバックを持つてるけど

「・・・泊まらせて下さい・・・、お願いします・・・。」

どうしたんだ、どこか様子がおかしいな、何かあったのかな。

第十六話（後書き）

やっぱり展開遅いですね。

第十七話（前書き）

第十七話です。

第十七話

『えー、夕奈ちゃん、今日はお泊まりなんだ、ねえ、お兄ちゃん、もちろんいいよね。』

『うん、ウチはいいけど夕奈ちゃん、親御さんにはちゃんと
言ってるの。』

『……は、はい……、今日

だけならって……、言ってました……、お願いします……。』

まっ、いいか、里奈も喜んでるし、

たまには悪くないだろ、俺は夕奈ちゃんに告げる

『いいよ、自分んちだと思って過

ごして、遠慮とかいらないから。』

『……ありがとうございます……、お兄さん……』

『やあっぱり、里奈の

お兄ちゃんだね？』

里奈、そ

んな目で実の兄を見るんじゃない、夕奈ちゃんの前だぞ

『じゃあ二人は遊んでなさい、

俺は夕奈ちゃんの泊まる部屋と布団の用意しとくから。』

『だったら準備が終わったら三

人で買い物に行こうよ。』

『いや、買い物は俺一人でいいからさ、里奈は夕奈ちゃんと一緒に居てやりなよ。』

『……お兄さん……、ありがとう……、うっ……、
うっ……、嫌……、別れたくない……、お兄さんや……、
里奈と……、皆と別れたくないです……。』

そう言くと夕奈ちゃんは声を押し殺して泣き出した、別れたくないってどういうことだ

『えっ、夕奈ちゃん、なんなの、もしかして
引っ越しちゃうの、嫌よ、せっかく一緒に東明高校に行くって約束

したじゃない。』

『夕奈ちゃん、

話してみても、俺達にも何か出来るかもしれない、夕奈ちゃんも里奈たちと別れたくないんだろ。』

夕奈ちゃんの話によると彼女の両親が不仲だそうだし、そして母親が夕奈ちゃんを連れて実家のある遠くの方に帰ると言い出した、でも夕奈ちゃんは嫌だと言って家を飛び出したんだそう、ちなみに夕奈ちゃんの父親はまだこの事を知らない、じゃあ夕奈ちゃんがこの家に居るのも知らないんだ、どうしたものかな

『夕奈ちゃん、君はどうしたいんだ、引越しとかしたくないんだよな。』

『・・・はい・・・、この街にいたいです・・・、里奈と・・・、高校に行きたい・・・、一緒に・・・、卒業したいです・・・。』

夕奈ちゃんも

里奈も目に涙をためている、この二人の涙を俺は見たくない、よっしゃ、俺にできる事をやってやるうか

『夕奈ちゃん、君のお父さんは何時には家に居るのかな、こーゆー話はちゃんと両親二人とした方がいいからね。』

『・・・父さんは・・・

、9時には・・・、家にいます・・・。』

『そうか、じゃあ夕奈ちゃん、お母さんに今日は泊まるって連絡だけはしといて、9時に俺が一人で君の家に行くから。』

『・・・えっ・・・、

お兄さん・・・。』

『でも明

日はちゃんと夕奈ちゃんが両親と話すんだ、なあに、夕奈ちゃんは自分の気持ちを言えただけだから。』

『・・・はい・・・、わかりました・・・、お兄さん・・・、すみせん・・・。』

とにかく夕奈ちゃんの両親と話をしてみないと、俺に何が出来るかは知らないが

『お兄ちゃん、ありがとう、夕奈ちゃんの為に

頑張ってくれるんだね。」

正確には

夕奈ちゃんだけではなく夕奈ちゃんと里奈の二人の為だがな、それからは三人でマ オカートで遊んで俺が全敗したり、里奈と夕奈ちゃん俺が俺に手料理を振る舞ってくれたりとか、その中で夕奈ちゃんも少し笑顔を取り戻したみたいだ、そして只今午後8時55分、現在の場所は夕奈ちゃんの家の前、青山貴志、行きまーす。

第十七話（後書き）

見てくれて感謝です。

第十八話（前書き）

今回ちょっと長いです。

第十八話

夕奈ちゃんの家インターホンを鳴らす、しばらくすると中からしつとりとした女性の声が聞こえる

「はい、どちら様でしょうか。」

「はい、夜分遅くにすみません、夕奈さんの友人で青山貴志という者です、夕奈さんの事でご両親のお二方と話をしたいのですが、よろしいですか。」

「夕奈の事ですか、どうして貴男が。」

「実は夕奈さん、今、自分の家に居るんです。」
「えっ……、すみません、少々お待ちになって下さい。」

返事をしてしばらく待つ、2、3分くらいしたら目の

前のドアが開いた

「おっ・

・、お待たせしました、主人が話をしたいそうです、どうぞおさがり下さい。」
へえ、やっぱり

り夕奈ちゃんの母親だな、夕奈ちゃんが年をとったらこんな感じの女性になるだろうな、だけど、まあこの金髪だし、よからぬ印象を与えたな、でもちゃんと話はしないとここに来た意味がない

「はい、それじゃあ失礼します。」

居間に通されるとそこに

はいかにも厳しそうな夕奈ちゃんの父親と思わしき人がいた、その人は俺を見るや否やいきなりつかみかかってきて

「なっ、この金髪不良が、夕奈を家に連れ込んで何したんだっ、夕奈に何かあったら貴様絶対に許さんぞ、この不良があ。」
バキイ

やはり殴られた、そりゃそうだ、こんな金髪男が娘は今自分の家に居るって来たんだからな、しかしいいパンチしてるな、ウチの今は亡き親父より強いんじ

やないか

『あな

たっ、やめてください、この人はそんな人間じゃありません。』

えっ、夕奈ちゃんの母親が何故そん

な台詞を

『貴男が青山さん

なんですね、夕奈から常々聞いてました、友達のお兄さんは凄く優しい人とか。』

へえ、そりゃ光栄だ

ね、思ってたより母娘の仲はいいのかな

『夕奈から今日は友達の家泊まると電話がありました、その時から貴男が来るような気がしてましたわ、私たちを説得しにこられたのでしょうか。』

ははっ、お母さんには分かってたんだな、じゃあ話は早いな
『はい、お母さ

ん、夕奈ちゃんを連れて行くのは考えてもらえませんか。』

『おい、美智代、

連れていくつてなんだ、まさかお前、夕奈を連れて出て行くんじゃないだろうな。』

いくら落ち着い

た父親が美智代さんに詰め寄る

もう限界なんです、あなたは私や夕奈の事を一つも省みないじゃないですか、いつも仕事仕事で休みの日も全く家には居ない、最後に夕奈と話したのはいつなんですか。』

『忙しいからしょうがないだろう、誰の為に働いてると思ってるんだ。』

典型的なパター

ンだな、そんな都合で夕奈ちゃんの人生を弄ばれてたまるか

『お二人の事は本来自分が口を出す話じゃないません、ただ自分は夕奈ちゃんにこの街に居て欲しいだけなんですよ。』

『なにい、な

んでウチの夕奈の事に貴様が口を出すんだ、そんな事よりとつと夕奈を連れてこい。』

『青山さん、

貴男や夕奈の言いたい事は分かります、でも、もう……。』

『自分は夕奈ちゃんに後悔をしてほしく

ないんです、こんな事、本来は自分よりあなたがたが考えるべきじゃないんですか。』

言つとるんだこのガキは、貴様じゃ話にならん、親だ、親と話をさせろ。』

ウチには両親が居ないんですよ、父親は二年前に事故で、母親は十年程前に男を作つて出て行つたんです。』

あまりこの事は言いたくないんだけどな、でもこの親父さん、なんだかんだで夕奈ちゃんを心配してるじゃないか

『・・・・・・・・』

『今は妹と二人暮らしです、でも、遠くの親戚から仕送りが来てますから生活はできてます、妹も立派に成長してます、夕奈ちゃんと遊んでると本当に楽しそうな顔するんです、二人共、この春から一緒の高校に通えるって嬉しそうに話をしてたんですよ。』

親父さんは顔

から怒りの色が無くなっていく

『だから東明高校にどうしても行きたいと言つてたのか・・・』

『お父さん、最初に激昂して自分に殴りかかってきましたよね、当然ですよ、こんな金髪男がやって来て娘は自分の家に居るとか、父親なら怒つて当たり前です。』

美智代さんは黙っ

て聞いてくれてる、娘との会話はあるみたいだし向き合つて話せば分かつてくれる筈だ

『お父さんが

働くのは家族の幸せの為でしょう、それが当然です、お願いです、奥さんと夕奈ちゃんと三人で向き合つて話をしてください、夕奈ちゃんも明日には必ず帰します、夕奈ちゃんも二人には別居とかしてほしくないんです。』

そう言つて今

度は美智代さんに話しかける

『お母さん、お父さんは本気で夕奈ちゃんの事を心配してます、家族の幸せの為に必死で頑張ってますよ、実家に帰るのは話をしてみてからでも遅くない筈です。』

美智代さんは涙ぐんでる、すると親父さんが俺に話しかけてきた
「・・・あ

んたは何故、夕奈の為にここまでするんだ、別にあんたには一文の得にはならんだろ。」
「お父さん

ほどじゃないですけど、自分も夕奈ちゃんの笑顔が好きだからですよ、それだけです。」
うつわー、何

言っただ俺、げっ、美智代さんが泣き笑いでクスクスしてるよ、親父さんも呆れてるかな
「フン、

とにかく明日は夕方には帰る、別にあんたが言ったからじゃないが話はしてみよう、帰って夕奈に言っといてくれ。」

「青山さん、私も明日三人で話してみます、今日は夕奈の事、よろしく頼みますね。」

「はい、ありがとうございます、じゃあ失礼します。」
帰り際、玄

関の外まで美智代さんが送ってくれた

「青山さん、今日はありがとう、夕奈にはいい友達がいってくれたのね。」
「ええ、たくさんい

ますよ、だって夕奈ちゃんですからね。」

そんな会話を残して自分の家に帰り着く、玄関のドアを開けたら里奈と夕奈ちゃんが走ってきた、俺の顔を見ると

「・・・お兄さん・・・その顔・・・殴られたんですか・・・。」
「大丈夫なの、お兄ちゃん。」

「平気だよこのくらい、夕奈ちゃん、明日の夕方にお父さんもいるからお母さんと三人で話をしてみな、ちよつと頑固っぽいお父さんだけど話せば必ず分かってくれるお父さんに甘えておいで。」

「・・・はい・・・、うつ・・・、うつうつ・・・。」

「ぐすっ、よかったね、夕奈ちゃん、お兄ちゃん、ありがとー。」

二人共泣きながら抱きついてきた、泣き虫な妹たちだよ、二人の体の感触が気持ちいいがなんか眠くなってきたな

『ほらっ、

二人共もう遅いし、俺ももう眠たいから、また明日遊ぼうな。』

『うん　　おやすみなさい、お兄

ちゃん。』　　『・・・おやすみ

なさい・・・。』　　そうし

て大変な1日は終わった、翌日の夕方、夕奈ちゃんは自分の家に帰り三人で話をしたようだ、その日の夜にきた夕奈ちゃんからの電話によると話し合いは割とすんなりとうまくいったみたいだ、今度の父親の休みの日に家族でドライブに行くと嬉しそうに語ってた、夕奈ちゃんは俺にしきりにお礼を言ってきたがやっぱり夕奈ちゃんの純粋な想いが一番両親に響いたはずだ、里奈にもこの事を告げると

『うふふっ、お疲

れ様、お兄ちゃん、里奈からのご褒美だよ。』

そう言つと里奈は俺の背後にまわり今度は俺の背中に抱きついてきた、ちょっと待て、控え目な胸が当たってるんだよ、けどやっぱり気持ちいいな、って、いやいや、こんなじゃ駄目な兄街道まっしぐらだ、どうしようか俺。

第十八話（後書き）

次話から新学期です。

第十九話（前書き）

三年生になりました。

第十九話

今日から新学期、俺たちは高校三年生となる、何かと忙しい一年、どんな事が待ってるのだろうか、朝食時に里奈が

『お兄ちゃん、今日から三年生だね、里奈も明後日から高校生だから一緒に学校行こうね。』

肩まで伸びた艶のある黒髪にちよつと幼さの残る顔立ち、笑うとふにやふにやとでるえくぼ、控え目な推定Bカップの胸とまあかわいいといえばかりいいよな、きつとモテるぞ。

里奈の見送りで家を出る、今日の占いは7位と微妙な順位、まあ、何もトラブルのない日常が一番だよ。

新しい教室には二年時と変わらない面々、東明高校はクラス替えがない、一年時のクラスメートが卒業まで変わらないのだ、否定意見もあるが概ね好評だとか

『おはよう、貴志。』

『オス、青、とうとう三年生だな。』

『おはよう、貴志くん、またこれから一年仲良くしようね。』

彩花、友成、

奈津美と挨拶していく、しかし奈津美、朝からその笑顔はイオ？ズン級だよ、彩花はさしずめベギ？ゴン級、友成はせいぜいひの？のぼうだな。

ちなみにこの前日にこのメンバーといずれみちゃん、里奈と夕奈ちゃん、蒼太の総勢八人でボーリングに行った、四森姉弟もすぐに友成夫妻や奈津美に馴染み有意義な時間を過ごした、スコアは蒼太がトップ、最下位は夕奈ちゃんだった。

あつという間に始業式もHRも終わり今日は昼までで下校、友成は今日もいずみちゃんとデートに行き、奈津美も家の用事で先に帰った、でも帰る時に俺にゴメンねと手を合わせることはないのに、だからか自然と彩花と二人で帰った

『ねえ、貴志は帰って何するの。』

「うーん、買い物は行つたし、掃除も昨日の夕方にしたばかりだしな、帰ってから考えるかな。」

「えー、昨日のボーリングが終わってから掃除したのー。」

「まあな、体力はあんだよ、けど蒼太つてめっちゃボーリング上手いな、スコアなんかプロに近いぞ。」

そんな話をしながら歩いてたら理子の今彼、工藤恭介が何故か一人ですぐ近くに来ていた

「はははっ、青山君、また違う女かい、そのうっとおしい金髪同様に節操なしだな。」

「なんだコイツ、俺に恨みでもあんのか、うん？　　もしか二年の時のあの・・・」
「なにアンタ、ウザいから消えてくれない。」

さすが彩花、こーゆー男には容赦ないな

「ふん、さすが粗野な男には下品な女がつくんだな、素直で従順な理子とは大違いだ。」

さすがにぶん殴りたくなるがそれ
「あははっ、痛いより前に彩花が

勘違い男にクソビッチ女でどこか無人島で死ぬまでいちゃついてく
ださいよ、お似合いだわ、あんた達。」

彩花の反撃に工藤は勝ち誇った顔で

「そうなんだよ、ここ最近理子も激しくなつてきてね、青山君ももらえなかった理子の初めてをもらってから彼女を僕色に染め上げるのが大変なんだ、クククッ、春休みの時とか
三日三晩・・・。」
工藤が

言い終わらないうちに彩花の腕を取り足早にその場を離れた、工藤の捨て台詞が聞こえたが相手にする価値はない

「あゝ、ム力つくうゝ、貴志が引つ張つていかなかったらアイツぶん殴るトコだったよ。」

工藤の姿も見えなくなった所で彩花が息巻

く、結構喧嘩っ早い娘だな、しかし、あの男に会うと不快にしかないな
ねえ、貴

志、なんでアイツってああも貴志に突っかかってくるの、なんかアイツにしたの。
彩花が聞いた

てくる、工藤が俺を嫌う理由ねえ、やっぱあの二年の時のサッカー大会しかないよな、俺は思い出す限りに彩花に話し始めた・・・。

第二十話（前書き）

二十話までできました。

第二十話

二年の時の6月、夏の暑い日にクラス対抗のサッカー大会が行われた、暑いのにご苦勞な事である、優勝しても特に何もないのだがやるからには勝ちたい

青、

俺たちのコンビで4組の優勝は間違いなしだな。」

「けど暑いよな、まあ体育館でバレーやってる女子も暑いだろうけど。」

俺は頭はよろしくないが運動能力は学校トップクラスである、親父の暴力から里奈を守るために十歳から鍛えてたしな、でも友成のスポーツ能力は俺の上をいつていた、多分全国レベルだろう、本人に聞いてみたら三歳くらいからスポーツ好きだったとか

「6クラスを二つに分けてリーグ

戦、上位一チーム同士で決勝戦か。」

「優勝まで全部で三試合か、俺たちと同グループは1組と3組だ、実力をだせば負けないよ。」

チームメートが話す中、俺と友成がいる4組はまず3組との初戦を迎えた、俺はMF、友成はFWに入る、二人共レギュラーだ。

前半が終わって5対0、友成が一人で四得点だ、しかしシュートを打つ際に

「ファイヤー。」

「こ

こだ、ここできめるんだ。」

「俺が天才、友成真司だあ。」

「といちいち叫ばないとシュートが打てないのか、なら仕方ないが・・・」

結局試合は友成の6得点、俺の5アシストで8対0の完勝だった。

次の1組との試合、勝てば決勝だ、初戦と同じ布陣で望む、やはり前半で4対0だ、俺と友成だけじゃなく他のチームメートも結構上手かった

「後半はGKさせてくれねーかな。」

」

もう勝ちは見えてたのでさせてみると

友成がそう言い出した、

「そうなんでもぬかれてたまるか。」

やはりシュートを打たれると叫ぶ、

黙って捕れ。

試合は7対0と勝利、決勝進出だ、試合後に友成

が

「やはり俺が4組のSG（頑張

り）GKだ。」

・・・もう何も言い

たくない、とにかく決勝戦だ、相手はサッカー部のエースとか言われている工藤恭介がいる6組になった。

「青、俺さ、この試合は後半から出るよ。」

「どうした、体調が良くないのか。」

「フツ、スーパー

ストライカーは後半から出るのが決まりなのさ。」

まあ、駄目と言っても聞かないだろうし、好きにさせるか、作戦は俺が工藤を徹底マークすることらしい、大丈夫かな、相手はサッカー部のエースなんだろう。しかし試合が始まって工藤をマークしてると思ったより大したことなかった、ドリブルもパスもシュートも全て防げたし、俺の2アシストで前半が終わって2対0だった。

後半開始、自称スーパーストラ

イカーの友成も出場して、最後の45分だ。

「くらええ、マツ？シュートだあ。」

また叫ぶ、けど今までより動きが凄い、実は体力温存だったのか、試合は進み残り二分、スコアは5対1、優勝はもう決まりだった、相手ゴール前で友成からボールをもらい

「青、ラストはお前が決めろよ。」
よし、初ゴール

を決めてやるか、思いつきりシュートしたら

バッチインー！！

げっ、やべえ、止めにきた工藤の顔にモロに当たった
「なに

い、顔？ブロックだとお。」

それから工藤は保健室に運ばれ、程なく試合は終了、4組は優勝した。後日、工藤に謝りに行ったが全く相手にされなかった、そしてその約8ヶ月後、俺は理子を工藤に奪われた……。

「フーン、そんな事があつたんだ、だからアイツ、貴志にはイヤミつたらしくくるのね、気にすることないよ、ただの逆恨みバカなんだから。」

彩花がそう言ってくれる、そりゃサッカー部期待の二年生エースが帰宅部のなんちゃって金髪男に全く歯が立たず、しまいにはシュートを顔にぶつけられたんだから普通恨むだろ

「まっ、今更理子を取られたとか気にしてないよ、今の俺にはもつと大切な人達がいるんだ、もうそんな事忘れようぜ。」 彩花は何

か考えてるようだが普段あまり出さない落ち着いた声で聞いてくる
「……貴志は、新しい彼女とか欲しくならないの？」

なんだ、急に言われても、まさか奈津美が気になってるとか言いにくいしな、何も言わず黙ってたら

「ゴメン、今の忘れてっ、ほらっ、帰ろうよ。」

急にどうしたんだ

彩花は、まあ、今すぐに彼女とかまだ考えられないけどな、だけど、いつかは俺だって……。

第二十話（後書き）

これからよろしくお願いします。

第二十一話（前書き）

今回は里奈視点です。

第二十一話

今日から私は高校生、お兄ちゃんと一緒に高校に通える、嬉しくてたまらない
『入学式じゃし

っかりな、お前も今日から高校生なんだから。』

学校に行くお兄ちゃんが声を掛けてくる

『もぉ、大丈夫だよ、子供じゃないもん。』
お兄ちゃんは今

日はすぐに帰るとか、私たちが入学式だからね、でも明日からは一緒に登校できる、そしてお兄ちゃんのお昼弁当は私が作る。

以前にもお兄ちゃんのお弁当を作りたいと言ったけどお兄ちゃんがあの前田とかいう女に悪いとかで断られた、あの女は弁当とか作らないのに、一応付き合ってる彼女としての手前があつたのかな。
『明日からは

里奈や夕奈ちゃんと一緒に学校行こうね、お兄ちゃん、お弁当も作ったげるからあ。』
『はははっ・

・、まさにリアルギヤルゲーだな・・・。』

リアルギヤルゲー？　なんだろう、お兄ちゃんの顔が笑ってるけどなんか汗が出てる、暑いのかな。

お兄ちゃんを見送った後、ちよつとして夕奈ちゃんに電話する、お兄ちゃんのお陰で夕奈ちゃんと一緒に学校行けるもんね

『夕奈ちゃん、おはよつ、ねえ、8時30分に待ち合わせしようよ。』

『・・・うん・・・、一緒に行こう・・・。』

入学式は9時から始まるとか言ってた、クラス分けも見ときたいし、夕奈ちゃんや蒼太くんと一緒にクラスになれるかな、東明高校は一年のクラスメートが卒業まで一緒だもんね。

夕奈ちゃんの家は私の家から徒歩三分、私が家から出たらすぐそこに夕奈ちゃんがいた

『おはよう、夕奈ちゃん。』

『・・・おはよ・・・、里奈・・・。』

夕奈ちゃんと合流して歩くこと十分、今日から私達を通う、そしてお兄ちゃんのいる東明高校に着いた。すでにたくさんの新入生が来ていて、その中には同じ中学の人も数人いた、早速私達はクラス分けの表が張つてある掲示板に向かった、表を見たら

あつ、夕奈ちゃん、あつたよー、一緒だあ、ほら、二組だよ。』

『・・・うん・・・、よかった、これで

夕奈ちゃんと卒業まで一緒だ、そんな感じで喜んでたら後ろから声を掛けられた

『おはよう、里奈さん、夕奈さん、へえ、嬉しそうだね、一緒のクラスになれたんだ。』

そこにはイケメンといつてもおかしくない私達の友人、四森蒼太くんが凛とした感じで立っていた

『おはよう、蒼太くん、蒼太くんは何組なの。』

『俺は一組だけど、二人は？』

残念、でも隣のクラスだし、そんな事ぐらいで友人関係壊れないよね。 蒼太くんも全く気にしてなさ

そうだった、彼に促され教室に向かう、蒼太くんと別れ教室に入ると既にほとんどの生徒が来ていた、でも知ってる人はいなく入学式まで夕奈ちゃんと二人で雑談していた。

入学式も終わり教室に戻って、しばらくしたら私達の担任になる教師が来た、三十代くらいの女性教師だ

『皆さん、初めまして、これからこのクラスを受け持つ鈴木 舞（すずき まい）です、あなたが楽しい学生生活を送れる様にサポート出来たらいいなって思ってます、これからよろしく。』

よかった、いい感じの先生だ、HRも終わり夕奈ちゃんと共に下校準備

備をしてたら知らない男子生徒が話しかけてきた

「ねえねえ、キミ達これからヒマ？」

よかったら俺達とカラオケ行かない、一緒に楽しもうぜ。」

何言ってるの、知らない人なんかと行き

たくないよ

「すいません、私達早

く帰らないと用事があるんです、帰ろつ、夕奈ちゃん、それじゃ。」

夕奈ちゃんを連れ、早々に

教室を出る、知らない人と居るよりお兄ちゃんと居た方が楽しいもん、明日からはお兄ちゃんと帰るんだから。

第二十二話（前書き）

今回も里奈視点です。

第二十二話

携帯のアラームが鳴る、午前6時30分、私は今日からこの時間に起きなきゃいけない、お兄ちゃんのお弁当を作る為に。

顔を洗い目を覚ませキッチンに向かい二人分の弁当と朝食の準備、なんかお兄ちゃんの奥さんになったみたいで嬉しい気分。お弁当のおかずは体調に気を使い脂っこいのは控えめに、あとはお兄ちゃんの好物の私の手作り卵焼き、私の料理をお兄ちゃんはいつも美味しいって食べてくれる、お兄ちゃんがいいっていうなら一生食べさせてあげたいな、そんな楽しい事を想像してたら

「ふあー、おはよう、里奈。」

私から遅れる事40

分、お兄ちゃんが起きてきた

「おはよう、お兄ちゃん、朝ご飯できてるから、顔洗ってきてね。」

「おう、いつも悪いな、きつ

かったらいつでも言えよ、俺も簡単な朝食なら作れるから。」

優しいお兄ちゃんはいつも私を

気遣ってくれる、嬉しいけど私の作る料理を美味しそうに食べるお兄ちゃんを見るのが好きなの

「だめよ、料理は里奈の仕事なんだからっ、それにきつくなんてないよ。」
「ははっ、里奈にはかなわ

ないな。」
朝の準備も朝食

も終わり学校に行く直前、初めてお兄ちゃんに弁当を渡す

「はい、お兄ちゃん、残しちゃダメだからね。」
「残さねえよ、里奈が早

起きして作ってくれた弁当だもんな。」

そう言っただけ私の頭をポンポンと軽く叩く、子供じやないのに、その時、家のインターホンが鳴ってドアを開けたら夕奈ちゃんがいいた
「……おはよう・

・、お兄さん、里奈・・・、迎えに・・・、来ました・・・。」

三人で家を出て通学路を歩く、待ち望んだ楽しい時間だった、そしてもう学校に着くという所で昨日の帰りにカラオケに誘ってきた男子がまた声を掛けてくる

「あつ、おはよう、青山さん、

秋野さん、あれっ、その人は・・・。」

その男子はお兄ちゃんを見てなんか軽蔑してそんな目をしてた、お兄ちゃんが金髪だから不良とでも思ったのかな、全然違うのに、私は外見だけで人を見る人間とは絶対仲良くなれない、私はあの前田 理子とかいう女とは違うんだから

「俺、俺は里奈の兄で青山 貴志、よろしく。」

「はい・・・、それじゃ。」

そそくさと逃げるみたい
に去って行った、まあ別にどうでもいいんだけどね。それからお兄ちゃんと別れ自分たちのクラス、1年2組に入った、席に着いたらさっきの男子がまた話しかけてくる

「青山さん、今の人って本当にお兄さんかよ、

あんな人が。」
あんな人・

・・・、なんでお兄ちゃんがこんな奴にあんな人呼ばわりされなきゃいけないの、私は我慢できなくなりそいつに言った

「そうよ、私の自慢のお兄ちゃんよ、小さい時から私を守ってくれた優しい兄なの、あんな人呼ばわりしないでください。」
「なんだよ、ブラコンかよ、せつかくカワイイのに気持ち悪いよな。」

ブラコン、何とでも言えはいわよ、お兄ちゃんがいれば私は幸せなんだから、冷めた目でその男子を見てたら夕奈ちゃんが
「・・・里奈の事・

・・・、何も知らない癖に・・・、分かったふうに・・・、言わないで!!」
あんな怒った夕奈

ちゃんって初めて見たかも、そしたらそいつは私たちに

『なに、秋野さん、ひよつとしてアンタ達
ってまさかのイケない関係、アハハッ、ウケるねえ。』

その後はひたすらその男子の事は無視し続け
ていた、今日1日、私と夕奈ちゃんはクラス中の好奇と軽蔑が入り
混じった視線を受け続けた

『ごめんね、夕奈ちゃん、なんだか巻き込んだね。』

『……いいよ……』

・、気にしてない……。』 放課後、

お兄ちゃんから買い物に行ってるから先に帰ってていいというメー
ルが来て今は夕奈ちゃんと二人で帰ってる、クラスメートは誰も私
達に話し掛けてこなくなった。 ゴメンね、お兄ちゃ

ん、なんだか楽しい高校生活、送れそうにないや。

第二十二話（後書き）

実際には里奈みたいな妹はいませんが、まあ、フィクションのお話ですので。

第二十三話（前書き）

今回は彩花の弟、蒼太視点です。

第二十三話

東明高校に入学して3日が過ぎた、俺自身はそれなりに友人もでき少しは学校に馴染んだつもりだ。でも一つ気掛かりな事

があった、里奈さんと夕奈さんが何かおかしい、たまに彼女たちがいる二組の教室の前を通るが彼女たちは絶対に二人だけなのだ、いくらまだ入学して3日とはいえもう少し他の友人ができてもよさそうなんだが

「ちよつと、四森君、何そんなところに突っ立ってんのよ、どいて。」

ああ、廊下で考え事してたからな、邪魔だったか

「あつ、ごめんよ。」

「どうしたのよ、なんか悩みがありそうね。」

「少し茶色がかつた髪をツインテールにして身長も150あるかないかというこの娘は鈴木 紗恵（すずき さえ）、俺のクラスメートで席が隣なのだ。」

「大丈夫、鈴木さんが心配する事

じゃないよ。」

「ふーん、そつ

か。」

去つていく彼女を見ながら

放課後、里奈さん達のいる二組に行ってみようかと思った。

授業がおわり放課後、二

組の前に来て里奈さん達を見つけ声を掛ける

「里奈さん、夕奈さん、もしよかったら一緒に

帰らない。」

二人とも

笑顔で応じる

「あつ、蒼太くん、

いいよー、一緒に帰ろつ。」

二人は

教室を出る、けど二人は誰にも挨拶しない、それどころか挨拶されもしない、やっぱりおかしい

「もし違つてたら謝る、ひよつとして二人はイジメられてない。」

三人だけになったところで聞

いてみた

『 えっ、な

っ、何言ってるの、そんな事ないからっ。』

嘘をつくのが苦手だな、でも何故だ、いじめられる要素のない二人だと思うが

『 ……なにこれ……。』

夕奈さんが呟いたのでそっちを見てみたら彼女の下駄箱に心無い落書きが書かれていた

「 同性愛者 」

「 青山さんの具合はどうだった？ 」

「 どっちがお姉様？ 」

その場に立ち尽くす二人をそのままにして、俺は歩き出した、バケツに水を入れ、雑巾を準備してまたさっきの下駄箱に戻ろうとする、しかしその途中、鈴木さんに出会う

『 四森くん、どうしたの？ バケ

ツなんか持って、どつか汚したの。』

『 いえ、ちょっと。』 それ

だけ答えてさっきの下駄箱に戻る、二人はまだそこに居た、彼女達には何も言わずに俺は雑巾をバケツにつけ、その落書きを消し始めた、すると後ろから

『 ちよつと、

何よコレー、誰が書いたの、信じらんない！！』

どうした訳か鈴木さんが憤怒の表情で

そこに居た

『 ねえっ、四森くん、

誰が書いたの、あつ、アナタ達は……。』

後ろで里奈さん、夕奈さん、鈴木さんが何か話してるが俺は無視して黙々と落書きを消していく、幸いにも書いてから時間が立ってなかったのかすぐに消えた

『 そうなの、そんな奴らなんかに負けちゃ駄目よ、って、

四森くん、どこ行くのよー。』

どうやら鈴木さんは二人を慰めてあげてたんだな、鈴木さんの問いには答えず、俺は里奈さん達のクラス、一年二組を目指した。

第二十二話（後書き）

主人公の出番なしです。

第二十四話（前書き）

今回も貴志達三年生は出番なしです。

第二十四話

一年二組の前に来た、まだ数人の生徒が居る様だ、この中にあの落書きを書いた者がいるか分からないが一言言わずにはいられなかった、里奈さんと夕奈さんの為、そして、俺みたいな悲劇を繰り返させない為に

「秋野さんの下駄

箱にあんな事を書いたのは誰だ。」

教室のドアを開けるなり俺は言った

「うん、誰だよ。」

「書いたって何？」

教室に居た数人の生徒は冷めた感じで俺を見てる、この中にはいないのか、そう考えてたら茶髪の軽そうな男子が俺に話し掛ける

「つーかさ、アンタ誰、

秋野のダチ、ああ、もしかしてアンタもホモって奴？ もった

いねーな、イケメンなのにさ。」

その男子と近くにいた二人の友人らしき奴らがニヤニヤと笑う

「君が書いたのか。」

「知らねーよ、つーかなんでお前

にそんな事言わなきゃなんないんだよ。」

その茶髪男と睨み合ってたら教室に里奈さん達が来た、何故か鈴木さんも居る

「蒲田君、や

っぱりあんたが書いたの！！ 謝れっ、夕奈ちゃんに謝れー。」

里奈さんが目に涙を貯めながらその蒲田という男に叫ぶ、すると教室の隅っこにいた女子が静かに言う

「蒲田君、私、見たんだよ、あな

たが秋野さんの下駄箱に何か書いてるのを……。」

「クソがつ……。」

蒲田は観念したみたいに吐き捨てる、するといきなり鈴木さんが蒲田に近づき頬にビンタした

『アンタつ、あんな事書かれたあの娘の気持ち考えてんの！！　つまらない事してないで言いたい事があるなら本人にハッキリと言いなさいっ。』

『何しやがる！』

蒲田が怒りの表情で鈴木さんに近づく、俺はとつさに蒲田の手首を押さえた

『女子に何しようとしてるんだ、なんで叩かれたのか考えてみる、こんな事続けてたら周りに誰も居なくなるぞ、孤独な高校生活を送りたいのかよ、今ならまだ間にあうんだ。』

俺が過去の自分を思い出しながら言う教室に居た他の生徒達から

『やっぱりだよ、こんなの、せつかく一緒のクラスになったのに、こんなの嫌あ。』

『ごめんね、青山さん、秋野さん、今まで声かけてあげられなくて、私もあなた達と仲良くしたい、今更だけど、いいかな？』

里奈さんも夕奈さんも笑顔でその生徒達に応えていた、あとはこの蒲田だけだ

『君だって最初からこんな奴じゃないだろ、こんな高校生活を望んでない筈だ、行動さえ間違えなきゃもつと学校は楽しい場所なんだ。』

蒲田は黙って俯いてる、やがて小さい声で呟く

『ごめんな』

『秋野さん、青山さん、あんな事書いてしまつて、謝つても済まない事だけど、許してください。。。』

涙声で謝罪する蒲田、そんな彼に夕奈さんが近づき

『。。。蒲田くん。。。これから。。。よろしくね。。。』

『もうい里奈さんも蒲田に』

『いよ、せつかく同じクラスになったんだし、これから三年間楽しくやろうよ。』

『蒲田は人目』

もはばかりに泣き出した、きつともう大丈夫だろう、俺は目立た

ぬ様に教室を出る、すると鈴木さんがついてきた

『 四森くん、カッコ良かったじゃん、とても同
い年とは思えなかったわ。 』

鈴木さん、俺は友達の為に出来る事をやっただけです、いじめな
んでされる側も、する側も深い傷が残るんだから・・・、よかった
ら、俺の懺悔、聞いてもらえますか。 』

鈴木さんは真剣な顔で頷く、俺は彼女に話をしだした、
忘れたくても忘れられない過去を・・・。

第二十四話（後書き）

ちなみに茶髪の蒲田は第二十一話で里奈をカラオケに誘った男です。

第二十五話（前書き）

蒼太の過去話です。

第二十五話

五年前、ある小学校に二人の少年がいた。

1人は160近い身長に美男子とっていい顔の造形を持つ四森 蒼太という少年、あと1人はお世辞でも2枚目とはいえず、身長も低いひ弱な感じの須藤 智（すどう さとし） という少年だった。二人は特に仲が良くも悪くもなく、蒼太はいつも誰か友人に囲まれる人気者、智はだいたい1人だった。ある日の体育の授業中、バスケの試合中に智が転んで怪我をした、体育委員の蒼太が智を保健室に運んだのだが智は嫌がる

「いい、1人で歩けるから、離せよ。」

うはいかないだろ、一応体育委員だから。」

「いいから離せよ、歩けるって言うてるだろ。」

智は強引に蒼太から離れ一人で保健室に向かった。蒼太は1人で授業に戻るが

その後、智は教室に戻ってこなかった、特に気にもしてなかったがその日の放課後、蒼太は担任から呼び出しを受けた、職員室に行き担任の元に行くと担任から怒られた

「四森、お前何で須藤を保健室に送って行かなかったんだ、須藤は足を捻挫してたんだぞ。」

「はあつ、須藤が1人で歩けるって言ったんですよ、そんな捻挫とか知らなかったんですから。」

「お前、体育委員だろ、須藤が言ったからって簡単に1人で行かせるな、もう少し責任感を持て。」

そう言われた蒼太は職員室を出てからも納得できていなかった、この一件が蒼太の心に闇を灯したのだ。

翌日、学校に来た智に蒼太は詰め寄る

「須藤、お前捻挫してたのなら

何で1人で保健室行っただつ、お陰で俺が怒られたんだぞ！！」

しかし智は特に悪びれる様子も

なく言い放つ

「えっ、そう

なの、そりゃ悪いことしたなあ。」

この時の智の軽い態度が当時まだ十歳だった蒼太をいじめという行為へと誘ったのだった。暴力こそはしなかったが言

葉でいじめ続けた、臭い、気持ち悪い、喋るな、といった感じで、しかも文武両道で人気者の蒼太と正反対の智ではクラスメートは皆、蒼太側についた。

担任に気付かれない様に智をいじめだして2ヶ月くらいしたある日、蒼太は智の着ていた服を臭いから脱げと言った、するといきなり智が自分の椅子を振り上げて蒼太を殴る、まわりの悲鳴が聞こえる中、蒼太は意識を失った。椅子で頭部を強打され頭から血を流した蒼太は病院に運ばれた、しかし病院で蒼太は姉の彩花から衝撃な事を言われた

「須藤くん、自殺未遂を図ったそうよ。」

蒼太は姉が何を言ってるのか分からなかった、ぼう然とした顔で姉を見る事しか出来なかったのだ。

彩花の話では智は蒼太を殴った後、すぐに教室を出て自分の家に戻り、手首を切った、幸い発見が早く命は取り留めたが蒼太は自分はどうしていいか分からなかった。その日は

検査入院して、次の日、病院を退院した後、すぐ智の家に行ったが門前払いだった。そして数日後、智は転校していった、

だが今度は蒼太がクラス中から相手にされなくなった、小学卒業まで蒼太はクラスの誰とも一言も話す事はなかった。中学でも蒼太は1人行動が多かった、楽しくない中学生活だったが二年の終わりに転校する事になった、彩花が同級生を大怪我させたのだ、彩花には辛いだろうが蒼太はどこか安心して、誰も自分の事を知らない所に行けるからだ、そして今に至る……。

「……どうして私

にその話をしたの、誰も知らないんでしょう。」

紗恵は怪訝な表情で蒼太に聞く、蒼太は微笑んで

「懺悔を誰かに聞いてもらいたかったんです、俺のした事が一人の少年を深く傷付けた、俺はどうしたら償う事が出来るのか今もわからないんです。」

「私だってわからないよ、でもどうしたって過去は変わらない、四森君はずっと償いをさがす人生を生きるの？ 青山さんや秋野さんの為にあんな一生懸命だった四森君なら違う答えを見つけれと思うよ。」

紗恵の言葉を蒼太は黙って聞いていた、里奈と夕奈の為に出来る事をしただけと自分で思ってたがそれが答えなのかは分からない

「決めたわ、四森君、これから

二人で答えを見つめよう、うんっ、決めたんだから。」

いきなり紗恵は宣言した、ここから

二人の関係が始まった。

第二十五話（後書き）

次回から貴志たち三年生がでます、蒼太と紗恵の話はまた今度と
いう事で。

第二十六話（前書き）

やっと貴志視点に戻ります。

第二十六話

俺たちが三年になり1ヶ月が過ぎた、里奈も入学した当初は何故だか元気なさげだった。が今ではいつも通りの明るい里奈だった。

「お兄ちゃん、はいっ、お弁当だよ。」
「もはや当たり前になった。」

「俺は里奈の手作り弁当、友成は羨ましがってた。」

「そしてもう一つの定番は里奈、夕奈ちゃんとの朝の登校だった。」

「……お兄さんは……大学……行かないですよ……。」

「ああ、何か体力系の仕事をするつもりだけど、どうかしたの。」
「……この街に……居るんですよ……どこか遠くに……行きませんよね……。」

「俺が答える前に里奈が。」
「当然だよ、お兄ちゃん。」

「と里奈はあの家にずっと居るから安心して。」
「俺はいいが里奈がそれでは困る、入学して1ヶ月、」

「未だに里奈に浮いた話はない、何故だ、不意に後ろから聞く者を癒やす声がした。」
「おはよう、みんな、」

「なんだか楽しそうね。」
「そこに」

「は奈津美さんが居た、黒髪ロングがこの上なく似合う美少女、彼女は俺の隣に来て一緒に歩く。なんだこのハーレムは、美少女三人と登校とか俺の人生これでいいのか、そのまま学校に行き俺たちの教室に入る、友成と彩花はもう来ていた。」

「昼休みとなり俺たちは4人で昼食を食べる、友成は俺の弁当を見て」

「いーなー、ラブシスターの手作り弁当、俺のも頼んでもらえるか。」

「ムチャゆーな、二人分の材料ガツカリする友成をしかねーよ。」

尻目に今度は彩花が友成に話し掛ける

「そういえば真司って午前中やたら眠そうだったけどなんで？」

親父と朝4時まで語り合ってたんだ、おかげで三時間しか寝てねえよ。」

「何？ 進路の事。」

奈津美さんは友成に聞くが奴の答え

は常軌を逸していた

「いや、仮面ラ？ダーV3・風？志郎役は宮？洋さんしか有り得ないという事を語り明かしたんだ。」

・・・コイツの親父さんは会社を持つてるはずだがどんな会社なんだ、そしていずみちゃんもコイツの何に惚れたんだろう、謎だ。そして放課後、奈津美さんと彩花の三人で帰る、里奈達も俺と一緒に帰りたいらしいが下校はクラスメートと帰るように説得した、里奈と夕奈ちゃんにも俺みたいにクラスメートと楽しい下校時間を過ごして欲しいのだ、俺の想いは通じた様で今じゃ里奈達はクラスメートと楽しく下校するようになった。

下校途中の街中を歩いていると彩花が何かを見つけて俺に言う

「あつ、見て、貴志、ア

イツ・・・。」

彩花が指差す

その先にはあの工藤恭介が理子とは別な女と仲良さげにウィンドウショッピングをしていた、その光景を見た奈津美さんは呆れた感じで口を開く

「まあ、いいんじゃない

いですか、何でも、前田さんには似合いの末路ですよ、ねっ、貴志くん」

確かに何でもいい、こ

れは工藤と理子の問題であり俺は全く関係ない、いつまでもこんな奴らに振り回されてたまるか、俺たちは工藤に声をかける事なくその場を離れた。

帰り道も進み彩花と別れ今は奈津

美さんと2人つきり、何しゃべろうかな、未だ告白もせず友達以上恋人未満の関係だがどうしたものか、俺が話し掛けようとしたら奈津美さんが先に話しかけてきた

「ねえ、貴志くん、頼みたい事があるんだけど、聞いてくれるかな。」
「おう、なんでも言

ってみなよ、できる事なら何でもするから。」

なんだろうな、二人になって話してきたところを見ると俺じゃないとダメなのか
「

あつ、あのね、わつ、私の・・・、私の恋人になつてほしいのつ。」

はい？ 彼女は今なんと言つたのだ、俺の聞き間違いじゃなければ恋人という単語が聞こえたような気がしたけど・・・。

第二十六話（後書き）

見てくれて感謝してます、これからもよろしくお願いします。

第二十七話

今、俺は奈津美さんと共にとある喫茶店に居る、前日に奈津美さんから恋人になってと頼まれたのだが実は恋人のフリをしてもらいたいただけだった。

落胆と安心が半々だった奈津美さんの話では彼女の幼なじみがしつこく交際を迫ってくるとか、あまりにしつこいので奈津美さんは今付き合ってる恋人がいるからとその幼なじみに言った、そしたらその幼なじみが会わせてくれと言うのでこの状況となった訳だ

メンね、貴志くん、こんな事頼んじゃって、貴志くんしか頼める人いなくて……。」

気にしないでよ、とにかくその幼なじみ君にハッキリと俺が彼氏と言えればいいんだろ、しかしこの頭じゃ変な誤解されるかもしれないな。」

その時、店のドアが開いた、そこには真面目そうな風貌の青年がいた、奈津美さんはその人を見て声を掛ける

「あの人がそうなの、って年上なの？」

奈津美さんは黙って頷く、彼は何も言わずに俺たちが座ってるテーブルに来た

「奈津美、その人がお前と付き合ってるのか。」

随分と高圧的な人だな、俺は取りあえず挨拶だけはしておく

初めまして、奈津美さんとお付き合いをさせてもらってる青山貴志と申します。」

へえ、そんな頭の割に真面目な言葉遣いなんだ、見た目と大違いだな。」

「孝介さん、私はこの人と付き合ってるの、だから、孝介さんとはお付き合いできません。」

奈津美さんは毅然とその幼なじみ、孝介さんに言った、しかし彼は動じずに言葉を返す

「なあ、青山くんだっけ、君はどこの大学に行くつもりなんだい。」

「僕は大学にはいきません、就職するつもりですけど。そう言つと孝介さん」

「んは小バカにした感じで言い放つ」

「ははっ、そんなに頭良くないの、それとも家にお金がないつてやつか、奈津美、やっぱりお前には僕が相応しいよ、考え直すなら今の内だぞ。」

「その言ひ方にカチンときたが奈津美さんがいきなり目の前にあつたコップに入つたコーヒーを孝介さんに投げつけた」

「なっ、何するんだ奈津美、この服高かつたんだぞ。」

「るたえる孝介さんに奈津美さんは満面の笑みを浮かべて言つた」

「相変わらず学歴でしかその人を見ないんですね、あなたがいつも自慢する医大も父親が行けと言つたから行つてるだけでしょう、私はあなたみたいに人の言つた事しかできず、それを自分の力として誇示する人間なんて絶対に好きになれませんわ。」

「奈津美さんの言葉に孝介さんは顔を赤くして怒る」

「なっ、何だと、じゃあお前は医大生の僕より大学も行けないこんなヤンキーの方がいいつて言うのか、お前はそんなに馬鹿じゃないだろ。」

「孝介さんは今にも奈津美さんにつかみかかりそんな勢いだ、ここは俺の定番だ」

「孝介さん、あなたがどう言おうが俺と奈津美さんは付き合つてるんだ、俺の進路がどうだろうとあなたに関係ないよ、これ以上奈津美さんに付きまとうなら俺も容赦しない、いこうか、奈津美さん。」

「ちよつと凄む感じで孝介さんに言う、戸惑う彼をそのままにして俺は奈津美さんと共に店を出た、自分たちの支払いだけ済まして。」

「街中を奈津美さん」

と歩く、傍目にはカップルに見えるだろ、今日は日曜日だし

『貴志くん、ごめんなさい、嫌な思い
させちゃったね。』

奈津美さんは謝ってくる

『いい
よ、気にしてないから、それよりあの人、これで諦めてくれるとい
いけどな。』

『あら
っ、その時は貴志くんが守ってくれるんでしょう。』

嬉しそうに笑う彼女に見惚れてしま
ってつい言ってしまう

『ああ、いつでも言つてよ、奈津美さんは必ず俺が守るか
ら。』

奈津美さんは笑顔
で頷く、そして彼女から思いもよらない一言を発する

『それじゃあ、デートに行きましょうか
』

『えっ、奈津美さん？
』

『今日
の私は貴志くんの彼女なのよ、休みの日に貴志くんは彼女に淋しい
思いをさせたいの！』

『それか
らは奈津美さんに引く張られる感じでデートを楽しんだ、つい楽し
みすぎて夜の7時過ぎまで遊んでしまい帰ったら里奈に問い詰めら
れたのはまた別のお話である。』

第二十八話（前書き）

初の真司視点です。

第二十八話

5月の心地良い風を受け俺は幼なじみ兼彼女のいずみと下校中だ、しかし今日も眠かった、昨日も親父と「熟年カップルの再婚旅行での悲劇がワイドショーでB級のネタならC級のネタとはなんなのか」という事を明け方まで討論してたからな、しかし結論は出なかった、今度はどんな討論をしようかな

「真兄、今日は唐揚げだから、唐揚げ好きだもんねっ、早く行こう」

いずみが隣で俺の手を握る、ボーイッシュで勝ち気そうな顔をしてるが中身はデレな女の子なんだよな

「ああ、美鈴さんの唐揚げ美味しいしな、しかしいつつも悪いなー、夕飯ご馳走になつて。」

「そんな事ないよ 真兄が来てくれてママも喜んでるんだからさっ。」

俺はよくいずみの家に夕飯をご馳走になる、俺の継母は家事をほとんどしないからだ。

八年前に実母を病気で亡くした親父は当時親父の会社に勤めていた継母と二年後に再婚したのだが今では親父に隠れてホスト遊びにハマって家事を放棄してる救いようのない女だ。

ちなみに親父はこの事を知ってるが親父自身だって継母に内緒で女遊びしてるから何も言わない、お似合いの夫婦である。

俺のこんな家庭事情は幼なじみのいずみしか知らない、青山達に言わないのは俺の個人的な事に青山達を巻き込みたくないからだ、日頃から俺がろくな物を食べてない事を知ったいずみは悲しそうな表情で言った

「真兄、夜はウチに食べに来なよ、ちゃんと手料理食べないと体壊しちゃうよ、ねっ、そうしょ。」

死んだ俺の実母と親しかったいずみの誘いを受けて俺がいずみの好意に甘える様になったのは今から二年前の事だった・・・。

そして現在、もうすぐいずみの家に着く、いずみの母である美鈴さんの料理は本当に旨い、娘のいずみの料理の腕前は残念なのだが

「あれっ、真兄、あの人って……。」

急に声を出し

たいずみの指差す先には産婦人科の病院から女性が一人で出てきた所だった、その女性は青山の元カノ、前田理子だ、彼女は俺たちに気付くとまるで逃げ出す様に走り出していった

「……ねえ、真兄、もしかしてあの人ってさ、妊娠……。」

「俺たちには関係ないさ、青たちにも言う必要も無い、それより早く行こうぜ、日が暮れるぞ。」

俺の

言葉にいずみは頷く、前田が青山と付き合ってた頃は俺やいずみも前田とは友人関係だったがあの子は青山の気持ちに土足で踏みについた、今では前田が工藤の子供を産もうが墮るそうが知った事じゃない。

今の青山は前田なんかより魅力的な女性達に囲まれてるしな、黒髪ロングの正統派美少女、高野奈津美さん、Ｆカップ眼鏡っ娘の四森彩花さん、クーデレなポニーテール少女の秋野夕奈ちゃん、そして希少価値の高いお兄ちゃん大好きっ娘、青山里奈ちゃんとエロゲ真っ青のハーレムを持つ男だぞ、ビッチ女に捨てられたところで痛くも痒くもないだろ。

俺にはいずみ一

人でいい、いずみを幸せにする事が俺の生きがいだ、恥ずかしくて本人には言えないがな

「ただいま。」

「お邪魔します。」

「いらっしやい、真司君、もうすぐ

できるから待っててね。」

いずみの母、美鈴さんが笑顔で迎えてくれる、いずみ同様かなりの美人だ。いずみの家に着いて一時間後、唐揚げや野菜炒め等の美味しい手作り料理を頂いた後、リビングでまったりしていたが

「美鈴さん、やっぱり俺も手伝いますよ。」

いつも

夕飯をご馳走になつてゐるから後片付けくらいは手伝おうとするが美鈴さんの返事は決まつて

いのよ、男の子が細かい事気にしないで、私が真司君に手料理を食べさせてあげたいだけなの。」

とま

あ、まさに尽くす女つて感じた、そしていずみも俺に寄り添いこう言う

「私もママに料理を習うから、近いうちに私の手料理を真兄に食べてもらうからね。」

「そうね、その時は真司君に審査してもらつたよ、私といずみのどっちの料理が旨いのかをね。」

実は美鈴さんは未亡人なのだ、

もう四十路手前の美熟女が十六歳の娘と張り合う事じゃないと思うがこういう母娘なのだ

「今日も本当に美味しかったです、お邪魔しました。」

いずみの家を出る時も母

娘で先を争う様に見送ってくれる

「うん、真兄、また明日も一緒に学校行こうね」

？ 朝待つてゐるから。」

真司君、また来てね、真司君の為にちゃんと美味しい料理作るから？

「この美人母娘は反則だろ、

二人して俺の手を握ってくるし、彼女のいずみは当然だが母親の美鈴さんまでとはな、いずみもそんな美鈴さんの行為に何も言わない、どうなるんだ俺の恋路は。」

第二十八話（後書き）

次回も真司視点でいこうと思っています。

第二十九話（前書き）

今回も真司視点です。

第二十九話

あと二十分、あと二十分で昼飯の時間になる、今日の昼飯は朝の登校時にいずみから渡された美鈴さんの手作り弁当だ、いつも学食のパンとかだったからこれは素直に嬉しい。

いつも里奈ちゃんが作る青山の弁当を羨ましく思ったものだが今日は俺も女性の手作り弁当だ、少々年上の女性だけだな

キーンコーン

午前の授業を終える鐘が鳴り響く、いつものメンバーが集まり昼食を食べようとすると青山が俺の持つ弁当を見てニヤリと言う
「おっ、友、そりやいずみちゃんの手作り弁当か、いい奥さんだな。」

「違うな、これはいずみのお母さんが作ってくれたんだよ。」
「へー、いず

みのお母さんが作ったんだ、でもなんでいずみじゃないの。」

当然の疑問を彩花が聞いてくる、別に

隠す事じゃないし正直に話そう

「いずみの料理はちよつと残念なレベルでな、今はお母さんに習ってるんだよ、いつかは俺に美味しい料理を食べさせてあげたいと言つてな、俺は絶対にいずみが美味しい料理を作るって信じてるよ。」
・・・かなり照れる

な、でも高野さんは聖母のような笑みを浮かべ俺に言った

「そうだよ、好きな人の為に努力するいずみさんならきつと作れるわ、そんないずみさんの事を誰よりも分かってる真司君がそう信じてるんだもの。」

いい娘だよ、本当に、さて、ご開帳といきますか、俺は弁当箱のフタを開けて
「あー、

俺ってば用事があったの忘れてたっス、先に食べてていいからっ、グッドラック。」
怪訝そうな顔

をしてる青山、高野さん、彩花を尻目に俺は弁当箱を持ち一目散に教室を飛び出した。

校舎裏に駆け込み一息つく、美鈴さんの弁当を改めて見るとそばろで作った目立つハートマークがあった、あんな話の後でこんな弁当は見せられないよな、しかし美鈴さん、これは冗談が過ぎるよ、一度言っておいた方がいいかな、とにかくここで食べるか、味は旨い弁当を食べてると少し離れた所から聞き覚えのある声の男女の話し声が聞こえてきた

『いいか、理子、今赤ちゃんとか産んでも皆が不幸になるだけだ、堕ろすしかないんだよ。』

『嫌あ、恭介の赤ちゃん産みた
いよ、堕ろせなんて酷い事言わないでえ。』

工藤と前田だった、やはり前田は工藤の子を妊娠したみた
いだな、馬鹿な奴らだ、まあ、俺達には一切関係ないけどな、どうするつもりだろ

『とにかく
絶対駄目だからな、どうしても産みたいなら俺と別れる。』

あら、最低ですな、泣きじゃくる前田
を無視して工藤は立ち去って行った。まあ、可哀想とい

えば可哀想だけこの女は自業自得の色が強いんだよな、いい社会
勉強になっただろ、うん、今日も空は蒼かった

『友・・・、君。』

げっ、見つかってしまった、こういうの苦手だよな、無視し
てこの場を去るか、俺には関係ないし

『・・・見てたんだ、いい気味でしょう、笑っていいの
よ。』
開き直ったのか、

笑ってやってもいいが俺はそこまで鬼じゃない

『これも恋愛だよ、いい人生勉強になっ
たと思うんだな、赤ん坊の事はちゃんと親と話し合った方がいいよ。』
それだけ言っ

立ち去ろうとしたがまた前田は話しかけてくる

『青ちゃんに・・・、話すの。』

「話さねーよ、もう青はアンタとは関係ないしな、今の青は毎日がすっげえ楽しそうだし、きっとアンタと付き合ってた頃よりもな。」

「そっか……。」

あのハーレム男に言う必要はないし知る必要もない、今のアイツの日常にこの女はもう邪魔なだけだ

「今の青ちゃんの目には私なんか入らないんだね……。」
それ

だけ言い残して前田は立ち去った、もう遅いんだよと思いつつ俺は残りの弁当を食べていった……。

第二十九話（後書き）

見てくれてありがとうございます、また次回。

第三十話（前書き）

三十話まできちやいました、まだ続く予定です。

第三十話

困った事になった、里奈が風邪をひいてしまい寝込んだのだ、熱も38度を超えてるし今日は学校を休ませた、したがって今日の昼飯は学食である。

学校に着くと校舎の廊下で工藤と理子にすれ違っ、この前、工藤が理子以外の女とデートらしき事をしているのを見たが今の二人を見る限り理子はその事を知らなさそうだな。

あつという間に午前中の授業が終わり昼休み、いつもの4人、友成、奈津美さん、彩花と俺が集まる

くん、今日は弁当じゃないんだ。」

奈津美さんが俺の持つてる学食のパンを見て聞いてくる

「ああ、里奈が風邪ひ

いちまってな、今も家で寝かせてるんだよ。」

「大丈夫なの、病院とかに行かなくていいの。」

彩花が心配そうな表情で言ってくれ

る、辛い過去を乗り越えすっかり俺達の友達になった彩花、もちろん里奈達とも友達だ

「ま

あ、あと1、2日寝かせて様子見るよ、それで治らないなら連れてくから、でも里奈は病院行くの嫌がるんだよねー。」

「病院が嫌なのは入院とかになったら愛するお兄ちゃんと離れちゃうからじゃないのか、羨ましいねえ、お兄ちゃん

俺と同じ学食

のパンを持つ友成にフェニックスの必殺技、鳳 天翔をかます、何故か星空をバックに吹き飛ぶ友成、そんないつもの昼の日常だった。

そして下校時間、やはり奈津美さんと二人で帰る、友成はデートだし彩花は素早く帰っていった、奈津美さんはよく俺と帰るからかも男子から交際を申し込まれる事もなくなり今じゃ俺と友成、蒼太以外の学校の男子とは必要以外では話もしない

『　　そういえば奈津美さん、あの幼なじみ君はあれからどうなの、孝介さんだったかな、まあだしつこく付きまとうの。』

うつん、もう違う女性に熱がいつてるの、貴志くんがいるからもう私には何も言ってこないよ、貴志くんのお陰ね　　』

そりゃよかった、俺の金髪も役には立ってたんだな　　『　　それより貴志くん、

里奈さんは寝込んでるのよね、夕食はどうするの、よかったら私が作ってあげよっか。』

『　　えっ、いいの、よかった、俺って簡単な料理しかできないからさっ、ホント助かるよ。』

『　　いいのよ、貴志くんは私を助けてくれたんだもの、今度は私が貴志くんを、里奈さんを助けてあげただけだよ。』

何の迷いもなく俺達兄妹を助けたいと言う奈津美さん、今の世にこんな女子高生が存在するとは、惚れてまうじやないかー！。

スーパーで食材を買

って家に戻る、すると我が家の前に誰か女子高生が居る、あれは・

・　　『　　あつ、貴志・

・、って、なんで奈津美がいるのかしら！』

俺の家の前に居たのは彩花だった、手には買い

物袋を持っていた　　』

どうしたんだよ、彩花、なんでウチに居るんだ、それにその袋は？

『　　なっ、里奈が心配だからお

粥でも作りに来たのよ、そのついでに貴志の夕食を・・・、作りに・

・・、そう、ついでよっ、貴志にはついでで作りに来たただだからねっ！』　　えらく顔の赤い彩花、

この娘って実はツンデレ属性を持っていたのか

『　　そうだったの、奇遇ね、私も貴志くん夕食を作りに来たのよ。』　　なんか

火花をちらしあってる様な二人、そんな二人をなだめる様に言った

『とにかく入ろうよ、なつ、』

三人で協力しあって作ろう、うん、それしよう。』

洪々納得した二人を連れて家に入った、三人で買ってきた食材を準備してたら家のインターホンが鳴る、玄関に行きドアを開けたらこれまた買い物袋を持った夕奈ちゃんが届た

『おつ、どう

したんだよ、夕奈ちゃん。』

・・・里奈が・・・、風邪で寝込んでるから・・・、お兄さんに・・・、夕食を・・・、作りに来ました・・・。』

こうして我が家の夕食を三人の美少女が作る事になるのだった。

第三十話（後書き）

この話はまだ続きます。

第三十一話（前書き）

前回の話の続きです。

第三十一話

現在、我が家の台所には美少女二人がハンバーグの下準備をしていた、奈津美さんと夕奈ちゃんだ、彩花はというと野菜を手際よく小刻みにしてて。

結局俺は米だけ準備して後は女子三人に夕飯の支度を任して今は里奈の看病をする為に里奈の部屋に居る

・、すぐに良くなってまたお兄ちゃんの食事作るからね。」

「いいから、今は治す事だけ考えろ、ほらっ、暖かくして寝ときな。」

「・・・里奈以外の人が、お兄ちゃんの食事作ってるんだね・・・。」

「今だけだよ、それに三人共善意で作ってくれてるんだ、そんな言い方するなよ。」

「うん・・・、それじゃ里奈寝るから・・・。」

布

団をキッチンとかぶらせ氷枕を里奈の頭に置いて俺は里奈の部屋を出た。それにしても奈津美さんも彩花も夕奈ちゃんもよくしてくれてるよ、これは何かお返しを考えねばな、そんな事を考え台所のある一階に戻ると

「あつ、貴志くん、里奈さんは大丈夫だったの、早く良くなるといいね。」

ハンバーグの下準備を

終えた奈津美さんが聞いてきた、キッチンでは彩花が野菜炒めを作っている、炒めた野菜のいい匂いがする

「ああ、今寝かしつけたトコ、熱も昨日よりは下がったし、多分もうすぐ良くなるよ。」

「・・・よかった・・・、お兄さんの・・・、お陰です・・・。」

夕奈ちゃんはみそ汁

担当なのかな、味噌の準備をしてるけど、まあ、きつと得意なんだろう

「貴志く、お皿

出しといて、あと飲み物も準備しときなさいよね、ほらっ、チャチャッと動くっ。』

彩花が俺を急かしてくる、俺は飲み物と皿を急いで準備した。

『いただきます。』

目の前のテーブルには奈津美さんの手作りハンバーグ、彩花の作った野菜炒め、夕奈ちゃんが作ったみそ汁と美味そうないのする三品が揃ってた。

あと彩花は言ったとおりに里

奈にお粥も作っていた

『おっ、

美味しい、ハンバーグも野菜炒めもみそ汁も皆おいしいよ、三人共料理上手いんだね。』

言葉の通

りだった、三つの料理が甲乙つけがたく美味しい、里奈の料理にひけをとらないくらいに

『よ

かった、貴志くん口に合わなかったらどうしようかと思ったよ、ありがと

『私が作っ

た料理が不味いワケないじゃない、でもありがとね、おいしいって言ってくれて。』

『・・・あ

りがとう・・・、お兄さん・・・。』

三人に礼を言われる、礼を言いたいのはこっちだよ、ご飯を三杯おかわりして彼女達の作った料理すべてを平らげた、そして片付けもまた三人に任して俺は里奈にお粥と少量のみそ汁、一口サイズのハンバーグ数切れを持って行く

『里奈、夕食持ってきたぞ、食べるか。』

『・・・うん、ありがと、お兄ちゃん。』

お粥をスプーンに入れフーフー

して里奈に食べさす

『どうだ、彩

花の作ったお粥だけど、みそ汁は夕奈ちゃん、ハンバーグは奈津美さんが作ったんだ、少しでもお前が食べて早く元気になってほしいんだとさ、いい友達じゃねーか。』

『・・・美味しいよ、里奈、早く元気になるから、・・・夕奈ちゃんや奈津美先輩、彩花先輩とお兄ちゃんの為だね。』

里奈は少しずつ食べていった、もう無く

なるトコで里奈に言う

「それだけ食えたら大丈夫かもな、それじゃ薬飲んでもう一回寝な、俺は三人を送ってくるから。」

「うん・・・、三人にお礼言つといてね。」

返事をして一階に降りる、三人はもう片付けを終えて帰る準備をしていた

日は本当にありがとう、里奈も美味しかったてさ、帰るんだよね、家まで送るよ。」

夕奈ちゃんはすぐに家に着く、別れ際にまた俺に料理を作つてあげたいという台詞を言つて家に入った。

近いのは奈津美さん、やはり奈津美さんも家に入る直前に

ね、貴志くんが望むなら私はいつでも作つてあげるからさ

何か彩花から不穏なオーラが漂つてる様な気がするが多分気のせいだろ。そして残る一人、彩花と肩を並べて歩く、なんか落ち着かないな

ねえ、貴志、今日の私の料理つてどうだった、一番美味しかった。」

なり彩花が聞いてくる、誰が一番とかないんだけどな、俺は彩花に「皆同じに美味しかったよ、誰が一番上手いとかない、どしたんだ急に。」

そう言つたら彩花は真剣な顔になり

「・・・私は、貴志の一番になりたい。」

それ以外になんかあるかよ・・・

「負けないんだからね、奈津美にも、夕奈にも、・・・里奈にだって。」

にか彩花の家の前にいたようだ、彩花は顔を赤くして走りながら家に入る、だから何の事だよ、それに里奈つて、なんで里奈が出てく

るんだ、俺には分からなかった。

第三十一話（後書き）

次回は蒼太と紗恵の話です。

第三十二話（前書き）

蒼太視点です。

第三十二話

今日もいつもの如く学校へと通う、でも一人ではなくクラスメイトの鈴木紗恵さんと共に、わざわざ彼女の家を迎えに行つてまでだ、それについて彼女いわく

一緒に答えを探すつて言つたでしょ、今の四森くんには私が必要なの。」

聞いてから償う以外の答えを一緒に探すと言つて聞かないのだ、確かに俺の過去を話したのは彼女が初めてだ、彼女の目を見てたら何故か聞いてもらいたくなつた、人に言いたくない過去のはずなのに俺と共に里奈さんや夕奈さんの為にいじめに立ち向かつたこのツインテール少女には不思議な眼力があつたのだ

「四森くん、昨日の数学テストどうだった？ 私
つたら途中の引き算間違えちゃつてさ。」

朝から陽気な女性だな、こんな話をしながら俺達二人は学校へと向かう。 学校に着き

自分達の教室に近づくと里奈さんと夕奈さんに会う、里奈さんが元気に挨拶してくる

「よう、蒼太くん、鈴木さん。」

夕奈さんは対照的に控えめな挨拶をしてきた、あのいじめを乗り越えた二人は毎日が楽しそうだった、クラスの人達とも仲良くやつてるし、あの一件が悪い夢だったかの様だ

「あつ、蒼太くん、彩花先輩つて料理上手なんだね、この前ウチに作りに来てくれたんだよ。」

そういえば姉さんが青山先輩に送られて帰つてきた事があつた、青山先輩の家に行つてたのか、姉さんも結構積極的になつたな、確かに姉さんの料理は上手い、ウチは今は両親が共働きで夕食は姉さんが作っている、元々料理好きなのだ。

そして放課後、鈴木さんが近づいてきて

『 四森くん、帰ろ。』

周りの目を全く気にせず彼女は言う、もはやクラスでは公認の仲となっている俺達、友人の冷やかしの声を背に俺達は教室を出た。 学校を出て二人で歩く、いつも彼女が他愛のない事を話し俺は適当な相槌を打つ、俺達の下校時間は大体そんな感じだが今日は里奈さん達の事を話してきた

『 青山さんも秋野さんも楽しそうだったね、クラスメートとも仲良くやってるみたいだし、もう二度とあんな事は起きないよ。』
『 ああ、二人共いい娘だよ、きつと楽しい高校生活を送れるさ。』

今のあの二人を見てたらそう思えるよな、俺は穏やかな表情で言う
『 』

ふふっ、なんか二人のお兄さんみたいだよ。』

何言ってるんだ、里奈さんには青山先輩という立派な兄がいる、夕奈さんも青山先輩には随分となついている様だし、俺は青山先輩には恩がある、姉さんの辛い過去をあの人は優しく受けとめてくれたんだからな
『 友達がいじめとかあつてたら心配するのは当たり前じゃないか、鈴木さんだって里奈さん達の為に一生懸命だったろ、それと同じだよ。』

俺が真面目な顔で言う
『 鈴木さんは小悪魔みたいな笑みを浮かべ』

『 』
『 ふっふん、だいぶ答えが見えてきたんじゃないの、後もう少しね。』
『 そう言う鈴木さん』

を見てふと思つたが彼女は俺が答えを見つけたらどうすんだろ、俺から離れるのかな、それもちょっと寂しいな。

帰り道の途中、人のいない公園で犬が鳴いていた、見たらロープで木に縛り付けられてた、俺は急いでそこに向かいロープをほどこうとしたらウチの男子生徒三人が出てきた

『 おい、なに人のおもちやに手えだそうとしてんだよ、痛い目に会いたくなかつたらどっか行け。』

その三人の内の一人がなんと爆竹らし

き物を犬に投げつけた

『なんて事するのよ！ あんた達！！』

俺と鈴木さんがそいつらに掴みかかろうとするがいきなり鈴木さんが男子生徒の一人に取り押さえられた

『なんだよ、女の前でいいカッコしたかったのか、分かるよな、抵抗したらどうなるかくらい。』

『四森くん、私はいいいからこの子を助けてあげてよお！』

そんな訳にはいかないだろ、なんとか鈴木さんだけでも無傷で逃がさないと、俺は鈴木さんを押さえてた男に素早くタックルをします、そいつが怯んで一瞬の隙ができて鈴木さんが自由になる、三人に立ち向かいながら鈴木さんに叫ぶ

『鈴木さん！ 逃げて誰か呼んでくるんだっ、早く行つて！』

走り出した、彼女が逃げ切るまでこの三人を足止めしないと、くそ、1対1なら負けないのに、俺は三人と何とか戦う

『恭介、こいつ結果結構強いぞ。』

『フン、ム力つくなそいつ、俺の嫌いな金髪ヤローになんか似てるんだよ、無駄に偽善ぶるトコなんかが特にな。』

恭介と呼ばれた背の高いその男子生徒はポケットから白い粉袋を取り出し俺の顔に投げつけた

『なっ、目がっ。』

目に粉が入り何も見えなくなる、それから間もなく三人から殴られる、数分くらい殴られ続け意識が朦朧としてきたトコで助けに来たっぽい人の声がした、多分鈴木さんが呼んだ人だろう、俺は安心して意識を無くした・・・。

第三十二話（前書き）

貴志視点で進みます。

第三十三話

蒼太が何者かとケンカしてひどいケガをしたと彩花から聞いた、心配になった俺達は四森家に見舞いに行く事にしたのだ

「大丈夫かな、蒼太くん、どこ
の誰なんだろうね、蒼太くんにヒドい事して、許せないんだから！」

里奈が珍しく怒りを露わにしている、友成も同様に怒ってた

「どこの誰か知らねーが俺達の後輩に手え出した事をたっぷり後悔させてやんなきゃな！」

「おいおい、血の氣が多いな、とにかく事情も分からないからまずは蒼太に話を聞こう、そう思ってた俺達は四森家に着いた。」

四森家の玄関で彩花が俺達を出迎えてくれた

「みんな、本当に嬉しいよお、

蒼太を心配してくれる人がこんなに居るなんてさあ、アリガトね。」

彩花は泣きそうだった、彼女の言う

とおり人数が多い、俺、友成、里奈だけじゃなく奈津美さん、夕奈ちゃん、いずみちゃんも居る、皆、話を聞いて蒼太が心配になったのだ

「彩花さん、蒼太

くんの様子はどうなの。」

奈津美

さんが聞く、彩花の話では蒼太は腹の立つ奴がいたからケンカを売って逆にやられたとか、蒼太は誰かと一緒にいたそうでその人が病気に運んでくれたらしい、病院で治療を受け今は自分の部屋のベッドで休んでる蒼太に会えるかと聞いたみたらオーケーだったので蒼太の部屋に行ってみる事にした。

・・・蒼太のケガは想像以上だった、顔の至る所が腫れており目には包帯が巻かれていた、目に粉を入れられ暫くは取れないと彩花は言ってた、布団で横になってる蒼太に話しかける

「蒼

太、大丈夫か？ 何があっただよ、お前が自分から人にケンカ売

る訳ないもんな。』

ただのケンカですから、それより皆に心配をさせてしまつてすみません、本当に大丈夫ですから。』

蒼太はそう言うが絶対に何かあるな、夕奈ちゃんもそう思ったのか静かに語る

ん・・・、話して・・・、このままじゃ・・・、納得できないよ・・・。

蒼太は何も言わないがそんな時四森家のインターホンが鳴る、誰か来たのだ。

程なく彩花に連れられて背の低いツインテール少女が俺達の居る部屋に来た、その少女を見て里奈が

『鈴木さん、そっか、やっぱり蒼太くんと一緒にいた人つて鈴木さんだったのね。』

その鈴木さんという娘は俺達の人数の多さに戸惑つたのか緊張気味に話す

『あの・・・、あなた方は四森くんとは

どんな関係なんですか。』

『ああ、初めまして、俺は青山貴志、蒼太とは友達なんだ。』

それから皆それぞれ、鈴木

さんに自己紹介していった、今知つたが里奈と夕奈ちゃんは鈴木さんとは友達だそうだ、自己紹介が終わつたら奈津美さんが鈴木さんに話しかける

え、鈴木さん、蒼太くんにあんなひどい事した人を見てないかしら？ 私たちには蒼太くんが自分から他人に暴力を振るう子とは思

えないの。』

奈津美さんの言葉

に鈴木さんは驚いて俺達を見る、蒼太はどこか観念した顔をしてるがやっぱり・・・

『どういう事ですか！！ 四森くんはいじめられてた犬を助けようとしたんです、誰がそんな事・・・、ねえ、四森くん、なんでこんな話になつ

てるのよ。』

鈴木さんに詰め寄ら

れた蒼太はフウっとため息を吐いて話し出す

『やっぱりごまかし切れませんね、本当の

事を言えば皆さんに迷惑をかけてしまうと思って・・・、すいませんでした。」

それから蒼太が話した内容は鈴木さんが言つてた話と同じだった、すると今まで黙つてたいずみちゃんが蒼太に言う

「蒼太くん、私たちに迷惑かけたくない気持ちは分かるけど・・・、もっと私たちに甘えてほしいな、キミには頼りになる兄さん、姉さんがたくさんいるんだから、ねっ。」

そうだな、弟分をこんなにされてこのままでいい訳ない、犯人を見つけ蒼太に詫びを入れさせなきゃな、元々動物を虐待してたそいつ等が悪いんだから

「よしっ、友、そいつ等を捜そう、自分達のやった事を反省させるんだ。」

おう、青、待つてろよ蒼太、必ずお前の仇はとつてやるからな。」

気合いの入る俺達に鈴木さん

が言ってくる

「私にも手伝わせて下さい、そいつ等の顔は私しか知らないんですから、同じ学校の人だったからくまなく捜せばきっと見つかりますよ。」

俺達と同じ学校の奴だったのかよ、じゃあ意外と早く見つかるかもな、こうして俺と友成、鈴木さんは蒼太を傷つけた奴を捜す事になった・・・。

第三十二話（後書き）

まだ続きます・・・。

第三十四話（前書き）

キャラが多いと使い分けが難しいです。

第三十四話

蒼太を傷つけた奴に詫びをいれさせる為に俺は友成、鈴木さん、彩花と共にそいつの搜索を始めた、彩花もどうしても一緒に捜すと言って聞かなかったのだ、実は里奈も一緒に捜したいと言ったのだが

「ましてあそこまで殴るような奴だぞ、危ないから大人しくしときなさい！」

と俺の説得を渋々聞き入れてくれた、まあ友達思いなのはいい事だがな。

今は昼休み、俺達のクラスではいつもの4人

で昼食をとっていた

「それでどうなの、誰か見当はついたの？」

奈津美さんの問いに俺は

「まだだよ、鈴木さんがそいつらの顔を見てるから放課後になったら一緒に捜してみるけどな。」

鈴木さんの話ではそいつらは三人いたそうだが、誰か一人でも見つければ後は芋づる式で見つかるんだけどな、すると友成が話す

「なあ、青、思ったんだけど

そいつらの外見的特徴を紗恵ちゃんに聞いてみないか、集中して捜した方が早く見つかるぞ。」

確

かにそうだが、むやみに捜すよりよっぽど効率がいい、友成も意外と冴えてるトコがあるんだよな

「じゃあ私、蒼太に聞いてみる、何か分かるかもしれないしさ。」

彩花が携帯を開いて蒼太と話している、すると話の途中でいきなり彩花が驚きの声をあげた

「蒼太・・・、それ

で本当なの、そいつ、本当にそう言ったのね。」

何だろう、何か嫌な予感がするんだけど、彩花が携帯を閉じて俺達に言う

「貴

志、真司、放課後に鈴木さんを連れて工藤恭介の所に行こう。」

「えっ、どういう事なんだ彩花、

何で工藤が出て来るんだ。」

友成が驚く、当然俺もだ、そしたら友人と弁当を食べていた理子が俺達に近づき話しかけてきた

「何よアンタ達、恭介に何か用でもあるの。」

「えっ、お前、もしかしてまだ工藤と・・・

。」「理子を見て友成がまた驚いてる、まだってどういう事だ、しかしそんな事などお構いなしな彩花が燃えるような目つきで理子に言う

「アンタのご自慢の彼氏が私の弟に三人がかりで暴力をふるったのよ、何の罪もない弟をね！！」
「そんな彩花に理子は怯まずに強く言い返す

「何言ってるのよ、恭介がなんでそんな事するのよ、いい加減な事で恭介を悪く言わないで！！」

「だったらアンタも一緒に来なさいよ、どうせ放課後に会うんでしょ、そこで本当の事をハッキリさせようじゃないの。」
「彩花の顔が怖く

見えるのは気のせいだろう、理子も承諾して俺達は鈴木さんと共に工藤と会う事にした。
放課後とな

り鈴木さんと合流した、理子に連れられ待ち合わせ場所の体育館裏に行く、そこで待つこと十分、工藤が来た

「あー、この男ですっ、間違いありません。」

工藤を見て鈴木さんは断言した、その工藤は俺達を見て冷笑を浮かべ

「理子、なんだこいつらは、あつ、その女はこの前僕の教育を邪魔した女だな、青山君達もどうしてここにいるんだ？」

「悪い事をしたとは全く思ってたさそうな工藤に理子は困惑した感じで

「ねえ、恭介、暴力振るってたって本当なの、そんな事

しないよね。』

恋人を信じてい

る理子に工藤は平然と言った

暴力とは人聞きが悪いな、僕に吠えてきた駄犬と無駄に偽善ぶる一年生に教育的指導をしたただだよ、クツクツクツ。』

何言つてやがるんだ、罪悪感の力ケラも

ない工藤に鈴木さんと彩花が吠える

『・・・犬を木に縛りつけて爆竹投げつけたり、私を人質にして三人で四森くんに暴力振るって何が教育よっ！ 馬鹿じゃないのアンタ！！』

『許せない！ アンタが殴ったのは私の弟なの！ 蒼太の痛みと苦しみを倍返ししてやりたいわよ！！』

激昂する彼女達を抑え俺は工藤に凄む

『蒼太は俺達の弟分だ、そんなふざけた事であんなにしゃがんで、蒼太に詫びるよ。』

友成も意外と冷静に言う

『後もう二人いたんだよな、そいつらも連れてこいよ、ちゃんと三人で謝ってもらおうか。』

しかし工藤はまたも俺達の神経を逆なです

様な言い方をする

『フン、やはりあの一年坊も青山君の仲間だったのか、それなら絶対に謝罪なんかしないよ、つまらない話はもう終わりかい、それなら今から用事があるし帰っていいかな。』

・・・この男はもうダメだな、何を言おうが反省とかしないだろう、彩花達は納得しないだろうが俺は工藤を帰らせたけど友成は

『他の二人の事を教

える、せめてそいつらだけでも謝ってもらうからな。』

工藤はあっさりその二人の事を教えてその場から去った、事実を知り呆然とする理子をそのままにして

『どう、アンタの彼氏がどんな奴か分かった、まったく、どうしようもないクズ男よね！』

勝ち誇る様に彩花は理子に告げる、しか

し理子は意外な事を言う

「・・・私が恭介の代わりに謝るわ、その子に会わせてくれな
いかしら。」 どうしようか、友成

や彩花、鈴木さんも困惑してる、あんまりこの女と関わりたくない
んだがな。

第三十四話（後書き）

まだ終わりません、この話は次回も続きます。

第三十五話（前書き）

見てくれてる人達に感謝です。

第三十五話

俺達は今、四森家の前にいる、俺と里奈、友成、鈴木さんと工藤の代わりに蒼太に詫びたいと言う理子、そして工藤と共に蒼太を殴った二人がいた。 この

二人は清田と杉本という名で工藤とは中学からの友人らしい、しかし工藤とは違って

『おっ、俺らも相当酷い事をしたと思ってたんだよ、あの一年に詫びさせてくれるのか。』

俺達が蒼太の事を話すところ言ってきた、どうやら工藤ほどの悪党ではない様だ、まだ救いがあるな。 それにしても理

子はどうして工藤の代わりに謝りたいとか言ってきたのだろ、確かに理子は工藤の彼女だが正直理子自身には関係のない事だ、工藤があんな奴だったから罪悪感でも生まれたのかもしれない

『アンタに謝ってもらってもしょうがないけど・・・、貴志や蒼太がそれでいいって言っからね、謝ったらとつとと帰ってよ。』 玄関で俺達

を出迎えた彩花は理子を見るなり吐き捨てる様に言う、里奈もまた憎悪のこもった目で理子を見てる、その理子は何も喋らず無表情なままだ、まあ、俺からしたら謝ってくればそれでいいが

『四森くんは多分アンタたちを許すでしょうけど・・・、でも私は絶対に許さないから！』

理子と清田、杉本に鈴木さんは 今度俺らの
言い放つ、友成も

周りの人達に同じ様な事しやがったらマジで腕の一本くらい覚悟しとけよ。』 本当にやりかね

ない友成をなだめ、俺達は蒼太のいる部屋に入った

『蒼太、ちょっといいかな、この人達が蒼太に謝りたいんだってさ。』

布団で横になってた蒼太に彩花は優しく話しかける、部屋に入つた清田と杉本は目に包帯をまいた蒼太を見るなり

「悪かったつ、あんたには本当に酷い事をした、許してくれ。」

「もう二度とこんな事はしない、これからは真面目になつて大人しく生きていくからさつ。」

二人は蒼太に謝る、多分この二人はもうこんな事はしないだろ、そして理子は目に涙を浮かべ

「……ごめんなさい、グスツ、なんの罪もない君をこんな目に……、お願い、うつつ、恭介を許してあげて……。」

泣きながら謝る理子に彩花と

里奈は

「白々し

いわね、とにかく謝つたんだから早く帰つてよ。」

「泣いて謝つても何の罪もない蒼太くんは暴力振るつたのは事実なんです、もう二度と蒼太くんや私達の前に出てこないでください！」

特

に里奈の台詞に理子はショックを受けた様だ、しかし蒼太は穏やかに言つ

「姉さん、里奈さん、言

い過ぎだよ、俺はもう気にしてませんから、謝ってくれたんだしもうこの件は終わりにしましょうよ。」

「やっぱり蒼太はそー言うと思つたよ、まっ、それがお前なんだけどな。」

友成はやれやれとい

つた感じで言つ、理子達は蒼太に深く礼を言い俺達にも謝罪をしてきた、それから程なく謝罪に来た三人は帰り、残つた俺達も少し雑談して四森家を後にする、帰り際に蒼太が俺達に

「今回の事じゃ皆さんにはなんてお礼を言つていいか……、本当にありがとうございます。」

相変わらず礼儀正しい奴っちゃん、俺

は笑つて蒼太に言葉を返す

「蒼太つ、この前いずみちゃんも言つただろ、お前は俺達の

弟分だ、弟をそんなにされて黙ってる兄や姉はいないよ、もうちょい俺らを頼ってくれよ。」

いつ、先輩。」

「アリガト、

貴志。」

四森姉弟のお礼を聞き四森

家を出る、そんな時鈴木さんが俺に

「私、正直貴方を誤解してました、そんな頭してるし……、でも四森くんの事、大事な弟だと思ってるんですね、青山さんが自慢する訳です。」

「うん、里奈のかっこいいお兄ちゃんだもん。」

「またの名を超シスコン人3の妹スキー、青山貴志君だけだな。」

友成

に岩山両？波をくらし俺と里奈は友成と鈴木さんと別れた、家への帰り道に里奈が心配そうな声で

「ねえ、お兄ちゃん、もしかしてあの前田先輩とヨリを戻したいと思うてない、里奈は嫌だよ、そんなの……。」

「ありえねー事言うなよ、俺はもう二度と理子や工藤とは関わりあいたくないんだから。」

何故かおかしな事を聞いてきた里奈にそう言つと笑顔で腕を組んできた

「うん　だってお兄ちゃんにはもつとお似合いの人がいるんだから、……身近にね。」

俺に顔を見せずに里奈は言う、誰だろ、奈津美さん、彩花、夕奈ちゃん、それともまさか……、俺は何も言えずただ、里奈と腕を組んで帰った……。

第三十五話（後書き）

次回から新展開です。

第三十六話（前書き）

いつの間にかPVが五万を越えてました、見てくれたすべての人に感謝です、ありがとうございます。

第三十六話

あれから2ヶ月が過ぎもう7月になった、俺の周りも大した変化もなく楽しい毎日を送っている

「なあ、みんな、夏休みって何か予定とか決まってるかな？」
昼食時に友成が

聞いていた、俺達が特にないと言うと

「俺の親父の別荘が隣町にあるんだ、夏休みの8月1日から三日間は誰も居なくなつて自由に遊べんだよ、海も近いし皆で来ないか、夜はバーベキューとかしたりさ、せつかく高校最後の夏休みなんだぜ。」

奈津美さんや彩花は二つ返事で承諾した、俺は友成に聞いてみる

「高校生活が最後じゃない里奈や夕奈ちゃんも呼んでいいのか？」
「当たり前じゃねーか、俺だって二年の

いずみを連れて行くんだぞ、そうだ、彩花も蒼太を連れてきなよ、よかつたら紗恵ちゃんも誘つてさ。」

友成は人数が多い方がいいと蒼太や鈴木さんも誘う、それじゃあ合計9人になるのか、男三人の女六人か、ちよつとヤバいかもしれないがせっかく友成がここまで誘ってくれてるんだ、俺もその話に乗る事にした
「よ

しつ、友、俺も行くよ、なんだか楽しくなりそうじゃねーか。」

こうして三日間だけが俺は友成の別荘にお邪魔する事になった、そしてその日の放課後、下校する俺の両隣にはやっぱり奈津美さんと彩花が居た

「ねえ、貴志くんはどんな水着が好みなのかなあ、ご要望があるならなんでも言つてね。」

いきなりの奈津美さんの不意打ちに俺の脳内はピンク色に染まる、そんな俺を現実に戻す彩花の声

『貴志っ、なにイヤらしい事考
えてんのよ、そんなに奈津美や私のビキニが見たいの！』

・・・誰もビキニが見たいな
と言ってないが確かにFカップ彩花のビキニと黒髪ロングの奈津美
さんのビキニか、うん、悪くないじゃないか、しかし俺の口から出
た言葉は
『二人の水

着だったら何でもいいよ、自分が着たいと思ったのを着てくればい
いからさ、二人共スタイルいいんだからどんな水着でも似合うだろ。
『
めそっぽを向く、その割に二人の体の位置はより俺に近づいている、
ちよつと歩きにくいがまあいいだろう。

二人と別れ自分の家に帰り着く、もはやお馴染みの里奈と夕奈
ちゃんの出迎え
『お帰りなさ

ーい、お兄ちゃん』

『・・・お兄さん・・・、お帰りなさい・・・、お邪魔してます。
・・・』
二人共まだ制服姿のまま

だった、二人も帰ってきたばかりだったんだな、俺はさっそく今日
の友成の話を二人に伝えた

『もっちゃん行くだからー、あつ、新しい水着買わなきゃ、
もちろん夕奈ちゃんも行くでしょ。』

『・・・うん・・・、なんだか・・・、面白そうだし・・・。』
この二人も参加決定だな、

しかし里奈も水着って・・・、いやっ、妹の水着姿を想像してどう
すんだ！！ そんなんで顔を赤くする俺を見た里奈が

『どうしたの？ お兄ちゃん
っ、顔が赤いよ。』
里奈を直視でき

ない俺に夕奈ちゃんが鋭く突っこむ

『・・・里奈の・・・、水着姿・・・、想像してますね・・・。』

『なっ！ 何言ってるの
かな夕奈ちゃん、んな訳ないでしょー、なんで俺が里奈の水着姿と

か・・・。」

しかし里奈はニヤリ

と笑って俺にくつついてくる

『お

兄ちゃん

水着はどんなのがいい？

ビキニ、パレオ、それ

ともスク水かな、お兄ちゃんが好きな選んでいいんだよ！。」

そんな事をさらりと言う我が妹、頼

むから兄をからかわないでくれよ、それから夕奈ちゃんが帰るまで
三人で楽しい時間を過ごした、とにかく夏休みに楽しみは出来たんだし、どんな出来事が待ってるのか期待は膨らむのだった・・・。

第三十六話（後書き）

次回はどうしようかな・・・。

第三十七話（前書き）

今回は真司視点です。

第三十七話

8月1日から3日間、俺の親父の別荘が自由に使える、そこに9人の高校生男女が3日間寝泊まりするのだ、18の男子たる俺には一大イベントである

私も行くよ、ふふっ、修学旅行みたいね。

いずみに話すとやっぱり嬉しそうに承諾した、いずみはこうゆう大勢で何かをするというのが好きだからな、ちなみにもう親父にも話は通してる、その時に親父と（これからの日本の警官はさ？らい刑事旅情編の香？達男刑事の様な警官を育てるべき）という議論を午前3時までかわしそのついでに別荘の件を頼んだ、親父はあっさり了承して後は二週間後の8月1日を待つのみだ

真兄、今日は私が夕食作るから だいぶ上手くなってるんだから期待しててよ。

今日もいずみの家に夕食をご馳走させてもらう、もはや家庭内別居状態のウチの継母は俺への愛情も日に日に薄れ今では俺の為に夕食を作るなど有り得ないといくらである、親父はそんな継母に何も言わないが俺にはすまないと言いながら破格の小遣いをくれるので親父なりに幾らかの情はあるのだろう。

いずみの家に着き温かく迎えてくれた美鈴さんからいきなりハグをされた、真横のいずみが声を荒げる

「ちよつとー、ママー！！」

いきなり娘の彼氏に何してんの、真兄嫌がつてるじゃない！

しかし美鈴さんにはのれんに腕押しだった

んな訳ないでしょ、私の熟れた肉体の抱擁を真司くんは心待ちにしてたのよ、モー、食べちゃおうかしら。

・・・何か頭のネジが数本抜けてる様な台詞を吐く美鈴さんから丁寧に離れいずみと共にリビングへと向かう、

まだ玄關に居る美鈴さんは

『もう、真司クーン、イケズだよー。』

と駄々をこねていた、その姿はとても三十路後半の未亡人には見えなかった。

現在、台所で料理を作ってるのはいずみだ、美鈴さんはリビングで俺のすぐ隣に居て一緒にテレビを見ている、そのリビングには肉じやがの美味しそうな匂いがしてきた

『おっ、今日は肉じやが、いい匂いだしこりや本当にいずみの料理が楽しみだよ。』

『ふふっ、言っただしょー、期待しててっ、真兄の為に頑張ったんだから　もう少しでできるから待っててね、あ・な・た？』

してくれるいずみに萌えてたら美鈴さんに腕をつねられた

『コラッ、何いずみを見てニヤついているの、真司クンはちゃんと平等に私たち母娘に愛情を注がないと駄目なのよ。』

意味が分

からん、この人が何を考えてるか理解不能だ、確かによくいずみと共に俺を自宅に招いて手料理を振る舞ってくれる、俺の継母などより遥かに母親らしいが愛情を注げというのがどうもな、感謝ならた

『

できたよ。』

いずみの明る

い声が響き今日の夕食が出来た、肉じやがと焼き魚をメインにしてみそ汁もある、見た目はかなり美味そうだ

『いただきます。』

いずみの作った肉じやがを食べてみる、うん、十分に美味しい、焼き魚も焼き加減がバッチリだ、みそ汁の味も文句なしと以前のいずみからは考えられない料理の味だった

『いずみ、本当に美味しいよっ、正直驚いた、お前、スゴい努力したんだな、惚れ直したよ。』

『ふふん、でしょー、真兄が喜んでく

れて安心した　もつと料理の腕を上げて真兄を私の料理の虜にしちゃうんだからね。』　愛娘の笑顔に

母親が続く

『私がみつちり仕込んだ

もの、当然よ、これからもつといずみの腕は上がるわよ、そしていつかは真司クンもこの家で私達と暮らすんだから。』

へつ、それってつまり俺をこの家の婿養子にする気が、そりや確かに今の家はいずれ出るつもりだが

『うん、私も真兄とママと三人で暮らしたい、今の真兄のお母さんって全く家の事をしないんでしょ、ヒドいじゃない、ねえ、真兄っ、ウチに来なよ。』

『私達は絶対に真司クンに寂しい思いなんてさせないわ、亡くなられた真司クンの実のお母さんが出来なかった分もあなたに愛情を注いであげたいの、私の息子としてね。』

この母娘の目は本気だ、想いも真剣だ、俺はその想いに応えなければならない

『いずみ、美鈴さん、二人の気持ちは本当に嬉しいですが、でも今はまだこの家に甘える訳にはいきません、俺が高校を卒業して、自分の力でお金を稼げる様になったら、その時はこの家に甘えさせて頂きます、俺の人生賭けて、二人を幸せにします！』

俺の宣誓にいずみは涙を流し、美鈴さんは慈愛に満ちた笑みを浮かべ

『……うんっ、真兄、幸せになろうね。』

『真司クン、あなたは必ず私達を幸せに出来るわ、私が保証します。』　それから三

人で談笑しながらいずみの手作り料理を全てたいらげた、片付けを終え自分んちに帰る俺を矢島母娘が見送ってくれる

『真兄、また来てよね、今度は真兄の好きな唐揚げ作っただけから？。』　真司ク

ン、私だってまだまだいずみには負けないわよ、今度の私の料理で真司クンを骨抜きにしちゃうんだからね。』

俺は二人に頭を下げ矢島家を後にする、いずみは本当に料理が上手くなった、美鈴さんは亡き俺の実母に代わり俺を幸せにしたいと言ってくれた、たま〜におかしなトコもあるが基本は娘思いな人だ、俺は必ず、あの母娘を幸せにしてやりたいと思った・・・。

第三十七話（後書き）

なんか第二十八話と似た展開になってしまいました。

第三十八話（前書き）

初めて理子視点でいきます。

第三十八話

明日で一学期が終わる7月19日、今私は恋人の恭介とのHを終えたトコだ

「ふうー、理子、

今日もよかったよ。」

ベッ

ドからおりて服を着ながら恭介は言う、一週間に2、3日は恭介とHをしている、かつての恋人、青山貴志くんとはHはせずキス止まりだった、元々Hに興味があつた私はそんな関係に不満がありその隙間に恭介が私に告白してきた

「前田さん、僕っ、ずっと以前からあなたの事が好きでした、必ず幸せにします、お願いです、僕と付き合ってください。」

最初は断つた、だつて当時はまだ青ちゃんと付き合つてたし、恭介には女遊びの噂が多数あつたのだ、しかし恭介は

「僕がこ

こまで本気になったのは貴女だけです、僕には貴女以外なんて考えられません、貴女さえ居てくれたらいいんです！」

食い下がる恭介に根負けして一回だけデートをした、女の扱いが上手く甘い言葉を囁く恭介については心だけじゃなく体も許してしまった、青ちゃんが手を出さなかつた私の処女は恭介に……

恭介と初めて結ばれて

から私の体のタガが外れた、想像以上のセックスの快楽を知つた私は恭介とのセックスにハマりこのまま青ちゃんを騙して二股を続ける事に限界を感じたので青ちゃんに別れを告げた、もう私の心も体も恭介の虜になってたし、だけど青ちゃんとなら恋人じゃなくても友達として楽しくやっていけると思った、青ちゃんは派手な金髪頭だけど明るく人当たりのいい穏やかな性格だつたし、そんな青ちゃんと仲のよかった友成真司くんや高野奈津美さんも当時は私の友達でもあつたし、きつと今まで通りの友達関係を続けていけると思つてた、甘い願望だつただけだ

あなた達がどうなろうと私達には一切関係ありません、あなた達に
関わる時間が無駄なんです。」 奈

津美に拒絶された私はつい意地を張ってしまい自分も奈津美達を拒
絶するような事を言ってしまった、その結果、青ちゃんと友くん、
奈津美はもう私には話しかけてこなくなった、新しい恋人はできた
けど友達は全て失ってしまったのだ、私が悪いんだけど。こ

うして私の周りには恭介しかいなくなってしまった、恭介までい
なくなる事を恐れた私はもう恭介の言う事に逆らえなくなった、だ
かせっかく恭介の子を身ごもっても恭介が望まないなら堕ろすし
かなかった、もし青ちゃんが父親ならどう言ったのだろうか、喜んで
くれたのかな・・・。

そして一番シ

ョックな事が起きた、青ちゃんの妹、里奈ちゃんから

「もう二度と私達の前にでてこないで
下さい。」 言われた瞬間、私は

何も考えなくなかった、里奈ちゃんの口からそんな言葉を聞きた
くなかった、誰にも話してないが実は私には生き別れた腹違いの妹が
いる、家の事情で遠くに引き取られもう会う事が出来ない妹が、だ
から私は青ちゃんと付き合ってた頃、里奈ちゃんの事はまるで自分
の妹みたいに可愛がってきたつもりだ、もう会う事のない妹に重ね
合わせただけかもしれないがそれでも里奈ちゃんが私に微笑んでく
れるだけで満足だった、でも私は里奈ちゃんの兄を裏切った、そし
てやはり里奈ちゃんも私から離れてしまった、ここまでくると自分
の浅はかさに笑えてしまう。

ああ、理子、俺は今から用事があって出かけるから、お前も準備
できたら帰れよ。」

服を着た恭介が淡々と言い放つ、私が妊娠した時からどこか私に冷
たくなった気がする、もし恭介に捨てられたらどうしよう、絶対に
嫌だ、赤ちゃんを堕ろしてまで恭介に尽くしたのに、恭介はそれか
ら何も言わずに部屋を出る、一人になった私も服を着て恭介の家を
出た。

帰る私はその途中で青山兄妹と奈津美、

あとポニーテールの子が四人で買い物帰りらしきところに出くわした、あの人達と顔を合わせたくない私はとっさに隠れた、物陰から青ちゃん達の会話が聞こえる

『明日さえ行けば夏休みだな、あー、早く8月1日にならねーかなー。』 『もう、お兄ちゃん、そんなに里奈の水着が見たいのお。』

『違いますよ里奈さん、貴志くんは私の水着が見たいに決まってますわ、楽しみにしててくださいね、貴志くん？』 『・・・お兄さん・・・、私の水着で・・・、離さない・・・。』

『ははっ、まっ、まあみんな楽しみにしてるよ、いい思い出作ろうな。』

皆でどこか海に行くのかな、すごく楽しそうに見える、もし今も青ちゃんと付き合ってたなら私だってあの輪の中に入ってたはずだ、なのに今はこうして隠れてる、友達だった奈津美には拒絶され、妹みたいに可愛がった里奈ちゃんには二度と会いたくないと言われ、私が裏切った青ちゃんはいいい友達になれると思ったのにもう私には全く関心がない、どうしてこうなったんだろ・・・、こんなはずじやなかったのにな。

第三十八話（後書き）

普通こんなビッチはいないでしょう、この小説はフィクションですから。

第三十九話（前書き）

今回は貴志視点です。

第三十九話

「お兄ちゃん、今日何か用事とかあるかな？」

一学期が終わる今日、朝の食卓で里奈がこんな事を聞いてきた

「今んトコ用事はないけど何かあるのか。」

「うん、今日ね、クラスの友達がウチに遊びに来たいって言うんだけどいいかな。」

へえ、里奈も夕奈ちゃん以外にそんな友達がいるんだな、兄としては安心だ、今まで里奈は夕奈ちゃん以外をウチに連れてきた事はなかったからな

「いいに決まってるだろ、そんなの俺に許可をとる事じゃないよ、それでその間俺はどっかに行つてればいいのか。」

里奈はブンブンと首を横に振り慌てて言う

「お兄ちゃんにそんな事言わないよお、その子達はお兄ちゃんに会つてみたいって言ってるの、だからさっ、いい？」

なかなか物好きな女子高生もいるモンだ、こんな金髪お兄ちゃんに会いたいとか、とりあえず里奈に言う

「俺はいいけど、里奈はいいのか、こんな金髪の兄がいるってわかつたら何かと嫌な事を言われるんじゃないか。」

里奈は珍しく俺に怒った顔を見せて言った

「お兄ちゃんつ、そんなに自分の事を悪く言っちゃダメだよ！！ 里奈と夕奈ちゃんはいっつもクラスでお兄ちゃんの事を自慢してるんだよ、優しくて強くてカッコいいお兄ちゃんだつて、それに今時金髪だからって不良だと思われなんだから、少なくとも今日来る子はそんな事でお兄ちゃんを悪く言う子じゃないからさっ、ねっ」

「分かったよ、けどお前、クラ

スで夕奈ちゃんと俺の事を自慢してるのか、なんだかこそばゆいな。

」

「へっへー、だってお兄ちゃ

んなんだもん。」

満面の笑み

で俺に抱きつく里奈、もしかして俺の妹はもう引き返せないトコま
できてるのか、否、今だけだろ、そう思わなければ理性を保てん。

朝の登校はいつも通り

里奈と夕奈ちゃんと、そして今日は途中で珍しく友成夫妻に会った

「おはよう、って

青、てめコノヤロー、なんだその両手に花状態は、やはり貴様はシ
スコンの限界を超えたシスコンでそれをさらにもう一つ超えたシス
コンだというのか！！」

朝からやかましい悪友に俺の必殺技、鳳？天翔を放つ、しかし友成
は涼しい顔で俺に言いやがった

「フツ、聖？土に一度見た技は通じん、もはやこれは常
識だ。」

何の常識が知ら

んがならば今度は乙女座の必殺技、天？宝輪を放とうとしたが里奈
達がいるのでやめた

「おはよう

ございます、フフフツ、朝から元気いいですね。」

いずみちゃんが笑って俺と友成を見て

いた、すごい恥ずかしいんだけど

「おはようございます、友さん、いずみ先輩、二人で登校で
すか、仲良くて羨ましいです、フフツ。」

「・・・おはようございます・・・、友成先輩・・・、

矢島先輩・・・。」

挨拶を交わ

しあった俺達はそのまま五人で学校へと行きあつという間に修了式
もHRも終わった、一緒に帰るついでにどこかで遊びたいと言って
た奈津美さんと彩花に今日は里奈と約束があるからと詫びつつ俺は
一人で帰った。

我が家の前に来て見知らぬ自転車が
二つあるのが目に入った、里奈の友人達はもう来てるんだな

「ただいま。」

「ただよー、早く早くっ。」

「お帰りー、お兄ちゃん、みんな待って

パタパタと里奈が出てきて俺の腕を掴む、そのままりビングに引張って行くとそこには夕奈ちゃんとボブカットの少女と三つ編みのメガネ少女がいた、彼女達は俺を見て笑顔で挨拶をしてきた、これからどうなるのだろうか。

第三十九話（後書き）

この二人はレギュラーにはしません、ただでさえキャラが多いので・・・。

第四十話（前書き）

前回の話の続きです。

第四十話

ウチに遊びに来ている里奈の友人達、ボブカットの子は薫ちゃん、三つ編みの子は恵ちゃんといって普通にかわいい

『初めまして、いつも里奈と夕奈からお兄さんの事は聞いてました、二人の言ってた通りですね。』

薫ちゃんがやや興奮気味に言うてる、何が言った通りなんだろう、気になって聞いてみたら

『青山先輩が里奈達の言ってた通りのかつこいい人だったって事ですよ、私も今日は青山先輩に会えて嬉しいです。』 俺の質

問に恵ちゃんがおしとやかに教えてくれた、女子高生にこう言われるとやはり頬が緩むな

あつ、ありがとう、俺も今日はキミ達みたいなかわいい娘に会えて嬉しいよ、これからも里奈や夕奈ちゃんと仲良くしてやってくれよな。』 そう言ったら里

奈が頬を膨らませ俺に釘をさす

『お兄ちゃんつ、そんな事言っても薫ちゃんも恵ちゃんも彼氏がいるんだから！ 妹の目の前で友達をナンパしちゃダメだよ。』

『するかつ、お前は俺がそんな節操なしに見えるのかよ。』

『・・・お兄さん・・・、里奈は・・・、これ以上・・・、ライバルが・・・、増えたら・・・、不安だから・・・。』

夕奈ちゃんが俺にそつと耳打ちする、ライバルって何なんだよ、やっぱり里奈って俺の事を・・・

『ちよつと、お兄さん！ するかってショックだな、私達ってそんなに魅力ありませんか。』

薫ちゃんが不機嫌そうに言ってきた、恵ちゃんは俺を見て微笑んでる、俺はとりあえず薫ちゃんに言

う

「そんな事ないって、薫ちゃんも恵ちゃんも本当に魅力的だよ、でも二人には俺より相応しい人がもう居るんだろ、その人を大切にしていってやりなよ。」

薫ちゃんは顔を赤らめ照れている、したら今度は恵ちゃんがメガネを輝かせ俺に言ってきた

「それじゃあ青山先輩には誰か好きな人とかいるんですか、なんだかすごく気になるんですけど。」

好きな人ねえ、やっぱり奈津美さんだろうか、けど俺には彩花も夕奈ちゃんも、そして里奈だって大切な存在なんだ、ははっ、これじゃ本当に節操なしだな、さてどう言ったのがいいのかな、あんまりへたな言い方したら里奈や夕奈ちゃんを傷つけてしまうかもしれないから

「ああ、いるよ、好きかどうかは別に大切な人達がね。」 俺は周りの女性達、友成や蒼太の事を恵ちゃん達に話した、里奈も夕奈ちゃんも俺から大切な人だと言われ嬉しそうに聞いている

「そうなんですか、青山先輩にはいい仲間がたくさんいるんですね、里奈も夕奈もそんなに大切にされてなんか羨ましいです。」 恵ちゃんは感心した

感じで微笑んでる、薫ちゃんも

「そっかー、お兄さんには恋人候補が何人もいるんですね、それでお兄さんは誰を選ぶんですか？」

興味深そうに薫ちゃんが聞いてくる、そんな彼女を恵ちゃんが制止した

「薫、それは私達が聞く事じゃないわ、青山先輩もまだ誰が好きなのかわからないみたいだし、でも先輩、なるべく早く決めてあげてくださいね、その人達もきつと先輩の答えを待ってますよ。」

恵ちゃんはいくまで穏やかな表情で語りかけてくる、でも俺はまだ告白とか考えてない、今のみんなとの関係が楽しいからだ、やはり吹っ切れたとはいっても理子の事があって恋愛

には臆病なのだ。

それから二時間くらい皆でいろんなゲームをしたりして遊んだ、ゲームが終わると彼氏とデートがあるからという薫ちゃんと恵ちゃんは帰り際に俺にお礼を言っていた、二人が帰った後に夕奈ちゃんが俺に話しかけてくる

「・・・お兄さん・・・、
奈津美先輩か・・・、彩花先輩に・・・、告白・・・、するんですか・・・。」

どしたんだ、夕奈ちゃん、急にそんな事聞いたりして・・・。」

思いつめた表情をしてる夕奈ちゃんを見てたら里奈が俺に抱きついてきた

「お兄ちゃんっ、里奈から離れないよね！　お兄ちゃんがいなくなったら里奈、一人ぼっちになっちゃうよぉ・・・。」

「なんだか情緒不安定な妹

と妹分に俺はつとめて笑顔で語る

「大丈夫、二人が望む限り俺は二人のそばにいるから、絶対に、なっ。」
そんな事

を言ったら里奈と夕奈ちゃんは笑顔で両側から俺の腕にしがみついてきた、しかも明日から夏休みだから夕奈ちゃんも遅くまでウチにいた、夕食時なんか二人で争う様に俺にアーンをしてくる、里奈はいつもこうだがまさか夕奈ちゃんまでこんな事をしてくるとは、こんな二人を見てたらなんだか友成の別荘では一騒動起きそうな気がしてきた・・・。」

第四十話（後書き）

次回から夏休み編です。

第四十一話（前書き）

夏休み編にはなりましたがまだ別荘編ではありません、蒼太視点でいきます。

第四十一話

今日から夏休みだ、しかし俺はいつもと変わらず7時前に目が覚めた、ベッドから出て一階に降りると朝食の準備をしてた母から

『おはよう蒼太、悪いけど彩花起こしてきてくれないかしら。』

なんでだ、今日から夏休みなんだし別に今起こす必要ないんじゃないか

『母さん、学校は休みなんだしさ、寝かせといてやったら。』

俺の面倒くさそうな返答に母は少し怒り気味に返す

『もう朝ご飯作ったのよ、それに休みだからってだらしない生活は母さん許さないわよ。』

かなり厳しい我が家の母に

押し負け姉さんを起こしに向かう、何故俺が・・・

『姉さーん、朝だよ、母さんが起きろってさ。』

ドアをノックしながら言うも返事

はない、だがこのまま戻ってもあの母は納得しないだろう、気乗りしないが俺はドアを開け姉さんの部屋に入った。

ベッド

の上には薄いグリーンのパジャマを着た彩花姉さんがまだ夢の世界をさまよっていた、暑いからか布団を放り投げてて寝相がよろしくない、まあ、慣れてるけどな、大体学校のある日とかいつも俺が起こしてるんだし、仕方なしに姉さんに体を揺すり起こそうとする、お陰で姉さんは起きたのだが

『うーっーん、ムニヤ、ん、蒼太あ、おはよあ、って、あれっ、今日から夏休みじゃなかったけ？』

まだ半分寝ぼけている姉さんに母が起こしてこいと言った事を告げたら素直に布団から出てくれた、役目を終えた俺は姉さんの部屋を出て一階に戻る。

家族三人揃ったトコで朝の食事を取る、ちなみに父は現在単身赴任中で他県に行っている、母

も働いてて朝9時にはもう家にいなく夜8時過ぎまでは帰ってこない、そんな両親だが俺達姉弟は尊敬している、俺達が路頭に迷わない様に働いてるんだし、姉弟揃って両親には迷惑を掛けたのに俺達を許してくれたのだ、俺は心底この二人の子でよかったと思ったモンだ。

朝食が終わり母さんが仕事に行く準備をしてたら姉さんが母さんに例の友成先輩のお父さんの別荘に3日間泊まり込みで遊びに行く事を告げた

『ねえ、お母さん、いいでしょ、せっかくなんだしさあ、蒼太も一緒に行くんだし、お願いっ。』

案の定母さんは苦虫を潰した様な顔をして聞いている
『そんな・・・、

高校生だけで、泊まるだなんて・・・、しかも男の子も居るんですよ、ひよっとしてその誘った男の子、何か変な目的があるんじゃないの？』
そんな事

を言う母さんに目を見開いた姉さんよりも早く俺は言った

『母さん！！ その人は絶

対にそんな人間じゃないよ、誘ってくれたのだって純粋な好意なんだ、その人は俺の為に頑張ってくれたり、姉さんの為にも、そして友達の為、好きな人の為にも頑張る、俺が尊敬する先輩だ、絶対に母さんが心配する様な事なんか起きないからさっ、だから俺からも頼むよ、なっ。』
俺の必死

の頼みにいくらか迷う母さん、すると今度は姉さんが母さんに思いの丈をぶつける
『お

母さん、今の私達の友達はある事をした私を受け入れてくれたの、つらい事は一緒に背負ってくれて、嬉しい事は一緒に喜んでくれる私達姉弟の大切な友達よ！ 私は絶対にみんなと一緒に行きたいわ、せっかくな今の高校で出逢えたみんなと高校最後の夏に思い出作るって約束したんだから！！』

いつになく真剣な姉さん、しばらくの沈黙の後、母さんがゆっくりと口を開く
『・・・

わかったわ、二人がそこまで行きたいならそうなさい、決してその友達に迷惑かけない様にしなさいよ。」

別荘に行く事を許してくれた母さんに礼を言い、
それから間もなく母さんは仕事に行った。 自分の部

屋に戻りこれから何をしようか考える、すると携帯から着信音が鳴る、誰かと思えばクラスメートで俺の相棒的な存在である鈴木紗恵さんだった、電話に出てみるとやはり朝から陽気な声を出す

「おはよう、ねえ、四森くん、

今日って何か用事とかあったりする？」

「いや、特にないけど、それがどうかした？」

「ホントに、じゃあさっ、今から一

緒に買い物行かない？」

渋る俺を半ば強引に誘う鈴木さん、引き下がりそうにないので彼女の買い物に付き合う事にした、これってまさかデートとかじゃないよな・・・。

第四十一話（後書き）

ユニークアクセスが五千を突破しました、本当に感謝です、見
てくれてありがとうございます。

第四十二話（前書き）

お気に入り件数も増えてます、本当に感激です。

第四十二話

鈴木さんと買い物に出かける事になった俺はその事を姉さんに言う、したら姉さんは含みのある笑みを浮かべ冷やかす

『へえ、蒼太もなかなかやるじゃないの、頑張りなさい、一気に紗恵ちゃん落とすチャンスよ。』

勘違いもいいトコだが反論したらまた突っ込まれるので黙って家を出た。待ち合わせの場所は

鈴木さんの家に一番近い駅で彼女は隣町のデパートに行きたいそうだが、早めに家を出たので約束の時間より二十分も早く着いてしまった、しかし五分も待てば鈴木さんも来た、彼女は俺の姿に気付くと手をヒラヒラさせて近づいてくる

『あ、四森くんの方が早かったー、もー、せっかく四森くんを待つてるシチュエーションを楽しみにしてたのに。』

何のこっちゃ、しかし何故彼女は買い物とかに俺を誘うんだ？ 鈴木さんはクラスではある程度の女子の友達もいるのに、そんな疑問をぶつけてみたら彼女は俺の顔を真正面から見つめながら言った

『今日は四森くん達と行く別荘に持っていく水着を買いに行くの、そんなのクラスみんなには言いたくないしどんな水着がいいか男子の意見も聞きたいしね。』

確かにこの事はクラスの連中には言っていない、俺と鈴木さんの仲はクラス公認だが泊まりがけで遊ぶというのをあまり言い触らしたくはないのだ、でも水着の件は別に男子の意見とかいらなと思うし、クラスの女子と行くにしてもそんなのいくらでもごまかす方法があるだろうが彼女にそんな事言ってもムダだろ、ここは気持ちを切り替え彼女と買い物を楽しむ事にした、後はクラスメートに会わないのを祈るだけだ。

電車の中、二人で並んで座る、適当な雑談をして過ご

すが夏休みに入ったせいか学生らしき人が多い、しかもその若者達は周囲を気にせず大声で喋る、マナーのかけらもない態度に不快になるがここは放つとこう、また暴力沙汰はゴメンだしな、だがよく見たらそいつ等はシルバーシートの席に座ってた、さらに周りを見たらお婆さんが立ってたのだ、それを見た俺はそのお婆さんに声をかける

「あのお婆さん、よかったです」

どうせ後二つ先の駅で降りるしな、それにお年寄りを立たせ自分は座るとか俺にはできない、お婆さんは俺に深々と頭を下げ鈴木さんの隣に座った、鈴木さんは俺を見て微笑んでいる、その笑みは電車を降りるまで絶える事はなかった。

電車を降り目的のデパートに近づくと後ろから声を掛けられる、振り向くとそこには友成先輩と矢島先輩がいた

「よっ、お二人さん、奇遇だな、

二人もデートか、青春だなあ。」

笑顔で話しかけてくる友成先輩、デートと言われ俺は慌てて否定しようとするも鈴木さんが先に先輩達に

「そういう二人もデートですかー、あつ、そうだ、よかったらダブルデートしませんか、私達って今日は友成先輩が誘ってくれた別荘に持ってく水着を買いに来たんです。」

そんな二人の邪魔になる様な事を言ってしまうってつきり怒られると思ったが矢島先輩は笑顔で受け入れた

「ホントに、実は私達もなのよ、

このデパートってカワイイ水着がいっぱいあるしさつ、ねっ、真兄、いいでしょ」

友成先輩は

あっさり承諾して四人でデパートへと入ったが矢島先輩と鈴木さんに引っ張られ俺と友成先輩は水着売り場に連行される、公衆の面前でなんの罰ゲームだろうか

「蒼太、お前も大変なんだなあ・・・。」

「いいや、先輩だって、苦労してるんですね・

。。。』

水着売

り場から少し離れた所で俺達がばやいてると試着室のカーテンが開き女子二人が出てくる、その姿を見た友成先輩が

『。。。いずみか、うん、イイツ、いいんじゃないすつかー、紗恵ちゃんも似合ってるよ。』

矢島先輩は紫のビキニ、鈴木さんは水色のワンピース水着だった、モジモジしてる俺に鈴木さんが近づき聞いてくる

『どう、この水着、やっぱり地味かなあー。』

不安そうな声で聞く彼女に俺は言う

『そんな事ないって、俺は好きだけどな、その水着、似合ってるし、鈴木さんらしいと思うよ。』

『ホントツ、本当にそう思ってくれてるの、じゃあこの水着にするねつ。』俺

が素直な感想を言うと鈴木さんは感激した様な表情になりあっさりそのワンピース水着に決めた

『よかったわね紗恵ちゃん、蒼太くんが優しい人で、本当にその水着似合ってるわよ。』

ビキニ姿の矢島先輩が俺と鈴木さんに微笑んでいる、そのボーイツシユな容姿が持つ健康的な色気に照れていたら鈴木さんが俺の腕を抓ってきた

『コーラー、何矢島先輩に萌えてるの！ さっきの言葉はウソだったの！。』

そんな俺を友成先輩は笑って見ている

『ははっ、蒼太、確かにいずみは色っぽいからなー、健全な男子ならしょうがないよな。』

『あら、蒼太くん、私の水着も好きなの？ ふふふつ、紗恵ちゃんがいるのにー、悪い子ね。』

あの・・・、笑ってないで助けてもらえるとありがたいのですが、そんな先輩方と鈴木さんとのダブルデートはまだ続く・・・

o

第四十三話（前書き）

まだダブルデート編です、相変わらずの展開の遅さ・・・。

第四十三話

あれからなんとか鈴木さんをなだめる事に成功した俺と友成先輩に服を着た矢島先輩と鈴木さんが水着を選びたいと言いつ出した

「真兄も蒼太くんもせっかく来たんだし何か買おうよ、ここは男物の水着だっていいのがあるのよ。」

「そうですよ、私と矢島先輩がコーディネートしてあげます、いいでしょ、四森くん。」

そう言いつつも俺達が着るらしい水着を物色してる女子二人、反対しても無駄と判断したので俺は何も言わなかったが友成先輩はなんか不安げだった

「ねー、真兄い、これなんかどうかな？ 結構いいんじゃない。」

矢島先輩が友成先輩に選んだのは迷彩柄で膝くらいまである水着だった、そんなに悪くないとも思う、友成先輩もまんざらではない様子だった、そして今度は鈴木さんが俺に水着を持ってきた

「四森くん、お待ちせ、見て見て、こんなのどうかあ。」

彼女の持ってきた水着は赤色のビキニパンツだった、選んでくれる好意はありがたいが俺には合わないと思ったのでやっぱりNGを出させて頂いた、それから三度目の選定の末にブルーのオーソドックスな水着を選んできたのでそこで手を打った。

水着売り場を出た時点でちょうどいい時間だったのでデパートの地下にあるファーストフード店で昼食を取る事となった、俺と鈴木さんは遠慮しようとしたけど友成先輩が四人分の食事代を出してくれた

「遠慮するなって、このメンバーで一番年上は俺なんだから、それにハンバーガーなんだし大した額にはならないだろ、だから気にすんなよ。」

友成先輩の好

意に甘える事にした俺達は四人でハンバーガーを食べる、友成先輩はセットのポテトを食べながら（森？有三はポスト以下のザルキーパーかそれとも若？源三を超えるキーパーか）という事を熱心に語った、相槌は得意な俺だけこの話にはどう返したらいいのか分からなかったし女子二人は友成先輩を無視して女同士の話を楽しんでいた。

昼食を終

えデパートを出た俺達はどこに行こうかと話しながら歩いていたらそんな俺達の前に数人の男がひとりの少女に言い寄っていた、見たらその男達は来る時に乗った電車の中でお婆さんが立ってたのにも関わらずのうのうとシルバー座席に座ってた奴等だった

「あの・・・、私、人を待ってますので、

こんなの迷惑です。」

んな事言ったって誰も来ないじゃねーか、じゃああと五分して来なかったら俺達と遊びに行こうぜ、いいよな。」

なんかムチャな事言ってるな、気になった俺達はその場に留まったが五分たっても誰も来なかった、五分たったらその男達は

「誰も来ないな、

すっぱかされたんだよ、そんな奴ほつといて俺達と遊ぼうぜ、楽しいトコに連れてってやるからさ。」

なんか無視できない状況になってきた、友成先輩も同じ気持ちだったらしく俺に言ってきた

「蒼太、ちょっといずみの事頼む、あのままじゃ彼女、どうなるか分からねーからな。」

「友成先輩、相手は四人いるんですよ、俺も一緒に行きます。」

「真兄、私達

は大丈夫よ、あの子を助けてあげて、蒼太くんと一緒に。」

「四森くん、友成先輩、いま彼女を助けられるのは二人しかいないわ、あんな奴らなんか連れていかれたら彼女、何をされるか・・・。」

決まりだな、俺と友成先輩はその男達のいる所に近づ

き話しかけた

『あの一、

俺達のツレになんかあるんですか。』

男達は俺達を見て怪訝な目をする、しかし一番怪訝な目をしていたのは絡まれてる少女だった

『なあ、この人達ってさ、ホントにアンタのツレなの。』

男達が少女に聞く、

少女は訳が分からないといった感じにうろたえ

『えっ・・・、いや、その・・・、えっ。』

『なーんだ、ウソなのかよ、

っーかアンタ、朝の電車で婆さんに席譲った奴だよな、確か女連れだったじゃねーか。』

せ

っかく穩便に済まそうと思ったのに、アドリブの効かない少女だな、芝居を見破られどうしようかと思つてたら友成先輩がそいつ等にハツキリ言つた

『彼女が迷惑

だつて言つてんだろ、みつともない事してんじゃねーよ。』

『んだとお、こっちは四人いるんだぞ、

あんまりナメた事言つてると大恥かかすぞコラ。』

うわあゝ、今時こんなヤツいるのか、あんまり目立ちたくないが向こうは引つ込みそうにない、しかも友成先輩は余裕しゃくしゃくに言い放つ

『そうやって数を頼りに暴力で済ますのはどうかと思つけどな、でもアンタ達がそれでいいのなら相手になるよ。』

友成先輩が言い終えるとそいつ等は襲

いかかつてきた、友成先輩は

『汚物は消毒だー。』

と言

いながら素早く一撃を放つ、俺も二人ほど相手にしてたがこいつら弱いな、次第に形勢不利になるとその男達はさつさと逃げ出した、その場に残つた少女に声をかけると

『あの・・・、助かりました、本当にありがとうございました。』
少女からお礼

を言われるとそこにあまり会いたくない男が現れた

「おー、綾子、悪い悪い、急に用事が入ってさ・・・って、また君達か、綾子に何の用だい。」

現れた男は二ヶ月前に俺に暴行を働いて唯一謝罪をしていない工藤恭介とかいう人だった・・・。

第四十三話（後書き）

次回・・・、次回こそ終わらせてます。

第四十四話（前書き）

今回でダブルデート編は終わります。

第四十四話

絡まれていた女の子を助けた俺達の前に現れた工藤さん、遅れてきた彼にその事を説明してやると

「へえ、また偽善者の本領を發揮したのかい、全く、青山君の友人のやる事は自分のエゴを満たすだけの自己満足なんだな。」

俺達を見下した様な目で言い放つ、何故こんな事を言われなければならないんだ、だがそんな工藤さんに食ってかかったのは意外にも俺達が助けた綾子さんという少女だった

「先輩、私を助けてくれた人達にそんな言い方はないですよ、これじゃあ……。」

工藤さんに言った後で綾子さんは俺達の方を振り返り頭を下げながら

「あの……、すみません、私はあなた達に感謝してますから、どうか気を悪くしないでください。」

「いや、気にしてませんから、それより貴女が無事でよかったです。」

俺がせつかくこの場を穩便に済まそうとしたがまた工藤さんは余計な事を言う

「綾子、この人達に騙されちゃいけない、この人達は極悪金髪不良の仲間なんだぞ、お前を助けたのも自分達でお前を手ごめにしようという魂胆に違いないんだからな。」

さすがに一言いいなくなるがそれより前に鈴木さんと矢島先輩が怒りの表情で出てきた

「ちよつとアンタ!! 真兄達が助けなかったらこの子はタチの悪い奴らに連れ去られそうだったのよ! どうして素直に礼の一つも言えないのよ。」

「そうよ、大体アンタが待ち合わせに遅れるからこんな事になったんでしょ!!」

四森くん達がいたから彼女は今ここに居れるんだからね。」

声を張り上げる二人にも

全く動じない工藤さんは

「フン、

どうして青山君や友成君の周りの女性達はこうも下品な女ばかりなんだろうね、とにかく僕は誰が何を言おうと青山君関係の人間に感謝の言葉など伝える気持ちはさらさらないから、行くぞ綾子。」

そう言つて去ろうとする工藤さんと俺達に向かつてひたすら頭を下げ続ける綾子さんにそれまで沈黙を守つていた友成先輩が言葉を投げかける

「俺だつてお前から感謝の言葉をもらおうなんて思つてないよ、でもこれだけは言つとくけどもし青や俺達の仲間になんかつまらねえ事してみる、マジでブツ殺すからな」

笑つて物騒な事を言う友成先輩に何も言う事なく工藤さん達は去つていった、二人が去つた後に矢島先輩が友成先輩に近づき

「ねえ、真兄、もしかしてアイツつて今の子と前田先輩の事、二股かけてんのかな……。」

「いずみ、俺達には関係ない話だよ、もちろん青にだつてな。」

なんで青山先輩の名が出てくるんだろう、鈴木さんも同じ事を考えてたみたいで友成先輩に聞く

「あの男と青山先輩つてなんか関係あるんですか、私や四森くんにも教えてください。」

真剣な鈴木さんや俺を

見た友成先輩は俺達に念を押す様に語りかける

「蒼太、紗恵ちゃん、この事は青にとっては嫌な思い出だけと二人を信用して話すよ。」

それから友成先輩から聞く話は確かに青山先輩が可哀相な話だった、以前に青山先輩が恋人を奪われた事があると聞いたけど奪つた男があのだ工藤さんでしかもその青山先輩の元カノが二ヶ月前に俺が暴行を受けた際に涙を流し謝罪したあの前田先輩だったとは……、あの誠実そうな前田先輩が青山先輩を騙し二股

かけてた挙げ句あつさり青山先輩を捨てたとか、人は見かけによらないものだ

「グスツ、青山

先輩、可哀相です、青山先輩には絶対、そんな女よりも魅力的な女性が見つかってほしいですよ。」

青山先輩に同情して涙を流す鈴木さんに矢島先輩は微笑みながら諭す

「もう青山

さんの周りには魅力的な女性は沢山いるわよ、後は青山さんが決めるだけ、大丈夫、いま青山さんの周りにいる女性達は絶対に青山さんを裏切ったりなんかしないわ、もちろん真兄や私、蒼太くと紗恵ちゃんだってそうでしょ、私は信じてるから。」

聖母に見える矢島先輩に俺と鈴木さんは力強く頷く、友成先輩は笑いながら

「まつ、

青は寝取られ男からハーレム男に五階級特進した強者だからな、それにきつと、あいつは今が幸せなんだよ。」

そうだろうな、青山さんにはこんなにも想ってくれる仲間たちがいる、きつと姉さんだって、あの人は幸せ者だよ、俺は皆に言った

「そうだ、ダーツ

にでも行きませんか、友成先輩、勝負しましょうよ。」

それからネットカフェのダーツで遊び友成先輩に完敗したり、反面ビリヤードでは圧勝したり、なぜか鈴木さんがバッティングセンターに行きだと言い出しえらく女性二人がはしゃいでバットを振ったりと有意義？な1日を過ごした、夕方になりそれぞれ帰宅して俺は鈴木さんを送っていった、別れ際に彼女は

「あゝ、今日は本当に

楽しかったよー、今日でこれだけ楽しかったんだから友成先輩の別荘はもつとすごい事になるんだろうね 送ってくれてアリガト、

四森くん？」

真正面から

見るには破壊力のある笑顔をたたえ、鈴木さんは家の中へと入っていく、そんなに彼女が楽しんでくれたのならよかった、満足げに自分のウチに帰った俺に姉さんが今日の事を根ほり葉ほり聞いてきた

のはまた別の話である。

第四十四話（後書き）

次回からやつと主人公、貴志視点に戻ります。

第四十五話（前書き）

やっと貴志視点に戻ります。

第四十五話

「はっ、はあゝん、いいっ、気持ちいいゝん、おっ、お兄ちゃん？」
里奈がマッサージ

をあまりにしつこく頼むのでしてやったのだが揉むたびにこんな声を出す、揉む箇所は主にお尻のすぐ下のフトモモ中心でなんだかすごく作物的なものを感じるがとにかく早く終わらせる為にフトモモを揉むと
「あっ、そ

こっ、そこイイのぉー、ああっ、あはあゝん、もっ、もう里奈あ、お兄ちゃんにやみつきになっちゃうよぉ。」

頼むからお尻をそんなイヤらしくねらせるな、今日は短パンだからいいけどいつも里奈が着てるミニスカートだったら間違ひなく下着が見えるんだよ
「

なあ、里奈あ、まだ続けるのか？ いい加減俺も指が疲れるんだけどな、もうこれで終わりなっ。」
「

そう言つて最後に少し力を強めて揉む、里奈の声が甲高く響く

「あっ、あぁー

ーん、だっ、だめえゝ、きっ、気持ちよすぎて、里奈とんじやうのおゝ、お兄ちゃん、大好きいゝ??」

・・・何も聞こえないな、聞こえないという事にしよう、マッサージを終え里奈の部屋を出ようとすると俺にベッドに横たわる里奈が話しかける

「お兄ちゃん、最高だったよおゝ、フツッ、今度はお尻にマッサージしてくれる？ それともオツパイにしちゃおっか、ねえゝん、お兄いちゃん？」
奇天烈

な妹にあ然となるがここは兄として一言言わねばならない

「里奈、俺はお前の兄なんだからマッサージ以上の事はしないよ、兄妹なんだからな、お前も俺ばかりにかまってないで誰かいい人を見つけた方がいい、それがお

前の為だよ。』

俺にしては少し

キツめに言う、すると里奈は起き上がり俺に近づいてくる、俺の目の前に来てとても里奈とは思えない低い声で

『里奈はお兄ちゃん以外の彼氏なんかいない、誰とも結婚なんてしない、誰からの祝福ももらない、お兄ちゃんと一緒にいるのが里奈の幸せだよ、お兄ちゃんは違うの？　里奈と一緒にいるのはお兄ちゃんの幸せじゃないの。』

そんな事はない、里奈が幸せなら俺だって幸せだ、小さい頃に母に突然捨てられ父にはいわれのない暴力を受けてた里奈には誰よりも幸せになつてほしい、でも俺は・・・

『分かつてる、フツッ、お兄ちゃんは優しいからハッキリと里奈の事を拒否できないだけだよ、でも信じて、もしお兄ちゃんが里奈じゃない他の女の子を好きになつても里奈は邪魔しないよ、だつてお兄ちゃんが幸せなら里奈も幸せだもん、だからお願い、里奈を独りにしないで・・・、里奈を置いてどっか行かないでえ、お兄ちゃん。』

とうとう泣き出した里奈は俺の胸に顔をうめる、こんな妹を孤独にするなど俺にはできない、できる訳がない、泣き続ける里奈の頭を優しく撫で

『前にも言つたけど俺は里奈が望む限り里奈の側にいるよ、約束しただろ、だから泣くなよ、俺はいつも明るい里奈の笑顔が好きなんだからな。』

余計に

泣き出した里奈、泣き止むまでどれくらいかかるかなと思つてたら不意に家のインターホンが鳴る、慌てて里奈から離れ玄関に行つてドアを開けるとそこには夕奈ちゃんがいた

『・・・お兄さん・・・、こんにちは・・・。』

小さなバッグを持つ夕奈ちゃん、そういえば明日は8月1日で例の友成の別荘に行く日だ、前日の今日に夕奈ちゃんが泊まりにくると前に里奈が言つてたな

『いらつしゃい、まあ、上がりなよ。』

軽く夕奈ちゃんと挨拶を交わしてたら里奈が出てきた、もう涙は流してないが目が赤いまだ

「夕奈ちゃん、待ってたんだよ。」
里奈は笑顔だった

けど鋭い夕奈ちゃんはすぐに里奈の目に気付く

「……どうしたの……、里奈……、目が真っ赤だけど……。」

「うん、さっきまで目にゴミが入っちゃってさー、涙ポロポロだよ。」
なかなか里奈はアドリブ

のうまい子だなと思った、すると夕奈ちゃんが思いもよらぬ一言を言い出す
「……お兄さん……」

、里奈……、今日の夕食は……、私に作らせてください……。
夕奈ちゃんのこの一言が発

端となり美少女二人と過ごす危ない夜が始まったのだ……。

第四十五話（後書き）

実際に里奈みたいな妹がいたらなあ、結構自分の願望が入ってます。

第四十六話（前書き）

もうすぐ十万PVを超えます、感激です。

第四十六話

現在、我が家の台所にはエプロンを着た二人の美少女が料理を作っている、里奈は夕奈ちゃんが作ったスープを一口飲むと

「む、夕奈ちゃんのスープ美味しいよ。」
「・・・里奈・・・」

「負けないから・・・。」
奈ちゃんが作る話だったが二人で競うように作っている、実は料理が始まる前に二人にこんなやりとりがあった

「急にどうしたの夕奈ちゃん、ウチの夕食はいつも里奈が作ってるんだから、夕奈ちゃんはゆっくりしてなよ。」
「でも今日の夕奈ちゃん」

「んはいつもと違っていた、強い意志を宿した目で里奈に毅然と言いつ返し」
「・・・そうい

う里奈が・・・、たまにはゆっくりして・・・、今日は私が・・・、お兄さんに・・・、料理を作る・・・。」

明らかに普段と違う夕奈ちゃんにちよつと怒り気味の里奈が声を荒げる
「おかしいよ、

なんでそんなにお兄ちゃんに料理を作る事にこだわるの、やっぱり夕奈ちゃんもお兄ちゃんの事が好きなの？」

本人の前で随分直球だな、気になる夕奈ちゃんの返事は大体予想通りだった
「・・・」

好き・・・、私が一番好きな人・・・、そんなの・・・、里奈も知ってるクセに・・・。」
「だろう

な、最近の彼女の俺への接し方は恋人のそれだったもんな、何故かこの場から逃走したい俺に里奈が抱きついてきた

「里奈だってお兄ちゃんが大好きだもん、お兄ちゃんの食事を作るのは里奈の役目なんだからあ。」

顔中から汗を流す俺に夕奈ちゃんも近づき里

奈の反対側に抱きつく、そしてとんでもない事を言い出した

「・・・里奈・・・、勝負しよう・・・

、どっちの料理が旨いか・・・、お兄さんが・・・、決めてください・・・。」
「いいわよ、

負けないんだからねっ。」
何

故そんな話になるんだ、二人を止めようとするが

「お兄ちゃんは黙ってて！　これは乙女の真剣勝

負なんだからね！！」
・・・

という訳で俺はリビングで大人しくしている、やがて香ばしい匂いと共に二人が料理を運んできた、里奈はたまに作る事があるオムライス、夕奈ちゃんはチャーハンと中華スープだった、それぞれ量が少なめだから全部食えるがどれから食べようかな

「・・・お兄さん・・・、どうぞ・・・。」

夕奈ちゃんが自分の作った

料理を俺に差し出す、どうやら二人で順番を決めてたみたいだ、チャーハンを一口食べてみると

「おおっ、すっげえ美味しいんだけど、すごいよ夕奈ちゃん。

」
スープも旨い、普通に

お店にあってもおかしくない味だった、こうなると量が少ないのが惜しい、すぐに食べ終え次は里奈のオムライスだ、ふと見たら里奈はキラキラさせた目を俺に向けてる、とにかく食べよう

「うん、やっぱり里奈のオムライスはこの

味だよな、俺の好きな味だよ。」

ひたすら食べる俺を安心した様な表情で見てる里奈、対照的に不安げな表情をしてた夕奈ちゃんが俺がオムライスを食べ終わると

「・・・お兄さん・・・、私と里奈・・・

、どっちの料理が・・・、美味しかったですか・・・。」

二人は真剣な表情をしてる、俺は素直に

今思ってる事を二人に言う

「俺は料理人じゃないからどっちの方が旨いとか分からない、

でもどっちもとても美味しかったよ、それは自信をもって言える、夕奈ちゃんはお店にあってもおかしくない味だったし、里奈はいつもの変わらない、俺の大好きな里奈の味だった、二人にどっちが上とかないよ、里奈はこれからもだけど夕奈ちゃん、また俺に何か料理を食べさせてもらえるかな。」

言うなり二人は俺に飛びこんできた、その顔は見る者に幸せをあたえてくれる、そんな笑顔だった。

あれから自分が行うと言い張る二人を無理やりどかせて俺が食事後の後片付けを行う、このくらいはしないと、最後の洗い物を終え部屋に戻ろうとしたら里奈が声をかけてきた

「お兄ちゃん、お風呂沸いたから先に入っちゃってー。」

えっ、いいよ、先に二人が入りなよ、俺は最後でいいからさ。」

やっぱりお風呂は女の子を先に入れるべきと思ったけど夕奈ちゃんに

「……駄目です……、この家の一番風呂は……、お兄さんじゃないと……。」

別に最後でも気にしないがやたらと俺を風呂に入れたがる二人に押される形で俺が一番風呂をいただく事にした。

風呂場でのんきに体を洗う、すると風呂場の外でドアが開閉する音がした、ドアを覗くと入ってきた二つの人影が服を脱ぐような動作をしていたので慌てて自分のムスコをタオルで隠しドアに近づくが時遅く風呂場のドアが開いてしまいそこには

「お兄ちゃん、一緒にお風呂入ろうよ。」

「……お兄さん……、体を洗いに……、きました……。」

二人を見てしまうと里奈はオレンジ色のビキニを身につけ、夕奈ちゃんはトレードマークのポニーテールをほどいてピンクのビキニを着ていた、何を考えておられるのか全く分からない妹と妹分のセ

クシーなビキニ姿に俺は見とれてしまっていた・・・。

第四十六話（後書き）

次回はちょっとエロい話です。

第四十七話（前書き）

今回は危ないお風呂編です。

第四十七話

俺はどうしたらいいのだろうか、風呂に入ってたらいきなり妹とその友達が入ってくるとか、俺はてっきり（これは諸葛孔明の策だな！）と思ってしまったが・・・。

い やっ、固まっでないで何故こんな事をするのか二人に聞いてみよう

「 なっ、なあ・・・、

どしたんだ二人共、いきなりこんな・・・。」

なるべく二人を見ない様にしてるのだがやはり、チラチラツと見てしまうのは健全な男子高校生としては仕方がないだろう、そんな俺を見て二人は

「 そんなのお兄ちゃんとお風呂に入りたいからに決まってるじゃない？ だってお兄ちゃん、里奈が小学三年生くらいになつてからは一緒にお風呂に入ってくれなくなつたし・・・、だから今日は三人で仲良く入ろうね？」

当たり前だろう、どこの世界に小学五年生になつても妹と一緒に風呂に入る兄がいるんだ、そして里奈と違い若干の恥じらいがあるストレートヘアになつた夕奈ちゃんは

「・・・ネットで見たら・・・、こうすれば・・・、男の人は・・・、喜ぶつて・・・。」

顔を赤く染め俯く夕奈ちゃん、一体どんなサイトを見たんだ？ とにかく風呂場から出ようと思つてたら里奈が俺に近づき

「 お兄ちゃんってまだ体洗つてないでしょ、里奈と夕奈ちゃんですわね？ 久しぶりだなあ お兄ちゃんの体洗うのって、何年ぶりだろ・・・。」

と待て、そんな事された日には俺のムスコが目覚めてしまう、なんとか二人を思いとどまらせようと

「 あのなら、二人共、こういう事は簡単にしちゃいけない

んだ、こういうのは本当に好きな人にしてあげなきゃ・・・。」

言った瞬間にしまったっと思っ

たがもう遅かった

「うんっ、だ

から里奈はだぁ〜い好きなお兄ちゃんにしてあげるんだよ、ホントは水着も着るつもりはなかったんだけど夕奈ちゃんが嫌がるから・

・。」

「・・・私だつて・・・、

大好きなお兄さんの・・・、体を洗ってあげたい・・・、他の男の人になんて・・・、絶対にしてあげません・・・。」

ダメだこりゃ、何を言ってもこの二人を止めるのは無理だろうな、諦めた俺は二人に告げる

「分かった、じゃあ二人にお願いするよ、でも一つだけ条件がある、今日一回だけだという事、これが約束できないなら俺は風呂から出るぞ。」

今日

だけならいいだろう、これが精一杯の妥協だった、渋々認めた二人は俺の前と後ろに回ってきた、前には夕奈ちゃん、後ろには里奈だった、夕奈ちゃんがタオルにボディソープをつけて俺の体を洗ってくれる、後ろでは里奈が俺の背中を洗っている、するとあっさり俺のムスコは元気になってしまった、気づかない夕奈ちゃんは健気に

「・・・どうですか・・・、

お兄さん・・・、私・・・、ちゃんと洗えますか・・・。」

反則レベルな目をして俺に聞いてくる夕奈ちゃん、そんな目をされてはこう言うしかなかった

「うん、夕奈ちゃん・・・、

上手だよ。」

「・・・嬉しい・

・・・お兄さん・・・。」

ピン

クのビキニ姿が眩しい夕奈ちゃん、いつものポニーテールと違いストリートなのもまた違った彼女の魅力を引き出していた、つい夕奈ちゃんに見とれていると後ろの里奈が

「あゝ、お兄ちゃん、夕奈ちゃんの胸ばかり見てるゝ、やっぱりお兄ちゃんもオッパイの大きい人の方がいいのゝ。」

別に胸を見てた訳じゃない
が確かに夕奈ちゃんの胸は里奈よりは大きい、里奈がBカップなら
夕奈ちゃんはCカップはあるだろう、でも俺は本音を言った

「俺は胸の大きい小さいで女の子を
選んだりしないぞ、女の魅力はそれだけじゃないからな。」

「もう、お兄ちゃんてつばあ、
だあゝい好きだよおゝ???」

背中いっぱい里奈が抱きついてきた、背中に里奈の胸のム
ニユとした感触がするし俺の素肌と里奈の素肌の接触してる部分が
あまりに気持ちよくてついポーっとしてたら

「……私だって……お兄さんの事……
、大好きです……。」 なんと夕

奈ちゃんまで俺の体を洗うのをやめて抱きついてきた、しかも物凄
く顔を近づけてくる、ビキニの美少女二人に前と後ろから抱きつか
れて理性を保てなくなる寸前まできた俺は半ば強引に風呂場から出
た、二人は何か言ってたがそんなのは全て無視して素早く服を着て
部屋へと戻る

「ハアっ、ハア
っ。」 あと少しで俺は里奈と夕奈

ちゃんに、妹とその友達に襲いかかるトコだった、すなわち人間失
格の烙印を押されるトコだったぜ、よしっ、寝よう、寝るしかない、
そう決心した俺は布団に入った、だがこの危ない夜はまだ終わりに
ゃなかった……。

第四十七話（後書き）

やはり小説は難しいですね、次回はマッサージ編です。

第四十八話（前書き）

あやしいマッサージ編です。

第四十八話

風呂場で里奈と夕奈ちゃんの二人に水着姿で抱きつかれ危うく人の道を踏み外しそうになった俺は今、自分の部屋のベッドで横になってる、寝ようにしてもまだ8時を過ぎたばかりだ、さっきの興奮も重なり全く寝つけない、そんな時に俺の部屋のドアをノックする音がした、無視するのなんだか気が引けたのでドアを開けるとパジャマ姿の里奈と夕奈ちゃんがいた

『もっ、お兄ちゃん！！ さっきはなんでお風呂から出たのよ。』

お兄さん・・・、やっぱり・・・、私の洗い方が・・・、ダメでしたか・・・。

里奈は確信

犯だろぅが夕奈ちゃんは本気で俺がそんな理由で風呂から出たと思ってるそうだな、しゃあないな、本当の事を言うか

『あのね、夕奈ちゃん、里奈も聞いて、俺も人並みに性欲のある男子なんだよ、普通男子が風呂場でかわいい女の子からあんな感じで抱きつかれたら・・・、その・・・、まあ・・・、アレだよ。』

しかしまた、

この言葉を発した後にはマズいと思ったが後の祭りだった

『ウフフツ、お兄ちゃんって里奈の事、女として見てるんだねえ なんだか嬉しいな？』

・・・、興奮したんですね・・・、嬉しいです・・・。

二人共微笑みを浮かべ俺に近づいてくる、夕奈ちゃんはどうがけないけど里奈、実の兄にそんな女の目をして近づかないでくれ

『ちよつ、待て、二人は何しに来たんだ、俺に何か用でもあるのか。』

なんとか二人を制し話しかける、年頃の娘が簡単に男の部屋に入るなよ・・・

『 あっ、そうそう、お兄ちゃんって凄くマッサージが上手だね、夕奈ちゃんに話したら夕奈ちゃんもしてもらいたいつてさ、ねえ、いいでしょ 』 うー

「む、でも夕奈ちゃんなら里奈みたいな妙な声は出さないだろ、夕奈ちゃんの方を見ると 』

「お兄さんのマッサージ・・・、気持ちいいって・・・、聞きました・・・、私にも・・・、してください・・・。」

断る理由もないのでマッサージをしてやる事にした、夕奈ちゃんにどこをしてほしいか聞くと

『 ・・・背中と・・・、フトモモを・・・

、お願いします・・・。」 大

丈夫だよな、夕奈ちゃんだし、里奈じゃないから、彼女を俺のベツトに横たわらせまづは背中を揉む

『 ・・・あっ・・・、いいっ・・・、お兄さん・・・、上手ですう・・・、はあん・・・。」

夕奈ちゃんからも悩ましい声が漏れる、俺も何かおかしい気分になってくると 『 あっ、里奈、

お前何を、ちよっ。」 っ

の間にか俺の後ろに回った里奈が俺の肩を揉んでいた、何のつもりだろ 『 里奈もお兄ちゃんにマッサ

ージしてあげるう、いつものお礼だよ、いっぱい気持ちよくなつてね 』 まあ、感謝の気持ちならいい

だろ、俺さえ理性を保てばいいだけだ、夕奈ちゃんへのマッサージを続けよう、俺の手は彼女の柔らかいフトモモを揉んでいく

『 ・・・いいですう・・・、お兄さん・・・、ふうん・・・、ひっ・・・、ひあゝん・・・。」

里奈ほどじゃないが揉む度に夕奈ちゃんのお尻もイヤらしく動く、つい見てしまうと薄いパジャマのせいで下着のラインが透けてるんだが・・・、彼女のお尻に目を奪われてたらいきなり俺の脇から手をのばした里奈の手が俺の胸を揉んで

いる、何でこんなトコを

『むう

く、お兄ちゃん！　夕奈ちゃんのお尻ばっか見てるく、お兄ちゃんのエッチー、次は絶対に里奈のお尻をマッサージしてもらっんだからね。』

絶対しねーよ、

っ！かまた小さい胸をわざわざ俺の背中に押し付けてくるな

『・・・お兄さんっ・・・、ああん・・・、私のお尻・・・、揉みたいんですか・・・、いつ・・・、いいですよ・・・、お兄さんだったらあ・・・、いいですよ。』

まだ俺のマッサージを受け

てる夕奈ちゃんはお尻をくねらせながらムチャな事をおっしやる、
全く・・・

『いや、揉まないか

ら、夕奈ちゃん、もう少し自分を大事にしなきゃ駄目だぞ、俺が襲いかかってきたらどーすんだよ。』

『・・・いいですよ・・・、お兄さんだったらあ・・・、あん・・・、いや・・・、お兄さんにしか・・・、はひい・・・、許しませんから・・・、はあ・・・、絶対にい・・・。』

衝撃的すぎる夕奈ちゃんの発言に続いてまだ俺

の胸を揉み続ける里奈が

『

里奈だっってお兄ちゃんにしかこんな事しないもん、マッサージもお兄ちゃんにしかさせないんだからっ、だって里奈や夕奈ちゃんは奈津美先輩や彩花先輩に比べて子供っぽいからこうでもしなきゃお兄ちゃんに振り向いてもらえないかと思っただよお。』

なるほどね、俺の気を引く為にこんな

色仕掛けをしてくるんだな、里奈はともかく夕奈ちゃんは別に子供っぽくはないと思うけど

『・・・

お兄さんっ・・・、私っ・・・、負けません・・・、あう・・・、奈津美先輩にも・・・、彩花先輩にも・・・、里奈にだってえ・・・、ああっ・・・、負けませんからあ・・・、ああー！。』

二人の思いが本気なのは分かったつもりだ、奈津美さんや彩花もそうなのだろうが、夕奈ちゃんのフトモ

モを揉み、里奈に胸を揉まれ背中には里奈の胸を押し付けられながら俺はそんな事を考えていた。

やがてマッサージも終わり明日の準備をしていく、それも終わりやっこの夜も終わろうとするが本当にやばかった、もう少しでケダモノになるトコだったよ、里奈と夕奈ちゃんも寝る前に俺に（大好き）と言ってくるしな、そりゃ俺も男だ、かわいい女の子に好かれるのは嬉しいが一人は実の妹だ、これから俺や俺の周りの女性達はどうなるのか、つーか明日からの別荘で何が起こるのか、期待と不安の気持ち半々で俺は眠りについた。

第四十八話（後書き）

やっと次回から別荘編に入ります。

第四十九話（前書き）

やっと別荘編に入ります。

第四十九話

今日は8月1日、友成の親父さんの別荘に行く日だ、いつもと変わらない時間に目を覚ました俺は一階に降りる、そこには甲斐甲斐しく朝食の準備をしている里奈と夕奈ちゃんがいた

「おはよう、お兄ちゃん、いよいよだねっ。」

「……お兄さん……、おはようございます……、もうすぐ……、朝食の用意……、できますから……。」

朝起

きたら美少女二人が俺に朝食の準備か、この事を友成に話したら（このエロゲの主人公だ！）とか言われるんだろうな

「ねえ、九時に？駅に待ち合わせだったよね、ということは電車で行くんだよね、それじゃあお兄ちゃんの席の隣には里奈が座るの決定だね」

「……そんなの……、許さない……、お兄さんの隣は……、私が座るから……。」

「ダメだよ夕奈ちゃん、お兄ちゃんの隣は里奈の指定席なんだよー、そうだと、お兄ちゃんが決めてよ、里奈はお兄ちゃんの事を信じてるんだからね？」

なんで朝の食事時にこんな話をするんだよ、熱のこもった目で俺を見る二人、俺は意を決して二人に言う

「そうだ、俺が友か蒼太の隣に座ればいいんだ、いやー、こんな簡単な事に気づかないとは……。」

言った瞬間、絶対零度の視線を俺に向ける美少女二人、そんな絶対絶命の俺に救いのインターホンが鳴る、我先に玄関に向かいドアを開けたらそこにはバックを持った奈津美さんがいた

「おはよう貴志くん、私も貴志くんと行きたくて……、来ちゃった」

奈津美さんの服装は清廉潔白そのもので白を基調にした

スカートが非常に彼女に似合っていた

「奈津美さん・・・、とっ、とにかく上がってよ、
夕奈ちゃんも来てるから四人で行こう。」

あまりの美しさにうろたえながらも奈津美さんをウチに上げる、里奈と夕奈ちゃんも奈津美さんの来訪を喜んでた、あつという間に騒がしくなる我が家

「奈津美先輩、すつごく可愛いんですけど、気合い入ってますね。」
「ありがとう、里奈さん

も夕奈さんもととても可愛いわよ、今日を楽しみにしてたんですよ。」
「・・・奈津美先輩・・・、綺麗です・・・、やっぱり・・・、一番の・・・、ライバル・・・、

「三人は話に花を咲かせていく、若干余計な単語が混じっていたけど奈津美さんはスルーしてくれた、そんなこんなで家を出る時間となり戸締まりをしっかりと行い俺達は待ち合わせの??駅へ出発した。

思ったよりも早く待ち合わせ場所に到着して友成達を待つ、その間やたらと男性達の視線を感じる、俺の周りにいる三人の美少女のせいだろうな、着いて五分程たったその時

「おはよー、みんなー、待ったー。」

「おはようございます、皆さん、少し遅くなってしまいました。」
「おはようございます、皆

さん、おはよーございます、待たせちゃってすいませんでした。」
四森姉弟と鈴木

紗恵ちゃんが慌てて駆け寄って来る、これでは友成夫妻を待つだけになった
「どうしたのかな、真司くんやいずみさん、また寝坊してるのかな。」

「とにかく友に電話してみるか、まったく、世話のかかる奴だな。」

あと二分で九時になるのにまだ来ない友成夫妻を心配してる奈津美さん、俺が携帯を取り出そうとしたら

「はっ、はあつ、皆さん、すいませ〜ん。」

「すっ、すまなんだ〜、皆の衆〜、なっ、何とか間に合った様だな〜。」
懸命

に走ってくる友成夫妻、駅前でかなり目立ってるぞ、まあ遅刻したわけじゃないからいいけどな

おはよ、友、いずみちゃん、どした、また友が寝坊したのかよ。」
「ちっ、違わい、いずみを

迎えに行ったら美鈴さんに捕まってたんだよ。」

「そうなんですよー、ママが私も行きたいってしつこくて、仕事があるのに休むとか言い出して大変なんでしたからー。」

「まあ、フフっ、それは大変でしたね、それじゃあ全員そろったし、行きましようか。」
いつの間にか奈津美さんが

リーダーシップを取っている、確かに俺達三年生の中では一番しつかりした人だしな、なんとなく保護者っぽいトコがあるんだよな、そんな彼女に促され俺達は駅に入った。

切符を買いホームで電車を待つ、人数の多い俺達は何かと人目につき特に男性達の視線がハンパない、六人共美少女だからな・・・
「お兄ちゃん、里奈

の隣に座ってね？」

「お兄さんの隣は・・・、私が・・・。」

やばい、そーいやまだこの件の決着がついてなかったな、やはりここは友成が蒼太の隣に逃げるしかないのか、その時、俺の後ろにいた奈津美さんと彩花が俺にしか聞こえない様な小さい声でつぶやいてた
「貴志くんの隣か・・・、

ウフフッ、まずは第一ラウンドですわね。」

「貴志の隣には絶対に私が座るんだから・・・、誰にも譲らない。」
何かイヤ

ーな予感しかないけど、第一ラウンドって何だよ、そんな俺の不安をよそに俺達の乗る電車がホームに着いてしまった・・・。

第四十九話（後書き）

この小説を見てくれた人、本当にありがとうございます。

第五十話（前書き）

とうとう五十話まできました、これからもよろしくお願いします。

第五十話

電車に乗る俺達、車内が混んでれば里奈達もワガママ言えな
いだろうと思っただが期待に反して車内には人がほとんどいなかった
なよ。」
「お兄ちゃん、ここ座り
．．．お

兄さん．．．、私の隣．．．、空いてますよ．．．。」

「貴志くん、もしよかったら私の横
に座らない？ いろいろとお話したいんだけどな」
「

たっ、貴志が一人じゃ可哀
想だからっ、私が隣に座ったげるわよ、感謝しなさいよね。」
人

がほとんどいないからどこで
も好きな席に座れる電車内、四人はそれぞれ少し離れた場所に座り
俺を隣に誘ってくる、気持ちは嬉しいがたった四つ先の駅で降りる
ので電車には30分くらいしか乗らない、その僅か30分の為にこ
こまで競い合う彼女達がなんだか微笑ましい、するともうカップル
で座ってる友成と蒼太が
「モテ

るな、青、ここは天さんの四身の拳を使うといいぞ。」

「青山先輩、自分が座りたい所
に行けばいいじゃないですか、このままずっと立つとくんですか、
ちゃんと決めないと彼女達に失礼だと思えますけど。」

友成はともかく蒼太は俺や里奈達の事を心配し
てくれてる、俺は決断した
「奈
津美さん、隣に座っていいかな。」
「

えっ．．．、うん、いいよ、どうぞ」

俺に選ばれ満面の笑顔の奈津美さんと対照
的に沈む三人、しかし俺は彩花に
「

彩花、俺の隣に来ないか、この席なら三人並んで座れるだろ。」

空いてる俺の右隣に彩花を呼

ぼつとする、俺から呼ばれた彩花は顔を赤くして予想通りの台詞を言う

『えっ、私も一緒にいいの、しっ、しょうがないなー、貴志がそう言うのなら座ったげるわよ。』

俺達の向かいの席にも里奈と夕奈

ちゃんを呼んで

『二人共、今は

これで我慢してくれるかな、昨日の夜にいっぱい俺と遊んだだろ、また一緒に遊んでやるから、なっ。』

『じゃあまた里奈にマッサージお願いね、約束だよ、

お兄ちゃん

』

『・・・分

かりました・・・、私にもまた・・・、マッサージ・・・、してくださいね・・・。』

何故マッサ

ージにこだわるのか知らないがとにかく納得してくれた様だな、一仕事終えて安堵してる俺に友成の隣に座るいずみちゃんが話しかけてきた

『色々大変ですね青山

さん、でも何だか楽しそうに見えますけど。』

確かにそうかもしれない、現に前々から感じてた不安は全く無くなった、考えてみたら里奈達四人は元々仲良しなんだし皆それぞれ他人を思いやれる女性達だ、俺の考えてるような仲を悪くする様な争いはしないだろう、後は俺がしっかりしてればいいだけだ。

それから女子四人と俺

は今までの夏休みにあった事とかを思い思いに雑談していた、蒼太も紗恵ちゃんと何だかいい雰囲気談笑していた、まさに爽やかカップルだな、ただ友成はいずみちゃんにこんな愚痴を真顔でこぼしていた

『何故デ ビ朝日

はさす い刑事旅情編の再放送をしないんだ!! 俺が何回テ 朝に電話したと思っでやがる、電話代返せ。』

『近頃色んな三国志作品があるけど何故もつと楽進と李典をメインにしないんだ、なめやがって。』

『今年のCD売上トップ10は全てジャーズかA

Bしかないねーじゃねーか、どおしてこうなったんだ。』

・・・いずみちゃんは真面目に友成の愚痴を聞いている、もはや友成と付き合える女性はこの世にいずみちゃんしか有り得ないよな、友成の愚痴が終わると共に電車は俺達の降りる駅に着いた、そこからバスに20分程乗り（ちなみにバスは割と人が多かったので蒼太と女子六人を座らせ俺と友成はずっと立っていた）バスから降りると友成が

「こつから10分くらい歩けば着くから、それじゃ行くぜよおはんら。」　　こんなクソ暑

い中歩くのかよ、まあ10分ぐらいならいいかな、俺がそんなふう
に思ってたなら紗恵ちゃんが明るい声で皆を鼓舞する

「皆さーん、もうすぐ着くんですから元気だして
いきましよう　たまには歩くのも健康的で美容にもいいかもし
れませんよ。」　　ポジティブな紗恵

ちゃんの明るさに励まされながら歩く事10分、やっと別荘が見え
てきた、これから3日間どんな事が待ち構えているのやら・・・。

第五十話（後書き）

次回は本編をお休みして今までのキャラクターを紹介していこうと思います。

キャラクター紹介 前編（前書き）

五十話突破したのでおさらいの意味も兼ねてキャラクターの紹介をしたいと思います。

キャラクター紹介 前編

青山貴志

17才、

東明高校三年四組の生徒で本作の主人公、見た目は派手な金髪頭で不良っぽく見えるけど性格は明るくて誰にでも優しい世話好きなお兄ちゃん気質の高校生、小さい頃から実父に暴力を受けてきてそれに対抗する為に体を鍛えてきた、そのお陰で同年代の男子に比べて別格とも言える身体能力を持つ、自身が高校一年の時の実父の事故死を機に妹の里奈と共に現在住んでいる祖父母の家に引っ越しその際に頭を金色に染める、ちなみに祖父母は何処か遠くの地に旅立ち貴志達に仕送りだけをしている、高校二年の時から前田理子と清い交際をしていたが三年生進級の目前に工藤恭介に理子を寝取られてしまふ、しかし周囲の友人達の温かい励ましを受けすぐに立ち直った。

以前から色々な美少女とのフラグを立てており特に実妹の里奈からは実の兄としても、一人の男性としても好意を受けて少々困惑気味、現在は楽しいハーレム人生を送っている。

青山里奈

15才、貴志の実妹で東明高校一年二組の生徒、肩まで伸びた艶のある黒髪、幼さの残る顔に控え目なBカップの胸と外見も内面も典型的な萌え系妹キャラ、性格は誰にでも明るく笑顔の眩しい天真爛漫な少女、幼い頃に母親が不倫相手と共に家を出てそれが原因で荒れてしまった父親から軽いとはいえ暴力を受けてきた、そんな自分をずっと父親の暴力から守ってくれた兄の貴志に実の兄以上の想いを抱く、高校生になってからはよりハッキリと兄への好意をアピールする様になるが貴志の幸せを誰よりも願っており貴志が本気で誰かに惚れたらその恋を応援するつもりの様だ。

友成真司

18才、貴志のクラスメイトで貴志が東明高校に転校してきてからの一番の親友、実母を早くに亡くし新た

に出来た継母からは口クに愛情を受けておらず頻繁に恋人の矢島いずみの家に食事をご馳走になる。 スポーツ万能で特にサッカーの実力はプロ級、自称はスーパーストライカーとスーパー頑張りゴールキーパーの二つでどんなポジションでもこなす。

会社を経営していてあまり家の事を省みない父親とはよく奇妙な議論をほぼ徹夜で交わしあう。 結構子供好きで幼稚園のお遊戯会にも無理やり参加する程である、また子供だけではなく自分の友達の為には如何なる協力を惜しまない友情に厚い高校生、ちなみに好きなドラマは（ さ？らい刑事旅情編 ） と平成生まれの高校生とは思えない渋い男である。

高野奈津美

1

7才、貴志のクラスメイトで黒髪のロングヘアをストレートに腰まで伸ばしてる大和撫子な外見をしている、性格も清楚なお嬢様といった感じで極上のスタイルも相まって学校のアイドルと言われていた。 たまたま見つけた怪我をした猫を面倒を見れない自分に代わって貴志が助けてくれたのをキツカケに貴志や真司、理子達と仲良くなる、しかし貴志が理子に無残に裏切られた事で理子とは友人の縁を切る、それが発端で出会いから想いを抱いていた貴志とますます接近する。 以前はよく男子から交際を申し込まれていたがあまりにも貴志と親密な為か現在では交際を申し込まれる事は無くなった。 幼稚園に勤める姉がおり自身もたまに姉を手伝い園児の面倒を見る事がある、そのせいか若干保護者っぽいところがある。

秋野夕奈

16

才、里奈のクラスメイトで中学時代からの友人、ポニーテールがトレードマークの目がパッチリした美少女で里奈よりも胸が大きい。

口数は同年代の少女に比べて少ないが自分の考えている事はハッキリと言う。 寡黙な自分にも温かく接してくれる貴志に淡い想いを抱く様になり貴志も夕奈の両親の別居騒動を体当たりで思いとどまらせるなど夕奈を大事にしている。

高校入学直後に里奈との仲にあらぬ誤解をされて里奈共々クラスメイトからイジメを受けていたが友人の四森蒼太に救われた。

次第に貴志への好意を表に出す様になり貴志の家に手料理を作りに来たり貴志と一緒に風呂に入ろうとしたり貴志を性的に誘うなど静かな性格とは裏腹に大胆な行動をとる様になった。

矢島いずみ

16才、東明高校二年五組の生徒で真司の恋人にして幼なじみの関係である。ショートカットで勝ち気な目をしており非常にボーイッシュな印象を受けるが性格はとても女性らしい。真司と同じ東明高校への入学を望みその事を真司に告げた際に告白もして晴れて恋人同士になった。

料理が苦手だったが真司に美味しい料理を食べさせたい一心で母の美鈴から料理の手ほどきを受ける。その結果、真司を感動させる程に料理の腕を上げた。あまり母親に恵まれていない真司の境遇に心を痛め、将来は真司を自分の家で一緒に暮らさせようとしている。

キャラクター紹介 前編（後書き）

残りのキャラは後編で紹介します。

キャラクター紹介 後編（前書き）

キャラ紹介の後編です。

キャラクター紹介 後編

四森彩花

18才

貴志達のクラスメートでセミショートの髪に眼鏡をかけFカップの巨乳を誇るグラマー少女。以前は貴志達と別の高校に通ってたが親友に当時自分が付き合ってた彼氏を寝取られてしまつて詰め寄るうちにその親友を誤つて大ケガさせてしまい逃げるように東明高校に転入してきた過去がある。

自身と同じく恋人を寝取られた貴志と自分を重ね合わせ工藤と理子に何も報復しない貴志に辛く当たっていたがその様子に疑問を持った夕奈や弟の蒼太から叱責され自身の過去を貴志や里奈達に話す。そんな

過去を知つても尚、自分と友達になりたいと言う貴志達に心を許し、以降は蒼太共々貴志達の友人となる。貴志達と

行動を共にするうちに貴志に恋愛感情を抱く様になりそれとなくアタックするも少し素直さに欠ける、しかし貴志への想いは本物である。

四森蒼太

16才、東明高校一年一組の生徒で彩花の弟。端正な顔立ちをしていて身長も高く勉強も

運動も人並み以上にはこなせる、その上非常に礼儀正しい好青年だが実は小学生時代にクラスメートをいじめていた過去を持つ。

自身のあまりのいじめにその少年が逆上して襲いかかり大ケガを負うがその少年は直後に自殺を図る。なんとか命を取り留めた少年は他所に引越していくが今度は自身がクラスメート全員から拒絶された。それから数年後に姉の彩花がクラスメートに大ケガを負わせたのがキツカケで引越す事となり後に貴志達と出会う。

自身も姉と同じく東明高校に入学したが入学して間もなく友人の里奈と夕奈がいじめを受けてるのを知り二人の為に粉骨碎身、問題を解決させた。現在唯一自身

の過去を話した女子、鈴木紗恵と恋人寸前の仲となり共に自身の過

去の罪への償い以外の答えを探している。

鈴木紗恵

16才、蒼太のクラスメートで身長の低めな元気のいいツインテール少女。ひよんな事から里奈達がいじめられてる事を知り蒼太と共にいじめを辞めさせようと尽力する。後に蒼

太本人から蒼太の過去話を聞く、償う方法が分からないと言う蒼太に共に償い以外の答えを探す事を持ちかける、以後は蒼太と常に行動を共にしていてクラスメートからは公認の仲とされている。

蒼太が虐待を受けていた子犬を助けようとして虐待していた工藤達数人から暴行を受けて大ケガを負った際に貴志や真司達と出会い蒼太は心強い先輩達に恵まれてる事を知る、いろいろと蒼太を振り回す事もあるが誰よりも蒼太の事を認めていて信頼している。

前田理子

17才、貴志達のクラスメートで今時のギャルっぽい容姿をもつ貴志の元カノ。Hのないプラトニックな貴志との交際に不満を抱いておりそんな折に工藤恭介に心も体も虜にされ最終的には貴志を捨てる。貴志と別れた後も貴志や奈津

美達との友達付き合いを望んでいたが自身の二股宣言や貴志の傷心を理解してない言動が仇となり貴志達とは絶縁状態となった。

後に工藤の子を妊娠して産む事を望んだが工藤は頑なに堕ろす事を強要する、逆らう事で工藤が自分から離れるのを恐れた結果、お腹の子を堕ろしてしまう。現在は毎日が楽しそうな貴志達を見て

羨ましがする事もあり工藤を選んだ自身の選択に僅かながら疑問を抱いている。実は生き別れた腹違いの妹がいて少々

複雑な家庭環境が窺える。

工藤恭介

18才、

東明高校三年六組の生徒で外見は非常に優れているが性格はかなり歪んでいる。二年生時にクラス対抗のサッカー

大会があり、当時はサッカー部のエースと称されていたが対戦した貴志に身体能力の差を見せつけられる、終いには貴志のシュートを

顔面に受けるという恥ずかしい結末になり以降、貴志に並々ならぬ敵対心を向ける様になる。　　貴志から理子を寝取ったり、自身に吠えてきたというだけで子犬を虐待してさらにはそれを咎めた蒼太を複数で殴るなどの悪行を重ねる、そんな行為をしても貴志の友人というだけで蒼太に謝罪もしないという非道ぶりである。

現在も理子とは順調な交際を続けているが実は理子以外にも付き合ってる様子のある女性がいる、貴志達は気づいているが理子はまだ気づいていない。

キャラクター紹介 後編（後書き）

主要キャラだけの紹介でしたがひょっとしたら抜けてる部分があるかもしれません、次回から本編です。

第五十一話（前書き）

遂に100000PVを超えてました、ありがとうございます。

第五十一話

夏の日照りの激しい中、やっと友成の親父さんの所有する別荘に着いた俺達9人、まずはそれぞれ持ってきた荷物を整理しようとするが里奈が友成に質問する

あつ、そういえば友さん、私達の部屋割りはどうなってるんですか？

てた友成は

俺達に荷物の置き場所を指示してた友成は

をそれぞれ三人づつで使ってもらう形かな、俺達男子は丁度三人で決まりだから女子は皆で話し合って部屋を決めてくれるかい。

そうだな、友成にしてはまともな配慮だ、俺が親友の適切な処置に安心してたら里奈が皆の前でとんでもない事を言い出した

『え、お兄ちゃんと一緒に部屋がいいよ、里奈はお兄ちゃんと一緒にじゃなきゃ寝れないもん。』

恥じらいのかけらもない事を言う里奈を奈津美さんが優しい口調で制した

『里奈さん、年頃の女の子がそんな簡単に男子と一緒に寝るなんて口にしてはいけません、それに一つの部屋を三人で使うのですから里奈さんが貴志くんと一緒になつても他にあともう一人いるんですよ、ここは我慢なさい、・・・大丈夫、里奈さんにチャンスはまだありますわ、もちろん、私にもですけどね』

優しい微笑の奥に妖しい思惑を覗かせる奈津美さん、そんな彼女に諭されたブラコン妹はリスの様に頬を膨らませて話す

『うー、分かりましたよお、じゃあ夕奈ちゃん、一緒に部屋になろうよ。』

なんとか里奈と一緒に部屋になるのは回避できたみたいだ、奈津美さんには感謝だな、ただし彼女が言っていたチャンスとはどんな意味だというのは聞かない方がいいだろうと俺の直感は告げていた

が。その後、女子六人の話し合いで里奈と夕奈ちゃんの部屋にいずみちゃん加わりあとの三人、奈津美さんと彩花、紗恵ちゃんが一緒に部屋に決まった

『真司く、食事とかはどうなってるの。』

部屋割りを決めた直後に今度は彩花が友成に聞く、友成の言うには昨日までこの別荘にいたお手伝いさんが昨日の内に三日分の食事とバーベキューの用意、それと俺達が住める様に段取りをしてくれたそうだ、なんでも事前に友成が頼んでたらしい、かなり手際の良い友成に珍しく感心する、相当この三日間を楽しみにしてたんだろうな。

荷物の整理も部屋割りも終えた俺達は満場一致ですぐ近くの海に行く事を決めて別荘を出る、五分ほど歩いて着いた海は想像以上に綺麗でしかも誰もいない、こんな海が俺達の貸し切りとはな、女子達から離れ俺と友成、蒼太は近くの岩場に行き服を脱いで水着姿となる、するといずみちゃんの声が聞こえてきた

『真兄く、

準備できたら出てきていいわよ。』

その明るい声に促され岩場から出たらそこには水着の女神が六人もいた

『おっ兄いーち

やん、一緒に泳ごうねっ？』

昨日も風呂場で俺の理性を崩壊寸前にさせた胸の控えめなロリコンには堪らないオレンジビキニの里奈

『・・・お兄さん・・・、綺麗な海ですね・・・、一緒に泳いで・・・、嬉しいです・・・。』

ポニーテールをほどき更にそのクールビューティーに磨きをかけたピンクビキニの夕奈ちゃん

『こんな良い天気でしかもこんな綺麗な海で四森くん達と泳げるなんて・・・、友成先輩っ、ありがとうございます。』

頭を元氣よくペコツと下げツインテールを揺らすチビっ娘、その姿に保護欲をくすぐる水色ワンピースの紗恵ちゃん

『 あゝ、真兄、その水着つてこの前私を選んだ水着よねっ、やっぱり似合ってるよ、今日はいっぱい楽しもうね？ 』

ボーイツシユな魅力だけではなく内面の女性らしさを存分に引き出してる紫ビキニのいずみちゃん

『 貴志く、何ポーっとしてるのよ、そんなに私の水着がセクシーなのかな しょうがないなあゝ。 』

そのFカップの胸と肉付きの良いお尻をグラドルばりの黒ビキニで引き立たしてる眼鏡を外した彩花

『 貴志くん、皆さん、フフフっ、みんなと一緒に遊べて嬉しいですわ、けれども事故だけには気をつけましょうね。 』

モデル並みの脚線美を惜しげもなく見せつけ皆への気配りも忘れない、その黒髪ロングとお椀型バストがこの上なく白ビキニとマッチしてる奈津美さん

『 青山先輩、友成先輩、・・・俺達はこの場にいてもいいんですかね？ 』
自分の姉を含む女性達を直視できない純粹な蒼太、それにひきかえ友成は

『 ムフォーー、この空間はこの世のパラダイスだな、社会人でこのシチュエーションなら一時間で二万は固いぜよ。 』

欲丸出しでワケの分からん事を叫んでる、しかしこの愚か者がこの天国の空間を演出してくれたのだから文句は言えまい

『 友、お前には感謝するけど・・・俺達ってこんな幸せでいいのかな？ 』

目の前にいる水着を着た六人の女神たちに俺も笑みが押さえられない、今からこの女神たちと何をして遊ぶのか俺と友成は期待と股間を膨らましていた、蒼太はどうだかしらないけど・・・。

第五十一話（後書き）

さて、この男女9人どうなる事やら。

第五十二話（前書き）

他愛のない海での一幕です。

第五十二話

女神達がその肢体を惜しげもなく晒している砂浜、俺と蒼太はその空間に順応しきれずしどろもどろしてる中、水を得た魚のごとくハイテンションな友成は

しっ、行くか。」

真っ先に海へと

駆け出す、そんな友成に置いていかれたいずみちゃんは

「あゝ、待ってよ真兄ー、一人でいてー、私を置いてくたー!!」

慌てて友成の後を追う、その無邪気な後ろ姿をつい目で追ってたら今度は紗恵ちゃんが蒼太の腕を掴み

「四森くん行こ？」

泳がなかったら海に来た意味がない

じゃん

」

「あつ、

ちよ、ちよつと待ってよ鈴木さん、そんな急に……。」

紗恵ちゃんに引つ張られながら海に

入る蒼太、さっきのいずみちゃんを引つ張る友成とは対照的な、

まあ蒼太みたいな真面目タイプには紗恵ちゃんの様な元気っ娘が意外と合ってるかもしれないな、そんな余計な心配をしてる俺に彩花が

「ほらっ、貴志、何ボケーッ

と立ってるのよ、私達も海に入るわよ。」

俺も彩花に腕を掴まれ海へと向かう、そんな彩花に里奈

達が噛みついた

「あー、

彩花先輩ズルい!!

お兄ちゃんは里奈と泳ぐんだから!。」

「……違うわよ里奈……、

お兄さんと泳ぐのは……、私よ……。」

「あー彩花さん、なかなかの先制攻撃ですわね、お見事ですわ、でも私も負けませんからね。」

こうして全員が海へと入りそれぞれに絶好の海水浴日和を楽しんでいた、やはりこの炎天下の下での海は最高だな、そんな

感傷に浸つてると

「スキあり〜。」

友成が手

製の水鉄砲を俺の顔めがけて放ってきた、顔面に水を掛けられた俺はすかさず反撃する

「なっ、

にやろっ、これでも喰らえ。」

両手で水をすくい上げ友成に掛ける、すると今度は後頭部に水を掛けられた、後ろを見たら彩花がいた

「ふっふっくん、たーかーしっ、戦場で油断してたら後ろからパクツとやられちゃうわよお」

彩花も手製の水鉄砲で俺を攻撃してきた、そんな2対1と劣勢な俺の両隣にいきなり里奈と奈津美さんが来て俺に助太刀宣言をした

「お兄ちゃん、里奈も協力するからねっ、お兄ちゃんと里奈のラブラブパワーで彩花先輩をやっつけちゃお。」

「貴志

くん、私はいついかなる時でも貴男の味方です、私達の愛の力を見せつけてやりましょう！」

「かな

り恥ずかしい事を述べてるブラコン妹とモデル級の美少女、この場にいるのが仲間内だけでよかったよ・・・、3対2と逆に優勢になった俺達と友成&彩花は互いに水を掛けあつていく、こんな高校生らしからぬ水遊びをしてる俺達にいつしか蒼太や紗恵ちゃん、いずみちゃんも加わってきた、だが夕奈ちゃんはただ一人、少し離れた所で微笑みながらもどこか寂しげに俺達を見ていた、俺は夕奈ちゃんに近づき軽く手製の水鉄砲で水を掛ける

「ははっ、夕奈ちゃん、油断してたなー、夕奈ちゃんも来なよ、俺と組んで友を撃沈させようぜ。」

いきなり水を掛けられ少々驚きながらもすぐに笑顔を取り戻した夕奈ちゃん、パタパタと俺の隣に来て小さい声で何やら呟く

「・・・お兄さん・・・、私達の絆・・・、皆に見せましょう・・・。」

俺と一緒に海に入る夕奈ちゃんに里奈が水を掛ける

く、それく。』

『夕奈ちゃん、来るのが遅いよ
水びたしになりな

がらも嬉しそうな夕奈ちゃん、笑顔で里奈に反撃する

『・・・里奈・・・、フフっ・・・、負
けないから・・・、いきましよう・・・、お兄さん・・・。』

これで全員が水掛け合戦に参加した、少
し幼稚かもしれないが楽しければいいだろう、せつかくここまで来
たんだからな、俺達9人は笑いながらそれぞれ水を掛けあっていた。
・・。

第五十二話（前書き）

まだ海での話が続きます。

第五十三話

皆で水を掛け合った後、今度はビーチバレーを楽しむ、サーブする時に友成が

！！ 何人来ても同じだっ、喰らええ、これが俺のネオタイガーサーブだあ！！

何かスポーツを勘違いしてるんじゃない台詞を大声で叫ぶ、しかしそんな友成も彩花が

いっくわよー。

そのFカット

プバストを揺らしジャンプすると動きが止まり目が彩花の肢体に釘付けとなる、そのたびにいずみちゃんから

「真兄、真面目にやりなさい！！」

頬を両手で思いつき引き張ら

れる友成、しかしヤツは至福の表情で

「ビバア、オッパイい、グレート、オッパイい、真司死すともオッパイは死なずう。」

・・・幸せな男だな、だが俺も純白ビキニを着てそのモデル級の肢体を満天の青空の下に晒してビーチバレーをしている奈津美さんに見とれてたら里奈と夕奈ちゃんが両隣に来てそれぞれ頬を抓ってくる

「いーちゃん！！」

何奈津美先輩ばかり見てるのよお、鼻の下延ばしちやってさ、フンっだ。」

・・・そんないやらしい目で・・・奈津美先輩を見ないで・・・見るなら・・・私を見て下さい・・・。

そんな事言われてもなあ・・・健康な男子高校生なら誰でも奈津美さんみたいな美少女がビキニでビーチバレーしてたらついガン見しちゃうだろ、俺は友成や蒼太の凄いプレーよりも奈津美さんや彩花の美しすぎる水着姿の方に目が釘付けとなっていた。

ビーチバレーが

終わると今度はビーチバレーで使ってたボールをスイカ代わりにしてスイカ割りに興じる、トップバッターは何故かえらく興奮してる紗恵ちゃんだ、ツインテールに低身長、水色のワンピースとその姿は彼女自身のアニメ声と相まってまるでテレビアニメの中から出てきたキャラクターみたいだった

「うわあ、ホントに真っ暗、でも凄くワクワクするね。」

里奈やいずみちゃんが彼女にボールの場所を教えてる、何とかボールに近づいた紗恵ちゃんはおもちやのバットを振り上げ

「チェストおー。」

振り下

ろしたバットの先はボールとはあさつての方角だった・・・

「あ、ん、悔しー、次は絶対に当てるんだから。」
悔しがるその

姿も思いっきり保護欲をくすぐられる、同じロリ系でも里奈はまだ年相応に身長が伸びてるが紗恵ちゃんはどう見ても中学生にしか見えない、下手したらちよつと発育のいい小学生でも通るだろう、そんな失礼な事を考えてたら蒼太が立ち上がり

「よし、今度は俺がやってみようかな。」

スイカ割りに挑戦しようとする大人びた外見の蒼太、性格もそうだが見た目も紗恵ちゃんとは対照的な奴だよな、そんな蒼太に紗恵ちゃんがエールを送る

「頑張つてね四森くん ファイトだよ。」

「ありがと鈴木さん、まあ見て目隠してる筈の蒼

てくれよ。」

太は周囲の声の通りに的確にボールに近づく、そして

「ここだあ！！」

振り下ろしたバットが見事にボールに当たった、目隠しを外しガッツポーズをする蒼太に蒼太以上に喜んでる紗恵ちゃん

が
「すっごーい、四森く

んやるう。」

猛然と蒼太

の背中に飛びかかり蒼太が紗恵ちゃんをおんぶしてる形になる、ウブな蒼太は顔を赤らめ

「 なっ、

ちよ、ちよつと鈴木さんつてば、いきなりこんな事・・・、みんなも見てるんだし、お願いだから離れてくれよ。」

「 あっ・・・、ゴメンね四森くん、私つたらつい嬉しくつて・・・。」

名残惜

しそつに蒼太の背中から離れる紗恵ちゃん、皆が盛り上がる中、今度は友成が挑戦するもあつさり失敗する、里奈も夕奈ちゃんも面白そうだと挑戦を試みるがあえなく失敗、結局蒼太以外は皆失敗だった。

スイカ割りにも飽きた頃になる

といずみちゃんが

「 少し早いけど

そろそろ別荘に戻りませんか？ みんな疲れてるみたいですし・・・、まだ明日も明後日も遊べますよ。」

確かにそうだな、そんないずみちゃんに奈津美さんも賛同する

「 そうですわね、

今日は初日ですからね、皆さん移動の疲れもあるでしょう、また明日いっぱい遊びましょうよ。」

二人の意見に誰も反対しなかったので結局今日はこのまま海を後にした、今日が終わってもまた明日も美少女達の水着ショーは続くのだ、俺はこんなスケベな期待をしていたのだがまだ今日のイベントは終わってなかったのだ・・・。

第五十三話（後書き）

次回もほんの少しだけエッチなお話です。

第五十四話（前書き）

暫くはダラダラな展開になると思います、何卒ご容赦を。

第五十四話

海から戻った俺達はそれぞれの部屋へと戻る、相部屋の友成は部屋に入るなり

「ふぁー、なんか眠くなってきたな、夕食の準備まで一眠りするかな。」

やはり疲れてたんだな、正直友成が一番体を動かしてたからな

「今寝たら夜に寝れなくなりませんか？ まあ俺も眠いんですけどね。」

蒼太もあくびを出して、てゅーか二人共寝たら俺は何すればいいんだよ

「眠たい時には寝た方が体にいいぞ蒼太、青はどうするんだ？」

友成が聞いてくるが正直俺は眠くはない、眠たい二人を邪魔するのも悪いので俺は散歩でもして時間を過ごす事にした。

俺が外出の準備を終える頃にはもう二人共寝息をたてていた、静かに部屋を出て廊下を歩いてると

「あらっ、貴志くん、戻ってきたばかりなのにもうお出かけするの？」

ちょうど部屋から出てきた奈津美さんと遭遇する、彼女の着てる部屋着は薄手のＴシャツに膝までのスカートと清楚な彼女らしい

「うん、同居人の二人が疲れから寝ちゃってね、暇だから適当に散歩でも行こうかと思ってさ。」

「そうなの、もしよかったら私の部屋に来ないかしら、私の部屋も彩花さんと紗恵さんがお菓子を買いに行くって出ちゃったから一人で退屈してたのよ。」

えっ・
「・・・それって奈津美さんと一緒の部屋で２人つきりって事が、急な事で返答に困ってたら」

「貴志くんも暇なのでしょう、暇人同士でお話でもしましょうよ。」

曖昧な俺に業を煮やしたのか奈津

美さんは強引に俺の腕を掴み自分の部屋に引き入れたのだった。

何も言うヒマを与えられず部屋に入れられた俺は落ち着きなく部屋を見渡す、キョロキョロしてる俺に奈津美さんはいつもの穏やかな口調で話しかける

「どうしたの？ 貴志くん達の部屋もこの部屋と殆ど変わらないでしょう。」

いつ彩花達が帰ってくるかもしれないのに奈津美さんは全く動揺してない、もしかして変な事を考えてるのって俺だけか、そう思うとなんだか気が楽になった俺に奈津美さんは思いも寄らぬ不意打ちを放ってきた

「それじゃあ、うふふつ、せっかくだから私も貴志くんマッサージしてもらおうかしら」
何じゃそりゃ、一瞬間

が真っ白になったじゃないか

はっ・・・、あつ、あのー、奈津美さん？ いったいそれはどう

いう意味なのかな・・・。」

「聞いたままよ、水着を着替えてる時に里奈さんと夕奈さんが貴志くんマッサージしてもらったって嬉しそうに自慢してたのよ、すぐくお上手なんですってね、だから私もお願いしようと思ったのよ。」
そう言いつつ彼女はなんと

着ている服を脱ぎだした

「ちょ・

・・・、奈津美さん！！ 何してんだよ、冗談は止めてくれ！！」

幸いというか残念というか彼女の脱いだ服の下は先ほどの水着だった、恥ずかしがってる様子が微塵もない奈津美さんは

「フッフ、貴志くんったら、カワイイですわね？ ちゃんと素肌にマッサージしないと意味ないでしょう、だから水着も脱がなかったですよ、貴志くんマッサージしてもらう為にね・・・、それよりも早くなさってくださいな、彩花さん達が帰ってきてしましますわ。」
奈津美さんの

白水着姿に俺のムスコはMAXになりつつある、それを何とか隠し

ながらも奈津美さんに無駄な抵抗を試みる

「いやっ、あのね、何で奈津美さんはそんなに俺にマッサージしてもらうのにこだわるんだよ、別に誰がマッサージしても同じだと思うけど・・・。」

俺がやっとそれだけ言つと奈津美さんは俺に近づき

「もっう、貴志くんたらまだ気づかないの！ それともワザと言つてるのかしら、私は貴志くんにしてもらわないと意味がないのよ、貴男以外の人にこんな事頼みませんわ。」

えっ、それってつまり奈津美

さんは俺の事が・・・

「貴志く

ん・・・、私は貴男の事が大好きです、初めて会った時からずっと好きでした、貴志くんがああ最低女に裏切られた時も本当は悪いんだけど私は嬉しかったの、ごめんなさいね、だってこれで貴志くんはフリーになっただからですから、でも私はあんな女よりも貴志くんを想つてるのよ、誰よりも・・・。」

・・・こんな力オスな展開があつていいのかよ、白ビキニ姿で衝撃の告白をする奈津美さんに俺は目が離せなかった・・・。

第五十四話（後書き）

作者はこーゆー話は苦手なので・・・、他の作者さんみたいに上手くは書きませんが努力します。

第五十五話（前書き）

またマッサージです、ワンパターン作者ですね。

第五十五話

奈津美さんが俺に告白してきた、あまりの事にまだ俺の頭は理解しきれてない

「返事は……。」 貴志くん…… 目の前

の彼女はかなり不安そうな表情で俺を見てる、どうすりゃいいんだ、別に俺は奈津美さんがイヤっていう訳じゃない、だがどうしても彩花や夕奈ちゃん、そして里奈の事を考えてしまっ、我ながら情けない男だよ、何も言えずに黙ってる俺を見て奈津美さんは

「やっぱり、里奈さん達の事が気になるんですね……、そうだと思ってましたけどね。」

優しくそう言ってくれる、本当に俺って奴

あ…… 「だったら、今すぐに返

事を返してくれなくてもいいですから……、代わりにマッサージはしてくださいね もし断ったりしたら……、里奈さん達の目の前で貴志くんにキスしちゃいますからね。」

はい？ 何をしたらそんな発想がでてるんだ、俺がフリーズしてる間に小悪魔っぽい笑みを浮かべてる奈津美さんはスタスタと部屋にあるソファアの上にうつぶせになり

「それじゃあ貴志くん、最初は足からお願いしますね 後はお腹の周りも頼みますわ。」

もうマッサージは決定してるのかよ、でも白ビキニ姿で横たわる奈津美さんが醸し出す色香の前では俺にこの部屋から出るという選択肢はなかった、だって俺も男子高校生だからな、うつぶせになって晒されてる奈津美さんのお尻が俺の理性を奪っていた……

「ふあん……、貴志くん、ホントに……、上手ですわあ、あん？、こんな気持ちいいの……、初めてえ？」

本能のままに俺は

奈津美さんの足をマッサージしていた、彼女の艶声もまた、俺の脳内をピンク色に染める、いつ彩花達が帰ってくるかもしれないというドキドキ感も興奮を高めるスパイスになっていた、一通り足を揉み終え今度はフトモモをゆっくり揉むと

「あつ・・・、いいい・・・、気持ちいい！！」

こっ、こんなので、わたしい、だめえっ、おかしくなっちゃうう！！」

奈津美さんは大きい

声を出し体を震わせる、その声に俺はいくらか冷静になり

「しっ、奈津美さんっ、声がでかいよ！！」

里奈達がここに来ちゃうかもしれないだろ。」

俺の指摘に一瞬はつとした表情をして

口を手で押さえる奈津美さん、でもすぐに口から手をどけて彼女は

「だって・・・、貴志くんの手

が・・・、気持ち良すぎるんですもの？ あんなにされたらついでに

も出ちゃいますわ。」

目を虚ろに

して俺を見る、そのとろけそうな視線にまた我を忘れそうになるが

「彩花達もいつ帰ってくるか

分からないだろ、こんなトコ見られたら変な誤解されるから早く終わらせないとね。」

早

くマッサージを終わらせないとこのまま奈津美さんに行くトコまで行ってしまっ、そんな俺の焦りを知ってか知らずか奈津美さんは微笑みながら

「フッフ、

彩花さん達はいさつき出たばかりだからまだ戻ってこないわ、里奈さんと夕奈さんでしたら今はお風呂に入ってますからこの部屋に来る心配はありません、だから何も気になさらずにマッサージを続けてくださいな？」

その誘惑

にあっさり負けた俺は奈津美さんの背中や腰回り、肩などいろんな所をマッサージする、その度に彼女の口からは

「いいい、いいですわあ、はうっ、はあ

あゝん、たっ、貴志くん？ 愛してるのお？？」

このまま彼女を襲いそうになるのをわずかに残る理性を総動員して何とか押さえる、15分くらいでマッサージは終わり奈津美さんも服を着ていく、着替え終わると彼女は俺に礼を言う

「本当にお上手なマッサージでしたよ、是非またお願いしますね」

誰もいない時ならね、こんな状況では落ちつかない事この上ない、彩花達が帰ってくる前に自分の部屋に戻ろうとする俺に

「貴志くん、さ

っきの告白は本気ですからね、本当に貴男の事が好きなんです、私待ってますから、貴志くんが私を選んでくれる日まで……、いつまでも待ちます。」

奈津

美さんは真剣な想いをぶつけてくる、でも里奈や夕奈ちゃんの真剣な想いも俺は知ってる

奈津美さん……、いつか……、いつか俺もちゃんとした返事を出すから、ごめんな、こんなヘタレな男でさ。」

それだけ言って奈津美さん達の部屋を出る、自分のヘタレ加減に呆れつつも自分の部屋に戻りまだ眠ってる友成や蒼太と共に俺も布団に横たわった。

第五十五話（後書き）

いくら気持ちいいマッサージでもあんな声だしたりはしませんよね、この小説はフィクションです。

第五十六話（前書き）

もうすぐ100000ユーロを突破します、大感激です。

第五十六話

奈津美さん達の部屋から戻った俺は夕食の準備が始まるまで仮眠をとっていた、さっきの奈津美さんの告白を思い出しながら布団に横たわってたら俺の携帯にメールがきた、里奈からだ

「お兄ちゃん、今なにしてるの？」

よかったら友さん達と里奈達の部屋に来ない？ 夕食の時間まで一緒に遊ぼう」

「

せ

つかく誘ってくれたのは嬉しいが友成も蒼太もまだ寝てるしな、俺一人で行くのもなんだしここは寝ててメールに気づかなかつたという事にしよう、そうと決めれば夕食までの約二時間、本当に寝ようか。

里奈のメールがきて1

0分くらいしたら部屋のドアを遠慮がちにノックする音が聞こえてきた、ここは寝たフリしかない、そう思って狸寝入りを続けるがなんとドアを開けて里奈と夕奈ちゃんが入ってきた、だがそれでも友成と蒼太は起きない、俺達の部屋に入った二人は小さい声で

「あー、みんな寝ちゃってるね、

そんなに疲れてたのかな？」

「・・・里奈・・・、戻ろう・・・、起こしたら・・・、

お兄さん達に・・・、悪いから・・・。」

さすが夕奈ちゃん、このまま帰ると思われたが里奈は帰ろうとはせずに

「せつかく来た

んだからお兄ちゃんの寝顔を見ていかない？ こんなチャンス滅多にないよ。」

何言ってやがる、

頼むから夕奈ちゃん、里奈を連れて帰ってくれ、俺は夕奈ちゃんを信じてたが彼女は

「・・・お兄さ

んの・・・、寝顔・・・、私も見たい・・・。」

あっさり里奈に寄せられた、なんてこった、ただ寝顔を見られるだけなら別にいいか、今起きるのも逆に面倒

な事になりそうだしな、結局里奈達は10分くらい部屋を出なかった、狸寝入りを続けていた俺には分からなかったがジツと俺の寝顔を見てたんだろうな。

里奈達が部

屋から出たので狸寝入りをやめて携帯で小説を読んでいる、すると蒼太が起きてきた

「ふあ

、あつ、青山先輩、俺ってどのくらい寝てたんですか。」

「もう5時過ぎてるよ、そろそろ友も起こすか、夕食の準備をしないといけないしな。」

友成を起こすと三人で一階のキッチンに行く、そこにはもう奈津美さんと彩花、紗恵ちゃんが夕食のバーベキューに使う肉と野菜の用意をしていた

「あらつ、皆さん、もうすぐバーベキューの準備も終わりますからね、ゆっくりなさっててください。」

そう言いながら冷蔵庫から肉を出してる

奈津美さんに友成は駆け足で近づき済まなさそうに詫びる

「奈津美さん、彩花も紗恵ちゃんも来るのが遅れちまってゴメン！ 後は俺がやるから皆はゆっくりしてくれよ。」

「もうほと

んど終わってるわよ、真司もそんなの気にしないでいいから私達にまかせなさい、私達が好きでやってる事なんだからさ

ねっ、

紗恵。」

楽しそうにおにぎりを作

ってる彩花が友成に言うとな人数分の食器を準備している紗恵ちゃんも

「そうですよ、それに

私達は友成先輩のお陰でこんな素敵な別荘に泊まれるんですから、せめて夕食の準備でもしないと逆に私達が申し訳ないです。」

友成に感謝の気持ちを伝える紗恵ちゃ

ん、そこにベランダの外から里奈の声が聞こえる、声のする方向を見たらすでにバーベキュー用のテーブルが用意されてそこには里奈と夕奈ちゃん、いずみちゃんがいた、飲み物を順々にコップに注いでいるいずみちゃんが

「真兄

「青山さんも蒼太くんも、準備はもう大体終わってるからね、早くこっち来なさいよ。」 俺や友成

の一つ下なのにお姉さんっぽく言っただけ、結局俺達男子三人は何も手伝わずにバーベキューにありつける事になった、先に準備をしてくれた女子達に感謝しつつ皆で美味しいバーベキューを楽しむ、俺と友成はせめて肉や野菜を焼く当番でもしようとするが奈津美さんといずみちゃんからその役もあっさり奪われる

「二人のする事じゃありません、焼くのは私といずみさんに任せて二人はどんどん食べて下さい。」

「真兄、青山さんも、これは女性の役目ですよ、ほらっ、いっぱい食べて下さい、まだたくさんありますからね。」 いずみ

ちゃんが焼けた肉を友成と俺の皿に入れてくれる、何から何まで彼女達には甘えっぱなしだな、まだまだバーベキューは始まったばかりだ。

第五十七話（前書き）

ダラダラな展開ですみません、まだ別荘一日目です。

第五十七話

皆でバーベキューを楽しむ事20分、まだまだ肉も野菜も豊富にある、この別荘のお手伝いさんはかなりの量を用意してくれていた

お肉も焼けたよ。」

肉をくると

「・・・野菜も食べないと・・・駄目です・・・。」

夕奈ちゃんは野菜をくれる、お陰で俺の皿には常に肉か野菜のどちらかがある、もう少しゆっくり食べたいがな、ふと見ると蒼太も紗恵ちゃんから

「四森くん、あまり食べてないんじゃない？ 夏はしっかり食べないと夏バテしちゃうよ。」

付きっきりで食べ物を渡されてる、真面目な蒼太は

「鈴木さん、俺にはかり渡してないで自分も食べるよ、俺は自分のペースでゆっくり食べるから。」

あくまで優しく諭す、元気で優しい紗恵ちゃんと真面目でクールな蒼太か、なんだかんだで似合いの二人だよな、もう一つのお似合いカップルも熱々だ

「いずみ、こっちも焼けてるぞー。」

「あつ、アリガト真兄ー、フッフ、また冷蔵庫から出さないと肉が足りなくなるわね。」

今は二人仲良く肉を焼いている、鉄板に負けないくらいに熱い二人だ

「みんなー、おにぎりもあるからね、お米もちゃんと食べないと夏は乗りきれないよ、あつ、蒼太ー、台所にまだもう一皿あるから取ってきて。」

台所からおにぎりを大きい皿に乗せ彩花が出て来た、姉から言われた蒼太は

「そのおにぎりって姉さん

が作ったの？」

『そうよ、

蒼太も私のおにぎりの味は知ってるでしょう、今日はいっぱい食べる人がいるから気合い入れたわよ。』

彩花は自慢げにその大きな胸を張る、俺と友成はつい彩花の胸に目が行ってしまうがそれぞれ奈津美さんといずみちゃん

んが
『貴志くん、食事を食べるか胸に見とれるかはつきりなさい、お行儀が良くないです。』

『真兄ったら、またお仕置きされたいの、ほっぺが伸びるだけじゃ足りないのかしらね。』
お灸を据えてくる、こんな

トコで友成とお揃いとはな、そんな俺達を見た彩花は顔を赤くして
『もうっ、しょうがない二人ねー、ほらっ、貴志も真司も食べてよ、美味しいんだからさっ。』
彩花からおにぎりを渡されー

口食べてみる
『おうっ、マ

ジゅめー、さすが彩花だな、塩加減が絶妙だよ。』

同じく渡された友成も

『ああ、本当に旨いよ、彩花がこんな料理が上手いとか知らなかったな。』
絶賛す

る俺達に彩花はさらにニコニコ顔になり

『でしょー、まだまだあるからたくさん食べてね、みんなも食べなよー。』
他のみんなも

一様に美味しいと食べている、そんな中いずみちゃんが彩花に

『彩花さん、本当に美味しかったです、よかったら今度私にも作り方教えてくれませんか？』
『

彩花は快く承諾する、それからはいろいろと話しながら食事を続ける、やがて肉とおにぎりが無くなり時計を見たらもう九時過ぎだった、片付けを全員で行いそれぞれ部屋へと戻ろうとするのだが里奈が俺達を呼び止め

『お兄ちゃん、もう部屋に戻

っちゃうの？　まだまだ夜はこれからなんだよ、そのリビングでみんなでお話しよーよ。」　　里奈

の誘いに友成も　　「確かにそう

だよな、こんな機会とか滅多にないんだし、今夜は心ゆくまで話すとするか、なあ。」　　高いテンション

で賛成してる、他の皆もまだまだ話をしたい様だ、こうしてリビングで談話の続きをする事となった。

リビングに集まった俺達はお菓子やジュースを用意してテーブルに座る、男が三人で女は六人か、まるでテレビとかで見たキャバクラみたいだな、最初に里奈が好きな洋服の話をすれば奈津美さんは小さい頃の夢を話したりする、彩花が幼少時代の蒼太の話をすれば蒼太は逆に彩花のお転婆な幼少時代を話す、こんな感じでそれぞれが楽しそうに話している、そんな中で俺や友成は聞き手になってたが紗恵ちゃんが唐突にこんな事を言い出した

「そう言えば青山先輩と友成先輩って最初はどんな出会いだったんですか？　2人を見てたらなんか気になっちゃって……。」　　気になる事

かな、しかし話さないのもなんか変だし、俺が迷つてると友成が寂しそうな笑顔で話す　　「分か

った、話すけどあまり楽しくない話だよ、それでよかったら聞いてくれ、いいだろ、青。」　　そうだな、

別に隠す事じゃない、俺が無言で許可すると友成は俺と出会った時の話を皆に語り始めた。

第五十七話（後書き）

次回は貴志と真司の過去話です。

第五十八話（前書き）

真司視点で進む過去話です。

第五十八話

高校生になって一月あまり経ったある日、ウチのクラスに転校生がやってきた、そいつは頭を金髪に染めてはいるが服装は普通のなんかアンバランスな奴だった、その男の名は青山貴志、挨拶も普通とますますわからん奴だ、休み時間にはクラスの女子達が青山に

「ハーフだつたりしちゃうの？」

「もしかして青山くんって懐かしのヤンキー君だつたりする？」

「いろいろ

る聞いている、苦笑しながら青山は答える

「別に俺は不良でもハーフでもないよ、転校をきっかけに以前の自分を変えなくなっただけだから。」

よく分からん答えだな、でも不良とかじゃないんだろ、それでもまだ青山に質問責めを続けている女子達にクラスの問題児である相良美奈子（さがらみなこ）がうつとおしそうに

「うるさいわねー、たかが転校生一人にさー、ここは中学校じゃないんだよつ、恥ずかしい！！」

またいつもの如くクラスメートに噛みつく、彼女はいつもこうだ、誰とも仲良くしようとせず常に一人、当然友達なんていやしない、割と可愛いのにもったいないな、美奈子から言われた女子達は美奈子に悪態をつきながらも青山から離れていきすぐに休み時間も終わった。

青山が転入して五日後にある事件が起きた、体育の授業が終わり学生服に着替えた俺の財布が無くなっていった！！二万も入ってたのに、男子は皆一緒に体育をしてたから犯人の訳がない、体育の授業の前には財布はあつたのだから、だが女子に話すと意外な事実が分かった、美奈子が体育の授業時間にいなかったのだ、体調が悪いと言って休んだらしい、俺はすぐに美奈子を

問い詰める

美奈子！

お前体育の時間どこにいたんだよ？ 俺の財布がその時間に無くなっただけど、お前、何か知らないか？

なんか美奈子を犯人と思ってる様に聞こえる

俺の詰問に美奈子は反論する

知らないわよ、私が教室に来た時は財布なんて無かったし、それに大体学校にそんな大金持つてくる方が悪いんじゃない。

そのあまりな言い方について美奈子を怒鳴ってしまおう

者が！！ 人の財布盗つといてとぼけるなよ。

自分で言つといて酷い事言つたなと思ったがもう遅い、だがそんな睨み合う俺達に青山が間に入ってきた

友成くん、言い過ぎじゃないのか、もし相良さんが犯人じゃなかったらどうするんだ。

確かにそうなんだが今の俺にはそんな青山の言葉も耳に入らなかった

だよお前、関係ねーだろうが、それとも美奈子が盗つてない証拠でもあんのかよ。

山にもきつく当たるが青山は意に介さず

証拠なんてない、でも相良さんがあんたの財布を盗つた証拠もないだろ、体育の時間にいなかったただけだ、それだけで相良さんを犯人だなんて決められないんじゃないのか。

耳が痛くなってきた、ばつの悪くなった俺は逃げるように学校を早退した。

3日後、放課後に青山から誘われて俺は青山と共に体育館裏へ行く、そこで青山から

友成くん、これ、相良さんから・・・。

青山が俺に渡したのはなんと無くなった俺の財布だった、思わず青山の胸ぐらを掴みかかるが青山は俺の手を離そうとせずに悲痛な表情で話を続ける

・・・相良さんが昨日の夜に俺の家に来てね、その時に渡されたんだ、友成くんには本当に悪い事をしたって悔いてたよ。」

そういえば美奈子は俺が財布を無くした次の日から学校を休んでたな、けどやっぱり美奈子だったんじゃないか、しかも俺にじゃなくて青山に渡すとか何なんだよ、それを青山に問うと

「どうしてもあんたに会う勇気が出なかったって言ってたよ、それに彼女はもう学校を辞めたんだ、これからは家族の為に働きたい、まだ15なのにな。」

学校を辞めた？ その事実には驚くもとりあえず青山から手を離し財布の中を確かめる、金も無くなつた時のままで全く手をつけた様子はなかった、俺はふと気になった事を青山に聞く

「美奈子はどんな関係なんだよ、お前って一週間前に転入してきたばかりだよ。」

青山が理由を話し

てくれたがそれはあまり聞きたくない内容だった

「俺が転入した日の帰りにウチの近くでたまたま怪我をしていた相良さんに会ったんだ、バイト中に怪我してね、強引にウチに誘って手当てをしている時に彼女と話をしたんだよ、相良さんの家は早くに父親を亡くし母親は今重い病で入院してて相良さんがなんとか生活費を稼いでるんだそうだ、まだ小さい弟や妹がいるし他に頼れる身内もないってね・・・。」

それだけのおおよその見当はついた、多分日頃から金銭に苦労してるであろう美奈子はその日、誰もいない教室でたまたま見つけた俺の財布を見てつい魔が差したんだろうな、確かに美奈子も可哀想だけどさ、だからって人の財布を盗むのは・

・友成くん、相良さんは本当に後悔してたんだ、あんたの財布を盗った事を、許せとは言わないけどせめて追いつめられてた彼女の苦しみだけは分かってくつてくれないかな、この通りだ、頼む。」

そう言って青山は俺に土下座をする、なんで美奈子

の為にここまでするんだよ

「ち

よ、青山、頭を上げろって、なんでだよ、なんで美奈子の為に前
がここまで……。」
無理

やりに青山を起き上がらせる、俺には青山がここまでする理由が分
からなかった、やがて青山は目を伏せて話し出す

「……泣いてたんだ、彼女……俺
には里奈って妹がいるんだけど、怪我の手当てをしてた時にその里
奈が作ったおにぎりを食べて、ポロポロと涙を流して泣いてたんだ。
……、そんな彼女を見てたら少しでも救ってやりたいと思った、そ
れだけだよ。」
そういう事だっ

たのか、青山はそんな美奈子を信じてやりたかったんだな、青山の
想いに触れた俺は
「青山、も

う分かったから、財布の事は誰にも言わない、美奈子もきつと辛か
っただろうしさ、それよりお前って凄いよ、そんな派手な頭してる
ってのに一週間前に知り合ったばかりの美奈子の為にそこまででき
るもん、俺にはとても真似できない……、けどお前とはなんか
上手くやれそう、これからは仲良くしようぜ、なっ。」

こうして青山とは友達になった、元々
俺と青山は性格の相性も良くすぐに親友と言える仲になった、その
仲は今も続いている……

「……とまあこ

ーゆー事があったんだよ、青とはその時からの親友なんだ、なあ、
青。」
話を聞いてたいず

みや奈津美さん、四森姉弟達は皆、何か複雑な表情をしていた、里
奈ちゃんや紗恵ちゃんなんて今にも泣き出しそう、そんな重い空
気の中、一番最初に口を開いたのは奈津美さんだった

「真司くん、その後相良さんはどうな
ったのかしら？ 私達はただの転校だと思ってたけど……。」

その質問には俺の代わりに青山が答え
てくれた
「相良さんが退学し

たすぐ後に彼女のお母さんが亡くなったそうだ・・・、それから
遠くの親族が引き取ったらしい、その後はもう俺達も分らないよ。

青山が話し終わると紗恵ちゃんが泣き
出してしまった、泣きながら彼女は

「うつつ・・・、美奈子さんが可哀想すぎますう、グスつ、
確かに友成先輩の財布を盗ったのは悪い事だけど・・・、でも誰か
美奈子さんを助けてあげられなかったんですか!!」

紗恵ちゃんの悲痛な叫びを聞いた俺は彼女を
なだめる様に優しく話す

確かに当時の美奈子是不幸だったかもしれない、でもだからって
未来まで不幸になるとは限らないだろ、大丈夫、きっと美奈子なら
幸せになるよ、俺はそう信じたいんだ。

「真兄・・・。」

俺がそう言うといわずみ達の表情が少し明るくなった、それを見
てこの話を皆にしたのは間違いじゃなかったと確信した、美奈子の
幸せを願いながら俺達は日付が変わるまで笑いながらいろんな話を
していった。

第五十八話（後書き）

やっと1日目が終わった・・・。

第五十九話（前書き）

今回は貴志視点でいきます。

第五十九話

別荘に来て二日目、昨日は深夜1時過ぎまで皆で盛り上がった、あんな楽しい夜は初めてだった、それでもいつも通りに朝7時前に起床、顔を洗おうと洗面所に行けば先客がいた

「あつ、貴志、おはよう、貴志も朝早いよね、私なんていつもならまだ寝てるのに今日に限って早く起きちゃったのよ。」

彩花が顔を洗っていた、まだ早朝だからそのFカップの胸を引き立てる様なカツコをしてる、ブラひもが見えてるランニングシャツに素足むき出しの短パンとまあ朝からフェロモンムンムンだよ、とても彩花を直視できない俺は

「おはよう・・・。」

気弱な返事を返す、そんな俺に彩花は悪戯っぽくも妖しくもある笑みを浮かべ近寄ってくる

「か〜し〜、私の格好に興奮してるんでしょー、フフっ、顔赤くしちゃってさっ、可愛いーんだから　そうだっ、まだみんな起きてないし二人で散歩行かない？　たまには私と2人つきりで遊んでくれてもいいと思うけどなー。」

まずい、彩花がめっちゃ可愛く見える・・・、戸惑ってる俺に彩花は更なる追い討ちをかけてくる

「いいでしょう貴志、もし断るって言うならあの事、里奈と夕奈に話しちゃおうかなー。」

何じゃそら、なんで里奈と夕奈ちゃんの名が出てくるんだ、俺には不吉な予感しかしてこなかったがその予感は次の彩花の言葉ではつきりと当たってしまった

「貴志さあー、昨日奈津美から告白されたんでしょう、私も紗恵も話を聞いてたんだよね。」

聞いてたのか、あの時はどっかに隠れてたんだな、彩花は話を続け

る

『マッサージも上手らしいじゃ

ない、奈津美にあんな声出させてさ、奈津美の言う事は聞けても私の言う事は聞けないの！！』

これは断るのは不可能だと悟った俺は彩花と朝の散歩に行く事にした。

適当に服を着て玄関に行く

これまた着替えた彩花が先に来ていた、まだ寝てる皆を起こさない様に静かに玄関のドアを開け外に出る、外に出ると彩花は

『まだ7時過ぎたばかりだけど暑いわね、とりあえずどこかで朝ご飯食べようよ、お腹も空いたし。』

そう、俺達は朝食を食べずに出たのだ、しかしまだ朝の7時過ぎだ、コンビニくらいしか店も開いてないだろうに、その事を言ったら彩花は不敵に笑い

『フフフ、甘いわね貴志、別にコンビニじゃなくてもこの時間に開いてるお店はあるんだから。』

そう言いながら彩花は俺の前を歩く、ついて行く俺は彩花が連れてきた店を見てなるほど感心した、その店はパン屋だった

『へえー、こんなトコにパン屋とかあったのか、彩花は昨日この店を見つけたんだな。』

彩花の言うには昨日紗恵ちゃんと買い物に行った時に見つけたそうだ、彩花と店に入りサンドイッチや飲み物等を買っていく、ちなみに俺が奢ってあげた、その後近くの公園に行き日陰のベンチに彩花と腰かけ一緒に朝食をとる

『うん、たまにはこんなのもいいんじゃないか、外で食うパンも結構美味しいし、朝の散歩も悪くないもんだ、なあ、彩花。』

セミの鳴く声を共に聞きながら彩花とパンを食べる、そしたら彩花がサンドイッチを一つ持って俺に

『はいっ、あ〜ん。』

・・・なんか彩花らしからぬ行為だな、でもこのFカップ眼鏡っ娘の萌え攻撃にあっさり陥落した俺はそのままサンド

イッチを頂いた、俺の口に自分の持つサンドイッチを入れた彩花はニヤリと笑い

『 どう

よ貴志、ナイスバディーな美女から食べさせてもらったパンの味は、美味しいでしょ、はいっ、それじゃ今度は貴志が私に食べさせてくれる

・・・誰もいない

よな、俺が断つても納得する彩花じゃないのは分かってる、観念した俺はサンドイッチを一つ持ち彩花の口に入れる、それだけで彩花は心底嬉しそうにはしゃいでいた

『 きゃーん、美味しいわねっ ありがと貴志、ほらっ、まだあるからどんどん食べよ。』

どうにも彩花は皆という時と俺と2人っきりの時では性格が変わるみたいだ、まあいいんだけどな、彩花の笑顔を見てたらそう思ってしまうのだった・・・。

第五十九話（後書き）

なかなかネタが思い浮かびません、他の作者さんはやはり凄いですね。

第六十話（前書き）

貴志と彩花のまったりとしたお話です。

第六十話

彩花と朝食を食べ終わるとしばらくベンチでまったりとした時間を楽しむ、端から見たら俺達はまず間違いないカップルに見られるだろうな、俺がそんな事を考えてたら彩花が

『どうしたの貴志？　なんか黙りこんじゃってさっ、なんか心配事でもあるの、それとも・・・』

彩花の顔がだんだん暗くなっていく、どうしたんだ、逆にこっちが心配になり彩花に聞いてみる

『それともってなんだよ、と言うよりどしたんだ彩花？　お前の方が元氣ないんじゃないのか。』

俺がなんの気もなしに言うのと彩花は恥ずかしそうに顔をうつむかせ

・・・私と一緒にいるの、楽しくない？　』

そう言った彩花の姿は今までに見た事がないと言っている程にか弱く見えた、その姿を見た俺は思わず

『何言ってるんだよ！　そんな訳ないだろうっ、　なんですっと思っただよ。』　　つい彩花に

キツイ口調で言ってしまった、すると少し元氣を取り戻したっぽい彩花が言い返してくる　　『だって

貴志があんまり喋らないからでしょう！！　せつかく私が誘ったのにさっ、女の子を不安にさせるんじゃないわよ。』

そんなに喋ってないか俺？　けど彩花がそう言うのならそうなんだろうな、これは謝つといた方がいいな

『ごめん彩花、俺が悪かったから、だから機嫌直してくれよー、なっ、せつかく二人つきりになったんだしさ、楽しまなきゃ損だぞー、そうだ、この別荘から帰ったら今度二人でどこかに遊びに行こう、彩花が行きたい所にどこでもつきあってやるからさ。』

彩花に向かって手を

合わせ拝む様に謝罪する、機嫌を直してもらおうと思いついた事を言っただけだが彩花はさっきまでの沈んでた表情を一変させて喜ぶ

「ほっ、ほんとにつ、約束だからねー！ あっ・・・、この事は奈津美達には言っちゃダメだからフフっ、さうで、何処に連れてつてもらおっかな。」

ともかく機嫌は直ったな、やがて公園を出た俺達はあてもなくただ歩いてる、少々暑いが数時間後にはまた気持ちいい海で遊べる、また水着の女神達に会えると思えば我慢できた、そして彩花との会話も忘れない

「やっぱり暑いよなー、夏だし当然だけどな、彩花は暑いのと寒いのはどっちがいいんだ。」

「そうね・・・、どっちかと言えば夏の方が私は好きだなー、なんかウキウキして楽しい気分になるし、貴志はどっちなのよ。」

「俺か・・・、俺は冬のがいいな、やっぱりクリスマスと正月があって雪も降ったりするしな、何よりも里奈の作るクリスマスケーキやおせち料理が美味しいんだ、あれでブラコンじゃなかったらな・・・、もったいない妹だよ。」

俺の話が終わると何だか彩花から黒いオーラが出てきた様に見えた、何なのか意味不明だな

「ふーん、暑い寒いじゃない、って里奈の料理が一番好きなのね、ここのシスコン兄貴ーっ！！」

歩道にも関わらずに彩花が襲いかかってきた、素早くかわしてそのまま逃げる俺に彩花は怒りの形相で追いかけてくる

「コラー！っ、待ちなさい貴志！！ 止まらなあと後でひどいわよー。」

捕まったら危険だ、その俺の第六感は告げている、逃げながら俺は

「待てっ、ひとまず落ち着け彩花、ここは冷静に話をしてだな・・・。」

なんと彩花を落ち着かせようとするが聞く耳を持たない彼女は

『うるさーいつ、人の気も知らないでさあー、この鈍感ニブチンドスケベ女つたらしー、私が成敗してやるーっ。』
更

に黒いオーラを放出させてるっぽく見えた、何なんだよ一体・・・、まだ走りつづける俺の携帯に突然着信音が鳴る、つい立ち止まって携帯を取ると彩花に捕まってしまった

『ハアっ、ハアっ・・・、捕まえたわよあー、天誅ーっ。』
『なっ、ちよ、

ちよっと待てって彩花っ、たっ、たわばっ。』

ギャグの範囲内でボコられた後にやっと携帯に出る、したら携帯から元気な声が俺の耳に響く

『あーん、やっと出たよー、朝早くからどこ行ってるのお兄ちゃん、みんな心配してるんだからね、彩花先輩もいないし・・・、早く帰ってきてよー。』

里奈からだった、どうも彩花と一緒になのを知らないみたいだな、黙っとく事でもないから里奈に話す

『ああ、今彩花と散歩してたんだよ、なんか心配させてすまなかったな、今から帰るから。』

するといきなり彩花に俺の携帯を奪われそのまま里奈と話す、何故か笑顔で
『あっ、

里奈、そーゆー訳だからさっ、朝ご飯も貴志と二人っきりで食べたからもういらないわよ、奈津美達にも言っついて、じゃあねえ。』

そう言っって携帯を切り俺に返す、里奈との会話の中で二人つきりという部分をやけに強調してたのは俺の気のせいだろう、妙に機嫌の良くなった彩花は俺の手を取り明るく宣言する
『さてと、あんまり

みんなを心配させちゃ悪いし、名残惜しいけど帰ろっか それとあの約束忘れたら私の家に監禁して一生出さないからね。』

さらっと思怖の宣告をするFカップ眼鏡っ娘、しかも俺の手を離してくれない、離そうとしたらまた黒

いオーラを出してくるのでやむなく彩花と手を繋いで別荘へ帰る、
別荘に帰り着いた俺達に里奈と夕奈ちゃん、奈津美さんから散歩の
事を事細かに聞かれたのは言うまでもない、朝から疲れたよ・・・。

第六十話（後書き）

次回は二日目の海です。

第六十一話（前書き）

真司視点で進む別荘二日目です。

第六十一話

朝早くから二人っきりで散歩に出ていた青山と彩花、帰ってきた青山には当然の如く里奈ちゃん達の取り調べが待っていた

『お兄ちゃん、一体どうい事なのかな、ちゃんと説明してくれなきゃ納得しないからね。』

『……どうして……、彩花先輩と……、二人きりなんですか……。』

『彩花さんで行ったのなら今度は私とも散歩なさってくださいね。貴志くんの行く所なら私はどこへでもお供しますわ。』

一人どさくさ紛れな人もいるが青山は三人の女性を相手に懸命に弁解している

『だ〜か〜ら〜、ただ散歩に行つてただけだって別に怪しい事なんて何もしてないよ。』

そして渦中の彩花は更に青山で遊んでいた

『貴志つたら、何照れてるのよー、二人っきりで食べたパンって美味しかったよね〜、公園のベンチに一緒に座ってア〜ンってしあいっこしてさっ、あのパンの味は忘れないよ。』

彩花が嬉しそうにそう言った途端、里奈ちゃんは更に青山に詰め寄る、夕奈ちゃんは泣き出しそうな表情だ、奈津美さんは何故か余裕な態度だがどういう事だろ、追い込まれた青山は更に必死に弁明するがもう手遅れだろう、結局彩花以外の三人にも（公園ア〜ンデート）を強引に取り決められてしまった、この男の敵め！！ 積？気を通つて冥界に行つてしまえ。

昼食に里奈ちゃんの作った特製焼きうどんを食べた後、俺達はまた海に遊びにやって来た、只今女子の着替えを待ってる最中だ

『あの岩場の向こうには今、神秘の光景が広がってる！まさに至高と言える、女性が服を脱ぐ仕草は神をも崇拜せざるを

えない！！　そうは思わないか、青、蒼太、それなのに我々はその瞬間を目撃ド？　ユンできないとは……。」

「友、堂々と恥ずかしい事言うなよ、いずみちゃんが聞いてたらどうすんだ？　スケベ根性も程々にしといた方がいぞ。」　「……女の人の着替えを

覗くのはあまり良くないと思いますけど。」

「二人共さ、自分に素直に生きた方が絶対人生面白いぞ、お前らだって実は覗きたいクセに、それが我々男子高校生の本来あるべき姿だろーが。」　女

子達を待つてる間に青山や蒼太と馬鹿話に花を咲かしている、そして数分後、待ちに待った麗しの水着美少女達が出てきた

「フフフ、今日も絶好の海水浴日和ですね、今日は何して遊びましょうか。」

いつものスマイルを振りまく奈津美さんを先頭に六人共、昨日とは違う水着で俺達を悩殺する、特に紗恵ちゃんの水着は昨日のワンピースではなく花柄の際どいビキニだった

「すっ、鈴木さん……、そ、その水着は一体……、あー、そのー、つまりですね……。」

蒼太は口をあんぐりさせてしどろもどろしている、今どこここまで女子の艶姿に免疫のない男子高校生も珍しいよな、しかし今日の紗恵ちゃんは正直エロいぞ、関羽もビクリだ、いや、曹豹も裸足で逃げ出しそうな勢いだ、ロリな彼女だから余計にエロく見える、紗恵ちゃんもモジモジしながら蒼太を見ていた

「もうっ……、四森くんったら　　どうか、この水着……、似合ってる？　似合ってるかな。」　「えっ……、うん！　その

水着凄くいいよ、なんか鈴木さんがカッコよく見えるしよく似合ってる。」　「へへえ、ありがとー、行こっ、四森くん」　　また昨日みたいに

紗恵ちゃんは蒼太の手を引き海に向かって走り出した、そして俺に

もいずみが来た、今日のいずみの水着は黄色のフリル付きビキニだよ、こういうのも結構イケてるでしょう。」

「ああ、今日のかわいい系水着もいずみっぽい良さがあるぞ、まあいずみなら何着てもきつと似合うだろうけどな。」

我ながら見事なくらいバカッブルだ、でも実際似合ってるんだからいいじゃないか、バカッブル上等っス

「ありがと真兄 私達も海に行きましょ、あつ、そうそう、頑張ってくださいね青山さん。」

どういう訳か青山にエールを送るいずみ、その理由は青山の悲惨な（羨ましい？）状況の所為だった・・・。

第六十二話（前書き）

150000PV越えました、ありがたい話です、これからもこの小説が皆様の暇つぶしになれば感無量です。

第六十二話

青山は今、4人の少女に囲まれ右往左往していた

『お兄ちゃん、今日は里奈と一緒に遊ぼうよ、だってお兄ちゃんったら最近里奈に構ってくれないんだもん！里奈の事嫌いになっちゃったの。』

今日は何故だかスクール水着の里奈ちゃん、これはゴ？ゴムの仕業か！！

お兄さんと一緒に・・・、いたいです・・・、

夕奈ちゃんのはシンプルな競泳用水着だ、でもそのチョイスもさることながらいつものポニーテールじゃないストリートの彼女もなかなか魅力的だ

『貴志ったら、モテモテね、で、結局どうするつもりなのよっ！！』

た緑色を基調にしたビキニのオッパイ女王彩花、しかも下は紐パンである、これは信じる奴がジャスティスで真実の王者、つまり夢を見続ける事が俺のファンタジーというワケだよな

『皆さん、そんなに迫っては貴志くんも困るでしょう、だから貴志くん、私と一緒に海に入りましょう、アナタと私、2人だけの世界を造るのです。』

真っ赤なビキニの彼女が妖しく微笑む、何だか怖く見えるぞ、奈津美さんってあーゆー人なのかよ、それはさておき四面楚歌状態な青山、これは王？人と言う所の死亡確認フラグだな、おやつ、青山が俺の方を向いて何やら喚いているぞ

『なあつ、友ってば、何とかしてくれ！友達を見捨てるのかよ！！』

コン大王、俺に助けを求めてきやがった、どうしたものかな？ 思案に浸る中、隣にいるいずみはニヤケ顔で俺を見てる

『助けろって言われてもねえ、何か楽しそう

にも見えるんだけどさ、どうしよつか、真兄？」

とはいえ確かに青山は友達だ、見捨てるには忍びないしここは救いの手を差し伸べるとするか、友情万歳、俺は青山とその喜び組に近づきパル？ンテを唱えた

「青、お前昨日は一番最初に寝たけど寝言で（

里奈、好きだ、愛してるよ。）」って言ってたぞ、その他にも（里奈は誰にも渡さねーぞ、俺だけの里奈だからな、妹万歳。）」とかも言ってたさあ、お前の里奈ちゃんへの想いはとくと伝わったよ。」

「言い出すんだ友！俺そんなの言ったか？適当な事言ってるんじゃないよ。」

俺の作り話だ、少しこの男には修羅場を体験させた方が己の為だ、そんな友達想いな俺、我ながら見事なまでの友情超人である、テリ？マンもビックリだな

「んったら・・・も、かわいいんだから」寝てても里奈の事を考えてるんだねっ、里奈は嬉しいよ。」

里奈ちゃんは全身に喜びのオーラをみなぎらせ兄である青山に抱きつく、水着同士で抱き合うとはなんて兄妹だ、アナザーデイメ？ションで異次元に吹き飛ばしちゃうぞ、別に羨ましくなんてないからな

「どうやら天誅を加えてもらいたいようね！こおのシスコン魔人がーっ！！」

「お兄さん・・・、妹相手に・・・、いやらしいです・・・。」

「貴志くんったら、実の妹にそんな想いを・・・、それでしたら私が正道に導いてみせますわ。」

「いやっ・・・、だからそれは友の作り話なんだってさ、俺は里奈にそんな感情なんて・・・。」

「お兄ちゃん！里奈の事を想ってくれてたんじゃないのー、里奈の気持ちを弄んただけだったのね、ヒドいよーっ！！」

「だ

から待てつて里奈、いやつ、ちよつと、みんな落ち着こうよつ、人類皆兄弟じゃないっスかー、ちょ・・・、あべしつ、へげええ、あ、ある！！」

断末魔の叫びが夏

の砂浜にこだます、哀れなり青山貢志、1人だけ羨ましい思いしてた罰じゃ、正義は勝つのだ、心ゆくまで天誅を加えていた青山の喜び組の4人は数分後には何事もなかったかの様に疲労困ぱいの青山を引きずり海へと入る、その様子をいつの間にか海から上がって俺といずみの横にいた蒼太と紗恵ちゃんが見学していた

「・・・何というか、あれでいいんですよ。」
蒼太がしみじみと感想を述べ

れば紗恵ちゃんも小悪魔的な表情で笑って話す

「やっぱり青山先輩達って楽しんでますよね、まっ、あーゆー関係もありなんじゃないですかー。」

この2人も分かっているじゃないか、楽しそうに青山と戯れる4人の美少女を見れば俺も紗恵ちゃんと同意見だった。

第六十二話（後書き）

さて、次回はどうしましょうか・・・。

第六十三話（前書き）

初めからいざみ視点です。

第六十三話

今日も夏の海にて心ゆくまで遊び尽くした、やっぱり人数が多いとそのぶん面白さも倍増よね、海から別荘に戻った私達はそれぞれ自分達の部屋で過ごす、私と相部屋は里奈ちゃんと夕奈ちゃん、ガールズトークに花を咲かせていた

『それですね、その時お兄ちゃんったら、慌てて里奈を止めたんですよ、だから里奈もついあんなになっちゃって……』

『そうなの、青山さんってしつ

かりしてそうに見えて結構うっかりさんなのね、まっ、真兄の親友だからかな。』

でも……、そんなお兄さんも……、可愛らしいです……、友成先輩も……。

女三人集ま

れば話も尽きないものね、1時間はゆうに話してふと時計を見たらもうすぐ夕方の5時になりそうだった、実は今日の夕食は私と紗恵ちゃんが作る事になっている、夕食作りに立候補した私に紗恵ちゃんがお手伝いしたいと申し出てきたから、私はその申し出を喜んで受けた、献立はチキンバスケットに八宝菜、あとはオムレツにみそ汁となかなかにボリュームがある、でも紗恵ちゃんもいるんだしなんとかなるでしょう、意気揚々と私はキッチンに向かった

『あつ……、矢島先輩、今日はよろしく願います、私、あまり料理とかしないんですけど……、矢島先輩の邪魔にならない様に頑張ります！』

キッチンにはかわいいエプロンを着た紗恵ちゃんが私より先に来てた、なんか緊張してるわよね

『紗恵ちゃん、そんなに緊張する事なんてないわよ、一緒に美味しい夕食を作りましょ』

『は、はいっ。』

こうして私と紗恵ちゃんの夕食作りがスタートした、私は唐揚

げを揚げながらも八宝菜に使用する野菜を調理していく、紗恵ちゃん
はみそ汁とオムレツを担当してくれる、始めは自信なさげな紗恵
ちゃんだったけどそれなりの手つきで調理できてる、少なくとも以
前の私よりは上手だった

「紗恵

ちゃんったら、結構料理上手じゃないのよー、きつといいお嫁さ
んになれるわよ、うん、蒼太くんも喜ぶわね。」

「えっ・・・、そっ、そんな、私が・・・、

四森くんの・・・。」

紗恵ち

ゃんは恥ずかしげに慌てふためく、本当にロリかわいい子よね、別
に私はソッチの気はないけど。

調理

は滞りなく進み私は八宝菜、紗恵ちゃんはみそ汁の仕上げにそれぞ
れ取りかかる、既に出てくるオムレツやチキンバスケットを里奈ち
ゃんや夕奈ちゃんがテーブルへと運んでいく、そしてメニューはす
べて完成、テーブルにはもう真兄達が座っていた

「ひょー、こりや凄いなー、美味そうなお

かずが沢山あるじゃねーか。」

料理

を見た真兄は私と紗恵ちゃんが作ったおかずの喜びの声をあげてい
た、やはり好きな人からそんな事を言われたら嬉しいわね

「この料理って鈴木さんと矢島先輩が作っ
たんですよ、これだけの料理が作れるのは凄いですよ。」

蒼太くんは素直に賞賛してた、紗恵ちゃん

は嬉しそうに謙遜してたけど

「

いただきまーす。」

私達の作った料

理が皆の口に合うか不安もあつたけどみんな美味しいと食べてくれ
た、特に男子三人と里奈ちゃんはバクバク食べている、その様子に
一安心してたら奈津美さんが私達の料理を褒めてくれた

「とても美味しいです、いずみさんも紗
恵さんもこれほどの料理を作れるのですね、私も見習わないといけ
ませんわ。」

「奈津美さん・

・・・、ありがとうございます、奈津美さんにそう言ってもらえたら

なんか自信がきます、ねっ、紗恵ちゃん。』

紗恵ちゃんも奈津美さんにお礼を言い返してる、それにしてもやっぱり奈津美さんは優しいお姉さんの貫禄ありまくりよね、とてもさつき青山さんに天誅を加えた人には見えないわ。

夕食は残る事なくすべて食べてくれた、青山さんも満足そうな表情を浮かべて私達を労ってくれる

『ふうー、食った食った、すっげえ美味しかったよ、いずみちゃんと紗恵ちゃんがこんな美味しい料理を作れるとはね・・・、脱帽したよ、大したもんだっ。』

真兄も蒼太くんも私達の作った夕食を美味しかったと褒めてくれる、やっぱり今日の夕食を作ってよかった、美味しかったって言葉が聞けて本当によかった、そして食事後の後片付けは男子三人がしてくれた

紗恵ちゃんには旨い料理を沢山食わせてもらったからな、片付けくらは俺達がしなきゃな、なあっ、青、蒼太。』

そう言うてくれた真兄に私は甘える事にした、私と真兄が結婚したらこんな感じなのかしら・・・、そんな事を想像したら何だか未来が楽しみに思えてきて私は嬉しくなった。

第六十四話（前書き）

今回もいずみ視点です、夕食後のひと時のお話。

第六十四話

晩ご飯も終わってリビングでまったりとテレビを見てる私や里奈ちゃんと夕奈ちゃんの三人、しかしふと気づいたら真兄達男子三人や彩花さん達がいない

「あ、ねえ里奈ちゃん、真兄達はどこに行ったか知らない？」

「あつ、そういえばお兄ちゃんもいませんね、里奈を置き去りにしてどこに行ったんだろ。」

「……別に里奈だけの……、お兄さんじゃないでしょ……。」

「そんな事ないもん！ お兄ちゃんはいつも里奈の味方なんだから。」

「誰にでも優しい人なの……、私の味方だつてしてくれる……、自分だけ特別とか思わないで……。」

「なんか陰悪なムードになりつつある里奈ちゃんと夕奈ちゃん、ここは年上の私がなんとかしなきゃね」

「ハイハイ2人共ー、青山さんが好きなのは分かったから少し落ち着きなさい、こんな事で言い争いを続けてたら2人共青山さんに嫌われちゃうわよ、それでもいいのかなー。」

青山さんに嫌われるという2人にとってデスワードとも言える言葉を出したら2人の表情は一変、今にも泣き出しそうになっている

「いつ、嫌だよそんなの！ お兄ちゃんに嫌われたら里奈……、淋しくて死んじゃうよあ。」

「嫌われるくらいなら……、私……、生きてる意味なんてない……。」

「……、この少女達にここまで言わせる魅力はなんなのかしら？ 真兄だつて負けてないけどね」

「なら2人共仲直りなさい、正々堂々恨みっこなしの勝負で青山

さんを射止めるの、それが恋する乙女のあるべき姿よ。」

私の心のこもった熱弁（？）に2人は感動したみたいだ、さすが私、教師でも目指そうかしら、すっかり元の仲良しコンビに戻った里奈ちゃんと夕奈ちゃんを誘って私達は真兄達のいる所に向かう事にした。

隣の部屋に入ってみたら真兄達や彩花さんに奈津美さん、紗恵ちゃんも居た、部屋の中央には卓球台が置かれ真兄と蒼太くんがハイレベルなラリーをしていた

張れー。」 蒼太頑

輩も凄いですねー、なんかプロみたいですよ。」

「すっげえな、友の運動能力は知ってたけど蒼太も高校生のレベルじゃねーぞ。」 皆も

2人のラリーに興奮してた、私や里奈ちゃん達も2人に見入っている

「ここだあ！！」

「し、しまった！」

真兄の鋭いスマッシュを蒼太くんは拾いきれなかった、疲れきった様子の蒼太くんはラケットを置いて降参宣言をした

「ふうー、やつぱり

友成先輩はどんなスポーツやっても凄いつすね、俺なんてまだまだですよ。」

「ははっ、蒼太もか

なりの腕前だったぞ、まあ、上には上がいるんだよ。」

爽やかに互いの健闘を讃え合う少年マンガチツクな2人、それを見てた紗恵ちゃんが自分も卓球をやってみたいと言いつ出した

「私も卓球やつ

てみたいですうー、誰か私の相手してくれませんか。」

「・・・いいかな・・・。」 鈴木さん・・・、私が相手したい

意

外にも夕奈ちゃんが紗恵ちゃんの相手を申し出た、正直予想外ね、彼女って卓球とかできるのかしら

「夕奈ちゃんが相手かぁ、お手柔らかにね。」

喜々としてラケットを持つ紗恵ちゃんとクール少女な夕奈ちゃんの卓球勝負が始まった、しかし勝負は予想外の結果だった。

「はぁー、はぁー、すっ、
凄いよお、夕奈ちゃん、もうダメえ……。」

夕奈ちゃんの圧勝だった、真兄みたいにズバ抜けた実力はないけれど女子高校生の平均レベルは遥かに上回ったと思う。

「すっごーい夕奈ちゃん」

ん、なんでそんなに卓球上手いの？ そんなの里奈も知らなかったよー。
「親友の意外な姿に里奈ちゃんは大いにはしゃいでた。」

私のお母さん……、高校の時に卓球で……、全国優勝した事があったの……、卓球は小さい頃から……、お母さんが教えてくれた……。」

小さく微笑みながら夕奈ちゃんは語る、意外なサラブレットだったのね、意外な事実にみんなが沸き上がる中、彩花さんが素朴な疑問を夕奈ちゃんにぶつける。
「じゃあなんで夕奈は部活とかに入らなかったのよ、それってなんかもつたいないじゃない？」

「……クラブ活動みたい……、人が沢山集まるの……、苦手だったんです……。」

それはしょうがない、そういう人もいるわよ、
私はそれで納得したけど夕奈ちゃんは話を続ける

「……でも里奈と出会って……、お兄さんにも会って……、皆さんに出会って……、私……、友達が沢山できて嬉しかったです……、みんな暖かい人だったから……、だから今は……、皆さんと一緒に居るのは……、楽しいです……。」

夕奈ちゃんは私達に感謝の気持ちを伝える、人付き合いの苦手な彼女は青山兄妹や私達に出会えて成長できたのね、こんな事を言われたらグツときちゃうじゃないのよ、夕奈ちゃん！ これからも私達はあなたの友達だからね

第六十四話（後書き）

主人公ほとんど出番なし、これもまたアリという事で・・・。

第六十五話（前書き）

途中から真司といずみの馴れ初め話です。

第六十五話

あれから卓球は誰も名乗り出なかったので自然にお開きになった、その後、部屋に戻った私は里奈ちゃんや夕奈ちゃんと恋愛トークで盛り上がっていた

「じゃあ里奈ちゃんの好きなタイプの男性は？」

「そんなの決まってるじゃないですか！ お兄ちゃん以外ありえません！！」

「はつきりとそんな事が言える里奈ちゃんはある意味凄い、この子には道德観を超えた何かを感じられる、同じ質問を夕奈ちゃんにしてみるも彼女の答えは里奈ちゃんと一緒だった」

「・・・私だって・・・、お兄さんじゃない男の人なんて・・・、考えられません・・・。」

「この子も青山さん一筋か、分かっちゃいたけど、この2人と奈津美さんに彩花さんか、青山さんを巡る乙女の真剣勝負はどんな結末になるのかしらね、興味が尽きないわ」

「いずみさんの好きなタイプはどんな人ですかって・・・、そんなのもう決まってますよね」

「今度は里奈ちゃんが私に話を振ってきた、確かに彼女の言う通りなんだけどね」

「み先輩はどうして・・・、友成先輩の事を・・・、好きになっただけですか・・・。」

「夕奈ちゃんも唐突すぎるでしょ、私が答えられずにいると興味津々といった里奈ちゃんも更に押してくる」

「あ、私も聞きたいですう、確か2人は幼なじみなんですよね、何がキッカで恋仲になっただけですか？ 知りたいな。」

「里奈ちゃんと夕奈ちゃんはジッと強い目で私を見て、これは逃げようがないわね、観念した私は真兄を好きになっただけ話を2人に話し始めた・・・。」

私は
小学四年生の時、結構なポツチャリ体系だった、融通の効かない頑固な性格もあって同じクラスの男子には嫌われてたと思う、それでも一つ年上の真兄は私と仲良くしてくれた

『 いっずみく、どしたんだよー、あんまり元気ないじゃねーか。』
学校からの帰り道、

真兄の言う通りに元気のなかった私に近づいてきた真兄は陽気な声で話しかける
『 ……なんでも

ないよ、真司兄ちゃんには関係ないから、ほつといてよ。』

『 関係なくはねーだろ、俺はお前の友達なんだぞ、なんかあったのか、あるなら俺に話してくれねーかな。』

いつも真兄はこうだ、私の心配ばかりしてくれる、私のクラスにはこんな友達なんていないのに……

『 ヒューヒュー、熱いねお二人さん、

あんまり熱くて溶けちゃいそうだぜ。』

声のする方には私と同じクラスの男の子が三人いた、彼らは私達を小馬鹿にしたような目で見てる

『 なんだよお前ら、別にお前らに用なんてないぞ、どっか行けよ。』

真兄も彼らの小馬鹿にした視線を感じたのか不機嫌そうに言い返す、でもそれは更に彼らをつけあがらせるだけだった
『

おおつ、照れてやがるく、やつぱりそんなデブ女でも好きなんだなー、へへく、デブ専男く、そんなデブ女の事が好きな奴なんてお前だけだぜー。』
彼らの幼稚な悪

口には慣れてる、こんな奴らに何を言われても私は気にしない、私はそうだったんだけど真兄は違ってた

『 なんだとコラあ！ 今度いっずみにそんな事言ったらぶん殴るぞお前ら！！』
真兄がそう

言っても向こうは三人いる、だからだろう全く怯まない、それどころか真兄を挑発してきた
『 おつ、

怒った、デブにデブって言って怒ってやんのー、やるのかよ、いくらお前が五年生でも俺達は三人居るんだぞ、逆にボコボコにしてやるぜ。」

「もういいよっ、行くこ
う真司兄ちゃん、こんなのほっとして早く帰ろう。」

私は真兄の腕を無理やり引つ張りその場を離れる、後ろからは彼らの笑い声が聞こえたけど相手にしない、真兄にケンカなんてしてほしくなかったから

「なあいずみ、お前っていつもあいつらからあんな事言われてんのか？　だったらなんで俺に言わないんだよ、友達だろ俺達は！」

あのだ連中からだいぶ離れた所で真兄は私に詰め寄ってくる、その表情は私が侮辱された事への怒りとその事を相談されなかった悔しさが入り交じっていた

「ごめん・・・、真司兄ちゃんに心配かけさせ
たくなかったから・・・。」

「友達を心配するのは当たり前だろ！
ろ！！」

「ごめんね真司兄ちゃん、こんな私でっ。」

私は真兄の顔を見る事が出来なくなりましたまらず走り出した、こんな私を本気で心配してくれる優しい真兄、私はもう何をどうしたらいいか分からなかった。

第六十五話（後書き）

この過去話は次回も続きます。

第六十六話（前書き）

真司といずみの過去話の後編です。

第六十六話

今日も学校で私は男子達から口汚く罵られる、毎日飽きない奴らよね、他にする事がないのかしら

「なんだよっ、暑苦しいんだよブタ、ブタはブタ小屋に行けよ。」

「ははっ、友達がいなんだからこんな所で1人で本読んでるんだよな。」
昼休みに図書室で独りで本

を読んでる私にわざわざ言い寄ってくる馬鹿男子3人、こんな
無視無視
「やっぱブタは喋れないよなー、だってブタだからな、人間じゃないもん。」

「そうかー、人間じゃないから人間の友達が1人もいないんだな、だったらあの五年の奴も人間じゃねーんだ、あははっ。」
・・・私の中で何かがキレ

る感じがした、気づけば私はその男子達に普段以上の大声で言い返していた
「うるさいっ!! お前

らなんかが真司兄ちゃんを馬鹿にするな!! 真司兄ちゃんはお前
らなんかよりよっぽど人間らしいよ、お前らの方が人間じゃない!
!」
言い返すとなんかスッキリしたわ、

図書室中の注目を集めてたけどその馬鹿達は怒り心頭だった

「なにブタのクセに人の言葉喋っ

てんだよ、偉そうに! ブタのクセに生意気なんだよお。」

馬鹿共が私を殴りつけようとしたら
いきなりガラスとドアが開いた、真兄が図書室に入ってきたのだ

「いい加減にしとけよこのクズや
ロウ共、人には好き勝手に悪口言うのに自分らが言われたら暴力で返すのか、人を馬鹿にするのも大概にしるよお前ら!」

「なんだとっ! もー怒ったからな、お前ら
まとめてタコ殴りにしてやる!!」
更に

怒り狂った馬鹿共は3人がかりで真兄に襲いかかるがスポーツ万能で運動能力抜群の真兄の相手じゃない、あつという間に3人を地べたにたたき伏せた

「今度またいず

みに悪口言ったりとか暴力を振るったりしてみろ！ このくらいじや済ませないからな、分かったか！！」

馬鹿3人は地べたで泣いている、図書室の人達は何も言えずただ呆然としてた、真兄は私の手を取り一緒に図書室から出ようとする

「大丈夫かいずみ、

つたくよお、たまたま俺が図書室の前を通りかかったからお前らが居るの分かったんだぜ、あんまり1人でムチャすんなよ、お前はケン力とかできないからな。」

真兄が来て

くれた事が凄く嬉しかった、私は助けに来てくれた王子様に一つ確認しておきたい事があつたので確かめてみる

「……真司兄ちゃん、ありがと……、ねえ、

あの時の約束、覚えてる？」

「

「当然

り前だろ、保育園の時だったよな、ずっと一緒にいようなんて約束だろ、忘れるわけないよ。」

覚えてた

んだ、保育園で交わした約束……、その時は単純に友達として一緒にいたってだけだったんだけどね、でもこの瞬間、それに恋愛感情が加わった、私は男の子として真兄が好きになったのだ

「行こーよ真司兄ちゃん、私はも

う……、負けないからさ

「

「ああ、それでこそいずみだ、お前には必ず俺がついてやるからな！」

私の笑顔に真兄は安

心した表情を浮かべてた、何も悩む事なんてなかったじゃない、ほんの少し勇気をだせばよかったのよ、どんな私でも真兄は受け止めてくれるんだから……。

あれ

から当然、真兄は教師から怒られた、あの馬鹿共の親にも怒られたけど真兄は決して謝らなかつた

「

俺は何も悪い事なんてしてない！ 謝るのはあいつらの方じゃない

か。[□]

真兄はそれしか言わずに結局、真兄1人が悪者扱いされた、でも真兄には私がいる、私はもう悪口なんかには負けない、時の流れと共に私の体型もスレンダーになり逆に私に言い寄る男も増えたがそんな男なんて全く眼中にない、私の隣は真兄の指定席なのだから。やがて真兄と同じ東明高校を受験する事を真兄に告げると同時に私の抱いてた想いも告げた、少し迷ったけれど真兄は私の想いを受け入れてくれた、私達は幼なじみから恋人同士になったのだ・・・。

□

という訳なのよって・・・、おーい、寝ちゃってどうすんのよー。

□

あまりに長い昔話の末に里奈ちやんと夕奈ちゃんとはとくに夢の世界に旅立っていた、まあいいけどね、真兄はずっと私と一緒に居てくれる、それは一生変わらない、だって約束したんだもんね、真兄

第六十六話（後書き）

次回から貴志視点でいきます。

第六十七話（前書き）

男三人のくだらないお馬鹿なトークです。

第六十七話

今日は早く寝るか、昨日は夜遅くまでいろんなトークで盛り上がったからな

『なあ青、前から気になってたがお前ってどんな女の子がタイプなんだよ？ やっぱ里奈ちゃんか。』

布団で携帯小

説を読んだ俺に友成が不意にそんな事を聞いてきやがった

『な〜に言ってるんだよ、里奈は妹だつつの！』

どうもコイツは俺をシス

コンだと信じて疑わないな、俺は里奈に恋愛感情はない・・・と信じたい

『でも里奈ちゃんカワ

イイじゃねーか、一年でもトップクラスの美少女って噂だぞ、あんな子と2人つきりで一つ屋根の下にいて何も思わないのか貴様あ！

『興奮すんなよ、しかし里奈にはそんな噂があつたのか、初めて聞いたぞ

『お前がどう思おうが里奈は俺の妹だ、里奈はいずれいい男と清い交際を経て幸せな結婚をする、それまでは俺が里奈を支えてやる、それが俺の務めだ。』

そうだ、

自分で言っただけで納得してしまつたぜ、ここに来る前日に里奈から告白（？）をされたのはひとまず忘れよう

『カッコいいっすね青山先輩、里奈さんの幸せを誰よりも願ってるって感じで、俺もそんな兄貴が欲しかったですよ。』

蒼太が俺の台詞に感

銘を受けている、そう言われるとなんか照れるな

『そっか、お前がそこまで言うならそーゆー事にしとこう、だったら本命は奈津美さんだな、彼女、絶対お前にホの字だし、お前も気づいてるだろ。』

今度は奈津美さんか、確かに気づいてるよ、つい昨日告白されたんだからな、だがヘタレな俺は返事を保留させてもらってる、

彩花や夕奈ちゃんの想いも無視できなかったからだ

『青山先輩も罪な男ですよ〜、いずれ劣らぬ美少女達に好かれてるんですから、あっ・・・、姉さんもいたんでしたね。』

蒼太・・・、あまり

年上をからかわないでくれよ、お前の姉さんたまに怖いんだ、生涯監禁だけはカンベンしてもらいたい

『そうだったな、彩花もいたんだ、あとは夕奈ちゃんがこの金髪ヤロー、どーだ、ハーレムの感想は、作文用紙に二百字以内でまとめて提出しやがれ！！』

友

成はとも悔しそうだ、だったら俺と代わるか、否、いずみちゃんに悪いな、本当にコイツには出来すぎな子だ、たまに俺もいいなあって思うしな

『うっせーっ

！ さつきから俺の事ばかりじゃねーか、そーゆー友はどーなんだよ、お前の好みのタイプ教えてみやがれ、あっ、いずみちゃんはなしな。』

あまり俺ばかりに矛先

が向けられるのは癪なので友成にぶってみた

『俺か、そうだな・・・、上は田？美佐子さんから下は12才まで許容範囲内だからな、特定のタイプとかあまりないぜ。』

・・・コイツに聞

いたのが間違이었다ようだ、てゆーか12才ってなんだよ、ただのロリコンじゃねーか

『友成先輩・

・・・、田？さんとかまだマニアックな人には分かりますが、12才は犯罪じゃ・・・。』

あまりの友成

の発言に蒼太は困惑してるが友成は臆する事なく話を続ける

『何の心配してんだよ蒼太、12才でも小学生とかさすがにないぞ、12才の中学生なら食べ頃だがな・・・、って、あくまで許容範囲の話だからな、俺が好きな女性は生涯いずみただ一人だ、それが変わらない俺の真実、なんか文句あつか。』

なかなか赤面させる事を言いやがるな、

ここまで言われていずみちゃんも幸せだな、友成も普段はおちゃら

けな事を言うが実際は一途なのは俺も知っている

「それじゃあ今度は蒼太だな、お前の好きなタイプを話してみ、当然紗恵ちゃんというのは分かっているがそれとは別にな。」

友成が今度は蒼太に話をふった、蒼太の好みとか紗恵ちゃん以外ありえないと思うが何か気になるな

「俺っすか・・・、強いて言うなら俺をいろいろと振りまわす子ですかね、なんかカワイイじゃないですか、あとは何かと頼ってきてくれる子かな、女の子から頼りにされるって気持ちいいですからね。」

「それって要するに紗恵ちゃんの事じゃねーかっ！！どさくさまぎれにノロケてんじゃねー！」

綺麗に友成とハモった、俺と友成は友情のコンビネーション技、ライダーダ？ルキックを蒼太に決める

「う、うわらばあ。」

蒼太をやっつけた、それぞれ1ポイントの経験値を得た、その後は早くに復活した蒼太と友成、男三人で桃園の誓いを交わしてまたも夜遅くまで楽しきトークを続けたのだった。

第六十七話（後書き）

次回から三回目です。

第六十八話（前書き）

青山兄妹達の朝の穏やか（？）な一時です。

第六十八話

今日もいつも通り朝6時に起床、友成と蒼太はやはりまだ寝ている、仕方がない、昨日も桃園の契りを結んだ後に夜中の2時過ぎまで話し込んだからだ、話の内容は（さす？い刑事旅情編の香取？男刑事と一番相性のよかった女刑事は若？麻由美？高？美保？河？奈保子？早？優？）という事を熱く語りだした友成に何故だか蒼太も熱心に話に乗り2時過ぎまで語り明かしたという訳だが・・・、この少年達は確か平成生まれの高校生の筈だよな？年齢をゴマかしてるんじゃないだろうな。

何にしても今日で別荘に来て三日目、明日の昼にはもう帰るんだな、楽しい時間は早く過ぎていくもんだ、そんなセンチな感傷に浸りながら洗面所に向かうと今日は里奈に会った

「あつ、おはようお兄ちゃん、やつぱり早起きなんだねー、エライエライ」

朝から萌えさせてくれる笑顔をたたえて俺の頭を撫でてくる我が妹、誰も見てなくてよかった

「そーゆー里奈だつて早起きじゃねーか、昨日は早く寝たのか？」

「うーん、いずみさんの話を聞いてたら眠くなってつい寝ちゃったの、だつて話が長かったから・・・」

人の話の最中に寝るなよ、後でいずみちゃんに謝つところ、しかしどれだけ長い話だったんだろうな、それはそれで気になる

「それよりお兄ちゃん、里奈が美味しーい朝ご飯作ってたげる」

「リビングに行こーよー。」

里奈は俺を強引にリビングへ連れて行く、何か嫌な予感しかしらないのは多分俺の錯覚だろ。

リビングに来てテーブルに座り里奈の朝食を待つ、まだ6時を過ぎたばかりだから俺達兄妹以外は誰も起きてこなかった、このまま朝食が終わるまで誰も来ない

事を願わずにはいられない、こんなトコ誰かに見られたらまたいらぬ騒動が起こりそうだしな（特に友成！！） そんな俺の心配も知らずキッチンでは里奈が鼻歌交じりにだし巻き卵とみそ汁を作っている

「お兄ちゃん、は里奈の作るだし巻き卵大好きだもんね、お兄ちゃんの好きな食べ物なんでも知ってるんだからー、もうすぐできるから待っててね。」

朝か

「俺に手作り料理を振る舞ってくれる里奈、我が妹ながらかわいい、昨日友成達に里奈に恋愛感情はないと大見得きつたが実のところ、たま〜に里奈が実の妹じゃなかったら・・・と思ってしまう時がある、だいたい兄にフトモモをマッサージさせるわ俺の入ってる風呂に水着を着て乱入してくるとか里奈だって妹のとするスキンシップの範疇を越えている、里奈の俺への想いも分かっちゃいるがどうにも過激すぎるのだ、少しは恥じらいを持ってもらいたい」

「あらっ、貴志くん、おはようございます、起きられるのが早いですね、若いのに健康的で立派ですわ、あつ、里奈さんもおはようございます、朝食を作ってるんですか？」

里奈の行動に一抹の不安感を募らせてると奈津美さんが起きてリビングにやってきた、相変わらずの清楚な微笑みが見る者を癒してくれる、奈津美さんだったら変な騒動は起こさないだろう、多分・・・

「はいっ、お兄ちゃんの好物なだし巻き卵を作ったげてるんです、よかつたら奈津美さんも一緒にどうですか、味にはちよつと自信あるんですよ。」

少し余計

「言葉を変えて話す里奈の誘いに奈津美さんは快く承諾してくれるといいんですか？ それではご好意に甘えさせてもらいますね、里奈さんの手料理ですか、フフフっ、楽しみですわ。」

「そう言って喜ぶ奈津美さんもテーブルに座る、数分後に里奈の作った料理がテーブルに並べられていった」

『 里奈さんもこんな美味しそうな料理が作れるんですね・・・、若いのに感心です、私も見習わなければいけませんね。』

いや、あなたも里奈
同様に若いでしょ・・・、里奈の作った料理に賞賛のを送る奈津美さん、その料理は食べてみたら言うまでもなく美味しかった

『・・・美味しいです、これだけの料理が作れるなんて・・・、里奈さんってきつといいお嫁さんになれますわね。』

当ですか、奈津美さんにそう言ってもらえてよかったです、でも里奈は結婚なんてしませんよ、里奈は死ぬまでお兄ちゃんと一緒にいるんですから。』

頼むから余計な事を喋るな！ 喉までこの台詞が出かかってたが俺より先に奈津美さんが口を開いた

『 素晴らしい兄妹愛ですわね、本当に貴志くんが好きだというのが分かりますよ、これは強敵です・・・、でも私も負けられません！ いつの日か必ず、貴志くんの気持ちを私に向けさせますから。』

やばい、すこぶる居心地がよくない、できればここから逃げ出したいがそれは男の取る行動じゃない

『 里奈だって負けません、確かに奈津美さんは素敵で尊敬できる女性だけどいつか絶対に、奈津美さんを超えるような魅力的な女性になってみせますから！ 』

里奈は堂々と奈津美さんに宣戦布告をする、たくましい妹だ、と言うより妹の方が堂々としてるってのは兄としてはどうよ

『 もういいって、2人の気持ちは充分に分かってるからさ、ほらっ、それより早く食べちまおうぜ、みんなが起きてくるぞ。』

俺が早く食べようと急かすと2人はとても素直に言う事を聞いてくれた、2人が言うには俺の言葉には必ず従うらしい、ありがたいやら怖いやら多少複雑なのだが・・・、とにかく俺達は三人での朝食を無事(?)に終えたのだった。

第六十九話（前書き）

貴志視点の別荘3日目です。

第六十九話

朝も8時をまわれば友成やら蒼太達も起きてきた、そのまま全員が朝食をとった後に皆集まって今日の予定を立てる事にした

「3日続けて海というのも飽きるだろう、かといってこの別荘に籠もるのも芸がない、そこでどうだ？　ここの近くにある　水族館は綺麗な海の生き物がたくさんいるらしいぞ、皆で行ってみないか。」

友成が水族館を勧めてきた、俺としては特に異論はない、特別水族館が好きとかではないが他に行くところなんて正直この街にはないしな、部屋でゴロゴロするのもせつかくの夏休みにあまりに寂しすぎる気がする

「賛成、真兄の言う通り外に出ないのもなんかもつたいないし、ねえ、皆さんも行きましょうよ。」

友成の言い出した事なら当然の如くいずみちゃんも賛成する、他に誰も意見を出さなかったのでこのまま水族館行きが決定した。

バス停から1日に数本しかこないバスに乗り目的の　水族館へと向かう、相変わらずバスの中では里奈や夕奈ちゃん、彩花が俺の隣に座ろうと先を争ってくるがただ一人、奈津美さんが里奈達をたしなめる

「貴女たち、バスの中ではしたくない行為は慎んだ方がよろしいですわ、貴志くんに迷惑でしょう。」

「はい・・・、すみませんでした。」

に正論な奈津美さんに里奈達は何も言い返せなかった、結局俺の隣はジャンケンで勝った夕奈ちゃんが座った、けどそのジャンケンに奈津美さんも参加してたのは何かの冗談だったのだろう、彼女もジョークがお好きなようだ。

バスに20分くらい乗って降りた先には思ったよりもシャレた水族館があった

「ここが　水族館さ、結構

大きいだろ、ちょうど今はアシカショーの最中じゃなかったかな？

」

友成の話によると夏休みの間はこの水族館の目玉であるアシカショーをやってるそうだ、そのためか俺達以外の客も家族連れを中心に割と来ていた

「お兄ちゃん、早く行こつ、こーゆー

デートもたまにはいいよね

」

デートじゃないだろう、頼むから人目もはばからずに腕を組んでくるな、何故なら彩花や夕奈ちゃんから力 オウ並みの魔闘気が噴出されてんだよ、人相もなんかコワいし不気味に無言だし、奈津美さんを見習ってもらいたいものだ・・・って、あれっ、おかしいな？

奈津美さんから凄まじい気を感じる、これはもしかや仙 忍しかまといえなかったと言われる聖光気だというのが、奈津美さんは真つすぐに里奈を見据え彼女らしからぬ低い声で話しだす

「・・・里奈さん、いくら兄妹とはいえ度を過ぎる独占は許しませんことよ・・・、あまりオイタが過ぎると私も黙ってませんからね・・・。」

怖い、奈津美さんが怖く感じる、ここは俺がなんとかしなきゃいけないだろ、俺が原因なんだから

「ほら里奈、歩きにくいから離れてくれ、せつかく普段あんまり来れない所に来たんだから皆で楽しめないという意味ないだろ、ワガママ言わずに皆一緒に仲良く回ろうな！」

俺の説得に里奈は従順に従い腕から離れる、

なんか妖しく聞こえるが里奈は俺の言う事には絶対服従なのだ、もちろん里奈を困らせるような事は言わないが

「やるな、青、さすが美少女揃いな青山ハーレム帝国の主だな。」

「そうですね、

俺も青山先輩の言う通りだと思いますよ、もう明日は帰らなきゃいけないんだし今日は目一杯遊びましょう。」

蒼太も俺に賛同してくれてる、俺が朝起きた時に感じたちよつと寂しい気分を蒼太も感じてたんだな、友成はいつもの軽口だ

が奴なりに明るい雰囲気を出そうとしてるんだろう、コイツはそーゆー男だ

「さあ、それじ

ゃあ行きましようよ、実は水族館とか初めてなんです。」

紗恵ちゃんがそう言って一番最初に歩き出す、俺達も紗恵ちゃんに続いて水族館の中に入っていた。水

族館の中も想像以上にいい感じだった、魚や海の生物も綺麗だし、こんな田舎町に思わぬ穴場があったもんだ、これなら客が多いのも分かる気がする

「……このお魚さん……、とても綺麗です……、この近くの海にいたのかな……。」

「本当よね、

こんな魚とかあんまり見ないもんね、こりゃ珍しいわ。」

夕奈ちゃんや彩花も素直に思った感想を述べてる、いつの間にか彼女達から魔闘気が消えてたので安心した、ふと横を向いたらそこには小学生のカップルらしき男女がいて俺と目が合った、俺にはその小学生カップルがどこか寂しげに見えたのだ……。

第六十九話（後書き）

少し前から奈津美の性格をお嬢っぽくしました、キャラの差別化が難しい・・・。

第七十話（前書き）

水族館でのお話です、自分は水族館など二十年くらいは行った事
がありません。

第七十話

水族館で見かけた小学生の男女2人は特に女の子の方が淋しそうな目をしていた、どうにも気になるな

『貴志くん、何を見てるんです？ 気になる魚でも見つけたんですか。』

や、何でもないよ、それより他のトコも見に行こうか、まだいろんな生き物があるんだから見なきゃ損だよ。』

子供達と見つめ合ってた俺に奈津美さんが話しかけてくる、とりあえずあの子達の事は置いてこう、奈津美さんに他の場所もまわろうと促し俺達はこの場から離れた。 今度

はプールの中の生き物に直に触れる事のできるエリアに来た、サメやらエイやらいるがよく調教されてとても芸達者だ

『きゃ、大丈夫かな、ねえ四森くん、襲いかかったりしないかな？』

水族館にいるサメが人を襲う訳ないだろ、大丈夫だから鈴木さんも触ってみなよ、こんな経験めつたにできないんだから。』

サメに怯える紗恵ちゃんに蒼太が穏やかに言い聞かせる、蒼太の説得が実を結び紗恵ちゃんの手が恐る恐るサメに触れると

『あつ・・・、なんか私、思ったより平気かも・・・、サメって結構スベスベしてるんだねー。』

さつきまでのビビり様はどこへやら、すっかりサメに触りまくってる紗恵ちゃんに蒼太は呆れ顔だった。 他のみんなもエイとかアザラシとかセイウチなどいろんな生き物に触れていきそれぞれ楽しんでいる、そんな中、いつの間にか友成はいずみちゃんと、蒼太は紗恵ちゃんとそれぞれ2人つきりになって少し離れた所にいた、俺の周りにはもちろんいつもの4人が離れる事なく引っ付いている

『お兄ちゃん、里奈達も行こうよ、まだ見てないトコ

もあるんでしょー。」

「・・・そ

うね・・・、せっかく来たんだし・・・、私もまだいろんなお魚さんを・・・、お兄さん達と一緒に・・・、見てみたいです・・・。」

「そうそう、この水族館つ

て予想以上に面白いわよ、あんなセイウチとか見たことなかったんだから、貴志はどれか見てみたい魚とかいないの？」

「私達は貴志くんの行く所ならどこでも

お供しますわ、今日は貴志くんから離れませんからね。」

4人の美少女は（実妹含む）揃っ

て俺を見つめてくる、ここで気づいたのだが周囲の視線が変だな・・・、そりゃ男1人に女が4人、目立って当然か

「それじゃあっちの熱帯魚コーナーに行ってみるか？ あっちはまだ見てないだろ。」 本当

は早くこの場から離れたかったただけだ、特にアベックの男性の視線に並々ならぬ敵意を感じたのでアベックがあまりいなさそうな所に行きたかったのだ。 少し歩くと熱帯魚等の小さい魚が見れる

水槽が所狭しと並べられてる部屋に来た、魚を見るなり里奈は可愛らしい声をあげる 「可愛いー、

ねえねえお兄ちゃん、この魚可愛いわよね、なんて魚かな？」

水槽の近くにあるネームプレートを見るとエンゼルフィッシュという熱帯魚らしい、他にもグッピーやらネオンテトラなどの熱帯魚に夕奈ちゃんや彩花も目を奪われてる、俺も熱帯魚を鑑賞してたら先程の小学生男女二人組を偶然にも発見した、泣いている女の子を男の子が慰めてたので近づいて声を掛け
「どうしたんだポーズ、

何かあったのか。」 いきなり近づ

いて声を掛けてきた金髪男に男の子は思いつき警戒していた、考えたら当たり前だよな、どうしていいか分からずにあたふたしてたら里奈が俺達の所にやってきた

「お兄ちゃん、何してるのよ・・・って、誰なのこの子達？」

『 里奈の後ろには奈津美さん達も揃ってた、面白い事に男の子の態度が奈津美さん達を見たら露骨に柔らかくなったのだ、このポーズ案外女好きだな』

『 この娘はどうして泣いてるのです？ まさかキミが泣かせたのですか！ 』

奈津美さんがキツと睨みつけると少年はあわてて否定した、そして少年は意外な事実を語り出したのだ

『 俺が泣かしたんじゃないよ、本当は父さん達と来るはずだったけど急な仕事で来れなくなったから俺と弥生の2人で来たんだ、俺達は兄妹だよ。 』

兄妹だったのかこの2人、あまり似てないけどな、でもなんで妹の弥生ちゃん
は泣いてるんだろ、そこを聞いてみると可哀相な事情があった。

第七十話（後書き）

見てくださって感謝します。

第七十一話（前書き）

今回で水族館でのお話は終わりです。

第七十一話

水族館にてたまたま見知った小学生の兄妹、妹の弥生ちゃんが泣いているトコを兄が慰めてる場面に遭遇したのだが泣いてた理由が少し淋しいものだった

「俺達ギリギリしかお金持ってきてないんだ、父さんには黙って来たからお金とか貰ってないし・・・、昼ご飯も食べてないから弥生もお腹がすいて泣いてるだけなんだよ。」

「お腹すいてんのか、だったら俺達と来るか？ ちょうど今から昼飯にしようと思ってたトコだしな、金は俺が出すからさ。」

泣いてる弥生ちゃんが可哀相になった俺はこの兄妹も一緒に昼飯に誘う事にした、幸い金には余裕があるので二人分の昼飯代に困る事はなかったしこの兄妹には俺と里奈に似てるトコがあるように思えたのだ

「えっ、本当ですか！ おいつ、弥生！ 昼ご飯が食えるぞ、本当にありがとうございます、会ったばかりの俺達の為に・・・。」

少年は俺達に深々と頭を下げる、弥生ちゃんも泣き止んで笑顔を見せてくれた

「それじゃあ行きましようか、真司君達に知らせなきゃいけませんわね。」

奈津美さんや彩花が友成達に電話して近くのレストランにて待ち合わせをする、ほどなく友成や蒼太達もレストランにやってきた

「おおっ、君達が奈津美さんの言ってた兄妹か、何も気にしないでいいから好きな物食べるよ。」

友成が気さくにその兄妹の緊張を和らげてやってる、友成は子供好きらしいからな、誰よりも早く兄妹と親しくなってるみたいだ。レストランで食事をする内にだいぶ兄妹も俺達と打ち解けてくれた、兄の名は龍太といい小学五年生、妹の弥生ちゃんは小学三年生で父親は日頃から忙しい銀行の役員、母親も有名ブランド店

で夜遅くまで働いててほとんど両親と遊んだりする機会がないとの事
「まあ親御さんも家庭の為

に一生懸命働いてるってのは分かるけどなあ、でもなんで今日来たんだ？ 両親が確実に休める日でもよかったんじゃないか。」

俺がそう聞くと弥生ちゃんは最初見た時にしてた淋しそうな目をした、なんか悪い事でも言っただのかな

「俺達、明後日に引越すんですよ、

父さんの仕事の都合で・・・、弥生がこのアシカショーをどうしても見たいって言うからどうしても今日じゃなきゃ駄目だったんです、明日はもう父さん達と一緒に引越しの準備をしなければいから・・・。」
なるほどね、

妹のささやかな願いを叶えたかったわけか、妹思いの優しい兄じゃないか、同じ兄として感心だな

「私も早苗ちゃんや由香里ちゃんと別れたくないよ、せつかく仲良くなったのに、でもパパは仕事だからしょうがないって言うんだもん！！ パパやママなんて自分達の事ばかりで私やお兄ちゃんの事なんかちつとも考えてないんだよ！！」

突如、弥生ちゃんが長い間溜めていたであろう思いの丈をぶつけ始めた、彼女の気持ちも分からないじゃないがこればかりはしょうがないだろう
「弥

生ちゃん、友達と別れたくない気持ちは分かるよ、でもお父さんもお母さんもきつと悩んだと思うよ、だから元気出そう、大丈夫、弥生ちゃんも龍太くんも新しい学校で新しい友達がきつとできるから。」

今にも泣き出しそうな弥生ちゃんに里奈が優しく語りかける、不幸な幼少期を歩んだ里奈にはこの兄妹がどこなく自分と俺にダブったのかもしれない

「本当に・・・、私、新しい友達できるかな

？」
弥生ちゃんの表情に笑顔が浮かん

できた、里奈も迷う事なく首を縦に振る

「それじゃあ皆もお昼を食べ終わった事だしアシカショー

に行こうよ、龍太くんや弥生ちゃんも私達と一緒に来ましょ。」

皆の昼飯が終わったのを確認して
いずみちゃんが明るいうつらで龍太達を誘う、今日はこの兄妹にいい
思い出を作らせてあげたいという思いは皆同じなんだな。 昼
過ぎから開催されるアシカショーには既に大勢の家族連れなどで賑
わっていた、俺達は後ろの方の席だったがそれでも龍太達はショー
が始まるとその光景に目を奪われていた

「 凄いなー、アシカってあんな事も出来たんだ。」

「 本当だねお兄ちゃん、でもあそこのア
ザラシも可愛いかったな。」

ア
シカだけではなくアザラシやラッコ、イルカのパフォーマンスに龍
太達は大いに喜んでた、これならいい思い出も出来ただろう

「 さあ、まだまだ面白いアトラクション
はたくさんあるからね、行きたい所に案内してあげるよ。」

蒼太の言葉にまだ興奮冷めやらぬ様子の龍
太達兄妹が満面の笑顔で頷く、それから二時間くらいはいろんなア
トラクションを見て回って大方この水族館の全ては見尽くした、気
付けば夕方近い時刻になり龍太達も帰らなきゃならない時間がきた
と申し出た

「 貴志さん、
里奈さん、それに皆さんのお陰で本当に今日は楽しかったです、こ
の町での最後に楽しい思い出が出来ました！」

「 私も新しい学校で頑張るから、里奈姉ちゃん達も
頑張つてね、ありがと。」

別れ際の龍太
と弥生ちゃんは最初の元気のなさがウソの様に明るかった

「 俺達も楽しかったよ、龍太も弥生
ちゃんも元気だな、新しい学校でいっぱい友達作れよな、縁があつ
たらまた会おうぜ。」

俺はそう
言つて龍太と弥生ちゃんの頭を撫でた、2人共嫌がる事なく笑つて
る、名残惜しそうに俺達と別れ去っていく兄妹の未来が幸せである
事を願いながら俺達は見送っていた。

第七十一話（後書き）

そろそろ別荘編も終わりに向かってます、夏休みは続きますが・
・。

第七十二話（前書き）

世間はもう年末です、作中は夏ですけど・・・。

第七十二話

水族館から出た俺達は友成の顔なじみの人が営んでというラーメン屋さんに寄つて少し早めな夕食をとる事にした、友成の案内で来た店はいかにも老舗の風格が漂うラーメン屋だった、友成がドアを開け店に入るといきなり威勢の良い声が店中に響き渡る

「よお、真ちゃん！ いずみちゃんも！ 随分久しぶりじゃねーか、それなんだ、今日はまた大勢連れてきてよお、皆真ちゃん達の友達なのかい。」

随分と陽気な人みたいで友成やいずみちゃんとの仲も良さそうだ、というかいずみちゃんとも顔見知りだったのか、そつえば友成といずみちゃんとは幼なじみだったんだよな

「ご無沙汰してます、信介さんも相変わらず元気そうですね、この店も変わつてなくて安心ですよ。」

友成も久しぶりの再会を喜んでる様だ、友成の話だとラーメン屋の主人である信介さんと友成の父親が高校生時代からの親しい友人であり友成も小さい頃から父親と別荘に遊びに来た際には必ずこのラーメン屋に寄つてるとの事だった

「信介さん、お久しぶりです、そう言えば茜^{あかね}さんは何処ですか？ 出前とかですか。」

いずみちゃんも和やかに信介さんと挨拶を交わし茜さんとかいう人の所在を聞く、すると信介さんがえらくニヤけた顔になった

「茜なら今病院だよ、その・・・、あれだ、生まれるんだよ、三人目が・・・、へへへっ。」

心底嬉しそうに報告する信介さん、それを聞いた途端、友成といずみちゃんが声を揃えて祝福の言葉を贈る、俺達も簡単ではあるがお祝いの言葉を掛けた

「へへっ・・・、ありがとな、よおし、腕によりかけて作るからよ、ジャンジャン食べてつてくれ。」

まだ二ヤけてる信介さんは腕まくりして
厨房へ向かう、店には今のところ俺達しか客がいないがそれについ
てはいずみちゃん曰わく

「この店、
今の時間はほとんどお客さんが来ないんです、その代わり夜になる
と客足は増えるらしいですよ、常連さんも結構居るみたいで地元じ
や人気店って評判なんです。」

知られざる名店ってヤツか、メニューもラーメン屋にしてはいろい
ろと豊富だし値段も庶民に優しい設定なのが人気だという評判に結
びついてるんだろな、メニューを見終えて注文を頼み始めた。

俺達は信介さんが作りやすくだろと最初は全員同じ
のラーメンセットを頼む、ラーメンは醤油ベースのスープに細麺と
常連客がつくのが納得できる味だった

「美味しいです、特にスープがさっぱりしてて飲みやすいで
すね。」

「・・・スープと上手く絡み合って・・・、後味もいいです・・・。」

里奈や夕奈ちゃんも相当の高評
価だ、他の皆も旨そうにラーメンをすすってる

「そうかい！ お客さんに美味しいって言ってもら
えるのが飲食業やって一番嬉しいからなっ、ほら、これは俺から
の奢りだ、皆で食べてくんない！」

里奈達の賞賛に喜んでる信介さんはホクホクと湯気を立ててる出
来たてのシウマイを出してきてくれた

「そんな、奢りだなんて悪いです、ちゃんと代金はお支払い
しますわ。」

奈津美さんは申し訳無
さそうに言うのだが肝心の店主が全く聞く耳を持たない

「気にすんなよ嬢ちゃん！ このシウマイ
以外の代金はちゃんともらうからよ、せっかく来てくれたんだし今
日は腹一杯にして帰ってくれや。」

こんなんで店の経営は大丈夫なのかと思うがいずみちゃんの
言う通りなら心配ないんだろな、シウマイが無くなると今度は

麻婆豆腐にカニ玉、水餃子の入った中華スープを頼んで二時間あまりでたらふく食いまくった、特に友成といずみちゃんの食欲は驚異的だったが2人は太らない体質だと言う、羨ましい限りだ

「あゝ、ラーメン屋でこんなに食べたのって初めてねー、どの料理も美味しかったし満足よ。」

「俺も満腹ですよ、ご飯がおかわり無料だからいっぱい食っちゃって・・・、御馳走様でした。」

最後にデザートの杏仁豆腐を頬張りながら四森姉弟が心地良さに呟く、その声を聞いた信介さんも厨房から返事を返してくる

「そっか、よかったらまた来てくれよ、いつでも待ってっからな。」

デザートも食べ終え勘定を払う、9人であれだけ食べてピッタリ一万だ、本当に計算合ってるのかな

「信介さん、今日は御馳走様でした、茜さんにも元気な赤ちゃんが生まれるのを願ってますから。」

夜になり店に客が入ってるので店を出る前に友成が信介さんに挨拶をする

「

おう、茜もきつと喜ぶぞ、真ちゃんもいずみちゃんも友達の皆も元気でな、本当にまた来てくれよ！」

仕事中でも信介さんは友成や俺達に挨拶をしてくれる、できればもっと話をしてみたい人だったな、店を出た後に俺はそんな事を考えてた。

第七十二話（後書き）

誠に勝手ながら大晦日と正月1日、2日、3日は更新を休ませて
もらいます、こんな作品でも期待してくれてる人がいるなら申し訳
ありません。

第七十三話（前書き）

別荘編最後の夜です。

第七十三話

大満足だったラーメン屋からの帰り道、突如里奈がこんな事を言い出した

「ちよつと夜風に当たって帰りませんか、ちょうど海の近くだし、今から行ってみましようよ。」

突然な里奈の提案に友成達は多少とまどってたが奈津美さんは賛成してた

「それもいいですね、今日が最後の夜なんだし、夜の海というのも何だかロマンチックですわ。」

奈津美さんに続くかの様に彩花やいずみちゃんも賛成していく、結局寄り道して砂浜へ行く事になった。星が良く見える夜、波の音も心地よいBGMとなり俺達は砂浜に座り込んでいた

「涼しくて気持ちいいな、星も綺麗だしなんだか開放的な気分になるよ。」

「そうでしょう、こういうのって案外ストレス発散にもなるんだよ、ところでお兄ちゃん、夏の海って何かときめかない？ 何かが起こりそうなさ……。」

里奈が俺の隣に寄ってくる、そうなれば当然、奈津美さんや彩花、夕奈ちゃんが黙っちゃいない

「……お兄さん……、私はドキドキしてますよ……、お兄さんのそばにいるから……。」

「貴志は私達の中で誰に一番ドキドキしてるの？ 聞きたいなあ……。」

「貴志くん、私は今でも十分に満足ですわ、こうして貴男の温もりが感じられますから……。」

俺の直径1メートル以内に4人の美少女が固まって座ってる、俺は三国一の果報者なのか、そんな俺を友成と蒼太が何かを悟った様な達観した目で見ていた

「よかったな青、全くお前にはかなわないよ、5人で幸せになれよ。」

青山先輩なら安心して姉さんを任せられますね、これからは義兄さんって呼ばせてもらおうかな。』

丁重にお断りさせてもらおう、別に彩花と結婚するのが嫌というワケではないけどな、しかし結婚か・・・、この中に俺と結婚する女性がいるのかな？ 奈津美さんだったら顔良し、性格良し、スタイル良しと非の打ち所のない嫁になれるだろうし彩花は少し勝ち気なトコがあるけど一緒に居ればどんな辛い時でもいっぱい元気をもらえそうだ、夕奈ちゃんも口数こそ少ないが夫を陰ながら支える献身的で心優しい嫁の素質充分だ、それに里奈・・・、良く気がくし家事能力も抜群だ、俺の事だつてなんでも知っている、唯一の問題は俺の実妹という事だ、妹じゃなかったらな・・・、つて、おかしいだろ！ なんて妹相手にこんな事考えてるんだよ、里奈と結婚とか出来るワケないだろーが！！ 何を血迷ってんだ俺って奴は

『何を慌ててるんですか？ 何か
悩み事があるなら遠慮なく申してくださいな、私は貴志くんの力になりたいのですから。』 1人であ

たふたしてる俺を奈津美さんが心配そうに覗き込んでくる、いつ見ても美しい顔だよなあ
『いつ、

いや、何でもないからさつ、心配してくれてありがとな。』

奈津美さんの麗しい不安顔にドキドキしながら返事を返す、そしたら里奈から水を掛けられた

『ぶー、何奈津美さんといい雰囲気
になつてるの、お兄ちゃんってホント女つたらしなんだからー。』

何故そうなるかな・・・、だけど今のこの時間がすごく楽しい、大切な仲間に囲まれ一緒に遊べるこの瞬間を大事にしたかった、そんな思いに駆られ立ち上がった俺は里奈だけじゃなく他の皆にも水を掛けていく

『冷たいですよ。』 元気な

ロリっ娘、周りを明るく照らす紗恵ちゃん

『俺だつて簡単にやられませんよ、青山先輩。』

クールなイケメン、正義感も強い真面目な蒼

太

「あゝん、やりましたねー、

仕返しです。」

活発なボーイッシュ

ユガール、ひたむきに一途に友成を想ういずみちゃん

「やりやがったな青く、お前にや負けねー

からな！ 覚悟しやがれ！！」

完璧な運動能力を持ち俺の一番の親友である友成

「冷たいじゃないのよ貴志く、許して欲しかった

ら私を選びなさい。」

Fカップバ

ストを備える男勝りな巨乳娘の彩花

「・・・お兄さん・・・、選ぶなら・・・、私にしてくださいさ

い・・・。」

ポニーテールの似合う

クーデレ少女、夕奈ちゃん

「ウフ

フっ、やりましたわね、貴志くんには女の子の服に水を掛けるとどうなるのかタツプリ教えて差し上げますからね」

モデル体系の完璧美少女、母性本能と小悪魔っぽ

さを兼ね備える奈津美さん

「冷た

い、お兄ちゃんに仕返しだー、アハハ、お兄ちゃん水浸しー。」

笑顔の眩しい天然妹、ブラコンだが

その想いは純粹でいつも俺を振り回す里奈

「あゝあ、完全に水浸しだなコリヤ、こうなったらお前

らも道連れにするからな、友！ 蒼太！」 友成と蒼太を重点的に

水を掛けまくる、女子達も遠慮なく俺や友成、蒼太に水を掛けてく

る、水に濡れて冷たいがこの8人とこの別荘に来てよかった、恋人

だった理子を工藤に寝取られた俺には代わりに素晴らしい仲間がこ

んなに出来たんだ、時間も忘れ俺達はひたすらに水を掛け合ってい

た。

第七十三話（後書き）

次回で別荘編はお終いです、次の話のネタが見つからない・・・。

第七十四話（前書き）

別荘編もようやく終わります。

第七十四話

昨日の夜は全員が仲良く水浸しになりながらも一段とお互いの絆を深めた夜だった、あれから別荘に帰って風呂に入った後、夜遅くまで王様ゲームで盛り上がった、無論エロいのはNGの方向で、何故か俺と友成の絡みが多かったのは恐らく気のせいだろう。

別荘での最後の朝食は奈津美さんと夕奈ちゃんが作った特製のサンドイッチだった、卵サンドにチーズサンド、野菜サンドやハムサンドなど種類を豊富に取り揃えてあってもどれも美味しそうだった

『皆さんのお口に合うとよろしいのですけど・・・、どうぞ召し上がって下さいな。』

『・・・私達・・・、一生懸命・・・、作りましたから・・・、どうぞ・・・、食べて下さい・・・。』

2人の心配をよそに食べてみるとかなり本格的なサンドイッチの味だ、こりゃパン屋に置いてあっても何もおかしくないぞ

『凄く美味しいです、こんなサンドイッチなら毎朝食べたいですよ、きつと奈津美先輩と夕奈さんが作る他のパンも美味しいんでしょうね。』

蒼太が特に大絶賛してバクバク食べていた、もちろん俺達も美味しく頂戴させてもらってる、しかし奈津美さんといい夕奈ちゃんとい俺の周りの女子チームは皆揃って料理が上手いよな、いずみちゃんもかなり上達したし紗恵ちゃんも見た目以上に料理を作れていた、まあ料理が上手くて損な事はない、これからも彼女達の美味しい料

理が食べたいもんだ。

朝食の後は雑談などで時間を潰していく、そして昼前になるとそれぞれ帰宅準備に取りかかり始めた、俺も部屋で荷物を整理してたら友成が話し掛けてくる

『なあ青、またいつかこのメンバーでここに来ようぜ、この3日間は俺の人生の中で最高の3日間だったからな、一度きりなんて勿体無いぜ。』

『そうだな、俺もいい思い出ができたし、皆の予定が合ったらまた来たいな。』

『ええ、また集まりましようよ、今度は冬場辺りなんていいんじゃないですか。』

蒼太も話に加わり次の宿泊企画に期待を膨らませていく、まあ、また俺はあの4人に振り回されるんだろうがな、それが俺の宿命なんだろう、慣れた自分が怖いぜ

『お兄ちゃん、もう準備できたー、後はお兄ちゃん達だけなんだよ。』

ノックもせずに里奈が堂々と俺達の部屋に入ってきた、これはさすがに注意しなきゃならんだろ

『こらっ、里奈！ 人の部屋に入る時は最初にノックくらいしろよ！』

『あつ、ゴメンなさい、でもみんなもう準備が終わって待ってるよ、お兄ちゃん達も早くしてね。』

そうだったのか、人を待たせるのもマナー違反の一つだ、俺達はお喋りを止め荷物整理を急いだ。

荷物をまとめ一階に降りたら女子チームはもう全員荷物を持って揃っていた

『 あっという間な三日間だったなー、また真兄や皆さんと来たいですよ。 』

いずみちゃんが名残惜しそうに話す、できればもう一度、彼女の健康美溢れる紫ビキニを拝みたいものだ

『 いつかまたみんなで集まって何かやりたいですよね、私・・・、皆さんと知り合えてよかったです。 』

紗恵ちゃんもどことなく淋しそうだ、まるで二度と会えなくなる様な言い方だよな、そんな事ないのに

『 あゝあ、帰ったら勉強しなきゃね、これでも一応は大学に行くつもりだからさ、でも夏休み中にもう一回みんなで集まるうよ、カラオケとかにパーっと行ったりしてさっ。 』

彩花は大学行くのか、確かに彩花の成績ならそれなりの有名大学は狙えるだろう

『 そうだな、その時は俺のスピリッツを込めた昭和ラダーメドレーとさす い刑事メドレーを聴かせてやるよ、それじゃあ行くか、バスに乗り遅れっぞ。 』

友成に促され俺達は楽しかった思い出の詰まった別荘を後にする、

友成の誘いで来たこの別荘、実りのあつた3日間を過ごさせてもらった。

帰りのバスでも電車の中でも別荘での思い出話は尽きなかった、電車では相変わらず里奈達4人が俺の近くに来て離れようとしないう、それをいずみちゃんや紗恵ちゃんから冷やかされる始末だ、やはりこれが俺の運命なんだな、俺は黙って運命を受け入れた。

電車を降りて駅を出たらそれぞれ帰路に着く、まず奈津美さんや四森姉弟、紗恵ちゃんが各自タクシーに乗り自宅へ帰っていく、帰りに全員が友成への礼を忘れていなかった。

友成といずみちゃんも駅から少し離れた所で別れる、別れ際に俺は友成に別荘に誘ってくれた事への感謝を告げる、しかし友成は

『礼を言うのは俺の方だろ、青やいずみ、皆を誘ってよかったよ、高校最後の夏に最高の仲間と最高の思い出を作れたんだからな。』

逆に俺達に礼を言ってきた、里奈や夕奈ちゃんは半泣き状態だ、本当につかみどころのない奴だよ、まったく・・・

『じゃああなた、友、いずみちゃん、暇があつたら電話してくれよ。』

友成達と別れて歩く事およそ10分、3日ぶりの我が家に着いた、夕奈ちゃんとも別れて家の中に入り荷物を置く、するといきなり里奈が抱きついてきた

『お兄ちゃん、すっごく楽しかったねっ!! 絶対また、みんなで遊びに行こうねー、里奈・・・、お兄ちゃんもみんなも大好きだよー』

俺に抱きついてる里奈はえらくテンションが高かった、それにして

もみんなも大好きか・・・、俺だけじゃなく里奈にとっても友成や奈津美さん達は大切な人達なんだろうな、さて、明日からどんな日常になるのやら・・・。

第七十四話（後書き）

すいませんが明日から4日間更新を休止させていただきます、よいお年を。

第七十五話（前書き）

新年明けましておめでとうございます、今年もこの作品をよろしくお願いします、今回は里奈視点で送ります。

第七十五話

只今早朝5時30分、今からお兄ちゃんの部屋に侵入しちゃいまゝす、私が起こしてあげるんだから

『ウフフっ、可愛い寝顔なんだから、キスしたくなっちゃうじゃない』

部屋に入ったら愛しい兄がベッドで寝息を立てていた、頭は金髪なのに寝顔は小学生みたいにあどけないのよね、そうだ！ 起こすの勿体無いからこの機会に存分に拝見しちゃおう

『・・・う、うゝん、ん？ えっ！？ なな・・・、何してんだ・・・、て言つか何でお前が俺の部屋に居るんだよ里奈！！』

思ったより早くお兄ちゃんが起きちゃった、まだ6時にもなっていないのに、ホント早起きなんだから

『おはようお兄ちゃん、寝起きもカッコいいよ』

とびきりの笑顔をお兄ちゃんに向ける、私の百戦無敗の妹スマイルにノックダウン寸前だね、あゝん、お兄ちゃんに抱きつきたいよー

『と、とにかく着替えるから部屋を出ろよ・・・、って、まだこんな時間なのに何で起きなきゃいけないんだよ、ったく・・・。』

私が着替えを手伝ってあげてもよかつたんだけどお兄ちゃんは私を強引に部屋から押し出した、そんな強引なお兄ちゃんにも萌えちゃうよー。

お兄ちゃんの部屋から出た私は朝食を作り始める、愛する兄に食事を作るのは妹の務め、誰にも譲る気はないんだから

「おつ、今日は朝からシチューか、どおりでいい匂いがしてると思ったよ。」

「もうすぐ出来上がるよー、パンも一緒にあるからいっぱい食べてね。」

2人っきりの朝ご飯、私の作った料理を美味しそうに食べてるお兄ちゃんを見て過ごす幸せな時間は私だけの特権、夕奈ちゃんや奈津美さん、彩花さんには悪いけど妹ならではの役得だもんね、そうだった、彩花さんで思い出しちゃった

「あのさ、お兄ちゃん、今日何か用事ある？」

「特にないけどそれがどうかしたかよ、また誰かお前の友達が俺に会いたいとか言ってるのか。」

「違うんだろ、お兄ちゃんに約束を守ってもらうんだよ、フフ。」

お兄ちゃんの目が泳ぎ出したのを私は見逃さなかった、逃がさないからね！

「別荘で彩花さんと2人っきりでデートしたんだよね、あの時約束したでしょ！ 里奈や夕奈ちゃん達ともデートしてくれるってね、忘れたとは言わせないよお兄ちゃん！！」

「覚えてやがったか・・・、まあ約束だからな、いいぞ、どこに

行きたいんだよ、どこでも好きなところにつき合ってやつから。』

『 やった、お兄ちゃん！！ だあい好きー。 』

嬉しくて反射的にお兄ちゃんに抱きついちゃった、照れてるお兄ちゃんを見てると私の胸もキュンキュンしてる、ホントお兄ちゃんは天性の妹ハンターだよな

『 …… 里奈？ いい加減離れてくれよ、朝飯が食べねーだろ。 』

『 里奈が食べさせてあげる はい、アーンして、お兄ちゃん。 』

『 カンベンしてくれ……、子供じゃねーし。 』

『 彩花さんにはできて里奈にはできないの！ アーンもさせてくれる約束だったよね、約束破られたら里奈、悲しくて泣いちゃうよお……。 』

『 分かったつてば、分かったから泣くな、じゃあ食べさせてくれ……。 』

やっぱりお兄ちゃんは妹の涙に弱いわね、ホントは演技だけど彩花さんにはアーンをして私にはしないなんて神さまが許しても私は許さないんだからね

『 はい、それじゃあお兄ちゃん、アーン 』

お兄ちゃんの口にシチューを付けた食パンをゆっくり近づける、お兄ちゃんは小さく口を開け私の差し出したパンを食べてくれた、いつかは口移しにもチャレンジしてみたいなあ……

『 よく出来ました、じゃあ今度はお兄ちゃんが里奈に食べさせてね 』

引きつるお兄ちゃんを私の究極技、妹のウルウル上目遣いで籠絡させてお兄ちゃんからも私にアッンってしてくれた、幸せすぎて気を失っちゃいそうだったよ

『 ごちそうさま。 』

『 お兄ちゃん、デートは10時から行こうね、楽しみだなー、お兄ちゃんとデートだなんて。 』

『 ……ハァ、あんまり人前でおかしな事しないでくれよな、恥ずかしくて外歩けなくなっから。 』

もー、失礼だなー、そんなに私の愛情表現が恥ずかしいの！ こうなったら今日のデートでお兄ちゃんを私の魅力でメロメロにしちゃうんだからっ、覚悟してねー、お兄ちゃん

第七十五話（後書き）

こんな妹いねーよ、と思われるでしょう、確かにいませんよね、あくまで自分の妄想ですのでご容赦を。

第七十六話（前書き）

皆さんのお陰でPVが2000000アクセスを突破しました、この小説にありがたい限りです。

第七十六話

デートの準備を終えた私は先に玄関で待つてるお兄ちゃんの下へと急ぐ、玄関に着いたら待ちくたびれたっぽいお兄ちゃんが居た

「お待たせつ、遅くなってゴメンねお兄ちゃん。」

「やっと終わったんかあ、そんなに準備に時間が掛かるのかよ、全く女つて奴あ……。」

わかってないなあ、女の子が好きな人とのデートの準備にじっくり時間を掛けるのは当たり前前の事なんだよ、それより今、私が気になるのは……

「どうかなお兄ちゃん……、似合ってるかな？」

買ったばかりの薄いピンクのフレアスカートにお気に入りのレモン色のブラウス、それに短めの白ニーソも付け加えた今日の服装、以前に聞いたお兄ちゃんの好みをそのまま選んだから喜んでくれる筈なんだけど

「あ……、ああ、似合ってるぞ、かわいいし大人っぽいし色気もあるし、正直見違えたよ。」

「もー、お兄ちゃんったらあ、妹を口説いてどうするのよー、そんないけないお兄ちゃんにはお仕置きしちゃうんだからー。」

お兄ちゃんの言葉に沸き上がる喜びを隠しきれない私はお仕置きと称してお兄ちゃんに抱きつきそのたくましい胸に顔をうずめる

『おっ、おい、いきなり何だよ里奈、離れろって、恥ずかしいだろーが。』

慌てるお兄ちゃんの手を軽く聞き流して約10分はお兄ちゃんの手を握り、私に抱きつかれてドキドキしてるお兄ちゃんもやつぱり萌えちゃうなあ。

家を出て街道をお兄ちゃんと一緒に話しながら歩く、内容は昨日まで遊びまくった友さんの別荘での話題、またみんなと遊びたいな

『それでねー、里奈の布団に夕奈ちゃんが入ってきてね、一緒に寝たいって言い出してさー、それで寝てみたらビックリだよ、意外と夕奈ちゃんって寝相が悪かったんだから。』

『あの夕奈ちゃんがねー、あんまりそうは見えないけどなあ、でもそんなギャップも可愛いのかもしれないけどな。』

話しながら私の腕はしっかりお兄ちゃんの腕に絡みつくて、だつてデートなんだから腕を組むのは当然だもん、はうー、幸せすぎて顔がニヤけちゃうよー

『あの一、里奈さん？　つかぬ事を伺うけどこの腕を離すつもりは当然なのでしょうか……。』

お兄ちゃんはいきりに周りを気にしてる、誰かに見られるのが困るんだね、私は会っても構わないけど

『あるわけないでしょ、今日はデートなんだからね、この腕は絶対に離さないよ、そんな事よりお兄ちゃん、これから何処行こつか。

」

「なにい、お前が決めてるんじゃないのかよ、俺はなんも考えてねーぞ。」

「お兄ちゃんったらあ、デートの行き先を女の子に決めさせるのはルール違反だよ、里奈はお兄ちゃんの決めたトコなら何処でも付いてくから好きなトコ言つてよ、なんだったらホテルでもいいから・・。」

「シャララップ、頬を赤く染めてアホな事言つてんじゃないねえーっ！！！　　なんだかお前が言つと冗談でも笑えないんだよ！！」

お兄ちゃんつてば、冗談じゃないんだけどな、私の初めてはお兄ちゃんにつて決めてるんだよー、いつかお兄ちゃんがその気になるまで待つてるんだからね

「とにかく行き先はお兄ちゃんが決めてよね、お兄ちゃんが単純に行きたい場所でもいいからさ」

「だったら本屋でいいか、ちょうど欲しい小説が今日発売日なんだよな。」

そんなワケでお兄ちゃんと本屋に向かう事になった、お兄ちゃんは金髪な外見の割に大の小説好きという可愛らしいギャップを持っている、どれだけ妹を萌えさせたら気が済むのよー

「おっ、あつたあつた、間に合つて良かったぜ。」

お兄ちゃんが手に取つた小説は歴史小説、私にはよく分からないけ

ど三国志とかいう昔の中国のお話だった、何がそんなに面白いのか聞いてみると

『 やっぱり魅力的な人間達の生き様かな、一人一人の人生がカッコ良く見えるんだよ、それぞれの美学つつーかさ。』

好きな事を嬉しそうに語る男の子って何であんなに目がキラキラしてるのかな？ でもお兄ちゃんがこうまで言うって事は面白い小説なんだよねきっと、今度私も見せてもらおっかな。

本屋を出た後は百円ショップでお買い物、今の百円ショップはいろんな物が売ってるから便利だね

『 あー、あれ見てよお兄ちゃん、あのペアになってるコップ可愛いくない？ 2人で買おうよー。』

『 ペアかよ……。』

お兄ちゃんは気乗りしないみたいだけどこんな時は妹のリーサルウエポン、ウルウル上目遣いの出番だよ

『 お願いお兄ちゃん、里奈、どうしても欲しいの、ダメかな……。』

『 ……しゃあないな、分かったよ、買うから。』

案の定お兄ちゃんはすぐに買ってくれた、さっそく家で使っちゃうからね、満足して百円ショップを出ると一番会いたくない女に遭遇してしまった

『 あっ・・・、青ちゃん、里奈ちゃん・・・。 』

そこに居たのはあの前田理子だった。

第七十六話（後書き）

貴志や真司の趣味はかなり自分の好みを入れています。

第七十七話（前書き）

久しぶりの理子登場です。

第七十七話

なんでこの女がいるの！！　せつかくのデートが台無しだよ、私はこんな女、もう顔も見たくないんだから

『久しぶりだね、青ちゃん、里奈ちゃん・・・、相変わらず仲いいんだ。』

ちよつと！！　何ウジ虫の分際でお兄ちゃんに話しかけてるのよ！　さつさと私達の視界から消え失せる

『・・・だから何だよ、お前には関係ないだろ、行こうぜ里奈。』

ビッチ女を相手にせず早々に立ち去ろうとするお兄ちゃん、それが正解だよ、そんな女と関わっても百害あって一理なしなんだから

『相変わらず私の事嫌ってるんだね、私は今でも青ちゃんや友くん、奈津美の事は友達だと思ってるのに、信じてくれないかもしれないけどさ。』

『うるさいっ！！　アンタなんかが気安くお兄ちゃん達を友達だなんて言うな！　お兄ちゃんも友達さんも奈津美さんもアンタなんかを友達だなんて思ってるワケないんだからっ！！』

勘違いもはだはだしいビッチ女の言葉に腹が立った私は周りを気にせず大声を出した、お兄ちゃんもビッチ女も周りのギャラリー達もみんな驚いてたけど私は言わずにはいられなかった、すると呆然としてたビッチ女がゆっくり口を開く

『・・・里奈ちゃん、まだ私が青ちゃんを捨てて恭介を選んだのを怒ってるのね、確かに青ちゃんには酷い事をしたよね、それは認めるわ、でも私は青ちゃんの事が嫌いになった訳じゃないの、青ちゃんより恭介の方が好きになっただけなのよ、もちろん自分勝手な事を言ってるのは分かってる、それでも私は青ちゃんや友くん、そして里奈ちゃん達とも友達に戻りたい！　ねえっ、また前みたいにみんなで一緒に遊ぼうよぉ・・・。』

・・・呆れてモノも言えないわね、そんな自分の事しか考えてない言い分をお兄ちゃんが許すワケないじゃない、自分がお兄ちゃんにした行為を考えなさいよね

『理子、もう遅いんだよ・・・、お前は俺達の事は忘れた方がいい、それがお前の為だと思う、工藤と幸せになるんだな。』

甘いよお兄ちゃん、そのビッチ女に二股かけられた挙げ句に捨てられたんだよ！！　普通なら思いきり怒鳴り散らしてもいいのにつ！でもそんなトコもお兄ちゃんらしいんだけどね

『恭介とはもちろん幸せになりたいわ、その上で私は青ちゃん達と友達でいたい、青ちゃん達も恭介と付き合ってみたらきつと友達になれると思う、恭介だっていい所はあるんだから・・・。』

何言ってるんだろこの馬鹿、このビッチ女も大嫌いだけど蒼太くんを理不尽に傷つけたあの工藤とかいうゴミ男の事は私の中ではゴミブリ以下の存在よ、出来れば死んでほしいくらいなんだから、あーもう、あのゴミ男の顔を思い出すだけでイライラしてくる！

『なんで付き合ってた彼女を寝取った男と仲良くしなきゃいけないんだよ、残念だが俺はそこまでお人好しじゃないんでな。』

『 もう行こうよお兄ちゃん、こんな下らない話聞いただけ時間の無駄だよ、それよりデートの続きしよっ 里奈お腹すいたなー。』

早くこのビッチ女と別れたい私はお兄ちゃんの腕を取って歩き出そうとする、しかしビッチ女が見苦しく食い下がってきた

『 兄妹でデートなんてありえない・・・、そんな事してたら周りに誰も居なくなるわよ。』

フン、負け組の遠吠えにしか聞こえないわよ、たとえそうなったとしても、お兄ちゃんさえ居れば私は誰よりも幸せなんだから

『 さつきも言ったけど俺達がどうだろうとお前にどーこー言われる筋合いはない、それに以前にしたお前とのデートよりも今してる里奈とのデートの方がよっぽど楽しいし、じゃあな、行こうぜ里奈。』

お兄ちゃん！！ 私は今、モーレツに感動してるよっ、周りにギャラリーがいなかったらお兄ちゃんに飛びつきたいのにー、残念だなあ

『 青ちゃん・・・、どうして・・・、何でそうなっちゃったのよお・・・。』

ビッチ女はひどく悲しそうだった、別にどうでもいいけどね、むしろいい気味よ、お兄ちゃんと私はビッチ女をその場に置き去りにして2人で歩き出した

『 ねえお兄ちゃん、お昼ご飯食べたらカラオケ行かない？ 里奈、またお兄ちゃんの口ケットダイブを聴きたいなー。』

『 いーぜ、たまにはお前と2人つきりで行くのも悪くないよな、
よーし、今日は思いっきし歌うか！』

あのビッチ女に会ったせいで下がったテンションを上げるべく、私
はお兄ちゃんをカラオケを提案した、お兄ちゃんも意外に乗り気だ、
そうしてファミレスでお昼ご飯を食べた後、カラオケ屋に行つて夕
方まで2人で熱唱した、お兄ちゃんは今は亡きhi?eさんのメド
レーや主に90年代の歌、私はアニソンメドレーや90年代アイド
ルソングを歌い大いに盛り上がった、そして家へと帰る途中、今日
のデートの感想をお兄ちゃんに聞いてみる

『 お兄ちゃん、今日のデート楽しかったかな、もしそうだったら
また里奈とデートしてくれる 』

『 ……意外に楽しかった、そんな頻繁にはできないけどたまに
だったらまたデートしようか。 』

やったー、楽しかったって言うてくれたー、またお兄ちゃんとデー
トできるんだ、今日のデートでお兄ちゃんをゲットするには至れな
かったけどまだチャンスはあるわ、隣で歩いてるお兄ちゃんのカッ
コいい横顔を見て私は決意を新たにしたのだった。

第七十七話（後書き）

次回は夕奈とのお話です。

第七十八話（前書き）

今回は夕奈視点でいきます。

第七十八話

里奈からメールがきて今日、お兄さんとデートしたそうだが、一昨日まで過ごした別荘で約束したからだけどそれなら私も同じ約束をした筈、思い立った私はお兄さんに電話してみた

「……もしもし……、お兄さんですか……、夕奈です……」

「おー、夕奈ちゃん、どしたんだー、何か用？」

不思議だな……、お兄さんと話していると心が安らいでいく、毎日聴いてる里奈が羨ましかった

「……お兄さん……、明日……、時間空いてますか……」

私もお兄さんとデートがしたかった、里奈とか彩花先輩はしたんだから私だってデートをしていい筈よ、私もお兄さんの事が好きなのだから、その想いは決して里奈や奈津美先輩、彩花先輩に負けてない

「空いてるけど……、夕奈ちゃんもデートの約束かい、いいよ、時間はどうしよっか、夕奈ちゃんの都合に合わせるから。」

私の用事を分かっていたお兄さんはあっさりと承諾した、お兄さんとデートの約束をした事でなんだか恥ずかしくなってきた

「……それじゃあ……、また明日……、電話しますから……」

電話を切った私は今まで感じた事がないくらいに心を踊らせてた、私は今までデートとかの経験がなくクラスメートからは余計な心配をされたけどお兄さんじゃない男性とのデートなんて私にはどうしても無理な事だった、だいたい私はお兄さんと友成先輩と蒼太くんとお父さん以外の男性は基本的に信用していないのだから、でも明日は世界で一番好きな人との人生初デート、絶対にお兄さんが喜ぶ様なデートにしたかった

『・・・明日は・・・、どんな服を・・・、着ていこうかな・・・』

まだ前日なのにもうデートに着ていく服の選定を始めてしまった。初デートへの期待でなかなか寝つけなかった夜を明かしてやや寝不足な朝の10時前、ドキドキしながらお兄さんに電話を掛けた

『・・・もしもし・・・、お兄さん・・・、おはようございます・・・。』

『おはよ夕奈ちゃん、そろそろ電話が来る頃だと思ってたよ、俺の方はもう準備できてるからさ、夕奈ちゃんはどうだい？ もしOKなら夕奈ちゃんの家まで迎えに行こうか。』

お兄さんが私を迎えに来てくれる・・・、そのシチュエーションは相当に魅力的だった、私は迷わずに

『・・・じゃあ・・・、今から来てくれますか・・・、私も準備できてますから・・・。』

言った後に電話を切ったら急に凄い緊張感が私を襲ってきた、いざ

デートが近づいてくると今までの期待感が不安に変わってくる、お兄さんが楽しんでくれるデートを今までデートをした事がない私に出来るのだろうか・・・、もしお兄さんを不快にさせたらどうしよう・・・、そうこう考えてたらもうお兄さんがウチに来たみたいだ、3分で来れる距離のご近所さんだから早いのは当然なのね

『おーっ！ いいねー、そのスカート可愛いじゃねーの夕奈ちゃん、昨日の里奈にも負けてないよ。』

そう言うお兄さんの服装は別荘の時とほとんど変わらない少々地味な感じのもだった、それより里奈にも負けてないというお兄さんの台詞が私に妙な対抗心を芽生えさせた

『・・・ホントですか・・・、私・・・、里奈にも負けてないんですね・・・、フッフッフ・・・、それじゃあ行きましょう・・・、お兄さん・・・。』

まだ若干の不安もあるけどお兄さんの笑顔を見てたらなんとかかなりそうな気がしてくる、家を出た私達はまず最初にショッピングモールに向かう事にした。

ショッピングモールではいろいろな品物をお兄さんと見て回る、お兄さんの隣を並んで歩くだけでこの上なく幸せな気分だった

『なあ夕奈ちゃん、そろそろお腹すかない？　なんか食ってこーぜ。』

確かに時間がもう昼に差し掛かっていた、楽しい時間は過ぎるのが早いね

『・・・はい・・・、お兄さんは何が・・・、食べたいのですか・

・・。』

『 うゝん、何でもいーけどな、ちょうどあそこにマックがあるからアレでいいかい？ タ奈ちゃんが他のが食べたいのならそれにするけど・・。』

『 ・・・私は・・・、マックでいいです・・・、行きましょう・・。』

近くにあったマックに入りそれぞれ注文を頼む、そこで財布を出そうとした私をお兄さんが遮り私の分の代金も一緒に払ってくれた

『 ・・・いいんですか・・・、お兄さん・・。』

『 いーんだよ、今日はデートなんだから年上の俺に甘えときなさい。』

結局お兄さんに甘えさせてもらった私は頼んだバリューセットを店員から受け取る、2人でテーブルに就いてハンバーガーを食べてると聞き覚えのある声が私の耳に入ってきた

『 あれゝ、もしかしてタ奈じゃない、やだー、随分久しぶりだよねー。』

そこに居たのは私の小学生時代の友人、雨宮飛鳥（あまみやあすか）だった。

第七十九話（前書き）

今回出てきた飛鳥は今話限りのゲストキャラです。

第七十九話

久しぶりに会った小学生時代の友人、雨宮飛鳥はかなり大人っぽく成長していた、セミロングの艶っぽい黒髪はなんだか奈津美先輩っぽく見えるし胸の方も彩花先輩と張り合えるくらいの大きさだ、少しくらい私にも分けてもらいたい

「……久しぶりだね……、飛鳥……、小学校の卒業式以来かしら……。」

「夕奈もそのポニテ、昔から変わんないよねっ、ところでそっちの金髪おにーさんは誰なのかな　もしかして彼氏？」

「……やめてよ飛鳥……、私達はまだ……、そんな関係じゃ……、ないから……。」

飛鳥も悪い子じゃないけど多少デリカシーがなく口も軽い所がある、だけど頭が凄く良くて中学はかなりの名門校に行った、にも関わらずこの性格の欠点は直ってなかった様だ、何かおかしな事になる前に早く昼食を終えてココを出たかった

「夕奈ちゃん、随分元気のいい娘だけど知り合いなの？　可愛い娘じゃんか、モデルみたいだよ。」

お兄さんってば！　今は私とデートしてるのに飛鳥にそんな事言わないで！！

「まあー、口がウマいんだからー、そんな事言っても何も出ないよお、私は雨宮飛鳥、夕奈とは小学生の時の友達なの、それよりも

おにーさんは夕奈とどんな関係なの？
『

『・・・私の高校の友達・・・、里奈っていうんだけど・・・、
その子の・・・、お兄さんよ・・・。』

お兄さんが答える前に私が飛鳥の質問に答えた、あんまり飛鳥にお兄さんが好きだという事を気づかれなくなかったから、きつと面白がっているのと煽るだろうし私達のデートが邪魔されそうに思えたのだ

『へー、あの大人しかった夕奈が意外ねー、恋人じゃない人と2人だけでご飯食べに来たりしてさっ、それじゃおにーさんは誰かちゃんとお付き合っている彼女が居るんですか？
』

『えっ・・・、別にそんな事・・・、きつ、君に言わなくてもいいだろ！』

もう！ やっぱりお兄さん困ってる、早く飛鳥と別れなきゃせつかくのデートが台無しにされてしまう、私の初めてのデートが・・・

『・・・お兄さん・・・、早く食べよう・・・、買い物付き合ってくれるんでしょう・・・。』

『えっ・・・、あつ、ああ、そーだったな、夕奈ちゃんの買い物があったんだ、それじゃ早く食べて買い物行くか、なっ。』

お兄さんも私に合わせてくれた、しかし飛鳥は空気を読まず私達のテーブルから離れようとしなない、そういえば飛鳥って何も食べてないけどココで何してるのかしら？

『ところで飛鳥ちゃん、キミはココで何してるんだ、何か頼んでたんじゃないのか？』

お兄さんも私と同じ疑問を抱いた様だ、何でもいいから私達の邪魔だけはしてほしくなかった

『えっ、アタシ？ アタシはココで淋しく1人ハンバーガーよ、
といっても後で友達と合流するんだけどね』

・・・なんだ、友達と遊ぶのなら私達の邪魔なんてしないわね、だ
ったらココだけは一緒に居てもいいかな

『夕奈達のご飯食べたらどこ行くの？ 買い物って言うてたけど
何買うのよ。』

『・・・えっ・・・、えっと・・・、あの・・・。』

『夕奈ちゃんのお父さんがもうすぐ誕生日なんでね、プレゼント
を買いに行くんだよ、俺は夕奈ちゃんに頼まれて男の人は何をもら
ったら喜ぶか彼女に教えに来たのさ。』

お兄さんがとつさに機転を利かせてうまく話を作ってくれた、その
時、飛鳥の携帯が鳴る

『あっ、亜希ー、うんっ、今マックにいるからー、じゃ今からソ
ツチ行くねー。』

友達から掛かってきた電話で飛鳥は店を出ようとした

『じゃあね夕奈、また会えるといいーね、おにーさんも夕奈と仲良

くしてあげてくださいね。』

悪戯っぽい笑みを残し飛鳥はハンバーガー屋を後にした、口の軽ささえなければいい友人なんだけど・・・

『はははっ、ちょっと軽そうだけど優しいトコもある子じゃないか。』

お兄さんは笑いながら飛鳥を見送っていた、飛鳥には悪いけどこれでやっとデートに集中できる、お兄さんと昼食を食べながら私はこれからの予定を考えていた。

第七十九話（後書き）

まだ夕奈のデートは続きます。

第八十話（前書き）

今回で夕奈のデート編はラストです。

第八十話

お兄さんとの人生初デート、途中に小学生時代の友人だった飛鳥と出会うハプニングがあったものの昼食を食べ終えた後、私はある事をお兄さんに告げた

『・・・お兄さん・・・この近くに・・・新しく出来た・・・室内プールの施設があるんですけど・・・一緒に行きませんか？・・・』

自分で言っときながら赤面してしまう、少し子供っぽいけど私はどうしてもお兄さんと行ってみたかった

『俺はいいけど、水着とかあるのかな？』

『・・・向こうに行けば・・・水着を・・・貸してくれますから・・・』

『そーなんだ、なら行ってみようか、室内プールとか初めて行くなー、しかし夕奈ちゃんがそんな人の多そうな場所に誘うなんてな・・・、ちょっと驚いたよ。』

『・・・私が・・・そんな場所に誘ったら・・・おかしいですか・・・』

お兄さんの何気ない一言に少しショックを受けた、やっぱり私みたいな地味で暗い女の子が誘う場所じゃないのかな・・・

『あつ・・・、いやっ・・・、そんな変な意味で言ったんじゃない』

いからさ、気分を悪くしちゃったんなら謝るよ、ごめんな、ただ夕奈ちゃんもこの前の別荘で言ってただろ、人が大勢集まるのが苦手だったてさ、それが里奈や俺達と出会ってからは俺達となら楽しいと思える様になったんだろ。」

確かに言った、里奈やお兄さん達と出会う以前の私は人と接するのが苦手だった、こんな喋り方だし・・・、1人の方が気楽に思えた。

『でも今は俺達以外の人がたくさん居る場所にも積極的に行くこうしてるだろ、それで俺は思ったのさ、夕奈ちゃんは変わったんだってね、夕奈ちゃんが自分の力で殻を打ち破ったのが嬉しかったんだよ。』

お兄さんは本気でそう言ってる、嘘じゃないのはお兄さんの顔を見れば分かる、私は思わず泣き出しそうだった、自分では気づかなかったけどお兄さんがそう思ってくれたのが凄く嬉しかった

『・・・ありがとう・・・、お兄さん・・・、そう言ってくれて・・・、私・・・、お兄さんや里奈・・・、それに友成先輩達に出会えて・・・、本当によかったです・・・。』

私は思った気持ちを正直にお兄さんに伝えた、するとお兄さんは少年の様な屈託のない笑顔を私に向けて話した

『俺も夕奈ちゃんに出会えて本当によかったよ、料理は上手だし友達想いで他人を思いやれる優しい心を持ってる、その上ポニテの似合う美少女だなんてそうそういないしな、それより早くプールに行こう、時間がなくなっちまうよ。』

お兄さんの容赦ない褒め殺しに私は夢でも見てるのかなと勘違いし

てしまいそうだった。

室内プール施設に着いた私達は水着を借りて着替えた後、プールの入り口で落ち合う、お兄さんは私を見て喜んでるみたい、お兄さんもやっぱり男なんだね

『おおーっ、いーよ夕奈ちゃん！ 案外貸し水着もいいのがあるんだな・・・、こんな美少女と一緒に泳げるなんて俺も果報者だよ。』

貸りた水着は黒と青と緑の三色が混じった少々派手な競泳用の水着だった、多少恥ずかしいけどお兄さんが喜んでるのなら私は満足だった

『・・・行きましょう・・・、お兄さん・・・、今日は・・・、2人だけだから・・・、私・・・、ワクワクしてます・・・。』

お兄さんに寄り添う様にプールへ入っていく、いろいろなタイプのプールを楽しみお兄さんと至福の時間を過ごした。

お兄さんが喉が乾いたらしく何か飲み物を買っている、その時、たまたま1人だった私に2人組の男の人が声を掛けてきた

『ねー、彼女ー、1人で来てるのー、よかつたら俺達と遊んじゃわない？』

嫌に決まってる、なんでこんな人達と遊ばなきゃいけないのー！私遊ぶ男子はお兄さん達三人だけなの

『・・・あの・・・、男の人と・・・、来てますから・・・。』

『そんな見え見えのウソ言わなくてもいいからさー、いっぱい楽

しませてやるぜ、そしてその後は・・・。」

「あゝ、何してるの？ その子、俺の連れなんだけど。」

しつこい2人組にうんざりしてた私を金髪の騎士が助けに来てくれた、その瞳は2人組をしつかり見据えていた

「・・・別になんでもないから、それじゃ・・・。」

お兄さんを見た2人組はそそくさと立ち去った、正に戦わずして勝つ、お兄さんの金髪頭にはこんな効果もあるのね

「大丈夫だったか、夕奈ちゃん、ごめんな、俺が飲み物なんか買に行つてて夕奈ちゃんを1人にしたから・・・。」

何故お兄さんが謝るの？ 私をちゃんと守ってくれたのに・・・

「・・・私は・・・、平気です・・・、お兄さんが・・・、一緒にいるから・・・、そんな事忘れて・・・、いっぱい・・・、遊びましょ・・・。」

それからは日が暮れるまで存分に室内プールを楽しんだ、帰り道もお兄さんというんなお話をしながら歩いた、そしてデートが終わって改めてはつきり分かった、私はどうしようもないくらいにお兄さんの事が好きなのだ、ライバルの三人、里奈と奈津美先輩と彩花先輩は手強いけど私だって負けたくない！ 私の挑戦は始まったばかりなんだから・・・。

第八十話（後書き）

次回は多分、彩花編かな・・・。

第八十一話（前書き）

今回は彩花視点でいきます。

第八十一話

あの別荘から帰ってきて3日ほど立ったある日の昼下がり、勉強が一段落ついて余裕のできた私は貴志に電話をかけてみた

『もしもし、あつ、貴志く、単刀直入に聞くけど今ヒマ？ ヒマだよ！ ヒマって言いなさいっ！！』

『彩花か・・・、もしヒマじゃないって言ったらどうするつもりなんだ？ 参考までに聞かせてくれるかな。』

どういう事なのよ、もしかしてこれから里奈か奈津美か夕奈とデートをする予定でもあるのかしら？ 不安に駆られながら私は貴志の問いかけにこう答えた

『もちろんその時は監禁部屋の段取りを始めるわ、貴志もあの時の約束、忘れちゃいないわよね・・・、私はそっちでもいいんだよ、フッフ、でもどっちにしても貴志は数年後には私と一つ屋根の下で一緒に暮らす運命なんだけどね』

今の私は貴志に対してここまで大胆な発言ができる様になっていた、もうごまかしてなんていられない！ このままじゃ貴志を奈津美とか夕奈とか、最悪の場合は里奈に取られてしまうかもしれない、あの三人が貴志に並々ならぬ好意を抱いているのは近くで見ている容易に分かる、でも私の貴志への想いもある三人に勝るとも劣らないはず、だから私も諦めない、絶対に貴志と恋仲になりたかった

『監禁だけは勘弁してもらいたいな・・・、でもちょうど今は里奈も夕奈ちゃんと遊びに出かけていって本当にヒマなんだ、友も電

話したらいずみちゃんとデート中だったし、いーぜ、約束だからな、どこでも彩花の行きたいトコに連れてってやるよ。」

貴志はそう言うと言準備するからと待ち合わせの時間と場所だけ指定して電話を切る、携帯を置いて私もデートの準備を始めようとする
と部屋のドアをノックする音が聞こえてきた

「姉さん、ちょっと話があるんだけど。」

ドアを開けたら外出用の服に着替えてる蒼太がいた

「何よ、着替えちゃって、どこか出掛けるの？」

「うん、今から出掛けるんだけど多分帰るのが8時過ぎだと思うんだ、だから今日は俺の分の夕飯は作らなくていいから。」

そう言う弟は若干浮かれてる様な気がした、ちよつとからかってみようかしら

「そーなんだ、ひよつとして紗恵ちゃんとデートにでも行くの？
蒼太も青春してるんだね。」

「デートかどうか知らないけどな・・・、鈴木さんが一緒に映画を見ようって誘ってきたんだよ、ちよつと俺も見たい映画だったし
1人で映画館に行くのもなんだか恥ずかしいしね。」

それは世間一般ではデートと言うんじゃないの・・・、私の弟は微妙に天然だったみたいね、せつかく私に似て美形なのに、これじゃあ紗恵も苦勞するわね

『 まあしっかり楽しんでらっしゃい、私も今から貴志とデートだから。』

『 へえー、姉さんも案外やるね、こりやあもしかしたら青山先輩が俺の義兄になったりするかも・・・、おっ、もうこんな時間だ、じゃあね姉さん。』

蒼太は意味深な言葉を残しバタバタと走っていった。

・・・なるわよ、貴志は蒼太の義兄に、そして私の夫にね、もう私は貴志以外の男とは付き合わないんだから！ 前に通ってた高校で外見だけのつまらないチャラ男と付き合ってた私はその男を親友だと思ってた女に寝取られた、だけど貴志は私のそんな過去を辱めたりしなかった、それだけじゃなく私と友達になりたいって言うてくれた、そして貴志だけじゃなく真司や奈津美、里奈達とも友達になった私は過去を吹っ切り前に進む事が出来た、そしていつしか、私の中で貴志の存在が大きくなっていった・・・

『 何着ていこーかな、貴志はズボンよりスカート派だし、上はさりげなく胸を強調した方が・・・。』

貴志の好みを考慮しながらデートに着ていく服を選んどある事に気付く、待ち合わせの時間まで後10分を切っていたのだ

『 えーっ、もうこんな時間だったのー、どうしよどうしよ？ 早くしなきゃ遅刻しちゃうー！。』

あまり考えずに服を着替え慌てて家を出る、家から待ち合わせ場所までちょうど10分で着く距離、体育の授業よりも全力疾走して待ち合わせ場所に着くと先に来てた貴志が微笑んで迎えてくれた

『 そんな慌ててこなくても・・・、俺も今来たばかりなんだからさ。』

『 ハア、ハア、ハア・・・、ちよつと・・・、体力が・・・、ハア、ハア、落ちてたから・・・、運動・・・、してきたのよ！』

我ながら苦しい言い訳よね、結局5分近く遅刻してしまったけど貴志は全く咎めたりしなかった

『 はいはい、それじゃ少し休んでから行こうか、ジュース買って来てやつからちよつと待ってるよ。』

それから貴志と待ち合わせ場所の公園で10分ばかり談話した、どんな他愛のない話でも熱心に聞いてくれる貴志の横顔を見て私はもうドキドキしている、でも・・・、今日は私が貴志をドキドキさせてあげるんだからねっ！ 私は心の中でそう宣言していた。

第八十二話（前書き）

貴志がぶちのめしたいくらいのハーレム男ぶりですが寛大な心で見えてやってください。

第八十二話

『それで、彩花は何処に行きたいんだよ？』

貴志が不意に聞いてくる、正直あまり考えてなかった

『うーん、とりあえず街に行こっか、目的地は歩きながら考えるわ。』

『なんじゃそら・・・、まあいいけどな。』

こうして貴志と街へ向けて歩き出す、もちろん恥ずかしがる貴志を制して手を繋ぐ事を忘れなかった。

街に着いても特に行きたい所が思い浮かばなかった、ただ街中を貴志と恋人っぽく歩いてるだけで充分楽しいのだけど

『どうだよ彩花、行きたい所は決まったんか。』

貴志は優しく聞いてくる、ただ歩かせてるだけなのに怒ってないのかしら？

『うーん・・・、特に決まらないわ・・・、貴志は行きたい所とかないの？』

自分で思いつかないから貴志に行きたい場所を決めさせようとする、自分で誘っておきながらひどい無計画よね、でも貴志は特に気にする素振りもなく言った

『俺か？、俺に言われても行きたいトコなんてなあ・・・、俺は

散歩好きだからこのままでも結構楽しいぞ、こんなデートもありだ
と思うけどな、このまま気楽に歩いてりゃいつか行きたいトコもで
てくるさ。』

貴志は何の気なしに言ったんだろうけどそんなさりげない優しさに
救われた気がする、さらっとこんな事が言える性格だから奈津美達
も惚れちゃうのよね、貴志って自分の魅力が自分で分かってないの
かな？

『じゃあもう少し歩こつか、疲れたら言ってね。』

『ああ、彩花も行きたい所が出来たらいつでも言ってこいよ、俺
ならどこでもいいからさ。』

そう言っつて優しい笑顔を見せる貴志を見た私はこの上なく幸せだっ
た、貴志の隣に居れるこの時間がずっと続いたらいいのにな。

それからおよそ一時間は歩いた、貴志はまだ全然平気そうだけど私
の方が疲れてしまった時、目の前に小綺麗な喫茶店が見えた

『ねえ貴志、あそこの喫茶店入ってみない？　なんか小腹すいた
しコーヒー飲みたくなっちゃった。』

『おう、俺も喉乾いてたからちょうどよかったよ、じゃあ入ろっ
か。』

喫茶店に入った私達はコーヒーと軽食を頼む、香ばしいコーヒーを
片手に貴志との会話も弾んでいった

『へー、里奈や夕奈ともデートしたんだー、じゃあ今度は奈津美
とデートするんでしょ、モテる男はつらいわよねー。』

「からかうなよ、約束してたんだから無視する訳にもいかないだろ、俺だってこれでもいろいろ悩んでるんだよ……。」

確かに私達から言い寄られてる貴志は悩んでると思う、私も本気で貴志が好きなんだけどそれは里奈も奈津美も夕奈も同じ、それを貴志も分かってるからこそなかなか選べないのよね

「ゴメンね、悩ませちゃって、でも私は本気で貴志の事が好きなんだよ、奈津美達もきつと同じ気持ちだと思う……。だから貴志には真剣に考えて選んでほしい、貴志が選んだ人なら私は喜んで祝福するわ、できれば私を選んでほしいんだけどね。」

どさくさに貴志に好きって言っちゃったな、貴志も私の態度を見れば分かっているとは思ってたけどやっぱり面と向かって言うとは恥ずかしい、しかし貴志はいたって冷静、人が好きだって言うてんのに――

「そっか……。実は里奈も以前に同じような事言ってたんだ、俺が誰を好きでもそれで俺が幸せなら自分も幸せだってね。」

そうなんだ、里奈がそんな事をね……。ただのブラコンじゃないとは分かってたけど私の想像以上に里奈って大人だったのね

「全く、お前も里奈も……。いや、奈津美さんも夕奈ちゃんも不思議だよ、搜せば俺よりもっといい男とか簡単に見つけられるだろうにな……。」

「貴志よりいい男なんていないわよ！ 真司と蒼太は結構イイ線いってるけどさ、でも私や奈津美達にはもう貴志以外の男なんて考えられないのよっ！」

かなり恥ずかしい事を熱弁する私を貴志は啞然と見ていた、よく見ると周りの客も私達の方を見ている

『あ、彩花っ！ そろそろ出ようか、そうだっ、ゲーセン行かねーか、ちょうど新しいゲーム入ったらしいからな。』

貴志が慌てて店を出ようと促してくる、もちろん私も異論なかった

『そ・・・、そうね、じゃあまた貴志にぬいぐるみ取ってもらおっかなー。』

周りの好奇に満ちた視線から逃げる様に喫茶店から出る私達、だが店を出てしまえばこっちのもの、また貴志の手を繋ぎ歩き出す

『行こう貴志っ、私、ウサギのぬいぐるみ欲しいんだよねー。』

『ウサギねー、彩花のキャラじゃないよな。』

『何ですってーっ！！ どういう事なのよーっ。』

どう見ても今の私達はカップルそのものだ、夢にまで見たこの時間を私は大事にしたかった。

第八十三話（前書き）

今回で彩花デート編はおしまいです。

第八十三話

貴志の提案でゲームセンターに来た私達、新しく入ったというレーシングゲームを貴志と遊びその後はクレーンゲームで私が欲しいと言ったウサギのぬいぐるみを取ってくれた

『ほらっ、これでいいんだよな、後なんか欲しいのがあるか？
まだあと2、3個は取れるぞ。』

飄々と言い放ちぬいぐるみを私に渡す貴志、クレーンゲームには相
当の自信がありそうだった

『もういいわ、それよりプリクラ撮ろうよ、今日の記念になっ
』

やはり定番は外せない、貴志も了承してプリクラ機に向かうとそこ
に居た先客に声を掛けられた

『おっ、青山に四森じゃん、2人つきりで何してんだよ、もしか
してデートなのか？ 高野が知ったら嫉妬するぜ。』

プリクラ機に居た先客は私達のクラスメート、後藤君と柴山さんだ
った

『・・・まあそんなトコだ、頼むから奈津美さんには言わないで
くれよな。』

後藤君からの問い掛けに少しバツが悪そうに答える貴志、でも私と
しては奈津美達にバレたとしても別に構わないけどね

『 ねーねー、青山君と四森さんっていつの間にそんな仲になったの、高野さんには黙っててあげるから教えてよ。』

柴山さんが小動物みたいに飛び跳ね貴志に引っ付く、なんかムカつくわね

『 この夏休みからだよ、つーかあんまりくっ付くな、後藤が見てるぞ。』

『 あー安心しろ青山、俺と裕子は別に付き合ってる訳じゃねーから。』

そうなの？ でも恋仲じゃない男女が仲良くプリクラなんて撮ったりするのかな、私には理解できなかった

『 そうなのか？ じゃあなんで一緒に居るんだよ、しかもご丁寧にプリクラまで撮ったりしてさ。』

私と同じ疑問を聞く貴志に柴山さんが笑って答えた

『 ふふふつ、私と達也は小学校からの幼なじみの、私も達也もそれぞれ恋人がちゃんというわ、今日はお互いヒマだったから遊んでるだけよ。』

初耳だった、幼なじみなら仲がいいのも分かる、でもお互い恋人が居るのにヒマだからって年頃の男女が2人つきりで遊ぶのはねえ・・
・、私は感心しないな

『 ふーん、まあいいけどさ、それよりもうプリクラは撮ったのか

？ 俺達も早く撮りたいんだけどな。』

スツキリしない私と違って極めてドライな貴志、男ってこういう事は気にしないもののかな、でも貴志は私と同じ傷を持つてる筈なんだけど・・・

『もう撮り終わってっから少し待てよ、しっかし青山もツイてるよな、前田を六組の工藤に取られたと思ったら今度は四森と付き合ってたんだからなー、四森みたいな美人が彼女だなんて羨ましいぜコノヤロー。』

『そうだよねー、普通恋人を奪われたらもう恋愛とか怖くなってもおかしくないのにね、四森さんなら大丈夫だろうけどさ。』

後藤君も柴山さんも悪気はないのだろうけど貴志に嫌な過去を思い出させる様な事を言っただけじゃなかった、思いあまつた私はつい2人に言ってしまう

『2人ともあまりその話はしないでくれるかな、貴志も聞いてて気分のいい話じゃないからさ・・・。』

『あつ・・・、す、すまなかつたな青山、悪かつたよ・・・、もうシールも出来たしそろそろ行くわ、じゃあな、高野には黙っててやつから安心しろよ。』

『別に気にしないでいいよ、また学校でな。』

後藤君も柴山さんも貴志に詫びてゲームセンターを出る、貴志も相変わらずドライな反応だけど怒ってはいなかった、2人が去った後プリクラ機の前に立ち貴志の肩に寄り添う

『 やつと撮れるね 貴志とプリクラなんて初めてじゃないかな？
もちろん一緒に携帯に貼ってくれるんだよね。』

『 ああ、構わねーけどもう既に二つ貼られてるんだな、これが・
・。』

そう言っ貴志は自分の携帯を私に見せる、そこには里奈と撮ったプリクラと夕奈と撮ったプリクラが貼られてあつた

『 あっ！？ そう言えばあの時に撮ってたんだっけ、まだ貼ってたんだ。』

あれは貴志達に私の過去を打ち明けた時だった、その後ゲームセンターで行って里奈と夕奈にプリクラをせがまれてたんだつたわね

『 まあしょうがないわね、私で三つ目かー、ちゃんと大事にしないよー。』

『 へいへい、毎日拝ませて頂きますよ。』

プリクラを撮ってゲームセンターで一通り遊んだ後はまた街中を当てもなく歩き回る、貴志といろんな場所に行けて満足できたデートも気がつけば空が暗くなる時間になっていた、貴志も時間を気にしてか帰宅を切り出してきた

『 そろそろ帰ろうか、あんまり遅くなるのも悪いしな、今日は楽しかったぜ、サンキュな彩花。』

『 感謝してるならまたデートしなさいよね！ ・ ・ ・ 今度はちゃ

んと行き先を決めとくからさっ。
』

なんだかんだで充実したひと時だったけどまだ今日だけで貴志と恋仲になれるなんて思っちゃいないし慌てなくてもいいわ、じっくり時間をかけて貴志の気持ちを私に向けさせるんだからねっ、待ってなさいよ、た・か・し

第八十三話（後書き）

次回は奈津美？ それとも・・・。

第八十四話（前書き）

あんまり紗恵っぽくはないですが紗恵視点です、二十一話に少しだけ出たあの人が出てきます。

第八十四話

私は今からある男の子と映画を見に行こうとしている、その男の子の名は四森蒼太くん、過去に一人の少年を自殺未遂を起こさせる程までに虐めてたが直後に改心して自身の過ちをどうやって償うか模索している生真面目な少年だった

『 よーし、準備オツケー、それじゃ母さん、行ってくるねっ。 』

『 あんまり遅くなるようなら電話してきなさいよ、四森くんが一緒なら安心だけど一応念のためにね。 』

私の母は舞といって実は私達の通ってる東明高校の教師なのだ、しかも里奈ちゃん達のクラスの担任、しかし学校のみんなには私達が母娘というのは隠してある、知っているのは四森くんだけだ、新学期直後に里奈ちゃん達が心無いクラスメートから虐められる騒動があったのだけどそれを解決させたのが四森くんだった、私から母さんに事の顛末を伝えたのだけどその時に母さんが四森くんに会って感謝の言葉を告げた

『 自分のクラスでそんな事があったのに担任の私が気付かないなんて教師失格ね、四森くんが居なかったらどうなってた事か・・・、本当にありがとう！ 』

年上であり教師である母さんから感謝された四森くんは照れくさそうに話す

『 自分はそんな感謝される様な事はしてませんよ・・・、彼女達を助けたかったから助けただけです、誰だって友達がそんな目に遭

つてると知れば助けようと思いますよ。』

こんな四森くんを母さんはいたく気に入り何度か家に招待した事もある、ちなみにウチは十年くらい前から母子家庭、父は私が幼稚園に通ってた頃、浮気の末に愛人と駆け落ちした、それからは母子一人、若くして私を生んだ母さんは本当に苦しかったと思う、恋人も作らず再婚もせず二十代の時間を私だけの為に費やしたのだ、私がその事を話すと四森くんは

『 鈴木さんもそんな過去が・・・、それでもそんな逆境に負けずにここまで鈴木さんを育てた鈴木先生は母親としても教師としても尊敬に値する人だよ。』

母さんに惜しみない賞賛を送る、その場に居合わせた母さんは照れ笑いしてたけど私は四森くんが母さんを尊敬できる人だと言ってくれたのがとても嬉しかった、だって私も母さんの事を尊敬してるから。

ところで四森くんにはハッキリとは言っていないけど私は四森くんが大好きだ、実際、高校に入学して初めて四森くんを見た瞬間から私の中でビビッと来た、ルックスは申し分ないし体力も知力も性格も良さそう、彼氏にしたら間違いない他の女子に自慢出来る男子だが彼にはその優しそうな風貌からは想像もできない凄惨な過去を持っていた

『 俺のした愚かで幼稚な行為が一人の人間をひどく傷つけた、何をどうしたら彼に償えるのか今でも分からないんです。』

『 四森くんはこの先ずっと償いを探す人生を生きるつもりなの？ 里奈ちゃんや夕奈ちゃんの為にあれだけ頑張った四森くんなら償いとは別の答えを見つげ出せる筈だよっ！！ 1人で見つげ出せない

いんなら私も手伝うわ、これからは2人で捜しましょ、もう決めたんだからね。」

自身の過去を告白した時の四森くんは凄く辛そうに見えた、誰も知らない四森くんを知った私は彼の為に何かをしてあげたいと思った、彼の過去に対して償う事以外の答えを共に捜し出す・・・、そんな中でいろいろと四森くんに接する内にどんどん彼を好きになっていく自分がいた、いつかはこの気持ちを彼に伝えたい、そして彼が長年捜してる過去に対する答えを見つけてあげたかった。

第八十四話（後書き）

なんかうやむやですが次回は映画に行きます。

第八十五話（前書き）

感想を書いてくれる方々、お気に入り登録をしてくださる方々、この小説を見ている全ての方々に感謝します。

第八十五話

現在、時刻は午後1時40分、四森くんと待ち合わせ場所である映画館近くのデパートの入口に私が到着して10分くらい経っていた、実は待ち合わせ時間は2時なんだけど当然四森くんはまだ来ていない

『 ちょっと早過ぎたな、でも待つてる女の子つても悪くないよねー。 』

『 本当に早過ぎだよ、これじゃ2時に約束した意味ないじゃないか……。 』

うつとりと自己満足に浸る私の耳に聞き慣れた声が聞こえる、待ち合わせの時間より20分前なのにもう四森くんが来たのだ

『 嘘っ、もう来ちゃったの！ どうして四森くんはいつもそんなに来るのが早いのも、四森くんの方が約束してる意味なくしてるじゃんかあ。 』

私の理不尽な文句も四森くんにはどこ吹く風だった、彼はいつも待ち合わせに早く来る理由をこう告げる

『 そんなに深く考えてないけどな、とにかく遅刻をしない様に早めに行動してるだけだよ、待たせたりしたら相手の人に失礼だからね、それだけの事さ。 』

四森くんは簡単に言うけどそれだけの事が出来ない人が多いんだよね、私の中学時代に付き合ってた男なんか30分以上の遅刻は当た

り前だったんだから。

デパートの入口から歩いて3分くらいの場所に映画館はある、今日見る映画は完治不可能の難病に侵された少女が周りの人達に支えられて精一杯生きていくが最後には死んでしまうという数年前に沢エカさんが主演してたドラマによく似た内容だった

『 鈴木さんがこういう映画を見るとはね、なんか意外だな、てつきり恋愛モノだと思ってたけど。 』

『 そんなに意外？ 私って結構こんな話好きなんだよ、病気に挫けない女の子の勇氣と優しさは絶対感動するんだから。 』

四森くんは私がこの手の映画をチョイスしたのが意外だったみたい、四森くんの中で私はどんな女の子だと思われてるんだろ、気になったけどもうすぐ映画が始まる、私達はチケットを買って映画館の中に入った

『 うつつ・・・、私、もうだめだよ・・・、麻耶ちゃん、頑張つて・・・。 』

まだ映画の途中なのにもう私は涙を流していた、四森くんも熱心に見入っている、クライマックスに近づく頃には私の涙は一リットルに達していたかもしれない

『 鈴木さん、感動したのは分かるけどさ、そんなに泣かなくても・・・。 』

『 グスっ、だ、だって・・・、麻耶ちゃんがあ・・・、あんなに頑張ったのに・・・、ヒック、死んじゃったんだもん・・・。 』

映画が終わり映画館から出た私達は映画の結末に号泣してる私のせいで周囲から注目されてる、同じ映画を見た他の観客もある程度は泣いてただけだな・・・、その視線から逃げ出すかの様に四森くんは強引に私の手を引き歩き出した。

四森くんの手を握られて心踊らせながらひたすらに歩いていく、それにしてもどこまで行くつもりかな？ まさか男女が2人で入るホ・・・、あれこれ考えてると私達は人の気配がない寂れた神社に来ていた

『ここならいいだろ・・・、ここなら誰も居ないから存分に泣けるだろ、人前で泣かれるのも変な誤解をされるからな・・・、それはそうと確かに感動する映画だったよ、俺も映画館で泣きそうだったしね。』

・・・まさか四森くんは私を好きにだけ泣かせる為にここまで来たのかな、優しいというか何というか、今までの私のドキドキを返してもらいたかった

『もう充分泣き尽くしたわよっ！！ 今は違う意味で泣きそうだよー。』

私が叫ぶと四森くんは何がなんだか分からないといった表情をしている、四森くんと一緒に行動する様になつて分かったのだけど彼は案外天然なトコがあるように見える、そんなトコもかわいく思えるから許しちゃうんだけどね、ただど当の四森くんは神社の端っこにあるトイレの方を見ていた、私も見てみると5人もの少年が1人の少年を取り囲んでいた・・・。

第八十五話（後書き）

蒼太に天然属性が付きました。

第八十六話（前書き）

紗恵視点が三話で終わらなかった・・・。

第八十六話

ありえない勘違いをした四森くんに関連されて神社に来ると5人の少年が1人の少年を取り囲んでいる現場に遭遇した、明らかにいじめてる様に見える

「田中あゝ、今月分の上納金は持ってきたんだろうな、もし持ってきてないんなら俺のギャラクテ カマグナムが炸裂するぜ。」

「もう無理だよお・・・、お母さんにもバレそうだし・・・、お願いだからもう許して・・・。」

バキィー！！ 田中くんと呼ばれた気弱そうな少年が言い終えないうちに相手の5人組のリーダーらしき男が田中くんを殴りつけた、そんな場面を見て黙って見過ごす様な四森くんじゃないのはよく知ってる、四森くんは私にその辺に隠れててと言いつつ少年達に近づいていった、少年達も四森くんに当然気づく、四森くんは飄々と彼らに声をかけた

「そのくらいにしとくだな、それ以上その子に暴行を加えるなら俺はその子に加勢させてもらうよ。」

「誰だよお前は！ 痛い目に合いたくなかったらさっさと消えろバカ。」

四森くんは余裕綽々といった感じだけど5人を相手に勝てるのかな？

「うわゝ、いかにも三下の雑魚が言いそうなセリフだなー、さっき君が言った言葉、そのまま返すよ。」

『この野郎！！人を馬鹿にするのも大概にしとけよコラあ。』

リーダーの少年が号令をかけると5人が一斉に四森くんに襲いかかる、しかし四森くんの高速回し蹴りで瞬く間に一人が倒された

『なっ・・・、空手かなんかやってやがるな！汚ねえぞてめえ！』

『別に空手とかやってないけどね・・・、それよりも5人で1人を脅してお金を巻き上げるのは汚くないのかい？ お金が欲しいのなら自分で汗水たらして一生懸命に働くんだな、そしたら少しはお金のありがたみも分かるだろ。』

カッコいいセリフを言って四森くんは残る4人を威嚇する、でもまだ懲りてないみたいだった

『うるせえ！金持ちから金を巻き上げて何が悪いんだよ！！だいたいお前には関係ねえだろーが。』

『確かに俺には関係ないよ、ただアンタ達の運が悪かっただけさ、俺に見られたんだからね、俺の目の前ではどんないじめもさせない・・・、絶対に！！』

四森くん・・・、やっぱりまだ償いを探してるんだね、以前は自分もいじめる側だったから・・・、そのせいで1人の少年を自殺未遂まで追い込んでしまったから・・・

『何をワケ分からん事を言ってるやがる！おい田中！そいつをやっちまえ、そしたらもうお前から上納金は取らねえからよ。』

リーダー少年は田中くんを持ち出してきた、どうしようか迷ってる田中くんに四森くんは優しい口調ながらも厳しい事を彼に言う

『田中くんだったっけ、君も分かってるんだろ、この連中がそんな約束なんて守らない事くらい・・・、君自身が強くならないとずっとコイツらからお金を巻き上げられるぞ、君が勇気を出せばきつと助けてくれる味方ができる筈だ、・・・少なくとも今、俺は君の味方だよ。』

やっぱり四森くんは私の思った通りの人だった、私だってそう思う、いじめられてる子がひとかけらの勇気を出せば・・・、きっと分かってくれる人がいる筈なんだから

『おい田中あ、どうすんだよ！早くそいつをやっちまえよ、またぶん殴りたいのか！！』

『・・・嫌だ！僕はもう君達の言う事なんて聞かない！！もう二度と上納金なんて渡さない！！』

田中くんが勇気を出した瞬間だった、それを見た四森くんもニヒルな笑みを浮かべてる

『ほお、強いお友達ができて調子づいてんなあ、だったら思い知らせてやるよ、お前は永遠に俺達の奴隷だって事をなあ！！』

4人は四森くんと田中くんに再び襲いかかってきた、四森くんが田中くんを後ろに下がらせ1人で立ち向かおうとする

『まだ引き下がらないのか・・・、少しお灸を据えてやるかね。』

四森くんはまるで北斗四兄弟の次兄、トの如く静水のような動きで次々と四人組を倒していく、遂にはリーダー少年が1人残るだけになった

『な．．．、何者なんだよお前は．．．。』

『気にすんな、アンタ達が弱いんじゃない、俺が強すぎるんだよ。』

四森くん、そのセリフは男 一号生の伊 臣さんだよー、1人になったリーダー少年は完全に戦意を失ったみたいだった

『わ．．．、分かったよ、もうそいつには何もしないから、だから殴らないで．．．。』

『今まで散々田中くんを殴っておいてよくそんな事が言えるな．．．、どうする？ 田中くん。』

『もういいですよ、許してあげましょう、それよりもありがとうございました、アナタのお陰でほんの少しだけ勇気を持てた様な気がします、これからは僕もアナタみたいに強くなれる様に頑張ります！』

『そっか、君がその気持ちを忘れなきゃきっと大丈夫だよ、それともしコイツらがまたちょっかい出してきたら俺に連絡してよ、携帯番号教えとくから。』

四森くんは田中くんから番号を教えてもらって固まってるリーダー少年に軽く脅しをかける

『 という訳だから、今度田中くんにかかしたらパンツ脱がして全裸で女子校の校門に張りつけの刑にするからね。』

意外とお茶目な四森くんの脅しに何回も頷くリーダー少年、彼を置き去りにして四森くんと田中くんは私の隠れてる方に来て三人で神社から立ち去った・・・。

第八十六話（後書き）

突然ですが仕事の関係で更新できない日があると思います、
ど必ず完結まで書き続けます、どうかお許し下さい。

第八十七話（前書き）

今回は少し短くまとめてます。

第八十七話

神社から出た後、田中くんとはそのまま別れた、別れ際に彼は私の方を見て四森くんにおせっかいな一言を言い残した

『四森さんの彼女さんなんですか？ いいなあ、そんな可愛らしい子と付き合ってるなんて、僕もいつかは恋人作ってデートとかしてみたいですよ。』

田中くんは最初の暗そうな印象が嘘のようにだいぶ楽しそうに喋っていた、本来はこういう人だったのかな？ 去りゆく田中くんを見送る四森くんは安心した口調で話し出した

『今の田中くんならもう大丈夫だな、これからはきっと楽しい生活を送ってくれるさ……。』

『そうだね、それより四森くん、少し気になったんだけどいつの間にあんなに強くなったの？ 5人相手にほとんど楽勝だったじゃない。』

素直な疑問をストレートにぶつけた、すると四森くんはあっさりと答えてくれる

『ああ・・・、あの工藤さん達にやられた後からジムに通って体を鍛えだしたんだよ、やっぱり男は強くなkachyaと思ってさ、そのついでに朝は新聞配達のバイトもしてるんだ、自分の小遣いは自分で稼がなきゃ俺もさっきの5人と同じだからね。』

『そんな事ないわよ！ 四森くんはあんな奴らとは絶対に違うん

だから！！
『

四森くんの一言に私は思わず声を荒げてしまう、でも本心からの言葉だった、人を殴って金を脅し取るような人間と四森くんは断じて同じなんかじゃない

『 ありがとう、鈴木さん・・・、そう言ってくれただけでだいぶ救われた気になれたよ、俺だってもしかしたらあの5人以上に卑劣な小悪党になってたかもしれないからね・・・。』

自虐的に四森くんは言い放つ、私はそんな彼をギュッと抱きしめた

『 えっ・・・、ち、ちよつと・・・、鈴木さん？ どうしたんだよ・・・。』

『 四森くん・・・、もう過去に縛られるのは終わりにしようよ、四森くんの答えは償いじゃないわ！ どんな些細な悪事やいじめも許さない優しく強い心でいろんな人を助けてあげたじゃない、里奈ちゃんと夕奈ちゃん、さっきの田中くんだってそうだわ、四森くんが助けてあげたんだよ！』

四森くんを抱きしめたまま、思いの丈を遠慮なくぶちまけた、抱きしめたといっても背の低い私の顔は背の高い四森くんの胸に埋もれてるのだけど

『 目の前にいる困ってる人の力になってあげる、それだけでいいじゃない、償いとか答えとか気にしないでもっとシンプルに考えようよ！』

『 でも俺のせいであいつは、須藤は・・・。』

まだ四森くんは踏ん切りがつけなかった、私には分からないけどやはり人一人を自殺未遂まで追い込んだのは相当に重いんだね

「いつまでもクヨクヨしてたら須藤くんも許してくれないわよ！
しつかりしなさい！！ 四森蒼太！」

「鈴木さん……。」

「きつと須藤くんだっていつまでも辛い過去に縛られてなんていないわ、前に進まなきゃ人は歩けないんだよ、前を向いて歩こうよ、四森くん！ 私達と同じこの空の下で笑ってる須藤くんの為にもさっ
っ！」

「鈴木さん……、フツ、フフフ……、アハハハッ。」

四森くんがいきなり笑い出した、その笑顔は迷いを吹っ切った様な顔だった

「俺って奴あ、何を五年間も悩んでたんだろうな……、鈴木さんのお陰でやっと前に進めそうだよ、もう過去なんていらない……、須藤の為にも俺は前に進むべきなんだよな！」

「四森くん」

もつとギュツと力強く四森くんを抱きつく、この瞬間から私達の新しい関係が始まるうとしていた。

第八十七話（後書き）

次回は真司といずみのお話です。

第八十八話（前書き）

いずみ視点でいきます。

第八十八話

今日も仲良く真兄とデート、今日は秋服を一緒に買いに行く予定、デートの準備をしてるとママが話しかけてきた

「今日も真司君とデートね、良かったら今日の晩ご飯もウチに誘いなさいよ、今日は私が作るから。」

「えー、ダメだよママ、真兄が食べる料理は私が作るんだから！」

『

「いいじゃない、たまには私にも真司君に愛妻料理を作らせてよ、いずみだけズルいわ！！」

』

これでも四十路手前の未亡人、冗談か本気が分からない言動をたまにとるから娘としては心配だ、だいたい娘の彼氏に愛妻料理を作る母親なんていないわよ

「だったら私とママの2人で作ろうよ、今日は丑の日だしうなぎでしょ、私がうなぎ作ってママがスープとサラダを作るの、2人で真兄のお腹を満たしてあげよう」

』

「いずみがそれでいいなら私はいいわよ、食欲もだけどうせなら真司君には今日ウチに泊まってもらって2人がかりで彼のたぎりまくった若く激しい性欲も満たしてあげましょうか・・・、あん、想像したら興奮しちゃうわ」

』

「・・・ママ、その口を永遠にふさいでもらいたいのかしら・・・」

『

これが母親の言うセリフなのかしら？ この部分を取り除けばいい母親なんだけどね・・・

『じゃあ行ってくるね、晩ご飯の準備までには帰るから、真兄が来ても妙な事言わないでよ！』

『妙な事って失礼よね、私も真司君を愛してるのよ、なんたって未来の婿養子だものね。』

婿養子か・・・、真兄は高校を卒業したらお父さんの会社で働いてちゃんと自力で稼げる様になつたら私の家で一緒に住むって言うたのよね、真兄のお父さんはほとんど家に寄り付かないらしいし義母さんは男遊びに夢中だとか・・・、家族の愛に飢えてるであろう可哀相な真兄を私達母娘で幸せにしてあげたかった。

待ち合わせ場所に到着するとまだ真兄は居なかった、まだあと約束の時間まで五分はあるけど来る様子は無い、その場で待つてるとそこそこハンサムな男子が私に声をかけてきた

『かーのーじよつ、何してんだよ、暇なら俺っちと遊びに行かない？ メシぐらい奢るぜ。』

ずいぶんと軽い男ね、そんな気は全くないけど

『悪いけど彼氏と待ち合わせしてるんで、ごめんなさい。』

『ちえっ、なんだよ、彼氏持ちか、じゃあな。』

その男が立ち去ると約束の時間から三分遅れて真兄がやってきた、

よほど急いで来たらしく真兄にしては相当息を切らしてた

『はあっ、はあっ・・・、お、遅れて悪かったな、きよ、今日も、はあっ、寝坊しちまってさ。』

やっぱり、よく寝坊するわね、起こす人が居ないから仕方ないのかな

『別に怒ってないわよ真兄、たった三分しか遅刻してないんだし、どーせまたお父さんと夜中まで議論してたんでしょ。』

『さっ、さすがだな、はあっ、はあっ、昨日はひさびさに帰ってきた親父と（A？Bブームはこの先何年続くか）と（北？の拳のラ？ウと力？オウとト？とサ？力は絶対に異母兄弟だろ）という議論を明け方までしてたのさ。』

相変わらずな親子ね、よくそんな議論を明け方までしてられるわよね、他にやる事ないのかな

『まあいいわ、それより行こうよっ、今日は服買ってそれからネツトカフェでダーツしてそれからね・・・。』

『行く所多いな・・・、それよりいずみ、お腹すかないか？久しぶりに走ったからもう腹ペコでさ。』

『いいわよ、それじゃ何か食べに行こっか、真兄は何食べたいの？』

『今日は丑の日だろ、それならやっぱりウナギが食いてーな。』

『ウナギなら今日の夜にウチで食べなよ、私が作っただけだからさ

っ。
』

『 ホントかよっ、うわゝ、すっげー楽しみなんだけど、だったら
お好み焼きでも食べねーか？ 旨い店知ってたんだよ。』

こうして真兄とお好み焼き屋に行く事になった、そこにはあの子が
居る事など知る由もなく・・・。

第八十八話（後書き）

真司といずみにはどんな未来を用意しようかな・・・。

第八十九話（前書き）

第四十三話で出てきたあの子の登場です。

第八十九話

真兄に案内されて駅の近くにあるお好み焼き屋に辿り着く、中に入ると割と大勢のお客さんで賑わってた

「やっぱ多いなー、でもホントに旨いんだぜ。」

「それは楽しみね、でもあんまり食べ過ぎると私達を作る晩ご飯が食べられなくなっちゃうよ。」

「そりや大丈夫さ、お好み焼き一枚くらいで満腹にはならないよ、なんせ夕飯はうな丼だかなー。」

店員さんの案内でテーブルに座りメニューを眺める、お好み焼きだけじゃなく焼きそばや焼きうどん、たこ焼きもあるのね

「いずみは注文決まったのか？ 俺はこの豚玉にするけどさ。」

「私も同じのにするよ、なんか美味しそうだし。」

「美味しそうじゃなくて美味しいの、実は俺もこの店の事は奈津美さんから教えてもらったんだよ。」

奈津美さんが？ なんか意外ね、お好み焼きが好きそうな人にはあんまり見えないから・・・

「奈津美さんのお姉さんの友達さんが経営してるんだそうだ、奈津美さんもたまに食べに来るらしい。」

なるほどね、でもお姉さんの友達なら随分若いんじゃないかしら、そんな事を思ったら店員が注文を聞きに来る、しかしその店員は見覚えのある子だった

『いらつしやいませー、ご注文はお決まりでしょうか・・・って、あなた達は確か・・・。』

『あつ、君は・・・。』

その店員は以前に悪者に絡まれてるトコを真兄と蒼太くんが助けた綾子さんという女性だった

『へえ、ここで働いてるんだ、バイトなの。』

私が無気なく聞くと綾子さんは何故か顔を曇らせる

『は、はい・・・、あの・・・、ここで働いてるのは他の人には内緒にしてくださいませんか・・・、お願いします・・・。』

『別にいいけど・・・、何か訳ありなの？』

『なっ・・・、何でもないです！ それよりご注文は決まりましたか。』

どうにも彼女の様子はおかしいのだけどとりあえず豚玉2つを注文する、注文を確認すると彼女はそそくさと去っていった

『真兄、どう思う？ 彼女、絶対に何か訳ありよね、お金が必要なのかな。』

『俺達には関係ねえーべ、彼女も女子高生なんだから普通にお金
が欲しいだけなんだろ、工藤と関係ある人間に絡むとロクな事ない
んだからほっとこーぜ。』

確かに彼女は工藤先輩と何かしらの関係がありそうな人だった、も
しかして付き合ってるのかな？ でもだったら前田先輩は・・・

『お待たせ致しました、豚玉です。』

綾子さんが豚玉を持ってきた、ソースの匂いが食欲をそそるわね

『キタキター、この匂いがたまらんねー。』

『真兄い、マヨネーズはかけないの？』

『マヨネーズなんて邪道だよ、いずみは好きにしたらいいけどさ。』

邪道って・・・、私はマヨネーズかけた方が美味しいと思うけどな、
そんなのは人それぞれなんだけどね

『いただきます。』

『うん、ホント旨いわ、味もだけど柔らかくて食べやすいね。』

食べやすかった豚玉をわずか五分で平らげ店を出る、すると店の横
から気になる会話が聞こえてきた

『恭介先輩っ、お金はあといくら必要なんですか、私もこれ以上

バイト増やすのは少し・・・。」

恭介って工藤先輩の事よね、まさか綾子さんって工藤先輩にお金を渡してるのかしら・・・

「真兄、ちょっとこれはほっとけないよ・・・、何とかしてあげようよ！」

「そうだな・・・、それにしても工藤の奴、女の子を働かせてその金を取ってるのか！！　とことん見下げ果てた奴だな。」

私達が話していると綾子さんも私達の存在に気づいた、多少困ったような表情をしてたけどまずは事情を聞かなきゃ私達には何も分からないのだった。

第九十話（前書き）

遅れて申し訳ありませんでした、仕事上これからもこつこつ事が多々ありますが何卒ご容赦を。

第九十話

私達が見ていた事に気づいた綾子さんはすぐさま話していた携帯を切り立ち去ろうとする、そんな彼女を真兄が引き止めた

『君は工藤に言われて働いてるのか、お金つてどういう事だよ！まさかあいつにお金を貢ぐ為に働いてるのならそんなのやめた方がいいぞ。』

『離して下さい！ そうだとしてもあなた達には関係ありませんからっ！！』

『さっきまでは俺もそう思ってたんだけどな、気が変わったんだよ！！』

『・・・どうしてですか、なんで・・・。』

『電話で話してる君が困ってる様に見えたんだよ、せめて事情だけでも話してくれないかな、もしかしたら俺達だって何かの力になれるかもしれないぞ。』

さっきまで自分達には関係ないと言ってた真兄、でも目の前に困ってる人が居るのならそれがどんな人でも助けてあげる、こんなトコは小さい頃から変わってないわね・・・

『でも・・・、あなた達を巻き込みたくはないです・・・。』

『そんなの気にしないでいいわよ、私達が好きでしてる事なんだからさ、それよりどうか、事情を話してみてくれない？ 一人で

抱え込むより誰かに話した方がスッキリするわよ。』

『じゃあ・・・、後30分で仕事が終わりますから・・・、その喫茶店で待っててください、そこで話しますから・・・。』

綾子さんはそう言い残しお好み焼き屋へと入っていった、私達も綾子さんが指定した喫茶店へと向かう。喫茶店にて真兄と先程の一件について考える、なぜ綾子さんは工藤先輩の為に働いてるんだろ？ 真兄や青山さんならともかく工藤先輩にそんな魅力があるとは思えないけどね・・・

『ねえ真兄、どう思う、どうして綾子さんは工藤先輩にああまで尽くすのかな？ なんか弱みでも握られてるのかしら。』

『どうなんだろうな・・・、もしかしたら前田もどつかで働かされてるのかもしれないぜ。』

そんなの許せない！！ 女の子を一体なんだと思ってるんだろ、憤る私の耳に店のドアが開く音がする、いつの間にか30分が過ぎて綾子さんが来たのだ、彼女は不安そうな面もちで私達のテーブルに座る

『あの・・・、私、この後もバイトがありますから手短に話させてもらいますね・・・。』

『えっ！ 2つもバイトしてるの！ なんであなたがそこまでしなきゃいけないのよ！！』

絶対に普通じゃない事情がある、そう確信した私達を静かに見据え綾子さんは話し始めた・・・。

喫茶店を出た私達は街中を歩きながら先程の話を思い出す、あの工藤先輩が年上の不良グループからお金を請求されてるなんて・・・

『 どうする真兄？ 私達に何ができるんだろ、あのままじゃ綾子さん、倒れるまで働くよきつと。』

『 とりあえず工藤にも話を聞いてみようか・・・、俺達に素直に話すとは思えないけど一応な。』

綾子さんから聞いた話は工藤先輩が知り合いらしき年上の不良グループのバイクを壊してしまい弁償金を請求されてるとの事、綾子さんは工藤先輩に頼まれてバイトを2つも掛け持ちしてお金の工面に協力してるのだった、ちなみに前田先輩の名は一切出てこなかった。なので私達も黙ってた、多分に前田先輩はこの事は知らないのだろう。

『 でも工藤先輩もやつぱりひどい男だね！ 関係のない綾子さんまで巻き込むなんて！ ホントっ、あの男の何がいいんだろ！！ 私には理解不能だわ。』

『 とにかく綾子さんがファミレスのバイトを辞めてくれるだけよかったよ、大体17歳の子が年ごまかして深夜のファミレスで働くなんて駄目だろ・・・。』

年をごまかしてまで働く綾子さんを真兄は辞めるべきだと強く説得した、最初は耳を貸さなかった綾子さんだったけど誠意を込めた真兄の説得をやがては受け入れファミレスのバイトは辞めると約束してくれたのだ。

『 お疲れ様だったね真兄、ひとまず綾子さんの負担は減った訳なんだしさ、工藤先輩の事は明日考えようよ、さあーて、買い物行っちゃうよー。』

やっとデートを再開できる、買い物やらダーツやらデートを満喫した後は私の家に真兄を招待してママと協力して作った料理を振る舞う、真兄の評価は上々だったんだけどママが必要以上に真兄の体に触れてたのはまた別の話だった・・・。

第九十話（後書き）

工藤と綾子のお話はひとまず置いて次回は奈津美視点です。

第九十一話（前書き）

更新をおろそかにして大変申し訳ありません、それでも見てくれる全ての方々に感謝いたします。

第九十一話

『 奈津美、ちょっといいかな？ 』

朝の7時過ぎ、朝食の準備を進める私に香澄姉さんの呼ぶ声が聞こえてきます、呼び掛けに応じて姉さんの部屋に行くとベッドに腰掛けた姉さんが私に二枚のチケットを見せびらかしてきました

『 ？？遊園地の入場チケットがちょうど二枚余ってるのよ、私は知らないから奈津美にあげるわ、誰か誘って行つてきなさいよ。 』

『 えっ、あの？？遊園地ですか！ ありがとう姉さん！ ありがとう受け取らせてもらうわ。 』

近所にある人気スポットの？？遊園地の入場チケットをタダで手に入れました、これは早速貴志くんを誘うしかありませんわ・・・

『 随分と嬉しそうね、早く貴志くんを誘いたいのかなー フフッ。 』

『 ええ、せっかくのチケットなんですもの、本当に一緒に行きたい人を誘わないと譲ってくれた姉さんにも悪いですから。 』

姉さんも私が貴志くんに寄せる想いを知ってます、姉さんは私の事を応援してくれるのですけど姉さん自身にはまだ恋人とかはいない様です、美人なのでからその気になればすぐに見つかる筈なんですけど理想が高いのでしょうか

『 まあ頑張りなさいよ、恋愛は攻めの一手なんだから、奈津美が

本気で迫れば振り向かない男なんていないわよー。」

そう言い残して姉さんは仕事に行かれました、私も本気なんですけど同じく本気な女の子が私の他にあと三人います、里奈さんも夕奈さんも彩花さんも私同様に貴志くんしか見えてないのですから。

少し遅めの朝食の後、チケットの件で早速貴志くん電話してみました、数回のコールの後に携帯から愛しい人の声が聞こえてきました

『おはよー奈津美さん、今日はどしたん？ 何か用事かな。』

『あらっ、用事がないと貴志くん電話したらいけないのですか、そんなの寂しいです……。』

『あっ……。いや！ そんな事ないって、奈津美さんならいつでも電話してきていいんだからさ、俺でよければいつでも話し相手になるよ。』

もうっ、貴志くんだったらあ、あんまり可愛らしい反応をするのでもう少しだけからかってみたいくなりますわ

『話し相手とかじゃなくて、私の隣にずっと一緒にいてほしいです……。』

『えっ、奈津美さん、それは……。あの……。つまり……。』

『フフっ、とりあえず今は冗談です、でもいつか本気で言いますからね、それより貴志くん、今日ご予定は空いてますか？』

『今日は空いてるよ、里奈は夕奈ちゃんやクラスの友達と図書館に勉強しに行ったからね。』

まだ一年なのに図書館で勉強会とは頑張りますわね、三年の私達はこの時期に勉強もせずに今からデートに行こうとしてるのに

『実は??遊園地の入場チケットが二枚手に入ったのですが・・・、よかつたら一緒に行きませんか。』

『マジっすか!! あno??遊園地かよ、一度行ってみたかったんだよなあ・・・って、あれ?? 二枚って事はもしかして奈津美さんと二人きりなの。』

『私と一緒にゃご不満なのですか・・・。』

二人きりというシチュエーションに二の足を踏む貴志くんに対し泣きそうな声を出してみて精神的に揺さぶってみます、効果はすぐに出ましたわ

『そんな事は断じてございません!! この五虎大將軍筆頭青山貴志、奈津美さんの誘いなら地の果てまでご同行させてもらう所存であります!』

『本当ですか! 嬉しいですね、じゃあ10時に駅前の公園のベンチに来て下さい、そこで待ち合わせましょう。』

『了解致しました! 遅刻などで奈津美さんを待たせない様に30分前には到着する所存であります!!』

『貴志くん、もうその言葉遣いはおやめになった方が・・・。』

こうして約束を取り付け私は貴志くんと遊園地デートをする事になりました、このチャンスをも有効活用して混戦模様の貴志くん争奪戦に必ず勝利いたしますわ。

第九十一話（後書き）

そういえば奈津美の姉は香澄でよかったのかな・・・。

第九十二話（前書き）

風邪をひいてしまいました、更新が遅れてすみません。

第九十二話

現在時刻は9時45分、私は貴志くんとの待ち合わせ場所である公園のベンチに來ましたがそこにはもう貴志くんが來ていたのです、私とした事が、貴志くんを待たせるなんて！

『貴志くん！ まさか本当に30分前に來ていたのですか！ 私ったらどれだけ待たせて・・・、本当にごめんなさい！』

『今來たばかりだからそんなに謝らなくてもいいよ、それより奈津美さん、その袋は一体・・・。』

やはり貴志くんは私の持つてる紙袋に目があったみたいです、楽しみはお昼まで取っておきたかったのですけど私は袋の中身を教えてあげました

『これはお昼に食べるお弁当です、貴志くんと食べようと思って私が作ってきたんですよ。』

紙袋の中身は私の作ったお弁当、学校では貴志くんのお弁当はいつも里奈さんが作ってます、でも本当は私だって貴志くんにお弁当を作ってあげたい・・・、それでこの機会に私も貴志くんにお弁当を作ったのです

『奈津美さんの手作りなんだ、そりゃあ遊園地のレストランで食うより美味しいだろうな、うーっ、早く食いてえー。』

『貴志くんだったら・・・、お昼までお待ちくださいな、お弁当は逃げたりしませんから。』

それから？？遊園地のある隣町まで電車で向かう事になりました、電車内では多数の男性がチラチラと私を見ています、なんだか気分がよくないですわ

『 貴志くん、遊園地に着いたら最初にどれに乗りたいのですか？
』

『 なんかゆつくりしたのがいいな、実は絶叫系は苦手なんだよ・・
。』

『 そうなのですか、うふふつ、なんだか可愛らしいですね、私も絶叫物は好きじゃありませんけど。』

『 みんなには内緒にしといてよ、特に友にはね。』

貴志くんの思わぬ弱点を知りなんだか微笑ましいです、その後も続く電車内での幸せな時間・・、今の私達は誰がどう見ても恋人同士にしか見えないでしょう、本当に恋人同士だったらいいのですけどね。

？？遊園地に着いた私達はお弁当の入った紙袋を係員さんにお預けして貴志くんのご要望のゆつくりしたメリーゴーランドに乗りました、私が乗ってる時は男性が俗な視線を送ってましたが貴志くんが乗ってると子供達が不可解な視線を送ってます、貴志くんの金髪な外見でメリーゴーランドは少々場違いの様でした。

他のゆつくりなアトラクションをいくつか楽しんだ後、時間もお昼前になってたので預けてたお弁当を取りに行き遊園地内の休憩所で昼食を食べる事にしました

『 うっへー、こりや凄いわ、奈津美さんって料理教室開けるんじゃないね？ 』

『 そんな事ありませんわ・・・、今日は短時間でしたからたいした出来映えじゃないですけど・・・、それじゃあ食べましょう。 』

『 いただきまーす、うんっ、やっぱりうめーよ、里奈も夕奈ちゃんも彩花も美味い料理は作るけど奈津美さんの料理はズバ抜けてるよ、味付けが違うつっーかさ・・・。 』

貴志くんは凄い勢いで私のお弁当を食べてくれます、これだけ食べてくれていると作る側としては嬉しいものです、ましてやその人が世界で一番愛しい人なら尚更ですわ

『 貴志くんにそう言われると何だか照れますわ、喉が渴いたら冷たい麦茶も用意してますからね、ゆっくり食べて下さい。 』

2人で仲むつまじくお弁当を食べてる私達を周囲の人達、主に男性ですけど羨望と好奇の混じった目で見てました、見せ物じゃないのに実に不愉快です、しかもその中にあまり会いたくなかった人達も居たのです

『 青ちゃん、奈津美・・・、今日は2人なんだ。 』

『 全く・・・、なんで君達とこんな場所で会ったんだよ、君達に会うとロクな事がないんだよ・・・。 』

いつの間にか私達の近くに来ていたのは貴志くんの元カノで私の元親友だった前田理子さんと前田さんを貴志くんから奪った工藤恭介

さん、この2人も??遊園地に来ていたのです

『 お前らか・・・、別に俺達は何処にしようがお前らには関係ないだろ、頼むから俺達に絡まないでくれよ、俺達もお前らには絡まないからさ。』

『 それは僕の台詞だ、しかし学園のアイドルと呼ばれた高野奈津美も堕ちたもんだな、青山君みたいな男とデートとは、かつての君のファンが見たら失望するだろうな・・・。』

この人は何を言ってるのでしょうか？ 貴志くんが絡むなと言ってるのが聞こえてないのでしょいか

『 やめなよ、恭介ったら、もう行こうよ・・・。』

『 私が堕ちようがあなたには関係ありません、学園のアイドルと呼ばれ凡百の男性に好かれるよりも貴志くん1人に好かれる方が私にとっては何万倍も嬉しいのですから。』

『 奈津美さん・・・。』

私の想いを聞いた貴志くんは感動してるみたいでした、これが偽りのない私の本心です、学園のアイドルとして多数の男子にもてはやされるよりも貴志くんや真司くん達と遊んでる方が私は楽しいのです

『 はいはい、それはよかったね、馬鹿男に感化された阿呆女でお似合いのカップルだよ。』

一体この男は何なんですか！ 私が文句を言おうとしたら貴志くんが怖い顔で工藤さんに詰め寄ってました

『 お前さあ、いちいち俺を馬鹿にするのはまだ我慢するけど奈津美さんを侮辱するのは許せねえぞ!! 』

こんな貴志くんは初めて見ました、一体どうなるのでしょうか・・・。

第九十二話（後書き）

奈津美の口調が初期とはかなり違いますがあまり気にしないで下さい。

第九十三話（前書き）

まだ体調が万全ではありませんが奈津美デート編完結です。

第九十三話

『なんだよ、殴る気が、やっぱり暴力しか脳のない野蛮人だな君は、君みたいな低脳にはお似合いの行為だよ、ははっ。』

工藤さんに迫る貴志くんの顔がますます怖くなっていつてます、こんな人の相手をするよりも私としては昼食の続きをしたいのですけど・・・

『お前を殴つても意味ねーよ、俺に謝れとも言わねー、お前にそんな事なんかハナから期待してないしな！でも奈津美さんには謝れ！！奈津美さんは俺の大切な人だ！！誰だろぅが彼女を侮辱する奴は俺が許さねえっ！』

今、私はこの人を好きになってよかったと心から思ってます、貴志くんは私を大切な人だと言ってくれてる・・・、自分よりも私が侮辱されたのを怒ってるのですね・・・

『こんな所で大声で言う事が・・・、前にも言っただけで青山君の仲間などには絶対に謝罪とかしないよ、たとえどんなに俺が悪くても君達に頭を下げるのは死ぬより嫌だね。』

もうこの人には何を言っても無駄の様です、ちょっとルックスがいいからとお思いでしょうが肝心の中身は最低のクズですね

『恭介！もうやめてっば！これ以上青ちゃんや奈津美を苦しめないでよ・・・。』

『理子、お前はどっちの味方なんだ、お前は誰の彼女なんだよ、

なんならここで別れてもいいんだぞ。』

『恭介……、本気で言ってるの？……。』

私達を氣遣ってるらしい前田さんには悪いですけど痴話喧嘩は余所でしてほしいですわ、私は一刻も早く貴志くんとのデートを再開したいだけなのです

『もういいよ理子、奈津美さん、どっか違うトコで食べようか？移動させちゃって悪いけどさ。』

『全然構わないですよ、2人だけで静かな場所に行きましょう。』

私達のやり取りを聞いてた工藤さんは軽く舌打ちをして去って行きました、前田さんも後を追って行こうとしてます、なんだか彼女も可哀相ですわね

『本当にゴメンね、青ちゃん、奈津美……、恭介が嫌な思いさせちゃって……、どうか恨まないであげて……。』

去り際に前田さんが私達に謝ってくれました、とても辛そうな表情で、貴志くんはそんな彼女に穏やかに返答しました

『お前が悪い訳じゃないだろ、だからあんまり気にすんなよ、謝ってくれてありがとな。』

『うん……、ありがと、青ちゃん……。』

前田さんは涙を浮かべてました、あんな裏切り方をされた女なのに貴志くんは恨み言なんて一つも言いませんでした、彼は他人の痛み

が分かる人ですから。

場所を移動して昼食を済ませた後、嫌がる貴志くんを半ば強引にお化け屋敷に連れ込みました、貴志くんはお化けも苦手の様です、お茶目な金髪くんでした

『キヤーツ、貴志くん、怖いですわーっ！』

『うびょー！！ 出たーっ！ 首なし女じゃー！！ たっけてくれー！』

2人して叫び放題であんまり貴志くんに抱きつけませんでした、こんな予定ではなかったのですが・・・。

遊園地デートのラストに観覧車は定番です、観覧車から見る夕暮れの街並みは何だか儚く見えてしまいます

『奈津美さん、今日は誘ってくれてありがとね、遊園地とか初めて来たけど凄く楽しんだよ、今度は友や里奈達と来てみたいな。』

『お礼を言うのは私です、貴志くと来れてよかったですわ、次はぜひ皆さんと来たいですね。』

貴志くんは楽しんでくれたみたいで安心致しました、そして私は貴志くんの隣に座りました

『・・・奈津美さん、近いよ・・・。』

『・・・嫌ですか？ 私が隣に来るのは・・・。』

貴志くんは何も言いませんでした、更に私は自分の頭を貴志くんの肩に乗せてこれ以上はないくらいに体を密着させます

『さつき言ってくれましたよね・・・、私は大切な人だって、私にとっても貴志くんはこの世で一番大切な人です・・・。』

『なっ、奈津美さんっ！ 俺は・・・。』

観覧車の中で見つめ合う私達、他には誰も居ません、このシチュエーションで男女がする事は一つです

『愛してますわ、貴志くん・・・、誰よりも貴方だけを・・・。』

そして貴志くんと私の唇は一つに重なりました、私のファーストキスは世界で一番愛しい、全てを捧げられる男の人とする事ができたのです・・・。

第九十二話（後書き）

そろそろ二学期に入るかも・・・。

第九十四話（前書き）

久しぶりの主人公、貴志視点です。

第九十四話

一週間前、俺は奈津美さんとキスをした、だがまだ正式に恋人同士となった訳じゃない、デートの帰り際に奈津美さんからこんな事を言われたのだ

『キス・・・、しちゃいましたね、でも今日の事は皆さんには黙っといた方がいいですわ、貴志くんもその方がいいでしょうし私も皆さんとの関係を壊したくないですから、その代わり・・・、もう一回・・・、キス・・・、してくださいませんか？』

涼しげな目で上目遣いをされては断れる筈もなく奈津美さんと二回目のキスをした、しかしその後彼女はとんでもない事を顔を赤くして言ってきた

『貴志くんが望むのでしたら・・・、私・・・、キス以上の事もしたいです・・・。』

言われた瞬間、頭の中が真っ白になったがなんとか理性を取り戻し丁寧に断りした、まだ恋人関係でもないし里奈や夕奈ちゃん、彩花を悲しませてしまう、だが一番の理由は17にして未だに童貞の俺がビビってしまっただけの事なのだ、俺が断ると奈津美さんは微笑を浮かべ笑顔で話す

『分かりましたわ、貴志くんがその気になるまでいつまでもお待ちします、私のこの体は貴志くんの物でもあるのですから。』

そう言った奈津美さんは別れ際に満面の笑顔で俺に三回目のキスをしてきた、それから一週間経っても未だに彼女の唇の感触が忘れら

れずいつも彼女とのキスを思い出す、眠っていると夢にまで出てきそうなくらいに、しかし布団の中が妙に生暖かいな、布団で寝てた俺は違和感を感じたので布団をめくってみるとなんと！！

『う・・・ん、ムニヤムニヤ・・・、お兄ちゃん・・・、だあいすきなんだからあ・・・。』

やけにハッキリな寝言だな、否つ、問題はそこじゃない！！ どうして里奈が俺の布団の中に居るんだ！

『おいっ！！ コラッ、里奈！ 起きろっ！』

『うん・・・、ふあ・・・、おはよお、お兄ちゃん。』

年頃なのに何の恥じらいもなく俺の前であくびを出して目をゴシゴシとさせるマイシスター、一分くらい待って完全に目が覚めた様子の里奈に早速俺の布団に居た理由を聞いてみる

『聞きたい事は一つだけだ、なんでお前が俺の布団に居るんだよ、いつの間に潜り込んだんだ！？』

『だって愛し合う男女が同じベッドで寝るのは当たり前前事なんだよ、せつかく里奈がお兄ちゃんの部屋に来たのにお兄ちゃんたら顔をニヤニヤさせて寝てたんだもん、だからお兄ちゃんの布団の中に入っちゃった、エヘヘ・・・。』

羞恥心のカケラもない里奈に怒る気力もなくなってきた、しかし里奈の格好が・・・、何というか・・・、なんでスケスケのネグリジエなんだ、こんなのいつ買ったんだよ？

『ところで里奈、そのカツコは一体何のつもりなのかな……。』

『似合う？ 似合ってるお兄ちゃん、お兄ちゃんに喜んでもらおうと思って通販で買ったんだよ。』

何をどうしたらそんな発想が出てくるんだ？ 妹のエロい寝間着姿を見て喜ぶ兄が……。いるにはいるんだろうけど俺はそんな兄ではない……。つもりだ

『似合ってるけど別に俺は喜ばないぞ、だいたいお前も年頃の女の子なんだからもう少し恥じらいというのを持っただな……。』

『似合ってるんだ！ うーれしー！ 好きっ！ 大好きっ！！ 愛してるよ！！ お兄ちゃん 』

俺の言葉をどう勘違いしたのか朝からハイテンションな里奈は言うなり俺に抱きついてきた、お願いだからそんなネグリジエ姿で兄に抱きつくな

『ちよっ……。里奈、離れろってば……。』

『お兄ちゃんの感触……。お兄ちゃんの匂い……。お兄ちゃんの全てが好き 里奈、お兄ちゃんがいなかったら生きていけないよ……。』

何やら非常にマズい事態になってきた、里奈がスケスケのネグリジエ姿で抱きつくから俺のムスコが元氣になりつつある、これを里奈にバレた日には何をされるか分かったもんじゃない、早く離れないと……

『 里奈、トイレに行きたくなったから離れてくれよ、早く行かねーと漏れちまう。 』

『 うーん、仕方ないなあ、じゃあ里奈は着替えてから朝ご飯の支度するね。 』

なんとか里奈にバレる前に離れる事に成功した、しかしますます里奈は俺への好意を強めている、これさえなければ最高の妹なんだけどな・・・。

第九十四話（後書き）

なんとか連日更新が出来て良かったです。

第九十五話（前書き）

作中ではまだ夏です、時期外れは気にしないでください。

第九十五話

もうすぐ近所のスーパーのタイムセールが始まる午後三時四十分、里奈から買い物頼まれた、今日の夕食のメニューであるスキ焼きに使う肉やら野菜を買ってきてとの事、里奈は掃除やら洗濯で忙しいし元々買い物は俺の役目だ、このくらいはお安いご用である。

買い物から戻ると女の子用の靴が2つ増えている、誰か来たのかと思ひ家に上がりリビングに行くとなると入るなり里奈が思いつき抱きついてきた、何事かと思うと

『ハッピーバースデー！！ お兄ちゃんっ 』

『お誕生日おめでとunggざいます、貴志くん。』

『・・・お兄さん・・・、18歳の誕生日・・・、おめでとunggざいます・・・、それと里奈・・・、いい加減離れて・・・。』

リビングには奈津美さんと夕奈ちゃんも居た、そういや今日は俺の18の誕生日だったな、里奈にしては誕生日について何も触れなかったから何か企んでるなと思つてたけど

『いらっしやい、奈津美さん、夕奈ちゃん、2人共今日はありがとう、俺の為にわざわざ来てくれて凄く嬉しいよ、いくつになつても誕生日を祝ってくれる人が居てくれるのはやっぱりいいモンだな。』

リビングに居た三人に感謝の言葉を伝える、三人娘は俺の言葉に嬉しそうな反応をしていた

「お兄ちゃんのお誕生日を祝うのも妹の務めだよー、これから何十年経つてもずっと里奈は祝ってあげるんだからっ」

「好きな人の誕生日と一緒に祝うのは当然ですわ、私もずっと一緒に祝いさせて頂きますね。」

「・・・私だって・・・、年老いても・・・、お兄さんの誕生日・・・、祝いますから・・・。」

何十年先も彼女達は俺の事を祝ってくれるのか・・・、なんか感動しちまったな、未来がどうなるのなんて分からないが彼女達の気持ちは素直に嬉しかった、感動に浸っているとインターホンが鳴り響く、玄関に向かいドアを開けると

「誕生日おめでとうー、貴志っ！ 私達も一緒に祝いに来たわよ。」

「Happy birthday！ 青山先輩、お久しぶりです。」

「青山せんぱーい、お誕生日おめでとうございます、私も蒼太に誘われて来ちゃいました」

玄関の外には四森姉弟と紗恵ちゃんがプレゼントらしき物を持って立っていた、けどなんで彩花達が今日が俺の誕生日だと知ってるんだ？ 教えた事とかない筈だけど

「あー、来た来たー、いらっしゃーい、どうぞ上がってくださいーい。」

里奈が玄関に来て彩花達を家に招き入れる、どうやら里奈が呼んだ様だな、どおりですき焼きの材料がかなり大量だったワケだ、まあ大勢のが楽しいしな。

キッチンでは5人娘がすき焼きの準備の真っ最中だ、俺も手伝おうとしたら当然の如く里奈から断られた

『お兄ちゃんはジツと座ってなさい、だいたい今日はお兄ちゃんのお誕生日なんだから手伝わせたりしたら悪いじゃない。』

『里奈さんの言う通りですよ、準備は里奈さん達や紗恵に任せて青山先輩はゆっくりしててください。』

蒼太もそう言って俺をソファーに座らせる、その時に蒼太の台詞に違和感を覚えた、今、確か蒼太は紗恵ちゃんを紗恵と呼び捨てで言ってたな、先程も紗恵ちゃんは蒼太と呼び捨てにしてたしもしやこの2人……

『なあ蒼太、今お前、紗恵ちゃんの事呼び捨てで言ってたけどもしかして付き合ってたのか……。』

『はい……。紗恵とは正式に恋人同士になりました、ちなみに姉さんも知ってますよ。』

いつの間に……。まあめでたい事だし俺も若い2人を暖かく見守るとするか、しばらく蒼太と紗恵ちゃんの事で話してるとまたインターホンが鳴る、誰が来たかは大方予想がつくけどな

『よおつ、おめでとう青！ 今年も来たぜー。』

『 青山さん、誕生日おめでとーございます、あつ、もうみんな来てたんですねー、お邪魔しまーす。』

来客は予想通りに紙袋を持った友成といずみちゃんだった、俺んちにいつもの面々が勢揃いしてこりゃ今年の誕生日も騒がしくなりそうだな・・・。

第九十五話（後書き）

この話は次回も続きます。

第九十六話（前書き）

かなり仕事が忙しいです、2日に一話更新出来たらいいかな・・・。

第九十六話

只今の時刻は午後六時半、ウチのテーブルにはいつもの男女9人がすき焼きを食べ始めていた、ちなみに友成が持ってた紙袋は俺へのプレゼントではなくすき焼き用に追加で買ってきた肉と野菜とジュースだった、まぎらわしいやつちゃ

『 やっぱり鍋は大人数で食べるのがいいよねー、蒼太もそう思うでしょ。』

『 そうだな、すき焼きは美味しいし6人もの美少女と一緒に食事できるし、こんな贅沢な環境はなかなかないですよ、ねえ、青山先輩、友成先輩。』

付き合いだして間もないカップル、蒼太と紗恵ちゃんが隣同士でお喋りしながら肉をつついていて、しかし蒼太、美少女が6人って自分の姉も数に入れてるのか？ 確かに彩花もかなりの美少女だけどな

『 おうつ、美少女6人と一緒に食事をしてるとか学校の奴らに教えたら羨ましがるぞー、俺達は幸せ者だよ、なあ、青、蒼太。』

『 真兄ったら、あんまりいいふらしたら駄目だよ、心配しなくても私達と一緒に食事したい男性はこれから真兄と青山さんと蒼太くんだけだからさっ。』

『 ……私も……、お兄さんと……、友成先輩と……、蒼太くんがいいです……。』

俺達三人をこれ以上なく持ち上げるいずみちゃんや夕奈ちゃん、そ

こまで言われるとなんだかこそばゆいな

『 お褒めに預かり光栄です、でも青山先輩や友成先輩に比べたら俺なんて大した事ない男ですよ。』

あくまで控えめな蒼太、こんな事を言ってるがここにいる男性三人の中では蒼太が一番の美男子だぞ

『 そんな事ありません、蒼太くんも貴志くんや真司くん同様に魅力的な男性ですわ、もっと自分に自信をもってください、紗恵さんの為にも。』

奈津美さんに励まされ蒼太も紗恵ちゃんだけでなく姉の彩花も嬉しそうだ、俺も蒼太は外見だけじゃなく中身も充分に伴ってる男だと思うけどな。

かなりの量の多さに全部食えるのかと心配したがすき焼きも少しずつ減っていく、俺が鍋の中からえのきを取って口に入れると

『 あーっ！ 青ーっ！！ お前ー！ 俺が楽しみに残してたえのきを取りやがったなあ！！』

友成が絶叫する、えのき一つでうるさい奴だな

『 あー、友のだったのか、わりーわりー。』

俺が軽く謝ると今度は友成が鍋から椎茸を取って口に入れる、それを見た俺は

『 友ーっ！！ それは俺がいい具合に煮込んでた椎茸だったんだぞー！ ご飯と一緒に食べようと思ってたのにーっ。』

先程の友成同様に大声で叫ぶ、やはり俺と友成は似た者同士みたいだな、類は友を呼ぶってヤツか

『フンっ、元はと言えばお前が先に俺のえのきに手を出したんだろーが！』

『ネチネチと過ぎた事を、俺とお前の仲じゃねーか！ そのくらいガハハと笑い飛ばせよ。』

俺と友成の険悪？な空気を見かねた里奈が俺達の間割って入ってきた、今にも泣きそうな表情で

『お願いだからケンカしちゃ駄目だよ！ お兄ちゃんと友さんがケンカしたりするのなんて里奈、見たくないよお・・・。』

そんな里奈を見て俺も友成も何も言えなくなった、彩花もやんわりと俺達を叱る

『もうっ、貴志も真司もつまないケンカでこんなお兄ちゃん想いの可愛い妹を泣かしちゃってもいいの、えのきも椎茸もまだ沢山あるんだから仲良く食べようよ、ねっ』

確かに大人げなかったよな、自分を省みた俺と友成は里奈に言った

『心配すんなって里奈、俺と友はいつまでもマブダチだから、なあ、友。』

『そうだよ里奈ちゃん、だから安心してくれよ。』

「うん やっぱり2人はそうじゃなきゃね。」

里奈の表情にも笑顔が戻った、そんな時、俺の携帯に一通のメールが届いた、メールを見てみると

（Happy birthday 素敵な18歳になってね。）

理子からだった、そういや去年は理子も祝ってくれたんだっとな・

「誰からメールだったの？ お兄ちゃん。」

「理子からだよ、誕生日おめでとうってな。」

理子からだだと知ると里奈は少し不機嫌になったみたいだ、もはや俺よりも里奈の方が理子の事を引きずってるな、俺は理子の事は完全に吹っ切った、奈津美さんともああなったしな・・・

「あつ、そうそう、貴志にプレゼント渡さなきゃね、はいっ。」

すき焼きもほとんど無くなってくると彩花達からプレゼントを渡された、彩花からは秋用の部屋着、蒼太からは渋いデザインの財布、紗恵ちゃんからは可愛いストラップだった

「三人共ありがとう、いや、皆も今日は来てくれて嬉しかった、俺には誕生日を祝ってくれる人がこんなにいたんだな。」

「そんなの当たり前だろ、里奈ちゃんの誕生日もここに来るからさ、そんな時の料理が楽しみだぜ。」

友成が当然の如く三ヶ月後の里奈の誕生日にも来ると宣言した、里奈も喜んで様だし俺も楽しみだ、できたら来年の俺の誕生日もまた、この仲間達に祝ってもらいたいモンだな。

第九十六話（後書き）

次回から二学期です。

第九十七話（前書き）

何の進展もないお話です。

第九十七話

『お兄ちゃん、朝だよー、起きて起きてっ、遅刻しちゃうよ。』

里奈の声が聞こえる、今日から二学期が始まるので起こしに来たみたいだ、うつすらと目をあけてみると

『ぬわーっ！！』

つついドラ エ5のパスの断末魔の叫びを出してしまった、里奈の顔が俺の目の前にあったからだ

『おはよーお兄ちゃん ていうか声が大きいよー、近所迷惑だよ。』

『お前が大声を出させる様な事をするからだ！ 起こしてくれるのはありがたいけど起こすなら普通に起こしてくれっ！！』

『わかったよ、明日からは普通にお目覚めのキスで起こしてあげるね 』

・・・どうにも会話が成り立ってない様だ、俺の部屋のドアに鍵はないし携帯の目覚ましを朝5時くらいに設定して確実に里奈より先に起きる様にしよう、俺の貞操を守る為に。

只今の時刻は朝の7時、ちなみに里奈が俺を起こしたのは6時、だったら里奈は何時に起きたんだ？

『いただきます。』

毎日休む事なく里奈が作ってくれる朝食を食べる、度の過ぎたブラコンを除けば非の打ち所のない妹なのに実にもつたいない

『今日からまたお兄ちゃんや夕奈ちゃんと学校に行くんだねっ、夕奈ちゃんも後五分で来るからお兄ちゃんも早く準備してね。』

もはや里奈と夕奈ちゃんと俺と一緒に登校するのは確定事項みたいだな、俺に選択肢はないのか？ 別に嫌じゃないんだけど・・・。

いつもの通学路を2人の美少女と並んで歩く、相変わらず人々の視線を集めるのにはもう慣れた

『ねえねえ夕奈ちゃん、昨日のテレビ見た？』

『・・・見た・・・、面白かったね・・・。』

そんな他愛のない会話をしながら歩いてると見慣れたモデル級の美少女が優雅に立っていた、というよりなんで奈津美さんがここに居るんだ？

『あっ、奈津美さんだ、おはようございます。』

『・・・おはようございます・・・、奈津美先輩・・・。』

『おはようございます、貴志くん、里奈さん、夕奈さん、この前は本当に楽しかったですね。』

奈津美さんの言うこの前とは夏休み最後の日曜日にいつもの9人で

カラオケに行った事だ、男女9人が集まれば歌う歌う、カラオケ屋に五時間は居座ってたな

『おはよう奈津美さん、確かに楽しかったよな、あんなに歌ったのは久しぶりだったよ、友が歌ったムンライト伝説だけでは殺意を覚えたけどね・・・、ところでどうしてここに？ 通学路こつちじゃなかったよね。』

『私も貴志くん達と登校したかったんです、一緒に行きましょう。』

こうして美少女が2人から3人に増えた、好奇の視線も更に増える、これって何のギャルゲなんだよ。

校門に着くと里奈達と別れ俺達の教室に入る、友成と彩花も既に来ていた

『おはよう、青、奈津美さん、あれっ、2人は一緒に登校してきたのか？』

余計な事を友成が聞くと奈津美さんは正直に答えてしまっ、その瞬間、彩花から体が宙に浮かぶほどの武装（バトル）オーラが吹き出してきた

『ふっん・・・、だったら私も明日から貴志と学校に通うことに決めたからねっ！ 朝の七時過ぎには貴志の家に迎えに行くから先に行ったりなんてすると・・・一生私の性奴隷にしちゃうんだから！』

彩花さん・・・、何やら聞き慣れない単語が聞こえたのは気のせい

だよな？ 奴隷はともかく性奴隷なんて言葉をどこで知ったんだよ、近頃の女子高生ってヤツは・・・

『相変わらずのハーレムぶりだな、お前は卒業するまで奈津美さんや彩花と一緒に登校するのは決定みたいだ、いや、結構結構。』

友成は更に余計な事を言いやがる、絶対面白がってるだけだろコイツ、いつか必ず天誅を下してやるぜ、ベーゴマあたりでなっ！！

今日は始業式だけなので昼前には帰れる、HRも終わりクラスメイトがゾロゾロと帰って行く中、俺達は軽い雑談をしてた

『彩花は 大学、奈津美さんは保育士かあ、みんな進路は決まってるんだな、友は親父さんの会社に入るんだったつけ？』

『そう思ってたけどやめたよ、俺は勉強して小さい頃の夢だった鉄道警察隊に入るんだ、香取刑事の意志を継ぐのは日本には俺しかないからな。』

・・・まあ本人はやる気だし何も言うまい、しかしコイツが警察官かよ、本当になれるのかな

『素敵な夢ですね、私も応援しますわ、頑張ってくださいね。』

『真司が警察官ってなかなか似合ってるじゃない、その香取刑事って人を目指して頑張rinaさいよ。』

2人は純粹に友成の夢を応援している、持つべきは純真で心優しくて美人な友達だな、さて、俺はどうしようかな・・・。

第九十八話（前書き）

やはり2日に一話になりそうです、明日も更新できたらいいな・
・。

第九十八話

『真兄、迎えに来たよ、帰ろうよー。』

放課後に雑談を交わしてた俺達の教室にいずみちゃんがいつも通りに友成を迎えに来た、羨ましい奴だ

『おうつ、やっと来たか、じゃあな、青、奈津美さん、彩花、また明日な。』

『青山さん、奈津美さん、彩花さん、またみんなでカラオケ行きましょうね、それじゃあ失礼します。』

仲良く肩を並べて帰って行く2人を見送りながら俺もそろそろ帰ろうとカバンに手をかける、現在教室に残ってるのは俺と奈津美さんと彩花、後は男子が数人のクラスメートだけだ

『それじゃあ俺も帰るよ、丁度腹も減ったし。』

今日は始業式だけなので弁当を持ってきていない、時間も丁度お昼時だし足早に教室から出ようとする俺を奈津美さんが呼び止めた

『あつ、待つてください貴志くん、お腹が空いているのでしたらお好み焼きでも食べて帰りませんか？ 美味しいお店を知ってるんです。』

『お好み焼きかー、お昼ご飯にはちょうどいいかもね、私も行くわ、貴志ももちろん行くわよね。』

彩花が俺の左腕にFカップ巨乳を押し付ける様に絡みついてくる、それを見た教室に残ってる男子達が羨望と殺意の混じった視線を俺に投げかける、なんで俺にはこんな視線ばかりなんだろうか・・・

『 ああ、行くよ、奈津美さんが言うんだからきつと旨いんだろうな。 』

まあ断る理由もないからな、里奈にはメールでも入れとけばいいだろう

『 はい、味は私が保証致しますわ、それじゃあ行きましょう。 』

すると奈津美さんも俺の右腕に絡みついてくる、やはり胸を押し付ける様に、そろそろ男子連中が本気で殺気立ってきたので俺達は逃げる様に教室を後にした。

学校から出てしばらく歩いたトコでやっと俺の両腕から離れてくれた2人のグラマラス美少女、しかし並んで歩くだけでもどうにも周りの人々からの注目を集めてしまう、この2人なら仕方ないんだけどな

『 その好み焼き屋は私の姉さんの友人が経営なさってるんです、なんでも小さい頃からの夢だったそうすわ。 』

『 夢を叶えたってワケだ、小さい頃の夢を叶える人とかなかなかいないからね、相当の努力も苦労もあつたんだろうな。 』

『 確かにすごいわよね、同じ女性として尊敬しちゃうわ、ちなみに私の夢は好きな男性と平凡でも幸せな家庭を築く事よ、ねえ、貴志っ 』

まーた寄り添ってきたよ、このFカップメガネ娘、そんな事するからもう1人の正統派黒髪ロング美少女が対抗意識を燃やすんだよ

『偶然ですわね、私の夢も愛する人といつまでも笑顔の絶えない家庭を作る事ですよ、でも私とそんな家庭を作る男性はこの世に1人しかいませんけど、ねえ、貴志くん』

彩花と似た様な事を言っでは彩花と似た行動を取る奈津美さん、この2人も似たもの同士なのかな？ ていうか俺はどうしたらいいのだ、卒業するまで、いや、卒業した後もずっとこんな調子なのだろうか、こりゃ困ったな

『あつ、着きましたわ、ここです。』

奈津美さんが店の扉を開け先に中へ入る、俺と彩花も後に続いて入ると店は結構人が多かった、店員さんも気持ちのいい大声で挨拶してくれる、やはり客商売で挨拶は基本だな

『お客さん多いんだねー、いい匂いもするし、さーて、何頼もっかな〜。』

店員さんに案内されたテーブル席に座った彩花は早速メニュー表に目を通す

『お好み焼きだけじゃなく焼きそばや焼きうどんなどもありますわ、私はお好み焼きしか食べた事がないんですけど。』

『やつぱりお好み焼き屋に来たんだからお好み焼き食べなきゃな、俺はデラックス豚玉にするよ。』

『じゃあ私もそれにするわ、後はたこ焼きも頼んじゃおうかな、たこ焼き好きなんだよねー。』

よくそんなに食べれるな、でも彩花は巨乳だけど太ってはいない、体型管理が上手なんだろう、奈津美さんも俺達と同じのに決めた、早速ベルを鳴らして注文だ

『いらっしやいませー、ご注文でしょうかー。』

やってきた店員さんは俺達と同世代っぽい可愛いセミロングの女の子だ、ちよつと理子に似てるな

『デラックス豚玉が3つとたこ焼き1つね。』

『かしこまりました、しばらくお待ちください。』

店員さんは深々と頭を下げ店の奥に戻る、そんな時、隣のテーブル席から複数の男の話し声が聞こえてきた

『あの店員か、工藤が言ってたのは、かなりいい女じゃねーか。』

『あともう1人いるんだろ？ 確か工藤の彼女で前田とかいう子がさ、あー、早く明後日にならねーかな、明後日にはその2人とセックス出来るんだからなー。』

なんだと、どういう事だ、工藤の奴、何考えてるんだよ・・・。

第九十八話（後書き）

見てくれてありがとうございます。

第九十九話（前書き）

展開の遅さはご容赦下さい、いつもの事です。

第九十九話

奈津美さんの姉さんの友人が経営するお好み焼き屋にて何やらよからぬ密談を聞いた俺達だが話していた男達はその後、すぐに店を出た、美味しいデラックス豚玉とたこ焼きを食べながら先程の話について奈津美さんや彩花と話す

『 さっきの話ってやつぱりあの工藤と前田の事かな？ それとあの店員の人も狙われてるみたいね、教えてあげよーか。 』

『 見ず知らずの私達の言う事を信じてくれるでしょうか？ もしかしたらたまたま名字が同じの別人かもしれませんよ。 』

『 とにかく明日、工藤か理子に話をしてみるよ、さっきの話じゃ明後日とか言ってたし、それと2人はもうこの件には関わらない方がいい、なんか危ない雰囲気だからね。 』

さっきの男達も金髪とか鼻ピアスとかお世辞にも褒められた容姿じゃなかった、そんな奴らが関わってる事に奈津美さん達を巻き込みたくない、しかし彼女達は引き下がらなかった

『 貴志くん1人でどうにかしようと言うのですか、私だってそんな卑劣な行為は許せません、お手伝いさせて下さい！ 』

『 私は別に前田とか関係ないんだけど貴志が助けたいのなら手伝うわ、大丈夫よ、危険な事だけはしないからさっ、ねっ。 』

仕方ないな・・・、いざとなったら友成にも手伝ってもらうか、絶対この2人には危ない事はさせない様にしないと

『わかったよ、でもこれだけは約束してくれ、万が一危険な状況になったら絶対にこの件から手を引く事、いいね。』

2人はそれについては了承してくれた、でも工藤は何をしようとしてるんだ？ あんなガラの悪そうな奴らと知り合いだったとしたら理子も大変だろうな、お好み焼きを食べながら俺はそんな事を考えていた。

2人と別れ家に帰ると里奈も帰ってたしいつも通りに夕奈ちゃんも居た、奈津美さんや彩花とお好み焼きを食べた事を告げるとやはり噛みついてくる

『ずるいー、ずるいー、里奈も一緒に行きたかったな。』

『・・・お兄さん・・・、今度は・・・、私達と・・・、行きましょう・・・、約束ですから・・・。』

プーっと頬を膨らませる2人も可愛いな、そんな顔見せられたら何でも許してしまいそうだぞ

『じゃあ今度の休みの日に行こうか、三人でな。』

こう言ったら2人共あっさり機嫌を直してくれた、純粹というか単純というか・・・、夕方には夕奈ちゃんも帰り里奈は夕飯の準備中、ミニスカートで生足露出、可愛いエプロンを着て料理をしてるマイシスターの後ろ姿は何ともいえない色気があるな・・・

『お兄ちゃん、もう少しで出来るからねー・・・って、どうしたの？ ボーっとしちゃって。』

急に里奈が俺の方へ振り向き目があつてしまつ、まさかお前に見られていたなんて言うワケにもいかない、どうしたものかな

『 あつ・・・、いや、お前にはいつも三食作ってもらつて世話になりっぱなしだなと思つてさ・・・、いつも悪いな。』

正直、適当に答えたただだが里奈の反応は大きかつた

『 そんなの当たり前だよ！ お兄ちゃんにご飯を作つたげるのはこれから先もずーっと里奈だけなんだからね！』

ブラコンも極めるとなかなか清々しいな、実妹とはいえかわいい女の子にこんな事を言われちゃ男なら悪い気はしないだろう

『 そりゃどーも、まあ里奈の料理は旨いからな、これからもお願いするよ。』

『 うん　ずっと一緒にいようね、お兄ちゃん　大好きだよつ。』

普通の男子高校生なら90%は萌えさせる妹スマイルを俺に向けてくる、その笑顔とそのカツコでそんな事を言うのは反則だろう、お兄ちゃんはずらいよ。

夕飯も食つて風呂も入った、携帯の目覚ましもしつかり朝の5時に設定したし後は寝るだけだ、しかし気掛かりはガラの悪い男達に狙われてる可能性の高い理子とお好み焼き屋の可愛らしい店員さんだよな、一体何が起ころうとしてるのか・・・、言い知れぬ不安が俺の頭の中を渦巻いていた。

第九十九話（後書き）

次回は真司視点でいきます。

第百話（前書き）

まさか百話まで続くとは・・・、話の進展が遅いだけなんですけどね、読んでくれている人達にも厚く感謝してます。

第百話

今日は始業式だけだから学校は昼まで、教室まで迎えに来てくれないずみと共に下校する

『真兄、今日はこれからどうしよっか、どっか遊びに行く？』

『そうしたいけど今から工藤んちに行くつもりなんだ、だからいずみは先に帰っててもいいぞ。』

工藤の住所は事前に工藤の担任から聞いている、鉄道警察隊に入ろうとする俺にとっては当然の下準備だ

『綾子さんの件ね、だったら私も行くよ、私も工藤先輩には一言言ってやりたいんだから！』

言い出したら聞かないからな・・・、あまりいずみを関わらせたくないけど

『じゃあ行くか、デートはその後でな。』

こうしていずみと2人で工藤の家に行く事になった、あいつが俺達に素直に話をするとは思えないけど何もしないよりはマシだろう、せめて自分の為に必死に働いてる綾子さんをどう思ってるか知りたかった。

頭の中でさすい刑事旅情編のメインテーマ（第3シリーズからのやつ）を流してるといつしか工藤の家に着いていた、かなり立派な家だ、あいつって金持ちなのか、じゃあなんで綾子さんを

働かせてるんだ？

『へえー、随分と豪勢な家ねー、真兄の家より大きいんじゃない？』

『そうだな、どつりで工藤って変にプライドが高いワケだ、多分甘やかされて育ったんだろうな。』

とりあえず家のチャイムを鳴らしてみる、少しするといかにもセレブといった感じの女の人が出てきた

『お待たせしてすみません、どちら様でしょう。』

俺達は工藤の友人と偽り挨拶する、この人は工藤の母親で工藤の所在を聞くとまだ学校から帰ってきてないとの事、だったら出直そうかとしたその時

『なんで君達がここに居るんだ！！ とつと帰ってくれ、目障りなんだ！』

丁度工藤が帰ってきた、前田はいなく工藤1人だ、俺達への暴言に母親はさすがに息子を叱る

『恭介！ せっかく尋ねてきた友人になんて事言うの！！ 早く謝りなさい！』

『嫌だね、だいたい友人じゃないし！ それよりも母さん、もしかしてこの人達を俺の部屋に上げたりとかしてないだろうな！！』

何を慌ててるんだ？ 部屋になんかあるのか

『 今来たばかりでまだ家に上げてないわ、それがどうかしたの？
』

母親がそう言うのと工藤はなんでもないと母親を制しますます語気を強めて俺達を追いつ出そうとする

『 早く帰れ！ 君達は何を企んでるのか知らないが人の家にまで押しかけるとかワケが分からないな！！ 二度と来るなよ！
』

予想通りの展開だな、母親もいるしここは大人しく引いておくか、だがいずみが黙ってなかった

『 アンタさっ！ こんな大きな家に住んでるのになんで綾子さんを働かせてるのよ！！ 綾子さん、アンタの為に年齢をごまかしてまで働いてたの知らないの！！ 男なら自分の不始末ぐらい自分でなんとかしなさいよねっ！！
』

言ってしまったか・・・、母親も何かなんだか分からないといった感じだな、いずみに怒涛の勢いで綾子さんの事を言われた工藤は全く悪びれずに言い返す

『 綾子に会ったんだな、君達には全く関係ないだろう、これ以上この件に関わらないでもらいたいな。
』

まだ怒りの収まらないいずみを強引に抑え母親に会釈してこの場から離れる、少し歩くとやたらとガラの悪い男達にすれ違う、何やら妙な予感がしたので彼らの行く先を見てたら案の定、工藤の家に入っていた、あの連中が工藤がバイクを壊したとかいう年上の不良グループの様だな

『あれが工藤先輩を脅してる人達よね、なんで警察に言わないんだろう？』

『工藤にもバイクを壊したっていう負い目があるからな・・・、警察に言ったらただじゃ済まないとか言って脅したんだろう。』

いずみと物陰に隠れながら工藤の家の様子を窺う俺達はまるで刑事みただ、尊敬する香取刑事に一步近づけた様な気がする、そんな自己満足に浸っていると工藤の家からあの連中と工藤が一緒に出てきた、しかし何か変だな、会話とか聞こえないがやけに仲がよさそうなのだ、俺達のグループみたいに

『随分と仲良さそうだね、本当に脅されたりしてるのかしら？』

『

いずみも俺と同じ疑問を感じていた、さすが西園寺刑事に似ているだけあるな

『いずみ、悪いけど今日のデートは中止でいいか？ 今からあいつ等の後を付けてみようと思うんだ、だから先に帰って・・・。』

『私なら帰らないわよ、私も凄く気になってきたからさ、今日は真兄にとことんまで付き合っよ。』

やる気マンマンないずみと一緒に工藤達の後を付ける事になった、工藤のあの態度がいやに気になる、おかしい事にならなきゃいいけど・・・。

第百話（後書き）

平成生まれの高校生でさす　い刑事旅情編を知ってる人なんていないでしょうね・・・、自分が好きなだけのドラマなんですけど。

第一百一話（前書き）

今回も真司視点です。

第一百話

工藤と不良グループの後を付けて向かった先は工藤の家から歩いてすぐのコンビニだった、俺達は見つからない様にビルの陰に隠れてコンビニを見張る、しばらくしたらコンビニから工藤達が出てきた

『じゃあな工藤、明後日は頼むぜ、あゝ、マジ楽しみだな、女2人も食えるなんてさっ。』

『分かってる、君達も約束は守ってくれよ、その為にあの2人を差し出すんだからな……。』

工藤と不良の1人の会話が聞こえる、あいつ、差し出すって何だ・・・、しかもその女2人って綾子さんとひよっとして前田の事が、あんな奴らに差し出して何のつもりだよ

『じゃあな恭介、また明日電話すつから。』

コンビニを出た不良グループは工藤と別れそれぞれバラバラに立ち去って行った

『どうしよつか真兄、もう一回工藤先輩に話をしてみる？ 絶対にオカシイよこれ、綾子さん達が危ないかもしれないよ。』

『工藤から話を聞くのは不可能だな、あの連中の誰かから話を聞いてみよう、一番弱そうな奴を見計らって話を聞くんだ。』

いずみを連れて不良グループで一番背の低い男の後を付ける、高校

の制服姿だから目立つけど向こうは俺達を知らないはず、自然にデート中のカップルを装った

『後を付けてどうするの？ あの人の家を知っても何にもならないよ。』

いずみの問いには答えず黙って後を付ける、やがて不良少年の周りには俺達以外誰もいなくなった

『いずみ、お前はここでジッとしてろ、何があっても絶対に出てくるなよ。』

いずみは不満そうな顔をしてたが女連れで不良と対面したくない、いずみを無理やりその場に残し俺は不良少年に声をかける

『あのー、ちょっといいですか、少しお話を伺いたいですけど・・・。』

『あゝ、誰だよお前！』

俺から声をかけられた不良はあからさまに機嫌を悪くしたみたいだ、あまり乱暴な事はしたくないけどな

『さっき俺の友達の工藤君と一緒に居ましたよね、何の話をしてたのか気になっちゃって。』

『恭介のダチなのか、だとしてもお前には関係ねー、さっさと帰りな。』

・・・やむを得ないかな、実力行使といくか

「 帰るわけにはいかないね、工藤があんた達に差し出すとか言つてた2人って誰の事だよ、あんたが知ってる事をすべて話してもらおうか、嫌だつっても話してもらっけどな。」

「 やんのかこのガキ！ だったら聞き出してみろよ！ その前にその口を永遠に塞いでやるけどな！！ 」

ガキって・・・、こいつの方がガキっぽいけどな、自分の容姿を気にしてるのか

「 ふーん、俺はいいけどどうなっても知らないぞ、人を見かけで判断するとどうなるのか、その体に教えてやるよ！ 」

・・・楽勝だった、一ラウンド30秒でノックアウト、最近の不良ってこんなに弱いのか？ 三橋や伊藤、今井や中野を見習えよな

「 つ・・・、つええ・・・、なんなんだお前は・・・、何者だよ・・・。」

「 俺の事はどうでもいい、あんたが知ってる事を全部話してくれただけでいいんだ、・・・話さなかったら両腕へし折るぞ。」

工藤の野郎！ 絶対許さねえ！！ 綾子さんや前田の体をあの不良グループに売るとか男のする事じゃねーよ

「 真兄、こうなったら警察に全部話そう、あいつ等全員刑務所にぶち込んでやった方がいいよ！ 」

『 まだ何もしてないからそれは無理だよ、それより綾子さんと前田にこの事を話そう、このままじゃあの2人、あいつ等に・・・、くそつたれが！ 』

俺が倒したチビ不良から聞いた話は工藤の話は全て嘘だったという事、バイクなんて壊してないしあの不良グループとは昔からの親しい友人だったのだ、その上自分の小遣い稼ぎの為にだけに綾子さんを騙して働かせて何も知らない前田と共に不良グループに売った、売った理由まではチビ不良も知らないそうだ、ちなみにチビ不良は念入りに脅してグループを辞めさせた

『 許せない！！ 絶対に！ 綾子さんの気持ちをなんだと思ってるの！ これじゃあ綾子さんも前田先輩も可哀相すぎるよ・・・。 』

いずみにも話を教えたなら非常に強い怒りを示す、お好み焼き屋に着いたら綾子さんは帰った後だった、店員さんに綾子さんの住所やら電話番号を聞こうとしたけどやはり今の世の中、個人情報等を赤の他人の俺達に教えてはくれなかった

『 真兄・・・、どうしたらいいかな？ このままじゃ綾子さん達・・・。 』

『 さっきの話じゃ計画は明後日に予定してるらしい、明日学校で前田に話すよ、今日はもう帰ろう。 』

その後はいつも通りにいずみの家で夕飯をご馳走になり自分の家に帰る、帰宅時を考える事は絶対に明後日の計画を阻止してやる事、俺の頭の中はその事でいっぱいだった。

第百二話（前書き）

貴志視点に戻ります、まだ二学期も二日目です。

第二百二話

朝の5時、携帯の目覚ましが小さく鳴り響く、目を覚ました俺はまず最初に自分のベッドの中を確認する、里奈は居なかった、さすがに毎日は来ないな、まだ起き上がるにはさすがに早いので小説でも呼んで時間をつぶそうとしたその時、部屋のドアが開き

『あれっ？ お兄ちゃん、今日は一段と早起きなんだね、せつかく里奈がお目覚めのキスをしてあげたかったのに……。』

当たり前の様に兄の部屋に入ってきたよこのブラコン妹、そんな里奈もかなり早起きだ、つーか年頃の娘が簡単にキスとかしちゃうだぞ、ましてや相手が実の兄ともつてのほかだ

『おはよう里奈、聞きたいけどお前はいつも何時に起きてるんだ？そして俺の部屋に何しに来た！』

『朝の5時だよ、お弁当や朝ご飯の準備って結構時間が掛かるんだから、でもお兄ちゃんの為だから里奈は全然平気だもん、ここに来たのはお目覚めのキスをしに来たに決まってるじゃない、ふふふっ』

・・・健気な妹だな、俺の為の早起きを全く苦にしてない、里奈が俺の妹で本当に良かったよ、でもマッサージもキスもその先もしないからな！デートくらいならしてやるけど・・・

『別に6時に起きても充分間に合うだろ、なんでわざわざ5時なんだ？』

『 6時になつたらお兄ちゃんも起きちゃうでしょう、そしたらお兄ちゃんの寝顔が見れないじゃない、里奈の1日はお兄ちゃんのカワイイ寝顔を見る事から始まるんだからね 』

いつもの萌え度数MAX100%の笑顔でしれつと言い放つ里奈、それでいいのか妹よ？ そんな理由で5時に起きるのか！ お兄ちゃんは理解に苦しむよ。

朝食も食べ終え午前7時を少し過ぎた頃、家のインターホンが鳴る、やっぱり来やがったな・・・

『 おはよー貴志、ちゃあんと私が来るのを待っててくれたんだね、ふふっ、それじゃ行こっか 』

玄関のドアを開けた先に居た彩花は奈津美さんにも劣らない優しい微笑みを俺に向ける、その笑顔に不覚にもドキッとさせられる中、ちょうど制服に着替えた里奈もやって来た

『 彩花さん？ どうしてウチに・・・あつ！ やっぱり彩花さんもお兄ちゃんと一緒に登校したいんですね、分かりますよー。 』

『 もー里奈ったら、そんなハッキリと言わないでよ、とにかく今日から私も一緒に学校行くからよろしくね、夕奈もココに来るんでしょ。 』

彩花の言う通り、彩花がウチに来て二分後に夕奈ちゃんも来た、彩花に気づくと

『 ……彩花先輩・・・、おはようございます・・・、多分・・・、こうなると思っていました・・・。 』

夕奈ちゃんはこのなる事を分かってたのか？ 女の感は侮れないな

『おはよー夕奈ちゃん、ほらあ、早く行くよー、お兄ちゃん 』

4人が揃ったところで家を出る、程なくすると昨日と同じ場所で待ってた奈津美さんに出会う

『おはようございます皆さん、やっぱり彩花さんも今日から一緒なのですね、ますます朝が賑やかになりそうですね。』

『おはよ奈津美、やっぱり私もいないと貴志が寂しがると思ってさー。』

朝いなくて寂しくなったりしないけど・・・余計な事は言えない、朝ウチに来た彩花の笑顔に一瞬とはいえ心奪われた俺にとやかく言う資格はないからな

『あつ・・・。』

『おう理子、おはよ。』

5人になった俺達の近くを理子が通りかかった、あつ、そういえば！ 大事な事を思い出したぞ

『理子！ 今日は工藤は一緒じゃないのか？ あいつに話があるんだ！！』

『どうしたの急に・・・、恭介なら今日は休むって言ってたよ。』

「なんでだ！ 何か言ってたか、もし知ってたなら教えてくれよ！
」

「何の事よ！？ 恭介の家に行ったら今日は用事があるから休む
って言ってただけよ、ねえ、一体何なの！ どうしたの青ちゃん。」

理子は何も知らない様だな・・・、しかし工藤の奴、用事って何だ、
明日何をするつもりだよ

「理子、明日は家から出ない方がいい、工藤から誘われても絶対に
断れ！」

「えっ！？ 何言ってるの青ちゃん、いきなりワケが分からない
んだけど。」

どうしよっか、説明が難しいな、事情を知らない里奈と夕奈ちゃん
はともかく奈津美さんと彩花もうまく対応できなさそうだし

「とりあえず遅刻するから先に学校に行こう、詳しい話は学校で
するよ。」

俺がそう言つと理子は絶対説明してよと言い残し先に学校に向かう、
俺達とは行動しにくいのだろう、里奈が敵意を込めたキツい視線を
送るから

「ねえお兄ちゃん、あの女がどうかしたの、あの女にかまうお兄
ちゃん、里奈は見たくないよ・・・。」

里奈と夕奈ちゃんは知らなくてもいい事だからな、適当にお茶を濁
し俺達も学校に向かう、さて、理子にはどう話したものかな、そし

て工藤、一体何を企んでるんだよ・・・。

第二百二話（後書き）

ユニークが25000人、PVに至っては4000000近くになりました、皆様のお陰です。

第百三話（前書き）

まだ当分は忙しいです、日曜日まで仕事をせるとは・・・。

第百三話

学校に着いて教室に入ると先に来てた理子はすぐに俺に先程の話の事を聞いてきた、少し怒った感じで

「青ちゃん！ 明日がどうしたの、恭介と何を話すのよ！ 早く教えて！！」

「・・・あまり教室で話せる内容じゃないな、それにまだ工藤と理子の事だという確実な証拠もないし、適当にごまかすか、そう思ってたら友成が教室に入ってきた、友成は俺達に近づき理子に話しかける

「前田、今から少しだけ俺に付き合ってくれるか？ 大事な話があるんだ。」

「えっ、別にいいけど・・・、急にどうしたの友くん、大事な話って何？」

友成が理子に話とか珍しいな、そして友成は続けて俺にも話しかける

「青も一緒に来てくれ、お前にも聞いてもらいたい話なんだ。」

俺も？ 何だろ、友成が俺と理子に何を話す事があるんだ、気になるので友成と理子と共に教室を出て人のいない理科室に向かった。

「・・・嘘でしょ・・・、そんなのって、何言ってるのよ友くん・・・。」

理子は絶句している、俺も驚きを隠せなかった、友成が話した内容は工藤が理子と例のお好み焼き屋の店員さん（綾子さんという名らしい）の体をタチの悪い不良グループに売りとばそうとしてるという悪魔の様な所業だった、つくづく救えない男だなあいつは・・・、でもなんで友成がこんな話を知ってるんだ？

『残念だけど嘘じゃないんだ・・・、もう工藤とは別れるよ、そんな奴といっても不幸になるだけだ。』

『それって本当なのか友！？ いやっ、なんでお前がそんなの知ってるんだ、話してくれよ。』

友成が言うには以前に悪者に絡まれてる事を蒼太と助けた事があった綾子さんが工藤の尻拭いの為に働かされてるという話を聞いて生来のお節介気質から工藤の周りを調べていく内にその事実にいきついたとの事、なんか本当に刑事みたいな事してたんだな、しかし何故友成はこの話を俺にも聞かせたいんだ・・・

『青ちゃんも知ってたんだね・・・、話ってこの事だったんでしょ。』

『なにっ、青も知ってたのか？ どうして・・・、いやっ！ だったら話は早いな、頼む青、力を貸してくれ！ 前田と綾子さんを工藤達から守るにはお前の力が必要なんだよ！！』

なるほど、不良グループが絡んでるから腕っ節の強い俺にも協力してほしいんだろう、もちろん異論はない、罪のない2人の女の子を男の身勝手な欲望の捌け口に利用されてたまるか！！

『 いいぜ友、俺の力が役立つならいつでも協力してやるよ、俺もそんなの到底許せないからな。』

ガララッ、俺が言い終える前に理子が理科室のドアを開け駆け出していく、急いで後を追った俺達は廊下で理子を捕まえた

『 離してっ！！ 今から恭介の家に行くんだからっ！ 恭介の口から本当の事を聞きたいの！！』

『 家って、工藤は今日学校に来てないのか？』友成に説明するとチャイムが鳴る、朝のHRが始まったのだ、そんな中友成が

『 それじゃ今から工藤の家に行こう！ 今ならまだ家に居るだろうからな。』

サボるのか・・・、彩花に担任には適当にごまかしてくれとメールを入れて俺達は工藤の家に向かった。

工藤の家に来たものの家には誰も居ないのか鍵がかかっていた、それにしても立派な家だな、工藤って金持ちのボンボンだったのか？理子に聞いてみると

『 お父さんは大きな病院のお偉いさんって言ってたわ、お母さんも有名なデザイナーらしいの・・・。』

そんな家庭で育ってあんな人間になったのか？ 環境で人は変わるというけどな

『 どうする青、もうここに居てもしょうがないだろう、学校に戻るか？』

『綾子さんの家とか分からないのか？ 彼女も狙われてるんだろ。』

『残念ながら家も連絡先も知らないんだ、お好み焼き屋もこんな時間じゃまだ開いてないしな。』

それじゃどうしようもないな、一回学校に戻るか

『2人共なんでここまでしてくれるの・・・、私は青ちゃんを裏切った女だよ、どうして・・・。』

それまで殆ど喋る事のなかった理子が静かに口を開く、もう泣きかけてるし

『それはもう済んだ事だろ、女の子が危険な目に遭いそうな話を聞いて黙って見過ごすほど薄情じゃないぞ俺達は、なあ友。』

『そういう事、香取刑事だって被害者や容疑者が若くて美人な女性なら率先して捜査してたからな、それと同じ事だよ。』

それは香取刑事に失礼だろ友成！ 確かに少し前の俺なら理子とかどうなるうと知ったこっちゃないと無視してただろう、でも理子も苦しんだり悩んだりしてたのを最近になって分かった様な気がする、奈津美さんとの遊園地デートの時や里奈とのデートで会った時に・・・、少し情がわいただけかもしれないが単純に守ってやりたいのだ

『ありがとね青ちゃん、友くんも・・・、私っ・・・私っ、うつ、うつ・・・わあぁ〜ん。』

とうとう理子は泣き崩れてしまった、仕方ないか、信じてた工藤にあんな裏切り方されちゃあな、俺と友成は何も言わず理子が泣き止むまですっと待っていた・・・。

第百三話（後書き）

知らない人は真司の言う香取刑事についてはスルーしてください。

第百四話（前書き）

この後の進展がなかなか決まらない・・・、ダメダメな作者ですみません。

第百四話

泣き尽くした理子を連れ学校に戻るともう二時限目が終わろうとする時間だった、教室に入るとオッサン教師からネチネチと小言を言われたが授業が終わると奈津美さんと彩花が揃って俺達を慰めてくれた

『 あんなのお気になさらないで下さいね、貴志くんも真司くんも人の為に頑張っただけなのですから。』

『 そうよ、貴志も真司も全然悪くないんだからっ！ 私達はちゃんと分かってるからね、それより工藤には会えたの？ 』

彩花にそう聞かれるも話すと長くなるから昼休みに話すと言って次の授業時間になった、こんな物騒な展開になっても恐らく彼女達は引き下がらないだろう、かわいい顔して割と頑固な2人だからな。

『 そんな・・・、酷すぎます！！ 人間のする行為じゃありませんわ！ 』

『 何考えてんのよアイツは！ ねえっ、警察に話そうよ！！ そんな奴は一度少年院に送って頭を冷やさせた方がいいわ！ 』

工藤達の計画を2人に教えると彼女達は今まで見た事がないくらいに激昂した、ちなみに今日の昼休みは外の人がない場所で弁当を食べてる、この一件をあまり他のクラスメート達には知られたくなかったからだ

『確かにそうするのが一番だけど工藤達は今の時点ではまだ何もしていないからな、ハッキリとした犯罪行為をしなきゃ俺達が言っただけじゃ警察は簡単には動かないよ、何か決定的な証拠を掴まないとな。』

さすが警察官志望の友成が言うത്それっぽく聞こえるな、しかし証拠なんてどうやって掴むんだ？

『それでこれからどうなさるおつもりですか、私としてはまずその綾子さんという方の安全を確保するべきだと思いますわ。』

いきなり奈津美さんが的確な意見を述べた、確かにそれは最優先だ、学校が終わったら真っ先にお好み焼き屋に行つて綾子さんに工藤達の企みを教えないとな

『ねえ、工藤だけじゃなく不良達も絡んでるんだよね、だったら蒼太にも協力してもらおうか？ 蒼太もかなり強いからきっと頼りになるわよ。』

今度は彩花が意見を出す、確かに不良達も絡んでるなら戦える蒼太が居ると頼りになるだろう、しかし俺はその申し出をやりわり断る

『彩花、せっかくだけど蒼太には教えなくていいよ、あいつ紗恵ちゃんと付き合い始めたばかりなんだろう、多分今が一番楽しい頃だ、そんな時にこんな野蛮な騒動に巻き込ませるのは蒼太にも紗恵ちゃんにも悪いよ、大丈夫、俺と友だけでなんとかするからさ。』

横で友成もうんうんと頷いてる、そして

『優しいね青ちゃんは・・・、蒼太くんも優しい先輩達を持って幸せだね。』

実は理子も俺達と昼食を共にしていた、なんだか1人にはしておけなくて俺と一緒に食べようと誘ったのだ、断られると思ったが理子はあっさり了承した、最初はやはりぎこちなかったが少しずつ理子も友成や奈津美さんと会話するようになった、しかし彩花とはまったく会話してないけど

『貴志がそう言うならそうするわ、ふふふっ、なんか本当に蒼太のお兄さんみたいだよ、実際近い将来にそうなるんだけどね。』

彩花の方も理子の存在がそこにないかの様にいつものアプローチをしてくる、そしたらやはり奈津美さんも応戦する、お決まりのパターンだな、もう慣れたよ

『それはどうなるか分かりませんわ、誰と結婚するかは貴志くんが自分の意思で決める事です、貴志くんが後悔しないようにするのが一番なんですから。』

こんな感じに奈津美さんは俺の意思を尊重してくれる、どこまで天使なんだこの子は、学校のアイドルと言われてたのが分かるよ

『相変わらずだな青、お前なら一夫多妻を実現できそうだが、どうだ、いつその事4人と結婚したらいいんじゃないか？』

『4人って誰だ！？ 奈津美さんと彩花と夕奈ちゃんと・・・まさか・・・里奈じゃねーだろうな！！』

『分かってるじゃねーか、超ブラコン兄3のお前なら全国五千人

の妹スキーのお兄ちゃん達の悲願である妹を妻にするという奇跡を起こせるぞ、里奈ちゃんもきつとお前からのプロポーズを待ってるさ、結婚式には絶対呼んでくれよな。』

・・・やはりこの男には制裁を加えなければならない様だな、里奈にプロポーズとかしたら俺は社会的に抹殺されるに違いない、人を追い込んで面白がる様な奴にはこうだ、俺は携帯を取り出して

『 あつ、もしもいずみちゃん、今さあ、友がクラスの女の子達と仲良くお喋りしてたよ、なんだかすごく楽しそうにね。』

『 青おーっ！！ ふざけたデタラメ言ってるじゃねー！ 嘘だからいずみ！ 信じちゃ駄目だぞー。』

俺の携帯を強引に奪おうとする友成とそれをヒョイとかわす俺、そんな高校三年生とは思えない争いを繰り広げる俺達を奈津美さんと彩花が止めに入る

『 2人共やめてください、食事中にお行儀が良くありませんよ！』

『 はいはい、貴志も真司もそれまでになさい！ いい加減にしないとと里奈に2人が大喧嘩してるって言っちゃうよ、里奈をまた心配させてもいいの！！』

俺達は下らない争いをピタツと止めた、俺も友成も里奈の涙には弱いからな、そしてこんな俺達4人を理子はどこか寂しそうな目で見ている・・・。

第百四話（後書き）

次回は蒼太視点になると思います。更新は明後日になると。

第百五話（前書き）

少し遅れてしまいました、今回は蒼太視点、かなり短めです。

第百五話

二学期が始まって二日目、授業も終わりいつもの如く紗恵と2人で下校する

『 蒼太、今日はあたしんちで勉強教えてくれるんだよね、早く行こーよ 』

クラス内では公認のカップル扱いをされてた俺達だけど夏休みに紗恵とは正式な恋人同士になった、俺の暗い過去にも一緒に向き合ってくれて、励ましてくれて、更には過去に縛られてた俺に新しい道を照らしてくれた彼女の事をいつの間にか好きになっていた、俺から告白すると紗恵は感激したのか涙ぐみ

『 うん・・・、うんっ・・・、あたしも四森くんが好き・・・、って、泣いちゃおかしいよね、これからもあたしとずーっと一緒に居てね・・・蒼太 』

こんな感じに紗恵は俺からの告白をOKしてくれた、それに伴い互いの呼び方も変わり紗恵との新しい関係がスタートした、可愛く氣立てのいい恋人に面倒見のいいしっかり者の姉、尊敬できて頼れる先輩達や明るく優しい友達たちに囲まれ俺は自分の生きる道標が見えた様な気がした。

紗恵とのいつもの帰り道、一緒に帰る様になってもう5ヶ月近くになるだろうか、いつもの他愛ない平凡な会話も恋人同士になると何故だか楽しく聞こえる

『 蒼太は運命って信じる方？ あたしとの出逢いも運命だったと

思う？
」

「 どうだろうな・・・、紗恵との出逢いが運命だとしたら俺は神様に感謝するよ、紗恵が居なかったら俺は未だに過去を引きずって前に進めなかったからね、もちろん青山先輩や友成先輩、高野先輩や里奈さん達に出逢えた事も俺にとっては素敵な運命だったかもしれないな。
」

運命の出逢いか、あまり深く考えた事はないけど紗恵や皆と出逢えた事は運命でもそうでなくても出逢えて良かったと俺は思ってる

「 あたしは信じてたよ、いつか必ず運命の人に巡り会えるって、蒼太があたしの運命の人だったんだよ！ 青山先輩達と出逢ったのもきつと運命だったと思うなあ、友成先輩の別荘で過ごした3日間ですその事がよく分かったよ。
」

純粹な少女だな、実際にはそう思える出逢いとかほとんどのだろうけど瞳をキラキラさせて想いを語る紗恵を見ると運命の出逢いってやつを信じてみたくなってくる、その後約十分間、運命について飽きずに話す紗恵と少し辟易した俺の前に見覚えのある女の人が居た、以前に友成先輩と助けた事がある綾子さんという人だ、ここで何をしてるのだろうか？

「 どうも、お久しぶりです、ちなみに俺の事誰か分かりますか？
」

声をかけた俺に気づいた彼女は少し考えた後に思い出したようで申し訳なさそうな表情になり謝ってくる

「 あなたは確かあの時の・・・、ごめんなさい！ やつと思い出

しました、あの時は本当にすみませんでした、せっかく助けて頂いたのに恭介先輩が酷い事を言ってしまったて……。」

随分真面目な人だな、綾子さんが謝る必要はないのに工藤先輩のした事に対して俺に頭を下げてくる、しかしこんな真面目な大人しそうな綾子さんとお世辞にも誉められた人格ではない工藤先輩はどんな関係なんだろうか？ 気になったがそこまで首を突っ込む事はない、挨拶だけしてその場を離れようとしたその時

「おつ、いたいた、あんただろ、綾子って人は、はじめまして、俺達工藤君から頼まれてあんたを迎えに来たんだよ。」

かなり派手な二人組が綾子さんに近寄ってきた、その様子に何やらよからぬ事が起こりそうな予感がしてきたのだった……。

第百五話（後書き）

次回の更新は多分明後日かな・・・、めちゃくちゃ忙しいので。

第百六話（前書き）

なんとか更新出来ました、また貢志視点に戻ります、読みにくくてスミマセン。

第百六話

今日の授業も終わり放課後、工藤達の事を綾子さんに教えようとお好み焼き屋に行こうとするが友成から

『俺はもう一回工藤の家に行ってみるよ、母親が居るかもしれないし何か分かるかもしれないだろ。』

それだけ言つと友成は足早に教室から出て行つた、入れ替わりに教室に来たのは

『お兄ちゃん、迎えに来ちゃつた　久しぶりに一緒に帰ろうよー。』

『お兄さん・・・私も・・・お兄さんと一緒に帰りたいです・・・』

里奈と夕奈ちゃんだった、初々しい一年の美少女2人がいきなり教室にやってきてクラスメートの男子達にはわかに騒ぎ出す

『この子って青山くんの妹なのか？　良かったら俺に紹介してくれよ！』

『いやっ、俺だ！！』

『じゃあそつちのポニーテールの子は俺だな。』

それぞれ好き勝手な事言ってるな、誰が大切な2人をこの軽薄連中に紹介なんてするか！！　寝言は寝て言え、はつきり断ろうとしたら

『 皆さんには残念ですけどこのお二人にはもう心に決めた人がいるんです、あまり彼女達を困らせる様な事は言わないで下さい。』

『 そういう事よ、この2人は私の妹みたいな子なの、ライバルでもあるけど・・・、軽い気持ちでこの2人に言い寄るのは私が許さないからね！』

せつかくカッコ良く決めようとしたのに俺の見せ場を奪ったのは奈津美さんと彩花だった、後ろには理子も居る、マズいな、俺が理子と一緒に居ると里奈は人が変わったみたいになる、里奈は理子に気づくと案の定噛みつく

『 どうしてアンタが奈津美さんや彩花さんと一緒に居るの・・・、早くどっか行ってよ、今から私達5人で帰るんだから！』

やはり里奈は明らかに不機嫌になってる、夕奈ちゃん是不機嫌でも笑顔でもなくただ黙ってジッと俺を見てる、どうしようか、今は理子を1人にさせたくない、もしかして帰る途中とかに工藤達に捕まるかもしれないからな

『 お兄さん・・・私達に・・・何か隠してますよね・・・、朝の時も何かおかしかったから・・・何かあるなら私達にも話してください・・・。』

夕奈ちゃんが重い空気の中で静かに話しだす、見抜かれてたのか、口数は少ないけどどこか鋭いトコのある子だよな

『 何！？ お兄ちゃんって里奈達に隠してる事があるの！ そんなのダメだよっ！！ ちゃんと里奈達にも話してよ。』

こうなると観念するしかないな、とりあえず理子も加えた六人で教室から出た。

体育館の裏手に来た俺達は理子が俺達と一緒にいる理由、すなわち工藤達の事を話すと夕奈ちゃんは少なからずショックを受けた様だ、そりゃそうだろ、女の子が聞いて楽しい内容じゃないからな、しかし里奈は

『 そうなんだ・・・、やっぱり工藤ってどうしようもないクズだね、でもどうしてお兄ちゃんや友さん達がアンタを守らなきゃいけないの！？ お兄ちゃん達には関係ない事じゃない！ そんな危ない事にお兄ちゃん達を巻き込まないでっ！！ 』

どうしても理子を守るのには反対の様だ、俺の心配をしてくれるのは有り難いけどだからといって理子や綾子さんを見捨てる事はできない、その旨を里奈に話すと里奈は目に涙を貯めながら俺に言い返す

『 なんでお兄ちゃんがこの女の為に危ない事をしなくちゃいけないの！？ この女はお兄ちゃんを裏切ったんだよ、お兄ちゃんの気持ちを土足で踏みにじったんだよ！！ 工藤や不良達に襲われたってそんなの自業自得じゃない！ お兄ちゃんを傷つけた報いだよ！！ 』

報いにしても酷すぎるだろ・・・、確かに理子は俺を裏切ったけどそれは綾子さんには関係ない、すこし厳しく里奈に言い聞かせる

『 里奈っ！！ いい加減にしろよ！ 俺の心配をしてくれるのは嬉しいけどこれが俺って人間なんだよ、お人好しかもしれないけど

危険な目に遭いそうな人を見捨てるのは俺には出来ないんだ！ 大丈夫、工藤達の話の証拠さえ掴めば後は警察に任せるから。」

「里奈さん、ここは貴志くんを信じてあげてください、こんなお兄さんだからこそ里奈さんも好きになったのでしょうか。」

「そうよ里奈、私は別に前田とか綾子って人の事はどうでもいいの、貴志がやりたい事の役にたちただけなんだからさ。」

奈津美さんも彩花も俺に同意してくれてる、彩花は少しアレだけど・・

「お兄さん・・・前田先輩が居ません・・・。」

えっ！？ 夕奈ちゃんに言われて初めて気づいた、さっきまで居たはずの理子がいつの間にか居なくなってる、話に夢中で気づかなかったか、やばい！ 早く見つけなきゃ・・・。

第百六話（後書き）

少し里奈がイヤな女になってるかもしれませんね。

第百七話（前書き）

一学期二日目がなかなか終わりません。

第百七話

一緒に体育館の裏手まで来たのにいつの間にか理子が居なくなつてた、多分さっきの里奈の言葉にショックを受けたのだろう

「駄目だ！ 電話にも出ない！！ 何処に行つたんだよあいつは！！」

理子の携帯に電話しても呼び出し音だけで理子は電話に出なかった、その時に奈津美さんが何かを思い出したかの様に俺に話す

「もしかしたら前田さんは工藤くんの家に行つたのかもしれないわ、確か今ちようど真司くんが工藤くんの家に行つてるのですよね？ 真司くんに連絡してみたらいかがですか。」

さすが奈津美さん、さっそく友成に電話して理子が工藤の家に行つたかもしれない事を話すと

「そうなんか、それなら工藤んちの前で待つとしてみるよ、実はまだ工藤んちに着いてないんだ、とにかく前田を見つければいいんだろ？ 見つけたらお前に電話すつからさ。」

友成はそう言つて電話を切つた、俺達もとりあえず近くを探してみようとするはまだ半泣き状態の里奈が俺の腕を掴み小声で話す

「お兄ちゃん・・・、絶対危ない事はしちゃダメだからね・・・、お兄ちゃんに何かあつたら里奈・・・絶対あの女と工藤を許さないんだから・・・。」

俺達の説得が功を奏したのかどうやら俺が理子や綾子さんを工藤達から守ろうとするのを反対しなくなったみたいだ、そんな里奈の頭を優しく手を乗せ

『 ああ、約束するよ、なあ里奈、今度の休みにまたどっか遊びに行こうか？ お前が飽きるくらい一緒に遊んでやるからさ。』

そう言った俺は恐らく重度のシスコンだろう、でも恥ずかしくはない、妹に可愛い笑顔が戻ったのだから

『 うんっ、いーっぱい遊ぼうね、お兄ちゃん 』

うん、やはり里奈の笑顔は癒されるな、しかし他の3人も黙っていない

『 羨ましいな・・・私も里奈みたいに・・・お兄さんからいっぱい可愛がってもらいたいです・・・、お兄さんだったら私・・・何をされてもいいですから・・・。』

『 貴志のシスコンはもう不治の病ね、でもカッコいいお兄ちゃんじゃない、私も貴志みたいなお兄ちゃん欲しかったなあ・・・。』

『 やはり貴志くんは誰よりも里奈さんの事を大切に想ってるのですね・・・、でもそんな貴志くんだからこそ私も里奈さん達も好きになったんですね。』

・・・どうもこの4人は必要以上に俺を持ち上げる傾向にある、悪い気はしないが俺はそんな立派な人間じゃない、頭は金髪だし成績は下から数えた方が早いしルックスは並みだし最近の流行にはとんと疎いし恋人には裏切られるし優れてるのは運動神経だけの体育会

系だ、恥ずかしくなった俺は無理やりに

『それより早いトコ理子を見つけなきゃ！ さっきまで俺達と一緒にに居たんだからまだその辺に居るだろ！！ 早く行こう。』

話を替えて理子の搜索を始める、里奈と夕奈ちゃんは先に帰らせて俺と奈津美さんと彩花の3人で学校の周りを捜すが理子は見つからない、電話も無駄、もう一度友成に電話をしても

『こつちにはまだ来てないぞ、工藤も帰ってこないし後30分待つて誰も来なかったら俺は帰るからな。』

なんか少し苛ついてたみたいだ、無理ないけどな

『ひょつとして自分の家に帰っただけなんじゃないの？ 貴志や奈津美は前田の家を知ってるんでしょ、行ってみようよ。』

彩花がそう言い出すまでその可能性をすっかり忘れてた、半年ぶりに理子の家に行こうとすると彩花の携帯が鳴る、誰だろ

『紗恵からだわ、どしたんだろ？ 蒼太と何かあったのかしら。』

彩花が携帯を取って紗恵ちゃんと話す、したらいきなり彩花の態度が変わった

『蒼太が！！ そいつらはどこに行ったのよ！ ねえ紗恵ってば！！』

何だろ、蒼太に何があったんだ？ 話を終え携帯を閉じた彩花に聞いてみたら

『 蒼太がガラの悪い奴らと喧嘩してケガしたって・・・、なんか女の子を助けようとしたとか・・・。』

彩花は激しく動揺してる、蒼太が助けようとした女の子ってまさか・
・・。

第百七話（後書き）

今日は更新出来ましたが明日は難しいかもしれません。

第百八話（前書き）

更新を4日も休んで申し訳ありません、仕事がハードで家に帰ると寝るだけでしたので・・・、また今日から頑張ります。

第百八話

『 そんな大ケガって訳じゃないですから、心配させてすみませんでした。』

蒼太がケガしたと聞いた俺と彩花と奈津美さんは理子の搜索は友成に任せて近くの病院に来ていた、紗恵ちゃんも居て蒼太にピッタリ寄り添ってる、そして

『 あなたには一度ならず二度も助けてもらって・・・私なんかの為に、本当にごめんなさいっ！』

綾子さんがいた、蒼太が助けようとしたのは彼女だったのだ、話を聞いたら以前にも蒼太は友成と一緒に彼女を助けた事があるらしい、そんな偶然もあるんだな

『 それよりたいした事なくて本当に良かったわ、あんまり紗恵を心配させるんじゃないわよ！』

『 蒼太くん、紗恵さんだけじゃなく貴志くんや彩花さん、それに私も心配してたのです、人助けも大切ですけどご自身の体も大事になさってくださいな。』

彩花と奈津美さんは思ったよりも元気そうな蒼太に胸をなで下ろしていた、その蒼太は背中を鉄パイプかなんかで殴られて背中には痛々しい傷跡が残ってる

『 蒼太、お前を殴った奴らは綾子さんを連れて行こうとしてたのか？』

『はい、なんか派手な2人組で工藤先輩に頼まれて綾子さんを迎えに来たそうです……。』

蒼太の話によると道端でバツタリ出会った綾子さんと話してたら工藤に頼まれたという派手な2人組が来て綾子さんを連れて行こうとした、その様子が悪い予感を感じた蒼太は2人組に工藤とどんな関係で何の用事かと聞いたら話がどんどんおかしい方向にねじれ2人組が蒼太に殴りかかってきたという、鉄パイプで背中を殴られたりしたが蒼太は決して手を出さなかった、しかし紗恵ちゃんが騒いだお陰で人が大勢集まり2人組は綾子さんを連れ出せずに逃げ出したとの事

『そうだったのか……。相変わらずおせっかいが好きだな蒼太は、でもそのお陰で綾子さんは助かったんだ、ありがとな。』

『あの……。ところであなた達は……。四森君のお知り合いなんですか？』

綾子さんに俺達と蒼太の関係を説明する、さてどうしよう？　ちょうど綾子さんに出会えたから工藤達の事を教えてやろうか、蒼太と紗恵ちゃんには知られたくないけどもう十二分に巻き込んでしまったしな、病院を出た後、俺は全てを話すつもりで皆で近くの公園に向かった。

公園に着いた俺達は綾子さんに工藤達がしようとしてる事を話した、話を聞いた蒼太は無表情で黙ってる、紗恵ちゃんはというと

『そんなのって……。人間のする事じゃないですっ！　あの男……。やっぱり許せませんよ！！』

大いに憤慨している、そして綾子さんは信じられないといった感じで呆然としてた、そりゃ簡単に信じられる話じゃないけどな

『 どうして・・・恭介先輩がそんな事する訳ありません！ デタラメ言わないで下さい！！ 』

大人しそうな綾子さんは大声を出し俺を非難する、何故か工藤を庇うけどこの綾子さんは工藤とどんな関係だろうか？ 以前に工藤が理子でも綾子さんでもない女とウィンドウショッピングをしたのを見た事はあるけどこの子も工藤に騙されてるだけなのかな

『 綾子さん、よかったらあなたと工藤先輩がどんな関係なのか教えてくれませんか？ ちょっと気になって・・・。 』

ちょうど俺が感じた疑問を蒼太が聞いてくれた、考えてる事は同じだな

『 ……分かりました、四森君がそう言うなら。 』

二度も助けてくれた蒼太の言うことは素直に聞くようだ、綾子さんは落ち着いた口調で話し始めた。

綾子さんによると工藤とは小学生からの幼なじみだそうな、工藤の一つ年下である綾子さんは近所同士で面倒見が良かった工藤によく懐いたらしい、なんか意外だな、あの工藤にもそんな存在がいたとはね、でもそんな幼なじみをどうして不良達に売り飛ばそうとするんだ、ますます工藤って奴が分からなくなっただな。

第百八話（後書き）

次回は理子視点でいきます。

第百九話（前書き）

理子視点で進みます。

第百九話

『その女はお兄ちゃんの事を裏切ったんだよ！ お兄ちゃんの純粋な気持ちを土足で踏みにじったんだよ！！ 工藤や不良達に襲われたってそんなの自業自得じゃない、お兄ちゃんを傷つけた報いだよ！！』

里奈ちゃんがそう言った直後、私の足は勝手に動いてた、青ちゃんや奈津美達に気づかれない様に体育館の裏手から立ち去った、やっぱり里奈ちゃんにとって私はお兄ちゃんを裏切ったビッチ女なんだ、恭介と付き合いだした頃はそんなつもりはなかったけど里奈ちゃんに会う度にその事を嫌というほど思い知らされる

『アンタなんかがお兄ちゃんを友達だなんて言うなっ！！ お兄ちゃんも友さんも奈津美さんもアンタなんかを友達だなんて思ってるワケないんだから！』

『お前はもう俺達と関わらない方がいい、それがお前の為なんだよ、工藤と幸せになるんだな。』

忘れる事の出来ない里奈ちゃんと青ちゃんの言葉、友達にも元カレにも妹みたいに可愛がってた子にも見放された私、いつからこんなに淋しい人生になっちゃったんだろうか？ 私だって青ちゃんや里奈ちゃん達と仲良くしてた時があつたのに・・・、恭介が最近冷たかつたから？ 青ちゃんがあまりに里奈ちゃんや奈津美、四森さんやポニーテールの子と仲がいいから？ 今更青ちゃんにヤキモチとできないけど・・・自業自得か・・・、今の私にはピツタリな言葉だよ、青ちゃんを捨てて恭介に捨てられて、こんな私は不幸になるべき人間なんだ

『 おつ、やっと見つけたぞ、やっぱり家に帰ろうとしてたんだな、余計な心配かけさせやがって！ 』

自分の惨めさを噛み締め涙をグツと堪えながら歩いてると後ろから声をかけられた、誰かと思ったら友くんだった、まさか私を探してたのかな？

『 友くん・・・どうしてここに・・・。 』

『 アオから電話があつたんだよ、学校でお前が急に居なくなつたから捜してくれてな、俺もさっきまで工藤の家でアイツが帰ってくるのを待ってたんだけど誰も帰ってこなかったからな、お前も来なかったしとりあえずお前の家に行こうとしてたんだよ。 』

青ちゃんがそんな電話してくれてたんだ、でもどうして自分達で捜そうとしなかったのかな？ あっそうか、きつと里奈ちゃんに止められたんだね

『 とにかくお前が無事でよかったよ、さっき彩花からメールが来て蒼太も綾子さんを助けようとして工藤の仲間達からケガさせられたらしいからな、アオや彩花達も病院に行ってるしお前も早く家に帰れ、それと工藤から何処かに呼ばれても絶対に行くなよ！！ 明日の朝は俺といずみが迎えに来るからそれまで家で待ってろ、いいか、間違っても一人で勝手に行くなよ。 』

友くんはこんな私でも守ろうとしてくれてる、でも今はその優しさも重く感じてしまう・・・、蒼太くんって確か以前に何の落ち度もないのに恭介から暴行を受けて大怪我させられた四森さんの弟よね、また恭介がらみでケガさせられたんだ・・・、心の中で蒼太くんに

謝罪すると帰ろうとしてた友くんが話しかけてきた

『 さつきから気になってたけどお前、目が真っ赤だな、何かあったんか？ 』

『 何でもないから・・・もう私の事なんかほっといてよ、私は報いを受けなきゃいけないんだから。 』

私はもう自暴自棄になっていた、私が不良達に売られるのは青ちゃんを裏切った報いなんだから、悪い事をしたら悪い事が返ってくる、昔にお祖母ちゃんが言ってた通りだったね

『 報いってなんだよ、奈津美さんや彩花から何か言われたのか。 』

『 誰だっでもいいでしょ！ 友くんには関係ないじゃない、青ちゃんを惨めに捨てた私にはお似合いの末路なんだからっ！！ 』

何も悪くない友くんについ怒鳴ってしまっ、でも友くんは穏やかな顔で私に言う

『 そんなヤケになるなよ、確かにお前がアオにした事は褒められた事じゃないけどアオはそんなのもう全然気にしてないぞ、あの4人がアオの側に居るからな、だからお前が報いだか何だか知らないがそんなの受ける理屈はない、お前は俺やアオが必ず守ってやる！そして今度こそ新しい幸せを見つけてくれ、あの4人はどうか知らないけど少なくとも俺やアオはそう願ってるぞ。 』

・・・友くんの言葉を聞いてたらまた泣き出してしまった、今日二度目ね、私は後悔していた、一時の快楽に流され青ちゃんを裏切った事、そしてせつかくこんな優しい友達が居たのに気づかなかった

事を
・
・
・
。

第百九話（後書き）

貴志と真司の互いの呼称の表記を変えました、漢字だとなんかおかしくなるので。

第百十話（前書き）

貴志視点で進みます、閑話休題みたいな感じですよ。

第百十話

やっと家に帰れた、綾子さんはちゃんと家に送ったし理子は友成から電話があつて見つかったとの事、今は理子も自分の家にいるらしい、これでひとまず今日は安心なのだが明日はどうしようか？ だいたい工藤は何処に行ったんだ、友成によると工藤の家には誰も帰ってこなかったそうなので、どこかで明日の準備でもしてるのだろうか

『お兄ちゃん、さっきから何難しい顔してるの、一緒に遊ぼうよー。』

『お兄さん・・・工藤さん達の事・・・考えてるんですね・・・』

家に帰った俺を待ってたのはいつも通りに里奈と夕奈ちゃんだ、2人はソファに座ってる俺の両隣に座り腕にしがみついてくる、わざわざ胸を押し当てる様にして、しかもこのくらいじゃ俺も動じなくなってきた、気づかぬうちに耐性がついたみたいだ

『ん、まあ夕奈ちゃんが心配する事じゃないから、それより今日はウチで晩飯食ってくんだろ？』

『はい・・・里奈と一緒に・・・大好きなお兄さんの為に・・・一生懸命作りますから・・・』

そう言つて俺を見る夕奈ちゃんはちょっと我を失つてしまいそうに可愛かった、もしも里奈がここに居なかったら思わず手を出してしまったかもしれない

『今日はエビフライとクリームコロッケとポテトサラダだよ、今から作るからテレビでも見てて待っててねお兄ちゃん』

里奈も反則級に可愛らしい笑顔を俺に向ける、その後お気に入りのミニスカートにエプロンを着ける里奈とセーラー服の上に里奈から借りたエプロンを着ける夕奈ちゃん、美少女2人の萌えるエプロン姿とはなんという目の保養であろうか、お兄ちゃんに生まれて良かった、お兄ちゃん万歳！

2人は慣れた手付きで料理を作り上げていく、もうすぐ完成だろう、そんな折に里奈が俺の方を振り向き

『ねーねー、お兄ちゃんが見たいなら今度は裸エプロンしてあげよつか、男の人ってそういうの好きなんだよね、見たかったらいつでも言ってね、里奈はいつでもオーケーだよ』

・・・いきなり何を意味不明な事を言いやがる！ 誰が妹の裸エプロンなど好き好んで・・・見たい気がする俺は異常なのか？ 変態街道まっしぐらだな

『私だって・・・お兄さんが喜んでくれるなら・・・どんな格好でも・・・しますから・・・遠慮しないで・・・何でも言っ下さいね・・・。』

『ははは・・・、夕奈ちゃん、気持ち嬉しいけどもう少し自分を大事にしような、男においそれとそんな事言っちゃ駄目だよ。』

顔を赤くしてとんでもない事を言う夕奈ちゃんを穏便に諭す、日に日に夕奈ちゃんの言動は大胆になってるな、いや、夕奈ちゃんに限

らず奈津美さんや彩花もそうだけど・・・

『出来たよお兄ちゃん 今日はいつもとより気合い入れたんだからー。』

里奈と夕奈ちゃんが料理を運んできて三人で晩飯を頂く、料理はやはり旨かった、特にエビフライにかかっているソースが絶品だ、夕奈ちゃんが作ったらしい、もちろんクリームコロッケもポテトサラダもみそ汁も文句なしの出来映えだ

『おかわりっ！』

『ふふっ、お兄ちゃんったら、もう三杯目だねー、そんなに美味しいんだ、嬉しいな』

『私も嬉しい・・・お兄さんがこんなに食べてくれて・・・作って良かったです・・・。』

結局ご飯を四杯平らげ2人が作ったおかずは残さず食べ尽くした、片付けも済ませて夕奈ちゃんを送って帰る事にする

『大丈夫です・・・1人で帰れますから・・・。』

『いくら近くてももう真っ暗だからそんな訳にはいかないよ、万が一夕奈ちゃんに何かあったら俺は一生後悔しちまうよ。』

夕奈ちゃんの家はウチから五分だが工藤達の一件のせいか送って帰らないとどうにもスツキり出来なかった、夕奈ちゃんを家まで送ってさあ帰ろうとした時、夕奈ちゃんから

『お兄さん・・・今日は私の作った料理を・・・たくさん食べてくれて・・・嬉しかったです・・・何か・・・お礼がしたいんですけど・・・』

『お礼なんていいよ、本当に夕奈ちゃんや里奈の作った料理が美味しかったんだからさ。』

そう返すと夕奈ちゃんは俺に近づいてきた、そして

『お兄さん・・・大好きです・・・』

チュッ

なんとキスされてしまった！いきなりの不意打ちに俺はしばらく固まってしまった・・・。

第百十一話（前書き）

やっと二学期も3日目となりました。

第百十一話

チャララ、一日の始まりを告げる携帯のアラームが鳴り俺は目を覚ました、横には里奈が・・・いないな、だけでもう5時だから起きてるはずだ、あいつは俺の寝顔を見ないと1日が始まらないとか言ってたからな、15才の女の子の思考回路は分からんね、ひとまず起き上がりベッドから降りると部屋のドアが開いた

『あーっ！！ お兄ちゃんったら！ また里奈より早起してる、どうして里奈に寝顔を見せてくれないの！ お兄ちゃんの寝顔を見なきゃ里奈のテンション上がらないよー。』

『 どうして俺の寝顔見なきゃテンションが上がらないんだよ・・・、頼むからもう少しゆっくり寝かせてくれっての。』

朝の5時なんて早い時間から不毛な会話をする俺と里奈、元気がいいと言つか何と言つか・・・。

朝食も食べ終えて7時過ぎになるとパタパタと学校に行く準備をする、そんな時にウチに彩花と夕奈ちゃんが揃ってやって来た

『 おはよつ、貴志、里奈、ちょうどそこで夕奈に会ったのよ、ところでもう学校行く準備は出来てるの？ まだなら手伝おつか。』

『 おはようございます・・・お兄さん・・・里奈・・・昨日はどうもありがとございました・・・。』

夕奈ちゃんを見ると否応なしに昨日のキスを思い出してしまう、あのキスの後固まってる俺を置いて夕奈ちゃんは何も言わずに自分の

家に入ってしまった、俺も自分の家に帰った後しばらくして夕奈ちゃんからメールが来た、その内容は

（ お兄さんへ、私のファーストキスを愛しいお兄さんに捧げられて本当に嬉しかったです、今度はお兄さんからして欲しいな、一応里奈には内緒にしておきます、お兄さんも言わないでくださいね。）

言われるまでもない、この事を里奈が知った日には何を言われるか分かったもんじゃないからな、工藤達の件といいまた一つ悩み事が増えた様だ、工藤達の件といえば昨日病院から送った際に綾子さんには俺の携帯番号を教えて工藤から連絡がきても絶対に会ったら駄目だとは言っておいた、しかし幼なじみの工藤を慕ってるっぽい綾子さんが果たして俺の言う事を聞いてくれるかどうか・・・

『 お兄さん・・・まだ・・・工藤先輩や前田先輩達の事・・・気にしてるんですね・・・お兄さんを止めたりしませんけど・・・危ない事だけはしないでください・・・お兄さんにもしもの事があつたら・・・私・・・』

綾子さんの事を考えてた俺に夕奈ちゃんが不安そうに声をかける、心配してくれるのは有り難いがそんな言い方しないでくれ、昨日のキスも相まって相当に照れくさいじゃないか、しかし今日の夕奈ちゃんをよく喋るな、何やら自信に満ちてるといふか・・・

『 そうだよ、本当はお兄ちゃんに関わってほしくないんだけど人助けだから仕方ないもんね、ムチャしちゃダメだよ、っていうか夕奈ちゃん、今日はやけにお兄ちゃんにベツタリよねー、何かあったの？ 』

『 確かにいつもの夕奈じゃないよね、ねえ貴志、夕奈に何か言っ

たの？
』

『へっ！？ 何言っちゃってんだよ・・・、俺も夕奈ちゃんもいつも通りだよ、なあ夕奈ちゃん！
』

里奈も彩花も鋭いな、女の感は恐るべきだ、だが里奈の言う通り今日の夕奈ちゃんは俺にくつついて離れない、里奈には内緒だって言ったのにこれじゃああんまり意味がない様に思う

『私もいつもと何も違いません・・・早く学校に行きましょう・・・。
』

いい時間になってたのも手伝って俺達4人は家を出た、そしていつもの場所で奈津美さんと合流する

『貴志くん、皆さん、おはようございます、あら、夕奈さん、何かいい事でもあったのですか？
』

俺達に会うなり奈津美さんはそんな事を言い出す、どうしてそう思うんだろっ、そんなに夕奈ちゃんの雰囲気がいつもと違うのか

『奈津美先輩・・・おはようございます・・・そんなに私・・・嬉しそうに見えますか？・・・。
』

『ええ、何か好きな人としても幸せな気分になる様な事をしたふうに見えたから・・・。
』

この人は超能力者か！　そこまで具体的に分かるなんてほとんどエスパーだぞ

『 何なのー、夕奈ちゃん、お兄ちゃんと何かしちゃったの！ 里奈を差し置いてひどいよーっ！！ 』

『 夕奈も意外とやるわね・・・、少し甘く見てたわ！ でも私も引き下がらないんだからねっ！！ 』

・・・なんだかよからぬ空気が漂ってるな、正直今日はこんな事してる場合じゃない、早いところ工藤に会って馬鹿な事を辞めさせないといけないのに、そんな俺を置いて夕奈ちゃんが里奈に話しかける

『 里奈・・・お願い・・・明日のお兄さんのお弁当・・・私に作らせて・・・いつも里奈だけとかズルいよ・・・。 』

どうしたんだ夕奈ちゃん！ なんでそんな事を言い出すんだ、俺も里奈も奈津美さんも彩花も数秒間何も言えなかった・・・。

第百十一話（後書き）

明日から忙しいので更新は明後日以降になるかと、待ってる方がいたら申し訳ありません。

第百十二話（前書き）

一学期三日目の登校時のひとときです、別に大した話じゃありません。

第百十二話

夕奈ちゃんの大胆発言にしばらく何も言えずにいた俺達、そんな中、最初に喋り出したのは里奈だった

『いきなりどうしたの夕奈ちゃん！ そんなのダメに決まってるじゃない！ お兄ちゃんのお弁当を作ったげるのは里奈しかないんだからっ！！』

やっぱりな、俺の食事を作る事になると里奈は厳しい、独占欲が強いのかね？

『そんなの卑怯・・・私だってお兄さんに・・・作ってあげたい・・・女の子なら・・・好きな人に・・・自分の作った料理を・・・食べてもらいたいのは・・・当然でしょ・・・』

しかし今日の夕奈ちゃんは折れない、敢然と親友の里奈に立ち向かう、だけど俺としては俺の事で2人の友情を壊す様な事にはなってほしくない、どないしょ

『よく言ったわ夕奈！ 私だつて里奈みたいに貴志にお昼弁当を作ってあげたいんだから、ねえ、奈津美もそうなんですよ。』

『そうですね、いつも里奈さんを羨ましく思っていましたわ、毎日貴志さんに三食欠かさず食事を作るのですから、夕奈さんの言う通り女は好きな男の人に料理を作って美味しいと言われるのが何よりの喜びなんです、私もその喜びを味わいたい・・・』

夕奈ちゃんを追うかのごとく奈津美さんと彩花が話に乗ってきた、

そついや奈津美さんや彩花の料理は夏休みに行った友成の別荘以来食べてない、要するに里奈以外の3人は俺にお昼の弁当を作りたいんだな

『うーっ！ お兄ちゃんはどうなの！ 里奈じゃない女の人の作ったお弁当を食いたいって思ってるの、正直に答えて！！』

『そうだな・・・、夕奈ちゃんも奈津美さんも彩花も料理上手いからな、食べてみたいよ、でも俺の好みを一番把握してて付き合いの長い里奈の手料理も俺は好きなんだぞ、それは信じてくれよな。』

明らかに機嫌の悪い里奈をなだめどうにか穏便に事を収めようとする平和主義者の俺、けどこっからどうしよう？ 全く考えてないぞ

『それじゃあ・・・私達4人で・・・順番を決めて・・・お兄さんに・・・お昼の弁当を・・・作るというのは・・・どうでしょうか？・・・』

夕奈ちゃんの出した提案はかなり平和的だ、これなら俺も問題ない、後は皆が納得したらいいのだけど

『私はそれでいいですわ、ふふっ、これで私も貴志くんにお昼ご飯を作るんですね、楽しみになさっててくださいな』

『私もいいわよ、私の愛がタップリ詰まった弁当で貴志の胃袋もハートも虜にしてやるんだからねっ。』

『しょうがないなあ・・・、里奈もそれでいいです、でも朝ご飯と晩御飯は譲りませんから！』

里奈も奈津美さんも彩花も納得してくれたな、これでこの一件は力タがついた、これで学校に行ける・・・はずだったのだが

『 決まりましたね・・・それじゃあ・・・お兄さんが一番・・・美味しいと思つた・・・弁当を作つた人は・・・お兄さん・・・キスのプレゼントを・・・してもらえますか・・・。』

ナンデスカソレハ？ 何故にそんな話になるんだべさ、おらあわか
んねえだ

『 それは良いお考えですわ、俄然気合いが入りますわね、当然キスは口にしてくれるのですよね？ 』

『 当たり前じゃない、口にしないキスなんて認められないわ！
ぜえーっ たい貴志のキスは私がもらうんだからっ！！ 』

『 そうはいきません、奈津美さんにも彩花さんにも夕奈ちゃんにも負けませんよ！ お兄ちゃんの唇は里奈のモノなんです！！ 』

絶対に里奈を選んだら駄目だな、兄妹でキスなんて神コ口様が許さないぞ、だいたい俺の唇がいつ里奈のモノになつたんだよ

『 モテるねアオ、いつそ4人とも選んで4人とキスしたらいいんでないかい、この慢性発情男！ 』

『 ちゃんと選んで下さいね青山さん、皆さん真剣なんですから真剣に応えてあげて下さい。 』

『 そうよ青ちゃん、4人の想いにキチンと応えてあげなきゃ。 』

いつの間にか友成といずみちゃん、それと理子が近くに居た、その中でなんだか理子が明るくなってるように見えるのだけど・・・。

第百十二話（後書き）

読んでくれてありがとうございます、もうすぐユニーク3000人突破です、皆様方のお陰です。

第一百十三話（前書き）

何とか連日更新です、疲れた・・・。

第百十三話

「理子っ！ 昨日は急にどこ行っただよ、みんな心配したんだぞ！！」

「ごめんね、昨日は急用を思い出したの、いきなり居なくなつて心配かけさせたね、何か言い出せなくて……」

理子はそう言つてるけど嘘だとすぐに分かる、明らかに里奈の言葉にシヨックを受けたからだろ、しかしその里奈も居るこの状況で下手な事は言えない、このまま騒がずにしとこうか

「お兄さん……それでいいですか……私達の中で一番……美味しい弁当を作った人に……キスのプレゼント……」

そつだった！ 俺の周りの女の子達が日替わりでお昼の弁当を作り一番美味しかった子には俺からキスをプレゼントするという普通の男子なら我が生涯に一片の悔いなしなイベントを訳のわからぬ内に決められたんだ、別に彼女達が弁当を作ってくれるのはありがたいのだがキスというのがどうにもな……

「朝から通学路でいつも通りだなアオ、お前が友達じゃなかったら市中引きずり回しの刑だぞ。」

「友達なら変わってくれよ！ お前が思つてるより大変なんだぞ……」

相変わらず茶化す友成とお喋りしながら学校に向かう、そんな俺と友成の周りには6人の女の子が居た、普段と違ふのは紗恵ちゃんじ

やなく理子になつてゐるのだが理子は昨日あんな事があつたとは思えないくらいに明るかつた、奈津美さんやいずみちゃんと楽しそうにお喋りしてるし、もっとも里奈や彩花、夕奈ちゃんは理子と話す事はなかつたが

「なあトモ、結局理子はどこに居たんだよ？　ていつかあいつ、妙に明るいけど何かあつたのか。」

「詳しい事は後で話すよ、俺もお前に少し聞きたい事があるしな。」

昨日いきなり居なくなつた理子を見つけた友成なら理子の変化を知つてゐるだろうと思ひ聞いてみるとそう言われたのでひとまずこの話は置いておく事にした。学校に着くと学年の違ふ里奈と夕奈ちゃん、いずみちゃんとは別れた、別れ際に里奈が俺の手を掴み保護欲を駆りたたせる甘つたるい口調で俺が忘れかけてた事を思いださせた

「明日はお休みだつたよね、約束覚えてる？　一緒に遊びに行こうね、里奈あ、いっぱいお兄ちゃんに甘えちゃうから。」

そついやそんな約束したな、しかし朝の登校時間の校舎の入り口という人の多い所でそんな事を言つと俺と里奈にあらぬウワサがたつてしまふ、とても兄妹で交わす会話じゃないからな。

教室に着くともうすぐHRの時間だ、友成と話するのは昼休みだな、ただど気になるのは工藤が今日も学校を休んでゐるの事、どうにも綾子さんが心配だ、もし工藤に呼ばれてその場所に行つたりしたら・・・、女子校に通つてゐる綾子さんは今日はお好み焼き屋のバイトは休みとか言つてた、彼女も学校に居る限りは大丈夫だろうが下校時間になると危ない、昼休みに一度電話してみるか。

昼休みになると俺と友成は奈津美さんと彩花に外で話してくると言い教室から出る、彼女達は私達もと言ったのだが何となく友成と2人だけで話したかった、ちなみに理子は別の女友達と弁当を食べている。

『そうか、理子、やっぱり気にしてたのか、里奈も言いすぎなんだよな。』

『ああ、かなり思い悩んでたぞ、しかし里奈ちゃんもお前を裏切った前田がどうしても許せなかったんだ、兄思いのいい妹じゃねーか、だからあんまり悪く言ってやるなよ。』

友成によると理子は自分は報いを受けるべきなんだと自暴自棄になつてたらしい、友成が理子にも言ったが俺がもう気にしてないのだから理子もそんなの氣にする必要はない、信じてた工藤から捨てられた理子には新たに幸せを見つけてほしいと友成同様俺も思ってる、俺はあの4人だけで手一杯なのだが

『まあ何にしても理子が元氣になって良かったよ、ありがとなトモ、お前には世話になりっぱなしだな、いつか礼はするよ。』

『ああ、期待してるぞ、それより許せないのは工藤だよ、あいつ昨日から家にも帰ってないんだ、今日も朝に家に言ったんだけど母親に友達の家に泊まるってメールだけきて帰って来てなかった、なあアオ、綾子さんの方はどうなんだよ、昨日会ったんだろ。』

『一応俺の携帯番号を教えて工藤から連絡がきても絶対に行くな

とは言っておいた、けどなあ・・・。」

どうにも不安だ、そしてこの不安は後で的中してしまうのだった・・・。

第百十三話（後書き）

この話が終わったら文化祭を書くか貴志と里奈の実母の話を書くか・・・迷ってます。

第百十四話（前書き）

これから徐々に工藤と綾子の話になってくる予定です。

第百十四話

『 けどなんだよ、なんか気になる事があんのか？ 綾子さんにはちゃんと話したんだろ。 』

コンビニで買った菓子パンを食べながら友成は聞いてくる、確かに綾子さんには工藤がしようとしてる事は話した、普通なら自分の事を多数の男達に売るような男なんて軽蔑するだろう、しかし綾子さんにとって工藤は優しい幼なじみの兄ちゃんなのだ、昨日今日出会ったばかりの俺がいきなりそんな話をしてにもわかには信じられないのも分かる、だいたい証拠がないし

『 確かに話したよ、でも彼女は信じられないって言ってたんだ、工藤がそんな事する訳ないってな。 』

『 そうか・・・、まあ仕方ないよな、工藤の尻拭いの為に働くよな子だからな、でも彼女と工藤ってどんな関係なんだよ、アオは知ってるんか？ 』

友成は彼女と工藤の関係を知らないのか？ ただの知り合いとでも思ってたのだろう、俺は友成に2人の関係を教えてやった

『 へえー、あの2人って幼なじみだったのか、だから綾子さんはあんな奴の為に働いてたのか・・・。 』

綾子さんがお好み焼き屋で働いてるのは工藤が知り合いのバイクを壊したのでその弁償費用を用立てる為と綾子さん本人は思ってるが実は全て嘘でただ自分の小遣い稼ぎの為に彼女を働かせてるらしい、でも待てよ

「なあトモ、それって何かおかしくないか？」

「何がだよ。」

「彼女と工藤は小さい時から幼なじみだ、当然工藤の家の事は彼女も知ってるはずだろ、工藤の家はかなりの金持ちだ、それを知ってるはずの綾子さんが工藤の親がバイクの弁償金を用意しないのは変だなって思わなかったのかな。」

「親には言えない事情があるとしても言ったんじゃないのか、でも確かに金持ちボンボンの工藤が何故綾子さんを働かせてるんだろうな、小遣い稼ぎとか言ってたがあんな立派な家に住んでるなら金には不自由なさそうなのに。」

とにかく何としても綾子さんを守らなきゃ、というか一回電話して無事かどうか確認してみるか、携帯を取り出し彼女に電話をかけるが呼び出し音が鳴るだけで彼女は出ない

「おかしいな、なんで出ないんだ、携帯持ってないのか、それとも……。」

「どうしたアオ、綾子さん電話に出ないのか。」

一分以上呼び出しをしてみたが彼女が電話に出る事はなかった、この時間なら彼女も昼休みだと思うがもしかしたら授業中かもしれない、綾子さんについては電話番号しか知らないで電話に出ないともう連絡の取りようがないのだ

「なあアオ、綾子さんの働いてるお好み焼き屋って確か奈津美さ

んの姉さんの友達が経営してるんだよな！？ 奈津美さんの姉さんからその友達に頼んでもらえば綾子さんの家とか教えてくれるかも知れないぞ。」

「・・・今から行くか、急いだ方がいい気がするんだ、手遅れになる前に。」

友成の提案を聞き急いで教室に戻り奈津美さんにその事を話す、奈津美さんは不安な表情になるも

「分かりました、姉さんには私からお話します、くれぐれも無理はなさらないくださいね、貴志くんにも真司くんにももしもの事があつたら悲しむ人がたくさんいます、それを忘れないでください。」

申し出を受けた奈津美さんはすぐに姉の香澄さんに電話して詳細を話した、香澄さんもすぐにお好み焼き屋の店長さんに連絡をするとの事、数分後に奈津美さんの携帯にメールが入りそのメールには綾子さんの住所が載つてあつた

「奈津美さん、香澄さんやお好み焼き屋の店長さんにありがとうって言つてよ、行こうぜトモ！」

「ああ、絶対工藤の思い通りにはさせない！ 思い上がったボンボンに何でも自分の思い通りにはならないって事を教えてやる。」

「先生には私がうまく言つとくからね、頑張つてよ、貴志、真司。」

彩花と奈津美さんに見送られ俺と友成は教室を出た、目指すは綾子

さんの家だ、取り返しのつかない事になる前に綾子さんに会わなきゃ・・・。

第百十四話（後書き）

。次回は明後日更新の予定です、3日後になるかもしれませんが・・

第百十五話（前書き）

遅くなつてすみません、何とか更新出来ました。

第百十五話

綾子さんの家に行き綾子さんの母親から彼女の通ってる女子校の場所を適当な理由をつけてなんとか聞き出した俺と友成はその女子校に向かっていた

『それで学校に着いたらどうすんだアオ、いきなり教室とか行けないだろう、校門で待ってるのか？』

『要は綾子さんが学校に居るのが分かればいいからな、っていうかなんで電話に出ないんだよ！絶対におかしいだろこれ！！』

あれから何度か綾子さんに電話をするが一向に彼女は出ない、いくら何でも昼休みくらいあるだろうに、彼女から電話がくる事もない、どうなってんだよ。

昼の1時前に綾子さんの通う女子校に着いた俺達は取りあえず校門の近くから学校の様子をうかがう、ちょうど昼休みの様でグラウンドにも十数人の女生徒が居る、俺達は一番校門に近い所に居た2人連れの女生徒に声をかけた

『あゝ、君たち、ちょっといいかな、聞きたい事があるんだけど。』

2人の女生徒は明らかに俺達を不審に思ってるな、そりゃ突然知らない男2人が学校に来て聞きたい事があるとか怪しさ全開だよな

『心配しなくていいからさ、こいつこんな頭してっけど本当はケン力なんかした事もない見かけだけのなんちゃって不良だから、し

かもかなりのブラコン男、成績は常に学年ワースト3に入る学力、更には小学生以下の壊滅的な運動神経、引いちゃうだろ。』

『おいトモ・・・随分言いたい放題だなお前、後でタツプリお仕置きだからな、覚悟しとけよ。』

少しムツときたが友成の狙いもだいたい分かる、こうして俺達を不審に思ってる彼女達を和ませようとしてるんだろっ、ここはじっと我慢だ、後で北？壊骨拳でも喰らわせてやろう

『うわあゝ、それってホント？ もう少し頑張りなよー、せっかく中の上くらいにカッコいいのに。』

『結構その金髪も似合ってるしね、身長もまあまあ高いし見た目は悪くないから改善の余地はあるよ。』

2人の女生徒はそれぞれ好き放題に言ってくれる、そりやどうも、中の上っていうのは喜んでいい事なのか、いや、今はそんなのどうでもいい、本題に入らなきゃ、綾子さんの事を知ってたらいいけど

『ところで二年の二ノ宮綾子さんって知ってるかな？ 実は俺達彼女の友達んだけどよかったら彼女を呼んできてほしいんだ、電話をしても出なかったし心配になつてさ。』

かなり強引だが本当の事なんて言えないし仕方ない、2人の女生徒は互いに目を見合わせヒソヒソ話をするも俺達の願いを聞き入れてくれた、運のいい事に綾子さんを知ってたのだ

『今はクラスが違うけど一年の時は同じクラスだったの、綾子ちゃんもいろんな友達がいるのねー。』

そう言つて2人は校舎に向かつていく、これで綾子さんがいたら安心なんだけど・・・、数分後に俺達の待つ校門に戻ってきたのはあの2人だけだった、綾子さんはどうしたんだろつか？

「綾子ちゃん、今日休んでるって、でもなんか変だったのよね。」

なんてこつた！！ さっき綾子さんの家で母親は朝はいつも通りに家を出たつて言つてた、という事は登校の途中で工藤か不良達に捕まったのか！？ 友成も2人の女生徒と話を続けてる

「変つて何が。」

「綾子ちゃんのクラスの子が学校に来る途中で綾子ちゃん見たつて、でも学校に来てないからどうしたんだろつて電話しても電話に出ないつて言つてたの。」

それだけ聞くと俺と友成は駆け出した、目指すは工藤の家だ、奴らが居るかどうかわからないがじつとしてられない、今はとにかく急ぐしかないんだ・・・。

第百十五話（後書き）

次回は奈津美視点です、更新はやはり明後日になると思います。

第一百十六話（前書き）

奈津美視点で進むノロケ話です。

第百十六話

香澄姉さんの中学時代からの友人、福永有紗（ふくながありさ）さんが経営してるお好み焼き屋でバイトをしていて現在には工藤くんとタチの悪い不良達から狙われている二ノ宮綾子さん、彼女と連絡が取れないから安否を確かめたいという貴志くんが私から姉さんに頼んで有紗さんから綾子さんの住所を聞きだしてもらえないかなとお願いをしました、私にとって貴志くんからのお願いに拒否などという愚かな選択はありません、愛する人からのお願いを受けた私はすぐに姉さんに頼みました、間をおかず届いた姉さんからのメールには綾子さんの住所が書かれておりメールを確かめた2人はすぐに教室から出て行きました

『あの綾子って人と連絡が取れないみたいね、工藤に捕まったのかしら？』

『そうかもしれません・・・、貴志くんも真司くんもあんなに一生懸命なのにこんなやつてあんまりですわ、他人の為に必死に努力をなさってるあの2人の苦勞が報われないなんて私は納得できません！』

『良くも悪くもお人好しなトコがあるのよね、貴志も真司も、まつ、仕方ないんだけどさ、それでこそあの2人なんだもんね』

さすが彩花さんですわね、よくあの2人の事を分かっています、貴志くんと真司くんは似たもの同士というか思考回路が同じなのです、他人の為に無償の努力をする、正義感が人一倍強い、困ってる人を黙って見過ごせない、後は・・・綺麗な女性には分かりやすく優しいトコもよく似てます、それでも貴志くんが一番の親友が真司くん

で良かったと私は思います

『真兄……って、あつ、奈津美さん、彩花さん、真兄はどこに行っただんですか？ 青山さんと一緒なんですか。』

私達がガールズトークを楽しんでる頃、教室に来たのは矢島いずみさん、真司くんの幼なじみにして恋人の活発な性格の美少女です

『真司なら貴志と綾子って人の家に言っただよ、いずみも知ってるんでしょ？ 彼女が工藤達に狙われてるから貴志と真司が守つてやろうとしてるのは。』

彩花さんから言われいずみさんはいと領きました、工藤くんがしよつとしてる悪事はもう私達全員が知ってるのですね、私は今までの経過をいずみさんに教えてあげました

『それってヤバいじゃないですか！ 早く警察に連絡した方がいいと思いますよ！ 手遅れになる前に連絡しなきゃ綾子さん、何をされるか……。』

確かにいずみさんの言うとおりですが工藤くん達が何処に居るのかも分からないのに警察は少し早いと思います、まだ工藤くん達に捕まったと決まって訳でもありませんし焦りは禁物です

『いずみさん、ここは貴志さんと真司くんを信じましょう、彼らがきつと何とかしますわ、私達に出来るのはそれを信じて待つだけです、大丈夫、あの2人は最高のコンビですから。』

『そういずみ、真司と貴志なら工藤達を見つけだしてボコボコにして綾子さんを助け出すわよ、だから心配しない！ ねっ』

「そう・・・ですよ、真兄だけじゃなく青山さんもいますもんね、私も2人を信じます、でもこんな事は・・・もうこれつきりにしてほしいです、真兄にも青山さんにも大切な人が居るのに危ない事をしてほしくありません、人助けも大事だけど少しは自分達を大事にしてほしいです、真兄も青山さんも・・・。」

いずみさんも里奈さんや夕奈さんと同じように考えてたのですね、私や彩花さんも同じです、愛する男性が危険な事に巻き込まれて喜ぶ女性はいません、でも貴志くんも真司くんも他人以上に私達を大事に想ってるはずです、私はそれでも嬉しいです、そしてもう昼休みも終わろうとする頃、もう1人狙われてる人が居る事を忘れてました、私がそれに気づいた時、前田さんの姿はどこにもありませんでした・・・。

第百十六話（後書き）

今更ですがこの作品はフィクションです、この作中の登場人物と
実在の人物の名前がかぶったりした時は何卒ご容赦ください。

第百十七話（前書き）

やっと更新できました、地震関係で仕事が忙しかったです、被災地の1日も早い復興を祈ってます。

第百十七話

俺は今日学校を休んでいた、昨日綾子さんを何処かに連れ去ろうとした工藤先輩の知り合いらしきガラの悪い奴らとケンカして背中を怪我したのだ、実際は大した事なかったが母親に今日は無理しないで1日ゆっくりしなさいと言われ学校を休む事になった、学校が昼休みの時間になると紗恵から電話がかかってきた

『 蒼太、ホントに大丈夫なの？ 背中 of 怪我。 』

『 大丈夫だって、だいたい母さんも大げさなんだよ、確かに背中痛いけど学校休むほどでもないのに。 』

『 お母さんは蒼太を心配してるんだよ、アタシも彩花先輩もみんな心配してるんだからっ！ 学校終わったら蒼太んちに行くからね、1人なんですよ。 』

ウチに来るのか？ だったら来る前に連絡してくれと紗恵に言って電話を切った、そういやもう昼なのか、ちょうど腹も減った、何かないかと冷蔵庫を開けるとそうめんがあった、昼飯にはちょうどいいな、しかしキッチンを見てみると

『 なんだよ、ネギがないじゃないか……。 』

仕方なしに俺は近所のスーパーにネギとチューブのわさびを買いに行く事にした、ネギの無いそうめんなどかつお節の無い冷ややっこのようなモノだからな。

スーパーに向けて歩いてると途中の河川敷によく見知った女性が1

人で座り込んでた、綾子さんだ、それにしても彼女にはよく会うな、無視するのも何なので俺は彼女に声をかけてみた

『 ども、学校休んでこんな所で何してるんです？ ズル休みっすか。 』

俺に声をかけられた綾子さんは一瞬驚いたもののすぐに平静を取り戻した

『 四森くん・・・あなたこそどうしてこんな所に居るの、学校は？ 』

『 昨日の怪我で母親から1日ゆっくり休みなさいって言われまして、大した事ないのにウチの母親は心配性なんですよ。 』

俺がそう言うのと綾子さんは申し訳なさそうに目を伏せ

『 私のせいなのよね・・・本当にごめんなさい、四森くんにまで迷惑かけてしまって・・・。 』

しまった、綾子さんの性格なら自分のせいだと思っよな、俺の言い方が悪かった

『 綾子さんのせいじゃないですよ、俺が自分の意志でやった事ですから気にしないで下さい、それはそうとどうしてここに？ 』

確か綾子さんと前田先輩は工藤先輩達に狙われてる、昨日俺が行った病院で青山先輩が言ってた、青山先輩と友成先輩はそれを阻止すべく奔走してるらしいが俺も手伝いたいな、だいたい幼なじみの綾子さんを不良に売る工藤先輩ってどんな神経してるんだ？

「・・・なんか家にも学校にも居たくないの、昨日の話がまだ信じられなくて、恭介先輩が私を売るなんて・・・、昔は優しいお兄さんだったのに・・・。」

綾子さんはかなり悲しそうだ、優しかった幼なじみのお兄さんの豹変を受け入れられないのだろうか？　しかし今の工藤先輩は犯罪者になろうとしている、何とか思いとどませたいのだが肝心の工藤先輩があのような人間性だから極めて難しいのだが

「綾子さん、元気だしてくださいよ、工藤先輩のしようとしてる事は許せない行為ですけどもしかしたらまだ間に合うかもしれないじゃないですか、俺も付き合いますから工藤先輩に会ってみませんか？」

もし工藤先輩が綾子さんの言う通りに昔は優しい人だったのならなんとかなるかもしれない、根っからの極悪人なんてそうそういないはずだ、話し合えばきっと工藤先輩だって・・・

「・・・でもまた四森くんに迷惑かけちゃうかもしれませんし、これ以上私なんかの事で四森くんを傷つけたくないです。」

「俺がやりたくてやる事なんですから気にしないで下さいよ、困ってる人を見過ごせないのはある2人の先輩の影響ですけどね。」

そして綾子さんは少しためらったが工藤先輩に電話をした、俺と一緒に居る事は隠してもらって話を進めると近くのファミレスで話をしようという事になった、知り合いの不良達は来ないのか？　その方がありがたいけど、一応青山先輩に話をしとこうかな・・・。

第百十七話（後書き）

次回の更新はできたら明後日がいいな・・・。

第百十八話（前書き）

風邪ひいちゃいました、三連休どうなる事やら、今回は貴志視点です。

第百十八話

綾子さんが家を出た後に行方不明になってしまった、恐らく工藤達に捕まったのだろう、やはり朝から一緒に居ればよかったな

『まったく・・・どうして分かんないかな、まだ工藤なんかを信じてるのかよあの子は！！ 幼なじみかなんか知らんが自分の事を売ろうとしてる男に簡単について行くなよな！』

走りながら友成は憤慨してる、自分からついていったのが無理やり連れ去られたのか知らないが綾子さんは工藤を慕ってる、幼なじみだしなんとか思いとどまらせようとしたのだろうか

『もし綾子さんに何かしやがったら工藤の奴・・・警察に突き出す前に半殺しにしてやる！！』

『警察官になろうって奴がそんな物騒な事言っなよ、とにかく急ごう！』

綾子さんの通う女子校を出た俺と友成は本気で走った、10分くらい走ると工藤の家に着いた、インターホンを鳴らすと工藤の母親とおぼしき女の人が出てくる、初めて会うけど派手な感じの女性だ、理子の話では有名なデザイナーらしいが俺はそーゆーのに疎いから知らないのだ

『あら、あなた・・・朝も来たわよね、恭介ならまだ帰ってないわよ、近頃よく恭介に会いにくるけど恭介に何の用かしら？』

工藤の母親は友成に訝しげに聞いてくる、何の用と言われても本当

の事を母親に言えるわけがない

『 工藤ちゃんと連絡が取れないんですよ、昨日から学校にも来てないし携帯に電話しても出ないし綾子さんも心配してました、お母さんから工藤さんに電話してみてもうえませんか？ 』

友成はとっさに理由を作って母親から工藤に連絡をさせようとした、なるほど、母親からの電話ならさすがに工藤も出るだろうしな

『 朝にメールが来たんだし問題ないわよ、そのうち帰ってくるでしょ。 』

『 自分の息子が2日も家に帰ってこないんですよ、あなた母親でしょう、心配にならないんですか！！ 』

あまりな母親の無関心さについ声を荒げてしまった、工藤も親に恵まれてないみたいだな、だからって別に同情とかしないけど

『 なんなのあなたは・・・、だいたいあなた高校生でしょ！ そんな頭してる様な子から偉そうに言われる筋合いはないわっ！！ 』

まあ一理あるよな、金髪の俺がこんな事を言っても説得力はない、大人しく引き下がった俺に変わり友成が母親に食い下がる

『 とにかく工藤さんに電話してみてください！ もしかしたら工藤くん、おかしい事に巻き込まれちゃうかもしれないんです。 』

友成も懸命だ、こんなデタラメまで言って母親に電話させようとしてる、しかし普通の母親なら俺達に言われるまでもなく2日も家に帰ってこない息子を心配して電話するのは当たり前だと思うけどな

『 あの子も小さい子供じゃないんだから自分の事は自分でなんとかするでしょ、私は息子のプライベートに口を出さない主義なの、悪いけど帰ってもらえないかしら、急ぎの仕事が立て込んでるのよ、早く終わらせなきゃ発注が間に合わないの。』

息子より仕事が大事ってか、工藤が工藤なら母親も母親だな、父親もこんな感じの人なのか、お金は持っても心は貧しい家庭だよ

『 わかりました・・・もう二度と来ません、それじゃあ失礼します!! 』

友成は吐き捨てる様に言う工藤の家から出た、俺もそれについて行く、工藤の家を出て行き場を無くした俺達は綾子さんがどうなってるか気が気でなかった。

チャラララ、俺の携帯が鳴った、蒼太からだ、どうしたのかな

『 もしもし、どうした蒼太、なんかあったか? 』

『 青山先輩ですか、今から綾子さんと一緒に工藤先輩と会うんです、なんとか説得してみようかと思って、今学校の近くのファミレスに居るんですよ。』

『 マジか!! お前今綾子さんと一緒なのか!? どうしてお前・・・いやっ!! 俺達も今からソツチに行くから待ってる!! 』

蒼太が綾子さんと一緒に居る、しかも工藤と会うとか、友成に今の電話の内容を教えた俺達はまた全速力で駆け出した・・・。

第百十九話（前書き）

蒼太視点で話が進みます、風邪はだいぶ良くなりました。

第百十九話

綾子さんを守る、ひいては工藤先輩を悪の道から救うべく俺は2人を会わせ話をさせる事を提案した、工藤先輩相手に話し合いなど無駄かもしれないがこの世に根っからの悪人なんていないと俺は思ってる、人間誰しも生まれた時は純粹無垢な赤ん坊だったのだから

『恭介先輩本当に来るかな？ もし来ても四森くんが居るのを知ったらまた不愉快にさせる様な事を言っちゃうかもしれないわ、本当にいいの？』

学校近くのファミレスに俺と綾子さんは来ていて工藤先輩を待つていた、以前に友成先輩と一緒に綾子さんを助けた時に工藤先輩から腹立たしい嫌みを言われたのを気にしてか綾子さんは心配そうに聞いている

『俺なら何言われても平気ですから、話するのは綾子さんと工藤先輩なんですよ、もし工藤先輩が綾子さんを想う気持ちが少しでもあればあんな事思いとどまってくれますよ、俺も出来るだけの手伝いをしますから頑張ってください。』

何を手伝うのか言った自分でもよく分からないが綾子さんは工藤先輩を慕ってる、家が近所同士で小学生時代からの幼なじみで一年下の綾子さんに優しくかったという工藤先輩を俺も信じてみたくなっただ。

一応この事を青山先輩に話したら友成先輩と共にここに向かっているとの事、心強いのだがあまり事を大きくしたくなかった、警察沙汰

にならずに話がうまくいけばそれに越した事はない、しかしいきなり青山先輩達が来ても工藤先輩を怒らせるだけだろう、だから工藤先輩が来る前に

（すぐに工藤先輩や綾子さんの前に現れずにしばらく店の外で様子を見てくれませんか？ 2人だけで話をさせた方がうまくいくかもしれません、何か危なくなったらすぐに来てください、頼りにします。）

とまあこんな内容のメールを青山先輩に送った、返事はすぐに返ってきた

（分かった、確かに俺達が出しゃばるよりも2人だけで話させた方がいいかもな、なるべく俺達の出番が無い事を願うよ。）

青山先輩ならこう言ってくれると思ってた、青山先輩といい友成先輩といい高野先輩といい俺は優しくて頼れて尊敬できる先輩達に恵まれた、俺も将来後輩が出来たら頼りにされる様な先輩になりたいな

『誰にメールしてたの、昨日一緒だった彼女？』

携帯をしまった俺に綾子さんが微妙にニヤニヤしながら聞いてくる、紗恵の事を言ってるのかな、青山先輩だと言おうとしたがなんか余計な心配をかけてしまいそうだったのでここは紗恵という事にしようか、嘘も方便という奴だ

『そうですよ、今日学校を休んでるから心配なのかメールしてきました。』

『そうなんだ、四森くんはいい仲間達に囲まれてるもんね、昨日

の可愛らしい彼女に優しそうなお姉さんに美人な先輩、あと友成さんやあの金髪の人とか・・・、なんか羨ましいな。」

そう言つて寂しそうな表情をした綾子さんを見た俺は思わず言つた

「綾子さんにだつてこれから出来ますよ、まだ若いんですから、一緒に笑つて泣いて喜ぶ様なすべてを分かち合える仲間が！」

「・・・ありがと四森くん、ちよつと元気でした。」

まだ少し寂しそうな彼女を見てるとそうは思えないが突っ込むのはやめとこう、今から彼女は慕つてた幼なじみと辛い話をするのだから、それから程なく店に誰か来た、その人は間違いなく工藤先輩だった

「恭介先輩・・・。」

「綾子、なんでそいつと一緒に居るんだ？　なあ君、邪魔だからさっさと帰ってくれないか、またフルボッコにされたいのかい。」

かなり不安な出だしだよ、ちゃんとした話し合いになるのかな、いや、今俺に出来る事をしないと折角ここに居る意味がない、この2人には元の幼なじみに戻つてほしいのだ・・・。

第百十九話（後書き）

月曜は休日出勤になりました、更新は水曜午前零時にはするつもりです。

第二百二十話（前書き）

PVが500000を超えました、ありがとうございます、こんな素人丸出しな小説ですがこれからもよろしく願います。

第二百十話

久しぶりに見た工藤先輩は不良達とつるんでるせいかやけに人相が悪くなつてた、前はなかなかの美男子だったけどな

「綾子、2人で話したいんじゃないのか？　なんで四森さんの弟とお前と一緒に居るんだ、ひょっとしてお前ら付き合ってるのか、まあ別にどうでもいいんだけどな。」

「ちつ、違います！　四森くんにはいろいろ助けられたんです、昨日だって・・・お願いだから彼を悪く言わないで下さい。」

これじゃ話にならないな、俺から切り出すのもなんだがこの状況じゃ仕方ないか

「俺が言い出したんです、綾子さんと工藤先輩にどうしても話をさせたかったんですよ、昨日工藤先輩の知り合いって人達が綾子さんを無理やり連れ去ろうとしたのは知ってますよね？　ちようど居合わせた俺と俺の彼女が何とか阻止したんですけどかなり乱暴な人達でしたよ、あんな連中と工藤先輩って一体どんな関係なんですか。」

「そんな事を君に話す義理はない、それより早く帰れって言ったのが聞こえなかったのか？　もう君の出る幕はないんだから。」

「そんな訳にもいかないですよ、あなたが綾子さんと前田先輩にしようとしてる事はとても許せる事じゃないですから、絶対に帰りませんよ。」

俺が言っていると工藤先輩はますます顔を険しくした

「・・・フン、またうざったらしい正義感か、相変わらず人をイライラさせるのが上手いな、僕が2人に何をしようと君には一切関係ないだろう！ あんまりしつこいと君の大切な彼女や姉がどうなっても知らないぞ、ククク・・・。」

脅しのつもりだろうか、もしこの人が紗恵や姉さんに何かしようものなら生きてる事が苦痛になるくらい目の目に合わせてやるのだが

「もうやめてください恭介先輩！！ どうしてこんな事言ったりするんですか！ 前はもつと明るくて優しくかったじゃないですか、どうして・・・。」

綾子さんは声こそ小さいが目には涙をためていた、予想はしてたが工藤先輩との話し合いはかなり難儀しそうだ、だけど以前は優しくったのならなんでこんな人間になったんだ？ 過去に何かあったのはなんとなく予測出来るけどそれにしても少し異常だぞ

「綾子、知ってるかい、人間には2つの種類があるのさ、利用する側と利用される側が、僕は利用する側の人間だから他人に何をしてもいいんだ、他人が僕に何かをするのは許さないがね、分かったらさっさと僕についてくるんだ。」

何という分かりやすい悪人像だこの人は！ 今時マンガでもこんなのないぞ、どんな人生送ったらこんな思考になるのだろうか

「不良達の居る所に連れて行くんですか、絶対に行きませんから！ お願いだからこれ以上バカな事はやめてください、昔の恭介先輩に戻ってください！！」

綾子さんは必死に工藤先輩に懇願する、幸い周りには他の客が居ないから変な注目を浴びる事もないが工藤先輩は綾子さんの説得に全く聞く耳を持たない

『馬鹿な事とはなんだ！ お前は黙って僕の言う通りにしてればいいんだ、他の事なんて一切考えなくていい、分かったか。』

『ちょっといいですか工藤先輩、その考え方は改めた方がいいですよ、いざつて時に孤立しますから。』

俺が言ってもこの人には逆効果だろうが言わずにはいられなかった、このままでは綾子さんがあまりにも不憫過ぎる、彼女の真摯な想いをこの人は何だと思ってるのか、こうなったら工藤先輩の説得は無理でも綾子さんを連れて行くのだけは阻止しなければ

『言わなかったかな、僕は人を利用する側の人間なんだ、いざという時は存分に他人を使えばいいだけだよ、もつとも役に立たない女もいるけどね。』

綾子さんの表情に深い悲しみの色がただよってる、どうやらよかれと思った俺の提案は彼女を無駄に傷つけただけだったみたいだ

『帰りましょうか綾子さん、これ以上話す事はありませんよ、俺が余計な事を言い出したせいで・・・本当にすみません！』

俺がそう言い終えたら店のドアが開き血相を変えた青山先輩と友成先輩が入ってきた、いったい何事だ

『工藤っ！ お前、理子をどうしたんだ！？』

どうして前田先輩が？
でも学校に居たはずだろ、どういふ事だよ・
・・。

第二百一十話（後書き）

次回も金曜日の午前零時更新にしたいと思います。

第二百一十一話（前書き）

貴志視点に戻ります。

第二百一十一話

蒼太からの電話を受けた俺と友成は学校に近い所にあるファミレスに向かった、店に着くとその店の中では蒼太と綾子さん、それとなんだか人相が悪くなった工藤が何やら話をしている、蒼太が言うには工藤と綾子さんだけで話をさせた方が上手くいくかもしれないとの事なので俺と友成は店の外から工藤達にバレない様に様子をうかがってる、蒼太にはメールで肯定的な事を言ったが正直な所、俺は厳しいと思う、工藤のあの性格じゃあそう簡単に改心なんてしないだろう

『なあアオ、工藤と綾子さんの話し合い、上手くいくと思うか？俺は無理だと思うぞ、早めに取り込んで工藤をシメた方が手取り早いと思うがな。』

友成は早々に説得とか無理だと思ってたみたいだ、しかしいきなり俺達が乗り込んでも余計に工藤の機嫌を悪くするだけだ、説得が無理ならせめて綾子さんの安全だけは確保しなきゃな

『まあ待てよトモ、蒼太が居るんだし綾子さんは大丈夫だろ、俺達の出番は工藤が何か行動を起こしてからの方がいいぞ。』

友成を抑えてより注意深く綾子さん達の様子を見てると俺のケータイに電話がかかってきた、奈津美さんからだ、電話に出ると彼女は涙ぐんだ声で話す

『貴志くん、すみません！ 私達が目を離してたら前田さんがいつの間にか居なくなってしまったんです！ クラスの人に聞いてみたら前田さん、昼休みに誰かと電話をした後に慌てて教室から出て

行ったそうです、私の不注意でこんな事に・・・本当にすみませんでしたっ！」

なんてこった！ 理子の奴、こんな時に一体どこに行ったんだ！？
しかし理子も奈津美さん達に黙って行くなよ、まあ大方工藤が何か適当な嘘でもついて理子を誘い出したのだろうけど、でも理子がここに居ないって事はどこか別の場所に呼び出したのか？

「奈津美さんのせいじゃない、彩花だってそうさ、2人が気にする事は何もないんだから、今更だけどこんな事に巻き込んでしまつて本当に悪かったよ。」

「貴志くん・・・。」

「ゴメンね貴志、私、少しでも貴志の役に立ちたかったのに・・・」

ケータイから彩花の声も聞こえる、彩花とは思えない元氣のない声が

「何言ってるんだ彩花！ 元々は無関係な彩花達まで巻き込んだ俺が悪いんだから気にすんな、俺の役に立ちたかったって言ってるけどお前が俺の側に居るだけで俺は毎日が楽しいぞ、俺はお前から笑顔とか楽しい時間とかをもらってるんだ、ありがとな、彩花。」

少し過剰な言い方だけどこれ以上彩花のあんな元氣のない声を俺は聞きたくない

「・・・ありがと貴志、真司と一緒に前田を助けてあげてね、私も奈津美も2人を信じてるから。」

少しは元気になったかな？　やっぱり彩花は元気な笑顔が一番だからな、電話を切った俺は友成に理子が学校から居なくなった話を話した、話を聞いた友成は怒りを表すかと思ったが意外と落ち着いてた

『　そうか、前田がな・・・でも工藤がここに居るって事は前田は多分違う場所にも呼ばれたんだろうな、綾子さんもここに居るんだし工藤が連れてくつもりなんだろ、とにかく工藤と話をしなきゃ何も分からないからな、警察に言うのはその後だ！』

『　トモって結構冷静なんだな、さすが刑事を目指してるだけあるよ。』

素直に感心した、案外友成は刑事に向いてるのかな？

『　桜田刑事じゃないんだから、香取刑事ならこんなの当然だっつの、それより行こうぜ、早くしなきゃ前田が危ないからな。』

そんな友成のたわ言を聞き流し俺と友成は綾子さん達の居る店の中に入るやわき目もふらず綾子さん達の席に直行する、そして工藤に直球な一言を言った

『　工藤っ！！　お前、理子をどうしたんだ！？』

俺を見た工藤は邪悪な笑みを浮かべた、蒼太も綾子さんも何事だといった感じた

『　やっぱり来たね青山君、君達には関係ないよ、これから始まる楽しいショーの邪魔をしないでくれるかな、さあて、じゃあ綾子、そろそろ行くぞ。』

『 行かせるわけないだろうがバカタレ！ お前が今から行くのは警察だ、それと前田がどこに居るのか話せ、今更隠しても無駄なのは分かってるだろ。』

友成は綾子さんを庇う様に工藤に宣告する、だが工藤は全く動じない、何を考えてるんだかさっぱり分からないコイツは

『 君達自分の立場が分かってるのか、僕が仲間に電話を一本するだけで理子は十数人の男達からいろんなコトをされるんだぞ、だいたい理子がどこに居るか知らないんだろ、こつちが主導権を握ってるだからな、ククク・・・。』

『 工藤先輩っ！！ まだそんな事言ってるんですか！ 綾子さんの為にもこんな事止めてください！！』

蒼太も工藤に詰め寄り綾子さんの為にと強調する、綾子さんは悲嘆に満ちた表情で工藤を見ていた

『 だったら今から皆で理子の居る所に行くかい？ 君達3人に綺麗事だけではどうにもならない現実を教えてあげるよ。』

きつと俺も友成も蒼太も凄い顔してたんだろうな、綾子さんも俺達の変化に戸惑ってる、上等じゃねーか！ 人の気持ちも考えない外道野郎に現実を教えてやるのは俺達だ・・・。

第二百二十二話（前書き）

そろそろ工藤&綾子編も終わらせたいな・・・早く里奈や夕奈を登場させたいです。

第二百二十二話

ファミレスを出た俺達は理子が居るところという場所に向けて歩いてた、不良共が何人居るか知らないが俺達3人が揃ってるなら何ら問題はない、ただ理子が人質になってるのが少し不安だ

『もし今警察とかに電話したらすぐに奴らに理子を襲わせるからな、俺はそれでも構わないけどね。』

工藤は店を出た直後にそう俺達に釘を差した、相変わらず悪魔みたいな奴だな、彼女のはずの理子に対して罪悪感のカケラもない、こんなゲスと付き合ってた理子が可哀相に思えてくる

『大丈夫です綾子さん、貴女は俺達が必ず守ります、あんな人達に指一本触れさせたりしませんよ。』

蒼太は綾子さんを安心させる様に話してる、その後に俺と友成に謝罪してきた

『すいませんでした、青山先輩、友成先輩、俺が勝手に突っ走って余計な事をしたせいでこんな事になってしまいました、綾子さんまで無駄に傷つけてしまって・・・ホント駄目な奴ですよ、俺つて。』

別に蒼太のせいじゃないと思うが蒼太本人はそう思い込んでしまってる、不良達の話では元々9月3日の今日に予定していた計画なんだろうから蒼太云々とか最初から関係ないはずだ

『そんな事ないですよ四森くん、あなたが恭介先輩に言ってくれ

た事、私嬉しかったです、私だけでなく恭介先輩の事まで氣遣ってくれて・・・本当にありがとうございます。』

『 そうだぞ蒼太、綾子さんだけじゃなく工藤みたいな奴も救おうとしたお前のやろうとした事は絶対に間違ってたんだ、もっと胸を張れって。』

『 友成先輩、綾子さん・・・。』

友成と綾子さんに慰められた蒼太は小さな笑みを浮かべた、微笑む美男子か、俺や友成よりもイケメンの蒼太だとやはり絵になるな

『 ここだ、ククっ、さあ、スリリングなショーを始めようか・・・。』

工藤が止まった場所は古いビルの前だった、こんなトコで理子や綾子さんを襲う気だったのか、よく見れば近くに不良達の物らしきバイクや車がある

『 綾子さんはここで待っていてくれますか？　すぐに前田先輩を連れて戻ってきますから。』

蒼太が綾子さんにそう言うと言いつと工藤はすぐに言い返す

『 何を四森君が勝手に決めてるんだ、勘違いしないでもらおうか、主導権は僕にあるんだぞ、綾子も当然一緒に来てもらう、そうじゃないとショーにならないからな、拒否すると・・・分かってるだろう。』

それだけ言つと工藤はビルの中に入っていった、そんな工藤をじっ

と見ていた綾子さんは強い意志を宿した目で俺達に言った

『 私は行きます、青山さんや友成さん、それに四森くんもいるんです、何も怖い事はありません！ 前田さんを助けましょう。』

女の子にここまで言われて奮い立たないのは男じゃない！！ 俺も気合いのこもった声を出して自分や友成と蒼太に活を入れる

『 よっしゃ行くぞお！！ トモ！ 蒼太！ 悪者退治だ、根性見せろよ！！』

『 オウっ！ 足引っ張らない様にしろよ！！ アオ！ 蒼太！』

『 はいっ！！ 青山先輩！ 友成先輩！ 俺達3人の本気を工藤先輩や不良達に見せてやりましょう！！』

俺達は互いに激励を交わし工藤を追ってビルへと入った、四階まで上がるとドアの開いた大きな部屋がある、工藤はそこに居た、理子も居る、しかしその体は椅子に座らされロープでくくりつけられてた

『 青ちゃん！ 友くん！ 蒼太くんも……。』

理子は俺達を見るやいきなり叫んだ、まだ襲われた様子はない、しかし理子の周りには10人以上の不良がズラリといる、これじゃ下手に手がだせない

『 これでメイニングアラリーが揃ったな、どうだい、青山君、友成君、四森君、今からめったに見られないリアルなショーが始まるんだ、よく目に焼き付けとくんだな、理子や綾子のリアルに泣き叫ぶ姿を、クッククック……。』

この男・・・本当にもう救いようがないのか？　こんな状況を心底
楽しそうにしてる工藤の姿に俺達3人は数秒の間、何も喋る事が出
来なかった・・・。

第二百二十二話（後書き）

出来たら明日もいつもの時間に更新するつもりです。

第二百二十三話（前書き）

ほとんど話が進んでません、展開遅くでスミマセン。

第二百二十三話

コイツはもうどうしようもないな・・・工藤は今から行おうとしてる犯罪行為を嬉々と語る、そんな工藤に綾子さんや理子も怯えてる、彼女達をこんな奴らの好きにされてたまるか！

『お前いい加減にしとけよ・・・今ならまだ犯罪者にはならないんだ！ そんなに少年院に行きたいのか！？ どこまで堕ちれば気が済むんだよ！！』

友成が工藤に大声で言う、確かにそうだ、好き好んで犯罪者になりたい人間などいるわけがない

『誰が犯罪者だつて？ 分かってないな、綾子と理子が合意なら犯罪じゃないだろう、これはショーなんだから、何なら君達も参加するかい？ どうせ童貞だろ、いい機会だぞ。』

『あなた達みたいな人間と一緒にしてもらいたくないですね！！ そんな事言つて綾子さんや前田先輩に対して恥ずかしくないんですか？ 今の自分がどれだけカッコ悪いか自分で分らないんですか？ 可哀相な人ですね。』

蒼太が相変わらず綾子さんの前に彼女を守るように立って工藤に辛辣な言葉を浴びせる、そんな蒼太を見た不良連中の内の2人が

『なんだよ、誰かと思つたら昨日俺達の邪魔した色男じゃねーか、鉄パイプで思いつきし殴つてやったのにタフだな、それで懲りずに今日も邪魔しにきたつて訳かよ、いーのか、わざわざ強そうな後輩まで連れてきちまつて、今度はあのくらいじゃ済まないぜ。』

からかう様な口調で蒼太や俺達を脅しをかける、というかこいつら、俺と友成を蒼太の後輩と勘違いしてるのか？ 確かに蒼太は高校一年生にしては落ち着いてて大人びてる（老けてるとも言う）けどな

『フツ、昨日は紗恵がいたから下手に手を出さなかったただけだ、今日は手加減なしのフルパワーでいかせてもらう、それにこの2人は後輩じゃない、尊敬に値する自慢の先輩だ！』

そうか、こいつらが昨日綾子さんを連れ去ろうとして蒼太に怪我を負わせた奴らだな、なら容赦しない、俺達の弟分に手を出した事を後悔させてやる！！

『自慢の先輩ねえ・・・、麗しい友情ごっこはヨソでやってくれ、虫酸が走るから、さあ理子、準備はいいか、なあに、いつも俺とやってる事を今日はこいつらとやってくれればいいんだ、こいつら今日を楽しみにしてたんだからな、フッフ、派手に頼むよ。』

『恭介・・・、何言ってるのよ・・・、嫌だよ、こんなの嫌あつ！！ 助けて！ 助けてよ青ちゃん！！』

理子は泣いてた、好きだった彼氏からのあんまりな仕打ちに耐えられず泣きながら助けを求めている、そして不良連中が理子に近づく

『おいっ！ 待てよお前ら！！ 自分達のしようとしてる事が分かってんのか！！ 女性を集団で襲うとか一番最低な犯罪だぞ、もし工藤にそそのかされてるだけなら目を覚ませ！ お前らにも心配してくれる人や大切に想う人がいるならその人達を悲しませるような事をするなっ！！』

俺が不良連中をなんとか思いとどまらせようとすると友成も後押ししてくれた

『それに集団強姦罪がどれだけ重たい罪か分かってるのか？ お前らが未成年だろうが4年以上20年以下の懲役だぞ、いいのか？

こんな事で青春と人生を棒に振るなよ！！』

不良連中は何人が迷いだした、なかなかの効果だ、それにしても友成がこんな事を知ってるとは、さすが刑事を目指すだけあるな

『全く・・・何回同じ事をしてるんだ、今までも警察にバレた事はないだろう、理子や綾子が同意なら問題ないんだ、いいから早く始めろよ！』

そう言つて工藤は近くのロッカーから何か小さなビデオカメラみたいな物を持ち出した、何回同じ事って何だよ、まさかコイツ・・・

『恭介先輩、まさか今までもこんな事を・・・。』

綾子さんは体を震るわせてた、幼馴染みの優しかったお兄さんが極悪な犯罪者になってしまいどんなにショックを受けたか俺達には想像出来なかった

『なかなかいい商売なんだよ、女の子のリアルに泣き叫ぶ姿はその手のマニアには好評だね、DVDにダビングして売れば一本二万くらいになるかな・・・。』

『ふ・・・ふざけんなよこの野郎っ！！』

友成が工藤に飛びかかると工藤は不良連中に目配せする、すると理子の近くにいた不良が理子の首筋にカッターナイフを突きつけた

「理子っ！！」

「何回同じ事を言わせるんだい、主導権は僕にあるんだ、下手な事はしない方がいいぞ、そういえば青山君に一つ聞きたい事があったんだけど何で理子を助けようとするんだい？ 理子は君を裏切つて僕の女になるような人間だ、見捨てこそすれ助ける義理なんて無いはずだろ。」

工藤の言葉に理子は悔しそうにうつむいてる、俺を裏切った事を後悔してるのだろうか？ もういいのに

「助けたいから助けようとしてるんだ、過去とか関係なしにな、まあお前みたいな奴には一生分からないだろうけどな！！ 待つてろよ理子！ 絶対に助けてやるからな！！」

威勢良く言ったものの理子は相変わらず数人の不良に囲まれてる、このままじゃ理子は奴らに・・・、そんな時、友成が目立たない様に一歩ずつ、不良連中や理子の下に近づいていた。

第二百二十三話（後書き）

明日の更新は厳しいです、出来れば火曜日の午前零時にはしたい
と想っています。

第二百二十四話（前書き）

風邪が治ったならその分溜まってた仕事のせいで忙しくなりました、まあ当然なんですけど。

第二百二十四話

友成はジリジリと一歩ずつ確実に理子の所に近づいていく、そして理子達との距離が5メートルを切った所で一気に駆け出した

「なっ！ てめえっ！！」

道中の不良2人の顎と腹に素早く重い一撃を入れ床に沈める、理子にナイフを突きつけてた不良はいきなりの展開に動揺していた、友成は更に走る速度を速めその不良にも渾身の右ストレートを繰り出す

「くらええっ！ これがドラゴン最大の奥義、廬山昇？破だあっ！！」

友成の廬山昇？破（？）を喰らった不良は5メートルほど吹っ飛んだ、こんな時でもパロディを忘れない友成もどうかと思うが不良を一撃で沈めるその威力は本物だ、駆け出してからわずか7・6秒で友成は理子の所に辿り着いた

「7・6秒か、こんなモンかな、さあ！ どうだよ工藤！ これでお前の言う主導権は無くなったぜ。」

「やるねえ、凄くないか友成君、その瞬発力はそこの高校生には真似出来ないな、そーいや学校でも評判の運動神経だったね、いや、感心したよ。」

理子の前に庇うように立ち勝ち誇る友成を前にしても工藤は相変わらず余裕の態度を崩さない、そりゃ仲間の不良連中がまだ10人近くはいるからな、しかし理子の安全が確保されたならもう遠慮はい

らない、俺も本気を出すとするか！！

『蒼太、綾子さんは任せたからな！！ 頼むぞ！』

『はいっ！！ 青山先輩！ 任せといて下さい！』

『前田は俺に任せとけ！ こいつらには指一本触れさせねえからな！！』

『おう、頼むぞトモ！』

綾子さんは蒼太が、理子は友成が必ず守ってくれる、なら俺が成すべき事は1つだ、理子を奪い返され怒りを露わにする不良連中に向かって俺は宣言した

『怪我したくない奴はこの部屋から出ていけ、そして警察に自首するんだ！ 自分達のやった罪の深さを思い知り真剣に償って一からやり直せ！！ お前らがその気になればまだやり直せるんだぞ！！』

『何言ってんだガキが！ テメエだってそんな頭してるじゃねえかよっ！！ 偉そうな能書き垂れるなよコラ！！ 生かして帰さねえから覚悟しとけや！！』

せつかく穏便に済ませようとしてるのに、人の好意は素直に受け取つとけよな

『仕方ないな、やっぱり痛い目をみないと分からないか？ だったら来いよ！ 本物の強さってのをお前らに教えてやる！！』

「るせえっ！！ もう本気で殺してやるからな！！」

俺の挑発を受け不良連中から2人が襲いかかってきた、そいつらの攻撃をかわし1人に足払いをかける

「うわっ！？」

バランスを崩したそいつの顔面に思いつきしヒザ蹴りを決める、少しやり過ぎたか、もう1人も俺の背後から来たがとっさに裏拳をそいつの顔面に打ち込む

「ぶっ！！」

綺麗に裏拳が顔面に入ったそいつは床に沈んだ、友成ほどじゃないが俺だってパンチ力にはそこその自信があるつもりだ、しかし思ったより弱っちい奴らだな、いや、俺達が強いのか、友成は3歳ぐらいの時からいろんなスポーツや運動をしてきたし蒼太も近頃ジム通いをしてると聞いた、そして俺は小さい時に受けていた父親の暴力に対抗する為、ひいては里奈を守る為に小学生の時から体を鍛えてきた、そんな俺達が集団で女性を襲うような奴らに負けてたまるか！

「アオ、気合い入ってるなあ、俺にも見せ場を残しといてくれよな。」

「あっ！ 友成先輩！ 危ないですよ！？」

蒼太が叫んだ、不良連中3人が友成に襲いかかったのだ、もう一度理子を入質に取るつもりか、しかし友成は余裕の笑みを浮かべる

「見せてやる・・・双子座の友成真司究極の技を・・・ギヤラクシアンエ？スプロージョンっ！！」

叫びたい年頃なのか？ 大層な名前を言ってるが何のこっちゃないパンチやキックを繰り出してるだけだ、しかしそこはやはり友成、瞬く間に3人を打ち倒した

「な・・・なんだコイツらは、なあ恭介、何者なんだよコイツらは、強すぎるじゃねーかよ！」

「何を今更・・・君達じゃあこの3人に勝てないなんて初めから分かってたよ、しよせん君達はカツコだけの偽物なんだから。」

残った4人の不良は工藤から残酷な宣告をされた、まあその通りなんだがそれにしても工藤のあの余裕はなんなんだろう？ まだ何か企んでるのか・・・。

第二百二十四話（後書き）

次回は木曜日の午前零時に更新します。

第二百二十五話（前書き）

後五話くらいで工藤と綾子の話を終わらせたいです。

第二百二十五話

俺と友成で8人もの不良を打ち倒した、不良達はかろうじて意識はあるがいまだに起き上がれずに床にうずくまってる、でも心配する事はない、後でちゃんと警察を呼んでやるから

『 恭介！ どうすんだよ？ このままじゃ俺達警察に捕まっちゃうぞ！！ 何とかしてくれよっ！！ 』

こいつら不良のクセにボンボンの工藤に頼るのか？ というか工藤ってこいつらよりも強いのか、とてもそうは見えないが

『 無理だと思うけどその3人を倒すしかないよ、このままじゃ俺も君達も確実に少年院送りだからね。 』

工藤に言われると残り4人の不良達は一斉に蒼太めがけて襲いかかっていった、そっぴや昨日蒼太に怪我をさせた奴らがまだ残ってる、蒼太が背中に怪我をしてるのを知ってるから蒼太をターゲットにしたのか、ホント情けない奴らだな

『 綾子さん、俺から離れないでください！ 』

蒼太は綾子さんの真ん前に敢然と立ってる、まるでお姫様を守るナイトみたいだ、しかもそれが正統派美男子の蒼太だから余計に絵になってる、俺や友成ではこうはいかないよな

『 へへっ、悪いな、お前なら勝てそうだからな、昨日の傷はまだ治ってないだろう、4人で一斉にかかればお前には負けないぜ。 』

情けない事を堂々と言う奴らだな、4人でいかないと怪我人1人に勝てないのか

『 蒼太、手伝ってやるよ、確かに今のお前じゃ4人相手はキツいだろ？ 』

蒼太を案じた俺は助太刀を申し出た、でも蒼太は小さく微笑み俺の申し出を断る

『 大丈夫ですよ青山先輩、気持ちだけありがたく受け取るときます、それとこの人達に聞いておきたい事があるんです。 』

こいつらに何を聞くんだ？ 俺の疑問をよそに不良連中の方を向き話しかける蒼太の声は聞いた事のないくらい低く恐怖感すら覚えた

『 あんた達・・・本当に何度も集団で女性に暴行をしたのか？
なあ、正直に答えろよ・・・。 』

声もそうだが表情も怖い、いつもの大人びて優しそうな蒼太はそこには居なかった、そんな蒼太に不良連中は悪びれずに答える

『 何言つてんだ？ そんなのやりたいからヤツたに決まってるじやねーか、恭介が街で軽そうな女をナンパしてここに連れてくるんだよ、それを俺達でいただいちやうのさ！ 何人か処女もいたっけなあ、その時は最高だったぜ！！ 』

『 酷すぎる・・・なんて事を・・・。 』

『 クソ野郎共が・・・絶対許さねえ！！ 』

理子と友成が話を聞いてそれぞれ悲しみと怒りの表情を浮かべてる、俺だって聞いてて胸くそ悪くなる話だ、蒼太も語気を荒げ不良連中に言い放つ

『そうか・・・なら容赦しない！！ あんた達の薄汚い欲望の犠牲になった女の子達の怒りと・・・そして無念さを、たっぷりと思いい知らせてやる！！』

『うるせえキザ野郎が！ 死にやがれえっ！！』

不良連中が本当に一斉に蒼太に襲いかかる、だが蒼太は不良Aの先制パンチを軽々とかわし不良Aの腹に渾身の蹴りを入れる

『うっっ！！』

不良Aは腹を押さえて苦しそうにうづくまる、そんな不良Aの顔面に蒼太は容赦なく蹴りを入れた、蹴りを喰らった不良Aは鼻血を出しながら倒れ起き上がる事はなかった

『このくらいで済むと思うなよ、あんた達が女の子達にした事はこんなじゃないんだからな・・・。』

・・・それからの蒼太は鬼のようだった、背中の怪我の影響をものともせず他の3人も叩き伏せていった、不良達がもう起き上がれなくなっても徹底的に攻撃を続ける蒼太はどこか正気を無くしてる様にも見える

『四森くん、もう・・・やめようよ・・・。』

『蒼太！ もうやめとけ！ そいつら死んじまうぞ！！ そんな

奴らでも命は命だからな……。」

綾子さんと俺に言われてようやく蒼太は攻撃を止めた、そこにはいつもの蒼太が居る……はずだったが

パアアン

『グッ!!?』

ドラマとかでよく聞く拳銃の発砲音が鳴り響き蒼太が肩を押さえひざを突く、蒼太の肩からは大量の血が流れてる、音のした方を見てみると工藤が拳銃を持って立っていた

『クツクツクツ……、凄いだろ青山君、本物の拳銃だよ、次に撃たれたいのは誰かな? 青山君か! それとも友成君か、好きな方をどうぞ……。』

工藤の余裕の正体は拳銃だったのか、というか何で高校生がそんなの持ってたんだよ! 俺も友成も拳銃を前に固まってしまい動く事が出来なかった……。

第二百二十六話（前書き）

もうすぐ工藤のお話は終わります、次は里奈中心の明るいお話です。

第二百二十六話

10人以上いた不良連中は全員叩きのめしたのだが・・・蒼太が工藤の持った拳銃で肩を撃たれてしまった、あまりに非日常的な光景に俺達は一瞬何が起こったのか分からなかった

『 蒼太あ！！ 』

『 蒼太くんっ！！ 』

俺達はすぐさま蒼太に駆け寄った（ちなみに縛られていた理子は蒼太が不良達をフルボッコにしている時に友成がロープを解いていた）
蒼太は肩を押さえ端正な顔を苦痛に歪め片膝をついてる、だが慌てる俺達を前にも蒼太は気丈に振る舞う

『 大丈夫・・・ですよ・・・ぐっ・・・肩をかすった・・・だけ・・・ですから・・・ 』

そう言っても肩から流れる血は止まらない、早く救急車を呼ぶべきだ、綾子さんがすぐに携帯を取り出し救急車を呼ぼうとするが

パアアン！！

拳銃の発砲音が部屋にこだまする、工藤が俺達から離れた所に発砲したのだ

『 何をするつもりだ綾子、救急車なんて呼ばれたも困るな、でも安心しなよ、僕はこの後警察に自首するつもりさ・・・どうせもう逃げられないからね。 』

もう工藤は正気じゃなかった、目が完全に狂人だ、綾子さんも理子も恐怖で体が動かなくなってる様だった

『工藤・・・なんでそんなモン持つてんだ、高校生が簡単に手に入れられるモンじゃないだろ・・・』

友成の問いに工藤はニヤリと笑い自慢気に話した

『僕達の制作したDVDを購入したどこぞのチンピラからくすねたのさ、まさか本物だったとはね。』

そう言った工藤は拳銃をクルクルと回してる、二発の発砲音で倒れていた不良連中も少しずつつ起き上がってきた、しかしすっかり怯えてしまっていて見るからに逃げ腰だった

『恭介・・・そりやマズイって・・・俺達まだ捕まりたかねえんだよ・・・こんな奴ら無視してとっととフケようぜ。』

不良達は工藤に逃走を進めてる、逃がしたくはないのだが今は蒼太の為に救急車を呼ぶのが優先だ、その後で警察に言っただ奴らを捕まえてもらえばいいのだから

『逃げたければ逃げていいよ、もう君達に用はないからね、僕が連れてきた女の子達を襲う役をしてもらう為に友達面してたけどその必要もなくなったし、早く行きなよ。』

工藤はあっさりと不良連中を見限った、不良連中もあっさり部屋から出て行く、蒼太に立てなくなるまでボコられた奴らも他の奴らに抱きかかえられ出て行った、そうやって不良連中は1人も居なくな

った

『 さあて・・・今から何をしようかな・・・後数時間後には僕は刑務所だからね・・・何か面白い事ないかな青山君？ 』

拳銃を持ちながらおどけた感じで俺にそんな事を聞いてくる工藤、その開き直った態度に俺はこう答えた

『 じゃあ話でもしようか、なんでこんな事をしようと思ったんだ？ どうして理子や綾子さんまで巻き込もうとした！ 』

『 お金が欲しかったんだよ、新型のクスリは中々な値段でね・・・売人もお金にはしっかりしてて固い奴なんだ、自分でバイトするのも面倒だし家の金を使えば親にバレるしそこで綾子に適当な理由を言って働かせたのさ、綾子は昔から僕の言う事は疑わなかったからうってつけだったよ、でも綾子もいっぱしの美少女だからね、その体で稼げると思ったのさ。 』

クスリって・・・こいつそんなのにまで手を出してたのか！？ 残念だがこいつはもう平穏な日常には戻れないな、何でこうなったのか

『 ハア・・・ハア・・・アンタ・・・綾子さんを・・・綾子さんの一途な心を・・・何だと思ってるんだ！！ 彼女は・・・アンタを・・・ハア・・・信じて・・・昔のアンタを・・・取り戻そうと・・・何で分からないんですか！！ 』

蒼太が苦痛をこらえ工藤に怒りをぶつける、綾子さんには可哀相だがもう昔の工藤に戻すのは無理だろう

『 じゃあ前田は何でだよ、付き合ってたんだろお前達、恋人にこ

んな事して恥ずかしくねーのか！！」

蒼太の次は友成だ、理子の事を工藤はどう思ってたのか？ 俺から寝取ったんだからそれなりの好意はあったんじゃないのか

「理子は最近青山君達を羨ましそうに見る事が多かったんだ、だから淫乱な理子に似合いの仕事をさせようと思ってね、それにしてもせっかく青山君に絶望を与えようとして理子を寝取ったのに青山君はほとんど傷つく事はなかった、高野さんや四森さん、一年のポニテールの子に実の妹までもがいつも青山君の近くにいたからね、あれなら理子を寝取られてもダメージなんてない訳だよ、理子はせっかく妊娠しても僕が望まないなら始末するしかなかったんだから。」

理子は妊娠もしてたのか・・・それにしても始末とかないだろう、命を何だと思ってるんだこいつは

「酷すぎます恭介先輩！ 前田さんに謝ってください！ 女の子にそんな事・・・許せないですよ！」

「綾子さんの言う通りだ！ 2人の女の子を弄びその想いを踏みにじった事を土下座で謝罪しろ！！」

「綾子さん、友くん・・・いいの、もういいの、私がバカだったのよ、性欲に溺れて青ちゃんを裏切った私に神様が罰を与えたのよ、でも恭介、これだけは覚えておいて、私は本当に恭介を好きだった時があつた事を・・・。」

理子も綾子さんも辛い記憶になったな、早くこんな男の事なんて忘れて幸せになつて欲しいと切に願う、さて・・・そろそろ工藤に自

分の行為の愚かさを思い知らせてやるとするかな。

第二百二十六話（後書き）

次回の更新は恐らく火曜日の午前零時になります、多分・・・。

第二百二十七話（前書き）

あと2話で工藤編も終わります。

第二百二十七話

工藤は拳銃を持ちながら偉そうな演説を続けてる、理子や綾子さんの想いを踏みにじりクスリを買う金の為に多数の女性をその醜い欲望の毒牙にかけた、こんな奴に同情の余地なしだ、俺が天誅を加えてやる！

「工藤、最後の忠告だ、今から警察に行って自首しろ、最後くらい男らしいトコを見せてみるよ！」

一応最後と銘打って工藤に自首を勧める、言うだけ無駄だろうけどなるだけ手荒な事をしたくなかった

「言われなくても自首はするよ・・・残った銃弾全てを君に撃ち込んでからね・・・クククッ。」

俺を殺したいのか？ でもこんな奴のエゴで殺されたくはないな、そんな工藤の物騒なセリフに理子は悲痛な叫び声をあげた

「もうやめて恭介！！ そんな事したら恭介はもう人間じゃ無くなっちゃうんだよ！ お願いだから青ちゃんの言う事聞いてよ！！」

「

理子は涙を浮かべていた、俺を裏切って工藤と付き合った理子、当初はこの2人に関わりたくもないくらいに傷ついたが幸い俺は周りの仲間に恵まれた、そして理子は悩み傷つき幸せな俺とは反対に不幸な道を辿ってしまった、理子の俺に対する想いは今となっては知るすべはないが工藤に対する想いは本物だったんだろうな、だからこそ工藤が理子にした仕打ちは余計に許せないのだ

「何言っただか・・・そんなに青山君がいいなら青山君とヨリを戻したらいいじゃないか、まあ無理だろうけど、僕のテクニクにあれだけ溺れたんだからもう普通のセックスじゃお前は満足出来ないはずさ、いつそ将来は風俗で働けばいいんじゃないか？」

「うるせえよゲス野郎！！ 前田も・・・綾子さんも・・・お前の事なんざすぐに忘れて幸せな未来を掴むんだ！ お前は鑑別所で反省しやがれ！！」

工藤の最低な言葉に友成は激怒する、その時俺は友成に目で合図を送った、友成の目は分かったと言ってる

「・・・どうやら友成君も銃弾を撃ち込んで欲しい様だね、2人仲良く天国に逝ってきなよ。」

工藤は拳銃を俺に向けた、そんな工藤に俺はおどけた感じで言い放つ

「まだ死にたくないんだなこれが・・・ウチで里奈が・・・美味しい晩ご飯作って待ってたんだよぉ！！」

俺はポケットから携帯電話を取り出し工藤の顔面目掛けて投げつけた、携帯電話が顔面に当たり一瞬とはいえ工藤が怯む、そのスキについて友成も自分の携帯を投げつけた

「なっ！？」

連続で飛んできた携帯で工藤に更にスキが出来る、その瞬間俺と友成は猛ダッシュで駆け出した、そして！！

『ラ？ダーダブルキックッ！！』

『ぐおっ！』

俺と友成の台詞が綺麗にハマった、勢いをつけた俺達の飛び蹴りに工藤は吹っ飛び後ろの壁に直撃した、しかもいい具合に拳銃を落としてくれて友成が間髪入れずにそれを拾った

『やったなアオ！　こんなに上手くいくとは正直思わなかったぜ。』

『そうか？　俺は上手くいくって確信してたぞ、俺の作戦をアイコンタクトで分かったお前とならな。』

俺と友成はハイタッチする、そしてすぐに携帯を拾い

『綾子さん、すぐに救急車を呼んで、後警察にも、工藤を突き出すからさ。』

少し綾子さんの表情が曇ったが仕方ない、幼馴染みを警察に突き出すのは気分のいいものじゃないからな

『青山先輩・・・友成先輩・・・さすがっすね・・・うつっ、やっぱり2人は最高のコンビですよ・・・姉さんの言ってた通りです・・・。』

撃たれた蒼太もどことなく嬉しそうだった、綾子さんが携帯で救急車と警察を呼んでくれてこれで一安心かと思いきや工藤が起き上がってきた、だが壁にぶつかったダメージが大きいらしくフラフラだった

『 ハア・・・ハア・・・あ、青山君・・・やってくれたね・・・拳銃も無いし僕にはもう・・・何もなくなった・・・でも・・・何が起ころうが・・・僕は絶対に・・・君に屈したりなんてしないんだ！！ 』

工藤はフラフラながらもまだ俺に挑戦的な事を言ってくる、まあちようどいい、まだこいつへの天誅は終わってないのだから

『 フン・・・つくづく哀れな奴だな、生き方を間違えなかったら・・・分かり合える仲間が居たら・・・男ってのはもつといーもんなのになあっ！！ 』

俺は工藤にそう言うとな奴の腹に渾身のパンチを入れる

『 おごっ！！ 』

今のは撃たれた蒼太の分だ、腹を殴られ前屈みになって苦しむ工藤に今度は両手を組み合わせ

『 これは理子と綾子さんの分だっ！！ 』

工藤の後頭部に振り下ろす、その勢いで倒れた工藤は完全にグロッキーだった、そして工藤を立ちあがらせ

『 最後は・・・お前達が暴行した女の子達に分だあつ！ 思い知れっ！！ 』

横っ面を思い切りぶん殴った、倒れた工藤はもう起き上がる事はなかった、数分後に救急車と警察が来て蒼太を運んでいってくれ俺と

友成が警察に工藤が拳銃を持ってた事、何度も女性を暴行していた事を話した、工藤は素直に全ての犯行を認めそのまま連行されていく、俺と友成、理子と綾子さんは警察で少し話を聞かれた後に蒼太が運ばれた病院に行く事にした・・・。

第二百二十七話（後書き）

次話は多分木曜日更新になります、工藤編完結です。

第二百二十八話（前書き）

やっと工藤編が終わります、やっと暗く重い話も終わりだ・・・。

第二百二十八話

『 蒼太あゝ、すつごく心配したんだからあゝ、あああゝん・
・。』

病院では紗恵ちゃんが蒼太に抱きつき泣きじゃくっていた、彩花も

『 本当に・・・心配ばかりかけて・・・でもよかった、もし蒼太や貴志や真司にもしもの事があつたら私、あいつを一生恨むトコだったんだから・・・。』

今にも泣きそうだが心底安心した表情をしてた、病院には他にも奈津美さんや里奈、夕奈ちゃん、いずみちゃんも来ていた、皆蒼太が撃たれたと聞いて心配で駆けつけてくれたのだ

『 紗恵も姉さんも大げさなんだってば、肩をかすただけなんだからさ、でも・・・心配してくれてありがとね、皆さんもわざわざ来てくれて本当にありがとございます。』

蒼太は来てくれた奈津美さん達に行儀よく頭を下げる、その姿に
いずみちゃんが

『 友達を心配するのは当たり前だよ、真兄の友達は私の友達でもあるんだから！ そんな他人行儀っぽく言ってほしくないよ。』

少し不服そうに言うがそれでも笑顔でたしなめる、それにしても蒼太のケガがたいした事がなく本当によかった、医者も入院の必要はないと言ってたのでまず大丈夫だろう、里奈も

『でも本当に大事にならなくてよかったよ、蒼太くんはお兄ちゃんや里奈達の大切な友達なんだからぜーったいにいなくなったりしたらダメなんだよ！！』

『・・・そうよ、蒼太くんには・・・私とお兄さんの結婚式に・・・ぜひ来てもらいたいから・・・』

夕奈ちゃんの発言はとりあえずスルーして皆それぞれ周りの人達と話し始める、その中で理子が浮いてるのは仕方ないか・・・

『青山さん・・・少し2人でお話したいんですけど・・・いいですか？』

皆が話に没頭してる最中、綾子さんがコソツと俺に言ってくる、その様子里奈に何か引つかかるモノを感じたので皆に黙って綾子さんと2人で待合室から出た。

建物の外に出て少し歩くと喫煙所らしきベンチがあった、幸い誰も居なかったので俺と綾子さんはここで話をする事にした

『ここでいいだろ？　それで話って何かな。』

『はい、今から話す事は青山さんの胸の内だけにしまっておいてほしい話なんですけど・・・あなたにはどうしても聞いてもらいたいのです・・・』

綾子さんはずいぶん思いつめてる様子だ、しかしあんまり人に広めたくない話を何故俺にするんだ？

『恭介先輩の事なんですけど・・・』

工藤の事？　それが俺と何の関係があるんだろうか、俺の疑問を無視して綾子さんは話し出した……。

・・・かなりヘビーな話だったな、工藤のあの金持ち両親は実の両親ではなく工藤の叔父夫婦で工藤の実の父親は妻（つまり工藤の実母）とその浮気相手に保険金目当てで殺されたとか、そんなワイドショーの中だけの話かと思ってたが・・・

『 どうして綾子さんがそんな事を知ってるんだい、あとその話を俺にする理由は？　その話が俺と何の関係があるんだよ。』

俺はずっとその疑問を抱いてた、正直聞きたくない内容だったのに・

『 私の父さんは警察署で働いててその事件を担当してたんです、事件の事は中学の時に父さんから聞かされました、父さんは恭介先輩とは縁を切れと言ったんですけどその事件と恭介先輩は関係ないと私は思っただんです、あの時の恭介先輩は誰にでも自然体で皆が嫌がる事を自ら率先してやる人でしたから・・・』

意外だな、工藤にそんな一面があったとは、じゃあなんであんな奴になっただんだ

『 綾子さんがその事情を知ってる訳はわかったよ、それでその事件が俺と何の関係があるの？ 』

『 凄く良く似てるんです・・・、青山さんと・・・その共犯の浮

気相手の人が・・・だから恭介先輩・・・青山さんに対してあんなに敵意をむき出しにしたんだと思います。」

そうだったのか、確かに工藤については去年の体育でのサッカーの試合でコテンパンにただけであんなに恨まれるのは変だと思ってたが・・・、自分の人生と母親を狂わせた男と俺が似てたから工藤は特に俺を目の敵にしてたんだな、正直逆恨みだと思うが工藤からしたら俺を苦しめる事で父親のかたきを取ろうとしたのだろうか・

「確かに恭介先輩のした事は許せる事じゃありません、でもあの時青山さんが言ってたように生き方を間違えなかったら・・・分かり合える友達が恭介先輩にいたら・・・きつとあんなにはならなかったと思うんです、小さい頃、内気で友達ができなかった私の最初の友達になってくれたのが恭介先輩だったんです。」

「ちょっと待ってよ、じゃあ工藤が狂ったのは何らかでその事件を知ったからって事なの!？」

まあ無理もないか、自分の父親を死に追いやったのが自分の母親とその浮気相手とか・・・高校生には受け入れがたい現実だよな

「はい・・・多分2、3カ月前だと思います、その頃に例のお好み焼き屋のバイトを頼まれたんです、なんだか雰囲気も変わってましたし・・・。」

それでクスリに手を出しその購入資金を得る為に綾子さんを利用して罪もない女性を集団で襲うとか・・・いくら過酷な現実を知ったとはいえやはり工藤のした行為は最低だと思う、世の中には工藤と同じ境遇の人は何人もいる、それでもその人達は一生懸命生きてる

んだ、工藤だけがそんな事をしている訳がない

「綾子さん、過去はどうあれやっぱり工藤は反省すべきなんだよ、だって許されない事をしたんだから、俺としてはもう綾子さんは工藤には関わってほしくないけどそれでも綾子さんが工藤を救いたいと思うなら・・・俺はもう何も言えないよ、どうするかは綾子さん自身が決めなきゃ。」

「私は・・・恭介先輩を救いたい！ 罪をちゃんと償って1からやり直す恭介先輩を・・・私が支えてあげたいです。」

これだけ堂々と言われてはもう俺の出る幕はない、俺は最後に綾子さんに

「そつか・・・綾子さんがそう決めたのなら俺はもう何も言わない、工藤を救えるのは多分、綾子さんだけだろうからさ、困難な道かもしれないけど頑張ってね、また何かあったらいつでも言いなよ。」

「はい、ありがとうございます、やっぱり青山さんに話してよかったです、それじゃ私はこれで失礼します、いつかまたお好み焼き屋にも来てくださいね。」

「ああ、また皆で行くよ、綾子さんも元気だな。」

そして綾子さんは病院から去っていった、こうなったら工藤が分かってくれる事を願うしかない、綾子さんの一途な想いを・・・。

ちなみに後日談だが工藤は学校を自主退学したという扱いになり仲間だったあの不良連中は全員、工藤の自供で捕まったらしい、綾子

さんも鑑別所にいる工藤に何度か手紙を書いてるそうだが、まれに工藤から返事の手紙もくるとの事、いつかくるだろう、綾子さんの努力が実を結ぶ時が・・・。

第二百二十八話（後書き）

次話は理子との結末でも書こうかな・・・。

第二百二十九話（前書き）

少し遅れました、遅くまで仕事してましたので・・・。

第二百二十九話

綾子さんを見送り待合室に戻る、戻るなり里奈から

『 あっ、お兄ちゃん！ どこ行ってたの？ いきなりいなくなつたから里奈、心配しちゃったよ。』

『 綾子さんが帰るつて言うから見送りに行つてたんだよ、それよりも外も暗くなりだしたしそろそろ帰るか、何か異様に長い1日だったから腹減ったぞ。』

『 うん、帰ったらすぐ晩ご飯食べれる様にしてるから早く帰ろつ、今日は野菜炒めと焼き魚と冷ややっこだよ 』

時間はもう午後7時をまわってた、皆も賛同し病院を出る、ほとんどはそのまま帰っていき俺も里奈と夕奈ちゃんと一緒に帰ろうとするが唯一まだ残ってた奈津美さんから声をかけられた

『 貴志くん、待つてください、少しだけお話をしてもいいでしょうか？ 』

『 えっ？ いいけど。』

何だろ？ しかしよく話をされるよな・・・

『 前田さんから目を離してしまった私の言う事じゃありませんけど・・・彩花さんから蒼太くんが撃たれたと聞いて私は凄く心配しました、もしかして貴志くんや真司くんもって・・・、心が張り裂けそうな苦しい感じでした。』

奈津美さんは淡々とした口調ながらもしつかりと話す

『私はもう・・・いや、彩花さんや夕奈さん、そして里奈さんもし貴志くんの身に万が一の事があつたらもう生きていけないと思います、私達にとつて貴志くんはそんな存在なんです、だからこれから今回みたいな危ない事に関わるのは極力控えてほしいんです、確かに他人の為に頑張るのは素晴らしい事だと思います、でも他人だけでなく少しはご自分を大事になさってください、私達はそう願つてやみませんわ。』

『そうですよ・・・お兄さん・・・私も・・・凄く心配でした・・・もしお兄さんが撃たれたりなんてしたら・・・私・・・。』

『もちろん里奈もだよっ！ お兄ちゃんを心配し過ぎて気分が悪くなっちゃったくらいなんだから！ でももう大丈夫だよね、もうあんな事は二度とないよね、お兄ちゃん』

・・・俺は不甲斐ない男だな、こんなけなげな女の子達をこれほどに心配させるとか、まあ里奈の言う通りあんな事はもう二度とない、これからは平和主義で生きてくつもりだから

『3人とも心配させてゴメンな、約束するよ、もう二度と皆を心配させる様な事はしない、これから人助けとかは自分の出来る範囲内でするつもりだからさ、そろそろ卒業後の進路も考えなきゃいけないしね。』

俺がそう言つと3人の美少女は月も霞むかもしれない笑顔を見せてくれた

『はいっ、それを聞いて安心しましたわ、それと私・・・卒業後もずっと貴志くんのそばにいたいです・・・それじゃあ私も帰りますね、また学校で。』

そう言い残し奈津美さんは帰っていった、卒業後も俺のそばにいたってのはつまりそういう事なのか？

『私も・・・ずっとお兄さんの・・・そばにいますからね・・・絶対に離れません・・・。』

『お兄ちゃんは里奈とずっと一緒にいてくれるんだよね、だって2人だけの家族なんだもん！お兄ちゃんがいなくなったりしたら里奈、寂しくて死んじゃうよ・・・。』

2人はびつちり両隣にくつついて俺から離れない、この構図も久しぶりだな、しかし里奈、寂しくて死ぬってのは大げさだろう、ウサギじゃあるまいし・・・

『少なくとも2人が高校を卒業するまでは俺はあの家にいるから安心しなよ、その先の話なんてまだ分からないから何とも言えないけど出来たら俺も2人と一緒にいたいな。』

こう言つとけば問題なしか、いつかは2人の気持ちも変わり俺から離れるかもしれないし、というか里奈はぜひとそうなってくれる！里奈に寝込みを襲われない為に朝の5時に起きるのは少々辛いのだ

『お兄さん・・・やっぱり大好きです・・・。』

『おにーちゃん、大好きなんだからあつ！』

お願いだから道のド真ん中でそんな事を大声で言わないでね、お兄ちゃんがあらぬ誤解をされるから

『青ちゃん・・・ちよつといいかな？・・・』

もうすぐ俺の家に着く頃になると理子が後ろから話しかけてきた、何やら決意をした様な表情をしてる、しかし本当に今日の1日は長いよな・・・。

第百三十話（前書き）

長すぎた二学期の三日目が終わります。

第三百三十話

ウチの近くに理子が来ていた、俺に話があるみたいで何やら真剣なまなざしをしてる、しかし里奈は不機嫌オーラ全開で理子をにらんでるし夕奈ちゃんは思考の読めないポーカ―フェイス、この2人がいては話が出来ないと思った俺は里奈達に先に帰るように促した

「2人は先に帰っててくれなにか、俺は理子と話してから帰るから。」

「えゝ、一緒に帰ろうよお兄ちゃん、今更この人と話す事なんて何もないじゃない！」

やはり里奈はこう言うと思ったよ、なんとか説得しようと思った矢先に夕奈ちゃんが里奈の手を握り

「分かりました・・・里奈・・・先に帰ろう・・・お兄さんを・・・困らせたらダメよ・・・。」

「えっ！？　ちよっと！　夕奈ちゃん！！　引つ張らないでつてば・・・。」

そのまま里奈を引つ張り2人はウチに向かっていった、夕奈ちゃんに感謝だな

「・・・やっぱり私って里奈ちゃんに嫌われてるね、しょうがないんだけどさ、私が青ちゃんにした事を考えたら当然だもん。」

2人が見えなくなると理子は何かを吹っ切った様な表情で話し出す

『 もういいよその事は、それより話って何だよ。』

『 うん・・・私ね、これからは青ちゃんや友くん達とは距離を置こうって思ってるの、恭介がいなくなっただからって今更青ちゃん達と仲良くななんて出来ないし・・・それに奈津美や四森さん達と仲良くする青ちゃんを・・・私、あまり近くで見たくないから。』

どうしたらいいのか俺には分からなかった、しかし理子がそう決めたのならそうすればいいと思う、それに悪いが理子の為に奈津美さんや彩花、夕奈ちゃんと友人関係を解消するとか俺には出来ないし

『 自分でも身勝手な事を言ってるのは分かってるつもり・・・裏切った私を助けてくれたのにこんな事言うんだもん、でも私は青ちゃん達と一緒に居たらどうしても恭介を思い出しちゃう！ 辛い思い出を全て忘れて新しい幸せを探したいの！ 私だって幸せになりたいんだよ・・・。』

そう話す理子はすごく切なく見えた、まあ言われたら一理あるよな、俺達と一緒に居ても理子は辛くなるだけなのだろう、なら俺の言う事は1つだけだ

『 なれよ・・・幸せに、人間誰でも幸せに生きる権利はあるんだ、幸せになったら駄目な人間なんてこの世にいないよ、理子もこれからは自分の幸せを見つけて欲しい、俺やトモ、奈津美さんは応援するぞ。』

カッコいい事を言ってるが実はこれは友成の好きな刑事ドラマに出てくる刑事さんが言ってた台詞なのだ（友成が力説してた）

でも俺もそう思う、ただ幸せになりたいと願う女の子が幸せになるうとして何が悪い

「ありがと・・・青ちゃん・・・それと・・・ゴメンね、嫌な思い、たくさんさせちゃってゴメンね、うううつ・・・。」

「泣くなつてば、別に理子が全て悪い訳じゃないんだから、男と女が付き合ってたらかんな事もあるんだ、お前にとって俺が工藤より魅力がなかっただけさ、お前とは不幸な結末だったけどお前も俺もまた新しい恋を見つけて幸せになればいい、お前にもいつか絶対いい男が見つかるよ。」

そう言つて泣いてる理子の肩に優しく手をおく、理子も他人を思いやる事の出来る女の子だ、かつては好きだった女の子なんだし願わくは幸せになつてほしい

「それじゃ里奈達が待つてるからそろそろ帰るよ、じゃあな、理子。」

「うん・・・じゃあね、青ちゃんっ」

最後の別れに理子は俺と付き合つてた頃によく見せてた笑顔を久々に見せてくれた、あの笑顔が出来るなら理子が新しい幸せを見つけるのもそう遠い日じゃないだろう、俺はそう確信して帰路についた。

「ただいまー、オラ腹ペコになっちまったぞ。」

あまりに腹が減つたのでついつい力力？ツトみたいな口調になった

俺、そんな俺を迎えに来た里奈と夕奈ちゃんは・・・

『おかえりなさい、お兄ちゃん　まずは晩ご飯にする？　お風呂にする？　それともいきなり・・・里奈でもいいんだよ』

『里奈・・・私もいるんだから・・・お兄さん・・・好きなのを・・・選んでください・・・』

どーして里奈達のエプロンの下がビキニ水着なんだよ！？　こんな目のやり場に困るだろうがっ！！

『なんで2人共そんなカッコしてるんだよっ！！　今すぐ服を着なさい！　まったく・・・俺以外の男だったら2人共襲われるぞ。』

『お兄ちゃんだったら襲ってもいいのに・・・ホントは裸エプロンにしたかったんだけど夕奈ちゃんが裸は恥ずかしいって言うから水着にしたんだよ、似合ってるかな？』

『里奈は・・・羞恥心が無さ過ぎ・・・裸エプロンは・・・まだその段階じゃないから・・・』

段階とはどういう事だろうか？　とにかく2人に服を着せないと俺の息子がヤバイ事になる、俺とて健全な高校生だ、美少女2人の水着エプロンなんて見せられた日には・・・

『とにかく2人共まずは服を着てきなさい！　そうじゃないと2人には俺への弁当を作らせないぞ！』

少し強めに言うと2人は渋々服を着に部屋へと戻った、実はもう少しくらい水着エプロンを見たかった気持ちもないと言えば嘘になる

かもしれないが・・・

『 もうっ！ 貴志くんたらっ！！ 私という将来を誓い合った恋人がいるのに浮気なんて許しませんからね！ 水着エプロンなら私がいつでも好きな時に見せて差し上げますわ！ 』

『 フーン、貴志って水着エプロンも好きなんだ、今度私がもっとセクシーな水着エプロンを見せたげるわ、覚悟しときなさい！ 』

どこからともなく奈津美さんと彩花の声が聞こえてくるのは多分に気のせいだろう、俺の幸せって一体どこにあるのだろうか、これからの苦難（？）を想像すると腹の底からため息が出てきた。

第百三十話（後書き）

とりあえずこの作品での理子の出番はもう無いでしょう、次話は
またもシスコン貴志とブラコン里奈の兄妹デートです。

第百三十一話（前書き）

今回はR15どころの話じゃないかもしれません、苦手な方はご注意ください。

第百三十一話

秋のポカポカした陽気の中、横になってた俺は耳に心地良い感触を感じていた、どうやら誰かから耳掃除をされてるみたいだ、一体誰なんだろうか？

『あら、貴志くんったら、起こしてしまいましたか？ まだ左耳が残ってますので早く左耳を上にして横たわってくださいな。』

耳に聞こえてきたのはしつとりとした風鈴のような涼しく綺麗な奈津美さんの美声、どうやら奈津美さんが耳掃除をしてくれてたみたいだ、しかも膝枕というオマケ付きで、というかなんでこんな事になってるんだ？ まあ気にしても仕方ないか、言われるままに左耳を上に向ける様に体勢を変える、その時奈津美さんを見て思わず目が点になった、奈津美さんは真っ赤なビキニ姿だったのだ

『奈津美さん・・・そのカッコは一体？・・・。』

状況がのみ込めずにそれだけ言う足がやたらと気持ちいい事に気づいた、目を向けると何故か黒のビキニを着た彩花が俺の足を絶妙な手加減で揉んでいたのだ

『どう貴志、私結構マッサージュ上手でしょ いろいろ勉強したんだから、ご褒美に次は貴志が私をマッサージュしてよね。』

何のご褒美がよく分からないが確かに彩花のマッサージュは気持ちよかった、その上赤ビキニの奈津美さんに膝枕してもらって耳掃除までやってもらってるのだからこのギャルゲだよって話だ、こんな
の友成が聞いたら涙を流して発狂するぞ

「あーっ！！ 何してるのお兄ちゃん！ 耳掃除は里奈がしてあげるって約束したじゃない！！」

「お兄さん・・・マッサージは・・・私と約束・・・しましたよね・・・。」

いきなり登場してきたのはオレンジビキニを着た里奈とピンクのビキニを着た夕奈ちゃんだった、だからどうして水着姿なんだよ！それに約束って何の話だ？ あまりの奇想天外な展開に俺の思考回路は考えるという事を拒絶したようだ

「まあ、里奈さんともそんな約束をしてたのですか！ そんな見境なしの貴志くんには少しお仕置きが必要ですね！」

「そうね、夕奈にもマッサージしてもらおうとしてたなんてそんなの許せないわよね・・・、貴志、覚悟しなさいよね！」

いや、そんな約束をした覚えは全くもっていないのだが、そう言おうとしたら両腕を里奈と夕奈ちゃんにガシツと掴まれた、だからいちいち胸を押し当てる様にするのはやめなさいっ！！

「そくだそくだ！ お兄ちゃんにはお仕置きだ！ いーっばいお仕置きしちゃうんだからね！」

「お兄さんにお仕置き・・・楽しみです・・・。」

そう言う2人は実に楽しそくだ、お兄ちゃんを何だと思ってやがる！ そんな子に育てた覚えはないっての

『 貴志くん・・・私の初めて・・・貴志くんに捧げます・・・どうぞ受けとってください・・・。』

『 私も・・・貴志だったら・・・ううん、貴志じゃないと絶対にイヤだ！』

はれっ？ お仕置きはどうなったんだ、仰天発言をした奈津美さんと彩花はうつとりとした目で俺に近づいてくる、逃げようにも里奈と夕奈ちゃんに両腕と両足をガツチリ掴まれ動けない、いや、無理やりほどけばいいのだが年下の女の子にそんな乱暴な行為はできない

『 私も・・・初めてはお兄さん以外・・・あり得ませんから・・・いや・・・初めてでなくても・・・お兄さん以外なんて・・・絶対に嫌です・・・。』

『 お・に・い・ちゃん 里奈も初めては怖いけど・・・お兄ちゃんとなら・・・頑張るから！』

いや、それは頑張ったら駄目だろ！？ そんな事をしてしまったらお兄ちゃんの人生はジ・エンドになってしまう、そんな俺の心配なご構いなしに4人は俺に覆い被さってきた

『 貴志くん・・・。』

『 貴志い・・・。』

『 お兄さん・・・。』

『 お兄ちゃん・・・里奈を奪ってえ・・・。』

『 ちよつとっ！ 皆落ち着けつて！！ あっ！？ コラ里奈っ！
！ そんなトコ触るなぁーっ！！！！ 頼むから助けてええっ！
！！！！ 』

俺の絶叫は虚しくこだまし4人の美少女達は俺の体を情け容赦なく
貪っていくのだった・・・

『 だあああああつ！！！！ 』

けたたましい絶叫と共に俺は起き上がった、部屋も窓の外もまだ暗
かった、まだ真夜中だったんだな

『 夢かよ・・・ったく、なんつー夢だよ、あんなのあり得ねーし。
』

『 うにや・・・どーしたのお兄ちゃん？ いきなり叫ぶんだから
里奈、目が覚めちゃったよ。 』

俺の隣で寝てた里奈が目をゴシゴシさせて起き上がる

『 起こしちまったか、悪かったな、ちよつととんでもない夢を見
ちゃったもんだからさ。 』

『 そうなの？ もしかして怖い夢だったの、大丈夫お兄ちゃん、
もし怖かったら言つてね、里奈がぎゅって抱きしめてあげる 』

里奈は本当に心配そうに俺を見てる、これじゃあどっちが年上か分
からないな

『 ありがとな、気持ちだけありがたく受け取っとくよ、ほらっ、明日は俺と好きな所に遊びに行くんだろ、早く寝なよ。』

『 うん おやすみお兄ちゃん、愛してるよ 』

照れくさい事を言っで里奈はもう一度眠りについた、里奈は寝顔もムチャクチャ可愛いな、見てるとつつい顔がニヤついてしまうよ・
・うん？ マヌケな俺はようやく異変に気づいた、なんで里奈が俺のベッドで寝てやがるんだ

『 里奈あつ！ 起きやがれええっ！！ 』

『 むー、何なのお兄ちゃああん・・寝るのか起きるのかよく分かんないよ・・。』

『 どうしてお前はいつも俺のベッドに来るんだ！？ 今度こんな事しやがったらもう二度と俺の弁当を作らせないからな！！ 』

このくらい言わなきゃ里奈はまた同じ事を繰り返すからな、ここは兄として心を鬼にしなければ！

『 だって1人で寝るのって凄く寂しいんだもん・・お兄ちゃんの隣じゃないと里奈、安心して寝られないよ、毎日じゃなくてもいいから一週間に1日くらいは一緒に寝ようよお。』

うるうる上目遣いの里奈の前に俺の決意はもろくも崩れ去った、そんな目をお願いされて断れるほど俺は厳しい兄にはなれないのだ

『 ・・・しょうがないなあ、一週間に一回だけだからな、もう今

日でいいからここで寝るよ。」

「お兄ちゃんありがとおー！　じゃあちよつと寝て朝ご飯を食べたらデートに行こうね」　里奈、行きたい所があるんだあつ！」

「分かった分かった、里奈の話は朝ご飯の時に聞いてやるから今は寝ような、まだ真夜中だし。」

こうして里奈に甘い俺は結局里奈と同じベッドで寝るのだった、神様！　お願いしますからいつの日か里奈が俺以外の男を好きになるようにしてください！！　このままではいつか俺と里奈は禁断の扉を開いてしまいそうなのだ・・・。

第百三十一話（後書き）

・
・。 兄妹デートは次話になりました、夢話が長すぎたもんですから・

第百三十二話（前書き）

黄金連休休めるのだろうか・・・１日くらいは休みたいです。

第百三十二話

今日、9月4日は土曜日で学校は休み、それでも変わらず里奈の作った朝ご飯を食べる我が家のいつもの朝の光景、うん、今日も玉子焼きが美味しい

『それで里奈、お前の行きたい所ってどこだよ？ できればあまりお金の掛からないトコで頼むな。』

あまりお金に余裕のない我が家の生活だ、今は亡き父方の祖父母からの仕送りだけなんだから仕方ないのだが、元々勉強の出来ない俺はこんな背景も手伝い大学に行く気もなく高校を卒業したら働く予定だ、俺はいいがせめて里奈はきっちり大学に行かせたいしな

『少し遠いけど 農園で今日からリンゴ狩りがオープンするんだよ、お兄ちゃんリンゴ好きでしょ、だから里奈、お兄ちゃんと一緒に行きたいな 』

笑顔でそう言う里奈を見て妹なのにドキリとさせられてしまう、こんな事ではいけないのだから・・・

『そっか、じゃあリンゴ狩りに行くか、しかし今から行って参加できるのか？ 俺はよく知らないがこーゆーのは予約とかしないと入れないんじゃないか。』

今日オープンなら尚更そうだと思うが里奈は得意げな笑みを浮かべ言った

『ふっふーんだ、お兄ちゃん、里奈にぬかりはないんだよっ！』

ちゃんと3日前に予約してるんだから、3日間ずっと楽しみにしてたんだからね！
」

それは段取りのよい事で、俺にも今まで言わなかったのはリンゴが好きな俺を喜ばせたかった里奈なりのサプライズなんだろうな

「よしっ！　じゃあご飯食べ終わったら着替えて行くか、なるべく動きやすい服装にしとけよ、まかり間違ってもミニスカートとか穿いてくんじゃねーぞ。
」

「はーい、お兄ちゃん、2人でお腹いっぱいなるまで食べようね
」

だからそんな天使みたいな笑顔を俺に向けなくてくれ・・・しかしその笑顔を独り占めしたいと思ってる自分がいるのも否定できない・・・俺は駄目な兄だな。

電車に乗って行く為、俺と里奈は駅に向けて歩いてた、俺も里奈も服装は動きやすいズボン姿だ、里奈のズボン姿はなかなか新鮮だった、普段はスカートの多い子だからな

「ねえお兄ちゃん、一つお願いしたい事があるんだけど聞いてくれる？
」

隣を歩く里奈が急にそんな事を言い出す、てっきり手をつなぎたいとかそーゆーのかと思ったのだが

「なんだよ？　なんか変な事じゃなかったら大抵は聞いてやるぞ。
」

『 うん、里奈ね、今日だけは本当に恋人同士としてデートしたいの・・・だからお兄ちゃんの事を責ちゃんって呼んでいい？ 』

案外それもいいかもな、お兄ちゃんと呼ばれ家みたいにベタベタされては周りから変な誤解をされるしな

『 いいぞ、でも今日だけだからな、だから今日はお前は俺の彼女だ。 』

『 やったーっ！！ じゃあ責ちゃん、手をつなごーよ、恋人なんだから当たり前だよな 』

なんか畏にハマった気がしないでもないが兄妹と思われなければ安全だろ、俺は右手を里奈に差し出した

『 へへへー、どしたの責ちゃん、顔が赤いよ。 』

里奈はニヤニヤしながら俺と手をつないだ、周りから見たら俺達ってただのバカカップルだな、兄妹とは思われてないはずだ、後は知り合いに会わない事を祈るだけだった・・・。

『 ふーっ、満腹満腹 いっぱい食べちゃったね責ちゃん、でも本当に美味しかったもんね。 』

？？農園はオープン初日も手伝ってかなり人が多かった、里奈が予約してなかったら恐らく入れなかっただろう、その後はデパートで秋服を見たりダーツを楽しんだりそれなりにデートっぽい時間を過ごした

『 やっぱ農園で取れたてのリンゴは旨いよな、スーパーとかで買うリンゴとは一味違ってたよ。』

『 貴ちゃんが楽しんでくれてよかったー、里奈ね、一回でもいいからこんなトコ来てみたかったんだっ！ これからもたまにでもいいから一緒に行こうね。』

里奈は少し寂しそうだった、今日のリンゴ狩りは圧倒的に家族連れが多く一様に皆楽しんだ、それに比べ里奈は親にどこか遊びに連れてってもらったという思い出が1つもなかったからな、まあ俺もなんだが

『 ああ、今度はイチゴ狩りでも行くか、みかん狩りでも悪くないけどな。』

『 うんっ！ 絶対行こうね 今日はあるがとうお兄ちゃん、里奈もすつごく楽しかったよ これから2人で思い出いっぱい作るうね、里奈、お兄ちゃんの妹で本当に良かったよ。』

・・・やばい、里奈の前で泣き出しそうだ、母は不倫相手と家を出て行き父からは暴力を受け親との思い出が何1つない里奈、それでも非行に走らず素直な優しい子に育った、そして俺への今のセリフ・・・神様、お願いを1つ追加していいですか？ 里奈を誰よりも幸せにしてあげてください！ 俺はそう願わずにいらなかった・・・。

第百三十二話（後書き）

次話は里奈達4人のお弁当話になる予定です。

第百三十三話（前書き）

昨日は高校時代からの友人達と女の子がたくさんいる店に行つてました、友人の1人は嫁さんいるのに女の子口説いてるし・・・。

第百三十三話

俺は今、学校に登校している、何のことはない普通の光景……のはずなんだが

『今日は里奈が作ったから残しちゃダメだよ、ゼーったいに里奈がお兄ちゃんとキスするんだからねっ！！　夕奈ちゃんにも彩花さんにも奈津美さんにも負けないんだから！』

『あら里奈、私だって負ける気なんてさらさらないわよ、悪いけど貴志の唇は私がもらうからね。』

『お兄さんのキス……誰にも渡しません……私、本気ですから……』

『貴志くん、あまり深く考えないくださいね、素直な気持ちで選んでくださったらいいのですから、でも私も簡単に負けたりいたしませんわ。』

こんな感じで美少女4人と登校している、奈津美さんも彩花も今や当然の様に俺と登校を共にしてるし、そんな俺を周りの男子生徒は相変わらず羨望と殺意のこもった目で睨んでた

『おう、リアルギャルゲ男と4人のヒロインじゃねーか、おはよっ。』

『皆さんおはようございます、いつもながら仲がいいですね、ふふっ。』

生徒達の中から友成といずみちゃんが出てきた、誰がリアルギヤルゲ男だ！

『おはようございます、真司くん、いずみさん、お二人も一緒に登校なされてるのですか？』

『そうなんです、私が起こしに行かないと真兄ったらしよっちゃう寝坊しちゃうんですから！ また昨日もかなり遅くまでお父さんと話をしたらしいんですよっ！ まったく・・・起こしに行くこっちの身にもなっってほしいです。』

奈津美さんから聞かれいずみちゃんは少々おかんむりのご様子、友成はというと気配を消して目立たない様にしてる、しかし友成だつて幼馴染み兼恋人が家まで起こしに来るなんてそっちもリアルギヤルゲだと思う

『で、そんな遅くまでなんの話をしてたんだよトモ、卒業後の進路か？』

一応聞いてみたのだが友成からの返事は大体予想通りのものだった

『違うよ、俺の進路はもう決まってるんだ、刑事になるんだからさ、香取刑事みたいに厳しさの中にも暖かさを持つ人情派の刑事にな、昨日親父と話したのはラ？ウ死後存在が無かった事にされてる北？四兄弟の三男とあまりの弱さでかえって人気のある南？五車星のハルウ？ラこと風のヒュ？イが戦えばどっちが勝つのかって話だよ。』

・・・息子もそうだが親父さんも変わった人だな、変人が2人も居てお袋さんもさぞかし大変だろうな

『 よくやるわね真司も・・・それより今日は里奈が作ったのよね、明日が私で明後日が夕奈、そして最後が奈津美ね、ねえ貴志、それでいい？ 』

彩花が俺への弁当を作る順番を言いながら俺の隣に接近してくる（俺は何も聞いておらずいつの間にか決まっていた）しかしいつ見ても彩花の胸は大きいでござる、もうFを通り越しGまでいってるんじゃない・・・

『 お兄さん・・・彩花先輩の胸ばかり見てる・・・私だって・・・小さくはないですから・・・ 』

『 なっ！ 何言つてんだよ夕奈ちゃん！ そんなの見てないって！！ 』

夕奈ちゃんに言われ慌てて否定する、しかし彩花は

『 あら貴志、そんなのって言い方はないんじゃない、私の胸ってそんなに魅力ない？ もしかして貴志って貧乳のが好きなの。 』

小悪魔的な笑顔でからかってくる、だが俺は別に胸の大小で女の子を選ぶ気はない、胸が小さくとも素敵な女性はいくらでもいるのだ

『 そうなんです、お兄ちゃんは里奈のBカップで充分満足してるんですから、ねっ、お兄ちゃん 』

また根も葉もないデタラメを・・・ほかの生徒達もドン引きしてるだろうが！ 多分彼らは心の中で俺を変態シスコン野郎と呼んでるな、間違いない

『 そうなの！ 貴志が貧乳フェチだったなんて、予想外だわ！
でも・・・巨乳でないとできないプレイもあるんだからねっ！！』

『 勝手に人を貧乳フェチにするな！ 俺はそーゆーのにこだわりのないぞ、つーか朝の登校時にする話じゃないよな？ もっと和やかなトークをしようぜ。』

彩花の妙な勘違いのせいで周りの生徒達はヒソヒソと俺を見てる、
どうやら俺にまた新たな称号が加わった様だ、変態シスコンの上に
貧乳フェチとか・・・

『 それじゃ青山さんの為に話題を代えますね、今日から皆さんの
作ったお弁当を順番に食べるんですよ、確か一番美味しい弁当を
作った人にはキスをするとか、ちゃんと選んでくださいね、全員選
んで全員とキスなんてなしですよ、でも青山さんなら真兄と違って
そんな事しませんよね。』

いずみちゃんに言われ改めて気づく、全員選ぶとかそんな事はしな
いがちゃんと1人を選ぶのだろうか？ そんな不安を抱きながら
教室に向かって行った。

そんなこんなでいきなり昼休み、俺の机には里奈の作った弁当があ
る、それを見た奈津美さんと彩花は

『 まったくいつも通りのお弁当で来ましたわね、里奈さんの自信
のほどがよくわかりますわ。』

『 里奈は夕食も作ってるからね、貴志の好みも知り尽くして当然よね、やっぱり里奈が一番のライバルなのかな……。』

里奈の作った弁当を見て不安げな表情を見せる、里奈の弁当は俺の好きな厚焼き卵にタコ型ウィンナー、肉じゃが等本当に普段と変わってなかった、そして味付けもいつも通りとんだか妙に安心した

『 でもまだ負けたと決まった訳じゃないわよね、明日は私のとびきりの弁当を貴志に食べさせてあげるんだから！ 期待しときなさいよねっ！！』

俺が食べ終わると明日の担当である彩花は力強く宣言する、それを見た友成は

『 さーて、今回のアオヤマさんは……。友成です、そろそろ秋も近づいてます、休みの日は美味しいおにぎりを持って紅葉狩りにでも行きたいですね、さて今回は”彩花の手作り弁当”の一本です、それじゃあ次回も楽しみにしてくださいね、ジャン・ケン・ポンっ、ふふふっ。』

友成はグーを出し俺はチョキ、負けてしまった、つかなんで日曜夕方の某国民的アニメの次週予告みたいな言い方をするのだろうか・
・相変わらず友成の言動は常人の理解を超えてるよな、本当に刑事志望なのだろうか？

『 おしおし、ジャンケンに負けたから帰りはアオのおごりでマツクにでも行くか、里奈ちゃんや蒼太達も誘って……。』

アホな事をぬかす友成に北？剛掌波をお見舞いしてやった、そのままたに召されてほしいな、そしてあと3人か、彩花も夕奈ちゃんも

奈津美さんも皆揃って料理が上手いからな、こりゃ相当悩むんだろ
うな・・・。

第百三十四話（前書き）

今春から入った新入社員と仕事をしてますがなかなか言う事を聞いてくれません、まあ気長に頑張ります。

第百三十四話

今日は彩花の作った弁当を食べる事になってる、昼休みに彩花から弁当を渡られるとクラス中の男子が一斉に驚きと好奇の目で見てた

『はい貴志、食べ終わったらそのまま返してくれたらいいから、残しちゃダメなんだからね。』

中身はエビフライにいかと里芋の煮物、ナスの味噌漬け、里奈に對抗してか厚焼き卵も入ってた

『あら、そういえば彩花さん、ご自身の弁当はお持ちではないのですか？』

奈津美さんも気づいてた、俺への弁当は持ってきてるのだが彩花の分の弁当がないのだ、確か彩花は毎日弁当を持ってきたはずだ

『貴志への弁当に夢中になっててつい自分の弁当を持つてくるの忘れちゃったのよ、そろそろ蒼太が持ってきてくれる頃だと思うんだけどな……。』

そんな彩花のそそっかしさが微笑ましく思える、そんな時、弁当を片手にした蒼太が俺達の教室横の廊下から声をかけてきた

『姉さん、弁当持ってきたよ、まったく、高校三年にもなって弁当を忘れるとかないだろうに……。』

廊下にやって来た180近い長身の大人びた美男子を見てクラスの女子達から一斉に歓声が飛び交う

『 ちよっ！？ 誰なのよあのイケメン！！ 』

『 四森さんの弟なの！？ すっごい男前じゃない！ ねえねえキミ、今付き合ってる人とか居るのかな？ もし居ないんだったら私と付き合ってみない 』

『 えーっ！ それだったら私の方がいいよ！ お姉さんが手取り足取りいろいろ教えてあげるわ。 』

女子達の黄色い声に蒼太は苦笑してる、そんな弟に姉が助け舟を出した

『 残念でした、蒼太にはもう可愛らしい彼女が居るのよ、わざわざ持ってきてくれてありがとね蒼太。 』

彩花の一言に女子達は意気消沈となる、そんな女子達に蒼太は軽く会釈をして俺達にも話しかけてきた

『 どういたしまして、それじゃ青山先輩、友成先輩、高野先輩、失礼します、あっ、青山先輩、姉さんの弁当どうでしたか？ 』

蒼太が含みのある笑みを俺に向ける、何のつもりだよ

『 まだ今から食べるトコだよ、いいから早く教室に戻って！ お前に見られてるとどうにも恥ずかしいんだよ。 』

『 ハハっ、分かりました、姉さんかなり頑張ってたからきつと美味しいと思いますよ、それじゃ。 』

そう言っていると蒼太は教室に戻っていった、蒼太も割とシスコンなのかもな、家ではどんな弟なんだか……。

弁当を食べ終えて空になった弁当箱を彩花に渡そうとする、すると彩花が期待と不安の混じった様な目をして俺に今日の弁当についての感想を聞いてきた

『 ねえ貴志、弁当どうだったかな・・・味付けとかちよつと薄いかなと思っただけけど・・・おかずも地味なのばかりだったし。』

『 そんな事ないって、凄く旨かったよ、里芋の煮物とかちようどいい味加減だったしエビフライのソースなんて絶品だったぞ、あの味とか俺は好きだな、うん。』

正直に感想を言っていると彩花は顔を真っ赤にして俯く、いつもの彩花らしくないよな

『 ありがと貴志・・・そう言ってくれるだけで私・・・嬉しい・・・。』

恥じらいながらそんな台詞を言う彩花は思わず気絶しそうになるくらい可愛かった、それを見てた友成は

『 こーいのリアルギャルゲ男があー！ どうしてお前ばかりがそんなにリア充人生まっしぐらなんだよ！？ 所詮俺なんて永遠に主人公の親友ポジションでしかないのか・・・。』

友成は何の事かよく分からない事を言ってるが友成にもいずみちや

んがいるだろうに、あんな美人で性格もいい娘と付き合えるとかそれだけでも友成は一生分の運を使い果たしてもおかしくないと思うがな

『これで後は夕奈さんと私の2人だけですわね、里奈さんも彩花さんも本当に美味しそうなお弁当で私も気合いが入ってきましたわ、必ず貴志くんのお口を満足させてあげられる様なお弁当を作りますからね。』

奈津美さんがそう言って俺の隣にそつと寄り添う、案の定それを見た彩花は

『あつ！ 何してんの奈津美！！ どさくさに紛れて抜け駆けしないでよ！！』

『まあ、抜け駆けだなんて人聞きが悪いですわ、ただ貴志くんの隣にいたい気分だけです。』

彩花も俺に寄り添ってきて奈津美さんとの小競り合いが始まる、そんな中、友成は俺達3人を見て

『いないーな、このハッピー金髪野郎、お前のモテモテ主人公属性はもう天性だな、出来るなら代わりたいたいもんだぜ。』

じゃあ代わってくれ、お前の想像以上に大変なんだから、さて、明日は夕奈ちゃんか、どんな弁当がくるのやら・・・。

第百三十四話（後書き）

次話はできれば明後日には更新したいです。

第百三十五話（前書き）

少し話が脱線してます、どうかご容赦を。

第百三十五話

今日の弁当担当は夕奈ちゃん、ピンク色の可愛らしい弁当箱には若干の気恥ずかしさはあるが中身は美味しそうだった。

ししやもの南蛮漬けにドレッシングのかかったレタスにプチトマト、手作りつばい肉団子に3日連続の厚焼き卵、後はフルーツにリンゴが添えられてた

「夕奈も思った以上にやるわね、それに明日は大本命の奈津美が控えてるし・・・でも勝負は最後まで分らないんだからっ！」

「彩花さんの言う通りですわ、まだ結果が決まった訳ではありませんせん、明日は私の貴志くんへの愛情の全てを注ぎ込んだ弁当を食べさせてあげますから、楽しみにしてくださいね。」

彩花と奈津美さんは夕奈ちゃんの弁当を見てそれぞれ思いの丈を話す、しかし教室の中でクラスメート達が居る中、かつては学校のアイドルと言われてた奈津美さんからあの様に言われて正直かなり照れまくりだ

「アオ・・・すごい奴だよ、お前は・・・奈津美さんからあんな事を言われるのはお前だけだ・・・頑張れ、アオ・・・お前がナンバーワンだ！」

友成はいつもの如く意味不明な事を喋ってる、相手にするのも面倒なので放つといて弁当を食べだす事にした、うん、このししやもの南蛮漬け美味しい、夕奈ちゃん、また腕を上げたな。

昼からの授業は体育でバスケットをする事になった、授業が始まる五分钟前、体育館に来た友成は体操着の上に妙なタスキを掛けてた、そのタスキにはマジックで

”現代の好色一代男に天誅”

と書かれてた、好色一代男って誰だ、まさか俺かよ！　っーかさっき俺をナンバーワンとか言ってたのはなんだったのだろうか・・・

『コラ友成！　なんだそれは！！　さっさとそのおかしなタスキを外せ！！』

ゴツイ体育教師に怒られ友成は渋々タスキを外す、ほんまもんのアホやコイツ

『勝負だアオ！！　手加減はなしでな。』

『お前の運動神経は知ってるからな、胸を借りる気でいかせてもらうよ。』

外が雨だから体育館で見学になった女子達が見守る中、試合が始まる、俺と友成は敵同士のチームとなった、当然友成のチームは友成にボールを集める作戦だ、そして試合は友成のワンマン劇場の展開を見せた

『静かにしろい、この音が・・・。』

パシユッ！

『俺を甦らせる、何度でもよ！』

『さあ、いこーか。』

『やっぱアオとの1on1は面白れー、高校生レベルを遥かに上回る身体能力と女を引き寄せるハーレム属性を持つてる、そして・
・最後は俺が勝つからだ！ 勝つから楽しいんだ！！』

プレイの随所で耳にする友成の独り言と共に試合は後半残り3分まで進みスコアは52対30、10分ハーフの試合とはいえ友成がここまで1人で38点を挙げるデタラメな活躍を見せてた、3点シュートを6本も決めたりダンクを7本決めたりでもう俺でも覚醒友成を止めるのは不可能だった

『キャー！！ 友成くんすつごーーいつ！！！！』

『やっぱスポーツしてる時の友成くんって抜群にカッコいいよねー、これであのいずみって二年の娘がいなかったらなー。』

見学の女子達は友成のプレイに目をキラキラさせて声援を送る、そんな女子達の中、奈津美さんと彩花だけは俺に声援を送ってくれた

『貴志くーん、頑張ってくださいーい、まだ試合は終わってませんわー。』

『ホラ貴志つたら！ シャキツとしなさい！ このまんま真司にボロ負けじゃいいとこなしょつ！！』

またしても友成がドリブルで攻めてくる、俺の味方達は為すすべもなく抜かれていき最後はゴール下を守る俺だけになった

『いくぞアオ！ 絶対に俺が勝つんだ！！』

『来いっ！ トモ！！』

せめて一回くらいは友成を抑えたい、それだけを願ってブロックしようとしてジャンプするが友成のプレイは軽く俺を上回っていた、俺のブロックをダブルクラッチでかわしそのままワンハンドダンクをかましやがった

『なっ！！！！』

『なんなんだよ今はーっ！！』

『いやっ、あんなのありえねーし！ ムチャクチャ過ぎるだろっ！！』

友成のあまりにも高校生離れしたスーパープレイに皆騒然となる、審判をしてたゴツイ体育教師も

『あんなプレイ、NBAでも出来るプレイヤーはそうはいないぞ・
・それを日本の高校生が・・友成ってなんなんだよ・・。』

信じられないといった感じで呟く、結局試合は64対38で俺のいるチームは友成のいるチームに完敗した、試合後に友成が俺に近づき声をかけてくる

『とりあえずバスケでは俺の勝ちだな、アオ、今度はテニスで勝負してみねーか？ もし俺に勝ったらもれなく厳選したエロ本をプレゼントしてやっぞ。』

『いらねーよ！ それよりお前にスポーツで勝つのがまず無理だし。』

そう言い合って笑う俺と友成の所に奈津美さんと彩花が来た、太ももを露出した体操着の2人はいつもの二割り増しに可愛く見える

『貴志くん、残念でしたね、真司くんのプレイも凄かったですね。』

『やっぱ真司の運動能力は凄いわー、プロ顔負けだもん、貴志も追いつくように頑張らなきゃねー。』

そんな簡単に追いつけるのなら苦労はないよ、俺達4人は仲良く肩を並べ体育館から出るのだった・・・。

第百三十五話（後書き）

実際に友成みたいなチート高校生なんていませんよね、この作品はフィクションです。

第百三十六話（前書き）

連休前でかなり忙しいです、新人達と懸命に頑張ってます、だから休みが欲しい・・・。

第百三十六話

今日は4人の手作り弁当対決の最終日、奈津美さんが作った弁当を食べる事になってる、メニューはから揚げにかぼちゃの煮物、ほうれん草のおひたしにポテトサラダ、後はやっぱり厚焼き卵があったりと見た目からもう美味しそうだった

『このかぼちゃの煮物、すごく丁寧に作り込んでるよ・・・やっぱり奈津美の料理の腕前は凄いわね、愛は強いつてトコかしら。』

『このから揚げもいい揚げ具合だよー、スーパーやコンビニ弁当のから揚げとはレベルが違うよ。』

彩花と友成がそれぞれ感想を語る、それを聞いてる奈津美さんはしきりに照れていた、そんな奈津美さんの姿に激しく萌えたのはここだけの話にしとこう

『そんな・・・ただ貴志くん喜んでもらいたくて作ったただけですわ、私の料理なんて彩花さんや夕奈さん、里奈さんに比べたらまだまだなんですから。』

奈津美さんがそう言った瞬間、クラス中の男子から凄まじい殺気を感じた、そのモデル級の美貌に清楚でおっとりな慎ましい性格、彩花ほど大きくはないが形の良さそうな推定Eカップの美乳を持つクラスのマドンナが俺を喜ばせたい為に弁当を作ってきてくれたというのが原因だろう

『おいおい、何やらよからぬ空気だなアオ、まあ当然だろうけど、超リア充なお前はクラス中の男子の敵だろうし、助けてほしかった

ら俺に諭吉を5人渡して土下座して頼むのじゃ。」

そんな友成に北？有情猛翔破を叩き込んだ、せめて苦痛を知らず安らかに死ぬがいい、俺って優しいな

『お・・・お師さん・・・昔のように・・・もう一度、ぬくもりを・・・』

フラフラな友成はそんな事を言いながら彩花に抱きつくこととしてやる、しかし彩花は力強く拳を握りしめ

『いっぺん・・・死んでこーいっ！！』

彩花の会心の一撃が友成に炸裂した、友成をやっつけた、彩花は2ポイントの経験値を獲得した

『さあ貴志くん、早く食べて下さい、昼休みが終わってしまいますわ。』

奈津美さんは何事もなかったかの様に俺に弁当を差し出す、4人もの美少女の手作り弁当を食べれるなんて俺は幸せ者だ、生きてよかった、人生万歳！！

見た目以上に味が良かった弁当を食べ終え奈津美さんに弁当箱を渡す、すると奈津美さんも彩花みたいに感想を聞いてきた

『どうでしたか・・・貴志くんのお口に合いましたでしょうか・・・』

頬を赤くさせ上目遣いで聞いてくる奈津美さんに骨抜きになりそう

なのを貧弱な理性で必死でこらえる

『 凄く美味しかった、俺の口には勿体無いくらいだよ、将来奈津美さんを嫁にする人が羨ましいな、毎日こんな美味しい料理が食べられるんだから。』

あまり深く考えずに漏らした感想だが奈津美さんの反応は想像以上だった

『 そんな・・・貴志くんさえその気なら・・・本当に毎日食べさせてあげますわ、それに・・・私の手料理はこれからも永遠に・・・貴志くんだけのモノですから・・・。』

・・・その言い方はそういう意味にしか聞こえないのだが？ 奈津美さんがそんな事言ったら当然彩花も黙ってない

『 私だって貴志しかいないんだから！ 奈津美にも夕奈にも・・・里奈にだって負けない！ 料理は奈津美のが上手いけど貴志への気持ちは絶対に負けてないんだからねっ！』

2人の気持ちは嬉しいがこのままじゃ俺達はさらし者になっちまう、俺は2人に落ち着く様に説得する

『 2人共さ、とにかく落ち着こうよ、2人の気持ちは嬉しいし弁当も凄く美味しかった、将来とかまだどうなるか何とも言えないけど卒業までにはちゃんと答えを出すから、それまで待っていてくれるかな？』

クラス中の視線が俺達に集中してる、いつも以上に真剣な俺に奈津美さんも彩花もにっこり微笑む

『ふふふつ　もちろん待ちますわ、貴志くんが出した答えなら私は何も言いません、だから真剣に考えて答えを出して下さいね、後悔のない様に……。』

『そうよ、貴志は優しいから私や奈津美達を悲しませない様にしたいんだろうけど私達は貴志の幸せが一番なのよ、もちろん私を選んでほしいけど決めるのは貴志自身だもんね』

ほんと優しいなこの2人は・・・その気になれば俺なんぞよりいい男がよりどりみどりだろうに、この2人や夕奈ちゃん、里奈の為に真剣に決めなきゃな

『で、うまくまとめたみたいだけど手作り弁当の結果はどうなんだよ、まずはそれをちゃんと選ぶべきじゃないのか？』

いつの間にか復活してた友成が余計な事を言いやがった！　そんなのいきなり決められないだろうーが！！

『真司くんの言う通りですわ、それは今決めていただきたいですわね。』

『そうよね、さあ貴志、誰の作った弁当が一番美味しかったのかしら！』

どうしたものかな？　全員美味しかったしな・・・少しの時間迷ってるとタイミングよく昼の授業が始まるチャイムが鳴った

『あのさ、明日の朝の登校の時でいいかな？　ちゃんと里奈や夕奈ちゃんのいる前で決めたいしさ。』

それで2人は納得してくれた、これで今日の夜にきっちり考えられるな、この4人は俺の為に弁当を作ってくれたんだ、俺もキチンと応えないとな・・・。

第百三十六話（後書き）

次回は手作り弁当対決の決着の予定です。

第百三十七話（前書き）

4 人の弁当対決の決着編です。

第三百三十七話

運命の朝がやってきた、時刻はまだ7時前、ウチには待ちきれなかったのかすでに奈津美さんと彩花、夕奈ちゃんも来てる、学校に行くのは弁当対決の結果を決めてからにしたようだ

「それでお兄ちゃん、誰の弁当が1番美味しかったのか決まったの？」
「」

里奈が聞いてくると俺は首を縦に振る、昨日の夜は里奈や夕奈ちゃんにも1人にしてくれと念を押し自分の部屋で真剣に考えた、本来なら俺に美味しい弁当を食べさせたくて作ってくれた4人の弁当に順位などつけられない、しかしうやむやにしてはせっかく俺のキスの為(？)に頑張ったこの4人に対して失礼だしな

「お兄さんが決めたのなら・・・私達は何も言いません・・・だから私達の事とか気にせず・・・決めて下さい・・・」
「」

夕奈ちゃんは優しく微笑んで俺に言う、本当に4人の弁当は美味しかった、4人の気持ちに誰が上とかない、ならばもう単純に味で選ぶしかない、俺が一番気に入った味は・・・

「じゃあ言うよ、4人の気持ちは本当に嬉しかった、そんな4人の心がこもった弁当に順番なんてない、だから俺が一番気に入った味の弁当に選んだから。」
「」

奈津美さんも彩花も真剣な表情になる、意を決した俺はハッキリと言った

『俺の中じゃ・・・彩花の作った弁当が一番俺の好きな味だった、特にあのエビフライはソースといい衣の揚げ具合といい完璧だったし、この4日間で食べた弁当の中じゃ一番美味しいって思ったよ。』

言ってしまった、でも・・・これが俺の正直な感想なんだから言っただんだ！ 適当な嘘でごまかしたりなんてしたら俺はもうこの4人に好かれる資格はない

『本当なの貴志・・・本当に私の弁当が一番美味しかったの・・・貴志い・・・ありがとうっ！！』

有無をいわず彩花が俺に抱きついてきた、俺の体に当たる彩花の胸の感触が気持ちいいのは黙っとこ

『お兄ちゃん・・・里奈の弁当じゃダメだったのお、何がダメだったのよ・・・』

里奈は泣きだしそうだった、慌てて里奈をなだめる

『里奈の弁当がダメな訳ないだろう！ 里奈の弁当はいつも通りの味だった、もう俺の生活に里奈の弁当は欠かせないよ、奈津美さんや夕奈ちゃんの弁当も本当に素晴らしかった、でも・・・俺には彩花の作った弁当が一番美味しいって思ったんだ、これが俺の正直な答えなんだよ。』

偽りのない気持ちを俺が言い切るとずっと黙っていた奈津美さんが優しい笑顔で話し出した

『そうですか・・・貴志くんがそう決めたのでしたら私は何も異論はありませんわ、さぞかしお悩みになられたでしょうにそれでも・

・ちゃんと選んで下さった事を私は感謝します。」

「私も・・・お兄さんがそう決めたのなら・・・今回のキスは諦めます・・・でも・・・お兄さんの事を諦めるのは・・・絶対に・・・ありませんから・・・まだまだ・・・勝負はこれからです・・・。」

奈津美さんも夕奈ちゃんも本当に良い娘だ、こんな娘達に想いを寄せられてる俺はそれだけの魅力がある男なのだろうか・・・

「そうだよね・・・お兄ちゃんもいっぱい悩んだんだよね、里奈だけがワガママ言ったらお兄ちゃん困らせちゃうんだ、ゴメンね・・・お兄ちゃん」

奈津美さん達が俺の決断を受け入れたからか涙をこらえながらも何とか受け入れようと笑う健気な里奈の姿がたまらなく愛しかった

「何言ってたんだ里奈、お前は俺の妹なんだぞ！好きなだけワガママ言えよ、妹が兄貴に遠慮なんてするんじゃないやねえ！俺達は2人だけの家族だろっ！！」

泣くのをこらえてた里奈の目から涙があふれたす、優しく素直で笑顔の眩しい俺だけの可愛い妹、そんな里奈を彩花が抱き寄せた

「良かったね里奈・・・こんなに優しくて素敵なお兄ちゃんがいつもそばに居てくれて・・・私、里奈が羨ましいよ・・・。」

「うん・・・ぐすつ、えぐつ・・・彩花さあん・・・あああくん・・・。」

しばらく里奈は彩花に抱きつき泣きじゃくってた、何やら妖しくイケナイ関係に見えなくもないが里奈にとって彩花や奈津美さん、いずみちゃんはお姉さん同然の存在なんだろうな。

泣き止んだ里奈達3人を先に学校に行かせウチには俺と彩花だけが残った、一番美味しかった弁当を作った彩花にはキスという約束だったからな

『夢みたい・・・、優しくしてね、貴志 』

ヤバイ、彩花がもの凄く可愛い、彩花ってこんな可愛いキャラだったか・・・俺も彩花を抱き寄せて

『彩花・・・目、つぶって・・・。』

『うん・・・貴志・・・大好き・・・。』

俺と彩花の唇が重なり約5秒ほどそのまま動かなかった、奈津美さんや夕奈ちゃんもしたがやっぱりキスって気持ちいいな。

奈津美さん達に遅れる事約10分、学校に着いたら真っ先に友成から誰の弁当を選んだんだと聞いてくる、あまりにしつこかったので南？水鳥拳奥義、飛翔？麗を決めた、友成は倒れ際に

『アオ・・・俺より強く、美しい男よ・・・せめて、その胸の中で・・・。』

変な言い方するな！！ お願いだからそのまま倒れて二度と起き上がってくるなよ、学校では彩花も奈津美さんもいつもの彼女達で一

安心だった、ウチではウチで里奈や夕奈ちゃんがいつも通り（？）の体操着エプロンで俺を悩殺してくる、弁当対決は彩花の勝利で幕を閉じたが本番はまだ終わっていない、俺って卒業までに誰かを選べるのかな・・・。

第百三十七話（後書き）

彩花にしたのはなんとなくです、夕奈とどっちにしようか迷ったんですけど・・・。

第百三十八話（前書き）

今回は真司視点で進む矢島母娘のお話です。

第三百三十八話

今日から2日間、俺はいずみの家に泊まる事になってる、親父は現在仕事の関係で他県に行ってるし俺に全く関心のない継母はお気に入りホストのマンションに入り浸って家にはほとんど帰ってこない、だから夜ウチに居るのは俺1人、それを知ったはずみが俺を誘ったのだ

『 そうだ真兄、今日と明日ウチに泊まりなよ、そんなんじやどーせロクなモノ食べてないんでしょ、ウチで美味しい料理お腹いっぱい食べさせてあげる 』

そんないずみの好意にまたしても甘える事にした、いずみの言う通りここ一週間の夕飯はコンビ二弁当とカップラーメンのセットと寂しいものだった、それに引き換え青山は奈津美さんや彩花達からお昼弁当を作ってもらってるってのに・・・やはり青山には俺が正義の裁きを下さねばならないな、あの好色一代男めっ！！

『 どう真司くん、真沙美ちゃん、私の自慢の冷麺のお味は、美味しいですよ。 』

『 うんっ、美鈴叔母さんの冷麺とってもおいしーよ、ボク美鈴叔母さんのお料理だーい好き 』

『 はい、こんな美味しい冷麺初めてです、いずみの作ったオムライスも最高ですし大満足ですよ、やっぱり家庭の手料理っていいですよねえ・・・。 』

俺達が食べてるのは美鈴さんが作った特製スープのかかった冷麺と

いずみの作ったオムライスだ、多少組み合わせがおかしい気がしないでもないがどっちの料理も最高レベルに美味しいので文句なんてある訳がない

『 ありがと真兄　ねえ真沙美ちゃん、お姉ちゃんの作ったオムライスも美味しいでしょ。』

『 うん、いずみお姉ちゃんのお料理もボク好きだよー、でもボクだっていつか真司兄ちゃんにお料理作っただげるんだからー、楽しみにしててね、真司兄ちゃん　ボクがんばるから。』

『 ははっ、ありがとね真沙美ちゃん、楽しみに待ってっからさ。』

真沙美ちゃんの頭を撫でながら言うところらしい満面の笑顔を見せてくれる、この真沙美ちゃんは美鈴さんの妹の娘さんで現在小学2年生、つまりいずみの従姉妹な訳だ、なんでも真沙美ちゃんの両親が仕事関係で1ヶ月くらいフランスに行くのでその間美鈴さんが預かる事になったらしい

『 ご馳走様でしたー、美鈴さん、今日こそは俺も片付けくらい・・・。』

『 毎回同じ事を言わせるんじゃないやありません、真司くんのする事じゃないから！　そんな事よりお風呂に入ってきたさい、ちょうど沸いた頃でしょうからね。』

これで片付けを断られる事147回目、本当は言っても無駄だという事に気づいちゃいるが一応言わなきゃ何だか申し訳ないしな

『 あっ、真司兄ちゃんお風呂に入るの？　ボクも一緒に入るー』

っ！
」

真沙美ちゃんがピョンピョン跳ねながら俺に抱きつく、8歳の女の子に抱きつかれてもあんまりなあ・・・

「なーに鼻の下伸ばしてるのよ！ 真兄のロリコン！ まだシスコンの青山さんのがマシだわね。」

「誰がロリコンだ！！ そりゃあアオは頭のとっぺんから足の先まで妹スキーのシスコンだが俺はいたってノーマルだっつの！」

いずみと不毛な言い争いをしてる最中、片付けを終えた美鈴さんも参戦してきた

「あらっ、だったら私と一緒にお風呂入りましょっよ、真司くんを隅々までまんべんなく洗ってあげるわ、その後はベッドで一緒に汗を・・・。」

四十路手前の未亡人美熟女とベッドで一緒に汗を・・・そんなの想像したら俺の遅い（？）息子が元気になってまっじゃないか！

「ママーっ！！ 真沙美ちゃんの前でバカな事言わないでっ！
！ まったく！ 何考えてんだか・・・。」

「ダメだよ美鈴叔母さん、ボクが先に真司兄ちゃんとお風呂に入るって約束したんだからっ！ ねー真司兄ちゃん」

「じゃあ真司くんに決めてもらいましょ、さあ真司くん、私かかずみか真沙美ちゃん、誰と一緒に風呂に入りたいのかしら？」

なんだこの超展開は？ 四十路手前の美熟女と16歳の瑞々しい女子高生とまだ8歳のボクっ娘小学生、こりや迷うな・・・しかし青山はいつもこんな選択してたのか？ あいつも結構大変だったんだなあ、これからはあんまりからかうのは止めとこう

『 よおしっ！ じゃあここは平等に4人全員で裸の付き合いをしよう・・・。』

『 真兄の・・・ドスケベーっ！！』

いずみのダイヤモンドダストが俺に炸裂した、やはり俺には青山みたいなハーレムは難しいな、薄れゆく意識の中、俺は青山とのハーレム属性の絶大な差を思い知らされた・・・。

第百三十八話（後書き）

真沙美をボクっ娘にしたのは特に意味はありません、あしからず、
真司視点は次話も続きます。

第百三十九話（前書き）

明日から三連休なので（？）いつもより長いです。

第百三十九話

今日はいずみと共に真沙美ちゃんを連れて近所のショッピングモールに来ていた、今日ここで人気アニメのキャラクターのショーがあるのでそのアニメのファンである真沙美ちゃんにおねだりされてきた訳だ

『ほらほらー、真司兄ちゃん、いずみお姉ちゃん、早く行かないとショーが始まっちゃうよ。』

相変わらず真沙美ちゃんは元気いっぱいだ、両親と離れて暮らして居る寂しさなんて微塵も感じさせない

『真沙美ちゃん、そんなに慌てなくても時間には間に合うから大丈夫よー、ふふふっ、ホント無邪気な子だねー、真兄』

『そーだな、あんな笑顔見せられちゃなあ・・・やっぱり子供の笑顔は癒されるよ、俺達もあんな子供が欲しいよな、いずみ。』

『なっ!!・・・真兄ったらあ、いきなり何言い出すのよー、真兄のバカバカバカーーっ!!』

俺の背中をポカポカ叩くいずみ、しかしその表情は終始ニヤニヤしっぱなしだった、分かりやすい娘だな。

アニメキャラクターのショーも終わり真沙美ちゃんも大満足だったみたいだ、どこかで昼飯を食べようかとその辺を3人でぶらぶらしてたら1人でボンヤリと立ち尽くしてる5、6歳くらいの少女を見かけた

『ねえキミ、1人なのかい？ お父さんやお母さんは一緒じゃないの。』

無視できずにその子に話しかける、すると泣きそうな声で返事が返ってきた

『トイレに行って帰ってきたらお母さんが居なくなってたの・・・』

『ねえねえ、携帯電話とか持っていないのかな？』

いずみが努めて明るい笑顔でその女の子に聞くがどうやら携帯を持っていない様だ、10分くらいその場で一緒に待ってたが親と思わしき人が来る気配はなかった、こうなったら迷子預かり所に連れて行くか。

迷子の預かり所に少女を連れて行き係員に説明する、少女の話じゃ俺達と会う前から30分以上1人で待ってた様だ、親は何をしてるんだろうか？ 30分以上もこんな小さな子を1人にするなんて感心できないな

『ああ、君たちはもういいよ、親御さんもそろそろ来るだろうしね。』

預かり所に来てから10分くらいして係員がそう言ってくる、少女とお話していた真沙美ちゃんに帰る旨を言おうとしたらドアが開き派手な格好の女の人が預かり所に入ってきた

『あつ！ 居た居た、もう、戻ってきたら居なくなってるんだか

ら焦ったじゃない、心配させるんじゃないわよこの子は！」

・・・なんだこの態度は、結構力チンときたが黙ったところ、いずみや真沙美ちゃんもいるしな

「あなたが母親ですか、今までどこに居たんですか？ この子もう一時間近く待ってたんですよ。」

係員が聞くと少女の母親から出た答えはおよそ母親とは思えないものだった

「それがさ、この子がトイレに行ってる間に偶然元カレと会っちゃってねー、そんで一緒に喫茶店に行ってついつい話し込んだやつた訳よー、1時間くらいしてついこの子の事忘れてたのに気づいて元の場所に戻ったらこの子居なくなってたじゃない、だから多分ここに居るかなーと思って来てみたら案の定だったって訳よ。」

なんで自分の子供を1時間も気づかないでいられるんだ、そう思ったら一言言わずにはいられなかった

「失礼ですがそれはあんまりんじゃないですか、もしこの子に万が一の事があったらどうするんですか？ 親ならもう少し責任を持った行動をするべきだと思いますけど。」

俺がそう言つとその母親はキッと俺を睨みつけイラついた口調で言い返してきた

「ハア、誰よアンタ、ワケ分かんない奴から偉そうに言われたくないんだけど！ つーかなんでここに居るのよ！」

『この人達は親切にこの子をここに連れてきてくれたんですよ、ちゃんとお礼を言って……。』

係員がどうにかとりなそうとするも少女の母親は更に不機嫌になった

『何？ 人の子を勝手にここに連れてきたの、アンタみたいなのが誘拐犯になつたりするのよね、ほら由樹、帰るわよ。』

誘拐犯呼ばわりかよ……。まあ気にしないのだがいずみが黙ってなかった

『何ですかその言いぐさは！！ 子供をほったらかしにする様な人に言われたくありません！ 今言つた事取り消して下さい！！』

いずみの目は本気だ、気持ち嬉しいが真沙美ちゃんや由樹ちゃんが脅えてしまつて、俺はいずみに落ち着くよう諭した

『もういいいずみ、ありがと、真沙美ちゃん、そろそろお昼ご飯食べに行こうか、好きな食べさせてやるからさ。』

渋々引き下がるいずみと真沙美ちゃんを連れ3人で預かり所から出ようとする、すると由樹ちゃんが俺達に

『お兄ちゃんお姉ちゃん……。ありがと。』

小さい声ながらもハッキリとそう言ってくれた、いい子だ……。由樹ちゃんはきつと他人に優しく出来る子に育つ、そう確信した俺は由樹ちゃんに笑顔を向け預かり所から出た。

ファミレスでお昼を取る事になり3人でそれぞれ好きなメニューを頼む、真沙美ちゃんは嬉しそうに

『ボクチーズハンバーグにするね 真司兄ちゃんは何頼むの！』

『

『俺はミートスパゲティに焼き肉丼だな・・・いずみは何にする？』

『私はサラダとポテトフライにするよ、でも真兄っていつぱい食べる割にはまったく太らないわよねー、羨ましいなあ。』

いずみはため息ついて俺を見る、あまり考えてないが俺ってそーゆー体質なんだろうな、まあそれなりに体も動かしてるし。

頼んだメニューを食べながら真沙美ちゃんは今日のキャラクターショーを楽しく話す、いずみも俺も楽しく聞いていた、こーゆーのって何かいいな、幸せいっぱいな家族って感じで

『ねえ真兄、いつか聞いてみたかったんだけどどうして刑事になりたいと思ったの？ 真兄ならスポーツ推薦の大学とか簡単に狙えると思うんだけど・・・。』

急にいずみがそんな事を聞いてくる、そーいやいずみに詳しく話した事はないな、真沙美ちゃんもいるけど話してやるか

『スポーツには本気で打ち込んでる訳じゃないからな、刑事になりたいと思ったのは昔親父と見た再放送ドラマの影響さ、香取刑事

みたいな刑事になるのが俺の目標なんだよ。』

『真司兄ちゃん刑事になるんだ、カッコいいねー、ボクも刑事になるー。』

真沙美ちゃんは無邪気に話す、女刑事も相当に大変だぞ、俺は話を続ける

『でももう一つ理由もあるんだ、ニュースとかで子供が虐待されたり罪無き子供が理不尽に巻き込まれたりする事件とか見てさ・・・どうして子供にそんな事ができるんだよって思うんだ、子供は未来を担う希望だつてのに・・・。』

『真兄・・・。』

『だからそんな子供達の安全と笑顔を守れる様な刑事になりたいなとも思うんだ、俺1人の力なんてちっぽけだけどそれでも・・・俺が頑張つて誰かを守れたり助ける事ができたら本望だなんて・・・まあそんなトコだ、可哀しいだろ。』

ずいぶん照れくさい話だがすべて正直な気持ちだ、いずみも優しい笑顔で微笑み俺を応援してくれる

『あははっ、やっぱり真兄はそうじゃなきゃ　頑張つてね真兄、私もそんな真兄をずーっと傍で支えてあげるからね。』

いずみの笑顔を見てたら急に恥ずかしさがこみ上げてきた、俺はつい焦りながら

『あっ・・・あくまで俺の目標は香取刑事だからな、毎年5月1

4日には一分間の黙とうも忘れてないし！ あとアオ達には言うなよ！ こんなのアオ達に知られた日には・・・。」

『知られたらなんだって、トーモく〜ん。』

不意に聞き慣れた男の声が聞こえてくる、まさか・・・振り返ると青山と何故か奈津美さんもいた

『格好いいじゃねーかトモ、俺も応援するよ。』

『私も応援しますわ、真司くんならきつとその香取刑事って人みたいな・・・いや、その上を目指せると思います、頑張って下さいね、うふふつ。』

今のすべて聞かれてたのか・・・いやっ、それよりも

『なんでアオがここにいるんだ、それに奈津美さんまで・・・里奈ちゃんは何知ってるのか？』

『今日は奈津美さんが晩飯を作ってくれるんだよ、当然里奈も知ってるし、晩飯用の食材を買いに来たのさ、それでここで昼飯を食べてたらお前の声が聞こえてきたからちょっと聞かせてもらったのさ、ところでその子は？』

青山が真沙美ちゃんを見てると真沙美ちゃんは青山の金髪を気に入ったのか笑いながら俺に話す

『真司兄ちゃん、誰この黄色頭のお兄ちゃん？ 真司兄ちゃんの友達？ ちょっとカッコいいね。』

『 あらまあ、可愛らしいのに油断できませんわね、私は高野奈津美です、あなたのお名前はなんていうのですか。』

奈津美さんが丁寧にご自己紹介すると何を思ったか真沙美ちゃんはとんでもない自己紹介をしだした

『 ボクは佐久間真沙美、8歳ですー、将来は刑事になって真司兄ちゃんのお嫁さんになるんだー 』

『 なっ！？ 真沙美ちゃん！ いきなり何言い出すのっ！ そんなの駄目なんだからねっ！！ 』

真沙美ちゃんの仰天発言にいずみはテンパってる、女子高生が小学生相手にテンパるなよ・・・

『 そうなのかー、真沙美ちゃんは真司兄ちゃんのお嫁さんになりたいのかー、いやー、羨ましいじゃないかトモくん 頑張って幸せにしてやれよー。 』

そう言う青山の顔は笑い出す寸前だった、よりによって青山にこんな弱みを握られるとは・・・この友成真司一生の不覚だ！

『 ちよつとっ！！ 真兄からも何とか言ってよ！ 本当に真沙美ちゃんと結婚する気なのっ！！ 』

『 いやっ、そんなのあり得ないし・・・。 』

『 えーっっ、ボク絶対に真司兄ちゃんと結婚するんだもん、あと十年したら結婚しよーね 』

なんか気まずい・・・背に腹は代えられず青山達に助けを求めようとしたら

『じゃあなトモ、また学校でなー、お前が生きてたらな・・・。』

『それじゃあ御機嫌よう、真司くん、いずみさん、真沙美さん、デートの邪魔をしてすみませんでしたわ、うふふっ』

2人は足早に去っていた、逃げやがったな、あの真性シスコン大王が!!

『真兄っ！ まだ話は終わってないんだからね!!』

『真司兄ちゃん、ボク今度はお洋服見に行きたいな 真司兄ちゃんとお揃いの服買うんだから!。』

その後は2人の機嫌を取りながら買い物に付き合わされるはゲーセンで人形取らされたりプリクラを撮られるはとムチャクチャ疲れた、小学生といえどなかなか侮れないな、つーか真沙美ちゃんも本気じゃないよな？ 3人で仲良く帰りながらも俺は青山から張られたであろうロリコンのレットルをどうやって晴らそうかと真剣(?)に考えていた・・・。

第百三十九話（後書き）

次話から青山兄妹の実母のお話になります、少し暗い話になるかと・・・。

第四百四十話（前書き）

今話から青山兄妹の母親のお話です、最後の方にしか出ませんが・・・。

第四百四十話

本格的に秋の気配漂う10月某日、俺と里奈は奈津美さんの家に呼ばれ夕食をご馳走させてもらう事になってた、最近の奈津美さんは夕奈ちゃんみたいによくウチに来ては里奈と共に夕食を作ってくれる事が多くなってた、しばしば夕奈ちゃんも加わって3人で作る事もある、彩花はというと受験勉強の影響でごくたまにしか来れずこの話をしたらかなり悔しがってた

『 ねえお兄ちゃん、奈津美さん今日は何を作ってくれるのかな？ 』

『 電話じゃ確かしゃぶしゃぶとか言ってたな、しかし奈津美さんもお父さんに会わせたいとか、なんか結婚の挨拶に行くみたいで緊張してきたよ……。 』

実は奈津美さんの家に行くのはこれが初めてじゃない、以前に何度か友成達と遊びに行った事があるが父親に会うのが今回が初めてだ

『 お兄ちゃんったらあ、いきなり話進展させすぎだよ！ けどもしそんな話だったら・・・里奈、全力で妨害しちゃうからね 』

『 お願いだから奈津美さんの両親の前で変な事口走るなよっ！ もし何か言おうものなら明日から昼の弁当は夕奈ちゃんに作ってもらうからな、それが嫌なら大人しくとくんだな。 』

こうして弁当の事を持ち出せば里奈は俺に従わざるをえなくなる、あの手作り弁当対決以来、里奈の愛情表現は更にエスカレートしてきて一週間に一回だけ一緒にベッドで寝る時とか何の冗談か下着が

透けて見えるネグリジェ姿に着替え俺に抱きついたり耳元では

『愛してるよお・・・お兄ちゃん・・・。』

『好きなコトしていいんだよ・・・里奈の体は・・・ふふっ、お兄ちゃんだけのモノだからねっ』

悩ましくこんな台詞を言うもんだからこっちは恥ずかしくてしゃあない、まあこんな里奈でも無理やり既成事実を作ろうとしてこないでそれだけが救いだ

『でも普通に考えて奈津美さんのお父さんがそんな話するとは思えないもんね、よし、今日はいっぱい食べるぞー、ダイエットがなんだー、里奈は食べたい時に食べるのだーっ。』

右手を高々と挙げてそう宣言する里奈はとても高校生には見えないよな・・・良く言えば天真爛漫、悪く言えばアホの子ってトコか、胸もあまり成長の気配がないし実は里奈って同世代の男子にはあまりモテないのかもな、ロリ好きには需要がありそうだが・・・。

『お待ちいたしておりましたわ、貴志くん、里奈さん、さあ、どうぞ上がって下さいな、ちょうど準備もできた所ですよ。』

奈津美さんの家に着くと姉の香澄さん、そして御両親も揃って既にしゃぶしゃぶの用意も出来ていた

『初めまして、君が青山君か、奈津美からいつも話は聞いてるよ、奈津美が世話になってる様だね。』

柔らかな笑顔でそう話す奈津美さんのお父さんは奈津美さん同様に

を見た目で判断する様な事はなかった、この親にしてこの娘ありつてか、お母さんも

『 少、中学の時は友達もあまりいなくて物静かな娘だった奈津美が今じゃ毎日学校での事を楽しく話すんですよ、青山君や友成君、四森さん達のお陰なんですね、本当に感謝いたします。』

そう言つて深く頭を下げられては俺も慌てる

『 いやっ！ お母さん！ 頭を上げて下さいよ、自分の方が奈津美さんには本当に良くしてもらってるんですから、お礼を言つのは自分の方です。』

この様子を見てた香澄さんが笑いながら俺達に一言

『 もうっ、貴志くんもお母さんもいいから早く食べましょ、お肉が無くなっちゃっても知らないよ？』

ふとテーブルを見たら里奈がパクパク食べてた、いくら遠慮しないでいいからって言われてもそりや食いすぎてモンだろ・・・。

『 へえ、青山君って三国志とか好きなんだ、奇遇だね、実は僕もなんだよ、誰が好きなんだい？』

『 軍師系ばかりですけど田豊とか徐庶とか法正なんか好きですね。』

共通の好みを知りお父さんとの会話も盛り上がる、その中に何故か

奈津美さんや里奈も参入してきた

『私は曹叅そうえいや陸抗りくこう、夏侯霸かこうはとかに興味がありますわね。』

『里奈は陳宮ちんきゆうや郭嘉かくか、呂蒙りよもつあたりがタイプだなあ、特に郭嘉がお気軽に入りなんです。』

奈津美さんはお父さんの影響だろうが里奈は俺の持ってた三国志小説を俺の部屋で勝手に読んでたからだ、その際に健全な男子高校生ならほぼ100%持つてるであろう類の本まで見つけ

『お兄ちゃんにはこんな本は必要ありません。』

その里奈の一声でご丁寧にごミとして捨てられたというのは笑い話だ

『皆さん、今日は本当にご馳走様でした。』

『私、あんな美味しいお肉食べたの初めてです、ありがとうございました。』

帰りに際して俺と里奈は奈津美さんの家族に頭を下げる、するとお父さんは

『青山君、里奈さん、そんな堅苦しいのはいいから、奈津美の事、これからもよろしく頼むよ、よかったらまたウチにも来なさい、いつでも歓迎するよ。』

ありがたい言葉をかけてくれた、お母さんも香澄さんも同じ気持ち

なのはその笑顔を見れば分かる、本当に温かい家族だ、俺達の両親とはえらい違いだな

『はい、それじゃあ失礼します。』

俺と里奈は奈津美さんの家を後にした、帰り道に他愛のない話をしてウチに差しかかる頃、ウチの前に1人の女性が居た

『こんな時間に誰だろ・・・新聞の集金かな？』

とりあえず声をかけようと近づいたらその女性が俺達に気づいた、振り返ったその女性は俺達を見るとつぶやく様に言った

『あんたつてもしかして・・・貴志なの？・・・それじゃああんたが・・・里奈なんだ・・・』

『あゝ、いったいどちら様でしょうか・・・』

『分からないのしょうがないか、10年以上も経ってるしね・・・私は・・・あんた達のお母さんだよ・・・2人共大きくなったね・・・』

はい！？何を今更出てきてんだ？俺には意味が分からなかった・・・。

第四百四十話（後書き）

七十六話の後書きにも書きましたが貴志や真司の好みは自分の反映です、あまり気にしないで下さい。

第四百一十一話（前書き）

話がほとんど進んでません、この作品ではいつもの事です。何卒ご容赦を・・・。

第四百一十一話

家の前で10数年ぶりの再会を果たした俺と里奈の母親である静香^{しずか}しかし再会しても嬉しいといった感動的な感情はない、むしろ”今更ノコノコ何しに現れた？”という感情のが強かった、恐らく里奈も同じ気持ちに違いない

『 貴志・・・アンタ、何なのよその頭は・・・いくら母親がいなくなつたからつて不良になつてしまふなんて・・・。』

母さんは何やら勘違いしてるみたいだが別にどうでもいい、家の前で話をするのもなんだつたので不本意ながらもウチに上がってもらつたのだがその際に里奈は

『 何の用事で来たか知りませんが用事が終わつたら早く帰つて下さいね、私達は今更あなたと話す事なんてないんですけどここまで来た以上仕方ないから話だけは聞きます。』

母親全面否定なセリフをにこやかな笑顔で言うからなんか怖い、気持ちには分らないでもないけど・・・

『 里奈・・・私も・・・あなた達からどれだけ憎まれてるか・・・あんた達から許してもらえない事ぐらい分かつてるわ、でもね、どんなに時が過ぎてもあんた達の事を忘れた事はひと時だつて・・・。』

『 私達の事を忘れた事はないつて言いたいんですか、あははっ、笑わせないで下さいよ、私達を捨てて男と出ていったあなたが何を言つても嘘くさいんですけど、懺悔ならもういいですから早く帰っ

てくれませんか？ 明日はお兄ちゃんと2人で家の掃除をする予定ですからあなたが居たら邪魔になるんです。』

里奈って意外と毒舌なんだな・・・俺も一言添える

『 母さん、何しに来たのか知らないけど今更来られても俺達には迷惑なだけなんだよ、頼むから帰ってくれないか、それが俺達の為、そして母さんの為でもあると思うから・・・。』

俺からそう言われると母さんは酷く悲しそうな顔をする、その姿に俺の良心がチクリと痛むがこれも因果応報だろう、母さんが出ていった後、俺と里奈が親父から受けた仕打ちを思えばこのくらい・・・

『 迷惑・・・か・・・そうね・・・今更私が出てきてもあんた達には迷惑なだけよね・・・私家が家を出てからのあんた達3人の苦勞を思えばそう思われて当然ですもの・・・。』

『 3人？ 何を言ってるんですか、あなたが出ていってから父はお兄ちゃんや私に無意味に暴力を振るったり、若い女友達とどこか遊びに行つて二週間くらい家に帰つてこなかったり・・・それでお兄ちゃんが・・・グスン・・・どんなに私を励ましながら晩御飯の準備をしてくれたか・・・ヒック・・・分かりますかあなたにっ！
』

言いながら里奈は泣いていた、そういやそんな事もあったな、俺が小学4年の頃だったか？ まだ幼かった里奈に明るい声で

『 待つてる里奈、俺がビックリするほど美味しいご飯作つてやるからな。』

と大口を叩き不慣れな手つきでお米といだりけなしの小遣いでお味噌とか卵を買ったり・・・まあ、そんな経験のお陰で簡単な料理なら出来る様になったし結果オーライだな

『暴力・・・あんた達、あの人から暴力受けてたの！　なんて事を・・・』

母さんは驚いてた、俺達が親父から暴力を受けてた事がそんなにシヨックだったのか・・・ていうかなんで母さんがこの家の場所を知ってたんだ？　祖父母が教えたのかな、でも祖父母も息子を裏切った母さんを憎んでたはずだけど・・・

『そうです！　父はあなたが自分を裏切って浮気相手と出ていったのがシヨックだったかどうか知りませんが・・・まるで憂さ晴らしみたいに私達を殴ったり酷い事言ったり・・・でも何も怖くなかった、お兄ちゃんがいつも私を守ってくれたから！　私にはお兄ちゃんさえ居てくれたら・・・存在が邪魔なだけの両親なんていりません！』

そう断言する興奮気味の里奈を落ち着かせ俺はさっき感じた疑問を母さんに話す

『なあ母さん、この家の場所とか誰から聞いたんだよ、そして・・・ここに來た目的は一体何なの？』

俺にそう言われると母さんはバツの悪そうな表情になった、目的とか何でもいいから里奈や俺の生活を壊す様な事だけはしてもらいたくないのだ・・・

第四百一十一話（後書き）

次話で静香が貴志たちの所に来た理由に触れます、更新は三日後になると思います、仕事以外にも何かと忙しいので。

第四百二十二話（前書き）

今回は短めです。

第四百十二話

再会したばかりの昨日の夜から俺達は母・静香と暮らす事になった、もちろんずっとではないのだが頑なに拒否する里奈を説得するのは苦労した

『 ホントお兄ちゃんってばお人好しなんだから・・・時には突き放す気丈さも持った方がいいよ！ 』

『 まあそう言うなよ、あんな話聞かされて帰れとか言えないだろ、あんな人でも俺達を産んだ母親なんだからな・・・。 』

あんな話とは母さんがここに来た理由だ、母さんを家から連れ出した浮気相手の男性が最近新しく始めた事業に大失敗して多額の借金を作ったらしい、それだけでなく母さんを置き去りにして子供（俺と里奈の種違いの弟）だけ連れて夜逃げしたのだ、1人ぼっちになった母さんは借金取りに押しかけられる日々に完全に精神をやられてどうにもこうにもなくなり祖父母（俺達の亡き父親の両親）に連絡を取り場所を聞いてここに来たという訳だ、ちなみに母さんの両親は既に他界している、昨日母さんと話した後、どういう事かと祖父に電話してみたら

『 貴志、お前や里奈には悪いと思うたが・・・ワシらにあの女と生活するなんてどうしても無理なんじゃ！ すまんがお前らで何とかしてやってほしい、もちろん生活費はその分多めに送るからそれで堪忍してくれんじやろうか・・・。 』

祖父母は母さんを憎悪していた、そりゃあ息子である俺達の父や孫の俺達を捨てて浮気相手と家を出た母さんなんだから仕方ないと言

えばそれまでなんだが

『分かりました・・・ほとぼりが覚めるまで母さんはこの家に住まわせます、お爺さん達に迷惑はかけられませんし母さんの事は俺に任せて下さい。』

こんな訳で母さんにはほとぼりが覚めるまでここに居たらいいと伝えた、それを聞いた母さんは涙を流しながら俺に頭を下げる

『ごめんなさいね・・・貴志にも・・・里奈にも・・・迷惑ばかりかけて・・・うつっ・・・私・・・自分が情けなくて・・・。』

『母さん、もういいから、とりあえず今日はもう休みなよ、疲れてるみたいだしね、明日からの事は明日考えたらいいからさ。』

そうして母さんを客室に寝かせてから俺は母さんと一緒に暮らすのを認めるよう里奈を説得した、最初は相当嫌がってた里奈だが俺の懸命な説得にやがて根負けして母さんと暮らすのを渋々承諾してくれた。

朝の食卓には3人分の朝食が並んでる、里奈の作った朝食だ、母さんが作るうかと言っても里奈は

『結構です、お兄ちゃんの食事を作るのは私の役目ですから余計な事はしないで下さい。』

と言ってきつぱりと断る、母さんは何か言いたそうだったが唇を噛み締めて黙ってた、こりゃあ後々厄介な事にならなきゃいいが

『お兄ちゃん、今日の掃除はいらない物の整理もするからね、こ

飯食べて少ししたら始めよつか 』

『 おうつ、午前中には終わらせたいしな、その後は買い物も行かなきゃいけないし、忙しいぞ今日は。 』

俺達の話をもさんはただ黙って聞いてる、手伝うと申し出ても間違はなく里奈が拒否するだろうから何も言えないのだろうな

『 なあ里奈、母さんにも何かさせたらどうか？ トイレとか風呂の掃除とか出来るだろ、体を動かしてた方が不安も忘れられるだろうしな。 』

『 しょうがないなあ・・・じゃあトイレ掃除でもやってもらおうかな。 』

俺の出した提案を里奈は拍子抜けなくらいあっさり聞き入れた、てつきり昨日みたいに駄々こねると思ってたが・・・

『 2人でするより3人でやった方が早く終わるからね、掃除が終わったら里奈と2人で買い物行こうね、お兄ちゃん 』

里奈は可愛く俺にウィンクする、またデートのつもりかよ・・・母さんも冷やかな目で俺を見てるし、これからの3人での生活はどうなる事やら・・・。

第四百四十二話（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません。

第四百十三話

母さんと暮らすようになって4日が過ぎた、学校のある日は夕奈ちゃんや奈津美さん、彩花が朝からウチに来るのだがそうになると母さんと顔を合わせる事になる、そこで里奈の提案で母さんの素性は隠して近くに住んでる伯母さんが俺達の面倒を見る為に暫くウチに住み込む事になったという設定にしたのだ、初めて母さんに会った奈津美さんは

『初めてお目にかかります、私、貴志くんのクラスメートで高野奈津美と申します、貴志くんだけでなく里奈さんともいつも仲良くさせて頂いてます。』

深く頭を下げ礼儀正しく挨拶する、彩花や夕奈ちゃんもあくまで母さんではなく伯母さんだと思って挨拶してる、正直里奈と母さんはあまり似てないから母親と疑われる事もなかった。

何故母さんだと明かさないかというところかなり以前に奈津美さん達に両親について聞かれたので包み隠さずありのまま話した事があったがその際に夕奈ちゃんが

『お母さんには捨てられ・・・お父さんには暴力を受けて・・・そんなの・・・お兄さんや里奈が・・・可哀相過ぎます・・・』

とても悲しそうな顔をしてた、奈津美さんも彩花も俺達を励ましてくれて彼女達の心遣いに深く感謝したのを覚えてる

『父親はもう死んでるから何も言えないけどもしその母親に会ったら一言いってやりたいわ！この大バカヤローってね。』

そう言う彩花はもし母さんに会ったら本当に言いかねないし奈津美さんだって珍しく興奮した雰囲気で

『妻に裏切られたお父さんの辛い気持ちも分からないでもありませんが・・・それでも自分の子供にあたるのは絶対に間違ってます！でも一番酷いのは夫がいるのに他の男性と付き合ってただけでなく幼い貴志ちゃんと里奈さんを置き去りにして家を出る最低な母親ですわ！！』

こんなに感情をむき出しにする奈津美さんは初めてだ、当事者の俺や里奈の方がまるで他人事みたいな心境なのに・・・

『貴志くん、里奈さん、どうかそんな母親の事なんて忘れて下さい！そしてもし辛い事があつたら・・・いつでも私に甘えて下さいね、貴志くんが元気になるのでしたら私はどんな事でも致しますわ。』

黒髪ストレートロングの清楚なモデル級美少女からこんな事を言われて嬉しくない高校生男子がこの世に存在するか？否、存在する訳がない、俺は親には恵まれなかったがそんな自分を不幸だと思った事は一度もないつもりだ、だって俺には愛らしい妹がいてくれたし奈津美さんや友成達にも出会えたからな。

5人で家を出る俺達を母さんは笑顔で見送ってくれる、それを見てた夕奈ちゃん俺に話しかけてきた

『優しい叔母さんですね・・・いい人みたいでよかったです・・・でもどうして急に・・・お兄さん達の家に住み込むなんて決めたの

ですか？・・・。」

内心ギクリとした、まさか夕奈ちゃんは俺達のウソに気づいてるのか？ そんな事はないと思うが時々夕奈ちゃんは妙に鋭いトコがあるからな・・・

「なんか急に里奈達が心配になったんだって、今までもずっと2人でやってきたのにワケ分らないよ！ お兄ちゃんと里奈の愛の巢に今更親戚なんて必要ないんだからっ！」

里奈の子供じみた不満げな態度に奈津美さんや彩花は微笑んでるが夕奈ちゃんは何やら神妙な面もちをしてた、しかし夕奈ちゃんはその事について言及してくる事はなく5人で仲良く談笑しながら学校へと向かった、相変わらず男子生徒の妬みの視線を一身に浴びながら・・・。

学校に着いたら先に来てた友成と他愛のない会話に花を咲かせた、クラスメートで気軽に話せる男子とか俺には友成しかないのだが一緒に居て飽きない奴だし子供に対する優しさは本物だ、友成ならきっと将来は立派な刑事になると俺は思ってる

「なあトモ、真沙美ちゃんは元気にしてるか？」

「まあな・・・新婚旅行はイタリアがいいとか子供は3人欲しいとか笑顔で言ってくるし・・・俺と結婚するってクラスの皆に話してるらしいし・・・お陰でいずみや美鈴さんにはタツプリお灸を据えられるし・・・どおしてこうなった？俺が何をしたってんだ！教えてくれ、アオ！！」

知らんがな、俺じゃなくていつもアホみたいな議論を遅くまでして

る父親や母親に聞いてみるよ・・・ここでふと思った、考えてみたら俺は友成の母親について何も知らない、父親はよく話を聞いた事があつたが友成の口から母親の話が出た事は今まで一度もない、友成の本当の母親は友成が10歳くらいの時に病死したとは聞いたけど・・・少し気になった。

第四百二十三話（後書き）

次話は真司視点です。

第四百四十四話（前書き）

真司視点です、途中から回想になります。

第四百四十四話

朝の登校直後の教室にて俺のクラスでの唯一の男友達である青山と雑談に興じている、青山はやけにニヤニヤと真沙美ちゃんの事を聞いてくるのでこちらも里奈ちゃんの事を聞き返す

『そーゆーアオもそろそろ里奈ちゃんと一線を越えたりしたか？俺は結構お前らの禁断の兄妹愛を期待してるんだがな。』

『アホゆーな、どこの世界に実の妹と一線越える兄がいるんだ、年頃の兄妹が皆お前の考えてる様なエロ小説みたいな兄妹だと思うなよ、小説と現実の違いだからな。』

『甘いアオ、事実は小説よりも奇なりって言葉もあるんだぞ、お前と里奈ちゃんならきつとそこの官能小説顔負けな禁断の兄妹愛をだな……。』

俺の言葉は最後まで続かなかった、青山の北？千手壊拳を喰らったからだ

『あわびゅ！』

俺の断末魔の叫びをよそに青山は奈津美さんや彩花と楽しそうに話していた、あのシスコリア充野郎、いつの日か必ず俺のギャラクシアンエク？プロジェクトで宇宙のチリにしてやる！

それから昼休み、俺はいつも通りに青山と奈津美さんと彩花の4人で昼飯を食べる、考えてみたらこれが俺と青山がクラスの男子達か

ら疎まれ孤立してる原因だろう、学校でトップクラスの美女2人と机を並べて昼飯を食べてるのだから、奈津美さんも彩花もクラスで俺と青山以外の人とは必要以上に話をしないし、まあ残り半年で卒業だからどうでもいいけど

『 ねえ貴志、その弁当はあの叔母さんが作ってるの？ 』

『 いや、里奈が作ってるけど、それが何か？ 』

叔母さん？ 青山にそんな人いたっけ？ 確か青山の父親はもう亡くなってるし母親は随分前に男と家を出たとか聞いたけど・・・

『 そうなんだ、でもそれなら叔母さんがいる意味があんまりないんじゃない？ 何が心配でわざわざ来たんだろ・・・。 』

彩花の話す内容が何かえらく気になったので青山に事情を聞いてみた

『 なあアオ、お前って叔母さんとかいたのか？ 』

俺に聞かれ淡々と語る青山によるとつい最近、近所に住んでる叔母さんが2人だけで暮らしてる青山達が心配だからと青山の家と一緒に住んでるらしい、しかしずっとではなく1ヶ月くらいの期限付きとか

『 でも甥っ子の事を心配してくれてるのですからいい叔母さんだと思います、幼い子供2人を捨てて浮気相手を選ぶ様な母親とは雲泥の差ですわ！ 』

奈津美さんにしては珍しく感情的だな、そんなに青山の母親の行為が許せないのか・・・そういや青山も母親に恵まれない家庭で育っ

たんだよな、そんな事を考えてると何故か昔の事を思い出していた、懐かしい母さんの事を・・・

『真司、ご飯の用意出来たわよ、早く来なさい。』

母の春江^{はるえ}が俺を呼ぶ、当時小学四年生の俺は夕方の再放送ドラマを熱心に見ていた、俺が唯一好きだと言えるドラマで昔、テレビ朝？で水曜午後9時から放送していた鉄道警察隊が活躍する刑事ドラマだ

『真司は本当にそのドラマが好きなのね、いっぱい列車が出るかなの？』

『ううん、列車も好きだけどこの香取刑事って人が格好いいからだよ。』

親父からこのドラマを録画していたビデオを見せてもらって以来、このドラマの虜になった、俺はコメディドラマや恋愛ドラマよりもこーゆー人情系ドラマが好きनाव変わった少年だったのだ、だけど変わってようが誰になんと云われようが好きなものは好きなんだからしょうがない

『そう・・・真司も将来は警察官になるの？』

『ううん、出来たら刑事になりたいけどお父さんの会社もあるからなあ・・・多分俺が跡を継がなきゃいけないだろうし・・・。』

俺が若干あきらめの入った口調でそう言くと母さんは少し厳しい表情になり俺に話をする

『 真司、あなたの未来はあなたが決めるの！ お父さんの会社を継がなきゃいけないとか誰も決めてないわよ！ あなたがこれから中学、高校と進んでいろんな経験をしてその中で考えなさい、それでも迷うような事や分からなくなったりしたら私やお父さんに相談なさい、私は母親としてあなたに悔いなき人生を生きてもらいたいのだ。』

そう言って微笑む母さんを見た時、なんだかスツキリした、俺の未来は俺が決める、母さんの言葉は俺のモヤモヤを綺麗さっぱり吹き飛ばしてくれた、こんな優しい母さんがいるのならきっと俺の将来に不安はないだろう、この時の俺はのんきにそう思ってた・・・。

第四百四十四話（後書き）

青山兄妹の母親の話はまた次々回からという事で・・・。

第四百四十五話（前書き）

真司の回想の後半です。

第四百十五話

会社を経営してる父親と心優しい母親、健気に俺を慕う幼馴染のいずみ達に囲まれ幸せな日々を送っていた・・・が、その日々は突然終わりを告げた、ある日学校から帰ってくると部屋で母さんが倒れていたのだ

「かつ、母さんっ！！！」

急いで救急車を呼び親父に電話をして病院に向かう、慌てて駆けつけた親父が医者から聞いた母さんの病名は急性白血病だった

「かなり進行してました・・・貧血や発熱などの症状があったと思われませんが・・・。」

というのは医者の話だ、そういや母さん、熱を出す事が多かった様な気がする・・・当然母さんは入院する事になり親父は会社と病院の往復であり家に帰らなくなった、俺は矢島家に世話になる事が多くなりよく美鈴さんやいずみから励ましてもらった

「真司くん、春江さんは大丈夫だから！ 真司くんがいい子にしてたらきつと良くなるからね。」

「真司兄ちゃん・・・おばさんは病気になるて負けないよ！ 私もおばさんの病気が早く治るようにお願いするからね。」

そんな矢島母娘の優しさに応える為、そして母さんが良くなる事を願い俺は出来る事を必死に頑張った、できる限り母さんの見舞いにも行ったし矢島家で世話になってる時も家事等の手伝いを率先して

行った

『真司くん、そんな風呂場の掃除とかしなくてもいいのよ、私がするからゆつくりなさい。』

『世話になってるんですからこのくらいやって当たり前です、何もしなかったら母さんが元気になった時に怒られますから。』

風呂場や部屋の掃除、食器洗い、ゴミだし等、小学四年生の坊主が出来うる事は一通りやった、そうする事で母さんが良くなると信じていたのだ、しかしそんな俺の思いとは裏腹に母さんが倒れてから三ヶ月後、病院から母さんの容態が悪化したとの連絡が入った

『母さん……。』

駆けこんだ病室には母さんと俺だけだった、親父はまだ連絡がつかないらしい

『真司……。ごめんね……。』

病室に来た俺の顔を見るなり母さんは謝る、どうして謝るのだろうか……

『母さん！ 何謝るんだよっ！？ 良くなつてまた俺に唐揚げ食べさせてくれるんでしょっ！！』

『ごめんね……。私……。もう真司に……。唐揚げ……。食べさせてあげられない……。』

母さんの声は辛そうだった、喋るのもやっとなのか・・・それでも俺の目を見据えて話し続ける

『真司・・・私・・・少し早いけど・・・お空の上に行くね・・・』

『何言っただよっ!! そんなの嫌だよ!! 母さんがいなくなるなんて・・・俺・・・どうしたらいいんだよ・・・』

言いながら涙が出てきた、こんな現実を受け入れられなかった

『なんで母さんが死ぬんだよ・・・うぐっ・・・こんなのないよお・・・』

『真司・・・人はね・・・生まれたら・・・いつか必ず死ぬのよ・・・』

『なんで人って必ず死ぬんだよ・・・うつく・・・嫌だよ!俺は死にたくないよお・・・母さんも死んじゃ嫌だよ・・・』

自分が情けなかった、母さんがこんななのに俺は自分が死にたくない駄々をこねてるとか・・・

『泣かないで真司・・・生まれた命にはね・・・必ず限られた寿命があるの・・・でも・・・だから・・・だからみんな・・・頑張っって一生懸命生きてるの・・・』

母さんのシンプルな言葉は俺の胸に響いた、一生懸命生きてる・・・限りある命だから・・・みんな頑張っって生きてる・・・

『私は・・・頑張って生きたわ・・・だから真司・・・あなたも・・・頑張って生きて・・・約束だよ・・・母さんとの・・・約束だからね・・・』

母さんが俺に手を差し出してくる、俺はその手を握りしめて宣言した

『母さん・・・俺・・・頑張って生きるから・・・母さんみたい・・・約束するから・・・』

そう言つと母さんはニツコリと微笑んだ、そしてその数分後、母さんは息を引き取つた・・・。

親父は母さんの死に憔悴しきつたが俺は母さんと約束した、頑張つて生きると、いつまでも泣いていては母さんが安心して眠れない、俺は悲しみをグツとこらえ俺や親父を心配してくれてる矢島母娘にも努めて普通に振る舞つた。

それから約二年、親父と2人で生きてきたが親父は自分トコの会社の受付嬢と再婚する事になった

『真司です、これからよろしくお願いします、義母さん。』

ウチに來た新しい義母さんに挨拶する、小学六年生の一人息子を持つオッサンの嫁になってくれるのだ、俺はこの人に素直に感謝した、義母さんもよろしくねと優しく挨拶を返してくれたので仲良くやれると思つてた、だが1ヶ月もたつと義母さんの態度が変わつた

『真司ー、私今日友達と遊びに行つて帰らないからー、ご飯は適

当に作りなさいよねー。』

『 ちょっと真司！ そんなトコにいちゃ邪魔なのよ、用がないならどっか行つてよー、全く……。』

『 別にアンタがどうなろうと全く興味ないけど私に迷惑かけるよ
うな事だけはしないでよ、アンタは高校を卒業したらとっとこの
家から出て行つてくれたらいいんだから。』

こんな事を言われては怒りを通り越して笑えてくる、この継母は親
父の資産目当てで結婚したのだ、親父もうすうす気付いてたらしい、
じゃあなんで離婚しないのかは継母が離婚を頑なに拒否するとか、
そんなに資産が欲しいのか・・・まあ継母に言われなくても俺は高
校を卒業したら家を出るつもりだったから関係ない、ホスト遊びで
も何でも好きにやってくれ、俺は一生懸命頑張つて生きるんだ、母
さんと約束したんだからな・・・

『 おーい、トモー、どしたよ、もしもーし。』

青山の呼ぶ声が聞こえる、奈津美さんや彩花も俺を見つめていた

『 あっ・・・いや・・・ちよつとな……。』

言葉を濁すと奈津美さんが心配そうな声をかけてきた

『 何か悩み事でもあるのですか？ 何かあるなら遠慮なさらず仰

つて下さい、真司くんは私達の大切な友達なのですから。』

『 そうだよっ、そんな真司、私はあんまり見たくないな、一人で悩むよりみんなで悩もうよ。』

奈津美さんだけでなく彩花も嬉しい事を言ってくれる、そんなじゃ俺らしくいくか

『 悩みとかじゃないよ、彩花の今日の下着は何色かなぐって考えてたんだ。』

てつきり殴られるかと思ったが彩花の反応は予想外だった、彩花は微笑み

『 黒よ、それがどうかしたの ふふふっ。』

『 ングっ！！！！』

青山がむせた、下着が黒だからって・・・これだから童貞って奴は・

・

『 ありやりや、大丈夫貴志？ そうだっ！ よかったら見せたげよっか、貴志だったらいつでも見せたげるよっ 』

『 彩花っ！！ そこは是非とも俺に見せてくれ！！ 』

俺が必死に懇願すると彩花はふうつとため息をつき

『 真司にはいずみがいるでしょう、見たいならいずみに頼みなよ。』

ムチャ言うな、いずみにそんな事頼んだらオーロラエク？キューシ
ヨンで凍え死んでしまっ、そんな中、奈津美さんは困惑した顔で彩
花をたしなめる

『もうっ、彩花さんったら・・・はしたないですわ！ 食事中に
そんな事・・・ふしだらです！！』

『そっ・・・そうだぞ彩花、女の子がそんな・・・下着の色とか
・・・あんまり言うなよ・・・』

青山に至っては目が泳いでる、なに考えてるのか簡単に分かるな

『アオ、正直になれよ・・・彩花の黒下着が見たいんだろ、大丈
夫、里奈ちゃんや夕奈ちゃんにはしっかり報告しとくからな。』

『なっ！ おい待てトモ！！ 里奈達は関係ないだろうが、それ
に俺はそんなの別に・・・』

『何がそんなのかな、貴志が見たいって言うだけですぐに見れ
るのに、明日は何色がいい？』

『彩花さん！！ それ以上の誘惑は私が許しませんわ！ 私だっ
て黒下着くらい・・・』

こんな青山達を見て思った、学校に来れば愉快的仲間達がいる、い
ずみや里奈ちゃん、蒼太達だっている、俺は1人じゃないんだ、母
さん・・・俺、頑張って生きてるから、そしていつかそっちに行っ
たら、笑顔で迎えてほしいな・・・。

第四百四十六話（前書き）

奈津美視点です。

第四百十六話

昼下がりの授業時間、私は愛する人の横顔を眺めながら幸せなひと時を過ごしてます、私の隣の席に座る髪を金色に染めた目つきの鋭い男の子、いつも他人の為に一生懸命な男の子、昼下がりの授業だからか眠たそうに瞼を閉じかけてる男の子、青山貴志くんは私に見られてるとも知らず夢の世界に旅立とうとしています、しかし貴志くんよりも一足先に夢の世界に旅立ってた彼の相棒は・・・

『うゝん・・・警部うー・・・自分を函館に行かせてください・・・ムニャ・・・ほらあゝ・・・いくぞ桜田ゝ・・・』

『おい、誰かその刑事気分の大馬鹿鹿野郎を起こしてやれゝ。』

先生はとづくに気づいてます・・・真司くんたら、あんなハッキリな寝言じゃ気づかれても仕方ありませんわ、真司くんの隣に座ってるクラスメートが起こそうとすると真司くんはいきなり大声で叫びました

『山さん！！ アンタ何年デカやってんだよっ！！！！』

・・・あれはもう寝言とは言えせんわ、それともわざとなのですようか？ 結局真司くんは先生から叩き起こされ授業後にみっちり説教されました。

授業が終わり放課後になるといつもの4人で集まり少しの時間だけ雑談するのが習慣になってます、私のお気に入りの時間です

『真司ってば・・・夢の中じゃもう刑事になりきってんのねー、

てかあんなに堂々と寝てたらそりや怒られるわよ。』

『だって眠たかったんだからしょうがないだろう、人がせつかくいい夢見てたつてのによお、あの教師、俺が刑事になったら真つ先に検挙してやる！！』

『完全な逆恨みだな・・・大体俺ならトモみたいに授業中の教室であんな堂々とは寝ないなあ、寝たいんなら仮病でも使って保健室に行けばいいんだよ。』

『貴志くん！ そんな不純な理由で保健室に行つてはいけませんわ！ ちゃんと授業は受けなきゃ駄目なんですからね。』

私達は深く考えずただ思い思いに談笑してます、小・中学時代は友達の少なかった私ですけど高校に入つて貴志くんと出逢つて・・・真司くんや彩花さんにも出逢つて・・・里奈さん、蒼太くん、夕奈さん、いずみさん、紗恵さん、皆さん私の大切な人達です、この人達が友人であるという事は私の一番の自慢ですわ。

今日の帰りは貴志くんと2人きりです 真司くんは用事があると彩花さんは勉強の為に先に帰りました、真司くんはともかく彩花さんは受験生です、彼女が志望校に合格する事を心から祈ってますわ

『貴志くんは大学に行かず卒業後はどこかに就職なさるのですよね？』

『うん、何か手に職つけて資格を取ろうかなと思ってね、それから早い方がいいし、頑張ってお金稼いで里奈を大学に行かせなきゃいけないから大変だよ。』

確かに就職も1つの進路です、無理に大学に行く必要もありません、でも……

『里奈さんは多分……大学には行かないと思いますわ……。』

貴志くんは怪訝な表情をしています、だって私も里奈さんの立場なら・

『貴志くんが頑張って大学に行かせようとするのは里奈さんも嬉しく思うでしょうけど……その為に貴志くんに多大な苦勞をかせさせるのをきつと里奈さんは望まないと思います、里奈さんなら貴志くんとの生活の為に進学よりも就職を選ぶと思いますわ。』

私だって貴志くんだけ働かせてそのお金でこのうと大学に行くよりも一緒に稼いでより良い生活をしようと考えます、里奈さんも間違いないと考えますわ、私には分かります

『……確かに里奈の人生だしね、進学にしろ就職にしろどうしたいかは里奈が決める事なんだよな、俺はただ里奈が幸せになる為に頑張るだけさ。』

『それじゃあ私はそんな貴志くんをずっとそばで支えますわ、3人で世界一幸せになりましょうね。』

私がそう言うのと貴志くんは照れくさいのでしょうかそっぽを向いてしまいます、何だか可愛らしいですわ、このまま彼の事を食べちゃいたいくらいです。

貴志くんと別れて自分の家に帰っていると途中にあるスーパーの脇の

駐車場でどこかで見た事のある人が携帯で何やら話してました、あの人は確か・・・

『もう少し待ってよ！ 必ずあの2人は追い出すから、そしたらあの家で3人で暮らしましょうよ。』

貴志くん達の叔母様です、あの2人ってまさか貴志ちゃんと里奈さんの事なのでしょうか？ 追い出すって一体・・・もしかしたらですけどあの人は叔母ではなくて貴志くん達の実母なんじゃないでしょうか・・・。

第四百四十六話（後書き）

次話は貴志達の母、静香視点で書きます。

第四百七話（前書き）

貴志達の母、静香視点です。

第四百十七話

『 もう少し待つてよ！ 必ずあの2人は追い出すから、そしてたらあの家でまた3人で暮らしましょう。』

私は直樹にそう告げる、直樹は私の中学時代からの想い人、中学から高校までの六年間、ずっと一緒だった、しかし大学時代に色々あり大学卒業後、直樹の親友だった哲也と結婚した、しかしそれでも直樹の事を忘れる事は出来なかった・・・そして私は哲也や貴志達を捨てても直樹と一緒に生きる事を選んだ

『 また電話するから、あつ！ 敦士は元気にしてるの？ 』

敦士は直樹との子供、貴志達とは種違いの兄弟、借金取りから逃げる為には私というよりも直樹といった方が安全だろうという事で今は直樹と2人で直樹の知人の所に居る、でもやっぱり親子3人で暮らしたい、この街なら借金取りも来ないと思うし直樹も心機一転やり直せるはず、私の大切な家族は今直樹と敦士なのだ、貴志と里奈は十年前に捨てたのだから・・・

『 そう・・・元気ならよかった、じゃあ直樹も元気でね、近いうちに必ず貴志達はお義父さんの家にも追いやるから、そしたらまた連絡するわ。』

そう言つて携帯を切ると私を見つめる視線に気づいた、そこにいた女性は確か貴志のクラスメートで高野奈津美さんという人だった

『 こんにちは、ここを通つたら偶然貴女をお見かけしたものですから、ここで何をしておられたのでしょうか？ 貴志くんはもう家

に帰りましたが。』

『 えっ・・・ちよつと友達に電話をね・・・それより貴志、もう帰ってるんだ、じゃあ私もそろそろ帰らなきゃね。』

彼女の質問に適当な返事を返し私はこの場を離れようとする、しかし彼女はまた話を続けてくる

『 ……ところで、先ほど誰かを追い出すとか話されてたみたいですが・・・誰を追い出すつもりなのでしょうが・・・。』

さっきの直樹との会話を聞かれてたのだろうか？ うまく誤魔化さない

『 ああ、今私の家に妹夫婦が居座ってるの、迷惑だから早く追い出したいんだけど実際行動にするのもなかなか難しいのよ、あんなでも一応妹だからね。』

『 そうだったのですか、それは大変ですね、でもその後3人で暮らすと話されてたようですけどどういう事なのでしょうが・・・よろしければ教えて頂きたいのですが。』

意外としつこい女ね、もつと大人しい子かと思ってたのに、それにどうも私を見る目に敵意が込められてるといふか・・・

『 あなたにそこまで言わなきゃならない理由なんてないでしょう、第一あなたは青山家とは関係ないのだから余計な詮索はしないでほしいわね。』

少し強めに言うも高野さんは怯む様子はなかった

『 関係ないとかそんな事ありませんわ、そう遠くない将来、私は青山奈津美になるのですから、一生貴志くんと共に生きていくと心に誓ったのですから。』

高野さんは高らかに宣言した、何なのこの女・・・よく分からなけれど貴志と結婚するつもりなの？ 別に貴志が誰と結婚しようがどうでもいいけど高野さんレベルの女性なら貴志よりいい男が選び放題だと思う、そんな子にここまで言わせる程に貴志っていい男なのかしら・・・

『 へえ、もうそんな事決めてるんだ、そう言えば女友達も多いみたいだし、貴志って結構モテるのかしら？ あんまりそんな感じに見えないから意外だわ、でもなんか怖そうじゃないあの子？ 』

『 そんな事ありませんわ、確かに貴志くんは見た目は怖そうに見えるですけど中身は誰よりも優しく自分以外の人の為に一生懸命になれる素晴らしい人です、貴女は母親なのにそんな事も分からないのですか？ 』

『 そんなの分かる訳ないわよ！ 十年前に捨てた息子の事を全て知ってる母親がどこに居るつてのよ！？ だいたい・・・あっ！！ 』

しまった、確か里奈に言われて私は高野さん達には貴志達の母親ではなく叔母という事になってるんだった、高野さんの挑発につい口が滑ってしまった、語るに落ちたって訳ね

『 やはり貴女は貴志くん達の母親だったのですね、電話の内容からもしやと思ったのですが・・・まさか貴志くん達をあの家から追

い出そうとするなんてとんでもない母親です貴女は！！　こんな女が母親だなんて貴志くんや里奈さんが可哀相で仕方ありません！」

高野さんは先ほどまでとは態度を一変させた、私を見る瞳は隠す事なく敵意剥き出しだ、そんなに貴志達を捨てた私が憎いのかしら？
何も分からない小娘の分際で・・・。

第四百七十七話（後書き）

仕事も私生活もめっちゃ忙しいです・・・最低でも4日に一回は更新したいです。

第四百四十八話（前書き）

今回も静香視点です、かなりの鬼母になっています・・・。

第四百十八話

高野さんは憎しみを込めた目で私を睨む、私がつい口を滑らせたせいで私が貴志達の実母だと彼女にバレてしまった、だけど別にバレたところで何の問題はない、彼女にどう思われようが私は自分の目的さえ遂げられたらいいのだから

『それでどうするの？ 貴志に今の事を話すの・・・話したいのなら好きにしていいいわよ。』

もう誤魔化せないと悟った私は高野さんに言い放つ、最初はお義父さんに泣きつくつもりだった。

私と直樹と直樹の親友で私の旦那、つまり貴志達の実父である哲也てつやは中学時代からの友人関係だった、哲也の両親であるお義父さんもお義母さんも直樹共々その頃から知ってる、私が哲也にした事を考えたら哲也の両親であるお義父さんやお義母さんが私や直樹を受け入れるとは思えなかったけど・・・。

しかしお義父さん達と貴志達が別々に暮らしていると聞いた時、私はある計画を思いついた、貴志達が住んでる家から貴志達を追い出しそこに直樹と敦士を迎え入れる、そうしたら私達はやり直せるのではないかと、事業に失敗して多額の借金を背負った直樹もまた1から頑張ろうと思うはず、少しは貴志達に罪悪感も感じるけど直樹と敦士の幸せには代えられない。

私は妻として、母として直樹や敦士を支えなければならない、こんな小娘に邪魔される訳にはいかないのだ

『 そんな事、とても貴志くん達には言えません！ 知ったら貴志くんや里奈さんがどれだけ傷つくか・・・貴女が何を考えてるか分かりませんが、絶対に貴女の思い通りにはさせません！！ 貴志くんも里奈さんも私が守ります！ 』

『 なんなのあなたは・・・あなたが貴志を好きなのは分かるけど私は貴志達の母よ、親が子をどう扱おうと親の自由でしょ！ 』

この娘は貴志に惚れている、それは彼女の言動を聞いてたら分かる、まあ私だって貴志が不幸な人生を生きるよりこの高野さんみたいな美人からここまで惚れられる様な幸せな人生を歩んでくれた方が多少は嬉しい、私が青山の家を出てから貴志も里奈もだいぶ苦労してたみたいだし

『 それが・・・それが母親の言う台詞ですか！ 貴女にとって貴志くんや里奈さんってどんな存在なんですか！？ もう貴女なんかと話す事は何もありませんっ！！ もし貴女に少しでも母親としての情があるなら貴志くん達の前から黙って姿を消して下さい！ 』

最後に強く言い残し高野さんは去っていった、私だってあの家さえ手に入ればもう貴志や里奈に会う気はない、後はお義父さん達に何か上手い理由を言って納得させれば完璧だ、もう一度、直樹と敦士と3人で幸せだったあの頃を取り戻す為に・・・。

家に戻ると貴志だけじゃなく里奈も帰ってた、可愛いエプロンを身につけ夕食を作ってる、ロールキャベツやレバニラ炒め、卵スープなど高校一年生の女の子が作るにしては豪勢だ、もしかして里奈って私より料理が上手いんじゃない・・・。

『お兄ちゃん、晩ご飯もうすぐ出来るよ、そろそろ降りてきて。』

里奈が呼ぶと二階から貴志が降りてきた、並べてある料理を見るなり貴志は

『おつ、今日はロールキャベツか、里奈ってこんなのも作れるんだな、こりゃ美味しそうだ。』

そう言つて嬉しそうにテーブルに座る、十年ぶりにこの2人に会つて感じたけどこの兄妹は仲が良すぎる、貴志はそうでもないけど里奈は事あることに貴志に引付け、そして里奈が貴志を見る目……アレは妹が兄に向ける目じゃない、どうやら里奈は貴志を兄としてだけではなく異性としても好きみたいだ

『ねえ里奈……一つ聞きたいけどあなたは貴志の事、どう思つてるの？』

食事の用意を終えた里奈に聞いてみた、すぐ近くに貴志も居るのだけど気になつて仕方なかった

『母さん？……。』

『何ですかいきなり、そんなのあなたに言う必要ありませんけどこれだけはハッキリ言えます。』

里奈はそう言つて私を睨みつける、こんな所は貴志よりも高野さんに似てるわね

『あなたから捨てられ父から暴力をふるわれても私が非行に走ら

なかったのはお兄ちゃんがいからなんです、私の幸せを願ってる人は当時はお兄ちゃん1人しかいなかった、だから私はお兄ちゃんとずっと一緒に居たい、正直あなたなんてどうでもいいんです、分かったら早くこの家から出て行って下さいね。」

全く・・・この子とはどう頑張っても理解しあう日は来ないわね、まあどうせこの家から出て行ってもらうのだから今のうちに好きなだけ言わせとこう、待っててね、敦士、直樹・・・。

第四百四十八話（後書き）

次話は三日後に更新できたらなあと考えてます、私生活はなんとか収まりましたが仕事がとんでもなく忙しいです、家に帰ったら風呂と寝るだけの毎日・・・。

第百四十九話（前書き）

皆様のおかげでユニークが50000人を超えました、PVも75000近くで本当に感謝しまくります。

第四百十九話

食卓に私と貴志、里奈が座って夕食を食べている、里奈が作った料理はどれも味といい量といい文句なしの出来だ、貴志に聞いてみたら小学4年生の時から里奈は料理の本で一生懸命勉強したらしい、中学生になる頃には料理の腕前は相当のレベルだったそうだし

『お兄ちゃん、おかわりいる？』

『ありがと里奈、じゃあお願いな。』

『うん、まだまだあるからたくさん食べてね、里奈、お兄ちゃんが美味しそうに食べてくれるからとーっても嬉しいの』

兄妹は私の存在などそこにないかのように2人だけの世界に入ってる、3人でいて私からは一言も発する事はない、私が何か言おうものなら里奈はたちまち不機嫌になるから

『ねえお兄ちゃん、今日家庭科の授業でね、蒼太くんのクラスと里奈のクラスの合同でクッキー作りしたんだよ。』

『クッキー作りか？ てか男子も作ったのか。』

『そーだよ、夕奈ちゃんも紗恵ちゃんも美味しいクッキー作ってたけど蒼太くんなんてチョコチップクッキー作ってたんだよ』

里奈は本当に楽しそうに学校での出来事を話す、それを聞いてると敦士もよく食事中に学校とかで友達と遊んだ事を楽しく話してたのを思い出して何だか淋しくなってしまう

『 蒼太くんのクッキーもホント美味しかったんだからー、男子も女子も先生もみんな凄いつて、店にあってもおかしくないレベルだつて言つてたんだよ。』

『 蒼太がクッキー作りねえ・・・あいつは俺やトモと違って真面目で優しいし礼儀正しいしイケメンだし身長高いし運動神経いいし成績いいし彩花によると家事全般もこなすらしいし・・・つて、そんなのどこの完璧超人だよっ！』

確かに凄い、まるでマンガみたいな人ね、本当にそんな人っているのかしら？

『 でも蒼太くん言つてたよ、まだまだお兄ちゃんや友さんには及ばないなつて、蒼太くんつて本当にお兄ちゃんや友さんの事を慕つてるんだね』

嬉しそうに話す里奈の笑顔が眩しい、だけど貴志つてそんなすごい子から慕われるような先輩なんだ、人は見かけによらないつて事かしら、まあ私には全然関係のない事だけど

『 蒼太がそんな事言つてたのか・・・里奈も2年生になったら先輩になるからな、後輩には優しくしろよ、まあ里奈なら大丈夫なんだろうけどさ。』

『 はい、里奈、お兄ちゃんや奈津美さん達みたいに優しくて人を思いやれる先輩になるからね』

目をキラキラさせて里奈は話す、私がいなくても貴志や里奈は健やかに成長していたみたいで少しだけホッとした、学校でも良き友人

達に囲まれ楽しい学校生活を送ってる様だし、そう考えてたら自分の学生時代を思い出していた、直樹や哲也との事を・・・

中学時代、私はそれなりに男子から人気を持つ女子だった、男子から告白される回数も多々あったがどうにも気が乗らずどの告白も受ける気になれなかった

『 静香、アンタ松本君からの告白断ったんだって！ 松本君って校内1の美男子じゃない、一体全体何が不満なのよー、いい加減バチが当たるわよ。 』

今日も同じクラスの友人、矢沢鈴やざわりんからそんな事言われるのだがいくら美男子でもよく知らない人といきなり付き合うなんて私には無理だ

『 いくら美男子でも嫌なのは嫌なの！ それより鈴、今日帰りヒマ？ ヒマなら何か食べに行こうよ。 』

『 まったく・・・静香にはかなわないなあ、いいよ、ハンバーガーでも食べよっか、ちようど私もお腹すいたトコだしね。 』

こうして結論は出た、私と鈴は学校が終わった後、2人で街に出てハンバーガー店を目指して歩き出す、いろいろ雑談をしながら歩いてると鈴が急に声を出した

『 あれっ、ねえ静香、あそこの2人って市原君と青山君だよな？ 』

鈴の指差す先は交番でそこには警察官から質問をされてるらしきク

ラスメートの市原直樹君と青山哲也君の姿があつた、あの2人はいつも行動を共にしてゐる仲良しコンビだ、交番で何してゐるんだろ・・・。

第四百十九話（後書き）

次話も静香の回想編です。

第百五十話（前書き）

只今、一人暮らしの我が家に幼い居候がいます、子育てをなさつてゐる人々、本当に尊敬します・・・。

今回は静香の過去話です、主人公は一切出てきません、あしからず。

第百五十話

学校帰りに鈴とハンバーガーを食べて少し遊んだ後、私達は家に帰った、私の両親は私が小学生の時に交通事故で2人共死んだ、だから親戚の家に居候させてもらっている

『ただいまー。』

『お帰りなさい、もうすぐ夕飯だからね、早く着替えてきなさい。』

私を引き取ってくれた親戚の叔母さんはとても優しくかった、両親をいっぺんに失って行く所がなかった私を快く引き取ってくれただけでなく実の娘と変わらぬ愛情で接してくれたしその叔母さん夫婦の娘、みちるちゃんも私を本当の姉のように慕ってくれた、部屋に行くこうとする私に明るく声をかけてくる

『おかえり静香さん、ちょっと宿題で解らない所があるんだけど後で教えてくれないかなあ？』

『わかったわ、みちるちゃん、晩ご飯食べ終えたら教えたいからね。』

『ホント！ ありがとうー静香さん』

こんな感じで両親がいないとはいえ楽しい日々を送ってた、学校でも鈴とか友達もいるしそれなりに充実した生活だと思う、中学二年生の私は不満のない生活をエンジョイしていた。

翌朝、鈴と一緒に学校に登校すると青山哲也くんの周りに人が集まっていた、そういえば昨日、交番に市原直樹くんと一緒に居たけどそれと関係あるのかな？

「本当か！ 青山と市原が女の子を助けようとしてケンカしたとか？」

「信じられねえなー、青山はともかく市原とかケンカなんて無理だろ？」

「ホントだって、なあ直樹、まあほとんど俺が1人でやったようなモンだけだな、相手も高校生の癖に中学生2人に5人がかりで来るんだからつい張り切っちゃったよ。」

話を聞く限りあの2人は高校生とケンカをしたみたいね、なんか女の子を助けようとしたとか、直情的熱血漢な青山くんならやりそうな事だけど物静かで冷静な市原くんもとかちよつと意外だった、というか何でこんな正反対な2人が親友同士なんだろう？

「そんな自慢げに話す事じゃないだろ哲也、だいたい哲也がやりすぎたから警察まで連れて行かされたんだぞ、もう二度とあんな事は手伝わないからな！」

市原くんは少し不機嫌そうに言う、もしかしてこの2人、5人の高校生に勝ったって事？ それって凄いわね、青山くんは強そうないメージだけど市原くんはそんなイメージとは無縁な感じだったから少し意外ね

「まあそう言うなよ、俺1人じゃ負けてたかもしれない、お前が

いたから5人相手に勝てたんだぜ、つまりあの子を助ける事が出来たんだ、これでもお前には感謝してんだぞ、直樹。」

『 哲也……。 』

この2人、何かカッコいい関係だと思う、特に市原くんのギャップが強く印象に残った、普段は物静かでクールだけどいざという時は本気を出す、ちょっといいなと思ってしまった。

放課後、鈴と2人で帰ろうとして靴箱を開ける、開けた私の靴箱にはまた手紙が入ってあった、思わずため息が出てしまう

『 どしたの静香、あつ！ またラブレターがあつたのね！？ 相変わらずのモテモテぶりですね。 』

『 もー、鈴ったら、は、また行かないのかしら……。 』

手紙の封を開けたら屋上で待ってますと書かれてた、差出人は先輩の風間さん、生徒会の会長で成績も学年トップクラスのこれまた美形男子で学校の女子人気ナンバーワンなのだ

『 ウソーっ！！ あの風間先輩からなのー！！ どうすんのよ静香！ 』

鈴は相当興奮してる、まるで自分宛てに風間先輩からの手紙が来たみたいに

『 とりあえず行ってみるわ、先輩からの呼び出しを無視するのも

悪いしね。』

こうして私は風間先輩の指定した屋上に向かう、鈴は後で結果を教えてねと先に帰ったいった。

屋上に来ただけそこには誰も居なかった、手紙には待ってますとか書いてあったのに誰も居ないとかどういう事なんだろう？ とりあえず10分くらい待ってただけ屋上には誰も来なかった

『呼び出しといて何なのよっ！！ 人を馬鹿にしてんじやないの！！』

私は大いに怒り屋上を後にした、これが騒動になるとも知らずに・・。

第百五十話（後書き）

後2話くらいは静香の過去話です。

第百五十一話（前書き）

静香の過去話です、ちなみにこの過去話は1980年代の設定です、当然携帯電話とかありません。

第百五十一話

女生徒憧れの風間先輩から手紙をもらったはいいけど指定された場所に行ってみたら誰も居なかったという茶番劇のあった翌日、学校では鈴が会うなり

『待つてたわよ静香ー、昨日はどうだったの？ まさか風間先輩と付き合う事になったとか！？』

昨日同様、自分の事の様に興奮して話しかけてくる、私はありのままを伝えると

『なんなのそれ？ でももしかしたら風間先輩も急用があつたんじゃない。』

『それでも10分は待つてたんだよ、きっとからかっただけなのよ。』

私は多少ふてくされながら鈴と会話をしていた、そんな時、教室の外から私を呼ぶ声が聞こえてきた

『橘さん、ちょっといいかな？』

呼んでいたのは風間先輩だった、教室からは女生徒達の黄色い歓声がある

『昨日の事で話があるんだけど。』

風間先輩は落ち着いた口調で言う、どうも分からない、昨日の事っ

て私をからかっただけなんじゃないの？

『わかりました、ここじゃなんなので……。』

私は風間先輩と教室から離れる、風間先輩は屋上に私を連れていった、屋上に着き誰も居ない事を確認すると風間先輩は申し訳なさそうに頭を下げてきた

『昨日は本当にすまなかった、生徒会でどうしても外せない仕事が出てきたんだ！ 橘さんと呼んでおきながら僕が行けなくなってしまうなんて・・・許してくれとは言わない、気の済むまで罵ってくれ！』

私はそれだけ聞くともうどうでもよくなった、別に風間先輩の事とか最初から好きでも何でもないし

『もういいですよ、仕事ならしょうがないですから、それじゃ私はこれで。』

簡潔に言っ て私は教室に戻ろうと歩き出す、すると風間先輩は私の手を掴み

『待ってくれ！ 昨日話せなかった事をいま話させてくれないか？ どうしても橘さんに聞いて欲しいんだ！ 頼む！！』

熱い瞳で私に頼み込む、何を言いたいかだいたい想像はつくけどとりあえず話だけは聞く事にした。

『・・・で、返事を聞かせてくれないかな？』

風間先輩の話は予想通り、自分と付き合ってくれないかという話だった、しかし私の返事は最初から決まってる、風間先輩に向かって深々と頭を下げ一言

『ごめんなさい、私、風間先輩とお付き合いする事は出来ません。』

私の返事に風間先輩はあれっ！？という表情をしてる、告白が受け入れられると信じて疑わなかったのかな

『な、何でかな？ 僕の何がいけないんだい、あつたら教えてくれよ！』

『別に風間先輩にいけない所なんてありませんよ、私はよく分かり合えてない人と付き合う事が出来ないだけです。』

私がそう言っても納得してない風間先輩はしつこく食い下がる、あんまりしつこいのでついムキになり

『もうっ、いい加減にして下さい！！ 風間先輩って女子から人気あるみたいですからだからって女子全員が先輩になびくと思ったら大間違いですから！！』

無理やり風間先輩を振り切り私は屋上から出て行く、これ以上話す事がないから

『僕は諦めないから、橘さんが僕の事を好きになるまで諦めたりしない！』

風間先輩が何やら言ってるけどひたすら無視して教室に戻る、教室では鈴が私が戻るのを待ちかまえてた

『 あっ！ どうだった静香、風間先輩なんて？ 』

屋上での出来事を鈴に話す、話を聞き終えた鈴はまるで呆れた様に私に

『 はあ、もったいないなあ、でも静香の言う事も一理あると思うね、いいんじゃない、よし、ここは傷心の風間先輩を私が優しくすれば……。』

鈴が何やらやる気だ、だけど仮に鈴と風間先輩が付き合う事になっても私は反対しない、親友が選んだ人なら私も応援したいから

『 ねえ橘さん、風間先輩とどんな話をしてたの、まさか付き合ってくれて言われたとか？ 』

私にそう聞いてきたのは市原直樹くん、なんでそんな事を聞くのかしら

『 そうよ、でもきっぱりと断ったわ、それがどうかしたの？ 』

『 そうか……。だったらいいんだ、変な事聞いて悪かったね。』

市原くんはそれだけ言って自分の席に戻る、なんか気になるわね、どうして風間先輩の告白を断ってよかったのかな……。

第百五十一話（後書き）

幼い居候くんと現在放送中の仮面ラ？ダーのDVDを見ました、
まだ六才の居候くんにラ？ダーV3とかラ？ダーマンとかの話をし
ても分かる訳ないか・・・。

第百五十二話（前書き）

長らく更新を停止していて申し訳ありません。

とある資格を取得する為に勉強していてやっと今日終わりました。

これからはまた以前みたいな更新ペースにしたいと思っていますので
よろしく願います。

第百五十二話

風間先輩の告白を断ってから数日が過ぎた、特に変化のない日々の中、その事も忘れかけてたけどその変化は突然起こった

『・・・なによこれ。』

『ちよつと静香！ 誰がこんな事したのよっ！！』

靴箱を開けたら私の靴がズタズタに切り裂かれていたのだ、これじゃあ履いて帰れない、誰がこんなくだらない陰険な事を・・・

『静香、先生に言いにくい！ こんな事する奴、絶対許せないよ！』

鈴は本気で怒ってる、そんな鈴が友達にいるから私は平気だ、正直犯人が誰だろうがどうでもいい、大方風間先輩に告白された私に嫉妬した頭の悪い女の仕業なんだろうな

『あれっ、橘、矢沢、どうしたんだよ、靴がどーかしたのか？』

私達が騒いでる靴箱の所に青山くんと市原くんが来た、鈴が彼らに私の靴の事を教えると2人も

『酷い事しやがって！！ なあ橘、絶対犯人見つけて謝らせてやるうぜっ！』

『こういう事はそのままにしとくともっと酷い事をされるかもしれない、早く犯人を見つけないきゃ。』

私に協力してくれる事になった、私としてはあまり事を大げさにしたくないけれど鈴も市原くんも青山くんも私の為に一生懸命になってくれてる、その気持ちを無駄には出来ない

『みんな・・・ありがとう、私、こんな事に負けたりしないから！』

心強かった、これからどんな事が起きたとしてもこの人達となら乗り越えられる、そう確信した私は体育館シューズを履いて帰り叔母さんには上手くごまかした、寝る前にも鈴と電話で話をして穏やかな気持ちで寝る事が出来た。

朝は鈴と一緒に登校、いつも通りなんだけど学校近くで風間先輩とばったり会った、風間先輩は馴れ馴れしく私に挨拶してくる

『おはよう、橘さん、橘さんもこの時間に登校してるんだ、僕もなんだよ。』

『はあ・・・そうなんです、それが何か？』

『いや・・・せっかくだから明日から一緒に登校出来たらなあつてさ。』

何をいきなり言ってるのかな、そんな事する理由もないし、だいたいこの人の告白はきっぱり断ったんだからいい加減諦めてほしい

『結構です、私は鈴と一緒にの方がいいですから、鈴、行こうよ。』

鈴の手を握り締め私は学校に向かった、別に風間先輩の事は嫌いじ

やないけど付き合うにはめんどくさそうな人だと思えた、もう少し話とかしてお互いの事が分かり合えたら気持ちも変わるかもしれないがそこまでして風間先輩と付き合いおうとは思わない。

教室に入ると市原ちゃんと青山くんが1人の女生徒と言い争いをしていた、青山くんが私達に気づくと

『おう、橘、丁度いいところに來たな、こいつだよ、昨日お前の靴を切り裂いたのは！』

いきなりまくし立てる、彼が指差したのはクラスメートの森川留美^{もりかわる}子さん、でもどうして彼女がそんな事を？そして青山くん達はどうして彼女が犯人だと分かったんだろうか？私はまず彼女に話を聞いてみる事にした

『ねえ森川さん、どうしてあんな事したの？納得できる理由を教えてよ。』

多分に風間先輩がらみの嫉妬だと思ったが彼女からの返答は意外だった

『・・・私だってしたくてした訳じゃないわ、風間先輩から頼まれたのよ。』

『はあ、何だよそれ！なんであの人がお前にそんな事頼むんだ！？』

真っ先に反応したのは青山くんだった、私も鈴も意味が分からなく呆然としてたが市原くんは冷静に

『 森川さん、詳しく話してくれないかな？ 君だって本当はあんな事したくなかったと思うんだ、僕のカンだけでもしかしたら君は風間先輩に……。』

森川さんに話すと彼女は動揺したかに見えた、私の靴を切り裂いたのは彼女だけどそれは彼女の本意じゃない、だとしたら私は本当の理由を知りたかった。

放課後、私と鈴、市原さんと青山くんは校門で風間先輩を待っていた、森川さんから聞いた話の通りなら彼を許せなかったから

『 だけど風間先輩ってヒドい奴だったんだねー、一気に幻滅したわ、静香も告白断って大正解よ！ 』

鈴がそう言うのも無理はない、森川さんが私の靴を切り裂いたのは風間先輩に命令されたから、彼女はもちろん断ったのだが森川さんのお父さんが勤めてる会社は風間先輩の父親が経営してる会社の子会社、もし断るなら父親に言っで森川さんのお父さんをクビにすると言われたからやむなくあんな行為をしたらしい、風間先輩がそんな事を頼んだ理由までは森川さんも知らないとの事

『 やっぱりこんな事になったか・・・噂通りだな、橘さんも災難だね。 』

・ 私の隣に居た市原くんは小声で私に話しかけてくる、そういえば・

『 ねえ市原くん、この前言っでたけどなんで私が風間先輩の告白

を断ったって聞いてよかったなんて言ったの？ 私、気になってたんだけど。」

『その事かい、風間先輩には変な噂があつてね・・・あまり女の子に言いたくない内容なんだけど。』

そう言われると余計に気になる、私は市原くんを問い詰めて話を聞き出そうと思った・・・。

第百五十二話（後書き）

静香の過去話が思ったよりも長くなりそうです、あと2、3話ぐらい・・・。

第百五十三話（前書き）

暑いですが、仕事場は冷房はあるのですが今のご時世、できる限り節電しなければ・・・。

第百五十三話

市原くんから風間先輩の事を聞き出した私は言葉がなかった、風間先輩は家の経済力をバックに女の子を口説いては手込めにしてたとか、とんでもない人ね

『それって本当なの市原くん？ だとしたらとことん最低な奴だね！！ でもなんで市原くんがそんな事知ってんの？』

鈴の疑問ももつともだった、そしてさっきの森川さんの事もどうして分かったんだろうか？ 気になった私はその辺も聞いてみた

『風間先輩の事は男子の間では結構有名な噂だったんだ、どこから流れたのかは知らないけど、あくまでも噂だからね、真実じゃないかもしれない、森川さんの事は哲也と聞き込みをしてたら森川さんが橘さんの靴箱の周りをうろついてたってのを聞いたのさ、それで彼女を問い詰めたら白状したって訳。』

『まあ森川もお父さんをクビにするって言われたら逆らえないよな・・・風間先輩の家は幾つもの子会社を抱える資産家だしな。』

青山くんも呆れたみたいに話す、それにしてもこの2人・・・私の為にそこまでしてくれたんだ、思ってた以上にいい人達なのね

『あつ！ 静香、来たよ、風間先輩が！！』

鈴の示す先に風間先輩が歩いてる、都合よく1人だった、向こうも私達に気づく

『 ああ、橘さん、どうしたんだい、うん？ その人達は一体……
』

私は1人じゃなく鈴や市原くん、青山くんと一緒なのだ、風間先輩が不思議に思うのも当然よね

『 風間先輩！！ どうして森川さんに静香の靴を切り裂けなんて命令したんですか！ しかもお父さんの仕事をタテにして脅すなんて……最低ですね！！ 』

鈴はいきなり風間先輩に叫ぶ、私が言いたい事はほとんど鈴が言ってくれた、そんな鈴を前にしても風間先輩は悪びれる事なく

『 なんだ……森川さんはあつさりバラしたのか、ホント使えない女だな、まあいいや、ここじゃなんだからさ、近くの公園にでも行こうか？ 』

なんなのこの人……あつさり認めた事もただくだらない行為に無理やり巻き込んだ森川さんに対してあの言いぐさは何なんだろうか、凄く腹が立ったけど確かに校門では目立ってしまう、私達は風間先輩について行く事にした。

近くの公園に着いた私達、一番最初に話し出したのは青山くんだった

『 なあ、なんで森川にあんな事させたんだよ！ あんたの気まぐれで橘や森川がどれだけ傷ついたと思ってるんだ！！ 悪いと思ってるなら橘に謝れよ！ 』

青山くんは熱血ドラマの主人公みたいに話す、まだ中学二年生の青

山くんだけど熱血ぶりは大人顔負けね

『そうか、君達は橘さんの友達なんだね、でも僕を責めるのはお門違いだな、悪いのは僕の告白を断った橘さんなんだから、せつかく僕の彼女になったら学校でそれなりの地位になれるのに……。』

『こおの野郎っ！！』

青山くんが風間先輩に殴りかかろうとしたけどそれを止めたのは市原くんだった

『やめときなよ哲也、こんな人殴っても何にもならない、僕達の役目はこの人が二度と橘さんに関わらないようにする事だろ。』

『でも直樹、こいつが引き下がるような奴か！』

青山くんと市原くんが言い合つのを横目に今度は風間先輩が口を開く

『森川さんに言つて橘さんの靴を切り裂かせたのは単なるお遊びさ、僕の告白を断つたのは橘さんだけだったからね、それがどんなに愚かな事か思い知らせてやりたかったただだよ。』

それだけ？ 風間先輩のあまりに低レベルな動機に私は怒る気も失せた、だけど鈴は収まらなかった

『バツカじゃないの！ アンタみたいな男を一時でもいいなと思つてた自分が恥ずかしいわ、お金は持つても人間としての中身はカラッポなんだね！！』

鈴から蔑まれても風間先輩は一向に動じない、ある意味いい根性し

てるなと思った、そしてまた話し始める

『でも安心していい、もう橘さんに関わる気はない、僕も進路の事を考えなきゃいけないからね、まあウチは他者よりも裕福だからいざとなればどうとでもなるし、話はこれだけでも帰っていいかな？』

『おいっ！ 帰る前に橘に謝れよ！！』

立ち去ろうとする風間先輩に青山くんがそう言ってくれたのは嬉しかったけど私は心底どうでもよくなった

『もういいよ青山くん、風間先輩、約束ですよ、二度と私に話しかけないで下さい、もしまたこんな事したら学校に全部話しますからね、今回の事も。』

風間先輩は何も言わずに去っていった、でも多分もう大丈夫だろう、私は振り返り鈴や市原くん達に

『これで解決ね、みんなありがとう、よかったら何か食べに行かない？ 私がおごるからさ、あっ！ あんまり高いのはナシね。』

鈴と青山くんは勢いよく手を挙げた、市原くんはいいのかと聞いてきたけど私は大丈夫と言ったらじゃあ僕もと結局一緒についてきた、こうして私と鈴は市原くんや青山くんと友達関係になった、これが将来、私の人生に大きな影響を及ぼす事にこの時の私は気づくはずもなかった・・・。

第百五十三話（後書き）

次話は静香達の高校時代、出来たら大学時代までいけたらなと
考えてます。

第百五十四話（前書き）

静香達の受験のお話です、少し短いですけど。

第百五十四話

あの風間先輩の一件以来、私達は行動を共にするようになった、市原くんも青山くんもいい人だし鈴も彼らをすんなり受け入れた、そして私達は中学三年になり受験生、そんな勉強に追われる日々を送ってたある夏の日、授業の間の空き時間に鈴が話しかけてきた

『そんでさ、静香はどの高校受けるの？』

『私は新野高校しんやを受ける予定だけど、そういう鈴はどこなの？』

『奇遇ね、実は私も新野高校受けるんだー、お互い頑張って絶対一緒に合格しようね。』

どうにも奇遇とは思えないけど私だって鈴と一緒に高校がいい、そんな話をしてた私達に市原くんは

『本当かい、僕も新野高校を受けるんだ、あの高校は県内じゃ上位の進学校だからね、よかったら一緒に勉強しないかな？ 教えあいながらすると効率もいいしね、それに……。』

そう言った市原くんは他の友達とお喋りしてる青山くんを見て

『哲也も新野高校を受けたいらしいんだ、哲也の実力じゃ難しいかもしれないけど今から頑張ればなんとかなるかもしれない、2人も哲也に勉強を教えてくれないかな？ 僕1人じゃ厳しいからさ……。』

私と鈴は二つ返事で承諾した、市原くんは学年でトップ5に入る成

績の持ち主だしそんな彼が勉強を教えてくれるのはとても助かる、単純にこの4人で同じ高校に行けたらなと思った。

それから数ヶ月、市原くんの教え方は丁寧で分かりやすく私達はメキメキ学力を上げていった、心配されてた青山くんも私達と同じ高校に通いたい一心が見違えるほど学力を上げていた

『 ねえ市原くん、市原くんは将来の事、何か考えたりしてるの？

』

鈴と青山くんが用事があるらしく市原くんと2人で私の家で勉強してたある日、私はふと市原くんにそんな事を聞いてみた、彼がどんな未来を歩むのか少し興味があつたから

『 何だい急に、今はまだそんな先の事は考えてないよ、高校、大学に進んでそこで考えるつもりだけど、それがどうかした？ 』

『 ううん、ちょっと聞いてみただけ、市原くん大学行くんだ、やつぱりしっかりしてるね。 』

そんな雑談を交わしながら勉強を続けていく、いま家には私と市原くんの2人だけ、叔母さんはみちるちゃんと買い物に行つてあと一時間は帰つてこない、別に変な期待をしてる訳じゃないんだけど・

・

『 そういえば家の人は？ あんまり長居も悪いしそろそろ帰ろうかな。 』

市原くんは気を使ってかそんな事を言い出した

『 まだいいよ、叔母さんも買い物から後一時間は帰ってこないし。』

『 叔母さん？ お母さんじゃないの。』

そっか、鈴は知ってるけど市原くん達は私の両親がもうこの世にいない事はまだ知らない、少し迷ったが市原くんならこんな事情を知っても私を馬鹿にしたりしない、私は全てを話した

『 そうだったんだ・・・強いんだね、橘さんは・・・僕は橘さんを尊敬するよ、その叔母さんも娘さんもいい人だし、ご両親だってきっと天国から橘さんの事を見守ってるはずだよ。』

『 ありがと市原くん、ちよつと元気でした。』

言葉こそ少ないけど凄く嬉しかった、他人からこんな事を言われたのは初めてだったから、そして本気で言ってくれてるのも分かる、市原くんは嘘をつくような人じゃないから

『 じゃあまたね橘さん、これから何かあったら話してよ、僕でよかったら力になるからさ。』

『 うん、頑張って一緒に合格しようね。』

叔母さん達が戻る前に市原くんは帰る、彼を送る私の胸は高鳴ってた、この時私ははつきり自覚した、私は市原くんの事が好きなのだ、もしかして今日以前から既に好きだったのかもしれない、頑張っ新野高校に合格しよう、そしたら市原くんと一緒に高校生活を送れるから・・・。

第百五十四話（後書き）

少し駆け足気味に次話で静香の過去話を終えたいと思います、いい加減貴志や真司を出したいので・・・。

第百五十五話（前書き）

やっと更新出来ました、残業続きで時間が無かったので、今話で静香の過去話は終わります。

第百五十五話

15の春、私達は4人揃って新野高校への合格を果たした、残念な事にクラスは皆バラバラになったが休みの日とかはよく4人一緒で遊んだりもした。

私はといえば市原くと2人だけで会う事が多くなった、まだ告白とかはしてないけれど彼への想いは日に日に増していった

「あつ、見て市原くん、あの猫かわいいよねー。」

「外で見る猫ってなんだか可愛く見えるよね、それにしても野良猫かな？」

何の変哲もない会話、だけどこれだけでよかった、市原くんといればこんな時間も楽しく感じられた。

高校生活は平凡ながらも充実してた、クラスでもそれなりに仲の良い友達ができ市原くんと仲も日が経つにつれ進展していった。

それと同時に青山くんがよく私に話しかけるようになった、高校生になってもある程度は男子から告白される事もあったがもちろん全て断った、しかし青山くんはそんなのお構いなしに私の前に来ては

「なあ橘、明後日の日曜ヒマか？ あれだったら映画のチケットが二枚余ってるんだけどさ・・・。」

こんな事を言っただけでデートに誘おうとしてくる、青山くんも私の友達だからハッキリ断るのも悪いしなんとか上手く切り抜けられないか

と考えてたら鈴が来て

『 ホントにー！ この映画見たかったんだよねー！ ねえ青山くん、一緒に行つていいでしょー 』

呆氣にとられる青山くんを傍目に鈴と一緒に行く事になった、このまま鈴と青山くんがくつつくのが一番都合のいい展開なんだけどな、そうになったら私も遠慮なく市原くんと付き合えるのに・・・。

市原くんや青山くんと微妙な関係が続く中、高校二年の夏休みに私は市原くんに告白した、初めは驚いてた彼だったけど

『 橘さん・・・哲也がなんて言うか分からないけど、僕なんかでいいのかい？ 本当は僕だつてずっと前から君の事が・・・。 』

『 青山くんがどうか関係ないじゃない！ 市原くんも私の事が好きなら何も問題なんてないでしょ！！ 青山くんだつてきつと分かってくれるわよ。 』

嬉しかった、彼も私の事が好きだったなんて・・・。だったら何も考える事なんてなかった、その日の内に私と市原くんは初体験も済ませてその翌日、青山くんと鈴に付き合う事を報告した

『 そうなんだ、よかったじゃない、おめでとつ、静香、市原くん。 』

『 そ・・・そうか、橘と直樹が・・・まあ、よかったな・・・。 』

鈴は純粹に喜んでくれたが青山くんはやはり分かりやすく落ち込ん

でいた、そんな青山くんに市原くんは

『 哲也・・・お前にはすまない事をしたかもしれない・・・でも俺だつて橘さんの事、真剣なんだ！ 祝ってくれなんて言えないけど俺の気持ちだけは分かってくれないか。 』

真剣な態度で青山くんに話す、しばらく黙ってた青山くんはやがて市原くんの肩を叩き晴れやかな笑顔で

『 直樹、お前がそこまで橘の事を想ってるならもう俺の出る幕なんてねーよ、橘の事、幸せにしてやってくれよな、それと・・・俺はこれからも・・・お前のダチだからな！ 』

そう言った青山くんは吹っ切れたような笑顔だった、こうして鈴や青山くんの祝福を受けて私と市原くんは晴れて恋人同士になった。

高校生活もあつという間に過ぎていき私は大学受験を受ける身になった、鈴は就職の為に卒業後、他県に行く事になり青山くんは地元の整備工場に就職との事、そして市原くんは卒業後にアメリカに語学留学したいと私に告げた

『 どうしても将来の為に色々な語学の勉強がしたいんだ、3年したら必ず帰ってくる、そしたら・・・結婚しよう！ 』

私は市原くんのその言葉を信じて待つ事にした、彼の夢、得意な語学を生かせる仕事をしたいと常々言っていた、3年なんてそんな長い時間じゃない、私と彼の絆は深いのだから・・・。

志望大学に合格してキャンパスライフを送っていたある日、たまたま青山くんに出会った、久しぶりの再開に楽しく会話してたのだけど彼の口から信じられない事実を耳にする

『 そういや直樹さあ・・・アメリカで誰かと結婚したらしいぞ、この前久しぶりに電話してみたらそう言ってたんだ・・・。』

『 はあ？ 何言ってるのよ！ 直樹がそんな事する訳ないじゃない！ 証拠もないのにいい加減な事言わないでっ！！』

それだけ言い残し青山くんと別れてすぐに直樹に連絡を取ろうとするも一向に連絡がつかない、それから毎日連絡をするも全く繋がらない、そんなこんなで時は流れていきいつしか私は青山くんと付き合う様になっていた、3年過ぎても直樹は帰ってこないし落ち込んでいた私を青山くんは温かく慰めてくれた、大学も卒業した私は自分でもよく分からない内に青山くんと結婚する事になった、彼の子を身籠っていたから・・・それが青山くんの卑劣な罠とも知らずに・・・。

第百五十五話（後書き）

随分中途半端な終わり方ですがこの真相は作中に現在の直樹とその息子の敦士が出た時に明らかにします、次話から現在に戻り真司視点になります。

第百五十六話（前書き）

真司視点で進む馬鹿話です。

第百五十六話

『野郎おつこって奴は、そんなー、淋しいー、さすらーいーびとー』

学校帰りに上機嫌で歌いながら歩く俺の隣でいずみは

『平成生まれの高校生でその歌を歌えるのは多分真兄だけだと思う……。』

苦笑しながら呟く、それは褒め言葉として受けとっておこう、今日もまたいずみの従姉妹であるボクっ娘、真沙美ちゃんの相手をする為に矢島家に向かう俺、フランスに行ってる真沙美ちゃんの両親がそろそろ日本に帰ってくるらしいので真沙美ちゃんもご機嫌だ、いずみによると真沙美ちゃんは1ヶ月近くも両親と離れて暮らしてたのに寂しい素振りをほとんど見せずに明るく振る舞ってた、しっかりした8才児だよ

『ただいま。』

『お邪魔しまーす。』

美鈴さんから頼まれた買い物をして矢島家に着いた俺達、玄関で靴を脱ぎ廊下上がるうとすると靴がいつもより多い事に気づいた、誰か来てるのだろうか？　しかしどこかで見た事のある靴のような気がするの俺の思い過ごしだろうか

『おかえりなさいーいっ！！　真司兄ちゃん、いずみお姉ちゃん』

『

元気のいい声と共に真沙美ちゃんが迎えてくれる、パートから帰ってた美鈴さんも部屋から出てきた

『おかえり、買い物ありがとね、いずみ、真司くん、うふふ、今日も真司くんは私好みのいい男よね、どうかしら？ 今度の土日に私と二人きりで一晩泊まりがけでめくるめく官能的な温泉旅行にでも……。』

『ママ……。それ以上何か言おうものならこの家から永久追放の刑に処するからね……。』

『あらいずみ、あなたも真司くんと温泉旅行に行きたいの？ だったら真司くんに私と行くかいずみと行くか選んでもらいましょうよ、母娘とか関係ない女同士の真剣勝負よ！』

この母娘はたまに頭が痛くなる不毛な争いをするので巻き添えにならない様に真沙美ちゃんと一緒にリビングに行くところには

『あつ、彩花！ そのアップルパイは俺んだぞ！』

『貴志ったら！ 男ならみみっちい事言わない！ それにアップルパイならまだあるでしょ！』

高校3年にもなってお菓子の取り合いをしてる青山と彩花が何故だか居たのだ

『なんでアオと彩花がここにいるんだあつ！？』

訳が分からない俺の叫びに隣にいた真沙美ちゃんが笑顔で答えてく

れた

『ボクが学校から帰ってる時に会ったんだよ、このお兄ちゃんは真司兄ちゃんのお友達でしょ、だから一緒に遊ぼうと思ってボクが呼んだんだよ』

そっぴや真沙美ちゃんと青山は面識があつたんだつたな、あの目立つ金髪だから真沙美ちゃんもよく覚えてたんだろつ、しかしここに連れてくるのはなあ・・・

『ちよつと真兄！ 何黙つていなくなつてるのよ！ だいたい真兄がねえ・・・つて、青山さんに彩花さんじゃないですか、どうしてウチに？』

俺を追つてリビングに入つてきたいみと美鈴さんも青山達に遭遇する、家に居た美鈴さんは知ってるだらうからいみだけに青山達がここに居る理由を説明したらあつさり納得して

『そうなんですか、わざわざ真沙美ちゃんの為にありがとうございます、何にもない所ですけどゆっくりしていただくさいね。』

青山と彩花に頭を下げる、そりや俺だつて青山も彩花も善意でここに来てくれた事は分かつてる、まったりとコーヒーをすすつた青山は無駄に爽やかな表情で

『そんな事ないよいずみちゃん、この家は居心地がいい、美味しいお菓子やコーヒーは出るし、何しろお母さんが若くて美しいし、とても高校2年の娘がいる女性には見えないよ。』

えらく美鈴さんを褒める青山、確かに美鈴さんは実年齢より若く見

えるしいずみ曰わく、パート先では数人の男性から言い寄られてるとか、しかし全てやんわりと断ってる、もちろん俺へのあの言動も只の冗談なんだろうが再婚とか考えないのだろうか？ 年頃のいずみがいるから色々思う所があるのかもしれないけど

「もー、青山くんてばー、もうすぐ40のオバサンを捕まえて何言ってるのよー でもそう言ってくれて嬉しいわ、ありがと。」

青山から褒められた美鈴さんもまんざらではない様子、可愛らしい3?才だな

「三十代でも四十代でも美しい女性は美しいですから、若いだけが女性じゃないですよ、もし街中でお母さんに会ったら俺、ナンパしちゃうかも・・・。」

・・・さっきからこの好色一代男は何を言ってやがる、人の彼女の母親を口説こうとは不届きな野郎だ、これは天に代わってお仕置きをせねばならないな

「たーかーしー、さっきから何言ってるのかなあ・・・貧乳フェチだけじゃなく熟女フェチだったなんて・・・里奈に代わって、私が貴志を正しい道に戻してあげるんだからねっ!!!」

「へっ!？ いや・・・ちょっと待てよ彩花・・・話せば分かる! 暴力はイカンぞ暴力は・・・。」

「問答無用!! 大人しくこの竹刀の錆びになりなさいー! っ!

「アーーーーッ!!!!」

俺の出る幕もなくオモチャの竹刀を手にした彩花によって青山はメ
ッタ打ちにされてる、その様子を真沙美ちゃんは笑いながら見てる、
さあて、この後は何して遊ぼうかな・・・。

第百五十六話（後書き）

この馬鹿話は次話も続きます、そろそろ直樹とその息子も出そろ
かと。

第百五十七話（前書き）

今話も真司視点です、ちなみに第一話を修正しました。

第百五十七話

『 そうなんですか、お父さんはもう……。』

美鈴さんが未亡人だと知った青山がしんみりと呟く、リビングで俺達はレモンティーとお菓子をお供にまつたりな時間を過ごしていた

『 ええ、でも案外なんとかなるものよ、主人が残してくれた保険金が結構あつたし私もパートに行き始めたし、そのせいであんまりいずみとの時間は取れなかったけど真司くんがいてくれたからねー、真司くんには随分と助けられたわ、いずみも私もね。』

『 そんな・・・2人に助けられたのは俺の方ですよ、母さんの時だってどれだけ2人に世話になったか・・・どれだけ感謝しても足りませんよ。』

美鈴さんは珍しく(？)真面目に語る、さらりと話してるけどきつと苦労が多々あつたはず、それなのに母さんを亡くした当時10才の俺をいずみと共に励ましてくれた、この母娘がいたから俺は強く生きてこれたんだ、だからこそ美鈴さんには幸せになってほしい、いずみは俺が必ず幸せにする、美鈴さんもそろそろ美鈴さん自身の新たな幸せを見つけてもいいだろう、天国の旦那さんもきっとそう望んでると思うし

『 でも美鈴さんは凄いですよね、女手一つでいずみをここまで育てたんですから、誰にでも簡単に出来る事じゃありません、私、美鈴さんの事、同じ女性として尊敬します。』

彩花も話に入ってくる、同じ女性として共感できるトコがあつたの

か？　しかし相変わらずけしからんおっぱい娘だな、何食べたらそんな胸に育つんだ？　できればいずみにも胸が大きくなる秘訣を教えてもらいたいな、まあいずみも言うほど小さくはないが・・・

『　ありがとね彩花さん、あなたや青山くん達の事はいずみからよく聞いておりました、いずみと仲良くしてくれて本当に嬉しいです、こんなじゃじゃ馬娘ですけどこれからも仲良くしてあげて下さいね。』

『　ちよつとママ！　誰がじゃじゃ馬よ！！　これでも私って友達の後輩達から頼りにされてる先輩なのよ！　失礼しちゃうわねー。』

そうなのか？　俺は初耳だが本人が言うのでまあそういう事にしておこう、いずみは特に蒼太には必要以上にお姉さんぶるからな、本当の姉の彩花がいるのに

『　ねえねえ、お姉ちゃんはおっぱい大きいねー、ボクも将来それくらいに大きくなるかなー？　』

それまで静かだった真沙美ちゃんが彩花を見てマセた事を言い出す、8才児が今からそんな事を気にしなくてもいいのにな

『　ちよつと真沙美ちゃん・・・私はたまたま人より大きいだけなの、そんなのは人それぞれなんだから、真沙美ちゃんはまだそんな事考えなくていいのよ。』

彩花も俺と同じように考えてたらしく真沙美ちゃんを諭す、真沙美ちゃんも今は俺の嫁になりたいと言ってるけど学校には同級生の男子もいるしいずれはその中の誰かと仲良くなるだろう、それが普通だけだな。

所変わって近所の公園、俺といずみと青山と彩花と真沙美ちゃんの5人はある目的の為にここに来た、真沙美ちゃんがなで？こジャパンの影響でサッカーにハマってるらしく俺にコーチをお願いしてきたのだ

『真司兄ちゃん、今日はよろしくお願いしまーす、ボク、頑張るから。』

真沙美ちゃんは小さな頭をペコリと下げる、まあ小学生の、しかも女子相手だ、基本的な事を教えるだけにしとか、俺もコーチとかあまり得意じゃないしな

『真兄、ちゃんと教えなさいよー、くれぐれもサッカーと関係のないアホな事を教えないようにね。』

いずみが失敬な事を言う、東明高校のスーパーストライカーと呼ばれてる俺のコーチを受けたらワールドカップ間違いなしだったの

『ふうん・・・なんか面白そうだな、トモ、俺にも手伝わせてくれよ、いいだろ真沙美ちゃん、俺もいろんな事教えてやるから。』

青山がそんな事を言い出した、別にそんな本格的なコーチとかしないけどな

『アオ兄ちゃんもありがとう、やっぱりアオ兄ちゃんも優しいんだね、ボクの思ってた通りだよー。』

「あら真沙美ちゃん、どうしてそう思ったの？」

青山を褒める真沙美ちゃんに彩花が聞く、なんで思ってた通りなんだろうか？

「だって真司兄ちゃんの友達なんでしょ、優しい人の友達なんだから優しい人に決まってるよ。」

・・・子供は純粹だな、それだけの理由で見た目金髪ヤンキーの青山を優しい人だと信じて疑わないとか、その純粹な感性を忘れないでもらいたいな、それはそうとぼちぼちコーチを始めようとして辺りを見回すと1人でベンチに座ってる少年が見えたのだ・・・。

第百五十八話（前書き）

今話から貴志視点になります。

第百五十八話

いずみちゃんの従姉妹である小学二年生の真沙美ちゃんにサッカーを教える事になった俺と友成、小学生の女の子なら基本を教えとけばいいだろ、しかし友成は何を勘違いしたか

『よし真沙美ちゃん、まずはボールとト・モ・ダ・チになるんだ、それが出来ないとしてもワールドカップにはいけないぞ。』

誰がワールドカップにいくんだよ？ 確かに女子のワールドカップもあるが真沙美ちゃんにはまだ早いだろう、コーチの方向性がどこかおかしい友成を押し付け代わりに俺が真沙美ちゃんに練習の説明をする

『真沙美ちゃん、ボールと友達までならなくていいけどまずはボールに慣れようか？ それからドリブルとかパスとかの基本的な事を教えるから、どんなスポーツでも基本は大事だからね、出来る事からコツコツとやろう、なっ。』

『はい、アオ兄ちゃん、ボク頑張りまーす』

真沙美ちゃんは明るい笑顔で頷く、しかし今どきの女の子（まだ小学二年生だが）がサッカーとかね・・・わからないもんだな、でもこんな風に子供が外に出て元気に遊ぶのは俺はいいと思う、趣味や娯楽が多種多様化されてる今の時代にこんな女の子がいてもいいんじゃないかなって、どんなに時が流れゲーム機とかが進化しても公園とかで子供達が遊んでる風景は無くならないでもらいたいな。

サッカーの練習を始めて一時間近く経過した、友成もすっかり真面

目に教えてるし真沙美ちゃんものみ込みが早い、ドリブルとかも結構さまになってるし、実は真沙美ちゃんってサッカーの才能があったとか？

『 真沙美ちゃん、上手くなったじゃない、真兄や青山さんの教え方がいいからかな？ 』

いずみちゃんも真沙美ちゃんの上達を褒める、まあ俺達のコーチ云々よりも真沙美ちゃん自身の真剣な努力の賜物だろうけど

『 うん！ これで来週の体育、男子に勝てるよ！ 男子なんて女子になんか絶対負けるワケないとか言ってるんだからー！！ 真司兄ちゃん、アオ兄ちゃん、もつといろいろ教えてよ、ボク、もつともつと上手になりたいんだから！ 』

『 へえー、体育の授業で女子が男子相手にサッカーの試合とかするの？ 変わった学校ねー。 』

彩花が率直な感想を述べる、確かにあまり聞かない話だな、まあ一種の男女平等って事か、しかしこれ以上真沙美ちゃんに何を教えようか？ 基本的な事はほとんど教えて彼女はキチンと身につけたかなあ、俺が考えあぐねてると友成が

『 よし真沙美ちゃん、俺が得意なシュートを特別に教えてやるよ、アオ、キーパーやってくれよ。 』

飄々とそんな事を言う、ハッキリ言って変な予感しかない、そしてその予感は見事に的中したのだ

『 よく見ときなよ真沙美ちゃん、いくぞアオ！ これが俺のダブ

ルイルだああああっ！！」

思いつきり俺を目掛けて蹴ってきやがった！ だけど真正面なので簡単に取れる・・・と思いきや

「うおっ！！」

友成の蹴ったボールは俺の真ん前で急に伸びてきたというか速度が早くなり意表をつかれた俺の肩をはじきそのままゴールに入った

「すっごーい真司兄ちゃん！！ でもダブルイルってなあに？」

「ダブルは2つとか二倍って意味さ、ちなみにイルとはウナギの事だ、カバヤキにすると旨いよ。」

どこぞで聞いた事のあるウンチクを話す友成にいずみちゃんのカミナリが下った

「真兄・・・8才の女の子にあんなシュート打てる訳ないでしょーが！！ ちゃんと出来る事を教えなさーいっ！！」

「わ、わかったよいずみ！ わかったから少し落ち着けて！ せっかくの可愛い顔が台無しだぞ！？」

いずみちゃんを必死になだめてる友成を無視して俺から真沙美ちゃんに話す

「真沙美ちゃん、俺達が教える事はもうないよ、真沙美ちゃんは努力したからとても上手くなった、自信をもっていいよ、後は皆で

力を合わせて頑張ればきつといい結果が出るよ。」

「そうなんだ・・・じゃあ、みんなで頑張れば絶対に勝てるんだよね？」

絶対とか言えないけどな・・・勝負に絶対は無いのだから、それにまだ小さい子供なんだし勝ち負けじゃなくスポーツを通じて皆で協力しあう事の大切さを学んでほしいんだけどな

「ねえ貴志、あっちのベンチに座ってる子、さっきからずっと貴志達を見てるけど私達の中で誰か知り合いでもいるのかな？」

彩花に言われベンチの方に目を向けると確かに少年が居た、しかし誰かに似てるな、誰だったかな・・・

「アオ、そろそろ帰ろうぜって、あの子・・・まだ居たのかよ？」

いずみちゃんと一緒に来た友成だったが俺の視線の先にいる少年を見て驚いてる、友成の知り合いなのか

「何だよトモ、お前、あの子の事知ってるのか？」

「いや、知らない子だ、でも俺達がこの公園に来た時から居たと思うんだ、だけど1人だしもう6時過ぎてるしそろそろ帰さないと親も心配するだろうな。」

それには同意だ、俺と友成は少年に声をかけようと近づくと少年は写真を持っていた、その写真をつい見てしまうとそこには・・・

『 母さん・・・。』

その写真に写ってたのは俺と里奈の実母、静香と写真を持ってた少年だったのだ、どういう事だ！？ この少年、母さんとどんな関係なんだろうか・・・。

第百五十八話（後書き）

その内に第二話や第三話も修正しようかな・・・。

第百五十九話（前書き）

久しぶりに里奈と夕奈が出てきます。

第百五十九話

公園にいた何故か母さんの写真を持っている少年を連れて俺は今、家に帰ってる、友成や彩花達は当然、俺が少年を連れて帰る事に驚いてたが俺と一緒に住んでる叔母さんの息子だからと適当な説明をすると

『 そうか・・・だったらちゃんと連れて帰ってやれよ、じゃあなアオ、今日は世話になったな。』

それだけ言つと友成はあつさりといずみちゃんや真沙美ちゃんと一緒に帰っていった、彩花も

『 ふうん・・・あの叔母さんのねえ・・・でもなんか・・・里奈に似てるわね・・・まあいいけど、じゃあね貴志、今度は2人つきりでデートしよーね。』

疑念のある表情を残して帰っていった、里奈に似てるか・・・まさかこの少年、母さんと例の浮気相手の子供なのか？ つまり俺達の異父弟ってやつか・・・

『 ……ねえ、本当にお母さんはお兄さんの家に居るの？ どうして？ 』

一緒に歩いてる少年が不意に聞いてきた、よく顔を見ると顔つきは確かに里奈に似てる、里奈を少年にしたらホントこんな感じだ、俺とはあまり似てないが

『 うーん、まあ、いろいろワケがあつてね・・・それより坊主は

どうして1人で来たんだ？ 何故この街にお母さんがいるってわかつたんだ？」

「坊主じゃない、敦士だよ、市原敦士、お兄さんの名前は！？そんな頭してるけど日本人なんですよ。」

生意気な坊主だな、しかしそれでも俺の種違いの弟だ、これしきで腹を立てては大人気ない、俺は自分の名前を敦士という名の少年に告げた、すると少年は

「青山って・・・もしかして、お兄さんもお母さんの子供なの！？」

母さんから俺や里奈の事を聞いてたのかな？ 驚きの表情で俺を見る少年に俺は

「そうだよ、俺と敦士のお母さんは同じなんだ、お父さんは違うけどね、ていうかさっきの俺の質問に答えてほしいな。」

正直に話した、敦士も動揺した表情をすぐに元の落ち着き払ったものに戻し俺の質問に答えてくれた

「お母さんから手紙が来たんだ、その手紙にここの住所が書いてたから・・・どうしても僕、お母さんに会いたくなつたんだ・・・お父さんは仕事が忙しいから・・・でもちゃんとお母さんに会いに行くって手紙は置いてきたけどね。」

敦士のお父さん・・・確か事業に失敗して借金を作り母さんだけ置いて敦士と夜逃げしたんだよな、父親としても夫としても最悪だな、なんで母さんも親父を捨ててそんな男を選んだのか・・・そのせい

で里奈や俺がどんな目にあったか・・・改めて思い出すとやはり母さんをあの家に住まわせる事は甘いのかな。

家に帰ると里奈の他に夕奈ちゃんも来ていた、玄関で俺と一緒にいる敦士を見た里奈と夕奈ちゃんは

『お兄ちゃん、誰なのその子？ どうしてウチに連れて来たの？』

『

『この子・・・里奈にそっくり・・・まるで姉弟みたい・・・。』

それぞれの感想を述べる、敦士が自分に似てると言われた里奈は戸惑いつつも

『そうかなあ・・・似てるかもしれないけど姉弟じゃないよ、里奈の兄妹はこの世に貴志お兄ちゃんただ1人なんだもん！』

ハッキリと否定した、実はお前の種違いの弟なんだけどな・・・だけれどあまり言いたくはない、母さんを嫌ってる里奈はもしかしたら母さんの息子である敦士にも辛く当たるかもしれないから、里奈は嫌いな人間にはとことん冷たい子だからな、人の好き嫌いの差が激しすぎるんだよな、まるで曹叡の父、曹ヒみたいだよ

『それはいいけど静香さんは？ この子、静香さんに会いに来たんだよ。』

なるべくこの2人に分らないように敦士と母さんを会わせたい、不要なトラブルは避けたいからな

『あの人ならどこかに出かけたよ、それよりこの子、あの人に用

があるんだ、ふーん・・・。」

里奈が訝しげに敦士を見てる、敦士も探るような目つきで里奈を見てる、お願いだから姉弟でいらぬトラブルは起こすなよ・・・。

第百六十話（前書き）

特に話の進展はありません、あしからず。

第百六十話

『ねえねえお兄ちゃん、里奈が作ったバタークッキーは美味しいかな？ 里奈、お兄ちゃんの為に一生懸命作ったんだよ 』

そう言っただけ俺の右隣にすっかり陣取り自慢の手作りクッキーを食べさせてくれる我が妹は可愛らしかった、そして俺の左隣には

『お兄さん・・・私の作ったココアとバナナのタルト・・・どうです？・・・私だって・・・お兄さんを喜ばせたくて・・・真剣に作りましたから・・・』

しおらしい事を言ってくれる夕奈ちゃんがいた、俺は今、美少女2人に囲まれそれぞれが腕を振るって作ってくれたお菓子を食べながら母さんの帰りを待つという極上のひとときを過ごしていた、そして俺と同じく母さんを待つ敦士も2人の作ったお菓子を食べていた、食べ終わると敦士は一言

『まあまあかな・・・2品とも一応はうまいけどクッキーは少し甘さが強いしタルトは味が濃いよ。』

素直に美味しいと言えないのかこの坊主は！ しかし里奈も夕奈ちゃんも敦士に何か言うでもなく

『そういえばお兄ちゃん、今日は帰りが遅かったけど何してたの？ まさかり奈に隠れて奈津美さんか彩花さんとデートとかしてたんじゃないでしょーね！ もしそうだったんならお兄ちゃんにはお仕置きしちゃうからねっ！ 』

『 里奈・・・お兄さんにお仕置きなら・・・私も手伝うから・・・』

やけにお仕置きの部分を強調して言う2人の乙女、まあいつもの事だ、俺は2人に今日の真沙美ちゃんへのサッカー指導の事を説明した、すると2人は

『 そーだったんだ、彩花さんとデートしてた訳じゃないんだね、よかったー、だけど女の子がサッカーとかあんまりないよね。』

『 里奈・・・今はサッカーする女子も少しずつ増えてるらしいよ・・・女子サッカー部のある学校だってあるんだから・・・。』

それぞれに思った感想を話してる、そんな中、俺達の話に黙って聞いてた敦士が

『 さつき公園でお兄さん達がサッカー教えてたあの女の子の事？ あの子、女の子にしちゃ運動出来る方だね、男子と授業でサッカーの試合をするみたいだけど勝てるといいね。』

真沙美ちゃんにエールを送る、同じ年くらいの真沙美ちゃんには素直なんだな

『 何なのそれ？ 君もお兄ちゃん達と居たの、それはいいんだけどあの人に何の用なのかな？ まあ私には関係ないけどね。』

里奈は嫌ってる母さんならみの事なので不快そうに敦士に噛みつく、今のところはまだ里奈の言い方も穏やかだけどいつ悪い方に化するか・・・いざとなったら俺がなんとかしなきゃな、この2人の兄として

『 ……確かにお姉さんには関係ないよ、分かってるじゃないか。』

敦士もなんというか・・・目上の人間には生意気な奴だな、今はまだ小学生だからいいけど大きくなってもその性格が変わらないのならきつと苦勞するだろうな

『 お兄さん・・・この子・・・あの叔母さんに用があるんですよ・・・叔母さんの携帯に連絡してこの子が家に来てるって言えば・・・早く帰ってくるんじゃないですか・・・。』

なんと！ そんな簡単な事になぜ気づかなかったんだろうか！？
さすが夕奈ちゃん、俺は早速母さんの携帯に電話してみた、すると

『 うーん、話し中みたいだな、もう少ししてまた掛けるか、しかし誰と話してるんだろうな・・・。』

『 だいたいどこに行っただんだろうね？ あの人、この街に知り合いないなんていないのに・・・。』

里奈の疑問ももつともだ、この街に母さんの知り合いはいないはず、敦士も母さんが帰ってこない事に不安そうな表情をしてる

『 敦士、また後で電話してみるから、静香さんも今日中には絶対ここに帰ってくるよ、だから一緒に待とう、なっ。』

敦士を励ましそんなこんなで待つ事一時間、時刻は8時になり夕奈ちゃんも帰っていった、それでもまだ母さんは帰ってこない、俺の携帯にも電話はこない、一体どうなってんだ？

第百六十話（後書き）

・
・。次話で静香と敦士の再会を、そして次々話で直樹を出そうかと・

第百六十一話（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません。

第百六十一話

午後八時を過ぎてもまだ母さんは帰ってこない、仕方なしに俺と里奈と敦士の3人で先に夕食をする事にした、食卓に並ぶ里奈手作りのハンバーグはよい香りを漂わせ食欲をそそる

『お兄ちゃん　今日のハンバーグはソースに凝ったんだよ、お兄ちゃんに気に入ってもらえたらいいんだけどなあ……。』

『ああ、いい匂いしてるし美味そうだよ、なあ敦士、こんな美味しいハンバーグなかなか食べられないぞ、ラッキーだなお前。』

相変わらずのシスコ兄ぶりを発揮する俺、しかし本当に里奈の料理の腕前は主婦の人に勝るとも劣らない、さすが小学生の頃から俺や亡き親父の食事を作ってきただけはある、そんな里奈の料理を自慢げに語る俺に敦士は冷めた口調で言う

『。。。別に食べられたら何でもいいよ、確かにコンビニとかの弁当よりはマシみたいけどね。』

これまた相変わらず口の減らない坊主だ、母さんは敦士にどんな教育をしてるのやら、友達とかいるのか？

『里奈だってお兄ちゃんや友さん、蒼太くん以外の男に料理を作るのは心外だけど君の分だけ作らないワケにはいかないでしょ、嫌なら無理に食べなくてもいいよ、お兄ちゃんに食べさせてあげるから。』

里奈は無表情で敦士に言う、せっかく作った料理をあんなに言われ

怒ってもよさそうなのだが里奈は特に怒ってる様子もない、ただ無関心といっただけだ

「と・・・とにかく食べようか！　なあ、俺あ腹ペコでしょうがないんだよ、いただきまーす。」

凄く冷めた空気の流れる中、真っ先に俺が食事を始めると里奈も敦士も食べ始める、ハンバーグを一口食べた敦士は顔を綻ばせ

「美味しい・・・。」

とただそれだけ言った、それからはバクバクと食べ続けご飯もおかわりした敦士は結局完食した、その様子を見てた里奈は

「結局食べるんじゃない、別にいいけど・・・だけどあの人遅いね、どこで何してるんだろ？」

少しだけ笑みを浮かべた表情を敦士に向ける、そして里奈にしては珍しく母さんがまだ帰ってこない事を気にしていた、もしかすると今ならと思った俺はある事の為に敦士を先に風呂に入らせ里奈とリビングに2人だけになると話を始めた

「なあ里奈、お前、敦士の事どう思ってる？　夕奈ちゃんも言ってたけど見た目だけはお前にそっくりだろ、実は・・・。」

「あの人の子供なんですよ、そのくらい里奈だって分かってるよ、あんな小さな子が1人であの人に会いに来るなんて親子としか考えられないもん。」

知ってたのか！？　まあそりゃそうだよな、普通それしか思わない

だろ、なら話は早い、俺は話を続ける

「その通りだ、そして敦士もお前や俺が父親の違う兄弟だったのも知ってる、里奈、敦士もあんな可愛げのない坊主だけど母親と離れて暮らしてて淋しかったんじゃないかな？」

「・・・そんなの・・・里奈には関係ないもん。」

「確かにそうだな、俺だって関係ないよ、でもだからといって敦士に冷たく当たるのは違うんじゃないか、お前が母さんを恨む気持ち俺だって良く分かるけどそれと敦士はそれこそ関係ない話だろ。」

俺がしたかった事は里奈と敦士の関係の改善だった、里奈は自分を捨てた母さんだけでなくその息子の敦士も恨んでるふうだった、しかしそんな事情を知らない幼い敦士には何ら罪はない、せめてもう少し敦士への態度を柔らかくして欲しくて里奈に話してみたのだ

「じゃあお兄ちゃんは・・・あの子の事、どう思ってるの？」

「俺か、そうだな・・・可哀相な奴・・・かな？」

「可哀相って？」

里奈が目丸くして聞いてくる、俺は敦士に対して感じてた事を里奈に話した

「だって父親のせいで借金取りから追われる生活を送ってたんだろ、あんな坊主が・・・その上母親とは離れ離れにされてさ、父親がまともな人だったら敦士もあんな性格じゃなかったんだろ？」

多分、そう思うと可哀相だな。」

里奈は黙って俯いてる、里奈だって他人の痛みや辛さが分かる子だし、きつと淋しかったであろう敦士の気持ちも分かってくれるはず、そう思っていると玄関のドアが開く音がした、母さんがやっと帰ってきたのか

「ごめんなさい、貴志、里奈、ちょっと友達と遊んでたらこんな時間になって・・・って、あれっ、風呂には誰が入ってるの？」

リビングに入ってきた母さんが風呂場を見てそう言っていると直後に敦士が風呂から上がってきた、ここに居るはずのない息子を見た母さんは一瞬目をこすり

「えっ・・・敦士・・・どうしてここに？」

あっけにとられ立ち尽くしていた、敦士もまた

「お母さん・・・。」

あどけない子供らしい表情を見せる、やっと母子が再会できたのだ、敦士も嬉しいだろうな、しかしこれからどうしようかな・・・。

第百六十一話（後書き）

あと6、7話くらいで静香絡みの話は終わらせる予定です、次は蒼太の話にしようかと。

第百六十二話（前書き）

また更新が遅れまして申し訳ございません、私生活がかなり忙しいので・・・久々に蒼太と紗恵の登場です。

第百六十二話

今日も当然のように里奈や夕奈ちゃん、奈津美さんや彩花と一緒に登校してる、素晴らしきかなハーレム人生、生きててよかった・
・なんて友成に言ったら発狂するだろうな

『まあっ、昨日は真沙美さんにサッカーを教えていたのですか！
真沙美さんに教えたのでしたら私にも教えてほしいですね。』

『羨ましいな・・・お兄さんと・・・友成先輩が教えたなら・・・
その子・・・きつと上手くなったはずだから・・・』

昨日のサッカーのコーチの事を奈津美さんに話すと少しおかんむりにさせた様だ、しかし奈津美さんにサッカーは似合わないだろ、奈津美さんの運動能力は正直並以下だからな

『でもあの子、いずみの従妹だっけ？ 真司も大変よね、いずみに美鈴さんに真沙美ちゃんかー、モテる男はつらいよねー、貴志はそこんトコどう思う？』

『俺に聞くなよ・・・でもあれでトモはいずみちゃん一筋だからな、美鈴さんも美人だけどトモにしたら未来の義母になる人だろうし真沙美ちゃんと付き合ったらそりゃ犯罪だろ。』

だいたい友成はよく俺を羨ましがるがあいつだってハーレムだろう、いずみちゃんも美鈴さんも相当の美人だ、真沙美ちゃんもおそらく将来は美人になるであろう顔つきだし

『そーだね、きつと友さんといずみさんは結婚して幸せになるよ、

そしてお兄ちゃんも里奈と結婚して幸せになるんだよねっ　子供
は何人がいいかな。』

また里奈が頭が痛くなるような事をのたまう、兄妹で結婚とか無理
だろうが、俺達は義理の兄妹じゃない、れっきと血の繋がりがあ
る実の兄妹だ、ちなみに昨日、母さんに会いに家まで来た俺達の異父
弟の敦士は家で母さんと過ごしてる、本来なら敦士も学校があるの
だがもちろん休んでる、今日は金曜日だからまだいいけどあまり敦
士を長居させるのは良くない、出来たら母さんと一緒に帰ってもら
うのが一番いいのだが

『あつ、蒼太ちゃんと紗恵ちゃんだー！。』

里奈の指差す先には30センチくらい身長に差のあるカップル、蒼
太と紗恵ちゃんが並んで歩いていて、蒼太達も俺達に気づくと

『おはようございます皆さん、今日も皆で登校ですか？　もう習
慣ですね。』

『おはようございまーすっ！！　青山先輩ったら、可愛い女の子
4人と一緒に登校なんてまんまラブコメ小説の主人公じゃないです
かー、あたしも入ったら5人ですよねっ！　いつそいずみ先輩も入
れて6人にしちゃいますか、ふふっ。』

朝からクールな蒼太と朝からハイテンションな紗恵ちゃん、身長差
といい性格といい凸凹な2人だけど波長が合うんだろっ、蒼太みた
いな大人びたクール男には紗恵ちゃんみたいな子供っぽいお気楽娘
がピッタリ来るのかもしれないな

『へえ、友成先輩とそんな事したんですか、その子の為に、はは

っ、やっぱり青山先輩って根っからのお兄ちゃん気質ですね、里奈さんや夕奈さんが慕うのも分かりますよ。』

蒼太達にも昨日の話をすると蒼太から照れくさい事を言われる、しかしいつ見てもこいつはイケメンだな、少し老けてる感もあるが

『そーそー、昨日といえば、蒼太がチーズケーキ作ってくれたんですよー 程よい甘さで食べやすかったし、ねー蒼太 』

『やめろよ紗恵・・・恥ずかしいだろ。』

チーズケーキとか、そんなの作れるのか蒼太は？ 以前にも里奈から蒼太が旨いクッキーを作ったと聞いたけどお菓子づくりにもハマってるのか

『すごーい、蒼太くんってお菓子作るの上手いんだー、よかつたら今度里奈にも教えてほしいなあ、お兄ちゃんに美味しいケーキ作っただげるんだからー。』

『そんな・・・俺なんか里奈さんに教える事なんてないですよ、青山先輩を満足させる料理は里奈さんにしか作れませんから。』

蒼太がそう言った瞬間、3人の美少女が反論した

『そんな事ない・・・私だって・・・お兄さんを喜ばせる料理・・・作れるんだから・・・。』

『ちよつと蒼太、アンタ、自分の姉を甘く見すぎじゃないかしら？ あの手作り弁当対決を制した私の弁当は貴志の1番のお気に入りなんだからねっ！ 』

『 蒼太くん、私だってあなたのお姉さんや夕奈さん、そして里奈さんにも負けない自信がありましたよ、近い将来、貴志くんの妻として毎日料理を作るのは私ですから。』

・・・恥ずかしい、穴があったら隠れたい気分だ、他の生徒も登校してるのにこんな話は羞恥プレイだろう、いつの間にか横にいた紗恵ちゃんが笑いながら

『 ふふふつ、大変ですね、青山先輩 卒業までにちゃあんと選べるんですか？ あたしでよかったですらいつでも相談に乗りますからね、楽しみだなあ、青山先輩が誰を選ぶのか。』

楽しみにされてもな・・・人事だと思って好きに言ってくれるよな、でもあと半年、俺は誰を選ぶのか？ 奈津美さん、彩花、夕奈ちゃん、もしかして里奈？ 母さんや敦土の問題もあるがこっちの問題も重要だ、そして母さん達の問題は今日、大きな局面を迎えるのをまだ俺は知らなかった・・・。

第百六十三話（前書き）

短いですが少し真面目な話です、友成らしからぬというか・・・。

第百六十三話

奈津美さんと帰る放課後、いつもながら緊張する、奈津美さんから漂う気品、ロングヘアーから見える色っぽいなじ、制服を着てても分かるスタイルの良さ、同世代のアイドルを相手にしても奈津美さんは決して引けを取らないはずだ

『今日の真司くんの話、すごく考えるところがありましたよね、さすが刑事を目指してるだけありますわ、子供好きの真司くんなら尚更ですわね。』

今日の昼休みもまた、友成や奈津美さん、彩花と雑談してたのだが友成がよく親父さんと議論してるという話題になり最近はどうな議論してるんだと聞いたら

『我が子を車の中に放置してパチンコ等をするような親をどうしたら無くせるか？』

といういつものくだらなさ100%の議論とは違いえらく真面目な内容だった

『パチンコをするなどは言わないけど店の方もつと駐車場の車を見回るとかしたらいいと思うんだ、こんな事で犠牲になる幼児を1人も出さない為にな。』

友成が神妙な面もちで話すと隣で聞いてた彩花も

『凄いね真司、高校生でそんな議論する親子なかないわよ、でもホントそうだよー、店の対応もそうだけど第一に親だったら

子供置き去りにしてパチンコするなって話よね。」

友成に同調してる、確かにそんなニュースはたまに耳にする、信じられないが現実での出来事、子供好きの友成には辛い事実だけとな

「子供を大事に想う気持ちがある親ならそんな事はしらないと思います、子供よりもギャンブルの方が大事っていう親がそんな悲劇を起こすんですよね、悲しいですわ……。」

奈津美さんも沈痛だ、でもそんな悲劇を少しでも無くそうと考えてる友成は立派だと思う、普段の言動にはバカな所があるけど。

そんな昼休みを思い出す帰り道、自然と奈津美さんとの会話も弾む

「フフフっ、貴志ちゃんと2人きりで帰れるなんて嬉しいですね」

「」

「ああ、俺も奈津美さんと帰れて嬉しいよ。」

「ねえ貴志くん、周りから見たら私達は恋人同士にしか見えませんわよね、私……貴志くんが前田さんと付き合ってた頃から、いや、貴志くんと初めて出会ったあの時からずっと貴志くんだけでしたわ、この気持ちに嘘はありません。」

あの時から奈津美さんは俺を想ってたんだよね……俺と理子が付き合ってるのを奈津美さんはどんな気持ちで見てたんだろ？ よく考えたら俺って奈津美さんに酷い事したよな、それでも奈津美さんは俺を……奈津美さんと理子は友人同士だったけど理子が俺を裏

切り工藤と付き合っ て以来2人は疎遠になった、そして奈津美さんと俺の距離も一気に縮まった

『 奈津美さん・・・奈津美さんの気持ちは嬉しいよ、そんな前から俺を好きでいてくれてる奈津美さんの想いにできたら俺も応えたい、でも・・・。』

『 分かってますわ、彩花さんや夕奈さん、そして里奈さんもいますものね、彼女達の想いも私同様真剣ですもの、そんな簡単に決められませんわ、でも私は待ちます、貴志くんが誰かをちゃんと選んでくれるその日を、願わくば私を選んでほしいですけどね。』

その後奈津美さんと別れ家に帰り着く、里奈は夕奈ちゃんと遊んで帰るとメールがあつた、家には母さんと敦士、そしてもう1人いた、その人は俺を見ると

『 初めまして、君が貴志くんかい、なるほど、哲也によく似てる・・・さすが親子といった所か。』

気さくに挨拶してくる、この人、敦士の父親か？ 何しに来たんだろ・・・。

第百六十四話（前書き）

お久しぶりです、ようやく退院致しました。

まだ本調子ではありませんがなんとか頑張ります。

第百六十四話

学校が終わって家に帰ってみたら母さんと敦士、それと見知らぬ中年の男の人が居た、多分この人が母さんの浮気相手なんだろうな

「お帰り貴志、あなたに話があるの・・・ちょっといいかしら？」

「

母さんが改まった態度で俺に問いかける、俺もなんだか気になったので了解の返事を出した、すると母さんは単刀直入に、そしてあまりにふざけた事を言い出す

「貴志、悪いけど里奈と一緒にこの家から出て行ってほしいの、そしてこの家を私達家族3人に譲ってほしいの。」

何を言ってやがるこの女！！行くトコがないから仕方なく居させてやったというのに恩知らずもいいとこだ！思わず俺も言い返した

「何だそれ、そんなの出来る訳ないだろう！恥知らずもいい加減にしろ！！それよりその人、敦士の父親なんだよな？」

そのまま俺は自分の家でもないのにさも我が家のごとくくつろいでる浮気相手に毅然と言い放った

「せつかくここまで来たんだから2人を連れて帰ってもらえませんか？何やら借金がある様だけどそんなの俺や里奈には一切関係ない、あなたも人の親なら子供や妻の為に頑張って働いて返そうとは思えないんですか？」

俺が言つと浮気相手の男は落ち着き払つた態度で返事を返してきた

『 そうだね、全くもって君の言う通りだと思つよ、僕だつて本当はこんな事、気が進まなかつたんだ、あまりにも君達に悪いからね・・。』

『 だつたら・・。』

この人は思つたより常識人なのか？ そう思つてたら母さんが口を挟んできた

『 さつきから何を偉そうに言つてるの！ アンタは黙つて里奈とこの家を出て行けばいいのよっ！ アンタも18になつたんだから住み込みのバイトでもなんでも出来るでしょ、里奈も私達というよりもアンタと一緒にいた方が嬉しいでしょうからね。』

あまりの言いぐさにあ然となつた、それが仮にも我が子に向けて言う台詞か！？

『 ちよつと静香、それはあんまりだろ・・貴志くん、急いで結論を出す必要はないよ、ゆっくり考えてくれたらいいから。』

おいおい・・少しは分別のある大人かと思つたがやっぱりこの男もまともじゃないな、どうしたらこんな事を言えるのか・・こんな両親を持つ敦士が不憫でならない、その敦士は黙つたままだ、何を思つてるのか俺には分からない

『 結論ならもう出てますよ、俺も里奈もこの家から出て行く気は微塵もない、むしろ出て行くのはあなた達だろ、どうしても嫌だと言つならこつちも法的手段に出るしかないけど。』

俺は本気だった、確かにこの家も元々は俺達の家じゃないけどだからといってこの連中の言いなりになる理由などない、実母だか何か知らないが俺達を捨てた女にこっちも情はないしな、そんな母が未練がましく反論してくる

『出来るものならやってご覧なさいよ！！ 貴志、この家はアンタのじゃないのよ！ お義父さんの家なのに何でアンタが偉そうにしてるのよ、お義父さんに頼んで一緒に住めばいいじゃない、何もこの家にこだわる必要はないでしょ。』

『それはこっちの台詞だ！ 母さん達こそこの家にこだわる理由なんてないだろ、俺達はお爺さんから直にこの家に住みなさいって言われたんだ！！ 何と言われても絶対に出て行かないからな。』

俺もひさびさに熱くなってた、だから気がつかなかった、いつの間にか里奈が帰ってきてた事に・・・。

第百六十四話（後書き）

次回は里奈視点でいきます、しかし静香が鬼母すぎる・・・。

第百六十五話（前書き）

今回は里奈視点です、ちなみにリハビリは順調です、職場の後輩達も協力してくれてありがたい限りです、そして第二話も修正しました。

第百六十五話

この女は何様のつもりなのかな？ 人の良いお兄ちゃんにすぎりつきウチに住みつくだけでもウンザリなのにその上お兄ちゃんと私にこの家を出るとかどんな神経してるんだろ、恥を知らないんだねきつと

『 里奈・・・お前、いつから・・・。』

お兄ちゃんもさすがに怒ったのか私が帰ってきてたのも気づかないくらいだった

『 今さっきだよ、それよりお兄ちゃん、まさかこんな奴の言う通りに出て行ったりしないよね？ こいつ等こそ追い出すべきだよ、だいたいこの家族がどうなろうと里奈達には全然関係ないじゃない。』

『 里奈！！ 目上の人に向かってこいつとは何よ！？ 少しは口の効き方に気をつけなさい！ 』

すごいねこの女、ここまで自分を省みない人っているんだ、ホントにお兄ちゃんはこの女のお腹から産まれたのかな？ とても信じられないよ、あつ！！ でももしお兄ちゃんと里奈が異母兄妹だとして結婚できるかもっ！ それならそれで悪くないかもだね

『 まあ里奈も聞いてたのなら話は早いわ、そういう訳だから早いトコ自分達の荷物をまとめときなさい、明日には出ていけるようにね、分かった。』

『 ちよつと待てよ母さん！ 俺達はある行かないってさつきから言ってるだろう！！ そつちこそ出て行く準備をしるよ、明日には出ていけるようにな！ 』

おつ、さすがのお兄ちゃんも今回はお人好しにはならないね、でも当然だよ、この家はお爺ちゃんが私達に譲ってくれたんだから、この女が私達を捨てたからお爺ちゃんの子である私達の父親はあんなになった、残った私達に家庭内暴力を振るうようになりそれまでの頼れるお父さんはもう二度と頼れるお父さんに戻る事なくこの世を去った

『 まだそんな事言ってるの貴志、いい加減に諦めなさいよ！ 私達にはもうこの家に頼るしかないの！！ ここなら借金取りも来る事はないし直樹も新しい気持ちでやり直せる、親に頼る事が出来ない私達にはもうこうするしかないの！ 』

『 バツカじゃない、どうしてそうなるのよ？ 意味分かんないんだけど。 』

本当に意味が分からなかった、この女は、いや、あの直樹とかいう男もそうだけど自分自身で努力しようとは思わなかったのかな？ 普通そうだと思うけど、あつ！ そつか、この連中は普通じゃないんだ、だったらしょうがないかな

『 里奈、別にあんたに分かってもらおうとは思ってないわ、とにかく私達はこの家に住むから、今日からここが直樹や敦士、そして私の家なの！ 誰が何と言おうとね。 』

『 ……ねえ、お母さん、もうやめようよ、この家は僕達の家じゃない、このお姉さんとあのお兄さんの家だよ、僕達が出て行かな

きやいけないんだ。』

お互い平行線な言い争いを続ける私達にあの女の息子で私達の異父兄弟である敦士が割って入ってきた、両親はあんなだけこの子はまともみたい、だけど

『敦士、どうしたの、なんでそんな事言つのよ！？ 敦士は何も気にしないでいいんだから、ここが今日から敦士の家なの。』

まだこんな事をこの女は言ってる、幼い我が子の前で恥ずかしくないのでかな？ なんだかこの子が可哀相になってきた、きつとこんな両親だから無愛想な子になったんだろうね

『敦士・・・可哀相だよな、もつとまともな両親だったらお前もこんな思いしなくて済んだだろうにな、出来たらお前だけでも助けてやりたいけど・・・ごめんな、ダメな兄貴で。』

お兄ちゃんは申し訳なさそうにあの子に言ってる、優しいお兄ちゃんとは本当はあの子だけでもこの家に住まわせてやりたいんだろうけど現実にはそんな訳にもいかない、さすがにあの両親もそんなの許さないだろうし、そんな中、あの直樹とかいう人がお兄ちゃんに話をしだした

『貴志くん、すまない・・・君たちには本当に酷い事を言ってるのは僕も分かってる、だけど静香がこうなったのは君たちの父親のせいなんだよ・・・。』

私達の父親のせい？ なんなんだろう、そして直樹さんは話を続けるのだった。

第百六十六話（前書き）

ようやく更新できました、先日まで小説を書ける環境ではなかったので・・・今話も里奈視点です。

第百六十六話

直樹さんという人の話は正直、嫌な内容だった、私達の母さん・静香が亡き父と結婚したのは騙されたからだっただけだし、しかも母さんは父との間に子供まで出来てたっていうからでかかった結婚、そしてその子供ってお兄ちゃんなんだよね・・・

『君達の父、哲也は僕が留学したアメリカで他の女性と結婚したという嘘を静香に話したんだ、僕と静香を引き離して自分が静香と結ばれる為にね。』

『そうよ、それだけじゃなくて哲也は直樹のある事ない事を私に吹き込んで私を騙してたのよ！ しかも妊娠までさせて・・・。』

もしそれが本当なら確かに父のした事は酷いと思う、でもどうしても嫌だったなら結婚なんてしないはずよね？　いくら騙されたとはいっても結婚に同意した時点で母さんに父の事とやかく言う権利はないと思うけどな・・・

『3年の予定だったはずのアメリカ留学が思ったより長びいてね、僕も早くに静香に連絡すればよかったんだけどかなり忙しくて・・・、ようやく連絡がとれた時にはもう静香は哲也と結婚の約束をしてたんだ。』

『あの時の私は直樹の事が信じられなかった・・・近くにいないくて・・・そんな時に哲也に優しくされて・・・しまいいは妊娠して結婚して、でもいつかは直樹の事も忘れられると思ったわ、でも・・・あの日・・・。』

あんまりよく分からないけど要するに直樹さんと遠距離恋愛してたけどそのスキに近づいてきた父の事を好きになっちゃったのかな？確かに遠くの恋人よりも近くにいてくれる優しい男性に惹かれるのも仕方ないかもしれないよね、私はお兄ちゃん一択だからそんな事はありえないけどね

『日本に帰国した直樹さんと再会したんだね、そして親父の嘘を知ったのか・・・それで直樹さんと2人だけで・・・幼い俺達を置いて家を出た訳だ。』

直樹さんと母さんの話を聞いてたお兄ちゃんが口を開く、でもどんな事情があつたにしても母さんが私達を捨てた事実は間違いないんだもの、しかもこの家から私達を追いつくとか寝言は寝て言えって感じだよ！！

『そうよ、確かに私はアンタと里奈を置いて家を出たわ、哲也が私を騙したと知って・・・その哲也の子のアンタ達に愛情が持てなくなつたの、アンタ達に罪はないのにな・・・』

母さんは目を伏せて下を向く、わずかに私達を捨てた事に罪の意識はあるみたいだった、そして直樹さんも

『僕はどうしても静香とやり直したかった、出来たら哲也に会って一言言つてやりたかったけど静香に止められたんだ、本当は貴志くん、君や里奈さんも連れて行きたかったんだけど・・・当時の僕に幼い子供を2人も養う力は無かった・・・僕と静香だけで生きるのに精一杯だったんだ。』

そう言つてお兄ちゃんに頭を下げる、もし・・・この2人がお兄ちゃんや私を連れていったとしたら・・・どんな人生になつてたの

かな？ 父から暴力を受ける事はなかったんだろっけどそれで友さんや奈津美さん、夕奈ちゃんや蒼太くん達に会おう事もなかったとしたら私は父のトコに残って良かったと思ってる、友さん達に会えたからお兄ちゃんは・・・そして私も、友達の大切さを知る事ができたから・・・。

第百六十六話（後書き）

次話は早めに更新します、後2話で静香の話は完結します。

第百六十七話（前書き）

こんな時間に投稿します、仕事が昼夜交代になったので、今話は貴志視点です。

第百六十七話

『貴志！ もうこれ以上話すことはないわ、とにかく明日には出ていきなさい、もう決まった事なんだから！ いいわねっ！！』

まーだこんな事言ってるよこの人、ここまでくると清々しさすら感じるな

『しつこいわねあんたも、お兄ちゃんも私も出ていくわけないでしょ、あんた達こそ早く帰りなよ、借金取りに見つからない場所なら他にもあるでしょ。』

里奈も母さんに一步も譲らない、というか親父の友人だったあの直樹さんがもつとしつかりしてればこんな事態にならなかつたろうに、人の、敦士の父親なら父親らしくしてもらいたいな

『うるさい里奈！！ 親に生意気な口聞くなんて十年早いんだよ！ 大好きな貴志と一緒に出ていけるんだからアンタも幸せでしょう！ 2人でどこでも好きな所に行きなさいっ！！』

『お母さん・・・もうやめようよ、お父さんと3人でおうちに帰ろう？ 僕学校に行つてマサルくんやチ力ちゃんに会いたいよ。』

この期に及んでもまだ醜くわめく母さんに敦士がしがみつく、直樹さんも

『もういいんだ静香、僕がもつとしつかりしてればこんな事もしなくて済んだ、貴志くんや里奈さんも傷つける事もなかったんだ・・・だから帰ろう静香、僕達の家に、親子3人で。』

自分達の家に戻る旨の話をしだした、半泣きで母親にすぎる息子を見て心動かされたのだろうか？

『直樹っ！！ 今更何言ってるの！ あの家に戻ったらまた借金取りが来るじゃない！！ だから私達にはこの家が必要なのよ！』

もうこんな事を言ってるのは母さんだけだ、そんな母さんを浮気相手（というか夫か？）である直樹さんが優しくなだめる

『静香、この敦士を見てもまだそんな事言えるかい？ 君も僕も人の親としてとても恥ずかしく情けない、何故もつと早く気づかなかったんだろ？ ・・・今日この家に来て哲也の子供の貴志ちゃんと里奈さんを見てやつと気づいた、彼らをこの家から追い出すなんて出来ないよね。』

『直樹！ 哲也の子供だからじゃない、私達を騙して仲を裂いたあの男の子よ！！ 憎くないの！？』

おいおい、この人、自分の子でもあるとは考えないのか？ 俺も里奈も今更母親の愛情とか欲しくはないがせめて敦士には俺達みたいな思いはさせないでほしい

『確かに哲也を恨んだ事もあった、つまらない嘘をつき僕と静香をだましあげくには静香を妊娠させて・・・でも哲也は高校・・・いや、中学の頃から君を想ってた、その想いは本物だ、それに、貴志ちゃんと里奈さんに罪はない、そんなのは君を分かってただろ？ だから僕と一緒に十年前、哲也の家から出る時にせめて置き手紙だけでも言っただんじやないのか？』

そういやそんな手紙があつたな、どこにいても俺達の幸せを願つてるとかなんとか・・・それを聞いた母さんは目を伏せすすり泣き出した・・・

『私だつて・・・私だつて、貴志と里奈を連れて行きたかつた・・・憎い男の子である前に私が産んだ子だもの、でも当時の私や直樹に2人を養う事は出来なかつた、それでも私は直樹と行きたかつた・・・』

母さんは想い人と我が子をはかりにかけ想い人を選んだ訳だ、母親にあるまじき酷い行為なのは間違いない、友成が知つたら怒るだろうな、しかし母さんも女、親父と結婚したはいいがそれが親父の罠と知つたらそりゃ傷つくよ、でも

『母さん、直樹さんや敦士と帰るべきだと思う、直樹さんと母さんが本気で頑張る気があるなら借金も返せるんじゃないかな？ 親父がした事は俺から謝るよ、親父の息子だからね、母さんに苦しく辛い思いをさせてすまなかつた、だから母さん、これからは自分の家族の本当の幸せの為に生きてくれ、俺と里奈の事なら大丈夫だから。』

『貴志・・・私、私・・・うううつ・・・。』

俺の謝罪を聞くと母さんは泣き崩れた、直樹さんも敦士も母さんに近寄り慰めてる、とりあえず今日はこの3人はこのままにしておき俺は里奈と外に夕食を食べに行く事にした・・・。

第百六十七話（後書き）

やっと次話で静香達の話は完結します。

第百六十八話（前書き）

今話で静香のお話は終わりです。

第百六十八話

俺と里奈は近所のラーメン屋でとんこつラーメンを食べていた、今頃家では母さんと直樹さんがどうするのか話してるのだろう

『ねえお兄ちゃん、あの人達、ちゃんと帰ってくれるのかな？』

『どうだろうな・・・まあ安心しろ、いずれにしてもお前をあの家から出させる様な事は俺が絶対にさせない、絶対にな。』

いつもながらシスコン全開なセリフだ、店にあまり人がいないでよかった

『うんっ！ 信じてるからね、お兄ちゃん』

なんつー可愛らしい笑顔だ・・・こんな妹がそばにいて微笑んでくれたらシスコンにもなるだろ普通。

ラーメン屋からの帰り道、里奈との会話もはずむ

『そんでね、夕奈ちゃんと列車の話してたら友さんが言ってきたんだよ。』

『どーせまた何かワケのわからんエロい事言ったんだろ、どーしてあの男は年がら年中・・・』

今日夕奈ちゃんと遊んでいた里奈は駅近くの商店街で友成といずみちゃんにバッタリ会ったとか、なんでもいずみちゃんの母、美鈴さ

んの誕生日プレゼントを買いに来たとの事、本当に夫婦そのものだなあの2人は

『 ううん、よく分かんないけど 「 列車はただ人を乗せて運ぶだけのものじゃない、列車が走る姿を見て勇気づけられる人や列車が人の生きがいになったりする事もあるんだ。 」 とか言ってたよ、友さんって列車好きなんだねー。 』

・・・またさ？らい刑事ですか？ 本当に友成は香取刑事を心の師にしているな、それだけ好きって事なんだろうけど。

ウチに帰ってみると直樹さんが迎えてくれた、そして俺と里奈に頭を下げて

『 貴志くん、里奈さん、迷惑かけて申し訳ない、明日の朝一番の電車で帰ることにした、もちろん静香と敦士の3人でね。 』

『 そうですか……。 』

母さんを説得したんだろうな、そう決めてくれたならありがたい、今日だけなら泊めてあげてもいいだろう

『 それから僕は約3年ほど北海道に住み込みで働く事になったんだ、友人のツテでね、そうしながら借金を返していけばいつかは全部返済できるかもしれない、静香も働いて協力してくれるって言うてくれたよ、バカだな、最初からこうしてれば貴志くんや里奈さんに不快な思いをさせずに済んだのに……。 』

確かにそうだがこれからやり直せばいい、直樹さんに父親としての自覚があるならきつとうまくいくだろう

『もういいんですよ、これからは母さんや敦士の幸せの為に頑張って下さい、親父もそう願ってます。』

そして母さんも出てきた、心なしか顔つきが穏やかになった様に見える

『おかえり、貴志、里奈、敦士を寝かしつけてたところよ、あの子、明日は帰れるって喜んでたわ。』

そりや何より、地元に戻れば敦士も友達に会えるしな

『私も向こうに帰ったら働いて直樹さんと借金を返していくわ、また3年は会えなくなるけど今度は携帯やネットがあるしね、敦士にも寂しい思いをさせるかもしれないけどあの子なら分かってくれるわ。』

『そっか、頑張ってな母さん、応援してるよ。』

『ありがと貴志、安心なさい、もう二度とあなた達の前には現れないわ、あなたがこんな私を今でも母さんって言ってくれるだけで私は満足よ、これからは敦士に恥ずかしくない母親になるよう頑張るわ。』

母さんは二度と俺達に会わないと言った、その方がいいかもしれな
いな、母さんがやり直すのにもう俺達は必要ないのだから。

翌日、土曜日だから学校は休み、俺と里奈は朝早くから帰る母さん達を見送る

『 母さん、直樹さん、敦士、お元気で。 』

『 ありがと、貴志も里奈も元気でね。 』

『 貴志くん、里奈さん、哲也にも約束するよ・・・必ず借金を返して今度こそ静香と敦士を幸せにするとね、世話になったよ。 』

それぞれ会話を交わす、黙ってた里奈も敦士に

『 敦士くん、向こうに戻ったら友達いっぱい作りなよ、そしたら絶対楽しいから、あと・・・。 』

『 あと・・・何？ 』

たずねる敦士に里奈はイタズラっぽくウインクする

『 もう少し素直な男の子になろうねっ、あんまりツンツンしてる
と女の子に嫌われちゃうよ 』

『 頑張る・・・。 』

そんな里奈と敦士を母さんは微笑んでみてる、その視線に気づいた里奈はなんと

『 お母さんも・・・頑張ってね、敦士くんに寂しい思いさせたらダメだよ。 』

母さんにエールを送る、母さんも涙ぐみながらも

『 里奈・・・あなたには辛い思いばかり・・・母親らしい事なんて何一つしなかった・・・こんな私を許してくれるの？ 』

『 もう許すも許さないもないよ、幸せになってね、お母さん、里奈の事なら大丈夫だから安心して。 』

里奈は手を母さんに差し出す、そして母さんと里奈は手を握りあった、やっと母娘として心を通わせたようだ、少し遅かったかもしれないけど最後に話ができただけでもよかった

『 さようなら、貴志、里奈、あなた達の事は絶対に忘れないからね。 』

こうして母さん達は帰っていった、いろいろあったがこれでよかったんだ、きつと、どんなに離れてても母と子、その絆だけは決して消えるものじゃない、小さくなっていく母さん達3人を見ながら俺はそう思っていた・・・。

第百六十八話（後書き）

次話はまた友成絡みのバカ話になるかもです。

第百六十九話（前書き）

友成視点のお話です、ちなみに夜勤が終わりましたのでこの時間に更新できました。

第百六十九話

今日もまたさ？らい刑事旅情編のメインテーマが脳内で流れる金曜日の放課後、俺はいずみと駅前の商店街に買い物に来ていた、美鈴さんが二日後に誕生日だというのでそのプレゼントを買いに来たのだ

『しっかしあの美鈴さんももう四十か……。』

『あら真兄、女性は十代でも四十代でも変わらず女性なのよ、四十代でも可愛らしい人はいるんだから、ママみたいにね。』

そうだったな、美鈴さんはとても四十代目前には見えない若々しい未亡人だ、俺にとってはもう1人の母と呼べる人でもある、10歳の時に実の母を病気で亡くした俺をいずみと一緒に励まし色々と助けてもらった、その時の恩はいくら返しても返しきれないくらいだ

『ところで美鈴さんの喜びそうなプレゼントって何だろうな、どうにも分からなくて……。』

『真兄がプレゼントしてくれるのならママはなんでも喜ぶと思うよ、でもまたママがおかしな事言ったら私が直々に正義の鉄槌を加えるけどね』

鉄槌ってなんだろうな……。気にしても仕方ない、俺といずみは商店街を巡りながら美鈴さんの喜びそうなプレゼントを探し続けた。

駅前を彷徨していると美少女2人が歩いてた、ポニーテールがよく似合う目のパッチリした夕奈ちゃんと肩までのびるサラサラの黒髪が庇護欲をくすぐるBカップの妹系美少女、里奈ちゃんだった、2人

に気づいたはずが声をかける

『あらっ、里奈ちゃんと夕奈ちゃんじゃない、何してるのかしら？』

『あつ、友さん、いずみさん、こんにちば　今日もデートですかあ？　いいなー、私もお兄ちゃんとデートしたいよー。』

『駄目よ里奈・・・お兄さんとデートするのは・・・私なんだから・・・。』

うーむ、相変わらずのモテっぷりだな青山は、最終的に誰を選ぶんだろ？　俺なら4人全員美味しくゴチになり・・・いやいや、そんな事より早く美鈴さんへのプレゼントを買わなきゃな

『私達はあてもなくただプラプラしてただけですよ、友さん達は？』

『私のママが明後日誕生日なの、だから真兄とプレゼントを買いに来たのよ、よかったら里奈ちゃんも夕奈ちゃんも私達と来ない？　プレゼント買い終えたら何か食べに行こうよ。』

『いいんですか・・・私達、2人の邪魔になるんじゃない・・・。』

夕奈ちゃんが遠慮がちに聞いてくる、いじらしい娘だね、いずみも見習うべきだな、少しガサツだから

『気にしない気にしない、人数が多い方がにぎやかだし2人にも四十の女性にはどんなプレゼントがいいか聞き・・・ふぎゃ！』

『女性の年齢をいそれと言わない！！　デリカシーないよ真兄
っ！』

いずみの空手チョップが俺の脳天に炸裂した、だからガッツだというに、いずみにも奈津美さんや夕奈ちゃんのしおらしさの一割でもあればな・・・

『あらら、大丈夫ですか友さん？　まっケンカするほど仲が良い
といますから　それより私達も一緒に行つていいんですか？
行こうよ夕奈ちゃん。』

『もう、里奈つてば・・・いいんですか・・・友成先輩・・・い
ずみ先輩・・・せつかくのデートなのに・・・。』

『いーのよ夕奈ちゃん、さっ、行きましょ　真兄、私チョコレ
ートパフェ食べたいなー。』

『じゃあ里奈イチゴパフェがいいなあー　いいでしょ、真司お
兄ちゃん　』

うぐぐっ！　なんだこの破壊力120%の妹スマイルは、青山は毎日この天使のような妹と一つ屋根の下にいるのか・・・俺ならあんな事やこーんな事を・・・いかん、想像したら興奮してまうやないかーい

『いーよいーよ、イチゴパフェでもチョコレートパフェでも好きなだけ食べてくだされ、夕奈ちゃんも行こう、もちろん好きなの食べていいからさ。』

『友成先輩・・・ありがとうございます・・・じゃあ、私も・・・

。『

こうして俺はいずみと里奈ちゃんと夕奈ちゃん、いずれも美少女と呼ぶにふさわしい3人と商店街に向かう、やっぱり美少女に囲まれると気分いいね、出来ればこのままホテルに直行・・・ってワケにはいかない、親友の妹やその友達に手を出すほど俺は鬼畜じゃないからな、今はこのひと時を楽しむとするか。

第百七十話（前書き）

前回の続きです、自分は女性へのプレゼントにはあまりお金をかけませんでした、だからモテないのか・・・。

第百七十話

商店街を歩く俺といずみ、そしてたまたま遭遇して一緒に行く事になった里奈ちゃんと夕奈ちゃん、俺達を見る周囲の羨望の視線が心地よい、美少女3人を引き連れて歩いてるのだから当然なんだけどな

『いずみさんのお母さんにプレゼントですか？ 優しいんですね友さんって、それでどんなプレゼントにするんですか？』

『まだ決めてないんだなこれが・・・いずみは何でもいいって言うけどどうせなら喜んでもらえる様なのにしたいんだよな、美鈴さんには世話になってるから尚更ね。』

『だーからー、真兄からのプレゼントならママは何でもいいんだってば！ そこまで深く考えなくてもいいんだからっ！』

さつきからこんな堂々巡りでまだ決められずにいる、ただ商店街をブラブラしてても時間の無駄遣いだ、すると物静かな夕奈ちゃんが

『だったら・・・アクセサリーなんてどうですか・・・女性なら・・・大抵は喜びますよ・・・。』

的を得た意見を出す、確かに女性へのプレゼントとしては一般的だな、そして里奈ちゃんも続いて話す

『あとお花なんかもいいんじゃないですか？ 綺麗な花をもらったら私なら嬉しいですよー。』

フム、一理ある、花も女性へのプレゼントとしては定番だ、いずみ

にも聞いてみるか、2人でお金を出す事になってるから、金なら俺1人でいいと言ったのだから、いづみは引く訳もなく

「私からもプレゼントするんだから私もお金を出すのは当たり前じゃない！ この為にお小遣い貯めてたんだから、私もママに日頃の感謝を伝えたいの、私達2人からのプレゼントでしょ、真兄！」

こう言われては俺としては何も言えない、旦那さんを早くに亡くした美鈴さんが女手一つで懸命に育てた愛娘いづみ、俺でさえ美鈴さんには感謝してるんだからそんな美鈴さんの苦勞を間近で見てた娘のいづみならそう思っただけなんだろう

「じゃあアクセサリーショップにでも行くか、それから花屋だな・
・・。」

「アクセサリーと花ね、それじゃ行きましょ真兄、里奈ちゃんも夕奈ちゃんもナイスアドバイス」

そんな訳でまずはアクセサリー屋、夕奈ちゃんの意見を参考にしてシルバーのこじやれたイヤリングを購入、そして花屋では里奈ちゃんが勧めたプリザーブドフラワーとかいう枯れない花を購入した、この2点でしめて13700円なり、まあ金額の問題ではなく気持ちの問題だけだな。

約束通りにプレゼント購入後はファミレスに、いづみはチョコレートパフェ、里奈ちゃんはイチゴパフェを、そして夕奈ちゃんはカルボナーラをそれぞれ食べてる、俺はサイコロステーキ洋食セットを軽く完食、ここらで時間も5時前だったので帰る事にした

『友さん、ご馳走様でしたっ、私も友さんに何かお礼をしたいな・
・・。』

なら里奈ちゃんの処女を・・・と言おうものならいずみと青山によ
って俺の人生は確実にジ・エンドになる、まだ死にたくはない

『そんなのいーよ、里奈ちゃんや夕奈ちゃんのお陰でいいプレゼ
ントが買えたんだから、ありがとう。』

それから電車に乗って帰路につく、電車内ではいずみ達がガールズ
トークに夢中になってた

『それですね、夕奈ちゃんったら・・・。』

『なにに、夕奈ちゃんがどうしたの？』

『里奈・・・余計な事は・・・言わなくていいから・・・。』

どんな内容だろうか？ 何やら夕奈ちゃん絡みの様だけど、つい聞
き耳を立てるといずみから

『なーに盗み聞きしてんの真兄！ 女の子同士の話聞くものじ
やないよ。』

怒られた、そして彼女達の話は列車のゲームの話になったので俺は
つつい

『列車はただ人を乗せて運ぶだけのものじゃない、列車が走る姿
を見て勇気づけられる人がいたり列車が人の生きがいになったりし
たりもするんだ。』

あまりゲームと関係のない話をしてしまった、目をキョトンとさせる里奈ちゃん、いずみも呆れながら

『また香取刑事の受け売り？ ホント、真兄は好きなんだから・・・』

夕奈ちゃんもしおらしい笑顔で俺に同意してくれた

『そうですね・・・人によつては・・・列車が何よりも大切なものになったりしますから・・・』

ええ娘や、それでは夕奈ちゃんの初めてを俺がいただく・・・以下略。

里奈ちゃん達と別れいずみの家に帰ると今までの感謝の言葉と共にプレゼントを美鈴さんに渡す、美鈴さんは俺の予想以上に喜んでくれた、そして

『ありがとう真司くん、いずみ、私もあなた達2人には感謝してるわ、このプレゼント、ずっと大切に作るからね、それじゃ真司くん、今から私と一緒に風呂に入ってその後は・・・オ・ト・ナ・の時間を2人つきりで・・・』

『ママ・・・四十になっても相変わらずね、そのふしだらな性根に娘の私から正義の鉄槌もプレゼントしてあげるわ！！』

もはやお約束のいずみの鉄槌が美鈴さんと何故か俺にも下された、これもお約束なのだろうか？ しかしそんな美鈴さんに気になるお

・。相手ができようとはこの時の俺は想像にもしてなかったのだった・

第百七十話（後書き）

次回は蒼太のお話です。

第百七十一話（前書き）

今回は蒼太と紗恵と彩花のお話です。

第百七十一話

『 ありがとうございますーっ！ またお越しくださいますーっ！ 』

俺は今、とある牛丼屋でアルバイトをしている、単なる小遣い稼ぎなんだがこれも社会勉強の一つ、将来の為に学ぶ事は多い

『 おつかれー、今日も1日ご苦労様蒼太 』

バイトを終え店の外に出ると紗恵が迎えてくれる、幼さの残るツインテール、小学生と見間違う低身長、アニメの中から出てきた様なアニメ声、そして寂しい胸・・・しかし芯はしっかりした女性である、俺が過去を乗りこえられたのは紗恵に支えられたからだ

『 ありがとう紗恵、じゃあ行こうか。 』

俺は紗恵と歩き出す、時刻は七時過ぎ、週に五日、夕方の三時間だけのバイトだが紗恵との時間はなかなか取れない、まあ学校ではいつも一緒なだけとそこは学校、二人きりになどそうそうなれないしかし紗恵はいつもの元気な声で

『 今度の日曜はどこ行こっか！？ 蒼太は行きたいトコかないの？ 』

今度の休みの予定を話す、俺との時間を我慢してるであろう紗恵と楽しい時間を過ごすのは学校もバイトも休みの日曜しかないからな、紗恵の質問に俺は

『 だつたら冬服でも買いに行くか、あと温水プールとか行きたいな。 』

何の気なしに言ったのだがそれを聞いた紗恵はやけにニヤニヤと俺に顔を寄せる

『 蒼太ってば、そんなにあたしの水着が見たいの？ しょうがないなあー、じゃあ日曜は温水プールにレッツラゴーだー 』

別にそんなの考えてなかったんだけどな・・・いつもながらのハイテンションな紗恵を見てたらどうでもよくなってくる、この元気はどこから出るのか。

紗恵と夜道を歩いてると道端で苦しそうにうずくまってる初老の女性を見かけた

『 どうしたんですか！？ しっかりしてください！ 』

『 お婆さん！ 大丈夫ですかっ！！ 』

俺と紗恵が慌てて駆け寄るとお婆さんは苦しそうに

『 ハア・・・ハア・・・持病でね・・・ありがとね・・・私の事は・・・いいから・・・もう・・・行ってください・・・。 』

『 そんな訳にはいかないでしょう！ 紗恵、早く救急車を呼んでくれ！ 』

紗恵は急いで携帯で救急車を呼び来るまでの間、俺と紗恵はお婆さ

んを介抱し続けた、だけど他の通行人達は誰１人として俺達を見向きも手助けもしない、仕方ないのかな・・・。

救急車が到着して俺達は救急隊の人から事情を聞かれる、偶然見かけて放つとけなかった旨を話すと

『そうか、困ったな、この人携帯ももってないみたいだし身元を示す物も何もないんだ、誰に連絡を取ればいいのか・・・。』

お婆さんはすでに意識も朦朧としておりとても話が出来る状態ではなかった、だが俺にどうこうできる話じゃない、後は病院の人達にまかせるとするか、お婆さんを乗せて病院に向かう救急車を見てた紗恵は心配そうに聞いてくる

『蒼太・・・お婆さん、大丈夫かなあ？』

『俺達に出来るのは無事を祈る事だけさ、さあ帰ろう、すっかり遅くなってしまったからな。』

それから紗恵を家まで送り我が家に帰る、遅い時間に帰宅した俺を彩花姉さんが出迎えてくれた

『おかえり蒼太、こんな時間まで紗恵と遊んだの？ あんまり紗恵の家族に心配かけさせちゃダメなんだからね。』

やれやれ、姉というより母親だな言う事が・・・ちゃんと紗恵のお母さんには説明したのに、だけど今日のあの一件が後で大きな問題になるのだった・・・。

第百七十二話（前書き）

今回も蒼太達のお話です、少しいやらしい内容ですけど。

第七百七十二話

「オハヨ―蒼太、今日も快晴でハッピーだね」

朝からハッピーらしい紗恵と待ち合わせして学校に向かう、姉さんは青山先輩と毎日登校するのが日課になってるので一緒に行く事はない、まあこの年で姉と登校するのも恥ずかしいが

「おはよう紗恵、相変わらず朝から元気だな。」

「当たり前じゃん！ 朝から元気だから1日がハッピーになるんだよ、人間朝が大事なんだから！」

そういうもののなの・・・俺にはよく分からないが紗恵は自分の言ってる事は間違っていないと自信に満ちている、紗恵の性格は一言でいうならプラス思考、どんな事でも前向きにとらえる娘だ、こんな所はなんとなく青山先輩や友成先輩に似てるかもしれない

「あつ、おはよう蒼太君、紗恵ちゃん。」

後ろから矢島先輩の声が聞こえる、振り向くと矢島先輩と友成先輩がすぐ後ろにいた、友成先輩とも挨拶を交わし俺達は4人で登校する事になった

「彩花は今日もアオの所まで行ったのか？ 毎日感心だね・・・」

友成先輩も半ば呆れ気味な笑顔を見せる、青山先輩の所に毎朝行ってるのは姉さんだけじゃない、高野先輩や夕奈さんも行ってるのだ、

何でも姉さん曰わく

「このままじゃ里奈に大きく引き離されるわ！ 奈津美や夕奈も一緒にいたいだし私だけのけ者なんて許さないんだからっ！！」

らしい、里奈さんに大きく引き離されるって・・・彼女は青山先輩の妹だ、しかし兄の青山先輩に妹ではなく1人の女として想いを寄せている、その上姉さんや高野先輩、夕奈さんまで青山先輩LOVEというハーレム、18禁ゲームの設定じゃあるまいしと思うが青山先輩がそれだけの魅力がある男性という事なんだろう

「いずみ先輩、昨日のアレ見ました？ 私もう感動しまくりで涙が止まりませんでしたよ。」

「見た見た、お父さん感動よねー、残り少ない命でも我が子の為に生きようとするなんて。」

紗恵と矢島先輩が話してるのは昨日テレビで放映された二時間ドラマのようだ、内容は男手一つで息子を育てた父親がガンで余命一年を宣告されながらもその残された一年を息子の未来の為に捧げるという感動ものだ、紗恵はこの手のドラマに弱い、というか感動できる話全般に弱い、幼いというか純粹というか・・・

「なあ蒼太、一つ聞きたい事があるんだけどさ。」

紗恵と矢島先輩が2人で盛り上がってる中、友成先輩が女子2人に気づかれないように俺に話しかける

「お前と紗恵ちゃんってさあ・・・もう男と女になったのか？」

『 なっ！！！！・・・何言ってるんですかつ！！　まだに決まってるじゃないですか！！　俺達まだ高校生なんですよ！　そんな事・・・』

いきなりなんて事聞くんだこの人は！　しかし友成先輩を話を止める事なく

『　なんだ、まだなのか、てっきりもう済ましてると思ったけどな、性格通りに奥手なんだな。』

『　そういう友成先輩はどうなんですか？　』

俺達がこんな話をしてるなどつゆ知らず、女子2人はまだ話に夢中になってる、俺からの問いに友成先輩は余裕の表情で

『　俺か、俺を誰だと思ってるんだ、三度の飯よりさ？らい刑事が・・・いやいや、いずみが好きな友成様だぞ、とつくに済ましてるに決まってるだろ、付き合ってる高校生男女なら至極当然、あつ、避妊はしっかりしてるからな、できちゃった婚は嫌だからな。』

なんてこった・・・友成先輩と矢島先輩はもう・・・いや、確かに付き合ってる男女なら当然なのかもしれないけど

『　何してるのぉー、蒼太、友成先輩、早く行きましようよー。』

紗恵の声で我に返る、俺が紗恵の方に行こうとすると友成先輩が

『　まあ慌ててする事じゃないからな、お前らのペースでいいんだよ、あつ、避妊具は常に用意しとけよ、いつどうなるか分からんからな、ほら、行こうぜ。』

アドバイス（？）をくれた、そりゃ俺だって男、紗恵ともいつかはそんな行為をするだろうけど・・・

『 どしたの蒼太くん？ ぼーっとしちやって、せつかくのイケメンが形無しよ、でもたまにはそんな蒼太くんもいいかもね 』

矢島先輩に見つめられ無性に照れてしまう、この人は友成先輩ともうあんな事やこんな事を・・・待て待て、何を考えてるんだ俺はっ！！！ こんなのは俺のキャラじゃない、少し頭を冷やさなきゃ・・・

『 どうしたの蒼太、顔が赤いよ？ 熱があるんじゃない？ 大丈夫、無理したらダメだよ。 』

紗恵は何やら勘違いしてるみたいだが本当の事など言えない、なんとかごまかし俺達は学校に向かう、友成先輩達と別れ教室に入るとクラスメートの一人が俺におかしな事を聞いてきた

『 なあ四森、お前昨日の夜、鈴木とおばあちゃんを助けなかったか？ 』

昨日のおばあさん？ なんでクラスメートがそんな事を聞くんだ？ そこには意外な事実があったのだ。

第百七十三話

俺に話しかけてきたクラスメートは神田かんだ 剛志たけし 特に親しくもないがどうして神田が昨日の事を知ってるのだろうか

『 昨日？ ああ、確かに紗恵とお婆さんを助けたけどな、でもなんでお前がそんな事知ってるんだ？ 』

『 やっぱりお前達か、お前らが助けた婆さん、俺の婆ちゃんなんだよ、まさか目を離れたすきにあんな事になるとはな……。 』

神田のお婆さんだったのか、神田が昨日の事を知ってるって事は病院から連絡がいったという事だ、ついでに神田にあの後どうなったか聞いてみた

『 とりあえず命は取り留めたよ、まだ入院してるけどな、婆ちゃん、たまに発作が起きるんだ、心臓に病気を抱えててな。 』

無事だったのか、よかった、しかしそんな人を夜に一人で外に出したら危ないだろ、昨日だって俺と紗恵以外は誰も助けようとはしなかったし……。 』

『 とにかく無事で何よりだよ、神田、これからお婆さんが一人で外に出ない様によく見とかないな、またあんな事になったら危ないし。 』

『 ああ、退院したらよく言って聞かせとくよ、四森、婆ちゃんを助けてくれてありがとな、感謝してるよ、あつ！ 鈴木もな。 』

『むーっ！　なんかついみたいない言い方だねっ！！　でも助かってよかったよ、お医者さん万歳　』

そんなこんなで先生も教室に来て授業が始まる、いつもと変わらない平凡な１日、だけどそんな変わる事のない平凡な日常が一番大切なかもしれない。

学校もバイトも終わり自宅に帰宅、彩花姉さんは大学受験の為に勉強中だ

『姉さん、コーヒー入れたよ、少し休憩しない？』

姉さんの部屋に温かいコーヒーを持って入る、時刻は午後の１０時を過ぎたばかり

『サンキュ蒼太、はあー、やっぱりツライわー、ねーねー、どうかに五百円払ったら入れる一流大学とかなーかなー？　』

『あるわけないでしょ、姉さんが選んだ進路なんだから文句言わない！　』

休憩の間はいつもの明るい姉さんに戻る、姉さんは将来バリバリのキャリアウーマンを目指したいとか、その為にはそれなりの学歴も必要なんだろう、メガネ美人でＦカップを誇るグラマラスボディの姉さん、職場で男に負けまいと仕事に精進する姉さんの姿が今から目に浮かぶ、ちなみに姉さんのもう一つの目標は青山先輩の妻になるとの事、ライバルは多いが・・・

『じゃあ姉さん、勉強頑張ってね、あんまり根詰めないように、

睡眠もちゃんととらなきゃ駄目だよ。』

『安心なさい、１１時にはちゃんと寝るから、夜更かしは肌に悪いのよ。』

なら安心だな、俺は部屋に戻りベッドに横になった。

少し雲の多い秋の朝、置かれていた新聞に目を通すと小さいながらも気恥ずかしい記事が書かれていた

（心優しきカップル、病に倒れた老女を救助。）

記事を見ると俺と紗恵が神田のお婆さんを抱きかかえ介抱している写真もある、いつの間に撮られてたのか・・・ふと横から新聞を覗き込んだ姉さんが

『あつ！これ蒼太と紗恵じゃない、へえー、カッコいい事してくれんじゃない、さすが私の弟ね、お姉さんは嬉しいよ』

甘ったるい声を出し首に抱きついてくる、それだけでも恥ずかしいのに腕に姉さんの柔らかいFカップの感触が・・・

『ちょ、姉さんつてば・・・わかったから離れてよ、そんな軽々しく男に抱きつかないの！』

『あら、姉さんはそんな軽い女じゃなくてよ、私が抱きつく男はこの世で貴志とアンタだけよ、あと真司は大事な友達ね。』

弟にそんな事言うなよ・・・だけどこの新聞の記事からとんでもない事態になってしまふのだった・・・。

第百七十四話（前書き）

主人公全く出番なしです、でもこの蒼太の話が終わったら次は貴志と4人の女の子達のお話にしますので。

第百七十四話

神田のお婆さんを助けてから3日が過ぎた、いつも通りに紗恵と教室に入るとクラスメート達の様子が何かおかしかった、俺をチラチラ見て俺が反応すると慌てて顔を背ける、そんなクラスメートの態度に紗恵が

『 ちよつと！ どうしちやつたのみんな！？ 蒼太がどうかしたの？ そんな態度失礼じゃない！ 』

クラスメート達を非難する、するとクラスメートの1人で少しガラの悪い風貌の男子、大森が挑戦的に思いもよらない事を言う

『 四森ってさあ、小学生の時にクラスメートイジメて自殺未遂まで追い込んだってなあ、人は見かけによらねーよな。 』

『 ええっ！！ どうして・・・。 』

紗恵が驚愕の声をあげる、何故今のクラスメートが俺の過去を知ってるのだ・・・姉さんと紗恵しか知らないはずなのに

『 普段はいい人ぶつた真面目なイケメンも昔は極悪非道のイジメっ子ってか、自殺未遂まで追い込むなんてどんなイジメをしたんだ！ 教えるよ。 』

大森の話す内容に男子連中は興味津々に聞き耳を立てている、女子連中は意味が分からないといった感じで困惑していた

『 そんなのデマよ！！ 何か証拠でもあるの！ 』

紗恵はまだ俺の過去を隠そうとしてくれる、すると大森はおもむろに携帯を取り出し何やら操作する、そして携帯を俺と紗恵に見せた、そこにはネットの某大手掲示板の書き込みが載せられておりその内容が

（ 新聞に載ってた老婆を助けた親切な高校生って昔同級生を自殺に追い込むまでイジメてたんだぜ。）

というものだった、他に俺の過去を知ってるのは当時の同級生達しかない、多分その中の誰かがあの新聞の記事を見て面白がってネットに書き込んだんだろう

『 こんなの・・・こんなので蒼太って証拠にはならないんだからっ！ 蒼太は・・・蒼太は・・・。 』

『 もういいよ紗恵、紗恵がそこまで隠す事じゃない、俺自身の事なんだから、だからあんまり気にするな、俺は大丈夫だから。 』

泣き出しそうな紗恵をなだめ俺は自分の席に戻る、大森はそんな俺の態度に

『 やっぱリイジメをしてたんだな、いつも真面目ぶってても本当はそんな奴だったってわけだ、鈴木もこんな奴とはとっとと別れた方がいいぞ、何されるか分からないからな。 』

書き込みの内容が事実だったと確信する、そして紗恵に俺と別れる事を勧めるが紗恵は全く相手にしない、やがて教師が来て授業が始まる、少しざわついてるクラスに教師は何かあったのかと聞くが誰も特に何も言わなかった、この日から平凡だった俺の日常に少しず

つ変化が生じてきたのだ。

午前の授業が終わり昼食時間、いつもなら俺に気軽に話しかけてくる女子達は分かり易く俺と距離をとってる、それでも紗恵は普段と変わらず俺にくっついてる

『 蒼太、今日はバイト休みなんだよね、学校終わったらどこか行こうよ。 』

『 そうだな・・・せっかくバイトも休みだし、どこがいいかな？ 』

『 里奈ちゃんや夕奈ちゃんを誘ってカラオケとかは？ なんなら温水プールでもいいよ ふふっ。 』

『 里奈さんや夕奈さんをか！？ カラオケならいいけどプールはまずいだろ・・・まあ誘ってみるか。 』

明らかに俺と距離をとるクラスメイト達と違い何も変わらない紗恵に俺は心の中で感謝した、でも里奈さんや夕奈さん、皆が俺の過去を知ったら・・・軽蔑されるかな？ 自業自得だから仕方ないかな・・・。

第百七十五話（前書き）

蒼太のお話の途中ですが寄り道して貴志と里奈のお話です。

第百七十五話

『 そうか、蒼太や紗恵ちゃん、夕奈ちゃんとカラオケ行っただのか。』

『 そうだよ、みんなでいっぱい歌って楽しかったんだから、今度はお兄ちゃんや友さんや奈津美さん達も一緒に行こうね。』

兄妹水入らずの食卓、里奈の作ってくれた和食中心の夕食が美味しく口に入る

『 だけど女の子3人に対して蒼太1人だけだよ、結構羨ましい・・・じゃなくて恥ずかしいよな。』

『 ムツ！ 恥ずかしいってどういう意味なの！ お兄ちゃんは里奈と一緒にカラオケに行くのが恥ずかしいって言うのっ！！』

『 違うって、女の子ばかりの中に男が1人だけっていうのは結構恥ずかしいもんなんだぞ、まあ羨ましくもあるんだけどな。』

俺も似たような状況なんだけどな、ほとんど毎日里奈や夕奈ちゃん、奈津美さんや彩花と一緒に学校に通ってる、始めこそ気恥ずかしさもあったが今じゃ当たり前の日課になっている、この日課は俺達が卒業するまで変わらないんだろうな

『 でもね、里奈の思い過ごしかも知れど蒼太くんや紗恵ちゃんの様子が何かおかしかったの・・・。』

『 なんだよ、どんな風におかしかったんだ。』

「うーん・・・なんかうまく言えないんだけどさあ、2人とも何かぎこちなくてね・・・特に紗恵ちゃんなんかいつとも元気なのに今日はあんまり喋らなくて変だったんだから。」

あのいつもハイテンションな紗恵ちゃんが？ そりゃ女の子にしか存在しないあの日だったんじゃないのか・・・男には絶対分らない辛さらしいが

「もし蒼太くんや紗恵ちゃんに何かあったのなら絶対助けになつてあげようねお兄ちゃん、2人とも大切な友達なんだから。」

「当然だ、それが仲間つてもんだからな、まあ蒼太はしっかりしてるから俺達の出る幕はないかもな。」

何かあったらか・・・蒼太と紗恵ちゃんに何かあるのか分からないがもし俺達に出来る事があるならしてやりたい、敦士同様に蒼太は俺の弟分だからな。

1日の疲れを洗い流しにお風呂に入る、いい湯だねえ、しかし風呂の準備や掃除までした里奈が一番風呂に入らず俺に先に入らせるとは・・・どこまで俺に尽くしてくれるんだ里奈は、もしかしたら本当にこのまま一生里奈と2人きりで・・・おや、ドアの向こうの脱衣場に誰か入ってきた、誰だろ・・・って、里奈しかいねえじゃねーかつ！！

「ちよっ！？ 里奈っ！！ まだ俺が入ってるだろ！！ もう少しであがるから待ってけつてば！」

俺の声に何も応えず風呂場のドアが開く、とうとう里奈が風呂場に入ってきた

『おい里奈っ・・・って、なんだそのカッコは！？』

『へっへ〜んだ、どしたのお兄ちゃん、何を期待してたのになっ
』

風呂場に入ってきた里奈はスクール水着を着ていた、裸でないのは幸いというか残念というか・・・

『ねえお兄ちゃん、里奈が背中流してあげる』

『いーよ別に、俺はもうあがるからごゆっくり。』

『だーめーっ！ 絶対背中を流してあげるんだから！！ このままあがったらお兄ちゃんと里奈は毎日一緒にお風呂に入ったり寝たりしてるって学校中に言いふらしてやるからね！』

こいつは俺を社会的に抹殺する気かよ・・・しかしこのまま背中を流してもらうのもな、以前に里奈と夕奈ちゃんと3人で風呂に入った事があるが今回は里奈と二人きりだ、社会的に抹殺されるか妹に背中を流してもらうか迷ってる俺に

『ブッブーっ、時間切れなのだー、今から里奈がお兄ちゃんの背中を流してあげるからね その後はお兄ちゃんが里奈のカラダをキレイにするんだよ。』

里奈が勝手に結論を出した、社会的に抹殺されるのはやはり嫌なの

でもう好きにやらせてやろう・・・俺さえ理性を保てば最後の一线を越える事はないからな

『ふふふっ、お兄ちゃんの背中おつきいね、もう大人の男だよ、でも里奈だってちゃんと大人の女に近づいてるんだからね。』

里奈は健気(?)に俺の背中を洗ってる、この度を過ぎまくりなブラコンさえなければ文句なしの妹なのに

『はいっ、洗い終わったよお兄ちゃん　今度はお兄ちゃんが里奈を洗ってね、お兄ちゃんなら背中だけじゃなく前も・・・。』

『背中だけなっ!!　お前だって背中しか洗ってないんだから俺も背中だけでいいだろ、ほらっ、背中向けるって、洗えないだろ。』

これでいいだろ、これなら仲の良い兄妹が仲良くお風呂で背中の洗いつこで済む・・・なわきゃねーだろっ!!　どこにこんな兄妹がいるんだよっ!

『あんっ　お兄ちゃんに洗ってもらうのって気持ちいいなあ、ねえ、明日も一緒に・・・。』

『駄目に決まっところーが!　もし明日もこんな事したら俺の弁当作るの禁止だからな、1ヶ月に一回なら許してやつからそれで我慢しろ、返事は。』

『はあい・・・でも1ヶ月に一回は絶対一緒にお風呂に入るからね!』

こうして俺と里奈はまた禁断の道に向け一歩前進した、引き返せな

くなる前に奈津美さんか彩花か夕奈ちゃんに本気にならなければなら
ないかな・・・。

第百七十五話（後書き）

この小説は18禁ではありません、念のため、次回から蒼太のお話に戻ります。

第百七十六話

「なあ彩花、最近蒼太の様子ってどうなんだ？」

「どしたの貴志、急に蒼太の事とか聞いたりしてどうかしたの？」

「いや、別にどうかしたって訳じゃないんだ・・・最近会わないから元気にやってるかなって心配になっちゃってさ。」

朝のいつもの登校風景、俺と里奈と夕奈ちゃんと彩花と奈津美さん、男1人に女4人のハーレムプレイ、以前の俺ならお魚くわえたどら猫を追いかけて裸足で飛び出すくらいに慌てふためいただろうが今では自然に彼女達と接している、まさに神様のトコでたった一年修行しただけなのにいきなりラディ？ツより強くなったクリ？ンや天？飯もビツクリなレベルアップだ、慣れって怖いな

「そっか、将来の義弟の心配をするのは当たり前だもんね、でも特に変わったトコとかないように見えただけだね・・・。」

「そうですか・・・だったらいいんですけど・・・昨日の蒼太くん・・・何か脅えてるように見えましたから・・・。」

夕奈ちゃんがなにか釈然としてなさそうな口調で話す、すると俺達の態度に何か異変を感じた彩花が

「ねえ、さつきから貴志も夕奈もなんなの、蒼太に何かあったの？ あんた達が何か知ってるのなら私にも教えなさいよ！」

不満を露わにする、だが教えると言われても俺だって正直よく知らない、そんな俺に代わって里奈が彩花に説明してくれた

「昨日蒼太くんや紗恵ちゃんに誘われてカラオケに行っただんですけど蒼太くんの様子が何か変だったんです、蒼太くんだけじゃなく紗恵ちゃんもなんだか無口だったし、だから彩花さんなら何か知ってるかと思ったんですけど……。」

「そうだったんだ……。でも家での蒼太はいつも通りだったわ、紗恵までおかしかったのならあの2人の間に何かあったって事だよな……。もしかして別れ話とかかな!? まさかね。」

本当にまさかだよな、あの蒼太と紗恵ちゃんが別れるとか……。でも2人の様子が変だという事はそれが一番妥当な理由なんだけど

「まだそうと決まった訳ではありませんわ、放課後にでも2人の内のどなたかに話を聞いてみてはよろしいではありませんか、まずはそれからです。」

奈津美さんが理知的に場をまとめる、もし本当に別れ話なら俺達はどうにか出来る話じゃないかもしれないがああ2人が別れるのはい気がしない、間近で見るとよく分かるがああ2人は真剣に互いを想い会ってる、クールで大人びた蒼太と元気で子供っぽい紗恵ちゃん、一見合わなさそうな2人だけだからこそ互いの足りない部分を補い合ってる、できうるなら以前の仲むつまじい2人に戻ってもらいたいからな。

学校にていつものごとく友成と雑談を交わす、なんでも昨日は親父

さんと

（ 痴漢や盗撮、ストーカー行為などの犯罪をもっと効率的に取り締まるにはどうしたらいいか？ ）

といった議論を夜中の2時過ぎまで繰り広げてたらしい、近ごろの友成親子の議論はかなり真面目な内容だ、以前の奇想天外で支離滅裂で言語道断な議論とは大違いだな、何の心境の変化があったのやら

『 警察がどんなに頑張ってもそれらの犯罪を完全にゼロにするのは難しいんだよ、残念だけどな・・・でも地道に努力していくしかないんだよな、まあ近い将来俺が刑事になったらそんなくたらない犯罪は減らしてみせるけどな。 』

さすが刑事志望だな、立派な心意気だよ、なんだか友成なら本当に減らしそうな気がしてきた

『 素晴らしいですね！ 真司くん、頑張ってくださいまし、私も陰ながら応援させていただきますわ。 』

『 そうね、本当にくだらない犯罪よ、被害にあった女の子達は本当に苦しい思いをしてるんだからっ！ ねえ真司、いつかはそんな犯罪に苦しむ女の子がいなくなるといいね。 』

奈津美さんや彩花も嬉しそうだ、友成もガラになく照れ笑いを浮かべている、そんな俺達に珍しくクラスメートの男子が近づいてきた、そして次の瞬間、耳を疑う発言をした

『 なあ四森、お前の弟って昔に同級生を自殺にまで追い込むイジメをしてたってホントかよ。 』

・ ・ ・ 何言つてんだコイツ、蒼太がそんな事するなんて ・ ・ ・ しか
し彩花の反応を見るとただの冗談とも思えなかった ・ ・ ・ 。

第百七十七話

『 なっ……なんで……誰がそんな……。』

蒼太の思いもよらぬ過去を彩花に聞いてきたのはクラスメートの有森という軽薄な印象の強いチャラ男だ、有森からの質問に彩花はうまく話せないでいる

『 なんだ、やっぱりあの噂はホントだったんだな、こりやおもしろーや。』

有森は別人のように弱々しい彩花の姿にその噂とやらが真実だと確信したみたいだ、俺も言葉を失うがそんな俺と違って友成は力強く

『 だったらどうだって言うんだよ。』

と意外な返しをする、頼もしい兄貴分だな、しかしとても信じられない話だ、あの優しくて真面目すぎるくらい真面目な蒼太が……

『 いやな、一年の間じゃ結構な噂になっててな、なんでもネットから広まった噂らしいんだけど俺もなんか興味わいてきてさ、しかしあの学校イチのイケメンで女子から大人気の四森の弟がそんな事をなあ……。人を見かけによらないとはホントこの事だな。』

有森も悪意はないのだろうが彩花の事を考えたらもつと言い方があるだろ……。蒼太や紗恵ちゃんの様子が変だったというのはこの事が原因だったのか？

『 だからそれがどうしたってんだよ！ 蒼太がもし本当に昔にそ

んな事したとしてもお前には関係ねーだろっ！ 人の過去を面白おかしく詮索するなよ！！」

「そうですね！ 過去がどうであれ今の蒼太君は私達の大切な友達なんです、もしもこれ以上つまらない噂とかで蒼太君を貶めるような事をするなら私が許しませんから！」

友成も奈津美さんも蒼太の過去を知っても蒼太を友達と呼ぶ、もちろん俺もだ、人は誰でも話したくない過去を持つものだ、それは別に恥じる事じゃない、大事なのはそれとどう向き合えるかという事だと思う

「なんなのお前ら？ いじめっ子を友達だつて言ってるの、自殺にまで追い込むなんてそんなの人殺しとおんなじじゃん。」

馬鹿にした口調で友成達を非難する有森、友成が燃えるような目つきで有森に迫ろうとするがその時

「・・・違う、蒼太は・・・人殺しなんかじゃない・・・何も・・・何も知らないくせに・・・勝手な事言わないでっ！！」

彩花はそれだけ叫ぶと教室を飛び出した、友成や奈津美さんも慌てて後を追う、俺も続こうとするがその前に有森に一言いわずにはいられなかった

「有森、そんなに蒼太の過去が知りたかったのか？ 別に人の過去に興味を持つのは悪い事じゃないけど過去にもいろいろあるだろ、彩花を傷つけてまで過去を知る権利なんて他人のお前にはないはずだ。」

そう言つて俺も教室を出た、すぐに廊下で友成と奈津美さんに追いつく、肝心の彩花は見えないが・・・どこに行つたんだよ！

『 トモ、奈津美さん、彩花はどこ行つたんだ！？ 』

『 ああ、貴志くん、すみません、彩花さん、あまりにも早くて・・・見失つてしまいました。 』

『 さつきから携帯に電話してるけど出ないんだ、でも学校からは出てないはずだ、まだ校門には教師がいるからな、ちくしょう！どこにいるんだよ！！ 』

学校のどこにはいるんだな？ もうすぐ授業が始まるからきつと人目につかない場所にいるかもしれない

『 とにかく探そうぜ、多分目立たない場所にいると思うからそういう場所を中心に探していこう。 』

俺の提案に友成も奈津美さんも賛同する、女子トイレや図書室、体育館の倉庫などを探したが彩花は見つからなかった、携帯にも出ない、もう授業も始まっている、もしかしたらもう学校から出てるかも・・・今度は校舎裏のさびれた場所に来てみるとそこには

『 まあっ、いましたわ！ 彩花さんっ！！ 』

彩花が1人寂しく立ち尽くしていた、彩花も俺達に気づくが逃げようとはしない、とにかく彩花と話をしてみよう、蒼太も彩花も俺の仲間なんだから・・・。

第百七十八話（前書き）

また残業が始まりました、毎日更新は厳しいです、2日か3日に一度のペースで更新出来ればと思っています。

第百七十八話

『 貴志・・・真司・・・奈津美も・・・ 』

校舎裏の目立たない場所に佇むあまりに弱々しい彩花の姿、いつもの強気で堂々としてややツンデレな彩花はそこにはいなかった

『 彩花・・・お前足早いんだな、あのトモが見失うなんてなかなかいぞ。 』

『 ああ、その足ならオリンピック狙えるぜ、その美味しそうでムツチリしたフトモモといい・・・足フェチにはたまらんぜよ。 』

『 彩花さん、一人で悩んだりしないでくださいな、私は・・・いや、貴志くんも真司くんも、きっと里奈さん達だってどんな過去があっても今の蒼太くんを信じますわ、だって私達は仲間じゃないですか。 』

『 みんな・・・。 』

『 まあそーゆー事だ彩花、俺達は過去なんて気にしないよ、同じ過ちを二度と繰り返さなきゃいいんだから、今の蒼太ならきっと大丈夫だろ。 』

俺が言うとき彩花の目に涙が浮かぶ、なんというレアな・・・いやいや、勝ち気な彩花でも泣くんだな

『 うん・・・ありがとみんな・・・ねえ、信じてくれる？ どんな過去があっても蒼太はみんなが知ってる優しくて真面目で私の・・・ 』

・自慢の弟だつて。』

そんなの当然の事だ、蒼太は俺や友成の弟同然な存在だからな、まだ少し元氣のない彩花を連れて教室に戻ると当然教師からどこに行つてたと怒鳴られるが奈津美さんがうまくごまかしてくれた（俺や友成が言つても納得しなかったが奈津美さんが言うとなんり納得した。）これだから38歳独身男性教師は……。

昼休み、いつもと変わらずに4人で昼飯を食べる、有森もあれから何も言つてこなくなつた、クラスの何人かも蒼太の過去を噂などで知つた様だがそんなの関係ない、もともと俺達4人はクラスでも孤立気味だつたし特に俺と友成はクラスの男子すべてを敵にまわしてると言つても過言ではない、奈津美さんと彩花というクラス、いや、学年を代表する美女2人を俺と友成がいつも独占してるのだから

『いつもアオの弁当は美味しそうだなあ、里奈ちゃんの愛情がこれでもかつてぐらい詰まつてるからな、たまには俺にも作つてもらえないか頼んでくれないか？ 代わりにいずみの作つた弁当をアオに食べさせてやるからさ。』

いずみちゃんの作つた弁当か……食べてみたいという気持ちもある、しかし

『真司、そんなに里奈の作つた弁当が食べたいのかしら？ 貴志もまさかいずみの弁当が食べたいとか言わないわよね……。』

彩花がコワイよー、でもいつもの彩花といった所か、そして奈津美さんも

『 貴志くん、私からもお願いがありますわ、里奈さんにたまには私や彩花さん、夕奈さんにも貴志くんへのお弁当を作らせて下さいと、もう勝負とかキスとかは申しませんけど私達にも好きな男性に手料理を作る幸せくらい望ませてくださいまし。』

妙に艶っぽい声色で迫る、そっぴいやそんな事あったな・・・あの時は彩花の作った弁当を選んだっけか、もちろん他の3人の弁当も美味しかったんだけど

『 なあアオ、やっぱり今の話はなしな、里奈ちゃんの作る弁当はお前に対して作るから美味しいんだろうし、俺にはちゃんと俺への愛情を込めてくれるいずみの弁当があればいいや。』

やっとそれに気づいたか・・・いずみちゃんの弁当は少し惜しいがそれを望んだら女性陣からブーイングだろう、奈津美さんの頼みだけは里奈に話してみるとして彩花もだいぶ元気を取り戻した、しかし一年の、里奈達の教室ではまたひと騒動起きていたのだ・・・。

第百七十九話（前書き）

今回は里奈視点で進みます、ちなみに昨日は小学校の運動会に行きました、最近の運動会は何か派手なんですね。

第百七十九話

「ねえねえ、あの噂聞いた？　一組の四森君がさあ……。」

「聞いた聞いた、信じられないわよねー、あの完璧イケメン超人の四森君が過去にあんな事してたなんてさっ、あゝあ、なんか幻滅しちゃったなあ、私ファンだったのに。」

蒼太君の過去？　蒼太君に何かあったのかな、夕奈ちゃんと昼食をとってた私はクラスの女の子達の気になる話し声を耳にした

「それにしても小学校で自殺未遂にまで追い込むイジメってどんなだろうね、でも四森君って普段はあんなに真面目な人なのに、人って分からないよねー、二重人格って奴ー。」

自殺未遂？　イジメ？　まさか蒼太君が過去にそんな事をしてたっていうの？　そんな事ある訳ないじゃない……。でも……。昨日の様子がおかしかった蒼太君……。もしかしたら……

「いい人ほど裏じゃ分からないって事だよ、もしかしたら恋人の鈴木さんも四森君から無理やりあんな事やあんな事までやらされてるかもしれないわね。」

「バカな事言わないで！　蒼太君がそんな事する訳ないじゃないっ！！　証拠もないのにいい加減な事言わないでよ！」

あまりの言われようについてその子達に怒鳴ってしまった、しかしその子達は

『 あら青山さん、あなたや秋野さんは四森君と仲がいいんですよ、本当に何も知らないの？ 』

意外そうな表情だけどケロッとしてた、何にしても蒼太君を、友さんと並んで私が世界で二番目に好きな男性を（もちろん一番大好きなのはお兄ちゃん）そして私の大切な友達を侮辱するのは許せなかった、夕奈ちゃんも凜とした態度で

『 何か蒼太君の過去が噂になってるみたいですけど・・・私達は・・・蒼太君や・・・紗恵さんの友達です・・・何があってもそれは変わらない・・・ 』

蒼太君の噂を話していた女の子達に言う、どうやら昨日の蒼太君や紗恵ちゃんの様子がおかしかったのはこの事が原因で間違いないみたいだった、でもどんな過去があっても蒼太君は蒼太君、私達の知ってる真面目で優しく格好良くてお菓子を作るのが上手な蒼太君、たとえどんなに良い人でも悪い事をしてしまう事だってあるんだから

『 そんなに気になるなら本人に直接聞いてみたらいいじゃない、友達なんですよあなた達？ 別に私としては四森君が過去にイジメをしてようがしてまいがどっちでもいいのよ。 』

なんか腹の立つ言いぐさだけど確かに蒼太君に直接聞くのが一番早いかもしれない、だけど人の過去にそんな簡単に立ち入るのも良くない気がする、私は夕奈ちゃんに相談してみた

『 そんなの聞く事ないよ・・・蒼太君の事信じてるなら必要ない・・・ 』

言われてみたら当たり前の事だった、蒼太君を信じてるのなら私達

が余計な詮索なんてしなくてもいい、蒼太君や紗恵ちゃんが元気になるまで私達が支えてあげたらいいのだから

『 そうだよねっ 私ってば変な事聞いちゃったね、それじゃあ今度の日曜は蒼太君や紗恵ちゃんやお兄ちゃん達も誘ってみんなでピクニックでも行こっか、電車に乗ってさ、友さんも喜ぶよきつと。』

『 どうしていきなりピクニック・・・でも楽しそうね・・・久しぶりにみんな揃って・・・。』

夕奈ちゃんも乗り気だ、お兄ちゃんや友さんに奈津美さんに彩花さんやいずみさん、蒼太君や紗恵ちゃんに夕奈ちゃんと私、みんなが揃えばいつだって楽しい、あの夏休みの友さんの別荘みたいに・・・

『 だったらお弁当作らなきゃね、腕によりをかけて作っちゃうんだからっ 』

『 その時は私も手伝う・・・そしてお兄さんに・・・食べてもらう・・・。』

夕奈ちゃんは相変わらずお兄ちゃんloveだった、なんでも夕奈ちゃんが言うには女の子としての自信をお兄ちゃんからもらったとの事、だからこそ夕奈ちゃんは私の親友にしてお兄ちゃんを巡る良きライバル、マンガとかでよくある関係だけど基本的には仲良しな私達、でもいつかは決着をつけなきゃね・・・。

第百八十話（前書き）

貴志視点で進みます、やっと季節に追いついたかもです。

第百八十話

『ピクニック？』

家にて里奈と夕飯を食べてたら里奈が今度の日曜に友成達みんなとピクニックに行こうと言い出した

『そーだよ、今なら紅葉も綺麗だし日曜は天気もいいし絶好のピクニックびよりなんだから、ねーねーお兄ちゃん、いーでしょ、行こうよ、お願い。』

出た、里奈の伝家の宝刀、うるうる上目遣い、こんな目をされても断れる様な強い意志は残念ながらシスコンの俺にはない

『分かった分かった、俺は行くから、でもトモ達には聞いてみないとな、あいつ等も何か予定があるかもしれないし。』

『やったーっ！　じゃあ蒼太君と紗恵ちゃんには私から連絡しとくね』

ずいぶんハシヤギようで、本当に高校生かねこの子は、里奈らしいっちゃ里奈らしいのだけだな。

学校にて昨日の里奈の提案を友成達に話す、すると

『まあっ、楽しそうですわね　私も是非お供させていただきますわ。』

『私も行くわ、近頃勉強ばかりだったからたまには皆で紅葉を見に行くのもいい気分転換じゃない。』

『いいねー、里奈ちゃんに奈津美さんに彩花に夕奈ちゃんといずみと紗恵ちゃんと一緒に、美少女達と秋の紅葉を見ながらお弁当だる？ 最高のイベントじゃないっすか、俺が行かなきゃ誰が行くって話だぜ。』

友成と奈津美さん、彩花はあっさり承諾した、いずみちゃんも友成がメールしたら二つ返事で快諾、蒼太や紗恵ちゃんも行くと里奈からメールが来てこうしていつもの9人でピクニックに行くのが決まった。

下校時間、俺の両隣には奈津美さんと彩花という両手に女神状態、風に乗って2人の甘い匂いが漂いこの上なく幸せな気分になる、かつての俺なら買い物しようと町に出かけたら財布を忘れるほどに混乱していただろうが・・・まあなんでもいい、この2人と会話するのは楽しいからな

『ふふふつ、貴志君、楽しみにしていて下さいね、腕によりをかけて貴志君のお口を満足させるお弁当をお作り致しますわ』

『私だっておにぎりたくさん作るんだからねっ！ 貴志が毎日食べたいって言わせるおにぎり作るから期待しときなさい！』

『そりゃ楽しみだ、2人共料理上手だからな、そっぴや彩花、蒼太の事なんだけど・・・。』

例の蒼太の過去がクラスに発覚して以来、彩花もクラスメートから蔑まれるような視線を受けていた、だが俺や友成を敵に回しても勝ち目がない事くらいクラスの連中は理解してるので表立って彩花に害を加える事はない、大方ネチネチと陰口を叩くくらいだ

『蒼太も私ももう大丈夫よ、私達には貴志や真司、奈津美達がいるんだから、あんなクラスの連中なんて眼中にもないわ。』

『ありがとうございます彩花さん、私にだって彩花さんや蒼太君がいてくれるのですから心強いですわ、だからといって貴志君だけは譲りませんけど。』

『あら奈津美、それは私のセリフよ！ 最後に勝つのは私なんだからっ！！』

この美女2人はそれぞれに劣らない魅力がある、身長も高くモデル体系でありながらEカップで清楚な黒髪ロングヘアの奈津美さん、栗色のセミショートにメガネが似合うムッチリ体系Fカップの彩花、以前この2人に里奈と夕奈ちゃんを加えた水着姿の4人に迫られる夢を見た事があったがもしあんな事が現実に起きたら俺は耐えられるか・・・100%ムリだな、つかそんな状況でなんの手もださず耐えられる男がいるのなら見てみたい

『彩花さんに夕奈さん、そして里奈さん・・・ライバルは手ごわいですけど必ず貴志君を私に振り向かせてみせますから！ 貴志君は私の全てなんです！』

『貴志、私も負けないからねっ！ 貴志さえその気になったらこの体はいつでも貴志の好きに・・・。』

『 ストオーパーッ！ それ以上言ったら俺の理性が崩れてまうがな、2人共もし本当に俺が襲ったらどうすんだよ？ 俺も一応男なんだからさ。』

あまりに恥ずかしい2人に注意を促すつもりで言っただが生憎2人の反応は

『 まあ、やっとその気になってくださったのですね、それでは早速私の家に参りましょうか？ 今なら母も姉もいませんから2人つきりで……。』

『 いいわよ、じゃあホテルに行こっか？ この体で貴志を虜にしちゃうけど文句ないわよね。』

ダメだこりゃ……。この2人といい里奈といい少し何かズレてるんだよな、もしかしたら夕奈ちゃんもか？ なんとか2人の誘惑を振り切り帰路についたのはいいが家に帰れば

『 お兄ちゃんーん！ お帰りなさい』

『 お帰りなさいませ……。ご主人様……。』

何ゆえに里奈と夕奈ちゃんはきわどいメイド姿なのだ？ 次から次へというんなコスチュームで迎えてくれる里奈と夕奈ちゃんにある意味尊敬の念を抱く

『 えーと2人共、そのカッコでいるのは何の意味があるのかな？』

『 もっちらんお兄ちゃんを悩殺する為だよ、どう？ 萌えちゃっ

た お兄ちゃんなら里奈はいつでも受け入れてア・ゲ・ル 』

『 ご主人様・・・まずはお風呂になさいますか・・・それか食事・・・それとも私ですか・・・どうぞいつでも召し上がってください・・・。 』

この2人もか・・・もうそろそろ俺の理性も限界かもしれない、いっつそ理性なんてかなぐり捨てたら楽になるのかもな、まあヘタレな俺にそんな度胸もある訳ないが・・・。

第百八十一話（前書き）

三連休は今日しか休めませんでした、明日は仕事です、近頃運動してないから体力落ちたかもです。

第百八十一話

日曜日の朝、天気は快晴、絶好のピクニック日和だ

『 いい天気だね、お兄ちゃん　夕奈ちゃん。』

『 そうね・・・それより里奈・・・お兄さんも・・・早く行きましょう・・・皆さんとの待ち合わせに遅れます・・・』

昨日の夜からウチに泊まりに来ていた夕奈ちゃんに促され家を出る、朝から里奈と夕奈ちゃんが仲むつまじく作った弁当を持ち友成達と待ち合わせてる駅へと向かう、その道中で可愛い袋に包まれた弁当箱を持った奈津美さんに出会った

『 おはようございます貴志君、里奈さん、夕奈さん、今日は素晴らしい晴天ですわね、秋の風も涼しくてなんだかウキウキしていますわ、ふふふつ。』

清楚なロングスカートにシンプルな帽子がかえって似合ってる奈津美さん、マジでどこの雑誌から出てきたモデルだよって感じた

『 おはよう奈津美さん、なんつか・・・あまりにも美しすぎてどう言ったらいいのか・・・』

『 そんな・・・貴志君こそ今日はいつも以上に惚れ惚れしてしまうほど素敵ですわ・・・って、もうっ！　朝からそんな甘い言葉言わないでくださいな。』

ひよっとしてこれがバカップルというやつなのか？　顔を赤らめ見

つめ合う俺と奈津美さんを里奈と夕奈ちゃんが不愉快そうに

『お兄ちゃんっ！ 何鼻の下のばしてるのよ！！ お兄ちゃんは里奈の事を世界一愛してるって言うてくれたじゃない！』

『お兄さん・・・昨日の夜・・・私とあんなに愛しあつたのに！・・・』

ありもしないデタラメを言い出す、というか夕奈ちゃん、キャラ違うだろ・・・

『貴志君・・・私というものがあしながら実の妹やその友人と不貞を働くなんて・・・ふふっ、冗談ですわ 今日楽しくなりそうですね。』

大人の余裕というやつか・・・里奈も夕奈ちゃんもまだまだ奈津美さんにはかなわないかな？

駅に着いたら四森姉弟と紗恵ちゃんは来ていたが友成夫妻がまだ来てない、また友成が寝坊でもしたか？

『おはよー貴志、あつ、やっぱり奈津美や夕奈も一緒だったんだじゃあ後は真司達だけだね。』

『そのうち来ますよ、まだ待ち合わせの時間まで10分あるんですから。』

蒼太が時計を見て冷静に言う、奈津美さんもそうだったが蒼太もモ

デル級美男子だ、なんつーか立ち振る舞いに品があるというか・・・
毎回思うが本当に里奈や紗恵ちゃんと同年かね？

『 お待たせしました、ほら真兄！ 私達が最後よ、どーして朝
起きれないのよっ！！ あんなに夜更かししちゃダメって何回も言
ったじゃない！ 』

『 スマンスマン、昨日も親父と警察は同じ警察官の犯罪をもっと
厳正に処罰するべきだって議論してたんだよ、でも寝たのは12時
ちよつと前だぞ、基本朝は弱いんだよ俺は。 』

友成といずみちゃんが慌てた様子で駆け寄ってくる、やっと9人全
員が揃った、しかし友成もずいぶんと社会的な議論をするな、確か
にたまにつまらない犯罪を犯す警察官のニュースを見る事がある、
もちろんそんな警察官はほんのごくわずかなんだろうが。

列車に乗り俺達9人は固まって座る、列車に乗るなり友成は真面目
ぶって

『 ？？線を走る？？鉄道は景色の良さもありこの季節は乗客も多
く鉄道ファンの間では有名である。 』

鉄道のナレーションを聞いた、さすがさ？らい刑事を目指すだけ
あるな、そんな友成に紗恵ちゃんが

『 友成先輩ってさむらい刑事ってドラマのファンなんですよね？
将来は刑事になるっていずみ先輩から聞きました、私も応援しま
すから頑張って下さい。 』

『 ありがとな紗恵ちゃん、将来刑事になって一つでも悲しい事件を減らして、そして1人でも多くの人の笑顔と安全を守る刑事になるから、それが俺の母さんに誓った夢なんだ。』

『 そっか、でっかい夢だな、頑張れよトモ、天国でお前の母さんや香取刑事も応援してるよきつと。』

友成には将来への明確な目標がある、だけど俺にはそういう将来のビジョンがまだない、卒業まで半年切ってるってのにな、未来に向けて俺もそろそろ真剣に考えないとな・・・。

第百八十一話（後書き）

今回の話はずいぶんとタイムリーになりました、もちろん警察官全
てが今回現実にかきた事件のわけせつ警官ばかりじゃないんですけ
どね・・・。

第百八十二話

『 友さんってすごい優しい刑事になるんですね、今の世の中信じられない事件が多いですもんね、里奈もお兄ちゃんと応援しますから頑張ってください。』

友成の夢を聞いた里奈はいたく感激したらしくエールを送る、普段は冗談言ったりおちゃらけてる感のある友成だが根は正義感と男気にあふれた奴だというのは俺達の仲間はみな知ってる

『 香取刑事みたいに優しさだけじゃなく厳しさや冷静さも持った刑事になりたいんだよね真兄は、子供の頃からよく言ってたもん、まっ、心の師だからね。』

『 おいおいいずみ、確かに香取刑事は俺の生涯の憧れだが香取刑事だけじゃない、高杉警部や山さんや桜田、西園寺や風子に河原、それに兵吾君と西崎、安さんや川辺課長、右京さんに特命係の亀山、俺は皆好きだったぜ。』

要するにこいつは水曜夜9時の刑事ファンなんだな、その中でも特にさ？らい刑事が好きなんだろう

『 そういや真兄、小学の卒業文集にも一番好きなテレビ番組はさ？らい刑事旅情編って書いてたよね、二番がミニ？カポリスで三番が小？宏ショーだったっけ？ 幅が広いというか何というか・・・っていうか小？宏って誰なの？ 』

『 なにおうつ、あの小？宏さんの軽快かつ絶妙なトークのキレを知らんのかあ！ だいたい今のコメンテーター達はなあ・・・。』

やっぱり友成は友成だったか・・・大体なんでそんな昔の番組を知ってるんだよ・・・まあいいけど

『ねえ貴志、ちよつとしたクッキー焼いたんだけど皆で食べない？』

友成の作り出した意味不明な空気を破るかのように彩花が手に持ってた袋からクッキーを取り出した、可愛い一口サイズで星の形やハートの形をしてる

『俺や紗恵も一緒に手伝ったんですよ、姉さん、青山先輩に美味しいって気に入ってもらえる様に一生懸命でしたよ。』

『もうっ、蒼太ったら！でもおかげで上手く焼けてるはずよ、ほらっ、みんなも食べてみてよ。』

仲のいい姉弟だな、とにかく蒼太も彩花も元気そうでよかった、蒼太同様に彩花も辛い過去がある、確か当時に付き合ってた彼氏を友達だった女性に奪われたとか・・・だからなのか彩花は基本的には男嫌いなのだ、初めて会った頃の彩花はツンツンばかりしててデレがなかったけど今やすっかりツンデレ予備軍だ

『彩花さん、このクッキー美味しいですわ、甘さも控えめで食べやすいですわね、是非とも私にも作り方を教えてほしいです。』

『ありがと奈津美、じゃあ今度一緒に作ろうよ。』

奈津美さんも絶賛だ、確かに食べやすい、皆もパクパクと口に入れていった。

列車から降りた俺達は山を目指して歩く、奈津美さんオススメの紅葉スポットがあるというのでそこで女性陣の作った弁当を食べるのだ、秋の紅葉を見ながら美少女達とお弁当・・・友成じゃないが確かに嬉しいイベントだ、別にいやらしい意味じゃなくて

『奈津美先輩・・・その公園は・・・あとのくらいですか・・・』

『あと10分くらいで着きますわ、そこは本当に紅葉が綺麗で空気もおいしいんですよ、私も小さな頃からよく両親に連れて行ってもらってたんです。』

両親に連れて行ってもらってたか・・・奈津美さんの両親は一度お会いした事があったけど本当に立派な人達だった、人の外見よりも中身を見る人達で俺みたいな金髪男にでも平等に接してくれる、その分け隔てなき性格は奈津美さんにも確実に継がれている

『そうなんですネー、それじゃあ皆さん、あと一踏ん張りですよ、張り切っていきましょー。』

紗恵ちゃんの無邪気な励ましが山道にこだまする、それを聞いた女性陣の作った弁当を持つ俺と蒼太は顔を見合わせ微笑んだ、思ったよりも楽しいイベントになりそうだな・・・。

第百八十二話（後書き）

彩花の過去については第十四話に載ってます、いずれ修正はしますが本筋の内容は変えませんので。

第百八十三話（前書き）

この小説、もうすぐ一周年なんですよ、よく続けたな自分・・・。

第百八十三話

『ここですわ皆さん。』

奈津美さんの言った公園に着いた俺達、丘から見える紅葉は色彩鮮やかで風情がある、ちなみに日曜日なのに俺達以外は誰もいない

『うつわ、ホントに景色がキレイですねー、うーん、空気がいしー』

『そうね・・・こんな素敵な景色・・・初めて見ました・・・。』

『すごいです奈津美先輩、こんな穴場があったなんて知らなかったな。』

このピクニックの言い出しっぺの里奈もご満悦のご様子、夕奈ちゃんや紗恵ちゃんもುತ್ತりと紅葉を見てる、蒼太も微笑を浮かべ

『そうですね、普段じゃなかなか見られない景色ですからね、この美しい風景を見ただけでも来たかいがありますよ。』

美しい景色が絵になる爽やかイケメンぶりだ、紅葉に不釣り合いな金髪頭の俺や夢は立派なのだが言動が奇抜な友成ではこうはいかない、一通り紅葉を眺め新鮮な空気を味わうと

『それでは皆さん、少し早いですけどお昼に致しましょう、貴志君、お弁当お願いしますわ。』

奈津美さんから昼飯にしようと促され俺達は持っていた弁当をシー

トの上に広げていく、奈津美さんだけでなく里奈達女性陣が作った弁当はメニュー豊富で9人腹一杯になる量がある

『はあゝ、こりや凄いご馳走だなあ、6人の美少女が作った弁当を食べられる俺達は三国一の幸せ者だ、なあアオ、蒼太。』

友成は豪華な弁当を前に顔を緩ませてる、そりや俺だって皆とピクニックに行けて嬉しい、すると俺の横にひよっこり現れた里奈が

『お兄ちゃんお兄ちゃん、早く食べようよー、お兄ちゃんの大好きな玉子焼きいっぱい作ったんだから　友さんも蒼太君もじゃんじゃん食べて下さいね。』

俺の腕にまとわりつき甘い声を出す、分かったからその小さな胸を腕に押し当てるな、女性陣の中では紗恵ちゃんと並んで貧乳の里奈ではあまり意味がないのだ、まあ貧乳はステータスだと誰かが言ったような言わないような・・・

『そうよ真兄、私やママも真兄の好きな唐揚げたくさん作ったんだからね、残しちゃダメよ、青山さんも蒼太君も遠慮しないでどんどん食べて下さい。』

へえ、美鈴さんも弁当を作ったのか、美少女6人だけでなく美熟女1人もいたんだな、しかし弁当まで作ったんなら美鈴さんも来ればよかったのに、まあ高校生だらけの中じゃ美鈴さんもやりにくいのかもな

『さあ皆さん、たっぷり食べていっぱいおしゃべりしましょー。』

紗恵ちゃんの合図で皆食べ始めた、おかずはどれも旨い、里奈の玉子焼きも夕奈ちゃんのコロツケも彩花の煮物も奈津美さんのポテトサラダも、いずみちゃんと美鈴さんが作った唐揚げも紗恵ちゃんが作ったタコさんウインナーも、そして女性陣全員が作ったさまざまなおにぎりもいくら食べても飽きない味だった

『 どう貴志？ 今日の煮物はちよつと味付け濃くしてみたんだけど・・・。』

『 お兄さん・・・私のクリームコロツケ・・・美味しいですか・・・。』

彩花と夕奈ちゃんが口々に感想を聞いてくる、ここは素直に褒めるとするか

『 どっちも美味しいよ、煮物は丁度いい味付けだしコロツケも中のクリームがまるやかでふんわり甘く絶妙だよ、2人ともまた料理上手になったよな。』

『 ホントにつ！ ありがとうー貴志。』

『 お兄さんっ・・・嬉しいです・・・。』

彩花も夕奈ちゃんも満面の笑みだ、その笑顔は反則だろ・・・しかしこの状況をあの2人が黙って見てる筈はない、案の定

『 貴志君、私の弁当も食べてみてくださいな、彩花さんや夕奈さんの作られた弁当に比べたら味は大した事ないかもしれませんが貴志君にこめた愛情は決して負けてませんわ。』

「里奈だってお兄ちゃんへの愛情100%で作ったんだからつ！
絶対に奈津美さんや彩花さんや夕奈ちゃんに負けてないもん！」

」

対抗心むき出しだ、そんな俺達を友成やいずみちゃん、蒼太と紗恵ちゃんはいつもの事だと笑ってやがる、俺の周りに群がる奈津美さんと彩花と夕奈ちゃんと里奈・・・これから先どうなるか分からないが高校生活は彼女達と過ごしたい、母親に捨てられ元カノを寝取られた俺を好きだと言ってくれる4人の女の子達、もしかしたら俺は4人全員に惹かれてるのかもしれない、その内の1人が実妹なのはとりあえず置いて・・・でも今は、この仲間達と過ごす大切な時間を楽しもう・・・。

第百八十四話（前書き）

前半は18禁に近いです、大丈夫かな・・・。

第百八十四話

『お兄ちゃん・・・好き、愛してるよ・・・。』

『ああ・・・里奈、俺もだ・・・もう里奈なしじゃ生きていけな
いよ。』

『ああん、里奈もだよ・・・んちゅ、ふう・・・お兄ちゃん・
・・・。』

兄と私は濃厚な口づけを交わす、互いを抱きしめながら舌を絡ませ
あい淫らな空気が辺りを包む

『お兄ちゃん、里奈、もうガマンできないよ・・・お兄ちゃんの
・・・欲しいな・・・。』

『ああ、俺もだ・・・早く・・・早く里奈の・・・入れたい・・・
。』

『ふふふ、もうこんなになっちゃってる・・・里奈のキスに興奮
してくれたんだね、じゃあ・・・今日はいっぱい奉仕しちゃうから
あ・・・ねえお兄ちゃん、早く脱がせてえ。』

握った兄のアレはもういつでも臨戦態勢だった、私の誘惑に兄は才
スの本領を発揮したかの様な勢いで私の衣服を脱がしていく

『里奈・・・恥ずかしいのか・・・。』

『恥ずかしくないもん・・・お兄ちゃんになら・・・いいよ・・・』

。』

兄の衣服も脱がしていき私と兄はお互い一糸まとわぬ姿になった、
そして

『 里奈・・・いくよ。』

『 うん、きて・・・お兄ちゃん・・・。』

こうして私と兄は兄妹の壁を取り払って1つになったのだった・・・

『 ・・・なんつー小説を書きやがるんだあいつは・・・分からん。』

里奈から小説書いたから読んでみてと言われ読んではみたのだが・・・
・ ひとすら俺と里奈が男と女の営みを繰り返す内容で最後には里奈
が俺の子供を身ごもるというモラルも何もあつたものじゃない結末
だった

『 お兄ちゃん、里奈の書いた小説読んでくれた？ よかったら
感想とか聞いてみたいな 』

コンコンとドアをノックする音のした後、俺の部屋のドアが開き里
奈が入ってくる、もうすぐ11月になるというのに相変わらずのミ
ニスカートという生足を露出させたその格好は何を考えてるのか・・・

『感想も何も意味が分からないんだけどな、お前は一体何を考えてこんなありえない変態小説を書こうと思ったんだ？』

俺が問いただすと里奈は花も恥じらう乙女の顔になり

『里奈の夢を書いてみたかったんだよ、兄妹だから公式には結婚出来ないけどお兄ちゃんの子供は産めるもん、ずっと一緒に暮らせるんだから』

ブラコン全開な台詞をのたまう、なんでこんな子に育ってしまったのか？俺の育て方が間違ってたのか・・・ブラコン以外は文句なしの妹なのに

『まあ小説を書くのもどんな内容でも自由だからな、それについては何も言わない、でもこの小説の内容が現実になるのは刑道栄が諸葛亮を策にはめるよりありえないからな。』

『ちえっ、つまんないなあ・・・お兄ちゃんは里奈の事を愛してないの！』

『妹としては愛してるよ、でも女としては・・・愛せる訳ないだよ、俺とお前は兄と妹なんだ、それ以外の何物でもないよ。』

正論だ、どこをどうとっても正論の筈だ、俺と里奈が男女の仲になるとか許される事じゃない、しかし・・・俺の心の奥底では里奈と生涯添い遂げる事を望んでる部分もある、かつて元力ノだった理子に裏切られた時に里奈は俺にこう言った

『里奈は絶対にお兄ちゃんら離れない、絶対にこの手を離さない

よ。
』

その言葉は当時好きだった理子を工藤にあっさり寝取られ失意の底にいた俺に光を与えてくれた、あの時の優しさに満ちた里奈の顔は今でも忘れられない

『じゃあ奈津美さんや彩花さん、夕奈ちゃんだったら受け入れるの？ 妹だっていうだけで里奈はダメなの？ 嫌だよ、そんなの納得できないよ！』

『奈津美さん達も里奈も同じだよ、俺を想う気持ちはな、俺だっただけに思う時もある、お前が妹じゃなかったら・・・ってな。』

うーん、妹に言う台詞じゃないな、見方によっては口説いてるとも受け取れるぞ

『お兄ちゃん・・・もしかしてお兄ちゃんって、本当は里奈の事・・・。』

『勘違いするなよ、別にお前が好きだって言ってる訳じゃないからな！ まあお前の気持ちは正直嬉しいとは思ってるけど。』

里奈から目を背け照れながら言うところ里奈がピョコンと抱きついてきた、そして甘えるように俺の胸に顔をうずめる、高校生にもなってるこの子は・・・

『素直じゃないなあお兄ちゃんは、でもそんなトコも好きだよ
もうこうなったら絶対里奈にメロメロにさせたいからね、里奈の本気を甘く見ちゃ駄目なんだから。』

なんか怖いな・・・現時点で1週間に1回は一緒に寝たり1ヶ月に一度は風呂にも一緒に入るくらいだからな、こんな兄妹普通はいない、それでもやめられないのは俺も望んでいるからなのかもしれない。

第百八十五話

『 やっぱり楽進と李典だろ、三国志における最高のいぶし銀コンビは。』

『 いやいや、張昭に張紘も捨てがたいぞ。』

『 ほう、じゃあ馬休と馬鉄はどうか？ 』

『 むむむ、しからは雷銅と呉蘭はいかがか？ 』

『 なにがむむむだ、なら徐盛と丁奉はどうだ！ 』

俺と友成は（三国志でイカすいぶし銀コンビは誰と誰だ？）
という言い争いを昼休みに繰り広げていた、そんな俺達にを奈津美さんと彩花は呆れつつも

『 私は黄忠と嚴顔なんていいと思いますわ、元気な老人コンビなんて面白いじゃありませんか。』

『 よく次から次へと出るわねアンタ達・・・私にはよく分からないわ。』

微笑んでくれる、あのピクニック以降、俺達9人は更に仲良くなつて蒼太の過去も全員が受け入れた

『 信じてもらえないかもしれませんが俺は騙すつもりも隠すつもりもなかったです、でも・・・できたら知られたくはなかった・・・今更ですけどね。』

蒼太は自分から過去の全てを話し出した、姉の彩花と恋人の紗恵ちゃんを知ってみたいだけどいずみちゃんとかは信じられないといった表情だった、だけど

「なあ蒼太、誰でも人に言いたくない過去の1つや2つはある、別にそれは恥じる事じゃない、確かにお前のやった事は酷い事だけどお前は十分に反省してるんだろ、大事なのはその過去とどう向き合っかって事じゃないかな？」

「青山先輩……。」

「お前だつて本来は思いやりと優しさのある人間だ、そのくらい俺達は皆知ってるよ、だからさ、いつまでも過去に縛られず二度と同じ過ちをしない、それでいいじゃねーか。」

蒼太は俺のメッセージを真摯に受けとめてくれた様だ、その後は友成の発案で王様ゲームをする事になり里奈が王様の時はいろいろと恥ずかしい思いをしたが……何にしてもピクニックは最高に盛り上がった。

放課後、今日は奈津美さんや彩花だけじゃなく珍しく友成もいる、いずみちゃんが風邪で寝込んで学校を休んでるからだ

「真司君、いずみさんは大丈夫なのでしょう。」

「美鈴さんが看病してるから大丈夫だと思うけどな、さつきも見舞いに行こうかってメールしたらうつると悪いから来ない方がいいって返事だったから回復するまで待つとくよ。」

『 そうね、私達がいっただけのすみや美鈴さんに気を使わせちゃうし、真司から私達みんないずみ早く元気になるのを待ってるってメールしといてよ。』

そんな話をしながら校門を出ると他校の男子生徒がいた、誰かと待ち合わせかな？ だけどその男子生徒は俺達と目が合うと

『 彩花！ やつと会えたよ・・・って、その人達は彩花の友達かい？ 』

彩花の知り合いなのか？ けどわざわざ学校まで来るとは何だろうか・・・

『 和哉、^{かずや}アンタ・・・何しに来たのよ・・・っていうか、よく私の前に顔が出せるわね！ 』

彩花の機嫌がみるみる悪くなる、どうやらこの和哉という人は彩花に嫌われてる様だ、まてよ、確か彩花は過去に恋人だった男性を友達だった子に奪われたって言ってたな、じゃあこの人が彩花の・・・

『 彩花！ あの時の事は本当にすまなかった、でも真奈^{まな}の方から誘ってきたんだ、だって彩花はなかなか俺に・・・許してくれなかったし・・・。』

『 へえ、だから真奈の誘惑に簡単に乗ったんだ、そんな程度の男なの・・・今更どうでもいいけど、帰る貴志、こんなのと話す事とか何もないし。』

そう言って彩花は俺の腕にしがみつく、まるで和哉君に見せつける

かのように

『 彩花・・・その男は彩花の彼氏なのか？ にしてはずいぶん派手な頭してるんだな、なんか彩花の彼氏らしくないよ。 』

別にアンタに関係ないだろと言いたかったがそれより先に彩花が進み出て

『 アンタには関係ないでしょ、貴志とアンタじゃ比べるのが貴志に失礼なぐらいの差があるんだから、分かったらどいてよ、私は貴志達と帰るんだから。 』

強引に帰ろうとする、しかし和哉君は今度は奈津美さんに声をかける

『 君は彩花の友人か？ 友人がこんな見た目の男と付き合ってたら君も困るだろ、君からも彩花に言ってやってくれよ。 』

なんなのこの人は、自分が裏切った元カノの前で恥ずかしくないのだろうか？ 見てて情けないな

『 どうして貴方からそんな事を言われないとならないのでしょうか？ 彩花さんも貴志君も魅力的な方です、貴方の様な方には分からないでしょうけど。 』

『 行こうぜアオ、せっかくだしたこ焼きでも食べて帰ろうか？ 』

まだ食い下がるうとする和哉君を無視して俺達は帰った、自分が裏切ったつてのに今更彩花とヨリを戻そうとか何考えてるのやら・・・でも和哉君はまだ諦めてなかった、嫉妬に狂った男は更に泥沼にハマっていったのだ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3816o/>

大切な人達

2011年10月17日23時15分発行